

転生者がカービィ世界 で生き抜く話

紅絹の木

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

pixivにもあげています。読みたい方は、同じ名前（紅絹の木）か、タグ「アニメカービー」などで探してみてください。

2024/03/07

完結しました！

ありがとうございます！

あちらで反応が良かったので、こちらでも投稿します。

感想をいただくと、更新速度があがります。できるだけ頑張ります。

アンチ・ハイトは念の為です。

2022/05/31

アニメカービィシリーズは、ハーメルンでの投稿をメインにさせていただきます。

2022/6/17

リクエストをいただいた、シリカとリーノを描きました。

2023/11/18

Wavebox↓https://wavebox.me/wave/e56dxv

i6i5mbpj3w/

感想、反応を頂けると嬉しいです。

目次

アニメ前

思い出した！私は転生者

デデデ城、ご案内

村での歓迎会

アニメ開始

やって来た！星のカービィ

カービィのお家

決闘

暗雲とデート

ゴルフクラブ場とテレビ

巨鳥と古代文明

ローラと料理パーティー

153 138 124 107 89 68 55 40 25 1

電子ペットと魚と結婚記念日

帰還と戦友の息子

雪と王女

軍曹とダイナベイビーと忍者

母と炎の魔獣

恋のお話

噂のあの二人

嵐を呼ぶカップルイベント

巨木の恋

産業革命

激辛ブーム

タマゴ

デデベガス

369 356 338 330 313 289 276 268 250 229 213 182 163

虫歯	381
不法投棄	402
プププグランプリ	424
ペンは剣よりも強し	435
魔法のミリオンセラー	453
忘却と魔獣ハンター	469
リーノがいない日常	490
妖星ゲラス、そしてリーノ	510
愛よ、永遠に	523
ケツイ	551
訓練と羊	564
巨木の友人	579
きもだめし大会	592

ワドルデイ	607
観光ツアー	636
星のデデデ	645
貯金箱	659
1周年	674
チョコカプセル	691
あなたへ、プレゼント	711
騎士	733
愛のデデデ	748
スカーフイ	757
パイ	776
学校	798
晩ご飯!	810

モスガバー、恐竜	944
回転寿司	934
919	
ホエール・ウオッチング、販売機	
エコツアー、トッコリ卿	907
デリバリー	891
魔獣生徒	881
ペンギー	870
ジョー	857
流行りの風邪、クイズショー、ナツクル	
占い	847
スナックジャンキー	837
宝剣	825

美術館	962
閣下の口ポ	973
ボンカース	988
ドリנק	1005
片付け	1014
フードプロセッサ	1024
教師	1036
秘宝、紫外線	1048
ナゴヤ	1058
カラス	1070
閣下	1083
フォームたん	1099
バイクレース	1114

食事革命

感謝の日

ファンファン

デビル、ワープスター

ハルバード

あなたと共に

120611931167116011481128

アニメ前

思い出した!私は転生者

転生に憧れたことがある。最強の戦士とか、魔法使いとか、チート能力付きの転生だ。あれなら就職難に悩まないで済みそうなんかも。うう、もう履歴書を書きたくない。帰ったら気分転換にアニメカービィのDVD見よう。

落ち込んで注意力が散漫になっていたせいで、階段で足を踏み外してしまった。最後に覚えていることは体中の痛みだけだ。

気がつけば、私は五歳の幼女だった。両親は事故と病気ですでに他界している、孤児だった。その日は父親を亡くして、熱が出るほど泣いた夜だった。目が覚めると頭痛と目元の痛みがして、記憶を思い出していた。

視線を天井からずらすと、ベッドの傍にはハナさんがいた。頭を揺らしながら、うとうとしている。きつと夜通し私を看病してくれたんだ。体をそつと起こす。テーブルの方には村長さんもいる。椅子に深く座り込んで動かない。寝ているんだろう。

彼らはキャピィ族だった。そして私は外から来た他種族だった。見た目はアニメのフォームや、シリカに似ている。髪を左側で分けていて、前髪は長い。後ろの方はお父さ

んがこの間切ってくれたから、短い。

お父さんを思い出したら涙が出てきたけれど、唇をぐつと噛んで耐えた。泣いちやダメだ。これから一人で生きていくんだから。

「うん、自立しよう」

齡五歳での決意だった。

「私、自立します！でも、まだまだ一人ではできないことだらけです。だから力を貸してください！お願いします！」

村の広場、大樹の前で深く頭を下げて、ププビレッジの皆に協力を仰ぐ。村人たちは悲しそうに私を見た後、「応援する」と言ってくれた。

それから、皆は私を見守ってくれた。

朝、山菜を取りに行くと、出会ったおじさんが山菜の見分け方を教えてくれる。取る場所も教えてくれた。「ありがとう」と言うと、頭を撫でてくれた。

洗濯ものや掃除をしているとき、サトさんが来て出来栄えを見てくれた。「よくできたね」と褒めてくれる。だから明日も頑張ろうって思えるんだ。

昼、コックカワサキのお店で昼食をごちそうになるついでに、料理の作り方を教えてもらう。混雑時からずれていたため、じっくり時間をかけて習うことができた。「おれ

よりうまいね!うちに来るかい」とお世辞を言ってもらえた。私は両親と暮らした家が好きだから、丁寧に断った。

夕方。たくさんの人から夕食に誘われる。皆に気にかけてもらえて嬉しかった。でも、これも丁寧に断った。だって晩御飯はお昼に作った料理の復習の時間だ。二回連続で同じ物を食べることになるけれど、料理の腕が上達するので、しばらくはこのままでいいや。食器を綺麗に洗って、一人でベッドに潜る。外から聞こえてくる何かの鳴き声がとつても怖かったけれど、前世の私が「大丈夫だよ」と慰めてくれる。私は母が作ってくれたぬいぐるみをぎゅつと抱きしめて眠る。

本当にどうしようもなく寂しい日だけは、お母さんと仲が良かったサトさんやハナさんの家に泊まらせてもらった。

お父さんと仲が良かった人からは日曜大工とか、勉強を教えてもらった。でもあまり時間が取れなかったから、勉強は苦手だ。大人になって、もつと効率よく作業ができるようになったら、少しは時間が取れるだろうか。そしたらもつと本を読めるようになるだろうか。

皆さんに、人に恵まれて私は生きてこられた。村の皆には感謝しかない。同年代の子たちとは遊べなかったから、友達は少ない。でも親友が二人いてくれる!

一人目はアーニヤ！私と同じく本が大好きなキャピイ族の女の子だ。私が彼女の本を届けてあげたのがきっかけで仲良くなった。村の本屋さんで働くのが夢らしい。物静かだけど、私が男子にバカされたときはすっごく怒ってくれた。優しい心を持っているの。

二人目はランタン！こちらでもキャピイ族の女の子。流行ものが大好きで、自分の手で村の流行を作りたいと思っているの。村で服屋さんを開くのが夢なんだよ。今は、裁縫上手なお母さんから洋服の作り方を教えてもらっているみたい。私とアーニヤも時々一緒に習っている。まだランタンみたいに上手くできないけれど、これがとても楽しいの。

ランタンは、アーニヤと私が一緒に本を読んでいるときに現れて「一緒に遊んであげろ！」と言ってくれたのだ。彼女は私たちにオシャレを教えてくれた、親切な女の子なの。

そして私が十歳になった春。両親のお金も少なくなってきたから、働こうと思った頃だ。

デデデ大王がエスカルゴン閣下、ワドルドウ隊長、それにたくさんのワドルデイたちを連れて、プブピレツジにやって来た。そして大王になる宣言をされた。村人たちは突

然の事で困ったけれど、今より文明的になる。近代国家になる、と言われて大王様を受け入れた。ううん、どういうこっちゃ。それでいいのか、大人たちよ。

しかし、これはチャンスだった!

私はさっそく大王様を口説きにかかった。

「偉大なる至高の御方、どうか貴方様にお仕えできる榮譽を私にお与えください」

「いだいなるしこう……なに?」

「立派で素敵な陛下の下で、見習いメイドとして働きたいです。どうか雇ってください
!」

「わしが立派で素敵……だっはっはっは! 気に入ったゾイ! お前を雇ってやるゾイ!!」

「はあ!?! ちよつと、まだ子供でゲスよ!?!」

「失礼ながら。私は家事全般こなせます。必ずお役に立ちます!」

「ええく? 本当でゲしようね? 嘘言っていたらハリセンボンでゲスよ!」

「嘘じゃありませんよ、エスカルゴン殿。その子は本当に家事全般できます」

「……村長がそう言うんなら、まあ、いいでゲシヨウ。使えなかつたら追い出すから、
張るでゲスよ!!!」

「はい!!! ありがとうございます!」

こうしてリーノはお城に勤めることになった。その時はまだお城ができていなかった

たから、まずお城を造り始めるところからお手伝いした。お城は村の大工さんたちの力と、ワドルディたちの働きがあつて、一週間後にはできてしまった。アニメの頃から思つていたが、ワドルディたちは器用だな。

お城に移り住むときは、村でお祝いパーティをしてもらえた。皆で食べる立食パーティのような感じだ。おいしい食事に、皆からの激励の言葉をもらえて、私はたくさん泣いた。嬉しかったんだ。アーニヤとランタンからお揃いの綺麗な貝のストラップをもらい、それをお守りにしようと決めた。

村にある実家は、新婚さんに譲る。たくさんの思い出がある場所だが、ここはもう私の居場所じゃない。私はいくつかの思い出の品と、本当に必要な物だけを持ってお城に引越した。

お城に向かう道を、アーニヤとランタンの三人で歩いた。村がどんどん遠ざかるあの日の光景は、ずっと忘れないだろう。二人とは橋の所で別れた。「また明日も会おうね」と約束して、二人を見送った。姿が見えなくなるまで手を振った。

新しいうちは、村が一望できる部屋だった。ちよつと階段が多くてきついけれど、これも運動だと思えばへっちゃらだ。窓からはお城の庭もよく見える。素敵で広めのワルムームだった。台所もお風呂もトイレも完備されている。しかも洗濯機まで置いてあるのだ！これで洗濯物が楽になるぞ！部屋にはバルコニーもあるから、洗濯物だって

干せる。良い部屋を貰えて良かった。

その日はお部屋を整えた後、夕飯は食堂でワドルドゥ隊長たちと一緒に食べた。二百人を超えるワドルデイたちが一斉に食事をする様子は壮観だ。

「こんなに大勢で食べるのははじめてです!とても楽しいですね」

「それはよかった。今回のお食事は、リーノ殿を歓迎しておごらせていただきます」

おごる、ということは食堂で彼らと食事するには、お金が発生するらしい。栄養を考えられて美味しく作られている料理はタダじゃなかった。手間暇かかっているから当然か。

残念、と思ったけれど次回も食べたければお金を持って来ればいいのだ。また食べられるのは嬉しい。

「ありがとうございます!次回お呼ばれされたときは、お金が払えるようにしっかりと働きますね」

「はい!お互いに頑張りましょう!」

ワドルドゥ隊長はいい人だ。お城務めは不安だったけれど、なんとかやっていけそうだよ。そう両親に向けて思った。

お城での生活はたいへんだった。仕事じゃないよ、勉強のお話!閣下やワドルドゥ隊長から、メイドの仕事や言葉遣いを学んでいる。本を読むことは慣れているけれど、勉

強はあんまりしてこなかったから少しつまづいている。毎日頑張っているけれど、難しい。そうアーニヤとランタンに相談したら、ごっこ遊びでもメイドさんが流行った。二人はお城での暮らしにちよつと憧れているみたい。「メイド服が可愛い」と言ってもらえた。似合っていたら嬉しいな。

私がお城に住み始めてから二週間後、素敵なことをワドルドゥ隊長に教えてもらった。なんとお城にはエレベーターなる動く箱があるのだ！これで私が住んでいる階層まで、階段を使わずに済む。これは城勤めの者だけの秘密らしい。アーニヤとランタンにも内緒なのだ。ちよつとドキドキする。

それから一週間後に、玉座の間に呼ばれた。玉座には陛下、その隣にエスカルゴン閣下がいらつしやつた。私とワドルドゥ隊長はお二人の前に片膝をついた。

閣下いわく、もつと家来が必要だつて話みたい。

「リーノ、お前村には詳しいでゲしよう。なんか、いい奴はいないんでゲスか!」

「はい、閣下。わたくしはパームさんを推薦します」

「誰でゲスか? そいつは」

「村に住む男性です。メームという女性と結婚していらつしやいます。優しく、温厚な方で、非常に賢い方です。きつと陛下や閣下のお役に立つかと」

「よし! ワドルドゥ、そいつを連れて来るゾイ!」

「かしこまりました!」

こうしてパームさんはこの国の大臣になった。推しに弱い方だから、断り切れなかったんだと思う。さらに大王様は仰った。

「強い戦士もほしいゾイ!!」

「この村に戦士なんていないでゲスよ……そうざんしょ?」

「はい。そのとおりでございます」

「ほらね!」

「うぬぬ……いやゾイ!絶対揃えるゾイ!!」

「もー!わーがまま言わないの!!」

「それでは、募集の張り紙を出しておきますか? プレビレッジには時々、旅人がやってきます。もしかしたら元戦士の方が村にやってくるかもしれないですね」

「そうでゲスね。一応、募集ぐらいいはかけておいてもいいでゲシヨ」

私は戦士募集の張り紙を村に貼らせてもらった。張り紙を見た村人たちのうち数人が立候補したが「危険な仕事を押しつけられるかもしれない。やめておいた方がいい」と止めた。面倒事は嫌だったのだろう。男たちは素直に下がってくれた。良かった。家族同然の村人を危険な職に案内できないものね。

年に数回、旅人が村にやって来た。けれど皆、張り紙に興味がないようだった。戦士

募集の張り紙は、一年に一回張り替えている。今でも募集していますよ、というアピールだ。村じや、時々「どんな人がお城の戦士になるのか」という話題で盛り上がる。

私とアーニヤとランタンの間では「勇者一行みたいなチーム」と「屈強な戦士が一人」と「三人組の戦士」で意見が分かれていた。アーニヤはおとぎ話に出てくるような人たちがいいらしい。ランタンは強くてイイ男一択だつて。三人組の戦士に期待しているのが私だ。

私が成人した頃。メーム婦人がご懐妊された。二人が首を長くして待つていたのは村中が知っているのです。村ではお祝いしようとお祭りが開催された。夜にやっつては足元が危険なので、お昼の間のみ行われる。屋台の道案内をかってでた私は村を巡回していた。いつものメイド服姿に、お祭りの実行委員としての証、ガングおもちゃ店の売れ残りを再利用した「花の腕輪」を着用していた。

十二組目の恋人たちを目的の屋台へと案内した頃、その人たちは現れた。

丸い一頭身の戦士、兜がチヨココロネに似ている長身の戦士、一番背が低く頭が楕円形の戦士。

私が待つていた三人組だった。傍にいるアーニヤとランタンは三人組の戦士たちを物珍しそうに見ている。村人たちも、遠巻きに彼らを眺めていた。その輪の中から、村長さんが進み出て彼らに話しかけた。何を話しているんだろう。聞き耳を立ててもこ

「ここらじゃ聞こえない。アーニヤとランタンの方を向く。」

「お話聞こえる?」

「まったく聞こえないわね。誰かしら、あの三人組」

「いかにも戦士様って感じですよ。ちよつと素敵かも」

「アーニヤったら、男は皆オオカミなのよ。ちよつとは警戒しなさい」

「し、してきますよ!ねえ、リーノ」

「ええ。知らない人について行きませんとも」

「……知っているヤツに対してだって、ついて行っちゃいけない時があるのよ?」

「どうしてでしょうか?」

「……はっ!もうランタンったら」

「リーノはわかりますか?なぜでしょうか?」

「うー!い、今はタイミングが悪いから、今度ね……」

「わかりました。今度教えてくださいね」

「あら、村長さんがこつち向いたわ」

ランタンに言われて振り向いてみると、村長さんと目がばつちり合った。そして手招きされる。

「リーノに用事かしら?」

「行つてみる。二人ともまたね」

「またね、リーノ」

「さようなら。また今度」

ランタンは髪をかき上げて、アーニヤは手を振つてくれた。私は淑女らしく、急ぎ過ぎない速度で歩いた。村長さんのちよつと後ろで立ち止まり、三人の戦士に笑みを見せてから、村長さんに話しかける。

「村長さん、何か御用でしょうか？」

「リーノや。この方たちはあの張り紙を見たらしい。それで、陛下にお会いしたいそうじゃ」

「わかりました。皆様、わたくしリーノが城へご案内させていただきます。どうぞ、こちらへ」

仕事モードに切り替えて、花の腕輪を外す。そして彼らに背を向けて、城の方へ歩き出した。後ろで鎧が鳴る音が続いた。

村人たちの視線を抜けて、まっすぐ城までの一本道を歩く。途中私たちを追い抜いて行つたワドルデイの一人を捕まえてワドルドウ隊長への伝言を頼んだ。

「隊長に伝えてください。〃城の戦士募集に応募があつた。今その方々を案内している。陛下に伝えて、指示を貰つてください」と。お代は飴一つでいいですか？」

「わにゃ」

おそらく良いのだろう。ポケットから日頃入れている、ワドルデイ用の一口サイズの飴を取り出して、袋を破く。中身をワドルデイに差し出して、口に入れてやった。ワドルデイはその場でころころと飴を転がすと、すぐさま城の方へ走って行った。これで城に着くころには、陛下から指示を貰ったワドルドウ隊長が、門前で私たちを出迎えてくれるはずだ。

私は後ろを振り返り、「お待たせいたしました。参りましょう」と言った。

「陛下は今日、お会いになられません」

「……………まあ、どうしてでしょう?」

「公務のためであります!!」

公務??それはエスカルゴン閣下のお仕事では??そのように思ったが、顔には出さない。ただひたすらに笑顔を貫く。

「では、お客様にはお待ちいただく必要がありますね。隊長、客室の準備はできているのでしょうか?」

「すでに例の部屋をワドルデイたちが掃除済みです」

「かしこまりました。では、そちらにご案内します。皆様、どうぞこちらへ」

城門から中庭側の廊下を通り、一階の客室に案内する。扉を開けて三人を中に招いた。部屋は最大三人が同時に泊まれるようになっており、泊まれる人数の割にはかなり広い。ソファやテーブル、間接照明、洗濯機、トイレ、お風呂場も備えられていた。タオルやアメニティも揃っている。ホテル並みだ。

「今日はこちらをご利用ください。後ほどワドルデイが、皆様を夕食にご案内いたします。そして、この部屋と中庭以外、立ち入りを^ご遠慮いただきますようお願い申し上げます。それでは失礼いたします」

「待ってください」

「はい。何か^ごございましたか？」

「^{ここ}まで世話になった」

そう言つて一頭身の仮面の戦士は、手を差し出した。何か握られている。私はとりあえず両手を広げてそれを貰った。お金だ。しかもかなりのお値段。これチップや。

私は勢いよく首を振つて断つた。そしてお金を返す。

「困ります」

「しかし……」

「^{ここ}はホテルではありませんので、わたくしには不要です。お気遣い感謝いたします。それでは」

私は深く一礼をして、部屋の扉を閉めた。再び中庭側の廊下を通り、隠し扉からエレベーター前に出る。そこでやっと肩の力を抜いた。後はワドルデイたちに任せよう。私は閣下と明日の予定について話す必要がある。エレベーターで玉座の間がある階層に向かった。

玉座の間で見たのは、ゴルフをする陛下と、それを見守る数名のワドルデイたちに閣下の姿だった。私は集中する陛下の邪魔にならないように、静かに閣下に近づく。そして隣に並んだ。

「閣下、陛下は公務中では？」

「アレがそうでゲスよ……」

「ええ……」

閣下は呆れていらっしやった。私も、今回ばかりは呆れてしまう。せっかくのお客様を一日も待たせてしまうなんて、なんとということだろうか。頭痛がしてきた。今更どうしようもないので、とにかく、明日は何時に三人組の戦士を案内すればいいのか質問する。

「あく、朝の十時でいいじゃないでゲスか？」

「かしこまりました。明日の十時に、玉座の間に連れてきます。ワドルドウ隊長とパー

ム大臣にもそのように連絡いたしますか？」

「いや、受かったら会わせればいいじゃないよ」

「かしこまりました。そのようにいたします。失礼いたします」

陛下と閣下にそれぞれ一礼し、玉座の間から出る。次に一階にある食堂に向かった。そこに併設されている大きな台所を覗くと隊長が調理の指揮をとっていた。

「隊長、お疲れ様です。今よろしいですか？」

「どうぞであります！」

「明日、あの三人組の戦士たちを玉座の間に案内します。三人が採用されれば、隊長と大臣一家に引き合わせるとのことです」

「了解であります。パーム大臣にはわたくしの方から伝えるであります！リーノ殿は今日、我らと共に晩ご飯を食べていきますか？」

「わたくしは自室でいただきますわ。お客様と鉢合わせしたら気まずいから……」

「わかりました。では、また明日！」

「はい。また明日」

そして部屋に戻り休んだ。

次の日、朝五時に起きる。朝食を食べたり、身支度を整えたり、玉座の間の掃除をワドルデイたちと行えばいい頃合いになった。一階中庭の客室を訪ねて、三人の戦士たち

を玉座まで案内する。エレベーターは城の者だけの秘密なので、彼らはまだ使えないのだ。だから階段を上った。

十時ちょうどに玉座の間へ入室する。そこに陛下と閣下の姿はなかった。私は三人を待たせると、部屋を出て陛下の自室方面へ向かう。途中で遭遇した。陛下は閣下と数人のワドルデイを引きつけていた。端に避けて、陛下が私を通り過ぎてから、その一団に加わる。

「陛下、応募してきた戦士たちが玉座に到着しました」

「すぐ行くゾイ」

玉座の間。私が先に入室する。

「ブアブア大王がご入室されます」

その言葉を聞いた戦士たちが片膝をつき、顔を伏せた。その姿を確認してから、扉を開く。閣下を連れて陛下が進んだ。私はワドルデイたちと下がろうとした。けれど閣下と呼び止められたので、部屋の中に残った。閣下は陛下のすぐお傍にいるけれど、私は離れて柱の傍に立った。

陛下が玉座に座る。

「面を上げよ」

戦士たちは一切の乱れなく顔を上げた。それからいくつかの問答をやり取りした。

私は自分に一体どんな仕事が振られるのか、それが気がかりでお話はあまり聞いていなかった。わずかに耳が拾ったのは彼らの名前と、元の職業くらいだ。やはりメタナイト卿、ソードナイトとブレイドナイトだった。アニメで見たときは可愛らしさがあつたけれど、実際にこの世界の住人として出会うとわかる。かつこ良さ、気品、鋭さ、渋さが目立つ。とにかく只者じゃないと感じるのだ。

「ーでは、ワドルデイ百人切りをしてみせるゾイ!!」

「かしこまりました」

「リーノ！ワドルドゥ隊長に連絡して、闘技場にワドルデイ百匹呼ぶでゲスよー!」

「かしこまりました。直ちに行動を開始いたします」

私は早足で玉座の間から出て行った。そしてスカートの裾を持ち上げて廊下を走り、一人のワドルデイを捕まえる。その口に飴を一つ放り込んだ。

「至急、ワドルドゥ隊長に連絡です。闘技場にワドルデイを百人連れて集合してくださいー!」

闘技場はお城の、中層部分にある。ローマのコロッセオを模した造りになっている。普段は静かな場所だが、今は違う。

闘技場の観客席は村人たちで埋め尽くされていた。なぜ村人たちが闘技場にいるか

というと、閣下のお考えだ。元星の戦士の戦いは見ものになる。ならば催しものを開催してしまおう。チケットを販売して、観客を入れれば現金が入る。面接試験もできる、村人たちも喜ぶ、自分たちの懐も潤う。一石二鳥ならぬ三鳥だ。

皆お祭り気分で家族や恋人、友人たちと騒いでいる。娯楽の少ない田舎だから、こういう催し物とか大好きなんだよね。コックカワサキなんてお弁当やお菓子、飲み物を売りまわっている。

闘技場の控え室モニターで、私はその様子を見てアニメカービィの雰囲気味わっていた。この様子をフォームが見れば呆れかえるだろうな。私は三人の戦いが見られるのが楽しみである。

手に持っていたトランシーバーが受信する。

『……リーノ、こちらエスカルゴン。三人を広場まで連れて来るでゲス!』

「こちらリーノ。了解いたしました。三人を案内します」

プツン、という音がしてトランシーバーがオフになった。私は剣の手入れや精神統一をしている三人の戦士に向き直る。

「準備はよろしいでしょうか?」

「ああ、いつでも行ける」

「では、闘技場までご案内させていただきます」

控え室から広場までは一本道である。案内役なんていらなくらいだ。迷わないようにという配慮か、それとも逃がさないようにと、見張りに私が選ばれた。私は光が差し込む方向へ歩く。その短い道中、メタナイト卿が話しかけてきた。

「君は……」

「はい」

「どうしてあの大王に仕えている?」

足を止めて眉を寄せた表情を彼らに見せる。

「どういう意味でしょうか?」

「不快にさせたのなら謝る。すまない。ただ純粋に興味を抱いたのだ。君はなぜ彼に仕えている?」

「……わたくしは早くに両親を亡くしました。しばらくは一人で生きていましたが、お金が底をつきました。その時お会いしたのが、デデデ陛下と閣下です。私は生きるためにお城のメイド見習いになりました。随分昔の話ですわ」

「そうか。大変だったのだな……」

リーノは頷く。大変だった。でも、同時に非常に恵まれてもいた。

再び、廊下を歩き出す。

「大変でしたが、わたくしは恵まれておりました。デデデ陛下はよく遊びに連れて行っ

てくださり、エスカルゴン閣下は勉強を教えてくださいました。ワドルドゥ隊長は優しくて、ワドルデイたちはいつも嫌な顔をせず助けてくれました。ここはわたくしの、大好きな家です。呆れたり、がっかりすることもありませんけれど、同じくらい好きなんです」

「……………」

「……………なんて、お客様にお話することではありませんでしたね。不必要な部分は忘れてください。……………願わくば、あなたの方にとつてもこのプブレッジが、第二の故郷となることを祈っています」

「あなた方も?」

広場に到着する。歓声が一際大きく上がった。私は貴賓席でご観覧になられる陛下と閣下にお辞儀をする。

「皆様のご活躍をお祈り申し上げます」

三人に向かってもお辞儀をした。戦士たちは力強く頷いた。

メタナイト卿たちは、見事お城の戦士となった。階級はワドルドゥ隊長よりも上になるそうだ。

彼らの活躍は村中に知れ渡り、年頃の女性たちは色めき立つ。特に、最もワドルデイ

を倒したメタナイト卿が人気らしい。かつこいいものね。

彼らがお城に住むことになって、私はよく村の女性たち捕まるようになった。彼女たちの質問は大体決まっている。

「今日の三人はどうだった？」

「あなた、恋人はいないの!?あの三人のうち誰が好きなの!?!」

「これ、あの人に渡してくれない?」

村を訪れば必ず言われるし、三人へのプレゼントを渡される。とつても疲れたので、「誰も好きじゃない、本人に聞いてほしい」とロボットのようには繰り返した。プレゼントも本人に直接渡してほしいと断った。

救いだっただのはアーニャとランタンが他の人とは違ったことだ。二人とも私に何も頼まなかった。なぜか聞いてみた。

「私は遠くから見つめているだけで満足ですから……何かアクションを起こしたいとは思いませんね。あ、応援うちわつて知っていますか?アイドルのコンサートに持って行く、自作のうちわなんですけど。私は三人のうちわを作りたいんです。今度一緒に作っていただけませんか?一人だと勝手がわからなくて……」

「アーニャつたら、どつぷりあの人たちのファンじゃない。私はそうね、恋より仕事に生きる女だからかな。今は服の勉強に力を入れたいの。だから他の事はパス」

「なるほど」

「あんたは? 傍である人たちのことを見てるんでしょ? 誰か、気になつたりしていないの?」

前世の推し、という意味ではメタナイト卿一択だ。だけど、ここはリアルで、彼らは仕事仲間だった。そういう浮ついた気分にはなれない。私は首を振った。

「仕事仲間としてできるかどうか、その視点でしか見られないかな」

「リーノさんって結構ドライですよね」

「そうかな?」

人の噂も七十五日。三人が来て数ヶ月がたった。パーム様とメーム様のご息女、フーム様が誕生した。そして間もなく、ロロロとラララがお城に住み始めた。怒涛の主要&サブキャラの登場である。

フーム様のお世話を手伝い、日々の仕事をこなし、アーニヤとランタンの仕事を手伝い、メタナイト卿たちと時々交流する。あつという間にブン様がお生まれになった。

ああ、もう原作はそこまで来ているんだ。小さな命を抱きながら思いをはせる。あの小さな戦士はどのくらい大きいのだろう。今のブン様や、横から覗き込んでくるフーム様よりも小さいのだろうか。さすがに大きいだろうか。はやく会ってみたいな。

やがて、真昼の空に流れ星が落ちる。

デデデ城、ご案内

メタナイト卿、ソードナイト、ブレイドナイトがデデデ大王の配下となった日。リーノは数人のワドルディを連れて、彼らの部屋となる場所を掃除していた。

城内の部屋はリーノ含めてワドルディたちが毎日一層ずつ掃除している。よく使う場所は毎日だ。この城は上にも地下にも階層が広がっている、一ヶ月以上掃除されない場所があったりする。あまり人が訪れない地下は特にそうなりやすい。

メタナイト卿たちに割り当てられた部屋は、ちよつと埃が溜まっていた。なので私たちが掃除にやって来たのだ。

まず家具を部屋から出して中を空っぽにする。二つある窓を開けると、気持ちのいい風が入ってくる。天井から埃を叩き落として、掃き掃除を行う。次に強力な掃除機を持ってきて、砂埃などを吸い上げた。

部屋の掃除中に、風通しのいい場所で家具の埃を払う。さらに拭き掃除もやり、ピカピカにする。

埃まみれになりながら、大掃除を行った。タンスの引き出しも全部取り出して拭くぞ。手を伸ばしたところで声をかけられた。

「……何をしている？」

「はい？ あら、メタナイト卿。先ほどはお疲れさまでした。ただいま大掃除中ですわ」

メタナイト卿、ソードナイト、ブレイドナイトの三人がいた。彼らはいく数十分前にワドルデイ百人切りを見事やりきったばかりだ。多少埃まみれになっていたが、かすり傷一つもない。疲れているから休もうとこの部屋に来たのだろうか。その背中には旅の荷物があつた。

「なぜ今、大掃除をしているのだ？」

「部屋が埃まみれで汚かつたからです。掃除が終わつてからお呼びするつもりでした。もし休憩なさるなら、あちらのお部屋にどうぞ。あなた方の休憩室ですわ。そちらなら先に掃除を済ませています。体を休められるかと」

「どこだ？」

「ご案内します。ワドルデイたち、少しの間離れますね」

「わにやわにや」

ワドルデイが全員頷いたのを確認して、持っていた雑巾を畳みタンスの傍に置いた。軽く埃を払つてから、メタナイト卿たちを休憩室に案内する。

休憩室の中は広く、この辺りでは珍しく畳が一畳置かれていた。大きめのカーペットも床に敷かれて、一人用のソファ椅子がある。アニメで見た、三人がいつもいたあの部

屋だ。

ソードナイトが驚きの声を上げた。

「畳があるのか」

「気に入られましたか？ 違う階層には一面畳敷きの部屋もございます。そこはワドルデイたちの休憩室なので、もし入るならワドルドゥ隊長の許可が必要になります」

「一面畳敷き……それはいいな。いや、こちらで充分だ」

「そうですか。では、わたくしはこれで」

体を反転させようと足を引いたところで、ブレイドナイトさんに呼び止められた。

「待ってくれ。飲み物をいただきたいんだが……」

「でしたら、城の台所をお使いください。お水はいくら使っていただいても構いませんが、紅茶などは各自で用意してくださいね。食事も、基本は各自で負担します」

「そ、そうなのか」

「もし昨日と同じ食事をとりたい場合は、食堂に向かってください。月末にお金を払うことになりましたが、栄養バランスのとれたおいしい食事を食べられます。以上で、何かご質問はありますか？」

メタナイト卿が質問した。

「この部屋に自由に物を置いてもいいのか？」

「ええ、大丈夫ですよ。冷蔵庫など置いてくださっても構いません。しかし部屋を壊さないようにお願いします」

「わかった。質問は以上だ。ありがとう」

「いえ、それでは掃除に戻りますので、失礼いたします」

私は一礼をしてから、部屋の扉を閉めた。

掃除は一日がかりだった。三人が一緒に眠る部屋なのだから、結構広かったのだ。大変だったけれど無事に終わって良かった。あとは、ベッドシートやらタオルなど、最初に渡しておく物をクローゼットに入れておく。これでいいだろう。そうだ部屋の花瓶に、中庭で咲いたバラを挿しておこう。喜んでくれたらいいな。

ワドルデイたちを先に帰し、メタナイトたちを呼ぶ。彼らは部屋の出来栄えに大層驚き、喜んでくれた。

「明日も驚く場所にご案内しますわ」

「驚く場所?どこだ?」

「それは秘密です。ふふ、明日の夜九時にご案内いたしますわ。夜の方が、都合がいいので」

私はくふふと笑いながら、その日は彼らと別れた。ああ、疲れた。今日は食堂でご飯を食べよう。食堂でメタナイト卿たちと会わなかった。どこで食べたのだろうか?

翌朝、日々の日課である掃除、調理、洗濯をこなして夜を待つ。途中の買い出しで、村の女性たちに捕まった。彼女たちいわく、もっと三人の戦士たちについて聞かせてくれ、だそうだ。昨日の今日で話せることなど何も無い。「何も知らない」と言つて逃げ、何とかアーニヤとランタンに会えた。民家の裏側に三人肩を寄せ合つて会話する。

「今夜、泊まりに来ない？あの三人をあの場合に案内するんだけど……」

「いいわよ。荷物持つて行くわ」

「了解です。それじゃ、夕方リーノのお部屋に上がりますね」

「うん、待つているわ」

二人は夕方五時に城へやつて来た。両手には大きめの荷物を持つている。中にはお菓子やカレーの食材があつた。私の部屋でカレーライスを用意し、久々の女子会を開催する。席について「いただきます」と声を揃えた。一口食べる。うん、ちよつとスパイシーでおいしい。

「結構いけるじゃない？」

「とてもおいしいですよ」

「そうだね。すごくおいしい！」

「で、あの人たちにどこまで見せるの？」

「すべてお見せするわ。もちろん、私たちの場所は秘密よ」

「はあ、よかった。もし見せると言ったら止めていましたわ」

「そんなことしないわ。あそこは私たちだけの秘密基地よ」

三人で声を抑えて笑い合う。

話題はやっぱり、あの三人の戦士たちに偏った。

「ねえ、昼間は『何も知らない』って言っていたけれど、実際はどうなの？何か接触があったんじゃないの？」

ランタンがぐつと身を乗り出す。すると彼女の丰满な胸が押しつぶされた。苦しくないのかしら。私はサラダを飲み込んで言う。

「あの人たちに割り当てられた部屋を掃除したの。それもピカピカにね。綺麗になった部屋を見せたら、とても喜んでくれたわ」

「それだけですか」

「ソードナイトさん、あの長身の男性は畳を見て喜んでいたわ。ワドルデイたちの休憩室に『一面畳敷きの部屋がある』と言ったら羨ましそうにしていたと思う」

「へえ、和風が好きなの？好い趣味だわ。そのソードナイトって人」

ランタンが髪をかき上げる。この仕草が色っぽいって村の一部の男性たちには評判

だ。私も、たまにドキツとする。ランタンって大人だよね。

「和風いいですよね。歴史も古くて、風情があつて……取り入れることは難しいですけど、華やかで素敵です」

「……今度、着物を仕立てちゃおう？」

「できれば小物がいいです。ストラップとか」

「私も、コースターとかがいいな。部屋に飾ったり、コップの下に置いたりするの」

「ああ、そうね。二人は着たいとか言うタイプじゃなかったわね」

ランタンはリーノの部屋の壁を眺めた。部屋には、三人が幼い頃描いた絵や、アーニャがプレゼントした絵、ランタンが縫ったパッチワークを壁に飾つてある。女の子らしい部屋だ。しかし、置いてあるものがちよつと多いため、散らかっている印象を受ける。

「サトさんなら、着てくれるんじゃないかな？」

「でも、したらお代もらえるのかしら？私、タダ働きは嫌なのよね」

「……勝手に作つといてお金貰うのは、変か」

「良くはないよね。合意していないから」

「そうだね」

「それで、小物は今日作るの？」

「とても、作りたいです」

「私はしたいです。いいですか？ランタン」

「いいわよ。一緒に考えながら作りましょう」

「じゃあ、始めの時間は小物作りに決定！ありがとうございます、ランタン」

「ありがとうございます。ランタン」

「どういたしまして」

お喋りをしていたら、あつという間に時間が来た。私たちは荷物を持って急いで、戦士たちの休憩室に向かった。

夜九時ちょうど。中にはつきりと音が聞こえるように、ちよつと強めに扉を叩いた。すぐに扉が開かれる。

「こんばんは。お待たせしてしまつたかしら？」

「いや、九時ちょうどだ。そちらの者たちは？」

「わたくしの幼馴染の二人です。アーニヤとランタンですわ」

アーニヤは軽く礼をして、ランタンは「よろしく」と言った。メタナイト卿は自己紹介をして、次にソードナイトとブレイドナイトを紹介してくれた。それぞれ挨拶を済ませたので、さっそく目的地に行こうとなった。胸が躍るようにわくわくする。

「皆様、ついて来て下さい。危険な場所でも怪しい場所でもありません。ただ秘密なだ

けです」

「……わかった」

明かりを持って私が先導する。その後ろにアーニヤとランタンが続いて、次にメタナイト卿たちが歩いた。私たちはどんどん階段を下る。そして地下への扉を開けた。

「この先に目的のものがありませんわ」

「ふむ、地下か」

「お楽しみはこれからよ」

ランタンがさういうと、戦士たちは不思議そうに顔を見合わせた。

さらに地下への階段を下りる。地下一階のワインセラーの近くを通ると、パーム大臣とすれ違った。

「パーム大臣、こんばんは」

「やあ、こんばんは。リーノ。アーニヤとランタンも久しぶりだね」

「こんばんは、パームさん」

「こんばんは、お元気そうで何よりです」

パーム大臣はワインを持っていた。おそらくワインセラーからの帰りなのだろう。彼はメタナイト卿を見つけるとちよつと目を見開いて、それから笑顔で会釈した。

「リーノ、紹介してくれるかい？」

「はい。メタナイト卿、こちらパーム大臣です。パーム大臣、こちらメタナイト卿、ソードナイト様、ブレイドナイト様です。今、地下を案内しているところなんですよ」

「それは、それは。地下は城の者なら自由に使えます。あなた方も良い場所が見つかるといいですね」

「……そうですね」

「では、わたくしはこれで。リーノ、皆、あんまり遅くまで起きていたらダメだよ？」

「はい。承知しております。おやすみなさいませ、パーム大臣」

「はい、おやすみ」

パーム大臣は私たちが歩いてきた方向とは別の、城の者しか知らないエレベーターの方へ歩いて行った。私たちは再び階段を下りる。ずいぶん長い時間、階段を下りた。何度かチャリと鎖の音がしたので、おそらく懐中時計で時間を確認したのだろう。私も懐から、大王様から誕生日に頂いた懐中時計を取り出す。時間は十時半を回っていた。そろそろだ。

「もうすぐ到着しますよ」

「……一体どちらまで行くのですか？」

ブレイドナイトさんが警戒した声色で言う。アーニヤはそれに気づかず、機嫌良さそうに返した。

「もう、すぐそこですわ」

その様子に毒気が抜かれたのか、ブレイドナイトさんは「そうですか」と、肩の力を抜いて言った。

十分も歩くと、両開きの扉が目の前に現れた。アーニヤとランタンが片方ずつドアノブを持つ。私は端によって、三人の視界を邪魔しないように身をよせた。

「三、二、一……オープン！」

ゆっくり扉を開く。

その先には庭があつた。まるで絵画の風景をそのまま再現したような美しい光景が、眼下に広がっている。緑豊かで、小山から水が流れて滝ができていた。七階層分の高さをおち抜いて、造られたそれはワドルデイたちの地下の休憩室だった。下でワドルデイたちが各自休憩していた。

「()は……」

「素敵でしょう？ ワドルドゥ隊長の趣味の園芸ですわ。半年前に完成したばかりなんですよ。ここで休憩できるのはワドルデイたちですけど、こうやって見るだけならば、自由なんです」

「素晴らしい景色だ」

「うむ、見事だ。お一人で造られたのか？」

ソードナイトさんの言葉にランタンが答えた。

「始めは一人だったみたい。でも隊長が自分たちのために休憩室を造ってくれていると知ったワドルデイたちは手を貸すようになったの。最後は全員で造ったって聞いたわ」
「そのおかげで凝った造りになったそうです。あの山とか、滝も見事ですよ。今は他
の場所で、温室を作られているそうですよ。完成したらフラワーガーデンになるので、
楽しみですよ」

戦士たちがそれぞれ感嘆の声を上げる。私たちは無事に喜んでもらえたことに、胸を撫で下ろした。ほっと息をつく。

リーノが「さらにイベントがある」と言った。

「十一時には帰りの音楽が流れます。プロジェクターを使って、天井に満点の星空を映
すんです。とっても綺麗だから、あなた方に見て欲しかったの」

「音楽は生演奏です。ワドルデイたちはプロじゃないけれど、美しい演奏をするのよ」
「つまり……」

ランタンが温かい缶コーヒーを三つ、メタナイト卿たちに差し出した。突き当りにあ
る売店で買ってきたのだろう。

「ちよつとした歓迎会のつもりで呼び出したのよ。疲れているところ、悪かったわね」
メタナイト卿は缶コーヒーを受け取る。ソードナイトとブレイドナイトも続いた。

じつと缶コーヒーを見てから、私たちを見る。

「ありがとう」

「どういたしまして」

私たち六人は十一時を回るまで、近くに設けられたベンチに座った。ベンチは数が多かったので、全員座ることができた。ココアを半分ほど飲んだところで、メタナイト卿に話しかけられた。

「ところで、この城の地下は広いのか？」

「広いです。地下五十階以上はあるはずですわ」

アーニヤが手を広げて言う。

「縦にも横にも広いんですよ」

「そんなに大きいと、すべては把握しきれないだろう？」

「ええ、そのとおりです。陛下は、きっとこの庭のことも知りませんわ。そして私たちの

秘密基地のことも」

「あなた方も何か造ったのか？」

「地下の広い部屋を一室借りているだけよ。あの庭みたいな物を造っているわけじゃないわ」

「私たちはそこで趣味に没頭しているだけです。この庭が見える場所にありません」
「どこにあるんだ？」

リーノたちはにこりと笑って、口元に人差し指を当てる。

「内緒ですわ。なんとたつて、秘密基地ですから」

「ねー」

「ねー」

「ふむ、そうか」

「この城の地下はまるで迷路のようですわ。出入り口が複数あれば、一つしかない場所もある。色んな階層から行ける場所もあれば、地上からしかいけない場所もある。陛下の趣味が反映されていますわね」

「お城が建築された時から手伝っているリーノにも、わからないんだもの。私たちだけなら迷子になって出られなくなるわ」

「あなたたちも気を付けなさいよ。初めて行く所は、できるならワドルデイに道案内を頼むといいわ。あいつら、なんでも知っているから」

「いつもお菓子を携帯するといいですよ。何かあげないと、ワドルデイは頼み事を聞いてくれませんかからね」

「口封じにもお菓子がいるわよ」

「……つまり、そなたらはそうして地下に秘密基地を得たのだな？ ワドルデイに案内させ、お菓子で口を封じた」

「そうです！」

私たちは笑い合った。いたずらが表面化した気分だ。メタナイト卿はため息を吐いた。多分ちよつと呆れている。

その時、リンゴンと鐘が鳴った。

「あら、時間ですね」

アーニヤの言うとおり、部屋の外が暗くなっている。私たちは外に出て、満天の星空を見上げた。

村での歓迎会

数日後。

「三人の歓迎会をするから、呼んできてほしい？」

「そうなんじゃ。昼間は準備があるからのう、近づけないで……」

「夕方になったら連れてきてほしいんじゃ」

「まあ、難しいですわね」

村長さんとキュリーさんの言葉に、頭を捻る。二人と、周りにいた村人たちは「そこを何とか」という感じで、私に手を合わせていた。

そんなにお願いされると、断れないから困る。私は結局「なんとかしてみます」と言つて依頼を受けた。

どうやって彼らを城に留めよう。どうやって彼らをここへ連れてこよう。いくつかの案を頭の中でシミュレーションする。またアーニヤたちを誘つて彼らの所に行けば、何か勘づかれそう。今度は一人で行つた方がいいだろう。

「何かそれらしい理由をつけて、夕方まで村に近づけさせなければいいのよね」

こんなのはどうだろう。

今、村中で工事を行っている。昼間に行っても埃まみれになるだけ。行くなら夕方四時以降がいい。

こう言えば、例えトンカチを振るついているところを見られても言い訳ができる。村長さんに相談すると「良い案だ」と言ってもらえた。ならば、この作戦で行こう。

城に帰ってメタナイト卿たちの休憩室を訪ねる。彼らは揃っていて、ソードナイトさんが出迎えてくれた。先日よりも柔らかい態度だ。

「リーノ殿、中に入られますか?」

「いいえ、ここに。すぐに済みます。こちらの用紙を渡すだけなので」

つい先ほど、村長さんが作った「村工事中のお知らせ」を彼に渡す。ソードナイトさんはさっと斜めに読んで、内容に目を通した。

「なるほど、明日は夕方からお店が開いているんですね。わかりました。ありがとうございます」

「いいえ。では失礼します」

軽く頭を下げてその場から立ち去った。さて、今日のところはこれでいいだろう。もし、明日の夕方になっても村に来てくれなかったら、私の方から彼らを誘おう。歓迎会は午後六時に行われる。それまでに連れ出せばいいだろう。

次の日。

今日は午前中の仕事だけだ。なぜなら昨夜、一度も使ったことがない有休を申請したのだ。閣下は渋々といった感じで受け取ってくれた。

歓迎会の準備を手伝おうと思ひ、昼食をサンドウィッチで手早く済ませて村に向かった。

村のあちこちからトンカチを振る音、木をのこぎりで切る音が聞こえてくる。その中を歩いてサトさんとハナさんを探した。大がかりな大工仕事は力が足りなくてできない。けれど女の仕事ならやれることがあるはずだ。こういう催しものの準備のとき、村の女たちは村長さん宅に集合するので、一旦そちらに向かう。

村の外れにある村長さん宅は、村で一番大きな屋敷だ。中から女たちの賑やかな笑い声が聞こえてくる。扉の前で私は呼び鈴を鳴らした。すぐに扉が開く。

「はい、どなた……あら、リーノ。いらつしやい」

「こんにちは、ハナさん。歓迎会のお手伝いに来ました」

「まあ、ありがとう！ さあ、中に入って」

ハナさんに促されて家の中に入る。中にはすでに村のご婦人方が集まって、大きな白い布を縫っていた。おそらくテーブルクロスにするつもりなのだろう。人手は足りて

いるように見えた。

「こつちは人が足りているから大丈夫よ。そうね……午後二時からパーティに出す料理を作り始めるの。そつちを手伝ってくれる?」

「わかりました。料理はどちらで作るんですか?」

「広場で作るわ。その方が、料理が冷めなくていいでしょう?」

ハナさんの言う通りだ。リーノは頷く。

「良い考えですね。そつちに顔を出して見ます」

「ええ、そうしましょう。時間まで、ここにいなさいね」

「はい。布ができたなら、片付けを手伝いますね」

「ありがとう。お願いするわ」

村長宅で一仕事を終えたら、今度は広場へ移動する。すでに村中のご婦人方が集まっていた。その中に三戦士のファンである若い女性たちを見つけた。彼女たちも私を見つけた。お互いに会釈をする。顔に笑顔を張り付けた。

「こんにちは、リーノさん。今日は、戦士様たちはいらつしやるのかしら?」

「こんにちは、皆さん。今日はあのお三方に会っていませんから、わかりませんわ」

「そうです。残念。時間になったらリーノさんが呼びに行かれるの?」

「ええ、村長さんに頼まりましたので。そのつもりです」

「いいなー」という声がちらほらと上がった。私は笑みを崩さない。

「そうですか。ちよつと羨ましいです」

「ただのお使いですわ。ああ、サトさんが出てきましたね。それでは私はこれで」

軽く一礼をしてからサトさんのところへ歩く。そこでアーニヤとランタンにも合流した。私は体から力を抜いて、心からの笑顔を向ける。

「リーノ、アーニヤとランタンも、いらつしやい。今回はこの人数で、村の皆が食べるお菓子を作るわよ」

「あの、サトさん。私は主役たちを呼びに行くために途中でいなくなるんですが、それでも人数は足りませんか?」

「問題ないわ。生地は先に作つてあるの。あとは焼くだけだもの。さあ、お入りなさい」

「お邪魔します」

「失礼します」

「お邪魔しまーす」

村で唯一の警察署。そこがサトさんとボルンさんの家だ。警察署の奥に二人の居住スペースがあつた。サトさんは私たちを台所まで案内した。中はすでに甘い匂いが充満している。私たちはエプロンと三角巾をつけて、手を良く洗つた。

「さ、じゃんじゃん作るわよ！」

「ある程度数が焼けてきたら、子供たちに持たせる用の分も作りましょうか？」

「いいわね。そうしましょう」

女たちは忙しく動き回り、クツキーを焼いていった。四人いれば作業は滞りなく進むが、空いた時間にはお喋りを挟む。

「三人は、化粧をしないの？」

「この作業が一段落したらします」

「私は軽く直す程度ですわ」

「私は夜用にばつちりメイクするわよ」

私たちの様子を見て、サトさんは首を振った。

「自分の為じゃなくて、誰かのためにしないのかしら？」

三人は声を揃えた。

「「しませんね」」

「あら、いい人いないの？」

「私は仕事に集中したいので……」

「夢のために邁進中です」

「私も、夢を追いかけるのに忙しいわ」

「そうなの。三人とも村じゃ人気なのよね」

その言葉を聞いてリーノが驚いた。

「わ、私が人気なのですか?」

「そうよ。ほら、あなたお城でメイドをしているじゃない? 家事が上手でしょう。だから良いお嫁さんになってくれそうだって言う人がいるわね」

「そう、ですか。はじめて知りました。……二人はどうなんですか?」

ランタンが思い出すように答える。

「私は、色っぽいところに惚れたって言われたわね」

「言われた……それって告白されたの!」

「昔の話よ。そいつ私の外見しか見てないっぼいから断ったわ。アーニヤは?」

「ええ! 私ですか? 私は、その……、いつも本を読んでいるところを見ていたらしくて

……その雰囲気が好きだと」

「そ、それで?」

「話したことがない方だったので、お断りしました」

「そうなの。リーノは?」

「私は、告白されたことなんてありません。二人は凄いな……」

「……あんだ、あんまり村に来ないでしょ? 告白しようにも、まず話しかけるタイミング

がないんだもの。それじゃあイベントだつて発生しないわよ」

「そうね。もつと村にいれば、彼らにもチャンスがあるかもね」

「彼ら……え、そんなにいるんですか？」

困惑するリーノを見て、サトは「この子にはまだ色恋の話は早かつただろうか」と思った。

「（私が生きている間に、子供の顔を見せてくれるといいわね）」

サトの友人であつたリーノの亡き母を思い、そう考える。

クッキーを大量に作り上げその甘い香りだけで胸焼けを起こした頃、外から黄色い声が響いた。騒ぎを察するにあの三人組が来たようだ。時計を見ると短い針は五時を指している。

「ちようどいいタイミングでしたね」

「もう食事も出来上がっている頃でしょう。歓迎会が始まるわね」

サトさんの言つた通り、三人が来たことで歓迎会は前倒しされた。すでに装飾や料理ができあがつていた為だ。メタナイト卿、ソードナイト、ブレイドナイトは村長にテールへ案内され、料理がどんどん運び出される。村人たちの手には乾杯用のグラスが渡された。足りなかつた人はマグカップである。私はサトさんにコップを借りた。中に

はほうじ茶が入っている。お酒は苦手なのだ。

「え、それでは。メタナイト卿、ソードナイトさん、ブレイドナイトさんのお三方の歓迎会を行います。では、村長であるわたくし……」

「あの、よければこちらを召し上がってください」

「これ、私が作つたんです。食べてみてください」

「私のも、食べてください」

村長さんの長いお言葉は続かなかつた。それよりも早く女性陣が動いたからだ。三人の戦士たちの傍には着飾った女性たちが、料理を盛った皿を差し出している。数人ではない。三十人近くが彼らを取り囲んでいた。

アーニヤが目をぱちくりと瞬かせて言う。

「すごい、人気ですね」

「さすがって感じ」

「あなたたちは行かないの？」

「行きませんね」

「ゆつくりご飯を食べたいです」

「まずは、ご飯よね」

色気よりも食い気を選ぶ女の子たちに、サトはやきもきするのであった。

女三人固まってゆっくり食事をとる。周囲から視線を感じるのは気のせいだろうか。私を想ってくれているという誰かの視線だろうか。そう考えると、段々食事が喉を通らなくなってきた。じつとしていられない。私は食器を片付けたら、できあがった料理を運んだ。皿洗いを率先していると、ランタンに「職業病ね」と勘違いされてしまった。自意識過剰になっているなんて言えないので領いておいた。

食後のデザートを運び終わったところで、アーニヤが私に時間をたしかめてきた。懐の懐中時計を取り出して見る。時刻は午後の八時を回っていた。もうこんな時間なのかと驚いた。そろそろ城へ帰らないといけない。

「午後八時よ、アーニヤ。あなたはそろそろ帰る?」

「ええ、お暇させていただきますわ。リーノはどうしますか。帰宅したほうがいいと思いますけれど……」

「帰るわ。ランタンにも声をかけてみましょう」

ランタンは汚れた食器を運んでいる最中だった。そこへ駆け寄り、皿を分け合つて運ぶ。

「ランタン、もう午後八時なの。それで……」

「帰るわ。あんたたちもでしょう?リーノ、明日休みなら泊まらない?」

「明日も仕事なの。誘ってくれてありがとう」

「じゃ、アーニヤは？時間あるかしら」

「午前中なら大丈夫ですよ。一度家に寄ってから邪魔してもいいでしょうか？」

「そうね、一旦アーニヤの家に行きましょう。お城とは反対方向だから、今日は途中まで送れないわね」

「まだ早い時間ですから大丈夫ですよ。では、サトさんとハナさんに声をかけてからお暇しましょうか」

サトさんとハナさん、そして周りにいたご婦人方にも声をかけて帰宅する旨を伝えた。誰も嫌な顔をせず送り出してくれる。むしろ「若い娘なんだから早めに帰りなさい」と、心配されてしまった。

「いくら今日が満月で明るくても、夜道は危険よ。懐中電灯は持っているの？うちのを貸しましょうか？」

「ふふ、大丈夫です。ちゃんと持って来ました」

細めの懐中電灯を出して見せる。ハナさんはそれなら良しと、微笑んだ。

警察署から外に出て広場を見渡した。あの戦士さんたちはどこだろう。着飾った女性たちを見つめる。その視線の先を追うと、彼らは村の男性たちと飲んでいるところだった。その中にパーム大臣夫婦を見つけた。いらしていたのか。

「どうかしましたか、リーノ」

「パーム大臣とメーム婦人を見つけたの。一応、声をかけて来るわ」
「いつてらっしやい」

私は一人、男性たちの中をかき分けてメーム婦人の傍に寄った。

「メーム婦人、こんばんは」

「あら、リーノ。こんばんは。あなた！」

「うん？ おお、君も来ていたのか」

「はい、呼んでいただきました。ですが、明日が早いのでそろそろ城に帰ろうかと思いません。お二人はどうされますか？」

「私たちはもう少しパーティを楽しむよ。……一人で帰るのかい？」

「はい。そうです」

「あら、女の子が一人でなんてダメよ」

「まだ午後八時なので、大丈夫かと……」

「いえ、いけません。こういうときは警察に頼むのが一番。ボルン署長に送ってくださいるよう頼んでみましょう……」

「よろしければ、私たちが送ろう」

視界の端から青い戦士が現れた。そちらに顔を向けると、ソードナイトとブレイドナ

イトを連れてメタナイト卿がいた。ちよつと疲れた雰囲気なのは気のせいではないだろう。そして女性たちのざわつく声も、また気のせいではないはずだ。

「メタナイト卿。ですが、あなた方は今日の主役ですよ」

「わたくしども明日が早いので……」

「そろそろ帰らなければなりません」

「そういうことでしたら……」

「仕方ありませんな」

「よかったわね、リーノ。こちらの三人が一緒なら心強いわ」

「そうですね。では、よろしくお願いいたします。メタナイト卿、ソードナイト様、ブレ

イドナイト様」

「ああ」

こうして、残念そうな女性たちの視線を後にして私たちはパーティから退場した。広場を出てすぐの角で、アーニヤとランタンと別れる。それからは四人で歩いた。城までの道中に明かりはない。懐中電灯を使うかと尋ねると、必要ないと言われた。

「夜道が、見えますの？」

「まあ、そんなところだ」

「それはいいですわね。わたくしは見えますので、点けてもいいでしょうか？」

「好きにしろ」

「ありがとうございます」

最後尾を歩く私の足元だけを照らす。すると三人の戦士たちの影が前方に伸びた。私たちの隙間を縫うように温かい夜風が通り過ぎて、メタナイト卿のマントをなびかせた。

城に到着する。私は三人を呼び止めた。

「あの、少しだけよろしいでしょうか？」

「なんだ」

「エレベーターの存在はご存知ですか？」

「……いや、はじめて聞いた」

「でしたら、ご案内します。どうぞこちらへ」

中庭から近い隠し部屋へ案内する。その少し奥にエレベーターはあった。

「……これも陛下の趣味か」

「そのとおりですわ。もう体験されていらつしやるかもしれませんが、ここの隠し部屋以外にも、城の中には随所に隠し部屋、隠し階段、仕掛けがございます。どうぞお気を付けください」

私の言葉を聞いたソードナイトさんが惜しむように言った。

「もつと早くに知りたかったな」

「まあ、すでに体験なさったんですね」

「ああ。穴から滑り落ちた」

「それは……大変でございましたね」

遠い記憶。まだこの城に慣れていかなかったころ、自分も穴から落ちたことを思い出した。

アニメ開始

やって来た!星のカービィ

玉座の間から出てきた廊下でフォーム様とブン様に出会った。

お二人とも大きくなられた。

「この前まで、ついこの前まではわたくしの手を握って歩いたり、よちよちと後ろをついてきたりしましたのに……本当に月日が経つのは早いですわ」

姉弟の姿を見かけるたびに胸がいつぱいになる。

そんな私の様子に呆れて、ブン様は盛大にため息を吐かれた。

「まくた言ってるよ、姉ちゃん」

「まあいいじゃない。ねえ、リーノ。それよりもデデデについて聞きたいんだけど」

「はい。なんででしょうか」

「最近、おかしい様子はなかったか？」

「おかしな、ですか?そうですね。気になることとえば一つあります。先日、陛下はタコのペットを購入されました。こんな事は陛下に仕えてはじめてです」

「あのタコのペットね。やっぱり怪しい!でも証拠がないわ……」

悩まれるフーム様に、ブン様。そして二人の後ろにいらつしやった大臣夫婦と、村の牧場主たち。皆は何かに困つていて、陛下にそれを言いに来たらしいのですが、聞き入れられなかったみたいですね。

それならば。

「カブーに相談してはいかがでしょう？あの方ならば、いい知恵を貸してくださいさるはずですわ」

「そうだ！その手があったわ!!ありがとうございます、リーノ。皆、行きましよう!!」

皆はカブーの谷へ向かった。

私は玉座の間に入った。陛下が食事した後の皿を下げるためだ。

「まったく、どいつもこいつも……」

エスカルゴン閣下がぶつぶつと何か言っているが聞き取れない。だけど見当はつく。おそらく先ほどいた住民たちへの不満だろう。「陛下に物申すなんて無礼だ」とか何とか思われているんじゃないだろうか。

「もぐもぐもぐ……ごつくん。ふう、食った食った！よし、行くゾイ！」

物音を鳴らして、陛下は椅子から立ち上がった。

私はさっと近づき注意する。

「陛下。まだ『ごちそうさま』を言っておりません」

「あくん?……ごちそうさまでした。これでいいかゾイ?」

「はい。たいへんよくできました」

手を合わせてちゃんと「ごちそうさま」を言う陛下に、につこり笑いかける。

前世でも今生でも、デデデ陛下のことをワガママ大王と思う。けれど、こうして臣下のいう事を素直に聞き入れてくださる姿もあるのだと知った。そんな姿は可愛らしいと思う。

陛下は満足そうに頬を緩ませて、閣下をお呼びになられた。

デデデ陛下とエスカルゴン閣下が、車に乗って出かけられた。

その姿を見送ると、メタナイト卿に出くわした。おそらく後をつけていたのだろう。毎度のことなので私はもう慣れていた。

「ごきげんよう、メタナイト卿。何か御用でしょうか?」

「陛下はどこに出かけられた?」

「カブーの谷です。フォーム様たちを追って行かれました」

「そうか。ありがとう」

「どういたしまして」

「こうやって情報を流し彼に協力することも、いつものことだ。」

メタナイト卿と別れてメイドの仕事に戻る。

陛下の自室を掃除しつつ、そういえばと思いつく。

タコの魔獣が出現して村人を困らせるといえば、アニメの第一話だよ。今日がその日なのかしら。

そう考えると胸がわくわくと躍り出す。足取りも軽く、ステップを踏み出しそうだ。

鼻歌を歌いながら、はたきで埃を落とす。すると突然、窓が光った。

何事かと驚き歌も手も止める。光は、窓から入ってきているようだ。あまりにも眩しくて、窓の方へ近づけなかった。

やがて光は収まった。

数十秒ほど出来事だけど、耳の横で心臓が鳴っているようだ。体が緊張する。私はゆっくり窓に近づいて、空を見上げる。なんの変哲もない、いつもの青空が広がっていた。ほっと、体から力が抜ける。

「今のは一体何だったのかしら？」

空が光るなんて人生ではじめての経験だった。怖かった。

周囲を見渡すと、同じく部屋で一緒に仕事をしていたワドルデイたちの手も止まっていた。みんな窓の外を見ている。

「みんな、もう大丈夫よ。掃除を続けましょう」

声をかけると、止まっていた手が動き始めた。私も、今は仕事に集中しよう。

そろそろ夕飯の準備をしないといけないな。太陽が随分と傾きはじめて頃、私は城のキッチンに向かう。

キッチンはいつも清潔だ。ワドルデイたちが毎食後の掃除を欠かさないからである。私も仕事で掃除をするが、彼らより器用ではないし、掃除だつて上手くはない。

なんでもできてしまうワドルデイたちは、今も昔も私にとつて仕事のお手本だった。

キッチンの隣には、準備室がある。そこで割烹着を着用し、三角巾を被つてキッチンに入る。埃が料理の中に入つてしまわないようにするための配慮だ。料理担当のワドルデイたちも頭にはカバーをつけている。髪の毛のない彼らには必要がないと思うんだけどな。

腕まで袖をめくり、しっかりと手を洗う。それから調理開始だ。

「今日は……うん、しばらくカレーライスを作っていないから、カレーにしましょうか。どうでしょう。よろしいですか?」

「わにゃ」

「では、そうしましょう。陛下も閣下もお好きですから、多めに作りましょうか」

「わにゃ」

一ヶ月の献立表をチェックしながら、最近お出ししていないものをチョイスする。今晩はカレーライスだ。

ライスはワドルデイに任せて、私はカレー作りに精を出す。

肉は鶏むね肉を使用する。肉と野菜を一口サイズに切る。底が深いフライパンを火にかけて、油とにんにくを入れる。にんにくの香りをしっかりと出したので、大体十分ほど炒める。換気扇を回すのを忘れないこと。

まず肉を入れて、よく炒める。色が変わったら、次は野菜を投入する。良く混ぜたら全体が浸かるほどの水を入れる。蓋をして沸騰させる。蓋を開けてあくを取り除く。火を少し弱めて煮込み、じゃがいもやにんにくに串がすんなり入るなら火を止める。

いやあ、陛下に頼み込んでキッチンを最新式に変えていただけでよかった。前は薪をくべて火を起こしていたけれど、今はそんな手間いらぬものね。楽だわ。

ルウを必要な数だけ入れて再び蓋をして、五分程待つ。

するとルウが溶けているので弱火にかけて、よく混ぜながらさらに煮込む。

これでカレーは完成だ。

「こちらはできました。ライスの方はいかがですか？」

「わにゃにゃ」

様子を窺うともうすぐできあがりそうだった。そろそろ陛下にお席についていただ

いてもいいかもしれない。

そう考えていると、一人のワドルデイが近づいてきた。

「かき混ぜるのを代わっていただけますか？ 陛下にもうすぐご夕食の準備が整うことをお知らせしてきますので」

ワドルデイは頷いた。しかし、彼の背は低すぎてかき混ぜているお玉に届かない。近くから椅子を持ってきて、その上に乗れり、リーノからお玉を受け取った。

「では、後はよろしくお願いします」

キッチンにいるワドルデイたちに向けて一礼し、部屋を出た。

扉を閉めると、遠くの方で花火の音が聞こえた。あのドーンという弾ける音だ。

私は首を傾げる。

「陛下だったら、花火でも打ち上げているのでしょうか？」

もしそうならば、陛下は見晴らしのいい場所にいるだろう。

順番に探すしかない。

外の様子を窺えて、尚且つ機械類の操作ができる玉座の間に、一旦足を運ぶことにする。

玉座の間へと続く廊下を歩いていると、後ろから小さなピンク玉が追い抜いていっ

た。

あの一頭身は、まさか……。

私は胸が高鳴るままに後を追った。

小さなピンク玉は玉座の間へと入って行った。私も続いて中に入る。

中には陛下がいらっしやった。陛下はピンク玉に気づくと、ご自身のハンマーを掲げられて、ピンク玉に襲い掛かった！

「デェデェ陛下!？」

陛下は何度もピンク玉にハンマーを振り下ろした。その度にピンク玉が跳ねて転がる。

なんて痛ましい光景だろうか。たまらず陛下の前に飛び出した。

「陛下、お止めください!？」

「リーノ、危ない!!」

フォーム様の声が聞こえた。陛下のハンマーは止まらない。私は目をつぶった。

「はあ!!」

何かがぶつかる金属音がした。恐る恐る目を開けると、デェデェ陛下は床に伏せていた。そして私を庇うようにメタナイト卿が剣を抜いて立っている。助けられたのだ。

「ありがとうございます。メタナイト卿」

「あれを」

彼の手が示す方向を見る。

陛下のペットのタコが、見る見るうちに巨大化していった。

「うわあああ!!?」

「あ、ああ……なんてことでしょう」

「魔獣だ!これじゃ羊を食べる訳だよ」

「しかも陛下を操っていた!」

タコはやがて壁を破壊し、さらに体を大きくさせる。天井が崩れる中、遠くでタコの足が城からみつく光景を見た。

なんて日だ、この世の終わりか?

タコに……魔獣にソードナイトとブレイドナイトが突撃する!しかし、タコの足に攻撃を邪魔されてダメージが入らない!

陛下は魔獣を応援する始末だ。皆や城が大変な目にあっているのに何しているんだあの人は!今日の日タコ飯はお酒抜きにしてやる!

魔獣は体中から小さい自分の分身を出現させて、逃げるピンク玉を追わせる。魔獣自身も追いかけて外に出た。あら、フォーム様がない?

「フォーム様？」

「こつちだ」

メタナイト卿とブン様に案内されて、フォーム様の元に辿り着く。そこから、ピンク玉が戦っている様子が見られた。

強力な吸い込みが魔獣の分身を何百と吸い込む。

乗り出していたフォーム様が吸い込まれそうになり危なかった。ブン様と一緒に引き上げる。

数百の分身を吸い込んだ彼は平然としていた。その様子に私たちは驚くが、メタナイト卿は平然としている。むしろ技の解説をしてくれるぐらいだ。

「どうして、技のことをしていますの……？」

「秘密だ」

はぐらかされてしまった。フォーム様たちと顔を見合わせる。

魔獣に動きがあった。

今度は炎をまとった分身が、魔獣の吸盤中から飛び出てきた！ピンク玉は体を回し蹴りで分身を弾く。魔獣の攻撃が効かない。

「わああああい！」

「やった！」

魔獣はさらに分身を放出する。しかしピンク玉はすべてを飲み込んでしまった。

そして彼の体が発光する。

「姿が変わった?!」

「ふむ!コピー能力だ!」

「コピー?」

再びメタナイト卿はコピー能力について解説してくれる。なんて凄い能力なんでしょうか。

「今彼は、ファイヤーカービィとなった!」

「ファイヤー、カービィ」

カービィ、この世界の主人公。彼が、カービィ!

魔獣が炎の攻撃をくり出す。フーム様が「カービィ!!」と叫ばれて何かを投げた。それは星型で空を自在に飛んでいる。あれが、ワープスター!?

今度はカービィが炎攻撃を魔獣にぶつける。

魔獣は粘ったが炎に勝てず、遙か彼方へ飛ばされてしまった。

カービィの勝利だ!

「やりましたわ!」

「やったー!」

「カービイは最高！本物の戦士だわ!!」

合流した大臣夫婦と喜びを分かち合う。そして陛下は魔獣が負けたことで悲しそうに泣かされていた。

いつの間にか、メタナイト卿の姿はなかった。

早朝、カービイはプブレッジを出ることになったらしい。さすらいの旅が彼の定めなんだそうだ。

「そうですか。どうか、わたくしの分までお別れを言っておいてくださいませ」
「待って、リーノは一緒に見送りに行かないの？」

「壊れた城を直さなければなりませんから。それに、カービイさんとは知り合いでもなんでもありません。私が行くのは不自然でしょう」

「……わかったわ。じゃあ、また後でね」

「はい。いつてらっしゃいませ」

と、しんみり話して城を出発したのに。

戻ってきた大臣一家の中には、去ったはずのカービイが一緒にいた。

「カービイは当分ここに住むことになったわ!!」

「まあ、それは……おめでとうございます?」

大臣一家はカービィを連れて帰ってきた。

どうやら、物語は動き始めたらしい。

カービィのお家

カービィがププビレッジに住み始めて一週間ほどたった。

彼がいるからといって、私の生活に大きな変化はない。これまでのように朝から晩まで働き、時々陛下の情報をメタナイト卿たちに流す。いつもの毎日だ。

ここ最近、フーム様とブン様が慌ただしく城と村を行き来している姿を何度も見つけた。気になった私は、メーム様とお話する機会があったので質問する。

なんでも「朝食を済ませれば一目散に城下へと向かうのだ」という。

「村の子供たちと協力してカービィの家を建てているらしいわ」

「まあ、子供たちだけで？それは素晴らしいですね」

「そうねえ。でも危険でしょう？心配だわ」

「でしたら、わたくしが差し入れを持って、様子を見てきましようか？」

「あら。そうしてくれたら助かるけれど、いいの？リーノも忙しいでしょう？」

「買い物ついでに寄れますから。さっそく差し入れを作ります」

「なら、うちのキッチンを使いましょう。大工仕事はお腹がすくから、ケーキをたくさん焼きましょうか」

私は、できる限りリュックにケーキとジュースを詰め込み背負う。重い。肩ひもが食い込んで痛い。さっさと運んでしまおうと早足で子供たちがいる、村の外れに向かった。

しばらくすると呼吸は荒くなり、汗が噴き出しはじめた。荷物を下ろしたくなくなったけれど、一度休憩を挟むと動けなくなる気がしたので、とにかく足を動かした。化粧が落ちて酷い顔にならないことを願う。

視線が下がり、草ばかりを映していた。

遠くの方でトンカチを打ちつける音、のこぎりで木を切る音がする。もうすぐ着くぞ。

重量のあるリュックを背負い直し、気合を入れて足を前に出した。

「あれ、リーノじゃん。どうしたんだよ」

気がつくのと、そばにフォーム様とブン様とがいらした。

「こちらを、お持ちいたしました。はあ……はあ……メーム様とわたくしからです」

リュックを丸ごとブン様に渡す。

ブンは一度リュックを地面に降ろしてから、中身を見た。そこには缶ジュースとパウンドケーキがたくさん入っている。

「差し入れを持って来てくれたのかよ！ありがとう！」

「みんな!!少し休憩にしましょう。リーノがお菓子を持って来てくれたわよ！」

お菓子と聞いて子供たちが素早く集合した。

「一列に並べ〜」

「イロー、ホツへ、ハニー手伝ってちょうだい。ジュースは少ないから、みんなに少しづ

つ分けるわね」

「手伝いますわ」

「リーノはそこで休んどけよ」

「後は私たちがやるわ」

「そうですか?では、お言葉に甘えますね」

フーム様とハニーがジュースを渡し、ケーキを男の子たちが配る。

ジュースは紙コップに半分ほど入れられて、子供たちに渡される。けれどみんな物足りなさそうだ。

村のコンビニで水でも購入しようかと考える。

そこに作業に参加している子供たちの母親たちが差し入れを持って来た。

「こんにちは。そろそろ休憩かしら」

「こんにちは！」

「こんにちは」

「こんにちは。フーム様、リーノ」

「これ、よかつたら皆で飲んでください」

彼女たちが持つて来たのはジュースだった。よかつた、これで皆の喉が潤う。

母親の姿を見つけた子供たちが彼女たちに駆け寄る。そして貰った菓子を自慢した。

「お母さん、見て！お菓子を貰ったんだ」

「よかつたわね。ありがとうございます。フーム様」

「私じゃなくて、リーノと母からなの。お礼はリーノに言つてちょうだい」

「まあ、そうでしたの。ありがとうございます、リーノ。メーム様にも伝えてちょうだい」

「はい。お伝えしますわ」

そういうと、母親はぺこりと頭を下げた。

母親たちは差し入れを子供たちに渡すと、すぐに帰ってしまった。まだ家事の途中だったのだろう。洗濯機や電子レンジなど置いていない家庭では、家事の時間は非常に多くさかれる。

あれは大変だった、と城に住む前の生活環境を思い出した。

お菓子もジュースも余ったので、私もいただいた。

味見したとはいえ、ケーキはやっぱり甘くて美味しかった。ジュースも冷えていて最

高だ。

お腹がいっぱいになったので、子供たちと別れて村へ買い物に向かう。

その道中で「しまった」と声にでた。

「カービィと話してない……」

主人公とお知り合いになるには、まだ時間がかかりそうだ。

さらに数日後。

魔獣も現れず、のどかな日々を過ごす。

ずっとこうであればいいのに、と願わずにはいられない。だけど陛下がまた悪い笑みを作っていたので、今日明日あたりで何かが起こるかもしれない。こういうときは城で大人しく過ごすのがベストだろう。

そう考えた矢先に、フォーム様とブン様に誘われた。

「カービィの家が完成したの！ 今日お祝いのパーティをするんだけど、あなたも来ない？」

ぜひとも行ってカービィとお話したかった。しかし、それよりも自分の命の方が大切

なのである。私は頭を振って断る。

「生憎ですが、仕事の都合で行くことができません。後日改めて、手土産を持って伺います」

「仕事なら、仕方ねーか」

「残念ね……」

「ところで、フォーム様とブン様のお耳に入れておきたいことが」

「なあに？」

「陛下が怪しいです。また魔獣を呼ぶつもりなのかもしれません。お気をつけて」

「なんですって!?!」

「デデデの奴またかよ」

「わかったわ、充分に気をつける。リーノも気をつけてね」

「はい。ありがとうございます」

二人は走って行かれた。

その様子を眺めていると、後ろに慣れた気配を感じた。

振り返ると青いあの人があった。

「ごきげんよう、メタナイト卿」

「……陛下に何か動きがあったのか？」

「今朝見かけたときは、悪そうな笑みを作られていらつしやいました。なので、今日か明日には何かが起こると予想しております」

「やるとすれば、子供たちが言っていたパーティの最中か」

「最も可能性が高いのは、そのタイミングかと」

「わかった。ありがとう、リーノ」

「どういたしまして、メタナイト卿。あなたも気をつけて」

「……わかった」

マントを翻して、戦士は去っていった。

みんな何かのために、誰かのために動いている。

私は怖くて動けない。むしろ隠れてしまう。しかし、何もできないのは悔しいな、と思うのだ。ならば、後方で必要な能力を、技術を身につけよう。

例えば、ヤブイ先生に包帯の巻き方や応急処置のやり方を習うのだ。

「明後日にもお願いに行きましようか」

私はフーム様たちの安否を願いつつ、自らを奮い立たせた。

その日の夕方、カービイを連れてフーム様たちが帰ってきた。ちょうど帰宅したところを見かけた私は、急いで三人の元に向かう。

大臣一家の住まいである一角の近くで会うことができた。
息を整えつつ近づく。

「皆様、ご無事でなによりです」

「リーノ、迎えてくれてありがとう。心配をかけたわね」

「リーノが言った通り、魔獣が出たんだ！でもカービィが返り討ちにしたぜ！」

「すごい。さすがは星の戦士ですね。お疲れ様でした。カービィさん」

「ぼよぼよー」

屈んで小さな戦士の目線に合わせる。すると彼は、視線が合うことが嬉しかったのか。飛んで喜んだ。

その様子に自然と頬が緩む。

「カービィ。彼女と会ったことはあるけれど、紹介はまだだったわよね。彼女はリーノ、このお城のメイドで、デデデに仕えているの。でも敵じゃないから安心して」

「初めまして、カービィさん。リーノと申します。今後、よろしくお願いたします」

「ぼーよー！カービィぼよー！」

私は右手を差し出す。カービィは飛ぶのをやめて、きよとんと差し出された手と私の顔を交互に見た。

私にはっこりと笑って彼の右手を握った。ふわふわのマシユマロのように柔らかい

赤子の手だった。

こんな小さな子を戦場に出さねばならないのかと、震えだす体をなんとか押さえつける。

「これは、握手といえます。こうやって手を差し出されたら、手を握り返すですよ」
「これからよろしくつて意味なんだけせ」

ブン様が得意気に仰られた。

カービイは楽しそうに笑って、私の手を握り返す。その力加減は優しく、生まれながらの戦士のものとはとても思えなかった。

前回、木で造った家はデデデ陛下によつて壊されてしまったらしい。なので、フーム様たちは改めてカービイの家を建て直したようだ。場所を聞いて、アーニヤとランタンと一緒に訪ねた。

午後三時、村から離れた草が生い茂る丘を上る。

そこは半球ドームの形をした家だった。一人しか暮らせない広さだが、小さなカービイには充分だろう。

扉を三度ノックする。

出てきたのは黄色の小さな鳥、トッコリだった。

「あら、トツコリ。ごきげんよう。カービィさんを知りませんか」

「よう、リーノ。あいつなら隣の木だぜ」

隣の木、と言われて視線を斜め上にやる。半球ドームの家の隣にはたしかに真つ直ぐではない木があった。曲がってのびた木の半ばに、彼はいた。ピンクの丸っこい体が寝息を立てている。

トツコリが近づき声をかけた。

「起きろ、お客さんだぞ」

まだすうすうと気持ちよさそうな寝息が聞こえる。私たちは顔を見合わせて「出直そうか」と考えたとき、トツコリがカービィを思いつきり突いた。

カービィは飛び起きる。

起こしたトツコリは満足気だ。

「ぼよ〜?」

「眠っているところ起こしてごめんなさい、カービィ。家を持ったあなたに、お祝いのホットケーキを持って来たんです」

リーノが持つ籠の中には、小さめのホットケーキがたくさん入っていた。

「他にもジュースとお菓子がありますから、一緒に食べましょう」

アーニヤの籠には紙パックのジュースが、ランタンの籠にはクッキーが入っていた。

カービイは飛んで跳ねて、リーノたちを歓迎する。

持つて来たレジャーシートをカービイの家の前に広げて、四人と一匹は座った。

そして全員にホットケーキと菓子とジュースを配り、食べ始める。カービイはフォークを使うことを教えられて、ゆつくりとホットケーキを刻んで食べていた。

「場所を貸してくれてありがとうございます。トッコリ」

「いいつてことよ。いただきまーす。もぐもぐ……このクッキーいけるな」

「それは私が焼いたのよ。いけるでしょ」

「ランタンやるじゃねえか。これならすぐにでも嫁にいけるな。……思ったんだけどよ、三人ともなんで嫁に行かねえんだ？」

私たちは話してもいいのか、ちらりとアイコンタクトを取る。

「……それぞれが夢を追っているからですよ」

「どんな夢だ？」

「私のもつとメイドの仕事を頑張るため。陛下に、私を拾ってくださった恩を返さなければなりません」

「自分のお店を持ちたいんです。できれば本を売りたいですね。あと、リーノとランタンが作った雑貨も置きたいと思います」

「服をメインに置いた店を持ちたいわね。それでアーニヤの言う通り、あんたたち二人

の雑貨も置くのよ」

「まあ、ランタン。それでは私のお店と被りませんか？」

「大丈夫よ。アーニヤの店はキーホルダー類の小さい物、私の店はアクセサリー類を置けば住み分けができるわ」

「それは良い考えだね。……といった理由があるんだけど、理解できたかしら？」

「おう。おかげで男どもの悩みも解決だ」

「男ども？」

「村の奴らさ。アンタらを狙ってる。おいらに相手を見つけない理由を聞いてくれて言ってきたんだよ」

「それ、私たちにバラしてもいいんですか？」

「おいらは頼まれただけさ、後は知らないね」

「まあ、トツコリたら」

私たちは呆れかえった。

それにしてもと、クツキーをかじりながら考える。

まだ、私に対して好意を抱いていてくれる人がいるのか。

前にこんな話を聞いたのは、メタナイト卿たちがこの地に来た頃だったから随分前だ。

「なんだか意外だわ。まだ、私のことを好きな人がいるなんて」

「……」

「……」

「二人とも、なぜ黙っているんですか？……まさか、また何かあったんですか!？」

「告白なら、されたわね。断ったけれど」

「私もです。……お断りさせていただきましたけど」

「す、すごい！うう、私にだけ何もないわ」

「何か起きて欲しいなら、もっと村に立ち寄りなさいよ。そしたら相手側からアプローチがあるでしょ」

「そんなんですけれど、メイドの仕事よりも優先させる気がないので、しばらくはお預けですね」

「そんなん言ってる間に行き遅れちまうぞー」

「トツコリ!!なんてこと言うんですか!」

「結婚するもしないも、自由よ!」

「そうですよ!そんな考えは古いんです!」

「わ、悪かったよ……」

あまりの剣幕にトツコリは冷や汗をかいた。

リーノたちは、自分たちよりも幼いトツコリにあまり怒るものではないと考えた。冷静さを取り戻すため、深く深呼吸する。クツキーでも食べて、忘れようと手を伸ばす。皿の上には、もう何もなかった。

すべてはカービィの口の中に入れられていた。

食べるものがなくなったので、小さなパーティはお開きとなった。

ごみを片付けて、リーノは一人で帰路につく。城に着いた時にはすでに辺りは夕闇に覆われていた。

門橋を渡り終えたところでメタナイト卿に会った。誰かを待っていたのだろうか。表情は仮面に隠れて見えない。

「こんばんは、メタナイト卿」

「今、帰りか？」

「はい。その通りです」

「夜は危ない。明るいうちに帰ることだな」

彼は時々、こういう優しさを垣間見せる。

純粹に心配してくれたのか、または私だから心配してくれたのか。

こんな風に悩むようになって、どれだけの月日がたっただろう。

答えはまだ、出せないでいる。

「……ありがとうございます。今後、できうる限り気をつけますわ」

「……今日はもう仕事はないのか？」

「はい。ありません」

「ならば、そなたの部屋まで送ろう」

戦士は先に歩いて行ってしまふ。私は急いで後を追った。

私の部屋に辿り着くまでの間、その短い時間に今日の出来事を話す。

彼は話すことがないのか、話せないのかわからないけれど。主に話しかけるのは私だ。

そして先程の、トッコリが話してくれた内容に触れた。

「本当に、アーニヤとランタンは凄いですわ」

「……そなたを、想う者も少なからずいるだろう？」

「え？……ええ、トッコリの話ではいるようです。でもなんだか実感がありませんわ」

「そうなのか？」

「これまで、なにも起きませんでしたから。本当にそんな方がいらつしやるのかどうか、

わかりません」

「そうか……。まだ誰も、そなたにアプローチしていないのだな」

「そうなりますわね」

「ふむ……」

それ以降、メタナイト卿は黙り込んでしまった。

考え事を邪魔したくなかったので、私は静かにしていた。

そして部屋の前に到着する。

「送ってくださって、ありがとうございます。それでは今日はこれで……」

「リーノ」

「はい。なんででしょうか」

「今度、一緒に食事をしないか？」

ドキリと心臓が跳ねる。そのまま鼓動が激しくなった。

努めて冷静に返す。

「いつでもでしょうか？」

「そなたの都合がいい時に」

「でしたら……」

明日以降にでも都合のいい日を答えよう。そう思ったのだが、ふとある事がよぎった。

「……あの、お話がちよつと変わるんですけれど」

「なんだ？」

「メタナイト卿たちは自炊されていますか？」

「たまに。なぜそんなことを聞く？」

「ソードナイトさんとブレイドナイトさんが大量にカップラーメンを購入するところを目撃してしまっただけです。だから、気になってしまっただけです」

「それで？」

「もしよければ、晩御飯と一緒に食べませんか？」

「……そなたと私だけではなく、か？」

「はい。ソードナイトさんとブレイドナイトさん。それからアーニヤとランタンも入れて」

指折り数える私に対して、メタナイト卿は困惑しているようだった。

どうしてそうなるのだ……といった具合だ。

「ご迷惑だろうか？」

「迷惑ではない。……だが、我らはあまり料理が得意ではないぞ」

顔に出てしまっていたらしい。

だが、メタナイト卿の心配は無用だ。

「わたくしがご馳走したいんです。アーニヤとランタンの都合を聞いてから、日時を決

めてもよろしいですか？」

「場所はどようする？」

「地下の調理場を使います。あそこはいつでも空いていますから」

「わかった。決まったら教えてくれ」

「はい。それでは、また」

「うむ」

メタナイト卿に見守られつつ、私は部屋の中に入った。

デデデ城、とある地下。

ハルバードを建設中のため、その場所は地下の中でもかなり広い。

メタナイト卿は迷うことなく、部下二人がいる場所に足を進めた。

「お帰りなさい。メタナイト卿」

「ああ、今戻った」

埃にまみれたソードナイトとブレイドナイトが暗がりから現れた。

「お湯は沸かしてあります。すぐに食べられますか？」

「いたどころ」

ブルーシートの上にちゃぶ台が置かれた、ちよつとした休憩スペースに向かう。

ソードナイトが近くの棚の中からカップ麺を三個取り出して、それぞれの前に置いた。

それぞれがカップ麺のビニールを破り、蓋を半分開ける。中からスープの素を取り出し、かやくの袋を破って麺の上に具を入れた。

そして湯を注ぎ込む。

蓋をして、指定の時間までそつとしておく。

この間に、メタナイトは二人の都合を聞いた。

「特に用事はありません。強いていうならばハルバードの建設でしょうか」

「私も、ブレイドナイトと同じです。ハルバードの材料で買い出す物でもありましたか？」

ハルバードの建設は順調で、村の外に買いに行く用事など、最近はほとんどない。

メタナイト卿は「そうではない」と言った。

「リーノに食事に誘われたのだ」

「なんと!?!」

「食事を!?!……え、我らもですか?」

「そうだ。私たち三人と、リーノたちだ」

「ということは、アーニャとランタンを含めて、六人で食事をするのですか?」

「都合が合えばな」

ソードナイトとブレイドナイトはお互いの顔を見合わせる。

とうとう主人に春が来たのか、と一瞬喜びはした。だが、中を開けてみれば、そういうものではないようだ。

「なぜ、そのような話になったのでしょうか？」

「……はじめは、私が食事に誘ったのだ」

「おおー！」

「それは、お二人で、ですよね？」

「そうだ。だがリーノは私の言葉で、私たちの食生活が偏っていることを思い出したのだ。二人がカップ麺を大量に購入するところを見ていたらしい」

「ああ」

「なるほど。それで……」

「おそらく食生活を心配して、食事に誘ってくれたのだと思う」

「お、お優しいですね」

「そうだな。……それで、どうだ。いつでもいいんだな？」

「はい。空いております」

「俺もです」

「では、リーノにはそのように伝えよう。ああ、もう時間だな。いただくとしよう」
メタナイト卿はパキリと割り箸を割った。

決闘

メタナイト卿を晩御飯に誘った翌日。

午前中に洗濯物と掃除を済ませてから、村に向かった。

村の本屋さんへ顔を覗かせると、休憩に入ったアーニヤに合流した。そのまま二人でランタンの家を訪ねる。幸いなことに、ランタンは家にいた。

リビングでお茶をご馳走になりつつ、二人を探していた事情を説明する。

「メタナイト卿たちを晩御飯に招待したんですけど、二人も来ませんか？」

「は!？」

「ええ!？」

驚くや否や、二人は素早い身のこなしで、部屋のカーテンやドアの鍵を閉め始めた。

「ど、どうしたんですか？」

「人目を避けているのよ!あの戦士さんたちと一緒に食事する、なんてバレたら大変なことになっちゃう」

「お三方の人氣は根強いですからね。恨みをもってしまいかもしれません」

「ええ……大事になっちゃうのね。外で話さなくてよかった」

「ナイス判断よ」

親指を立てて向けられる。私は笑顔を返した。

「それで、二人は来てくれる？もしよかったら、六人分の食事を作る手伝いをしてもらえたら嬉しいんだけど」

「手伝いくらいやってあげるわよ。それでいつ、どこでやるの？」

「日時は私たちの都合に合わせてるって。場所は地下の食堂です」

「それでは……」

私の手帳を取り出し、膝をつきあわせて話した。

そして次の日、仕事がない日を選んで決めさせてもらった。

いくつか候補があるので、彼らの都合のいい日と被っていればいいな。

話し合いの後は三人でサンドウィッチを作り、食べた。やつぱりピーナツバターはペーストよね。

友人たちと別れた後は、ヤブイ先生の病院へ向かう。

体に異常がないか診てもらう間に、先生に応急処置のやり方を教えてもらえないかと交渉した。

はじめは渋っていた先生だが、村人が二十名以上集まり、お金が入るならやってもい

いと言ってもらえた。

「条件はわかりました。後日、結果を報告に来ますわ」

「うん、頼んだぞ」

病院を出て、城に帰る道中で考える。

人を集めたい。しかし仕事があり、城に住む自分には、村人たちに参加の旨を聞いて回る時間が充分にとれない。ならば他の人にお願ひしてみようか。例えばフォーム様やブン様といった子供たちに。一つの仕事につき、一回ずつお菓子を配るのだ。それならば仕事の報酬になるだろう。

場所は村長さんに話して広場を貸してもらおう。あそこならば場所代はタダだ。

参加費は、人数が多くなるほど下がっていくシステムでいこう。二十名なら一人あたり千デデン、四十名から五百デデンといった具合に。

その他の細かい部分はフォーム様に相談させてもらおう。

城に帰ったので、まず戦士たちの休憩室に向かう。

扉をノックして、出てきてくださったのはブレイドナイトだった。

「ごきげんよう、ブレイドナイトさん。お誘ひした晩御飯の件で、お伝えしたいことがあります」

「卿からから伺っています。日にちが決まったんですね」

「その通りですわ。一応、いくつか候補があります。どこがいいですか」

手帳に書いた日付を見せる。彼はそれを素早く確認した後、ある日を指差した。

「ではこの日に、お願いします」

「わかりました。印をつけておきますね」

今日から数えて数日後の日付だ。ならば明日にでも、もう一度アーニヤとランタンに会って、何を作るか決めなくてはならない。

忙しい、けれど楽しいと感じつつ、リーノはブレイドナイトと別れた。

ヤブイ先生の勉強会に関しては、フォーム様が乗り気になってくれた。

相談した案はほとんど採用されて良かった。他の細かい部分は夜にでも決めようということで、その場は解散になった。

その二日後。

陛下に突然買い出しを言い渡された私は、急いで村へ向かった。

途中、城の廊下でばったりとメタナイト卿に出会う。

「おはようございます、メタナイト卿」

「おはよう。村へ行くのか？」

「ええ、陛下の急な頼み事ですわ。メタナイト卿はどちらへ？」

「村へ、郵便局に行く」

そう言つて彼は、マントの下から一つの手紙を取り出した。

「でしたら、わたくしが持つて行きましょうか？郵便局に寄るぐらいの時間はあります」

「……そなたになら預けられる」

「？大事な手紙なのですか？」

「そうだ」

「でしたら、間違ひなく出さないといけませんね。心してかかりますわ」

リーノはメタナイト卿から手紙を、力を入れすぎて握りつぶさないようにしつつ、しっかりと受け取つた。

宛名を見るのは失礼だと思い、素早く買ひ物かごの中に入れる。

「それでは、行つてきます」

「気をつけて」

青い戦士の視線を背に感じつつ、リーノはエレベーターへ急いだ。

手紙を出し終えた日からさらに二日後、メタナイト卿とカービーが戦つたと聞かされ

た。

ヤブイ先生の勉強会は、成功した。

大樹がある村の広場では、四十名以上の村人が集まり賑わっている。私はヤブイ先生の腕を借りて、包帯を何度も巻く練習をしていた。

集中して学ばなければならぬ時間なのに、耳は周りの声を拾い上げてしまう。

「カービイかつこよかったわ。あんなに大きな魔獣を倒してしまうなんて」
「その前にメタナイト卿との戦いがあったんでしよう？見たかつた？」

私も、もう一度メタナイト卿が戦う姿を見たかつた。

蝶のように軽やかに舞い、鋭く剣を振るうあの雄姿を。

「リーノ、痛いんじゃない？」

「はっ！すみません、ヤブイ先生。すぐにほどこきますね」

よそ見をして、つい力み過ぎてしまった。すぐに先生の腕に巻いた包帯をとく。

よかつた、痣にはなっていないみたい。

「リーノも、昨日の戦いが気になるのか？」

「え？ええ……そうですわね」

「なら、フォーム様に聞いてみるといい。トツコリの情報によれば、最初から見ていたのはフォーム様とブンのようじゃからな」

「わかりました。お二方に聞いてみますわ。ご指導ありがとうございます。ヤブイ先生」

「うむ。リーノは丁寧に包帯が巻けておるからな、あとは素早く巻けるように練習すればええじやろう」

「次の目標にさせていただきますわ」

ヤブイ先生から離れてフォーム様を探す。広場を半周すると、隅の方で子供たちへのグループの中に見つけた。近寄って声をかける。

「フォーム様、何かお手伝いすることはございますか？」

「リーノ！よかった。ちょうど巻き方がわからなくなってたところなの。教えてくれる？」

「わたくしでよければ、承ります」

先ほど習得した包帯の巻き方を、ブン様の腕を借りて、やって見せる。時間をかけずに巻き終えた様子に、子供たちから驚きの声が上がった。

「まあ、上手ね！」

フォーム様が手を叩いて褒めてくださり。

「リーノさん上手。やっぱりメイドさんって凄いのね」

ハニーはメイドである私に憧れの眼差しを向けてくれる。

私は微笑んで言う。

「ヤブイ先生の教え方が素晴らしいからですわ。……ところで、昨日のお話について皆さん知っていますか？」

フォーム様とブン様が見合せて、クスリと笑われた。

「意外だなく。リーノも興味あるんだ？」

「そりゃあ、ございますとも。メタナイト卿の戦い方はとても鮮やかですから」

「彼の戦い方を見たことがあるの？」

「前に一度だけ……。フォーム様とブン様はあの方の戦いを見られたんですよね？ どうでしたか」

「強かったわ。凄く強かった」

「カービーが手も足も出せなかったもんな」

やはり、と頷く。能力をコピーしていない、ましてや戦い方をまだ習っていない赤子など、彼の相手ではないだろう。

それから話題はすっかりメタナイト卿とカービーの戦いの様子になった。

フォーム様とブン様がお話になられる度に、記憶の奥底から、前世の知識がぼんやりと浮かび上がってくる。

その知識を活かせる能力は、今の自分がない。あまりにも記憶が曖昧なせいもある。

だけど、それ以上に立ち向かう勇気がないのだ。その事を考え出すと、どうしても卑屈になってしまふ。頭を振って気持ち切り替える。できないことをうじうじ悩んでも仕方がない、できることを頑張るんだと。

何度も何度も、勉強会で習ったことを反復練習した。

次の日の夕方、デデデ城の地下室。調理場。

窓の外からは、あのワドルドゥ隊長とワドルデイたちが造られた地下の庭が見える。私とアーニヤとランタンが忙しく動き回って、料理を作っていた。

サラダに、スープ、メインのお肉と、きつと滅多に食べないだろう炊き立てご飯。それとデザートのアイス。

飲み物は戦士たちが用意してくれる。「アルコールは無しで」と、伝えているから飲み会にはならないだろう。

約束の時間になった。

私たちは木製のテーブルに、白いテーブルクロスをかける。そして料理を盛ったお皿を並べていく。これで気分は立食パーティだ。

用意が終わり、達成感を味わっていると三人が調理場に入ってきた。できあがった料理を見て感嘆の声を上げる。

「おお、これは……！」

「う、うまそうだ……!」

「ふむ」

メタナイト卿のちよつと気分が高揚している声を聞いて、私は心の中でガツツポーズを決めた。

ランタンがグラスを持ち上げる。

「冷めないうちにいただきましよう。全部おいしいわよ」

「ああーそうだな。いただこう」

三人が買ってきてくれた甘くないソーダを全員分のグラスに注ぐ。乾杯の音頭はメタナイト卿をお願いした。

「素晴らしい料理を用意してくれたリーノ、ランタン、アーニヤに感謝する。乾杯」

「乾杯」

ソーダを飲むと、舌の上で炭酸がはじけて躍った。いつでも買える特別じゃないソーダも、今だけはとつてもおいしく感じる。

メタナイト卿はまずサラダに手をつけた。サラダボウルから少量を取り出し、次に部下達にトングを渡す。二人もメタナイト卿に続いた。

三人は食前の挨拶を済ませると、一口食べた。シャクツと、野菜を噛む音が聞こえた。私たちはその姿を、固唾を飲み込んで見守る。

「真っ先に咀嚼し、飲み込んだブレイドナイトが興奮した様子で言った。

「うまい！特にサラダにかかっているソースがいい！酸味があつてまろやかで舌触りがいい！」

それを聞いたアーニヤが喜んだ。

「それは母に教えてもらった特製のサラダ用のソースなんです。お口に合つてよかったです」

「そうなのか？お母上は料理上手なのだな」

「はい。村で一番のサトさんには敵いませんけれど、とても上手なんですよ。褒めていただけで嬉しいです」

「ああ、うまい」

ブレイドナイトは一口ずつ、噛みしめるように食べる。そんなに喜んでもらえたら作ったかいがあるというものだ。

「私たちの分は分けていますから、そちらのボウル分は、すべて食べていただいて結構ですよ」

「わかった」

ソードナイトさんもメタナイト卿も「おいしい」と言つて、まずはサラダを平らげました。

あつというまに一品なくなってしまい、驚いた。でも食べてもらえた喜びの方が大きい。

ランタンはスープの入ったお鍋を指差した。

「メインの前にスープはいかが？ 私の自信作よ」

間髪入れずに、メタナイト卿は言う。

「もらおう」

「「ごちそうさまでした」」

ほとんどのお皿はからっぽになった。戦士たちは満足そうにお腹を擦り、私たちはハ
イタッチした。

「成功、ですわね」

「満足していただけたみたいで嬉しいです」

「ま、私たちの腕によりをかけた料理なら、この結果は当然よね」

ソードナイトとブレイドナイトは残ったお皿を見つめる。

「本当においしかった」

「また食べたいな」

ランタンは髪をかき上げながら言った。

「レシピ教えてあげるわよ。そうしたらいつでも食べられるわ」

「その申し出はありがたいのだが……」

「俺たちは料理そのものが苦手だな。うまく作れるかどうか……」

「今までやってこなかったからな」

哀愁漂うその姿に同情する。

私は彼らの過酷な旅に思いをはせた。ナイトメアともう一度戦うためハルバードを作る彼らは、自炊を楽しむ時間などないのだろう。

そんな事情を知らないアーニヤとランタンは、ただ城の仕事が忙しいのだと結論づけた。

「城の仕事って忙しそうよね」

「大王様はワガママで有名ですものね。……あの、また今日みたいな食事会を開きませんか？次はお三方にも手伝ってもらって、やりながら作り方を覚えるんです」

「それはいいですね、アーニヤ。そうしたら、わたくしたちの手間も減りますし、皆様は料理を覚えることができます」

「それは……」

二人の部下が見つめる先に青色の戦士がいる。彼は静かに佇んでいた。たつぷりと間を開けて告げる。

「構わないぞ。だが、そんなに多くの時間は割けない」

「でしたら、月一回の開催にしませんか？それならばお互いに負担にはならないでしょう」

「作りたい、食べたい料理があつたら互いに言うこと。案が出揃つたら、次は投票してその時作る料理を決めましょう。次回は何にしますか？」

途端に二人の戦士は真剣に考えだした。

まるで、真剣にお菓子を選ぶ子供と同じだ。

その姿に笑いをこらえられず、吹き出してしまった。

後片付けは皆で行う。

私とメタナイト卿が皿洗い。

アーニャとブレイドナイトが掃除。

ランタンとソードナイトが片付けだ。

少々賑やかになった室内で、私はあの話題を持ち出した。

「フーム様や村の皆から、決闘について聞きましたわ。お二人が無事でよかったです」

メタナイト卿は横目で私を窺う。

「私を酷いと思うか？」

非難されることを覚悟しているようだった。

私は頭を振る。非難などする気はない。

「いいえ。ですが、相手に対してでも自分にも厳しい方だと思いました」

「厳しい、か」

「カービーに必要だからなさったのでしよう？」

「そうだ。彼は強くならねばならない」

「……カービーは、戦いを避けることはできないんですね」

「無理だろう。彼は、戦う運命にある」

「そう、ですか」

それからは沈黙が続いた。

どう言葉を紡げばいいのかわからなかったし、何を言うのが正解なのかも分からなかった。

六人もいれば片付けなどあつという間に終わる。

「じゃあ、今日はこれでお終いですね」

「村まで送るか？」

すっかり仲が良くなったらしいブレイドナイトとアーニヤ。いつの間にか、ブレイドナイトの話し方が崩れていた。

アーニヤの方も気にしていないようだ。むしろフレンドリーに会話している。

「いいえ、結構です。今日はお城の地下に泊まるつもりで来ましたから」

「そうか」

「では、行くぞ。リーノ、ランタン、アーニヤ。世話になった。またよろしく頼む」

「はい。お粗末様でした」

ドアから出て行く戦士たちに、ランタンが手を振った。

「次もおいしいもの食べましょう」

最後に部屋に残ったソードナイトが手を振り返す。

「楽しみにしている」

そして、扉がバタンと閉められた。

三人の足音が遠ざかってから、アーニヤは机に突っ伏した。

「つ、疲れました。あんな量の料理を作ったのははじめてです」

「アーニヤに同じく。疲れた」

ランタンも椅子にぐったりと座っている。

私は仕事で慣れている分量だったけど、二人からしてみれば大変だったみたい。

「大変でしたけれど、大人数で食べるとやっぱり楽しいですよね?」

「そりゃあもちろんです」

「こんな日があってもいいわね」

なんだかんだ言って楽しかったようだ。

「次回も、楽しくなるといいな」

その言葉に、友人たちは笑みをこぼした。

一方その頃、戦士たち。

地下から自室へと戻る。その間、彼らを取り囲む空気はたいへん良かった。

ブレイドナイトが鼻歌でもしそうな調子で、切り出した。

「アーニャたちの食事は、どれも素晴らしかったですね。メタナイト卿」

「そうだな。おいしかった」

「野菜中心のメニューなのに、しっかり肉も食べられて嬉しかったです」

「ああいう家庭的な手料理は久しぶりでしたから、柄にもなくがつついてしまいました……」

「良いではないか。私たちが食べ終わった後の彼女たちを見ただろう？食べきった方が、作ってくれた者にとっては喜ばしいのだ」

メタナイト卿の言葉に二人は強く頷いた。主人の言う通りだった。

ソードナイトは、顎に手を当てて考える。

「次は何にしましょうか。俺たちでも作れる料理となると、難しい料理は無理です」
「……鍋はどうだ？あれならば材料を切るだけでいい」

「まずはそこから始めるといいかもしれないな」

「では、こちらの案は鍋で決まりですね」

「うむ。では、リーノに伝えておこう」

二人の部下はリーノの名前が出たことで、質問が頭の中に生じた。

元はと言えば、主人がリーノを誘ったゆえに、今回の食事会へ発展したのだ。

お互いに小突き合って、「切り出せ」と催促する。リーノとはどうだったのか？話はできたのか？質問はいくつもある。

その様子にメタナイト卿は気づいた。

「どうしたのだ？」

「え！えーと、その……」

「な、なんでもありません」

「？.そうか？」

結局切り出せないまま、自室に着いてしまった。

暗雲とデート

今日も快晴で、洗濯物がよく乾く。

城の中腹に設けられた洗濯場……大きなベランダには、たくさんのシーツやタオルが風に揺られて泳いでいた。

眩しく輝く太陽を見上げると、不自然な動きをする雷雲を見つけた。

その雷雲は渦を描いている。他の雲と違って風に逆らい、この城の上空へ動いている。そして数秒の間をあげて雷が落ち続けている。

私は怖くなった。辺りにいるワドルデイたちに叫ぶ。

「雷が近づいています！急いで城の中に隠れて！」

慌てて皆と一緒に、屋根の下へ移動する。一分も経たずに洗濯場は薄暗くなった。そして近くで雷が落ちる。

ドン、という大きな音と振動が響いて、私の心臓も跳ね上がった。

たった五分程、それでも長く感じた時間の中でじつとする。その間に洗濯場は元の明るさを取り戻し、雷は遠くへ行った。

おそるおそる空の下に出て、もう雷雲が近くにいないことを確認する。

いつもの青空が広がっていた。

「今のはなんだったのかしら？」

「リーノ！」

ワドルドゥ隊長だ。息を切らして走ってきた。

「急いで、どうかされたんですか？」

「陛下が堀に落ちたのだ」

「あらまあ。それじゃあズ濡れですね。すぐにお召し物を用意いたします。ワドル
ディたち、この場は任せましたよ」

「わにゃ！」

「それでは、ワドルドゥ隊長。失礼します」

「うむ。頼んだ」

陛下のお部屋に急行して、着替えを用意しておく。お風呂も沸かそうと、浴室へ入ろうとしたとき、部屋のドアが荒々しく開かれた。

こんな風にドアを開ける方は、この城に一人しかいない。

すぐに振り返って頭を下げた。

「お帰りなさいませ。陛下」

「着替えは!？」

「そちらにご用意しております。お風呂はいかがなさいますか?」

「できておるのか?」

「いいえ」

「ならいらんゾイ!」

陛下は肩を抱きながら衝立の向こうに消えた。濡れた服を脱ぎ捨てる音が聞こえる。

タオルを肌にしすりつける音、乾いた服を着る音もしている。何度もなくしゃみをされているから、後で温かい飲み物を出そう。

数分で陛下は衝立から出てきた。歯をカチカチ鳴らしたまま、どこかへ出かけようとする。

「陛下、どちらへ?」

「玉座の間ゾイ!」

「かしこまりました。……温かい飲み物をご用意いたしますね」

「ココアを用意せい」

「すぐにお持ちいたします」

陛下を見送った後、調理場に走った。

水を沸騰させる間に必要な物をカートに乗せる。

「これと、これも良し！出発」

できるだけ早く、カートを押して玉座の間へと向かった。

到着すると、陛下はカスタマーサービスと話しているところだった。

ううん、入りにくい。

カスタマーサービスといえはナイトメアの腹心、というイメージだ。ナイトメアの近くにいて、カービイを見張っている。

そんな敵側の男の前に立ちたくなどなかった。姿を見せるのも嫌だ。

そう思ってドアからこっそり覗いていると、陛下とぼつちり目が合った。

「何しとるか！さっさとココアを持ってくるゾイ！！」

「た、ただいまー！」

私は観念して玉座の間に入った。

部屋の中央には、転送システムが起動しているから通れない。迂回して、陛下の前にカートを止める。

そして陛下の好きな割合でココアとお湯を入れたら、良くかき混ぜる。カップをトレイに乗せたら、トレイを持ちあげて陛下のお傍に寄った。

「どっどっど」

「うむ」

『陛下、そちらのメイドは？』

「リーノゾイ。リーノ、あれはカスタマーサービスゾイ」

「お初にお目にかかります。わたくしはリーノと申します。カスタマーサービス様」

『これはこれは、ご丁寧にどうも。ご紹介の通り、カスタマーサービスと申します』

「ここは何も知らないメイドらしく、大人しくしていよう。」

営業スマイルで返すと、向こうも営業スマイルで返してきた。悪の会社とはいえ、接客業に携わるだけのことにはある。だが、値踏みする視線を隠せてはいない。

気持ち悪くて仕方がない。さっさと退散しよう。

「陛下、それではわたくしはこれで」

「うむ」

陛下から飲み干したカップを受け取り、カートを押してすぐに玉座の間を出た。

『陛下、彼女は魔獣に興味があるでしょうか？』

「リーノが？ ないないないゾイ。大体あいつにそんな大金を払っておらん」

『それは残念。新規のお客様が増えると思っただけですが……ホホホホホ』

二日後。

城の廊下で、メタナイト卿に会えたので一昨日のことを話した。

カスターマーサービスと会ったけれど大した話をしていない。それでも充分に気をつけるようにと、言われる。

「わかりました。気を引き締めますわ。というか、もう会いたくないのですけれど……」
「君はいつ陛下に呼ばれるかわからない。それは、いつカスターマーサービスと会うかわからないという事だ」

「そうですね。少し憂鬱ですわ」

「……この村の景色は、美しい。夜空でも見れば気分転換にもなるだろう」

その言葉を聞いて、ある欲望が沸き上がった。

彼からアプローチがあつたから生まれたものだ。この手のものは一人じゃ育まれな
いし、消えたりしない。

賭けに出る。

私は困った風に首を傾げた。

「でも、夜遅くに一人では出歩けませんわ」

「……私となら、どうだ？」

賭けに勝った。

内心の喜びを抑えて、私は言う。

「ご迷惑にならないければ、お願いしてもよろしいですか？」

「かまわない」

「では、今日の夜にでも……」

「ああ。そなたの部屋の前で会おう」

青い戦士はマントを翻し、去って行った。

私もその場から離れる。角を曲がったところで、口元を抑えてふふふと笑った。

彼と、いわゆるデートができるのは嬉しい。

だが、そもそもメタナイト卿を好きかと問われると、わからなかった。まだ微妙な気持ちだ。

それでも彼といるとドキドキするし、こうしてわくわくするぐらいその時間が楽しみだ。

その日は少々浮かれながら、一日を過ごした。

掃除の途中で出くわしたフォーム様とブン様にからかわれたほどだ。そんなに顔がにやけているのか。それは少し恥ずかしいと思う。手の平で頬を包み込むと、少し熱い気がした。

パタパタと右手ではたきを持ち、高い所の埃を払いつつ。もう左手でパタパタと仰

ぐ。

頬を撫でる風が気持ちいい。

夕方。時計が五時を過ぎたあたりで、私の仕事は終える。

今日一緒に働いたワドルデイたちと別れの挨拶をして、仕事道具を片付ける。それから帰宅して早めにお風呂の支度をする。湯船にお湯をためている間に夕ご飯だ。サツとお腹に入れてしまいたいので、カップラーメンと今日の朝に作り置きしておいたおにぎりで決まり。

おにぎりは前世からの好物だ。色んな具の組み合わせを楽しめるところや、お米の甘さが好きでたまらなかった。特に甘辛く煮たお肉系の具が好きだったりする。サケや昆布もおいしい。その両方を混ぜてもおいしい！

そういうえばメタナイト卿たちは、おにぎりも好きなんだろうか？今夜のお礼に渡してみようかな。

そうと決まれば早速行動に移そう。

お風呂に入る前に炊飯器のセットをしておく。髪を乾かす時間が必要なので、お風呂の時間を早めに切り上げる。湯船にかかるのは五分だけだ。それでも気持ちよくて、体の筋肉が弛緩するのがわかる。気持ちがいい。

お風呂から出たら、全身ケアを忘れない。いつだって柔らかい艶肌を目指すのだ。

髪を乾かしている最中に炊飯器の音が鳴る。ご飯が炊けた音だ。私は髪を軽く、だくだ丁寧にまとめ上げて、手にはビニール手袋をつける。炊飯器の蓋を開けた。熱そうな湯気がむわつと沸き天井に上る。

そこに細かく切ったお肉の甘辛煮と、バリバリと細かく砕いた乾燥ワカメを入れる。しやもじでしつかり混ぜたら、手に取って三角おにぎりの形に握る。とても熱いが、ここは我慢あるのみ。プロの、お店のおにぎりなら握るんじやなくて「形にする」だけだろう。でも私にはそれは難しい。だからしつかり握らせてもらう。

おにぎりができたらラップに包む。それを合計六個作った。

「二人二個で足りるわよね？」

まあ足りなければ、勝手におかずを作って補うだろう。

六個のおにぎりをテーブルの上に置く。それらを包むための風呂敷、紙袋を隣に用意しておく。これでお土産の準備はできた。

加えて、紅茶の準備でもしておこうか。もしかしたら飲み物が欲しくなるかもしれない。い。

そうして自分自身の準備を終えれば、あとはメタナイト卿を待つだけである。

九時に扉がノックされた。

「はーい。どなたでしょう」

「メタナイトだ」

「今参りますわ」

ラフなワンピースの上に薄手のケープを羽織り、軽く鏡でチェックしてから扉を開ける。青い戦士が立っていた。

「準備はいいか？」

「はい。いつでも行けますわ」

「では行こう」

扉のすぐ隣に置いておいた籠を手にとり、城の廊下に出た。

鍵をかけて、取っ手を数度回す。取っ手はガチャという音を立てて回りきらなかった。

うん、間違いなくかけたわね。

ようやくメタナイト卿の隣に並んで、二人は歩き出す。

「どちらに向かいますの？」

「城のバルコニーだ。あそこなら夜空がよく見える。そしてそなたの好きな村も見渡せる」

「そうですわね」

村が一望できるバルコニーは、城には一つしかない。そこは私の部屋から近い場所に
あった。

バルコニーに到着するまでの間、今日はどんな仕事をしたのか、彼に聞いた。

「秘密だ」

「そうですか」

それ以上聞けなかった。多分ハルバード関係なのだろう。ハルバードがお披露目さ
れるということは物語の終盤を意味する。想像すると怖くなった。

だって大好きな村が焼かれるから。動揺するなという方が無理ですわ。

「どうした？ 顔色が悪そうだが」

「いえ、悪夢を思い出してしまっただけですわ。すぐに落ち着きますから、大丈夫です」
「ならばいいが……」

バルコニーに入るとそこには誰もいなかった。よかった。今日のお客は私たちだけ
のようだ。

「よろしければ、座ってお話しませんか？」

「服が汚れてしまうぞ」

「ご心配なく」

私は籠の中からビニールシートを取り出して、床に広げた。

「ふっ、用意周到だな」

「紅茶もございますわ。どうぞお召し上がりください」

それから私たちはシートに座り、美しい夜空を見上げた。この国の夜空はいつだって輝いている。まるで宝石箱を開けて見ているようだ。

夜風の冷たさが心地いい。さらに紅茶の香りと暖かさが、この瞬間を彩っていた。

「そなたの淹れてくれた紅茶はおいしいな」

「まあ嬉しい。今日は茶葉を使ってみました。淹れ方はメーム様から習ったんですよ」

「大臣一家とは昔から仲が良かったな」

「はい。陛下のお城ができる前から、お世話になっておりました」

「両親は、いなかったな」

「ええ。もうずいぶん昔のことですから、顔も思い出せませんけれど。二人とも優しく、大好きでした」

「そなたは、家族を持ちたいか？」

この方の質問は、時々心臓に悪い。

どんな意味を持って聞かれているのか、考える。けれど、それを抜きにして正直に答えた。

「いつかは持ちたいと思います。けれど今は、まだ結婚は考えられませんわ」
「なぜだ？」

「だって、まだ誰かと付き合ってすらいないんですもの。仕事だって辞めたくありません」

「そうか。そなたらしいな」

「メタナイト卿はどうなんですか？」

「私はやるべき事がある。それが終わらない限り、自身の幸せを望むことはない」

「それは、時間がかかりそうですね」

「とは言ったものの、私が元いた世界で約二年、アニメでも同じ時期に季節の行事をしていたから、おそらくこの世界でもあと二年ほど。時がたてばナイトメアは倒される。星空を見ながら、しみじみ考えた。」

二年、その間私はどう変わっているだろう。隣にいる彼とは、どんな関係になっ
ていだろうか。今より近いだろうか。それとも離れてしまっているだろうか。

ふと、隣を見ると同じように私を見ている視線と合った。
恥ずかしくなって顔を伏せてしまう。

「どうした？」

「い、いえ。なんでもありませんわ」

「その割には、顔が赤いようだな」

「!?」

頬に手を当てる。確かに顔が熱かった。ああ、恥ずかしい。

「熱ではありませんので、ご心配なく……」

「体調不良ではなければ、いいのだが」

彼の声が微笑んでいるように聞こえたのは、気のせいではないだろう。

それからは、カービーについて話した。主に私が話して、メタナイト卿が聞く側だった。大臣一家、ロロロとラララ、村の住人から聞いたカービーの様子を中心に話す。

カービーはいつも楽しそうに、毎日を過ごしていた。

日中は子供たちと遊び、夜は大人たちの世話になりつつ食事をとる。いつか見たカービーの生活そのものだ。そういうえば、カービーの生活を知った陛下が腹を立てて、突撃！隣の晩御飯みたいなテレビ番組を作っていた気がする。あれ迷惑だから、回避したいな。

……いや、もう回避できているかも。一応、毎日毎食違う料理を出しているし。毎回満足そうに食べられている。多分あの回おこらないでしょう。

寒さが増してきたころ、持って来た懐中時計を見た。メタナイト卿と会ってから三分ほど経っている。気分は充分に上向きだ。目的は果たしたと言える。けれど、もう少し

し彼と話していたかった。

だが、そももいかない。

急に鼻がムズムズしてくしゃみをしてしまった。メタナイト卿はそれを見て、立ち上がる。

「そろそろ戻ろう。夏の夜風でもあたり続ければ風邪をひくぞ」

「あなたの言う通りですね。大人しく帰ります」

水筒やシートを片付けて、来た道を戻る。

話題がつきた私たちの間には、足音だけが響いていた。彼と隣り合って歩く間、気分は踊るように軽やかだった。もうナイトメア社やカスタマーサービスの影はない。

私の部屋の前に辿り着いた。

「では、また明日」

颯爽と踵を返す戦士を引き留める。

「メタナイト卿、五分だけお時間をいただけませんか？」

「かまわないが……どうしたんだ？」

「お土産がありますの」

鍵を開けて、扉をくぐり部屋の中に入る。テーブルの上にはすっかり冷めたおにぎりが六つあった。それらを手早く風呂敷で包み、紙袋の中に入れる。

紙袋を持って、再びドアをくぐった。

「こちらをどうぞ」

「……いいの？」

「はい。三人で召し上がってください。風呂敷は後日返してくださいね」

「わかった。いつもありがとう」

「どういたしまして」

「おやすみ。リーノ」

「おやすみなさい。メタナイト卿」

私たちは挨拶を済ませて、その日の夜は別れた。

胸が優しく鳴っている。今日は心地よく眠れそうだ。

次の日、メタナイト卿は午前中に風呂敷を持って来た。

「美味しかった。肉の甘辛さが特によかった」

「ありがとうございます。具体的に褒めていただけると嬉しいですわ」

「また、作ってもらえないか？」

「いつもは無理ですけど、たまにでしたらいいですよ」

「それでいい。そなたの料理が食べたいからな」

「そう、ですか」

そんな素直になられては、困ってしまう。どんな返事をすればいいのかわからなくなるからだ。

私はただ、顔を赤くして俯いた。

ゴルフクラブ場とテレビ

数日後。カスタマーサービスと顔を合わせることなく平穏な日々を享受していた。魔獣もデリバリーされず、良い感じだったのに。陛下がウイスピーウツズの森を伐採してしまい、そこにゴルフ場を建ててしまったのだ。

結果はもちろん。陛下の目論見は失敗する。

カービィが吐き出したリングゴが特別な物だったらしく、ウイスピーウツズが復活した。復活した森の王はすぐさま木々を蘇らせて、森を再生させる。

草原だった場所は、元通りの深い森になった。

陛下と閣下は一日ほど森を彷徨い、帰ってきた。

五体満足で帰してくれてありがとう。ウイスピーウツズ。

帰ってきたその日は、温かく消化にいいお粥を出して差し上げた。

陛下の悪だくみは尽きることがない。

玉座の間で温かい紅茶を飲み干して、カップを高く掲げる。

「次はテレビゾイ!!!」

「テレビ、でございますか」

テレビとは、なんとも懐かしい響き。前世で視聴した以来だ。娯楽の少ないこの村でならすぐに流行するだろう。

「あん？リーノはテレビを知っているでゲスか？この村を出たことがないのに？」

「旅人から話を聞いたところがあります。家にいながら、遠くの景色を見ることができるとか、便利な物だとか」

「その通り。しかし、我が国が国民に配るテレビの凄さはそれだけじゃないでゲス！」

「と、仰いますと？」

「双方向テレビゾイ！」

「双方向、つまり村人に配るテレビは、視聴者を映すカメラの役割も担っているんですね」

「あくまでも顧客のニーズに迅速に対応するためでゲス」

「その事は、村人たちに知らせなくていいんですか？」

「知る必要はないゾイ」

「かしこまりました。わたくしも口を慎みますわ」

私は深くお辞儀をした。

陛下は目をかっと開いて、指を差した。

「閃いた！お前もテレビに出るゾイ！」

「お断りします」

「なんでゲスカ！」

「わたくしには裏方の仕事がありますから」

「そういうのは後回しにしていから！出るでゲスよ!!」

「嫌です。たいへん、嫌です」

「口答えしない！リーノが出れば男性視聴者はゲット！視聴率アップ！」

リーノはぎよっとした。

自分が男性に（密かに）人気があるらしい、とは聞いている。しかしその事が陛下や閣下も知っているほど、有名な話だとは思わなかった。

「とにかく！お前には料理番組を任せるゾイ！せいせい気張るがいい。ヌハハハハ！」

「そ、そんな……」

「断れば給料を下げる！」

「うぐ……やらせていただきます」

「……という、訳なの。どうか力を貸してくれない？」

村、アーニヤの家いつもの三人で集まる。

私から話を聞いたアーニヤとランタンは眉を寄せて悩み始めた。

テレビ放送のことは、まだ詳細を話せないから秘密にしておく。いつもの「大王様の無茶振りで」と二人には説明し、「村人たちに料理を披露するのだ」と言った。

「いつも、いつも大変ですね。リーノ、同情します」

「いいのよ、アーニヤ。慣れているから、そんなに大変ではないの。たまにボーナスも出るし」

「それにしても、断ったら給料減額はないわよ。まったく、あの大王ったら」

「その点についてはもつとやってやってください。ランタン」

愚痴もそこそこに、話題は「どうやってお披露目を成功させるのか」に移る。

「はじめにお披露目するんですから、簡単な料理をチョイスしてはいいかがでしょう」

「簡単な料理というか、調理方法が簡単でなおかつ材料が揃いやすいもの、かしらね」

「プリンとかでしょうか？」

「いいですね！材料も揃えやすく、調理方法も簡単です」

「案は一つだけじゃなくて、もう少しいるわよね。他だと何がいいのかしら。カレーとか？」

「それならシチューもいいですね」

出されたアイディアをメモ帳にまとめあげる。

さらに三つほど料理の案が出されたところで、リーノは閃く！

「あの、私たちが作っているアクセサリーを身につけて、皆の前に出るのはどうかしら」
リーノたちは小物のアクセサリーと雑貨を作っていた。三人が友達になった頃から、ずっと作り続けている。はじめは子供が作った幼い物から、現在の大人向けに至るまで。

それらはランタンが勤める雑貨屋の片隅に販売されている。売り上げは上々で、黒字だ。

いつかは、子供の頃に夢を見たように、三人のお店を持ち作った物を買りたいと考えている。

そのためにはお金が必要だ。もっと売れなくてはならない。

「そうすれば、たくさんの人の目にとまって、アクセサリーの売れ行きが良くなると思うの」

ランタンは興奮して大声を上げた。

「それよー！ ナイスアイディアよ、リーノ！ いい宣伝になるわ」

反対にアーニャは静かに考える。

「そうと決まれば、急いでメイド服に合うシンプルなアクセサリーを見繕いましょう」
「リーノ、あんたのメイド服を一枚借りられない？それに合わせてアクセサリーを作っちゃおうわ」

「でしたら、古い物が一着あるから、それを持ってくるわ。私はお披露目にかかりつきりになるから、他の事は任せるわね」

「了解、任されたわ」

「万全の準備をして当日を迎えましょうね」

揃って固く頷き合う。

リーノはアーニヤとランタンに見送られて、城に戻った。

すぐに玉座の間に赴き、デデデ陛下とエスカルゴン閣下に話を通した。料理番組のアシスタントとスタイリストにアーニヤとランタンを雇いたいと伝える。

陛下は「ワドルディたちで充分だわい！」と仰られたが、二人のセンスの良さを知る閣下は私を後押ししてくださった。おかげで陛下の了承が得られ、無事に二人も番組に参加できる。

ププブレッヅ初のテレビはお昼に始まった。

料理番組は夕方以降の枠だ。それでも準備は念入りに、数時間前から用意する。

たった数日の準備とは言え、やれるだけのことはやった。後は楽しんで乗り切ろう。十秒前、につこりと笑みを作る。視界の端でアーニヤとランタンが手を振って応援してくれている。手を軽く振って応えた。

五秒前、しっかりと背筋を伸ばして正面のカメラを見る。

そして映像が切り替わった。

『こんにちは、テレビの前にいる皆様。リーノです。今日はいつもお城で、陛下にお出ししているプリンの作り方をご紹介いたしますわ』

「なんてこと！まさかリーノまでデデデに協力しているなんて!!」

「彼女も陛下の部下だ。命令されては、従わざるを得ない」

「確かにそうだけど……」

「なあ、ソード。アーニヤとランタンも出るのかな」

「どうだろうな。このまま見ていればわかるだろう」

「あなたたちね……」

『「ここで、臨時ニュースでゲス』

リーノと幼馴染の三人は、モニターを二度見した。

魔獣が村近くの森に現れたのである。三人は顔を見合わせた。互いに村の安否を気にしているようだった。

リーノはぐつと手に力を入れた。

この目で魔獣を確かめたい、そう思った。

村を脅かす存在でもあり、数日かけて取り掛かった番組の邪魔者である魔獣を、この眼で一目見ておきたかった。カービィに倒される前に。

椅子が音をたてる。

「少し席を外します！番組が繋がったら、わたくしがつけているイヤリングの紹介をしてください！」

そして部屋の外に向かって走り出した。

その後ろ姿へ、慌ててランタンが声をかける。

「リーノどこへ行くの!？」

「村が一望できるバルコニーです。そこで魔獣を確認してきます！」

「見てどうすんのよ！リーノ!!」

なにもできない。それでも、意味がなくても、相手を睨みつけてやりたい。

リーノは悔しさを力に変えて、一生懸命に走った。

目的地のバルコニーに着くころには、額に薄っすらと汗が滲んでいた。もう夜のとばりが降りてきている。目を凝らして魔獣を見つけようと、森を睨んだ。でも何も見えない。

村周辺には一切、異変を感じられなかった。念のため遠くまで眺めるが、どこにも異常はなかった。

いつもの平和な村だ。魔獣はどこに行ったのだろう。

ここで、記憶が一部蘇った。

デデデ大王が村人たちにテレビを配る回。最後には嘘がバレてしまうストーリー。「嘘、嘘なんだわ。全部カービィを追い出すためのでっちあげ!!」

気づいたリーノは再び走り出す。アーニヤとランタンがいる放送室に戻った。戻った時には息切れしていて、上手く言葉が紡げない。

駆け寄ってきた二人の腕を掴み、必死に伝える。

「二人、とも。ニュースは嘘よ!今すぐここから逃げなきゃ……」

そのとき、三人は槍を持ったワドルディたちに囲まれてしまった。

「!!」

「な、なんですか一体……」

「あ、あんたたち!二人に近づいたら許さないわよ!!」

「待って、落ち着いて二人とも。……あの、私たちはどうすればいいですか？」

ワドルデイたちは槍を下げて、歩き出した。そして部屋の外の扉を開けてくれる。

「に、逃げてもいいんでしょうか？」

「いいえ。彼らは私たちについてきて欲しいのよ」

「行くしかないみたいね」

私たちは互いの手を取り合って、ワドルデイたちの後ろをついて行った。

地下深く階段を降りる。そこには嚴重に守られた、放送室があった。中に入ると、村を襲っていた魔獣の着ぐるみを着た閣下に、陛下がいらつしやった。奥には村を忠実に再現したおもちゃのセットがあった。

私たちに気づいた陛下は怪訝そうなお顔になった。

「一体何事ゾイ」

その言葉を聞いた一体のワドルデイが、私たちから離れて、ワドルドウ隊長の下に駆け寄る。

「ふむふむ……なるほど。陛下！ ニュースの嘘がバレたのでこちらに連れてきた、との

ことです！」

「なぬ!? バレただとー！」

「一体なぜ!？」

「外に出て、村を見れば一目瞭然です。陛下、閣下!このような信用を失う嘘は、お止めください!」

「信用ならもう失っているような……」

「しっ!!」

「だまらっしゃい!」

「かくなる上は、ニュースが終わるまでお前たちは、ここに軟禁ゾイ!」

「向こうでみんなのご飯でも作るでゲスよ!!」

放送室の隣の部屋、いつの間に造られたのか、そこには調理室があった。

そこに押し込められ、外から鍵を締められる。

鎖に繋がれこそしなかったが、外部との連絡は遮断されてしまった。

私は二人に頭を下げる。

「アーニヤ、ランタン。ごめんなさい!私もう少し慎重に行動していれば、こんなことにはならなかったわ」

「そうかもしれない。でも、いいのよ。リーノは、私たちを危険な場所から、一刻も早く逃がしたかったですよ?」

「私も、ランタンも。わかっていますから、大丈夫ですよ。あんまり気にしないでください」

「い」

「うん、うん。三人無事でよかった」

「その通りね。さて、ここにいる間は暇だし。言う通りにするのも癪に障るけれど、ご飯でも作りましょうか」

「片手間に食べられる物がいいですよ。となると、サンドウィッチでしようか?」

「うーん、パンの数が少ないわ。かと言って、おにぎりを作るにはお米の量が足りない……」

「じゃあ、両方作りましょう」

「ラントン、いい考えですね!」

「ふふん。でしよう? さあ、手を洗って取り掛かりましょう!」

「ええ!」

「はい!」

おにぎりやサンドウィッチを半分ほど作ったところで、扉の向こうから騒ぎが聞こえてきた。

「何でしよう?」

「魔獣を倒すシーンでも撮っているのかしら」

「それにしても陛下の叫び声も聞こえるような……」

三人は手を止めて、静かに喧騒が収まるのを待った。やがて騒ぎは収まり、時計の針の音が大きく聞こえてくる。

体感では五分、実際には一、二分程度の時間が経ち。鍵が開かれて、扉はゆっくり開いた。

自然と誰かの喉が鳴った。

「……無事か？」

「メタナイト卿！助けに来てくれたんですか？」

「騒ぎを聞きつけて、駆けつけた。さあ、出るといい」

促されて、全員外に出る。

辺りは嵐が過ぎ去ったかのようにめちやくちやだった。柵が倒れて、床に物が散乱し。おもちゃの村もぐちやと潰されて壊れてしまっている。

陛下と閣下が指揮をとって、ワドルデイたちを動かして掃除させている。

「部屋の中で竜巻でも起きたんでしょうか」

「そうとも言える」

「皆様、無事でしょうか」

「大事な。全員軽傷だ」

「よかったです。では、私たちはこれで、帰りましょうか」

「大王に一言文句言ってやりたいけれど、今は寝たくてしようがないわ」

四人は出口に向かって歩きはじめる。

リーノは近くで掃除していたワドルデイに、調理室に夜食を置いてあることを伝えて、放送室を出た。

それから五日間は、陛下と閣下の食事を、超健康的な質素な食事に変えておいた。「濃い味のものが食べたい！」と仰られたが、「健康に長生きしていただくためです」と頑なに譲らなかった。

このくらいのお返しはさせてもらいますよ！

巨鳥と古代文明

ダイナブレイドを見たのは、青空高く舞い上がった後の、米粒ほどの小さな影だった。村に嵐を巻き起こした張本人はカービィを追っているらしい。そのカービィが村に逃げて来てしまったので、ダイナブレイドが村までやってきた。おかげで村の建物のいくつかは吹き飛ばされてしまった。

私も空へ飛ばされそうになったが、メタナイト卿が体を支えてくれた為、なんとか地面とくっついている。

ダイナブレイドが去っていった後、ようやく私たちは話ができた。

「怪我はないな？」

「はい。ありがとうございます。メタナイト卿」

「無事でなによりだ」

バサリとマントを体に巻きつける。そんな何気ない仕草までカツコイイなんて、反則のように思えた。

彼はカービィがワープスターに乗って海の方へ行くのを見届けてから、お城の方に戻って行った。

村の修復作業を手伝っているときに、トッコリから事件の経緯を聞いた。

彼によると。ダイナブレイドがカービィを追いかけていたのは、またまた陛下たちの
仕業らしい。

村にまで被害を出すような悪巧みは、腹がたつた。だから今夜も食事を質素なものに
変更する。

その日の夕飯は具入りのお粥にした。

夜中にお腹が減らないように、考えた末だ。

夕飯を見た陛下は「またか」と言わんばかりに声を上げた。

「またお粥かゾイ?! 今度は何に怒っているゾイ!!!」

「村に被害が出るような悪巧みをされました」

「だからって連続でお粥を出されたら、飽きるし栄養が足りなくなるゾイ! ハンバーグ
が食べたいゾイ!!!」

「明日はそうめんです。栄養に関しては問題ありません。材料はすべて煮て溶かしこん
でいますから」

「質素ゾイ!!! 手間がかかったカレーみたいだゾイ!」

「はあ、お前を怒らせたらこうなるから嫌でゲス……。おつ、このお粥けっこうイケるな

「こりゃ」

「なんだと?……もぐもぐ。……んまあい!おかわり!!」

「ただいま」

鬼になりきれないあたり、私は陛下たちに甘いと思う。

「あ、そうだ。陛下、家が壊れてしまった村人たちを、お城に案内しておきましたので」

「なに!?誰がそんな許可を出した!?!」

「わたくしが勝手に案内しました。だって、元はと言えば、陛下たちのせいで彼らの家は壊れたんですよ?そのくらいは当然かと」

「ぐぬぬ……勝手に決めるなゾイ!!」

「次回は許可をとります」

「次回なんてないゾイ!!!」

それから村は修復作業に大忙しだ。私も時間を見つけては、フォーム様やブン様たちに混じりお手伝いをさせていただいた。幸いなことに、村人たちの家はすぐに建設された。

城に泊まっていた村人たちは、荷物をまとめて村に帰っていく。

その内の子供の一人が、私に言った。

「お城のベッド、おうちのベッドよりふかふかで気持ちよかったわ。私、お城に住みた

「い

「では、たくさん勉強してください。それから、たくさんお母様のお手伝いを、家事をなさってください。それができなければメイドの仕事は務まりませんよ」

「リーノさんのベッドもふかふかしてるの？」

「はい。していますよ」

「じゃあ、私もいつか、お城のメイドさんになる！お勉強もお手伝いも、たくさん頑張るわー！」

「わかりました。あなたがいつか、このデデデ城に相応しい方になったら。わたくしの方から陛下に推薦いたします。頑張ってくださいね」

「ありがとう。リーノさん」

私たちは手を振り合って別れた。

彼女が大きくなって、いつか本当にメイドをついでくれたら、嬉しい。

そうしたら私はお役御免になっちゃうかもしれない。けれど、陛下たちのお世話をする若い人がいてくれる事は心強い。

できれば、すぐにでも後輩が入ってくれたらいいのに。後輩がいてくれたら、少しは私の仕事に余裕ができるから、結婚も考えられるようになるはず。

そうしたら、もつとあの人とお近づきになりたいわ。

物思いにふけながら、私は城の廊下を歩いた。

それから一週間と数日、お城は大忙しだった。陛下の即位記念式典の準備で、目が回るほど体と頭を動かす。

いつものものんびりとした時間はどこへやら。毎日毎日、夕方には帰れたのに、最近はずっとつづり夜がふけるまで帰れない。

私は、招待する村人たちの分の料理について考えている。

「豪華でみんなが味わったことのない料理か……。だったら、ビーフシチューとか、手間がかかる料理をだそう。小難しい料理よりも、こつちの方が親しみがあるわ。それに攻城の食材を使えばとっても美味しいものができるはず。うん、それなら」みんなが味わったことのない”仕上がりになるはずよ”

毎日式典のメニューを作ってはカービィに食べてもらおう。同じメニューばかり食べさせてしまい、彼には悪いと思う。当の本人は楽しそうに食べてくれるので、それは救いだった。

この期間、まともにメタナイト卿に会えていなかった。用がないし、なにより忙しいから仕方がない。陛下の魔獣遊びだって、今は大人しい。おかげで、彼に伝えに行くこ

とも、彼が私の方に来ることもない。

「一目会えたら、こんな疲れなんて吹っ飛ぶ……気がしますわ」

「ぼーよう？」

「なんでもありませんわ。カービー」

止まっていた手を動かすと、持っていたお玉が動きだし、ビーフシチューがゆつくり回った。

式典当日。

まだ暗い早朝から身支度を整える。そして日が登りだした頃に、お城の調理室に向かって、すでに準備しているワドルデイたちと共に食事を作る。それから陛下のお部屋へ伺う。

まず、陛下は歯を磨いたら、お食事をお部屋で食べてもらう。今日は渾身の出来の、タマゴサンドイッチである。

それを食べたら、次はお風呂へ。ここからはワドルデイたちのみ、陛下のお手伝いをする。私はその間ちよつとだけ暇である。服など用意し終えた後は、特に暇。

お風呂から上られた陛下には、普段と同じガウンに、特別な王冠、特別な日にしか身につけない数々の飾りを身につけていただく。

鏡でお姿をチェックしていただき、合格がもらえれば、お部屋から出発だ。

長い廊下を歩き、いくつかの階段を下った先。そこに会場となるバルコニーがある。

それが見えてきた所で、私は立ち止まった。

「それでは、デデデ陛下。いつてらっしやいませ」

「うむ。行ってくるゾイ」

フアンファアールが鳴り響く。

陛下は堂々と、優雅に歩いて国民の前に出た。マイクを通して長々とスピーチする。

ここからでは、はつきりと聞こえない。だが、疲れ切った私はちゃんと聞く気持ちになかった。

ようやく一息つける。

陛下が離れてから、大きな息を吐いた。激務から解放される喜びだった。

今日を乗り越えられれば、明日はお休み。何をしようか、何もしないでおうか。頭の中をそればかりだ。

あくびをしつつ、ぼんやり陛下を待っていると、突然怒鳴り声が耳を通過した。

『ぬぬぬ〜ワシはこのププランドの、由緒正しき王様じゃゾ〜イ!!!』

眠気がすっかり覚めてしまった。驚いてバルコニー側を見ると、すでに陛下がこちらにお戻りになっている。

「ずんずんと荒々しく足を運ぶ姿は、まさしく怒りを表していた。」

「陛下。お早いお戻りですね。何かございましたか?」

「あいつらには、ワシを祝う気持ちが無かった!だから今日はお終い!!解散ゾイ!!!」

「お終い?解散ですか。えっ、では式典の後のお食事パーティーは……」

「なしなしなしなしなしゾーイ!!!まったくもう」

「そ、そんな」

今までの苦勞が水の泡となり、消えてしまった。その事実が受け入れられず、立ち止まってしまふ。

陛下はお一人で先に行かれてしまった。

風に吹かれて消えてしまいそうな私に、声をかけてくださったのはパーム大臣一家だ。

「リーノ、あまり気を落とさずに」

「パーム様……お氣遣いありがとうございます。あの、一体何があつたのでしょうか?」

「デデデの奴が、村のみんなに怒つたのよ!今日来てくれた人たちは全員、リーノが作つたご飯が目当てだったの」

「陛下は、誰も自分を祝う気がない事に腹を立てたの。それで式典はお開き、この後の食事会もなくなった……という訳よ」

「なるほど……。陛下らしいご判断ですね」

「そんなに落ち込むなよ。ご飯なら、俺たちが食べるからさ」

「はい、ブン様。お部屋を整えてから、お昼にしましょう。その時は皆様をお呼びします」

「我らは遠慮しよう」

大臣一家の後ろから現れたメタナイト卿。そして部下のソードナイトとブレイドナイトだ。

彼を眩しく感じるの、背後から光が差し込んでいるからだ、そう思う事にした。

フォーム様が一步前に進み出る。

「あら、どうして？せっかくリーノが、腕によりをかけて作ってくれたのよ」

「急ぎの用事がある。とっておきの食事は、いつかいたたくとしよう」

「……メタナイト卿には、いつもお世話になっております。あなたの為なら、張り切って調理いたしますわ」

「感謝する。では」

メタナイト卿は部下を連れて、廊下の奥を進んだ。

その背中を名残惜しく眺める。もう少し話したかったけれど、互いに仕事があるならばゆっくりはできないか。

そつとため息をつく。

俯いた時に、ブン様と目が合った。なにやら笑みを浮かべている。

「残念だったね。メタナイト卿も一緒にやなくて」

「?そうですわね」

「……あーもう!リーノをからかってもつままない!」

「え、あの、申し訳ありません」

「ブンやめなさい!リーノも、謝らなくていいのよ」

「かしこまりました」

大臣一家は、ひとまず一家のお部屋に戻る。私は陛下たちがいつもお使いになる食堂へ向かった。

ワドルドウ隊長から数人のワドルデイを借りて、食事を整えた。次は調理室へ行つて食事を温め直す。サラダなども一人用に盛り付け直していると、時間は昼前になった。ちようどいい時間だ。みんなに席についてもらおう。

ワドルデイの一人を、大臣一家の方へ使いにやる。私は、残りの調理をワドルデイたちに任せて、陛下と閣下のもとへ向かった。

ーデデデ大王の部屋。

大層な両扉の、片側にノックする。

「陛下、リーノです。入ってもよろしいでしょうか？」

「入ってもいいでゲスよ」

こんなふうには、陛下の代わりにエスカルゴン閣下が返事をすることは、珍しくない。私は「失礼します」と言ってから中に入った。

エスカルゴン閣下の姿はすぐに見つけたが、肝心の陛下が見えない。どこだろう？

「閣下、陛下は何処に？」

「ん」

指差す方向には、人一人分よりも大きめに膨らんだベッドがあった。

まさか……。

「ふて寝、していらつしやるのですか？」

「そうみたいでゲス」

「よほど腹が立ったんですね」

「本当に、こういうときは子供でゲス」

「うるさいゾイ！全部聞こえているゾイ！」

「ああ、起きていらつしやいましたか。陛下、昼食のご用意ができました」

「すぐに行くゾイ」

ベッドからのそりと起き上がり、鏡の前で軽くチェックしてから部屋の外へ出た。私たちはその後が続く。

皆様に食べていただいた昼食は、かなりの高評価を得た。

陛下と閣下は満腹になるまで、何度もおかわりをしてくれた。

大臣一家も、おいしいと顔を綻ばせて箸を進めた。普段はおかわりしないメーム様も、今日ばかりは特別だと、もう一度お皿に料理を盛る。

それでも料理が余ってしまったので、ワドルデイたちにも分けられる事になった。

これから昼食を食べるワドルデイだけなので、少し不公平だが仕方がない。

陛下たちの食器を下げてから、一階の兵士食堂へ向かう。

兵士たちが使う食堂の隣に調理室が設けられているので、そこで料理を温め直す。

今食堂にいる全兵士に配るには、どの料理も量が足りない。なので、一品ずつ少量盛り付けて配ることにした。

本当に少しだけで、味見する量ぐらいしかないが、全員に行き渡る。

さっそく食堂に運び込み、兵士たちが持ってきたトレーに乗せていく。

なぜ一品が多いのか、説明はワドルドウ隊長がしてくれたのだろう。配膳はスムーズに行われた。

配膳が終わった。なので部屋に戻り遅めの昼食にするかと、食堂から出て行くとうとした。しかしワドルドゥ隊長に呼び止められる。

「今日は配膳を手伝ってくれてありがとう。お礼に、ここで食べていくといい」

「では、お言葉に甘えさせていただきますわ。正直に言うとう、もうお腹がぺこぺこなんです」

今にも鳴りそうなお腹をさすった。

私もワドルドゥデイたちと同じ料理に乗ったトレーをいただいて、隅っこの席についた。ワドルドゥ隊長が号令をかける。

「いただきますー！」

「いただきます」

野菜から手をつける。特に私が作った料理の野菜を。うん、味がしつかり染みついて、おいしい。

今回作った料理のレシピはちゃんとまとめてある。次回の、アーニヤとランタン、そしてメタナイト卿たちが集まる……料理パーティーで出そう。

喜んでくれたらいいわね。

陛下たちが、またこそこそと動いていた。懲りない方々だなと思いつつ、詳細をま

めた手紙を書いて、メタナイト卿に渡した。

次は、お粥じゃなくてうどんにしてやろうかと、企画する。

その二日後、フォーム様から歴史的な発見をしたと、聞かされる。

私の部屋で、紅茶を飲みながらその話を聞いた。

「でもおかしいのよ！デデデがこの国の王様だっていう証拠は、今まで全然出てこなかったのに！なんで今になって急に発掘されるようになったのかしら」

「もしかして……陛下がまた何かなさっているのでしょうか？」

「心あたりでもあるの?!」

私はしばし考え込んで、首を横に振った。

「夜、陛下が出歩いたという報告は受けておりません。陛下自身が何かした訳ではないかと」

「デデデの仕業じゃないなら、一体誰が？」

「閣下か、もしくは村に陛下の協力者がいるかもしれません」

「村に?……あつ」

「フォーム様？」

「ありがとう、リーノ！」

そう言うフォーム様は紅茶を一気に流し込み、部屋を出て行った。

次の日。事態は急展開する。

メーム様とパーム様が、土埃まみれで城に戻られたので、お風呂の用意を手伝わせていただいた。

その時に発掘場所で起きた事件を聞かされた。キュリオ氏や村人たちが発掘した古代の品々は、すべて偽物だった。陛下たちが自分たちを正当な国王だと認めさせる為、キュリオ氏の弱みを握って行った事件だった。

私のこめかみはびくりと動いた。

どうやら夕食は素うどんて決定のようですね。

ローラと料理パーティー

曇りひとつない晴天、その時間は廊下を掃除していた。もちろんワドルデイ達と一緒にだ。

そこにロロロとラララが、猛スピードで飛び去っていった。両手にまん丸の何かを掴んで。

事件の香りを感じ取った私は、すぐに近くの空き部屋の中へ入った。

「ワドルデイたち！早くこちらへ！」

ワドルデイたちは言われるがまま、慌てて部屋の中へ駆け込んだ。全員が入ったので、扉を閉めて鍵をかける。

間もなくして大きな機械が動くような、ガシヤンガシヤンという音が聞こえてきた。扉の前を通り過ぎ、また遠のいていく。

静かになった。おそるおそる扉を開けると、廊下には誰もいなかった。

嵐を避ける事ができて、リーノは心からほっとした。

「何かあったようですね。夕方頃にお菓子を持って、大臣家へ寄ってみましょうか」

その日の夕方に仕事を終えることができたリーノは、昨日焼いたスコーンを持って大臣家を尋ねた。

夕食を終えたところだったらしい。スコーンを見せると一家に喜ばれた。カービイにも喜ばれた。

テーブルでは全員が揃って食べられないので、それぞれ分かれてスコーンを食べる事になった。

パーム様、メーム様、ブン様、カービイはソファでテレビを見ながらお菓子を食べている。

私とフォーム様はテーブルでいただいた。そこで今日あった事件の話をする。

「今日、ロロロとラララが猛スピードで廊下を飛んでいく姿を見ました。何があったのでしょうか？」

「デデデが魔獣を呼んだのよ。そのせいでカービイがまた危ない目にあつたわ」

「またですか？すみません、フォーム様。陛下たちには今度こそやめてくださるよう進言します」

「リーノが謝ることじゃないわ！悪いのはデデデよ！だから、あまり気に病まないで」

「ありがとうございます。ですが、誰かが陛下をお止めしないと。今後もっと強い魔獣

が送られてくるかもしれません」

一瞬、カービーが戦士として育つ邪魔をしてしまうかもしれない、そう考えた。頭を振る。

未来がアニメの通りになるとは限らない。避けられる危険は避けるよう努力するべきだ。

「……そんなふうには、心からカービーの心配をしてくれるのはあなたただけだわ」「すみません、フォーム様。正直に申し上げますと、私は魔獣が怖いだけですわ」

困ったように笑うと、フォーム様は声をあげて笑われた。

「私、リーノのそういう正直なところ、好きだわ」

「ありがとうございます」

とびきりの笑顔で返す。

聡明な彼女に好かれると、なんだか自分が立派な人になったかのように感じて、少しこそばゆい。

そして自分を誇らしく思うのだ。

その日の夜。陛下に本を読み聞かせているときに、お願いしてみた。

「陛下、お願いがあります。もう魔獣で遊ぶのはやめませんか？」

「いやゾイ。あんな面白いものやめるもんかゾーイ」

「魔獣より面白い物があれば、やめられるんですか？」

「……考えてやらんこともない」

「かしこまりました。少々頭を捻ってみます」

あくる日。

地下調理場にて、六名の影があつた。

月一の料理パーティーの日がやってきた。三人の戦士と私たち幼馴染三人が集まって開く料理パーティーである。食材は村で手に入りやすい物を中心に、簡単な料理を考える。

「この間はお肉を使った料理でしたので、今回は魚メインの料理を考えました」

「鮭のホイル蒸しよ。美味しそうでしょ？」

「フライパンで簡単にできますし、初心者の方にはうってつけだと思います」

「蒸し料理という事は、さっぱりしているんだな。楽しみだ」

「どんな味がするんだ？」

「あつさりよ。食べやすいから気に入ると思うんだけど……」

「では調理方法を言いますね。メタナイト卿、ソードナイトさん、ブレイドナイトさん。」

それぞれまな板の前に立つてください」

三人はそれぞれまな板の前に立つ。今回の講師役はランタンだ。テキパキと調理方法をやりながら教えていく。

まず今回用意する食材は、鮭（切り身、人数分）、お酒、塩胡椒、醤油（またはポン酢）、きのこ（今回はしめじ）、玉ねぎ。

しめじは手でちぎり分けておく。玉ねぎは皮を剥いて芽を取り、輪切りだ。

次にアルミホイルを、鮭と玉ねぎとしめじを包めるほどの大きさに切り、まな板にしく。アルミホイルの真ん中に鮭、玉ねぎ、しめじの順番で置く。

そこにお酒、塩胡椒、ちよつとだけ醤油（またはポン酢）をかけた後、包む。水が中に入らないようにしつかり。

「まずはここまで。できたかしら？」

「できたぞー！」

「ああ、簡単だな」

「じゃあ次に行くわよ」

次は蒸しだ。フライパンに包んだ鮭をそつと乗せる。中身が出ないように気をつける事。今回は一つのフライパンに鮭を三つ乗せる。

包んだ鮭の半分よりも下にくるように、水を入れる。

火にかける。水が沸騰して約十五分で、できあがりだ。沸騰させている間、お湯が無くならないように気をつける事。なくなる前にお湯を足す事。

お湯を捨てて、火傷しないように包んだ鮭を、そのまま平なお皿に乗せる。

ここで炊飯器が鳴った。

「ご飯もできたわね。さあ、サラダをちやちやつと作って食べましょう」

すでにサラダ用として売られていた物をボウルに移し、そこにツナとコーンをのせる。マヨネーズをかければ完成だ。

白ごはんと鮭のホイル蒸し、サラダでできあがり。

全員の声が重なった。

「いただきます」

各々が箸をのぼす。男性三人は早速ホイル蒸しを食べた。

「うん、ほろほろと柔らかくて美味しい」

「あつさりしていて食べやすいな。それに香りもすごくいい」

「私もホイル蒸し好きです。これだと魚が食べやすいんですね」

「アーニヤは魚が苦手なのか？」

「苦手ではありません。好き過ぎるという訳でもありません。多分蒸し料理が好きなんですわ。お肉も蒸した方が好きですから」

「そうなのか。……卿、次も蒸し料理なんてどうでしょうか？」

「ふむ。そうだな」

もくもくと味わって食べているメタナイト卿。よほど気に入ってくれたらしい。頬が緩む。

「あの、次回は私の特製料理を出したいと思うんですが……」

「リーノの特製料理を？　もしか、式典で出すはずだった物か？」

「そうアレよ！　リーノの料理が食べたくて、デデデの式典に参加したのに！　あの大王つたらへそ曲げちゃって食べられなくなったアレ」

「御三方はリーノの料理を食べられたんでしょうか？」

「いや、食べられなかった」

「でしたら、ぜひ食べて欲しいです。リーノの料理は本当に美味しいので」

「ああ、知っている」

「まあ、そうですね？」

「少し前におにぎりを差し入れてもらった。あれはうまかった」

「あら……」

「その話は聞いてないわね」

アーニヤとランタンの視線がこちらを向く。私は「話しそびれました」と言った。彼

女たちの視線が後で詳しく教えて欲しいと、訴えていた。ちよつとデートしただけで、進展らしい進展はありませんでしたのに。

食事の後は、片付けだ。

前回と同じく、ソードナイトさんとランタン。ブレイドナイトさんとアーニャ。メタナイト卿と私に分かれて掃除をする。

黙々と皿洗いをしているとき、あの件を思い出した。デデデ陛下に、魔獣よりも面白い遊びを提案すること。メタナイト卿に相談してみよう。

「あの、メタナイト卿。ちよつとご相談したい件がありますの」

「なんだ？」

「陛下に『魔獣よりも面白い遊び』を提案することになったんですけど、考えが行き詰まりました。メタナイト卿なら何を提案されるか、お聞きしたいんです」

「難しい質問だな。陛下の事なら君の方が詳しいはずだ」

「そうですね。けれど知っているからこそ、陛下が魔獣に興味を持つのは当然だと。そんな答えに行き着いてしまいます」

「そうか……」

「陛下は刺激的なものが好きですからね……」

それからは沈黙がおりた。

メタナイト卿は静かに考えこんでいる。私は何も言わずに、答えを待った。

最後のお皿も洗い終わって、シンクも綺麗に掃除し終わった。彼は口を開いた。

「恐竜は、どうだろうか？」

「恐竜ですか？」

「昔、仲間から聞いたのだ。男の子は恐竜が好きだと。陛下も好きになるのではないか？」

「なるほど」

そういえば恐竜回がアニメでもあったな。試してみる価値はありそうだ。

「陛下にご提案してみます。ありがとうございます、メタナイト卿」

「どういたしました。ところで、もし私が何も言わなかったら、陛下には何を提案した？」

「そうですね。どうしていたかしら……。私が教えてさしあげられる何かを、ご提案していたでしょうね」

「例えば？」

「料理、裁縫、勉強……。簡単な日曜大工。でしょうか？」

「日曜大工もできるのか？」

「軽くて小さな棚を作るぐらいならできますわ。一人暮らしが長かったものですから」

「凄いな」

「ふふ、ありがとうございます」

電子ペットと魚と結婚記念日

のどかな昼過ぎ。外は晴天で、洗濯物がよく乾く。そして少々暑い。

その日はランタンの家で、レース編みを教えてもらっている時だった。

ダイニングテーブルを借りて、そこにレース糸や見本を広げていた。ランタン、アーニヤ、私が座っている。今日の先生役はアーニヤだ。

「そういえば知ってる？カービィのおもちやの話」

「カービィのおもちや？」

聞いた事がなかった。あんな幼子のおもちやが噂話の対象になるのか、疑問に思った。

「パーム大臣から、最新の電子ペットをプレゼントされたそうよ」

最新のおもちやか。それなら物珍しくて、村人たちは注目するだろうな。

アーニヤがすいすいと編みながら言う。

「おもちやにしては、よくできてますよね。カービィの言う事、やる事が理解できるみたいでした」

「……それほどの最新のおもちやを、ガングさんが入荷したの？」

「なにかおかしい?」

絡まったレース糸をほどこきながら言う。

「だって、最新のおもちやつてすごく高いわ。それこそ、この村では村長一家か大臣一家、エスカルゴン閣下、デデデ陛下しか買えないんじゃないかしら?」

「そうねえ。お金に余裕がありそうな家といえば、そのあたりよね」

「買ってくれる人が少なくて、しかも購入するかもわからない高価な物を、仕入れるのって勇気がいるじゃない? ガングさんはお店を一人で切り盛りできる人よ。そんな賭けするのになって思っただの」

私の言葉に二人は顔を見合わせる。解けたレース糸を見ながら、「考え過ぎかしら」と呟いた。

レース糸で編んだイヤリングを付けて、城に帰宅する。これはアーニヤの手作りだ。お店に売られている物と遜色ない出来栄だ。なので彼女にはお金を払わせて貰った。彼女はいつだって遠慮するけれど、その度に伝えるのだ。あなたが作った物は、とつても素晴らしい物なんだよって。

昔は申し訳なさそうに眉を寄せていたけれど、今は笑顔でお礼を言ってくれる。「あ

りがとう」と言われると、こちらも嬉しかった。

その事を思い出して頬を緩ませていると、廊下の角でフォーム様に会った。何やら悩まれている様子だった。

「こんにちは、フォーム様。どちらに向かわれるのですか?」

「こんにちは、リーノ。図書館に行くの。ちよつと調べたいことがあつて……」

「左様でございますか。わたくしも、お手伝いしましょうか?」

「ありがとうございます。でもいいの。自分で調べたいから」

「かしこまりました。あ、そういえばフォーム様はご存知ですよ。カービィのおもちゃについて」

フォーム様はぼつと顔を私に向けた。

「リーノは、あのおもちゃについてどう思うの?」

「実際に見たわけではありません。なので、おもちゃその物よりも別の事が気になって
います」

「それは何?」

「ガングさんです」

「一体どういうこと?」

私は、フォーム様に友人二人に話した事を聞かせた。彼女の顔がどんどん険しくなつて

いく。

「そうね……言われてみればヘンだわ！ありがとう！参考になったわ」

「？お役に立ててよかったですわ」

走り去るフォーム様の背中をしばらく見つめて、その日は家に帰った。

深夜。布団に潜ってから考える。

あれ？そういうえば、カービィのおもちやって最後に爆発しなかったっけ？

もう数十年も、さらに昔の記憶だ。曖昧な部分ばかりではつきりしないが、思い出したところは妙に確信があった。

カービィ、悲しむだろうな……。

リーノは目をつぶった。

翌日、ブン様とロロ口とラララに遊んでもらうカービィの姿を見てほっとした。彼が元氣そうだったから。自分の中で区切りを付けられたのだろう。

強い星の戦士。きっとそれは、体だけじゃなくて、心もそうなのだ。

村にはまた平穩が訪れる。途中、フォーム様に魚の恋人が現れた。

その魚は名前をカインという。マンボウだった。

カインでマンボウといえ、カービィ2に登場したキャラクターだろう。長年のカービィファンとして、一度会ってみたい。

時間を見繕って夕方前に、タオルを持って海岸の方へ歩いて行く。すると遠くに、竜巻が起こっていた。私はすぐに駆けだした。

竜巻はすぐに無くなったものの、その中からカービィが出てきた。頭に竜巻の冠を被っている。あれはトルネードのコピー能力だったのか。

陸地から海を見ると、離れた岩場にフォーム様とブン様とメタナイト卿がいる。助けに行かなくてはならない。すぐ傍にいた漁師の方にお願ひして、舟を出してもらった。

迎えに行きたかったけれど、私のせいで定員オーバーになってはいけない。なので、大人しく浜で待っていた。

数十分ほどで三人と漁師さんは浜に戻ってきた。

「三人を迎えに行ってください、ありがとうございますございました」

「このぐらいどうってことないさ」

「おっちゃん、ありがとな」

「ブン！あの、助かったわ。どうもありがとう」

「礼を言う」

漁師の方は照れくさそうに頬をかいた。

びしょ濡れの三人に、念のため持つて来たタオルを渡す。三人は体の水気を拭う。

これで風邪を引くことはないだろう。

濡れていたわけを聞き出すと、ため息がでた。また陛下たちのせいなのだ。陛下たちが海でバカンスを過ごすために、サンゴの海を壊そうとした。環境破壊だ。それを止めるべく三人とカービィは海に潜つたらしい。

私は三人に頭を下げた。

「陛下を止めてくださって、ありがとうございます。それから、本当にすみませんでした」

「リーノが謝る事じゃねーだろ。全部デデデの奴の仕業だ!」

「ブンの言うとおりでわ!リーノは気にしなくていいの。さあ、カービィを探しに行くわよ」

お二人から湿ったタオルを預かる。子供たちの背はあつという間に見えなくなってしまう。

「さすが。体力がありますわね。メタナイト卿も行かれるのですか?」

「いや、私はもう必要ないだろう。城へ戻る」

「では、ご一緒しても?」

「ああ。行こう」

最後に、漁師の方にお礼としてカップケーキを渡しておいた。カービイ用に持つて来たお菓子だけど、そのピンクの彼がない。無駄になるよりも、こうして食べてもらった方がいいと思う。

海岸から城への道を、のどかな風に吹かれつつ歩く。特に話すことはなく、私たちは沈黙していた。でも居心地は悪くない。

彼と同じ時間を共有できることに、私の胸は高鳴っていた。

夕方も過ぎて、水平線のむこうで夜が顔を出し始めた頃、城に到着する。ここまでの坂道は地獄かと思うほど長く続いていたのに、いざ城に着いてしまうと時間はあっという間に過ぎる。

もう少し彼といたような、物足りなさを感じつつも。私たちは分かれ道に差しかった。

そこでワドルドゥ隊長に出くわす。

「こんにちは。ちょうどメタナイト卿を探していたところでもあります」

「どうかしたのか？」

「実は兵士たちが使う風呂場が壊れました。お風呂に入るときは村の銭湯に行っていたきたく……」

「……わかった。そうするとしよう」

「ソードナイト殿とブレイドナイト殿には、もう伝えております。では」

そう言つて隊長は来た道を戻つていった。

メタナイト卿の背中から、私の見間違いかもしれないけれど、お風呂にすぐに入られない事へのうんざりした気持ち滲み出ている気がした。

メタナイト卿は海水で汚れ、私は汗だく。二人ともすぐにお風呂に入るか、汗を流すべきだ。そして私は、久々にゆつくりお風呂につかりたいと考えていて。一人ではお湯がもつたいたないとも考えていた。

だから、この時、あんな事が言えたのだ。

「メタナイト卿、もし、よろしければわたくしの部屋に來ませんか？」

「なに？」

彼は振り返つて、驚きの声を上げた。

誤解させてはいけないと、手をパタパタ振つて「変な意味じゃなくて、ですね」と続ける。

「今日はゆつくりと湯船につかりたい気分なんですけれど、一人だとお湯がもつたいな

いでしよう?ですから、メタナイト卿に来ていただけたら、いいなと思ひまして……」
「……私は男だ」

「誰にでもこのような事、申し上げませんわ。メタナイト卿だからこそ、招くんです」
しばし見つめ合つた後、メタナイト卿は「そう言った言葉は本命に言うべきだな」と言つた。

なんの問題もなかつたので、「ええ。そうですね」と返すと、再び数秒ほど見つめ合
う事になつた。

「君は時々、本気かわからないな」

「今のは本気ですわ」

「……そうか、わかつた。着替えを取りに行つた後、君の部屋に向かう」
「わかりました。お待ちしておりますわ」

湯船がちょうど出来上がった頃、メタナイト卿がやって来た。部屋の中に招き入れ
る。

「ちょうどお風呂ができたところです。どうぞ、お入りください。それとも何か飲み物
を飲んでから入られますか?」

「水筒を持って来たから、飲み物は遠慮する。……入るぞ」

「どうぞ。浴室は奥です。ご案内しますわ」

一人で住むには案外広い、部屋の中を案内する。浴室の扉を開けると、少し暖かい空気がむわりと肌にとわりついた。

「中にある物は自由にお使いください。タオルはすでに出していますので、迷うことはないかと」

そこまで言つてメタナイト卿の方へ振り返る。彼は真つ直ぐ、私を見ていた。

その目がなんだか、きらりと輝いているようで。いつもと違う彼に胸が騒いだ。

「あの、どうかしましたか？」

「君を……」

「はい」

「君をどうやって誘おうか、悩んでいる」

何に？とは口に出さなかつた。浴室を前に男女が二人。しかもいい歳をしている。お互いに相手を少なからず想っている。（と、私は考えている。）

この状況で私が取れるべき行動は二つ。とぼけるか、誘いに乗るかだ。

今、私は恥ずかしくてとぼけたい気持ちを踏みとどまっている。ならば、一步踏み出すべきなのだろう。

後は、どうやって伝えるかだ。まずは気持ちを確認するべきだろう。足が震えだす。

それでも勇気を振り絞って、リーノは好きな人に、笑顔を向ける。

「メタナイト卿」

「なんだ」

「私は、あなたが好きですわ。この気持ちに気が付いたのは最近です。けれど、きつともっと前からあなたが好きでした」

突然の告白に彼は驚いた。けれどある程度予想がついていたのだろう。すぐに元通りだ。

「……私は、私がおつきりとそなたを想うようになったのは、ここ数年のことだ」

「あら、随分前から好いてくださっていたんですね」

「ああ。だから、今日部屋に誘われた時は心から驚いた。そして、ここへは覚悟を決めて来た」

メタナイト卿の手がゆっくり伸ばされて、私の手を優しく握る。

「君と共にあるか、離れるかだ」

私はその手を、力が入らない手で握り返した。

手が震える。きつと向こうにも伝わっている。

「私は、ナイトメアとの戦いに負けて、次なる戦士を育てるべく、ここへ来た」

「ナイトメア……陛下が懇意にしている会社である、ホーリーナイトメア社のことです

か？」

「その会長と因縁がある。……状況によつては、私がナイトメアに狙われるかもしれない。カービイを連れてここから離れるかもしれない。そのとき、君はどうする」

共に行きたい。ここから離れることはできない。あなたを守りたい。

言葉がぶつかつて、声が出なかつた。

「……今は答えが出せなくてもいいかもしれない。だが、私と付き合うとは、そういう問題が付きまとう。それでも、君は私を想ってくれるのか？」

「想います」

「……いいのか？」

「未来はわかりません。でも、今、言えることがあります。メタナイト卿が好きです。どうか、傍にいさせてください」

「君が、そう望んでくれるなら」

私たちは手を取り合つて、浴室へ入つた。

パタパタ。パタパタ。

同じところを何度もパタパタ。

「わにゃ」

「はい……。あ、ここはもういいですね。次はこっち……」

パタパタ。パタパタ。

ワドルデイが何度も声をかけてくれる。それでも私のぼんやりは治らなかつた。

見かねた一人のワドルデイが走り出して、エスカルゴン閣下を連れて来た。

そして私の顔を見るなり、怪訝そうに眉を歪めた。

「な〜んか熱っぽいでゲスね。体調が悪いならさっさと休む!」

「し、しかし……」

「うつされて困るのはこっちでゲスよ。早めに治さないと給料カットでゲスぞ!」

「わ、わかりました。今日は早退します」

重い足取りで廊下を歩く。

昨日の今日だ。何かしら影響が出るかもと覚悟はしていた。そして、こんな風に不調になつてしまうと、情けないような気持になる。何か生産的なことをして、気分を紛らわせたい。せつかく早い時間から休みを貰ったのだから、レース編みの練習でもしてお

こうかな。

趣味に時間を使えると考えて、気分が浮上した。どんな物を編もうかと、持っている編み図を思い出す。

あれこれ考えていると、前方からメーム様が歩いてきた。廊下の端に寄り、背筋を伸ばす。頭は少し下げて、彼女が通り過ぎるのを待った。メーム様は私の前で立ち止まった。どうやら用事があるみたい。

「いかがなさいましたか、メーム様」

「リーノにお願いしたいことがあるの。今度、私たち夫婦の結婚記念日パーティがあるのだけれど、リーノも参加してくれない？それとも、今年も仕事で忙しいのかしら？」

「正直に申し上げますと、当日になってみないとわかりませんわ。陛下の急なわがまま……仕事が入るかもしれませんもの」

「うちもそうだけど宮仕えは大変ね。とりあえず、席は取っておくわ。来られるようなら、来てちょうだい」

「よろしいのですか？ご迷惑になりませんか？」

「私たちとあなたの仲じゃないの。迷惑じゃないわ。じゃあ、当日はコックカワサキの店よ。待ってるわね」

「かしこまりました」

頭を下げる。そして顔を上げると、メーム様がにこにここと笑っていた。私はなぜ笑顔を向けられるのかわからず、首を傾げた。

「あの、まだ何か？」

「リーノ、あなた。何かあったでしょう」

どきつと心臓が飛び上がった。女性は勘が鋭いと言われているが、メーム様もそうらしい。

私は、私たちはまだ付き合い始めたばかりである。まだ人に話すつもりはない。

「何か、ですか？」

「ええ、私の見立てでは……恋ね！」

「恋ですか」

「リーノ、あなたのことは家族同然に思っているわ。だから、いつでも相談しに来なさいね！」

「ありがとうございます。メーム様」

家族同然という言葉が嬉しくて、心から目を細める。メーム様はそんな私に満足されたのか、今度こそ去って行った。

その背を見送ってから私も自室へ向かう。

寝巻に着替えて、ベッドに潜り込むとすぐに睡魔が襲ってきた。よほど疲れが残って

いたらしい。体中から力を抜く、その心地良さに瞼を閉じる。意識はあつという間に途切れた。

それから数日、大臣夫婦の結婚記念日まで。メタナイト卿には会えなかった。ソードナイトさんとブレイドナイトさんが言うには、所用で城を空けているらしい。きつとハルバード建設に必要な部品を、買い付けに行っているんだわ。会えない寂しさよりも、城を空ける知らせを人伝に聞かされた方が寂しい気がした。彼は忙しいのだ。時間がなかつたのかも知れない。

「……それでも、帰ってきたらデートぐらいしてほしいですわ」
今度はお城の噴水から。そこから眺める夜空は美しいだろう。

結婚記念日は驚きをもって、うまくいった。

コックカワサキが出した魚にカービーが飛びつくと、その魚が指輪を吐き出したのだ。

指輪は、パール様の物だったらしく。その指輪を見て、大層驚かれていた。

指輪は無事にメーム様の指にはめられた。

ようやく、あるべき場所に指輪が収まったのだ。

私は嬉しくて、いつもより多くのお酒を飲んだ。

結婚記念日のパーティが終わり、大臣一家と共に城へと帰る。仲睦まじく、手を取り合い並んで歩くご夫婦に、私は喜びを感じた。旧知の仲であるご夫婦が、こんなに幸せそうだとこちらも嬉しくなる。思わず笑い声が漏れてしまった。

「ふふふ……」

「なんだよいきなり」

ふらつく私の手を引いてくださるブン様が、怪訝そうな声を上げられました。

「パーム様とメーム様が幸せそうで、わたくしも幸せなのです」

「ふーん、そういうもの？普通は羨ましくて、自分もあなりたい！とか思うものじゃないの？」

「いつかはブン様のご家族のように、家族を持つことができたら嬉しいですね。でもそれ以上に、今はお二人の幸せを祝福したいのです」

「そっか。へへ、ありがとう。リーノ」

「こちらこそ、今日は呼んで下さりありがとうございます」

頭を下げると、かくんと首が据わらない赤子のように頭が沈む。

ブン様が「気を付けろ」と、心配してくださるのがまた嬉しくて。私は笑う。城へと続く橋を渡ると、一人の人影が前を遮った。

メタナイト卿だ。帰ってきたんだ。会えたことが、その姿を見られたことが嬉しくて、じつと彼を見てしまう。

「……ですの、後は私が」

「ええ、頼みました」

「リーノ、送ろう」

「はい。メタナイト卿」

自分でも驚くほど甘い声が出た。びつくりして手を口に当てる。多分顔が赤くなっているだろう。少し恥ずかしい。

それでも伸ばされた手を掴み返して、私たちは大臣一家から離れた。

「それでは、パーム様、メーム様。フォーム様、ブン様、おやすみなさい」

「おやすみ。リーノ」

「おやすみなさい。足元に気を付けてね」

「じゃあな！また明日」

「おやすみなさい。リーノ」

リーノたちが離れると、メームは口元を扇で覆い隠した。

「まさか、相手があのメタナイト卿だったなんて！」

「メーム、声を落としなさい。気づかれてしまうよ」

「何の話？」

「リーノの恋人の話よ！あの二人、最近仲が良かったから何かあると思っていたのよ。まあ、リーノにもとうとう春が来たのね！これはお祝いしなくちゃ！」

「ママ、まだそうと決まったわけじゃないんだから」

「確かにそうね。でも、あのリーノの声色は間違いなく恋よ！きつと相手であるメタナイト卿も気づいているはず！じゃなきゃ、こんなところで待ち伏せなんてするもんですか」

「たまたまだって、さっき言ってたよ」

メームは聞こえていないのか、興奮した様子だ。こうなつては落ち着くまで、耳を貸してもらえないだろう。

フォームたちは、奥様方のウワサの種になるだろうリーノたちのことを案じた。

帰還と戦友の息子

平穏な日と変わらなかったと思う。

その日はフーム様、ブン様、ロロロとラララと会わなかった。お互いに遊びや付き合
い、仕事などがある。珍しいことでもないので、夜は普通に明日の予定を立てながら
眠った。

異変を感じたのは、メーム様から相談を持ち掛けられた時だ。

「フームったら、眠ったままのカービィとピクニツクに出て行ってから戻らないの。心
配だわ」

「いつ出かけられたんですか?」

「昨日なのよ」

「昨日!? 一体どこまで出かけられたんでしょうか」

「行先までは聞かなかったわ。様子が変だと思っていたの。あの時止めておけばこんな
事には……」

「メーム様、村人たちに聞きこみしませんか? フーム様とカービィの行方を知っている
方がいらっしやるかもしれません」

「そうね。何もせず待つよりも、その方がいいわね」

「では、村へ行く前に寄り道をしてよろしいでしょうか？」

「いいわよ」

私とメーム様、部屋で歩き回っていたパーム様を加えて、戦士たちの休憩室を訪れた。中にはソードナイトとブレイドナイトがいた。

訪問の理由を手短かに話す。彼らは「メタナイト卿も昨日から行方が分からない」と教えてくれた。

「同時期にフォーム様、ブン様、カービィ、ロロロ、ラララ、メタナイト卿までいないなんて……。偶然ではない気がします」

「リーノの言う通りだ。どうだろう、ソードナイト、ブレイドナイト。一緒に村へ行つて、皆の行方を聞き込みしないか？」

「わかりました」

「行きましょう」

私たち五人は手分けして村を回った。村を南北に分けて、大臣夫婦と戦士たちが聞き込みに回る。私は村の郊外を時計回りに回った。ヤブイ先生の診療所を訪れた時、フォーム様たちが巻き込まれた事件について話を聞いた。

なんでもデデデ陛下とエスカルゴン閣下が用意した魔獣のせいで、カービィが眠って

しまったらしい。その病を治すためにカービイを連れてフーム様は出かけられた。ブーン様はああ見えて、責任感の強い子だ。ロロロとラララを従えて、きつとフーム様について行ったのだろう。そしてメタナイト卿は、カービイを起こすために子供たちと共に危ない場所へ出かけられたのだ。

私は怒った。

今回は村人たちに手を出さなかったのかも知れない。しかし、フーム様たちとメタナイト卿に被害がおよんだ。フーム様たちが帰ってくるまで食事は、ワドルデイたちだけに作らせよう。

集まった情報とそこから推測される事件を考えて、リーノは村の広場に急いだ。

待ち合わせの時間よりも早く、皆さんは広場に集合していた。

「お待たせいたしました。わたくしが最後のようですね」

「さほど待つてはいません。今しがた集まったところですよ」

「そうですか？ならいいのですが。では、さっそく情報交換しましょうか」

「すまない。できればどこかの店に入らないか？」

「腰を落ち着けて話したいの。あとできれば飲み物が欲しいわ」

大臣夫婦の言う通り、少々喉が渴いた私たちは揃ってコックカワサキの店に入る。この店は、食事はイマイチ。けれど飲み物は普通なので安心していただける。

「大臣夫婦にリーノ、それにソードナイトさんとブレイドナイトさんじゃないか。珍しい組み合わせだね。なんかあったのかい？」

お喋りな店主が問いかけてくる。代表してパーム様が事情を説明した。

「そりゃあ心配ですね。みんなどこに行ったのかな？」

「それがわかれば苦労しないよ。それと、お茶を頼むよ」

「あいよ」

「あの、もしかしたらわかったかもしれない」

「なんだって?！」

ヤブイ先生から聞いた事件を話す。そして自分の推理も。すべてを話し終える頃、テーブルには五人分のお茶が運ばれた。

メーム様がお茶を一口飲み、ため息を吐く。

「不安だったけれど、メタナイト卿も一緒なら安心だわ」

「カービイを含めて、皆無事に帰ってきてくれたらいいんだが……」

「その花を探しに行ったのなら、あと三日か四日は帰って来られないなら」

「待つしかないな。救助に行ってもすれ違う可能性がある」

「そうですわね。……はあ、安心しましたらお腹がすいてきました。こちらで食事にしませんか？お茶だけ飲んで帰るといいうのも良くありませんから」

「それはいいが、味がな……」

パーム様の一言で皆さん黙ってしまった。散々歩き回った後に不味い物を食べたくないのだろう。それならば。

「失礼。」と言って、席を立ちあがり厨房に入った。

約二十分後、私とカワサキは五人分の親子丼を運んで来た。ほかほかと湯気が立ち上り、鶏肉と半熟卵と三つ葉がおいしそうだ。なにより甘くていい香りが鼻をくすぐった。

「勝手に料理を決めてしまつてすみません。よろしければどうぞ」

「これは、カワサキが？」

「はい。わたくしは少しお手伝いさせていただけですわ」

「オレの間違いを指摘してくれたおかげで美味しく作れたよー！存分に味わつてよね！」

「リーノが見ていてくれたのなら、安心だな。どれどれ……」

各人が鶏肉と卵をご飯に乗せて、一口食べる。最初に声を漏らしたのは戦士たちだ。

「うまい」

「出汁がよくきいている。いけるなあ、これ」

普段とは違う話し方を聞いて、私たちは目が点になった。視線に気づいたブレイドナイトが咳払いし、ソードナイトが隣に座る仲間を肘で小突いた。

メーム様がにこりと笑われる。

「それが二人の素なのね。あなたたちが城に来てから初めて知ったわ」

「そうだねえ。いつも君たちは忙しそうにしているから、こんな風にゆっくり言葉を交わすこともなかったね。リーノは仕事上、メタナイト卿と一緒にいる場面をよく見るよ」

「陛下について少々お話する事が多くて……」

「なるほど」

私も座り、五人でご飯を食べる。戦士たちは恥ずかしがっているのか、普段よりも固い口調で相槌を返していた。それが余計におかしくて、私と大臣夫婦は笑いをこらえることになった。

メタナイト卿たちは二日目に帰ってきた。

朝、村に向かうため城内を歩いている時だ。ボロボロの姿をしたメタナイト卿とぼつたり会った。マントは切れ切れ、体中埃まみれ。微かに鉄の匂いもする。怪我をしてい

るかもしれない。その考えがよぎると寒気がした。

「メタナイト卿、怪我をされていませんか?! すぐに手当てをしないと……」

「応急処置は済ませてある。大きな怪我はないし、問題はない」

見かけよりも元気ののだろうか。肩に張った緊張が解けていく。

「安心しました。あの、子供たちは?」

「全員無事だ。怪我もしていない」

「よかった……。皆、無事に帰ってきてくれて本当に良かったです。どちらへ向かわれるのですか?」

「部屋に戻る。さすがに休みたいのでな」

「あの、私にできることは何かありませんか?」

メタナイト卿はしばし黙ったあとに「起きたら、君の料理が食べたい」と言った。

私は頬を緩ませて頷く。

それから、念のためメタナイト卿について行った。

「もしソードナイトさんとブレイドナイトさんがいなかったら、わたくしが包帯を替えるのを手伝いますわ」

「頼む。世話をかけるな……」

私は周りに人がいないことを確認してから、そつと小声で呟いた。

「世話ができるのは恋人の特権です」

「ふふ、そうか。ならば、君が怪我をしたり不調の時は私が世話を焼こう」

「その際はよろしくお願いします」

メタナイト卿たちの部屋の扉を開ける。中はもぬけの殻で、静かだった。部屋の明かりのスイッチを入れて、中に入る。

「メタナイト卿は座っていてくださいいね」

「わかった。救急箱は向かいの棚だ」

指差された壁には武器が飾られている。そんな壁の左下に救急箱は置かれていた。それをメタナイト卿の傍に持って行く。彼は畳の上に座っていて、すでに包帯を取り始めていた。

「身につけていた包帯は土で汚れて使い物になりませんね。捨ててもよろしいですか？」

「そうしてくれ。ゴミ箱は……私の方が近いな」

メタナイト卿は身をよじってゴミ箱に手を伸ばした。彼はぐぐもったうめき声を上げて、手を伸ばした姿勢で止まった。素早くリーノが手を伸ばして、ゴミ箱を取った。

「無理なさらないでください」

「無理をしたつもりはないんだがな。私も歳かな」

「いくつなのですか？ お若く見えますけれど」

「君より年上だ」

「それはわかりませんが」

「詳しくは秘密、だな」

「メタナイト卿は秘密が多いですね」

「誰にでも、他者に言えない事はある」

それはそうだが、メタナイト卿は特に秘密が多い気がする。私が知らないだけか。

汚れた包帯をゴミ箱に入れる。戦士はその間にマントや肩当を外していく。あらわになる彼の体は傷と汚れにまみれていて、痛ましい。

「汚れを落とすお湯が必要ですね。持って来ますので少々お待ちいただけますか？」

「いや、その必要はないようだ」

「？」

間もなく部屋の扉が開いた。ソードナイトが桶を持って入ってきたのだ。桶からは湯気が立ち上っている。

「ソードナイトさん、その桶の中身はもしかしてお湯ですか？」

「ええ、卿とあなたが城の廊下を歩いているところを、先程見かけまして。手当にお湯が必要になると思います、急いで持って来ました」

「ありがとうございます。ナイスタイミングですわ」

手を伸ばして桶を受け取ろうとするけれど、ソードナイトは渡してはくれなかった。

「あの……」

「後はやっておきます。どうぞ、仕事に戻られてください」

できればメタナイト卿が傷の手当てをして、ベッドに潜るところまで見届けたかった。でもここで居座る理由が、ソードナイトに説明できる理由が私たちにはない。

メタナイト卿を窺う。目が合うと、彼は頷いた。

「リーノ、世話になった。食事、楽しみにしている」

「……はい。消化にいいものをお持ちしますわ。リクエストがあれば、夕ご飯前に仰ってくださいね。それでは、失礼します」

二人に頭を下げて、部屋を出た。

しばらく歩き、角を曲がったところでため息を吐く。

早く落ち着いて、私たちの関係を二人に話せるようになりたいわ。そうすれば、こういう時だって、傍にいられるのに。それに、せっかくヤブイ先生のおかげで包帯を巻く技術が身に着いたのだ。メタナイト卿に見せたかったな。

両手をぐっぴと握っては開いてみせる。今はとにかく、言われた通り仕事へと戻るのが良かった。

夕方。

いつも陛下と閣下の為に料理する時間を、今日は戦士たちの為に使う。夕飯は親子丼とスープにした。具材は小さく切って食べやすいように調理してある。喜んでもらえたらいいな。

カートに必要な物を乗せて、ガラガラと音を立てながら戦士たちの部屋に向かった。部屋の扉をノックする。

扉を開けてくれたのはブレイドナイトだ。

「こんにちは。ブレイドナイトさん。メタナイト卿とあなた達に食事をお持ちしました」

「卿から話は聞いています。どうぞ」

扉が大きく開かれる。中に入ると、部屋の中にはソードナイトが立っていた。

「あら、メタナイト卿は……寝ていらつしやいますのね」

畳の上で横になっている彼がいた。

ソードナイトに向き直り、メタナイト卿の具合について質問する。

「メタナイト卿はどうですか？あれから具合が悪くなったりしていませんか？」

「いいえ、問題ありません。傷の手当てをしてから、あのよう、ずっと眠っておられます」

「そうですか。具合が悪化していなくてよかったですわ」

もう一度眠る彼の姿を見てから、ソードナイトとブレイドナイトの方に向き直る。

「では、わたくしはこれで。食器やカートの類は……」

「片付けておきます。そのくらいはできますので」

「そうしてくださると助かります。失礼しますわ」

閉じた扉を再び開けて、部屋を出て行く。

陛下の為に夕食を作らないなら、もう仕事はない。このまま自室に戻ることにした。

戦士たちの部屋にて。

「メタナイト卿、起き上がれますか?」

部下たちのその声を聞いて、メタナイト卿は目を覚ました。ゆっくりと起き上がり、体に不調がないか確かめる。

「お加減はいかがですか?」

「問題ない。楽になったぐらいだ。……食事はリーノが?」

「はい。先程、我々に持って来てくれました」

「そうか。では、ありがたういただきますしよ」

部下たちは協力してお椀に盛り付けていく。息の合った動きで無駄がまったくなかった。

今日の夕ご飯はどうやら親子丼とスープらしい。どちらも程よく味が付けられており、とろりとした卵が鶏肉に絡みついて旨い。

すぐ空になったお椀には、米粒一つもついていない。おかわりもした三人は、感謝を込めてこの場にはいないリーノに向けて手を合わせた。

「ごちそうさまでした」

深夜。リーノの自室。

ベッドの上で何度も寝返りをうつ。瞼を閉じるたびに考えることはただ一つ。今日のように、恋人になったメタナイトが危険な目に遭うだろう未来についてだ。カービィとナイトメアとの戦いは始まったばかり。その戦いに、今後もメタナイト卿は自ら飛び込んでいく。

そしてメタナイト卿自身の因縁によって戦いは引き起こされる場合もある。

チリドック、シリカ、ナックルジョー……。ナックルジョーなんて三回もプブレッ

ジにやってくるのだ。しかも二回は魔獣を引き連れてやってくる。

「こわい。こわいな……」

無力なままでは戦えない。じゃあ守ってもらうのか。それでいいのか。人には向き不向きがあるけれど、私はこのままじゃいけない気がする。

「頼るだけじゃなくて、頼られる私になりたい」

来るべき日に備えて力を付けようと考える。

ヤブイ先生の勉強会も続けていこう。そうすれば、守られるだけの私じゃないわ。

そこまで考えて、やっと意識が沈んだ。

次の日。まず基礎体力を付けるために体に重りをつけた。はじめは両手足に一キロずつ。慣れ始めたらさらに一キロ加える。重りをつけて仕事をこなしつつ、城内を歩き回る。いい訓練になると思った。まずは筋力をつけないとね！

重りは見えたら、お城のメイドとしてはカッコ悪いので、衣服で隠す。これで誰にもバレずに筋トレができる。

その日は午前中に仕事を終わらせて、村の八百屋さんに寄った。果物がたんまりと積まれたかごを二つ購入する。ついでにリボンで簡単に装飾してもらった。

それを持参して、まずは戦士たちの部屋を訪れた。

ノックする。扉を開けてくれたのはブレイドナイトさんだ。

「ごきげんよう。お見舞いの品をお持ちしました」

「こんにちは。ありがとうございます。今お茶を淹れますね」

「いえ、これから大臣一家のお部屋へ行きますので。……あの、メタナイト卿のお加減は？」

「かなり回復しています。傷もほとんど治っていますし、日常生活に問題はありませぬ」
ほっと息を吐く。

「それが聞きたかったんです。ありがとうございます。それでは失礼します」

「あの、昨日の夕食、たいへん美味でした。皆で完食しました。作ってくださいありがとうございます」

「こちらこそ、完食してくれてありがとうございます。作ったかがありますわ。それでは……」

互いに頭を下げ合って、私は次に大臣一家の部屋に向かった。

部屋の扉をノックすると、フォーム様が迎えてくれた。その元気なお姿と、お声を聞けて、私はまた安心するのだった。

数日後。玉座をコロコロと小さなほうきで掃除する。するとボタンが反応してしまった。

こんな事はナイトメア社の転送装置が導入されてから初めてで、私は大変驚いた。やってしまった！またカスターマーサービスに会ってしまう。もの凄く嫌だが、押し間違えてしまったのはこちらだ。一言謝るべきだろう。

そう覚悟を決めたのに、作動したのは転送装置だけ。魔獣から隠れるため玉座の後ろへと避難した。直後、爆発した。

「きゃあ!!!」

ちようど玉座が盾になり、爆風の直撃は免れた。音は城全体に鳴り響いたようだ。部屋の外からドタバタと走る音が聞こえてきて、陛下の号令によってワドルデイたちが入ってきた。

しかしドン！バキ！と何かを殴る音がして、ワドルデイたちは床に転がった。

やはり、魔獣が転送されてきたみたいだ。せめて姿だけでも見て、メタナイト卿に情

報を渡さないといけない。

ちらつと、顔を出して魔獣を覗き込んだ。しかし魔獣はすでに扉の方に走り出して、転送装置が邪魔になって見えなかった。

騒音が遠のいてから、立ち上がり玉座の間から廊下へと出る。

「リーノ!!」

「メタナイト卿! それにソードナイトさんとブレイドナイトさん」

すぐにメタナイト卿たちに出くわす。三人とも慌てて来たようだった。

「中にいたのか!? 無事か?」

「怪我はありません。ごめんなさい。敵の姿は見ていません」

「無茶はしなくていい。私たちは後を追う。そなたは反対側へ逃げろ」

「わかりました。皆さん、気をつけて」

スカートを軽く摘み上げて私は走り出した。途中何度も城が揺れたけれど、転ぶほどではない。とにかく真つ直ぐ走って、行き止まりの空き部屋に入った。

電気は消したまま、暗闇の中でじっと息を潜める。

城が揺れなくなつてどのくらいの時間が過ぎたのだろう。私は恐る恐る扉を開けて、廊下の様子を窺う。襲撃があつたとは思えない静けさだ。脅威は去つたのだろうか?

安全なのかな？

意を決して廊下に出る。

「リーノ！」

「ひっ！」

私は飛び上がって驚いた。

声の方へ顔を向けると、そこにはアーニヤとランタンとソードナイトが揃っている。

「皆……どうしてここにいるの？」

「お城に来る途中、偶然メタナイト卿たちと会ってね。危ないからここへ避難するように言われたのよ」

「そうだったの。二人をお城へ連れて来てくれてありがとうございます」

「いえ。ご主人に命令されただけです、お気になさらず」

「今ね、私たちリーノの部屋に向かう途中だったの。匿ってくれないかしら」

「ええ、いいわ。行きましょう」

「……では、私はここで失礼します。もう危険はないと思いますが、気をつけて」

「ソードナイトも、気をつけてよね」

「ああ、わかつてる」

ランタンとソードナイトの気軽なやりとりを見て、私とアーニヤは視線を送り合う。

そしてソードナイトが走り去る。姿が見えなくなったところでランタンに迫った。

「ランタン、今のやりとりは一体どういうことなんですか」

「あんなに親しくお話しするということは、二人はもしかして……」

「違うわよ。……まだね」

ふつと笑うランタンはあんまりにも艶っぽい。私たちは言葉を飲み込んでしまった。こんなランタンは出会って今までで初めて見る。

「さあ、リーノの部屋にお邪魔するわよ」

「そうね。行きましようか」

先を歩くランタンに遅れないよう、私とアーニヤは後ろをついて行った。

二人を自室に招き入れる。扉を閉めようとしたとき、ワドルドゥ隊長が廊下の先からこちらに走ってくる姿が見えた。

ちようどいい。今日の事件について何か聞けるかもしれない。

私は廊下の端に立って彼が通る瞬間を待つ。

「リーノ殿、探したぞ！城内の掃除を手伝ってくれないか？」

「何があつたんですか？」

「侵入者が城の一部を壊してしまって、その片付けに人が必要なのだ」

「侵入者はまだ城内にいるのでしょうか？」

「いや、もういない。陛下のお話では星の戦士を探しに村に向かったようだ」
「わかりました。ちよつとお待ちくださいね」

自室に戻り、アーニヤとランタンに事情を話す。

「星の戦士……カービイを探しているということ？」

「そのみたいです。村の皆、無事だといいんですけど」

「とにかく、私は仕事に行ってくるわ。この部屋の物は自由に使って」

「いつてらっしゃい。リーノ、気をつけてね」

「いつてらっしゃい。悪いわね」

「いいの。二人こそ、今日はここにいてね」

再び廊下に出た。

「お待たせいたしました。それでは行きましょうか」

「うむ。頼むのである」

侵入者が開けた穴は大きく、それだけで相手の強さがわかってしまう。侵入者が転送されたとき、見つからなくてよかった。今の私では足手まといにしかならず、人質になつていたかもしれない。最悪死んでいただろう。

身震いしながら、瓦礫をゴミ収集場所へ運んでいく。それをなんども往復している内

に夕方を過ぎ夜に差し掛かった。一部ではすでに修復作業が進んでいる。

「今日はここまでー！お疲れさまでした！」

「わにやわにやわにや！」

「お疲れ様です」

掃除用具を元の場所に戻しに行こうと集めた。そのときフォーム様とブン様が私の名前を叫びつつこちらにやってきた。なんでしょうか。

「リーノお願い、力を貸して。訳は後で話すわ」

「今は急いでいるんだ。すぐに来てくれ！」

「え、ええ？」

左手をフォーム様に、右手をブン様に掴まれて引つ張られる。もつれる足を必死に動かして、素早い二人になんとかついていく。

城の門を抜け坂道を下り、草原を走り抜け辿り着いたのはコックカワサキの店。裏口の扉をフォーム様がノックする。扉は静かにゆっくりと開かれた。

「あ、フォーム様とブン。それにリーノじゃないか」

「カワサキ、入れてちょうだい」

「いいよ」

お店の中に入る。室内は厨房の灯りが一つだけしかつけられていないため、薄暗い。

私の疑問に気づいたのかカワサキが説明する。

「この灯りだけはあるにしても、外に光が漏れないから安心なんだよね」

「だからここしか明かりがついていないのね」

フォーム様とブン様は納得されているが、私にはわからない。

「あの、一体何があったのでしょうか？」

質問にはフォーム様とカワサキが答えてくれた。

城に転送された侵入者が、カービイを探し回って村中で暴れた。カワサキの店にも侵入者は来た。もう来てほしくないから、身を隠すように、明かりも外に漏れないように気をつけているらしい。

「あんなのにカービイが会ったらひとたまりもないわ。なんとかカービイを匿ってあげなくちゃ」

「具体的にはどうするんですか？」

「隠れる場所はもうあるの。後は食料を届けるだけ。二人にはお弁当作りと、それを運ぶのを手伝ってほしい」

「かしこまりました」

「それならいいよ」

カービイを匿うためあちこち走り回っていたフォーム様とブン様は部屋の隅で休んで

もらう。私とカワサキは冷めてもおいしく、食べやすい料理ということでサンドイッチを作り始めた。卵とハム、ホイップクリームとフルーツの二種類を用意する。

できあがったサンドイッチの量は普通の人なら充分だ。でも……。

「これだけじゃ、足りるはずがありませんわよね」

「カービイだもんね〜」

「ねえカワサキ、ここの食料全部持って行ってもいいかしら？」

「したらカービイだって腹が膨れるだろうな！」

「今回はしょうがないか。いいよ。全部持って行こう」

カワサキは家中をひっくり返して、とても大きくて風呂敷のような正方形の布をひっぱり出して来てくれた。

それをホールに広げて、お弁当と食べ物すべて乗せて包む。カワサキ二人分ぐらいの大きさになったので、持ち上げるのは大人たちに決まった。

「わたくしとカワサキとで持ちあげましょう。ブン様は横から支えてください。フーム様は私たちを先導していただけますか？」

それぞれが了承してくれたので、さっそく持ち場につく。その前に、腕と足に付けていた重りを外しておく。

「カワサキ、後で取りに来ますのでこちらのテーブルに置かせていただいてもいいかし

ら」

「いいよ。食材がないんじや、どうせ明日は休業だし」

「ありがとうございます」

「リーノ、あなたそんなもの付けていたの？」

「ええ、ちよつと体力をつけたくて」

「ふーん」

夜。ほとんどの人が寝静まった頃合いに、店をこつそりと出てカービイがいる場所へ向かった。カービイが隠れていた場所は村から離れた荒野の洞窟だった。洞窟に入るとカービイは臉をこすつていて、どうやら寂しい思いも怖い思いもしなかつたらしい。

風呂敷の結び目を解いて、食料を見せる。赤子の戦士はその山に飛びついて、食料をぱくぱくと飲み込むように食べていく。サンドイッチもあつという間に食べてしまった。

「見事な食べっぷりですね」

「元気でよかつたわ。あのね、カービイ……」

フォーム様が食べ物に夢中なカービイに「見つかっても戦つてはいけない」と説得する。その身に危険が迫っているというのに、当の本人は能天気な食べ続けている。

「わかってきているのかしら……」

「どうなのでしょうかね」

「お食事中失礼するゾイ。カービィちゃんにお客さんゾイ」

独特な笑い声が二重に響く。洞窟の入り口にはデデデ陛下とエスカルゴン閣下がいたりと笑っている。そして、その前に少年が現れた。

ツンツンヘアーに鉢巻を巻いて、カービィの世界では珍しく両手足が長い少年。

ナツクルジヨード！

ナツクルジヨードとカービィは戦い始めた。フォーム様がワープスターを呼ぼうとしたが、エスカルゴン閣下に捕らえられてしまう。

「子供になんてことをなさるのですか！閣下、お止めください!!」

「だまらっしゃい！お前もこうでゲス！」

「きやあ!!」

「リーノ！」

私もあつという間にロープで両手を縛られてしまった。これでは身動きがとれない。コックカワサキも陛下によって簀巻きにされてしまった。

戦いが続く間、私たちは見守る事しかできない。ひどく歯痒い気持ちになった。

「こんなことなら、普段からナイフの一本でも持ち歩くべきでしたわね……」

カービィは戦う気がないのか、ナツクルジョーに対して防戦一方だ。

「なんかこう、胸が……」

「スーつとするゾー！」

「酷いですわ！陛下、閣下。相手は赤子なのですよ！」

「しかし何匹も魔獣を倒した戦士でもある。そちは黙って見とれい！ダハハハ」

何もできないのだろうか。

最後の一撃が決まろうとしたその瞬間、メタナイト卿がナツクルジョーの拳を止めてくださった！それに怒った陛下と閣下が私たちから離れて、三人の元へ走る。その隙にソードナイトとブレイドナイトが縄を切ってくれた。

「ありがとう！ソード、ブレイド」

「恩に着るぜ！」

お礼を言うと、フーム様とブン様はすぐさまカービィの傍へ駆け寄る。

「いけません！フーム様、ブン様！ありがとうございます。ソードナイトさん、ブレイドナイトさん」

「コックカワサキはこちらに任せて」

「後を追ってください」

「ええ、そうします！」

スカートを下品にならないよう軽く摘み上げて、走る。二人の元にはすぐに追いついた。

御二方に追いつくと、メタナイト卿がこちらをちらりと見た。すぐに視線を外され、ナツクルジョーに近づく。数分間にらみ合い、メタナイト卿は言った。

「間違いない。お前が探しているのは、この私だ」

「！今なんて言った!？」

「お前の父を倒したのは、この私だ!!」

「……!!」

ナツクルジョーがメタナイト卿に殴りかかる。思わず目を塞いでしまった。体の大半を覆う仮面と、拳がぶつかる音は聞こえない。ゆっくりと目を開ける。

「どういふことだ」

メタナイト卿は剣を収めて、静かに話し始めた。

メタナイト卿とナツクルジョーの父親は戦友だったこと。ある日、戦いの最中、父親は敵に攫われてしまったこと。そしてある日、魔獣として戻ってきたこと。

ナツクルジョーは「嘘だ!」と叫んだ。それをメタナイト卿が「嘘ではない」と、落ち着いた声で話す。

「……そして、彼の想いに誓って」

ナツクルジョーに差し出したのは一つのペンダントだ。中には何が入っているのかわからないが、ナツクルジョーの父親にとって大切なものなのだろう。

最期まで持っていたこと、魔獣になってまで生きようとした息子への愛を語る。

「ナツクルジョー、お父様はあなたに会いたい一心だったのよ」

対してナツクルジョーは笑い出した。そして魔獣になってしまふ父親を「大馬鹿だ！」と怒りを見せる。

「まったくだ。そんなにしてまで愛した息子が魔獣になってしまつてはな！」

理性を捨て、憎しみで生きるものは魔獣と呼ばれる。

少年は否定するが、フォーム様とブン様が進み出てナツクルジョーがやった事をみせつけた。少年の攻撃をうけてボロボロになったカービィだ。

それでも魔獣であることを否定する。どれだけ魔獣になる条件が揃っていても、証明にはならないと。

「カービィが証明する！」

そうして再びカービィとナツクルジョーが向かい合う。

ナツクルジョーの攻撃をうけるだけだったカービィだが、フォーム様の「吸い込みよ」の言葉に反応し、エネルギー波を吸い込んだ。ファイターカービィとなった彼は、ナツク

ルジヨーと互角だ。陛下が仰つたとおり、このままでは勝負がつかないだろう。

突如ナツクルジヨーが変身し、まるで魔獣そのものに変身する！

「カービイは鏡だ！コピーした姿こそお前の姿！踏みとどまれ！」

メタナイト卿の言葉が届いたのか、ナツクルジヨーはカービイの攻撃をうけて元の少年の姿に戻つた。

青き戦士が少年に近づき、言葉をいくつか交わした。私には聞こえなかった。ナツクルジヨーが動かなくなる。私たちは顔を見合わせて、ナツクルジヨーの傍に駆け寄つた。

「気絶されたのですか？」

「そのようだ。城に連れて行こう。カービイも、二人とも怪我をしている」

「ぼよ」

あれだけ戦つたのに平気そうな顔をしているが、体のあちこちに擦り傷が見えた。

「怪我の手当てはお任せください」

「ああ、任せる」

日が昇る。朝日だ。

ナツクルジヨーはソードナイトが背負い、私たちはお城へと帰路についた。陛下たちは装甲車で先に帰られた。眠そうにあくびをしていらつしやつたので、すぐにお部屋で

眠られるかもしれない。途中で、カワサキの店により、外しておいた重りを回収する。

カワサキとは店で別れた。

「それじゃあね、カワサキ。今日はありがとう！」

「どうってことないよ」

彼の明るさには時々救われる。一日中働きづめだったり、走り回ったりした日は特に。

「あ、それからリーノ」

「なんですか？」

「デデのおっさんの下が嫌になったら、いつでも店においでよ。リーノなら大歓迎だ」
「まあ、せっかくですけれど私はまだ陛下の下を離れる気はございません。でも誘ってくれてありがとうございます」

「そうかい。残念だなあ。……またね、皆」

「さようなら、カワサキ。おやすみなさい」

「おやすみなさい。カワサキ」

「おやすみ」

子供たちは手を振って、戦士たちは頭を下げる。

ナツクルジョーは昼前には目を覚ました。一応手当てをしたとはいえ、まだまだ疲れ
ているのに、すぐにプブレッヅから出て行くという。朝食も食べずに……この場合は
ランチといえばいいのだろうか？とにかく何も食べずにいるのは良くないと思い、朝
の残りのご飯でおにぎりを作り渡した。

玉座の間、転送装置前でナツクルジョーにおにぎりが二つ入った包みを渡す。

「いいのか？すぐには返せねえぞ」

「構いません。おにぎりを包んでいる布は差し上げます。捨てるなりしてくださいま
せ」

「そうか。わかった。じゃ、遠慮なく貰っていくぜ。ありがとよ」

少年は鼻をこする。浮かべた笑みは爽やかなもので、好感が持てた。

別れの間には同席せず、疲れを理由に自室に戻る。アーニヤとランタンは朝のうちに
帰ったので、中には私一人だけだ。

洗面所で顔だけ洗い汚れを落とす。そしてパジャマに着替えてベッドに潜る。
帰路ですでに揺らめいていた意識は力を抜くと、すぐに沈んでいった。

雪と王女

常夏のププビレッジ。

本日も快晴。日差しが肌を焼くようだ。

暑すぎて何度も掃除の手を止めては、額や首筋の汗を拭う。今日はまた一段と暑い気がした。

「こうも暑いと毎日冷たい物ばかり飲みたくなりますわね」

「わにやわにや」

「あなたもそう思いますか？ですよねえ」

「わにや」

リーノのメイド服は夏仕様になっていて、上は半袖の上品なデザインのシャツ、下は薄手のスカートだ。自作なので好きなようにカスタマイズし、エスカルゴンに許可を貰って着ている。厚地のメイド服は、今は大切にクローゼットの中に仕舞われている。

城の廊下をせっせとほうきで掃いていく。するとそこに陛下が走って通り過ぎた。

「……大自然に挑戦ゾーイ!!!」

前半部分は聞き取れなかったが、後半はわかった。また何かダウンロードするつもり

なのだろう。掃除が一段落したら、メタナイト卿たちに報告しよう。今度は一体何をされるおつもりなのだろうか。

午後からは徐々に過ごしやすい気温になっていった。そしてお城の庭の草木が枯れはじめ、空からは白くて冷たい物が降る。寒い。手をかざして白い物に触れてみた。ヒヤツとした後、それは解けて水滴になった。ププビレッヅで見るはずがない、雪だった。異常だ。おそらく魔獣によって引き起こされている。ここまでこの国に変化が起きてしまえば、メタナイト卿への報告はいらないうらう。彼もきつと陛下の……魔獣の仕業だと考えるはず。

「リーノ」

優しく呼ばれた。振り返ると、部下を引き連れたメタナイト卿がいた。いつもと変わらない佇まいの三人に驚く。

「こんにちは、メタナイト卿。それにブレイドナイトさんとソードナイトさん。今日は一段と冷えますわ」

「おそらく陛下のせいだろうな」

「間違いないと思います。昼前に陛下が何か企んでいた様子を見ましたから」

「やはりか」

ため息でもつきそうな疲れた声を出される。陛下に呆れていらっしやるのだろう。

私たちの会話を聞いていたソードナイトとブレイドナイトが、それぞれの考えを口にした。

「では一体どうやってこの雪を降らせているのでしょうか」

「やはり魔獣でしょうか」

「……陛下たちはここ最近大人しかつたです。部屋に籠りきりになるなど怪しい動きはありませんでした。ですので陛下たちが何かしたというよりは、魔獣をダウンロードしてこの雪を降らせた可能性の方が高いと思います」

自分の知っている情報をできる限り簡潔に述べる。その言葉にメタナイト卿が頷いた。

「リーノの言う通りだろうな。しばらく様子を見よう。リーノ、あまり一人で出歩かないように」

「かしこまりました。お三方も気をつけて」

仕事が終わったのは夕方だった。その頃にはすっかり雪が積もりだして、私は歯を鳴らしつつ急いで自室に帰った。

「寒い！寒い！早く冬服に着替えないと凍え死んじゃう」

早歩きから走り出して、とにかく急いで自室に向かった。体が内側から若干温まってきた頃、自室の扉の前に誰かがいた。あの後姿はメタナイト卿だ。

「こんばんは、メタナイト卿。何か御用でしょうか？」

声をかけると、メタナイト卿はこちらを振り返った。メタナイト卿はすぐに話し出さず。私の瞳を見ていた。

「？」

「……用は、特にないが。君に会いにきた」

「……………まあ」

流暢ではない、絞り出すような言葉にリーノの胸は高鳴る。

このまま帰すなんてとんでもないと言わんばかりに、言葉を並べて部屋に招く。

メタナイト卿には椅子に座ってもらい、お茶を沸かす間にささつとリーノは着替えを済ませる。お風呂場に行き、ちよつと厚手のズボンと長袖に着替えるだけだ。数分で支度は整った。

お風呂場を出ると、まだお湯は沸いていない。

「メタナイト卿は何を飲まれますか？」

「では、コーヒーを」

「かしこまりました」

ここに城の調理場ほどの調理器具は揃っていないため、本当においしいコーヒーは淹れられない。それでも持てる知識を総動員させて、できるかぎりおいしいインスタントコーヒーを淹れた。

それをメタナイト卿にだす。自分は手抜きで紅茶だ。飲めて体が温まればそれでいいのだ。

「うむ、うまい」

「それは良かったです」

好きな人においしいコーヒーをだせてよかった。これからはコーヒーに関連する器具も揃えた方がいいだろうか。そういえば、彼がコーヒーを好きかどうかも知らない。

「メタナイト卿は、コーヒーがお好きなのですか？」

「どちらかといえば好きだな。君は紅茶の方が好きか？」

「どちらも好きです。特に好きなのは緑茶などですわね」

「そうなのか？」

「ええ、あの苦さがたまりません。かといって渋すぎるお茶は飲めませんけれど」

「そうか……覚えておこう」

「メタナイト卿の、特に好きな飲み物は何でしょうか？」

「特にはない。おいしければいいな」

「なるほど。私も、覚えておきます」

和やかに笑い合う。

やつぱり、コーヒーに関連する器具を揃えておこう。彼がいつここに来て、おいしいものが飲めるように。

お茶を一杯飲んだ後、メタナイト卿は帰られた。なんでもまだ用事が残っているらしい。戦士の仕事というのは大変だなと思った。

次の日、プブレレッジは一面の雪に覆われた。

手がかじかむわけだ。指先が痛いので何度も息を吐きかける。

厚手のメイド服に手袋と、タイツを身につけて部屋の外に出た。するとワドルデイの一団が、彼らの身長ほどある雪かき用のシャベルを持って、目の前を歩いて行った。雪かきでもするのだろうか。今日の掃除には雪かきが追加されるかもしれないな。

案の定、掃除の仕事の中に雪かきが追加されていた。

全身くたびれたけれど、夕飯の用意が残っている。メイドの仕事も楽ではない。

夕飯はおでんを出して差し上げる。陛下たちは美味しそうに召し上がってくださった後、すぐに出かけられた。雰囲気は外に遊びに出かける子供そのものだったのに、そ

の笑みはあくどい。すぐにメタナイト卿にお知らせする。

「わかった。様子を見に行こう。君は城から出ないようにな」

「はい。気をつけますわ。ですので、メタナイト卿も気をつけてくださいね」

「ああ、油断はしない」

その夜は今まで経験したことがないほど寒かった。部屋の中でも凍えてしまいそうだった。途中で起きて白湯を飲んだぐらいだ。

ペットボトルにお湯を入れて、タオルで包む。なんちやつて湯たんぽの完成である。それを布団に持ち込んでようやく眠りについた。

朝、汗だくになって飛び起きた。もう、あの指先が凍るような気温ではない。温かなプブレッジが戻ってきたのだ。

「元に戻って良かった……。でも、昨日のうちに用意した冬物はもういりませんね」
片付けが少々面倒に思えるリーノだった。

その日、村に行くとき親友たちに会った。

なんでも陛下たちがスノーボードやスキー板を配ったおかげで、雪を楽しめたらしい。

「そうなのね。それじゃあ、今回は怒る必要はないですね」

「いいんじゃない？まあ、被害がでたところもあるでしょうけれど、一日程度ならお休みとして考えればいいでしょうし」

「大きな被害が出なくて良かったです」

リーノ、アーニヤ、ランタンは雪によつて村に被害が出なかったことに安心した。

村に大きな被害が出なかったのも、今回は怒らなくていいだろう。村人を楽しませてくれたみたいだし、何か美味しい物でも用意しておきましようか。

「そういえば、そろそろ食事をまた開きたいですね」

「そうね。いつがいいかしら。私は今月なら二十日以降が開いているわね」

「私は二十五日以降でしろうか」

「では二十五日以降でまとめみましょう。城に帰つてメ……皆さんに聞いておきますね」

「頼んだわ。じゃ、私たちはそろそろ買い物に行きますか」

「そうですね。リーノ、また会いましょう」

「じゃあね」

「二人とも、またね」

その日は陛下たちにすぎ焼きを出して差し上げた。子どものようにはしゃいで食べられる姿は微笑ましくて、私は頬を緩める。

「陛下、今後も村に被害が出ない程度にお願いしますね」

「うむうむ、わかつておるゾイ」

「ほとんどカービイたちのおかげでゲスけど……」

「エスカルゴン！」

「ああ！いや、なんでもないでゲスよ!!」

なるほど。カービイたちのおかげで冬が一日で済んだのか。

「わかりました。明日のおやつはナシということ」

「ガガン!!!」

「嫌ゾイ！食べたいゾイ!!」

「ないものはございません」

悪しからず。

夜、後は自室に戻るだけという時間に戦士たちの部屋を訪ねた。

「こんばんは、メタナイト卿」

「ああ。よく来てくれた」

今日はメタナイト卿が出てくれた。彼は私を部屋に招き入れる。

「何か飲むか？」

「いえ、長居できませんのでこのままです。実は次の食事会の日程の事でご相談したいのです」

「今月の末日ならば問題ないと思う」

「という、三十日ですわね。わかりました。アーニヤとランタンにもそのように伝えますわ」

さらさらと持ち歩いているメモに内容を書き込む。これで用事は終わりだ。あまりにも早すぎて、時間が余ったぐらいだ。少しだけ、ここにおいても許されるだろうか。

メタナイト卿の様子を窺うと、彼が手招きした。

「おいで」

「はい」

広げられた腕の中にそつと飛び込む。彼の背中に手を回すと、彼もまた同じようにしてくれた。

この人といると安心できた。体から力が抜けていくのがわかる。呼吸も深いものに変わり、眠気が襲ってきたところで、彼から離れた。

「すみません。このままだと眠ってしまいそうで……そろそろ帰りますわ」

「送るか？」

「いえ、大丈夫です。時間を作ってくださいありがとうございます」

「君の為ならこのぐらいいはする。いつでも言ってくれ」

「ふふ、それじゃあ甘えちゃいますね」

ドア越しから仲睦まじい声が聞こえてくる。

「君の為ならこのぐらいいはする。いつでも言ってくれ」

あまり聞かない、主人のひどく優しい声。

「ふふ、それじゃあ甘えちゃいますね」

もう一方は最近主人と仲がいいこの城唯一のメイドの声。

はて、二人の仲はこんなにも近いものだったのか。もしかしたら、自分が思うよりも特別な仲なのかもしれない。現在、二人から「付き合っている」という報告は受けていない。なので、一応知らんぷりすることにした。

数歩下がって、ドアが開くタイミングを待つ。

ドアが開いた。わざと足音を鳴らして近づく。自分に気づいた彼女がこちらを振り向いた。

「ブレイドナイトさん、こんばんは」

「こんばんは。お帰りですか？」

「ええ、今日はこれで失礼いたします。それでは、おやすみなさい」

「おやすみなさい」

彼女は自分の隣を抜けて自室へと帰っていった。その後ろ姿をしばし眺めて、主人がいる部屋の中へと入る。

扉をしっかりと閉めてからメタナイト卿に向き合った。

「報告を聞こうか」

「はっ」

先ほどの声は聞き間違いか、はたまた夢か。主人の声はいつも通りに戻っていた。

自分も、アーニヤと話す時はあんな感じになっているのだろうか。

ブレイドナイトは頭の隅でそう考えた。

メタナイト卿が外出している日に、とんでもない事が起きた。

ピピ惑星のローナ王女様がこのお城にいらつしやつたのだ。

というのも過去形で、私は裏方に回って食事の準備と食事の準備と食事の……食べ物関連の仕事ばかりをやらされていた。なので王女様にお会いしたのは最後にお見送り

した時だけだ。

王女様はフーム様、ブン様、カービイと親しくお話されていて、一緒に楽しく遊んだんだろうなと思つた。

それにしてもお美しい。女である私でも魅了されてしまうのだから、陛下が心を奪われてしまうのも納得だ。……ここにメタナイト卿がいなくて良かったかも。例え魅了されずとも、王女様の御顔をじつと見られる彼を、私は見たくないもの。妬いてしまわ。

王女様は夕飯前に帰られた。なので、多めに作つた夕飯が余つてしまった。

今回は自分で食べる量を決められるように、とカレーを作らせてもらった。カレーと言つても高級な食材をふんだんに使い、時間と手間もかかっているので、ただのカレーと甘く見られたくない。

ふ、といい考えが浮かんだ。

明日にメタナイト卿が帰ってくるはずだ。そのときに食事を予定になつてゐる。その食事にこのカレーをだそう。今手を付けていない量の半分を取り分けたら、充分に六人が食べられる量を確保できる。残り半分、六人分のカレーがあるのだ。陛下とエスカルゴン閣下なら食べてしまうだろう。

リーノはカレーの半分を別の鍋に入れて、そのまま冷蔵庫に放り込んだ。残りは温め直して、夕飯時に出す。

デデデ大王はこのカレーを酷く気に入った。エスカルゴンもだ。リーノは心の中でガツツポーズをしながら、微笑み「ありがとうございます」と頭を下げた。

翌日。食事会にて。

リーノが作ったスパイスの効いたカレーライスを頬張りながら、昨日プブレッジで起こった事件について話す。話題はもちろんローナ女王のことだ。どうやら村には護衛の方が訪問されたらしい。綿菓子を美味しそうに食べていた、とランタンが言う。

「リーノ、あなたはお城にいたんですから、王女様を見たんでしょう？ どうでしたか？」
「とてもお美しい方だったわ。上品で、煌びやかで、華やかで」

「護衛の方も相当綺麗だったけれど、王女様に一度お会いしたかったわ」

「ソードナイトさんとブレイドナイトさんは王女様にお会いしていませんか？」
「自分たちは他のことで忙しくて、会えなかったな」

「他の事？」

「秘密だ」

「お城の仕事ですからね。秘密が多いですよ。私も二人には話せない内容のものがあ

りますし」

「それじゃ仕方ないわね。にしても、このカレー本当においしい」

「ありがたい、ランタン。気に入ってもらえて嬉しいわ」

食事は楽しい時間が過ぎた。それが終われば後片付けだ。同じ組み合わせで掃除、片付け、食器洗いを済ませていく。慣れた手つきで片付けが終われば、あとは解散だけだった。

戦士たちが身支度を整えて、席を立つ。

「リーノ。今日も美味かった。ごちそうさま。また来月頼む」

「はい。心待ちにしておりますわ」

「それでは、アーニャ。また」

「またな、ランタン」

「おやすみなさい、ブレイドナイトさん」

「じゃあね、ソードナイト。風邪ひくんじゃないわよ」

各々が別れの挨拶をして、戦士たちが部屋を出て行く。

リーノは親友たちに聞きたかった。以前にも増して近くなっているように感じる距離感に対して質問したかった。もしかして、自分と同じようにお付き合いしているのかと。もし、その予測が間違っていたら自爆だ。だから今はまだその時期じゃない。メタ

ナイト卿ともう少し過ぎ、四人に話せるようになったら聞こう。

ここ最近は平和だったと。そう思っていたんだけど、事件はやっぱり突然起こる。

軍曹とダイナベイビーと忍者

フォーム様たちがまたいなくなつた。

今度は海に遊びに行つたきり、帰つてこないとメーム様は泣いた。

泣きつかれた私は、とりあえず大王様たちの動向を探つた。

私の目の前では大王様も、エスカルゴン閣下も大人しい。時々、クスクスと笑いをもらすので何か企んでいることは明白だった。食堂でお茶を楽しまれる陛下にはつきりと聞いてみる。

「陛下、とても楽しそうですわね。何かあつたんでしょうか？」

「ないゾー！」

「そうそう！ないでゲスよ！」

何も無いという割には笑いをこらえている。隠し事が下手だと思つた。陛下たちの後を四六時中ついて歩くことはできないので、メタナイト卿に相談する。

戦士たちの部屋に行くと、彼に会えた。

「……というわけなのです」

「なるほど。そなたの言う事はわかつた。今日の夜からでも調べておこう」

「お願いしますわ」

メタナイト卿に任せておけば安心だ。明日にでも良い話が聞けるだろうかと思つていたら、戦士はその日の深夜に尋ねて来た。

自室で、もう寝ようとしていた矢先だった。私はメタナイト卿を自室に招き入れる。

「お茶でもご用意しますね」

「いや、今回は遠慮する。陛下たちだが、やはりフォームたちがいなくなったのは二人のせいらしい」

「やっぱり……。フォーム様たちは無事に帰つて来られるでしょうか？」

「みんなを信じる他あるまい。陛下たちがカービイたちにとどめを刺しに行くと言つていた。陛下たちの船を奪えば、ププビレッジまで帰つてこられるだろう」

「そうですか……。こんな遅くまで調べてくださつてありがとうございます。メーム様たちには私の方から伝えます」

「わかつた。では、おやすみ」

「おやすみなさいませ」

メタナイト卿はすぐに部屋を去っていった。疲れていたんだと思う。今度、差し入れる時には、何か甘い物を送ろう。それで少しでも疲れが取れればいいな。

リーノは布団に潜り込み、明日の予定を立てる。

「明日は早起きしましょう。お菓子を作った後に仕事に行つて、メーム様にお会いする。それから部屋に戻つてきてお菓子を包み、メタナイト卿たちに渡ししましょう」

予定は組み立てた通りうまくいった。メーム様とパーム様は、私の説明に多少混乱されたようだけれど、子供たちを信じて待つ決断をした。私も不安だが、お二人ほどじゃない。そもそも私はこの世界の、アニメ星のカービーという物語のラストを知っている。子供たちは無事に帰ってくるという確信があった。

だから今は信じて、普通の生活に戻ろう。

子供たちは数日で帰つてきた。駆け足で城の門をくぐり、待ちかねていたご両親の腕に飛び込む。そうして家へと帰つていった。

その姿を、私は上層階から見守っていた。隣には愛しい戦士がいる。

「無事に戻つてこられたようです。本当に良かったです」

「そうだな。……顔つきが少し大人びたようだ。良い経験を積んで来たのだろう」

「言われてみればたしかに……。きつと知らない土地に放り出されて心細かったでしょうに、それでも子供たちだけで頑張ったんですね。わたくし、自分のことのように誇らしいですわ」

目を細めて遠くを見る。彼らはどんな冒険をしたのだろうか。私に聞かせてくれるだろうか？それとも大したことじゃないと、語らずに笑うだろうか。

フォームたちを見ると、隣からの視線が気になった。「何か？」と戦士に向かつて微笑めば、彼はじつとこちらを見つめてくる。その瞳は熱を含んでいて、リーノは照れくさくなり顔をゆつくりとそらした。

ところで陛下たちは、フォーム様たちが返ってきた翌日には浜辺で見つかった。着ていた洋服がボロボロだったのと、酷くお疲れの様子から痛い目にあつたのは間違いない。今回、罰はナシにしておいた。

酷い目にあつたのだから、もう金庫のお金がないのだから、魔獣は呼べないから、しばらく大人しくしているだろうと思つた。陛下たちの行動力を舐めていたわ。

玉座にて、閣下が作られた薬により芋虫が魔獣になつてしまった。すべてはドクター エスカルゴンの努力の賜物である。

玉座の外で私は額を抑えた。連日、夜遅くまで真面目に頑張つていらつしやるからとお茶や夜食を差し入れていた。その努力が実るようになつてしまつたのだ。こんなことになるなら、薬ができる前に止めるべきだつた。

「とにかくメタナイト卿に報告しておきましょう」

いつも色気のない報告ばかり。たまにはゆっくりと二人の時間を楽しみたいものだ
と、リーノはため息をつく。

メタナイト卿に報告すると、彼もため息を吐いた。

「まったく、あの方は……。陛下ならすぐに行動なさるだろう。気をつけておく」

「わたくしも、陛下や閣下の行動に注意しておきますわ」

「ならば明日、一度会わないか？」

「ええ、かしこまりました」

約束をとりつけて、その日は仕事に戻った。陛下たちはほとんどの時間を外で過ごさ
れたので、私は有益な情報を手に入れることはできなかった。

次の日。仕事を抜け出し城のベランダでメタナイト卿と、メタナイト卿が協力を頼ん
だロロロとラララ、そして私が集まって報告会を行う。

「では、わたくしから。陛下たちは夜中に出かけられて、明朝戻ってきました。その時た
いへいお怒りだったとか。何かが上手くいかなかったようですね」

「間違いなく、例の薬関係だよね」

「きつと薬を打ちたい相手がいたんだけど、上手く打てなくて怒ってたんだわ」

「ラララの言う通りだろうな。その相手だが、おそらく……」

「今朝から村を騒がせているダイナブレイド関係でしょうか？」

後で村において、村人たちの安否をたしかめないとはいけませんね。きっとダイナブレイドのせいで村は滅茶苦茶だわ。

その時車の音が聞こえた。城に入ってくる車の音なんて一つしかない。陛下たちだ。全員で下を覗き込むと、陛下と閣下が高笑いして帰ってきたところだった。

「何かが上手くいったようですね」

「急ごう。おそらく時間はあまりない」

「そうですね。例の薬は玉座の間にあります。私はそちらに行つて陛下たちを待ち伏せします」

「私はカービィにその事を報せてくる。リーノ、無茶はするな。ロロロ、ラララ、手伝つてくれ」

「かしこまりました」

「任せてよ！」

「ねー！」

玉座の間に入り、薬がある近くの柱に身を隠す。数分後には陛下たちが入ってきた。大きな鳥かごを抱えている。中にはフォーム様や、ブン様ほどの背丈がある禿げた鳥が

「びいびい」鳴いていた。あれがダイナブレイドの雛だろうか。本当に大きい。

「ダハハハハハ！ようやつと雛を手に入れたゾイ！」

「早速魔獣にしちやうでゲスよ！」

いそいそと巨大な注射器の前に鳥かごを置いて、お二人は装置の前に立った。不気味に聞こえる笑い声を漏らしつつ、注射器のついたアームを動かす。

私は飛び出した。

「やめてくださいーい!!」

雛と注射器の間に割って入る。突然、飛び出してきた私に陛下たちは非常に驚いたようだ。閣下なんて目を限界まで広げて「あつぶねーな！オイ!!」と叫んでしまっていた。

私は両手を広げてやめてくれるよう訴える。

「陛下、閣下、このような非道な真似はお止めください！雛が、ダイナブレイドが可哀そうではありませんか！」

「黙れー!!ワシの目的を邪魔する奴は許さんゾイ！痛い目を見たくなければどけえい!!!」

「陛下は本気でゲスぞ!!」

「どきませんー！」

「ぐぬぬ……」

どうやって時間を稼ごうか考えていた、その時だった！

カービーがワープスターに乗って乗り込んで来た!!

「カービー!!」

三人の声が重なる。続いて巨鳥が玉座の間の扉を破壊して入り込んできた。あれがダイナブレイドだろうか、近くで見ると相当大きい。雛が嬉しそうに騒ぎだす。うん、親鳥で間違いなさそう。

トツコリがダイナブレイドの耳元まで飛んできた。

「わかったか？ダイナブレイド！お前のベイビーを攫ったのはコイツらなんだい!!」

コイツらとは陛下たちの事だろう。ダイナブレイドは陛下たちを睨む。それを見ていた私でさえすくみ上げるほど怖いのだ。直接見つめられている陛下たちはもっと怖いに違いない。

「あゝの、お許しを……」

「ワシに近づくなぞい!!」

逃げ出そうとする二人。ダイナブレイドの大きな（陛下の背丈ほどある）足に踏みつけられてしまった。騒いで逃げ出そうともがくが、逃げられない。

巨鳥はその大きすぎる翼で注射器を弾き飛ばした。注射器は壁にぶつかり、陛下たちの目論見は水の泡となって消えたのだ。

ダイナブレイドの顔が突然こちらを向いた。その瞳は「どけ」と言っているように感じたので、慌てて足を動かす。

雛の前から横に移動するとダイナブレイドはその硬いくちばしで鳥かこの錠を壊した。雛が自ら出てきて親鳥の足に抱きつく。良かった。雛は無事に帰ったのだ。

「カーベィー！」

「やったね！」

フーム様とブン様たちが来た。私もそちらに合流する。

「フーム様、ブン様、カーベィ。雛は無事に解放されましたわ」

「ええ、本当によかった！リーノが時間を稼いでくれていたんですね。ありがとうございます！」

「メタナイト卿から聞いたぜ。やるじゃん」

「無我夢中でした。とにかく皆様が無事で良かったです」

みんなで親子の様子を見る。雛とダイナブレイドは顔をこすり合っていた。

「まったく世話を焼かせやがったな！」

「一件落着つてとこだね」

「今回はカーベィとリーノのおかげで命拾いしたってわけね」

「ほよう」

「わたくしが雛の命の恩人ですか？不思議な気持ちです」

そうして話している間にダイナブレイドは雛と陛下たちを抱えて大空へ舞い戻る。みんなまで追いかけた。

「元気でねー！もう心配かけちゃダメよー!!」

手を振って別れをつける。雛が助かってくれて嬉しい。けれど、確実に陛下たちは何かされるので、素直に手を振れない。どうか返してくれないだろうか。

あ、落とされた。かすかに水しぶきが聞こえてきたので、川にでも落ちたのだろうか。悪運の強い方たちなのか、ダイナブレイドが慈悲をかけてくれたおかげなのか。真相は闇の中だ。

「わたくしは、陛下たちを探すようワドルドゥ隊長にお願いしてきます。それでは」
挨拶もそこそこにフォーム様たちと別れる。

城は最低限のワドルデイ達を残して、陛下たちを搜索しに行った。皆が戻ってきたのは深夜だった。私は陛下たちがお戻りになるのを待っていた。帰ってきたら温かい飲み物を出して迎えたかったからだ。罰は受けたのだから、私からこれ以上何かする必要はないだろう。

ダイナブレイドの件で懲りたのか、陛下たちは珍しく大人しかった。一週間ほど平穏な日々が過ぎていく。

しかし、私は思うのだ。そろそろ何かが起こるだろう、と。

「本当、もうしばらく平和であってほしいものだわ。でも、なんだか雲行きが怪しいのよね」

天気の話ではない。陛下たちの様子だ。今庭で忍者ごっこをしているのだ。人に手裏剣を投げるのは危ないからやめていただきたい。実際にフォーム様に当たりかけている。今日の夕飯の時間にも注意させていたどころ。

洗濯かごを持って、ベランダから離れた。

夕飯時。陛下と閣下に「人が近くにいる場合は忍者ごっこをしない」と注意したが、ツンとそっぽ向かれて話を聞いてもらえなかった。

「そのように反抗的な態度を取られるようでしたら、こちらにも考えがございます」

「な、なんゾイ」

「一週間、夕飯はお粥です」

「またか!!」

「美味しく、栄養面にも気を使ったものをお出ししています。油ものやお肉が中心の食生活よりも健康的ですわ」

「アレは朝、ものすごく腹が減るから嫌でゲスよ!!!」

「では、お約束してください。人のいない時間帯を狙って遊ぶこと。人が通ったら遊びを中断する事。よろしいですか?」

「ぐぬぬ……わかったゾイ! だから粥はやめい!」

「しよーがねーなこりゃ……」

「ご理解いただけでよかったです」

お粥攻撃は案外効き目がある。これからも多用するかもしれない。これに加えて別の対策も考えた方がいいだろう。何かいいかな。毎食サンドイッチばかりだそうかな。それだとカツサンドとか、フルーツサンドとか種類が様々にある。おいしい食べ方が多いから交渉には使えないか。

夜、久しぶりにメタナイト卿を自室に招いて、お茶を飲む。陛下たちが忍者ごっこをして話をした。彼は懐かしそうに銀河戦士時代の話をしてくれた。

「銀河戦士団の中にも忍者がいたんですね。さぞ強かったんでしょうね」

「強かった。諜報や潜入にも長けていたから、銀河戦士団は彼らに頼り過ぎていた面も

あったな」

「まあ、そうですね」

銀河戦士団の忍者といえば、裏切り者のヤミカゲだ。そういえば、ヤミカゲって村が忍者ブームの時にデリバリーされて、カービーとの戦いに敗れたけれど生き残った。それ以降登場せずにアニメは終わってしまい、永遠の伏線扱いになってしまったんだよね。

……ん？村が忍者ブームの時？

もしやと思い、メタナイト卿に確認する。

「……メタナイト卿、ちょっとお聞きしたいんですけれど。今の村のブームはもしかして忍者ですか？」

「ああ、そうだ。村に買い物にいったソードとブレイドから聞いたが、それがどうかしたか？」

「いえ。陛下たちのブームの元がどこか、確認しておきたかったです」

ということとは、近々ヤミカゲがここにデリバリーされてくるということだ。ヤミカゲのイメージって怖いとか敵の中じゃ強い方だから、会いたくない。会わずに済んだらいいな。

「どうした。何か心配ごとでも？」

急に無口になった私を気遣ってください。私は正直に話した。

「このブームにのって、陛下が忍者の魔獣をデリバリーするかもしれないと思いました」
「その可能性は大いにあるな」

二人してため息を吐く。まったく陛下には困ったものだ。

元気がないよりかは、ずっといいかもしれない。けれど元気が有り余るのも問題だ。
ちようどいいくらいの塩梅で抑えてくれないものだろうか。

紅茶を飲もうとカップを傾けた時、中身がないことに気がついた。

「あら、もう飲んでしまいましたわね。メタナイト卿、おかわりはいかがですか？」

「……いや、コーヒーはもういい」

「そうですか？では、何にしましょう」

「君を、くれないか？」

「あ、えーと……」

急に、来た!! そうなったらいいなー、と考えていましたけれど！

顔を赤くしたまま動かない私に戦士が緩やかに近づく。そして手を取った。

「だめか？」

「あう……だめでは、ありません」

あなた、そんな声も出せるんですね！驚きですわ!!!

恋人の甘えた声に体が震える。重ねた手から熱が伝わり、胸がどきどきしている。彼に導かれて、私たちはベッドの方に足を進めた。

その日の深夜。

まどろみの中、愛しい人の腕に抱かれていた。そんな甘い空気をぶち壊す如く、警報が城中に鳴り響く。

二人はほとんど同時に飛び上がった。

「な、なんですか!?!」

「何者かが、城に侵入したようだ。そなたはここにいろ。様子を見てくる」
「わたくしも……うう……」

動けない。全身が重くだるい。上半身を起き上がらせるので手一杯だ。出て行こうとした戦士はベッドに戻ってきた。恋人の背中に手を置いて支える。

「無理をさせたか」

「いいえ。わたくしが望んだことです」

「……そうか」

一瞬。仮面がズレて、唇が重なる。リップ音がして熱が離れた。

「何が心配だ？」

「フォーム様たちのことが」

「では子供たちの様子も見てこよう。朝に伝える。それでいいか？」

「はい。よろしくお願いします」

「任せてくれ」

メタナイト卿は今度こそ、部屋から出て行つた。足音が遠のいてから、ぱたりと背中からベッドに寝転がる。

「(恋人って、こんなに甘いものなのか??)」

顔から湯気が出てしまうほど恥ずかしかった。

夜明け頃にメタナイト卿は部屋を訪れた。

「侵入者は忍者だった。どうやら陛下たちの持っている巻物が目当てで侵入したらしい。子供たちは無事だ。むしろ件の忍者と仲良くしている」

「教えてくださってありがとうございます。なんといいか、さすがフォーム様たちですわ」
胆が据わつているというか、コミュニケーション能力が高いというか。どちらにせよ侵入者と仲良くなるなんて、さすがだと思う。

メタナイト卿は気になるという事で、もう少し子供たちの様子を見てくると部屋を出

て行つた。私はそれを見送つた後、仕事に行く。

朝食をだして、食器を片付ける。それからお掃除。今日は玉座の間の階の廊下を、ワドルデイたちと綺麗にほうきではく。

午前中だった。天気は曇り。突然、玉座の間から電子音が聞こえてきて、嫌な予感があった。ワドルデイたちと手を止めて、扉の方を見る。音が聞こえてしばらくした後、扉が勢いよく開いた。

出てきたのは陛下たちだ。こちらに歩いてきた。私とワドルデイたちは廊下の片側に整理した。

「リーノ、今から出かけてくる！昼までには戻るゾイ!!」

「お昼の準備、しておくでゲス」

「かしこまりました。昼食はカツサンドを予定しております」

「カツサンド!」

「んん、いい響きでゲスなあ!」

「こりやあ楽しみだゾイ!!」

足取り軽やかに、陛下と閣下は先へ進む。その後ろを見慣れない男が従っていた。私はメイドとしての顔を崩さず頭を下げ続ける。

重苦しい雰囲気と威圧に、彼が只者ではないことがわかる。顔を拝見したかったがそ

れ以上に怖かったので、とにかく目を閉じていた。

足音は聞こえない。けれど空気でわかる。これを気配と言うんだろうか。彼の気配は限りなく薄い。その薄さが異常で、私には浮いているように感じたのだ。

それは目の前で止まった。

「おい」

「はい」

目を開けて、彼を真っ直ぐ見る。左目に大きな裂傷があった。そして何よりも服装が、忍者を物語っている。

彼は私にぐっと身を寄せて来た。近すぎる。慌てて後ろに下がるが、あいにく壁だ。これ以上下がれなかった。忍者の腕が伸びて、横をすり抜けて壁に押し当てられる。まるでこれは壁ドンじゃないか。どうせしてくれるならメタナイト卿に頼むぞ、私は。

「フーン！俺の気配をよむから何者かと思えば、ただの小娘か」

「こ、小娘……っ？」

もうそんな歳ではない。リップサービスの類かと思ったが、初対面にこんな状況で言われるのもなんだかおかしくて、混乱する。

スン、と忍者が鼻を鳴らした。

「……男の匂いがするな」

「は？」

訳がわからずさらに困惑した。相手は私の様子におかしそうに笑って、愉快さに瞳を歪めたかと思えばさっさと先を行く陛下たちの後を追った。

なんだったの、あの人。

掃除に戻ってもあの忍者の事が忘れられない。こう、イライラするし腹が立つのだ。それに最後にかけてられた言葉が気になる。男の匂いつてなんぞや？

「(男物の香水はかけていないから違う。シャワーは毎日浴びているから臭いはずないんだけど、どうしてあんなことを言われたのだろう?)」

わからなくて、その日はもんもんと一日を過ごした。

昼過ぎになってもそれは変わらない。なんとか今ある集中力を総動員させてカツサンドはお出しできたものの。仕事が手に着かずその日は大変だった。

夕方ごろにメタナイト卿にお会いできた。城の廊下で会ったので、近くに寄り過ぎないように気をつける。誰が見ているかわからないからね。

そこで、忍者に出会った話をした。

「そうそう。今日の昼前、陛下がデリバリーした忍者に会いましたの」
「なんと、ヤミカゲに会ったのか!?!」

あ、あの忍者ヤミカゲだったのか。永遠の伏線さんに出会えてちよつと感動する。け

れどもう会いたくない。怖いからだ。

「なにもなかったのか？」

「少しお話ししました。俺の気配をよめるなんて……とか、男の匂いがするな……とも言われましたね」

メタナイト卿は数瞬黙った後、重々しく口を開いた。

「私は、女の匂いがすると笑われた」

「……つまり？」

「ヤミカゲはおそらく、私たちの関係に気づいた」

「まさか、そんな……」

「それができてしまうのが忍者の恐ろしいところだ。あくまでも想像の域だろう。しかし奴は確信しているはずだ」

「どうしましょう。ずっと内緒にしてきたのに、バレてしまいましたわ」

「今すぐどうにかなるとは思えない。だが、考えてもいいのかもしれない。身内に話す準備ができているかどうか」

第三者からある事ない事を吹き込まれてバラされてしまうよりは、自分たちの口から話した方がいいだろう。

視線が語りかけてくる。君はいいのか、と。私は強い決意を持って応える。

「私は、できるならあなたとの関係を公表したいです」

「わかった。では、次の食事がもうすぐだから、その時にでも私たちのことを言おう。いいね?」

「かしこまりました」

次の食事会、非常に緊張してきました。

母と炎の魔獣

朝、もうすぐ昼にさしかかる頃だった。エスカルゴンの母がこのプブレッジを訪れると聞かされた。

「おつかさんには、私が大王だと言っちゃったんでゲス！だから……一生のお願いでゲスよ！リーノ!!」

「かしこまりました。今日から明日の朝まで、そのように振舞わせていただきます」
「ありがとうでゲス!!」

エスカルゴン閣下はスキップしながら廊下を歩いて行つた。この調子で城中の兵士やメタナイト卿たちの所に行つて頼み込むつもりなのだろう。

普段苦勞をかけられることも多いが、根本的に悪い人ではない。それに二十年間も私の面倒を見てくれた人だ。こういうときに恩返ししたいと思う。

さて仕事だ。閣下のお母様がこの村に到着するのが昼頃だとする。色々と村の中を回るだろうから、こちらに来られるのは夕方だろう。それまでに一番いい客室を整えておかなくちや。

数名のワドルデイを連れて、客室に向かった。

掃除が終われば、晩餐会とその後の村人たちも参加できるパーティのための下準備を行う。後は簡単な調理をするだけで、できあがる。それで一旦はストップだ。

「これでよし」

キッチン回りも綺麗に掃除して、火を消し、一息つく。エプロンを取り替えたらもう一仕事だ。エスカルゴン閣下のお母様を迎えに行こう。

閣下とそのお母様は良く似ていた。もう双子と言っても過言ではないくらいだ。驚きはしたけれど、それすらも張り付けた笑みの下に隠して。完璧なメイドをできるだけ演じる。

エスカルゴン様は慣れていない言葉遣いで私を紹介してください。

「おつかさん、このメイドがおつかさん付きになるでゲス。リーノ、頼んだでゲスよ」
「かしこまりました、大王様。リーノと申します。至らぬ点もあるかと思いますが、どうぞよろしくお願いいたします」

「まあ、こんな綺麗な人がメイドさんなのかい？ やつぱりお城つてのは凄いとこころだねえ。長生きはするもんだよ。よろしくね、リーノさん」

疲れているだろうから、早速お部屋に案内させていただく。普段は王族の方を泊める

ための部屋だ。とつても豪華だし、なによりベッドがふかふかしている。エスカルゴン様のお母様はたいそう驚かれて、きらきらしすぎて目が痛くなつてしまふ、と笑われた。たしかに、ここは陛下の趣味が反映されていてちよつと金ぴか過ぎる。

「別のお部屋に移動しますか？」

「いやいや、ここで充分。ありやあ、ベッドがこんなにあつちやだなんて！よく眠れそうだよ。長生きはするもんだね」

「喜んでいただけで何よりです」

「おつかさん。荷物置いたら、城の中を案内するでゲスよ」

「はいはい。すぐ行きますよ」

「それでは、わたくしは晚餐会と夜の歓迎パーティの準備にとりかかります。失礼いたします」

「ありがとうございます。リーノさん、これ、お駄賃」

エスカルゴン閣下のお母様は小さき包みをくださった。できうる限り恭しく受け取る。

「ありがとうございます。お母様」

「いいのよ。こんぐらいしかできなくて悪いね」

「わたくしには充分でございます」

閣下とお母様とは、部屋の外で別れた。お二人の後姿を見送つてから、私は調理場へ

と向かう。その途中でメタナイト卿たちに会った。

「お仕事お疲れ様です」

「ああ、そなたもな」

そこでリーノはピンと閃いた。そうだ、メタナイト卿たちにも手伝ってもらおう、と。「あの、これから三十分ほど、時間は空いていますか？ 晚餐会で出す食事の味見をお願いしたいんです」

「リーノ殿が作る食事の……」

「味見……」

「ごくりとよだれを飲み込む音が聞こえてきそうな声。二人の部下の視線が、上司であるメタナイト卿に注がれる。

「まあ、三十分ほどなら空いている。頼まれよう」

「ありがとうございます。では、一緒に参りましょう」

調理場へ入ると、すでに調理担当のワドルデイたちが支度を始めていた。全員にお礼を告げて、自分もその輪に混じる。

「メタナイト卿たちは奥の机の方でお待ちください」

「わかった」

準備は済んでるので、最後に味を調べたり、もう一度温めることで出来上がりだ。三十分もかからずできた料理を、小皿に移して戦士たちに差し出した。戦士たちは美味しそうに食べてはぺろりと平らげる。

「サラダがシャキシャキしていて歯ごたえがいい。甘いし、何よりドレッシングと合っている」

「この肉とろけてしまうな。おいしいです」

「スープもしつこくなくていい濃さだ。飲みやすい」

三人に出した料理はすべて好評だった。リーノはほつと息をつく。

「ありがとうございます。これでさらに自信を持って、お母様にお出しできますわ」

「そなたの料理はこの国一番だと聞いたが？」

「まあ、お世辞が上手ですこと。わたくしはまだまだ修行途中の身ですわ」

「謙遜だな」

「?」 本当の事だと思えますけれど?」

実際、上には上がいる。サトさんやハナさんがそうだ。村の女性たちは料理上手な方が多い。

メタナイト卿は私の言葉に微笑まれたような気がする。雰囲気は柔らかくなったからだ。和むようなことを言ったかしら?」

「そうだ。閣下のお母様から包みをいただいたんですよ」

「ほう、よかったな」

「ええ」

ポケットにしまった包みを取り出す。それを机の上に広げて見せた。中には手の平にすっぽりと収まる大きさのクッキーが入っていた。

「クッキーですわ。皆さんでいただきましょう。食後の紅茶かコーヒーでもいかがですか？」

「では、コーヒーを」

「我々も同じものをお願いします」

「かしこまりました。少々お待ちください」

「ここでもおいしいものを出せるように、そこそこ時間をかけてコーヒーを作る。

うまくいけばいいけれど、どうかしら？」

調理場にいるワドルディたちの分も用意して、自分は手抜きのほうじ茶を準備する。まずは御三方、次にワドルディたち、最後に私だ。ちやうど全員の分ができたので、それぞれに渡す。

「コーヒーを受け取り、一口飲んだソードナイトとブレイドナイトがほっと一息つく。

「おいしいです」

「うーむ。このコーヒー、やけにうまい気がしますね」

「リーノはコーヒーを淹れるのが上手なのだ」

「……へえ」

「そうなんですな」

上司の、まるで何度も飲んだことがあるような口ぶりに、さらに予想を強めていく部下たちであった。

リーノはするりとフォローを入れる。

「メタナイト卿には細々としたことでお世話になっていきますから、そのお礼にお茶をご馳走させていただくんですよ。ね？」

「ん？……ああ、そうだな」

まだ秘密の恋人の圧を感じ、素直に頷くメタナイト卿。のつてくれたことに胸の内感謝するリーノ。それはいわゆるデートではないか？そう考えるソードナイトとブレイドナイト。ただ美味しくクッキーとコーヒーを飲むワドルデイたち。

少々混沌とした空間であった。

リーノも椅子に座り、クッキーとほうじ茶をいただく。クッキーを一口かじった。控えめな甘さが口の中に広がる。固さもちょうどいい。素朴な味わいが、母と一緒に作ったクッキーの味を思い出させた。

「もう二十年以上も昔の事なのに、まだ覚えているものなんですね……」

「リーノ、どうした？ 涙が……」

「ああ、目にゴミが入っただけですわ」

じわりと滲み出た目をハンカチで拭う。心は懐かしさで温かくなっていた。

ちよつと早めの夕食―晩餐会―を終えて、場所は城の庭へ移る。

私は常にお母様の傍に付き、細々とした用事を済ませていた。だからこちらの様子を窺う村人たちの視線には気づかなかつた。

アーニヤとランタンは遠くから、メイドの仕事を全うしているリーノを眺めてこつそり話し合つた。

「あの噂、すぐに耳に入れた方がいいんですけど今は無理ね」

「ですなあ。お仕事の邪魔になっちゃいます。今日はリーノが用意してくれた食事もありますし、パーティーを楽しみましょうか」

「そうしましょう」

パーティーはのんびり楽しむことができなかった。

デデデ大王が傘の魔獣ドリフターを数十匹呼んだからだ。それもカービーによつて倒されたが、デデデ大王が放水したため食事がめちやくちやになった。パーティーはお開

きになった。

大王の作戦によつて食事をめちやくちやにされたリーノは怒りよりも悲しんでいた。なのでしばらく料理は作らないと、デデデ大王にその場で告げた。

「お前が作らんかったら誰がワシのご飯を作るゾイ!？」

「ワドルデイたちが作りますわ。それでは、お母様を浴室にご案内しなければならぬので」

ワドルデイたちだつて料理ぐらい作れる。だが、デデデ大王好みの食事はリーノしか作れない。今回もいい罰になったはずだ。

明朝。ひと悶着あつたものの、お母様をケガさせることなく城から送り出した。

「リーノさん。お世話ありがとう。不自由なく過ごせられたよ」

「それはようございしました。務めを果たせて、わたくしも嬉しい限りです」

「でもなんだつて、あんなバカな大王に仕えているんだい?」

お母様はプンプンと怒っている。私は眉を下げて、緩く微笑んだ。

「子どもの頃、陛下に助けていただいたからですわ。可愛がつてもくださいました。ですから、その御恩をお返しするまでわたくしは陛下にお仕える所存です」

「そうかい。あんなバカにもいい所があつたんだね。……いやになったら、このばあさ

んの所においで。アンタなら、大歓迎だよ」

「まあ、お母様ったら。ありがとうございます。そのときはよろしくお願い申し上げます」

お母様と、道中まで見送るエスカルゴン閣下、フーム様、ブン様、カービイたちが城から遠ざかっていく。その様子をしばらく眺めていた。

「母を、思い出したか」

突然話しかけられるのも慣れてきた。

「思い出しましたわ。とても懐かしい。あのクッキーを食べたとき胸が熱くなりましたもの」

「そうか」

メタナイト卿が隣に並んだ。私が城の中に戻るまで、彼は傍にいてくれた。

その日は雷雲で、天気が悪かった。せつかくメタナイト卿と話し合う事があったのに、この天気ではデートにならない。今日は大人しく仕事をしておこうか。それとも夜に落ち合おうか。

ふと、考える。

「(私から誘ったら、ご迷惑かしら……)」

顔に熱が集まる。パタパタと片手で仰ぎ、パタパタともう片方の手で壁の埃をはいた。

突然城内放送が鳴り響く！

『城内に魔獣が逃走した！殺さずに捕まえるゾイ!!』

「ま、魔獣!」

リーノと、その周りにいたワドルデイたちは慌てた。ワドルデイたちは両手をパタパタと動かしたり、どこへ目掛けて走り出したのか仲間にぶつかっている。

その様子を見て、むしろ落ち着きを取り戻したリーノ。号令をかける。

「皆さん、落ち着いてください。ここが危険だと思ったら玉座の間に逃げましょう。陛下がこうして城内放送できているということは、玉座の間にいらつしやるが故です。放送ができるぐらい安全であるとも言えます。よろしいですか？」

「わにゃー!」

ワドルデイたちが一斉に掃除用具を放り出して逃げていく。

私も後を追わなくちゃ。

スカートの裾を掴んで廊下を走る。途中のベランダで爆発音が聞こえた。

「一体何ですの!?!」

嫌な予感がして、ベランダから下の噴水がある庭を覗き込む。そこでは大きな赤い獣と、メタナイト卿が戦っていた。

彼らは爆発音と火をあちこちに巻き散らしながら、城内へと入って行った。

私はこの時、メタナイト卿なら大丈夫だと信じて疑わなかった。

「私にできることを……陛下たちの所へ行かなくちゃ!」

そこでなら何か情報が掴めるかもしれない。普段カービーに任せきりな魔獣退治を、メタナイト卿が相手しているという事は、それだけ強いのだろう。弱点を聞き出さなきゃ!

リーノは再び走り出して玉座へと向かう。

廊下の角では慎重に辺りを見渡して、とにかく走る。その間も爆発音は遠くで聞こえていた。

玉座の間、扉の外側につく。中に入る前に乱れた息と姿を整えて、中に入った。

中に入ると陛下と閣下がいらっしやった。そして玉座の奥の壁が破壊されている。

私は怒った。

「陛下、閣下! この魔獣騒ぎは一体なんなのでしょうか!」

「げえ、リーノ!」

「うるさいのが来たでゲス……」

「魔獣は現在、メタナイト卿と交戦しつつ城内を移動しております。今はメタナイト卿がなんとか相手をしてくださっているので兵士たちに被害は出ておりません。ですが、それも時間の問題！陛下たち自身にも危険が及ぶ魔獣なんて言語道断ですわ！即刻倒すべきです。さあ、弱点を教えてくださいまし」

「う、」

「う？」

「うるさいゾーイ!!!」

「!?きやあー!」

陛下は懐から取り出した縄で、私をぐるぐる巻きにした！まるでナツクルジョーが来た時みたいだ。

幸い口は塞がれていないので、抗議する。

「なぜこんな事をするのですか！」

「黙ってカービィがやられるところを見ているゾーイ！」

「今はカービィよりもメタナイト卿が危険ですわ！」

「あーんもう！静かにしないとお口チャックしちゃうでゲスぞ」

「それでもわたくしは黙りませんからね！」

「もう放っておくゾイ。それよりもはようチリドックを探せ」

「はいはいでゲス」

チリドック。めちやくちや聞き覚えがある名前だ。たしかメタナイト卿を追い詰めた魔獣だったはず。という事は、本当にメタナイト卿は危ない状況にいるんだ！

弱点を知ることができず、その上こんな風に捕まるなんて情けない。好きな人の役に立てないなんて情けない。

私は悔しくて何度も縄を解こうと暴れた。縄は肌に食い込むばかりで痛い。

ああ、こんなことになるなら、本当にナイフの一本でもポケットに忍ばせておくんだ。明日からはくだものナイフを持ち運ぼう。

そう心に決める。

リーノが解放されたのは、すべてが終わってからだった。

途中、城内で魔獣チリドックが引き起こした火災があったものの、それをモニターで見た陛下が消火を決断。城は崩壊を免れた。

もう解放してくれてもいいのではないか？そう思っただデデ大王に頼む。

「陛下、もうわたくしの縄を解いてくださってもよろしいではありませんか？」

「……いやゾイ」

「は？」

「お前は最近生意気すぎる！しばらく反省するゾイ!!」

言葉を失った。反省させるために相手を縛るなんて暴力だ。酷すぎる。閣下も「やりすぎでゲスぞ」と弱々しく言っているが、陛下に一喝されて黙ってしまった。

そこにメタナイト卿とボロボロになったソードナイトとブレイドナイトがやって来た。

「陛下……」

メタナイト卿たちの視線が、私と陛下たちの間を行き来する。彼の人が纏う雰囲気は低いものに一変した。

「これはどういうことですか？」

底から沸き上がるような憤怒の声。静かだからこそ恐ろしい。

「こやつが、生意気なのがいかんだゾイ！口出しするなゾイ！」

威勢よく答えているように聞こえるが、実際は言葉の端が震えている。この時ばかりは、あの怒りを真正面から受ける陛下に同情……しないかな。メタナイト卿たちって女性とか子供に酷い事する人たちって嫌いそうだし。相手の地雷を踏んでしまわれた陛下が、今回は悪いと思います。はい。

メタナイト卿が陛下たちを無視してこちらに近寄る。すぐ傍に来てくださって、そつ

と頬を撫でた。

「リーノ。どのくらいの間、縛られていたのだ？」

「ここに来てすぐですから、数時間でしょいか」

「そうか。やりすぎだな」

メタナイト卿はその炎のように燃え上がる様を表したかのような剣を抜くと、ぱつぱりと縄を切った。もちろん私に怪我はない。

私はゆつくりと立ち上がる。メタナイト卿が腕を支えてくださった。

「ありがとうございます。もう大丈夫ですわ」

「袖を、まくってくれないか？」

ぎくりと顔を歪ませる。頭を振った。

「大した怪我はありませんわ。ですから、どうか」

「ダメだ」

あつという間に手首を掴まれて、袖を捲られる。腕には痛々しい縄の跡がついていた。

「すみません。悔しくて暴れたときについたんです」

「……………」

メタナイト卿は無言で陛下たちを見る。お二人とも眉を下げている、ショックを受け

ているようだ。

縄で縛られた事も、そのままの状態で放置されかけた事も、怒っている。けれど、そんな顔をさせたいわけではなかった。だって、家族のような人たちなのだ。私を見守つて、助けてくださいつた人たちなのだ。あまり悲しい思いをさせたくない。

私は袖を伸ばし、肌を隠す。陛下たちに近づいて、怒つた顔をした。

「わたくし、今回の事、とつても怒りました。怪我が治るまでは出勤したしません！有休を使わせていただきます」

「ゆ、有休？」

「そんなもん、この城には……」

「いいですね？」

「あ、はい」

「わかつたゾイ」

力なく頭を垂れる陛下たち。そのお二人の手を取つて、続きを言う。

「有休が明けたら、お二人にはいっぱい美味しい物を作つて差し上げます。最近ご飯を作らなくてごめんなさい。満足に食べられなくてイライラしていたんですよね？」

そういうと、お二人は困つたような、そんな表情を見せた。私の方から謝られるなんて思つても見なかつたんだろう。

「陛下……」

「だーもう！ワシも悪かったゾイ！もう他の者にご飯を作らせるなゾイ！」

「さすがに、風邪の時とかは勘弁してあげてほしいでゲスよ。……私もごめんでゲス」

「謝ってくださいったからいいですよ。許します」

仲直りしたので、二人の手を放す。そしてメタナイト卿の傍に戻った。

「お待たせいたしました。それでは、行きましようか」

「そうだな」

リーノとメタナイト卿は並んで出て行く。その仲睦まじい様子に、デデデ大王とエスカルゴンは怪しむのだった

恋のお話

付き合っていることを話すのは、勇気がいる。

「そなたとの関係を、二人に……いや、四人に伝えようと思う。いいか？」

「はい。わたくしも親友たちに秘密を打ち明けたいと思っていました」

とうとう私とメタナイト卿の関係を伝える時がきた。アーニヤとランタン、ブレイドナイトとソードナイトさんは一体どんな反応を示すだろうか？

悩んだ。どうやって伝えるか。どんな言葉を選ぶべきか。アーニヤとランタンに認めてもらって祝福して欲しかったから、すごく悩んだ。

でもそれも杞憂に終わる。

だってあの二人なら、私が愛した人を信じてくれるもの。

その結論に辿り着いて当日を迎えた。その日の食事は鍋だ。切って入れて味を調えるだけなので、料理経験が浅いお三方も作りやすいだろう。

鍋は二つ作る。大人六人分なので、最後に雑炊かうどんを食べることになっても、このくらいの量はあると思ったのだ。それぞれの鍋の具材は違う。きのこ数種類、白菜、

ネギ、にんじん、豆腐、大根、しらたき、春菊、もやし、こんにゃく、お肉はそれぞれ鶏肉と豚肉を投入する。鍋の味はあっさり濃厚と濃い目を用意して、さらにごまだれなどの鍋で食べるタレ類も数種類ほど用意した。

これでかなり豪華になったはず。喜んでもらえるだろうか？

「ブレイドナイトさんはお肉が好きなんですけど、あっさり味の物もお好きらしいので。今日の鍋はたいへん喜んでいただけれると思います」

「ソードナイトも肉が好きだつて言っていたわね。あの人が鍋が好きかどうかかわからなければ、おいしければ喜んでくれるわよ」

予測をたてるアーニャと、自信たっぷりなランタン。二人の言葉に頷き、私も気を楽しみにしてその時を待った。

常夏のププブランド。それでも太陽の光が届かない地下室は案外肌寒い。おかげで、鍋を食べる場所として最適だった。

三人の戦士は、はしを止めることなくどんどん食べ進めてくれる。特にブレイドナイトさんとソードナイトさんは「うまいぞ」「どれもいけるな」と褒めてくれた。メタナイト卿も満足そうに食べ進めている。私たち三人はそれぞれ顔を見合わせて互いを称え合った。

三人の戦士は、さすがとか切る作業はとても上手だった。なので、後は味付けさえ覚えてしまえば鍋はマスターしたと言えるのではないかな。

次はワンプレート料理がいいかもしれない。プレートとは、一つの皿にメインや、おかずをそれぞれ乗つける料理のことだ。

肉をメインに、端にサラダとかふかした芋とかを乗せる。湯がいたコーンと、ポテトサラダも一緒に乗せればより豪華になるだろう。わざと、お子様ランチのように色々乗せても楽しく食べられそうだ。でも、初心者向けではないから、お子様ランチはまた今度にしよう。

そうやって色々考えて、もくもくと鍋をつついた。私はごまだれが好きなので、あっさり味の鍋ばかり食べている。それに気づいて慌てて、濃い目の鍋にも手を出した。うん。両方味がしみていておいしい。

それから、鍋の具をほとんど食べきって「さあシメを食べよう」となった時、ソードナイトさんとブレイドナイトさんは本気で唸りだした。

「どちらがおいしいのか……」

呟かれた言葉に思わず吹き出してしまった。すみません。おかしくて……。

「雑炊も、うどんもできますので少々お待ちいただけますか？」

「どちらも楽しめるのか！」

「はい。わたくしたちの間でも、雑炊とうどんのどちらで食べ終わるか話し合いになりまして。鍋は二つあるのだから、それぞれ楽しめばいいじゃないか。という結論になったんです」

「今準備しますから少々お待ちくださいね」

「じゃ、私うどんの方をやるわね」

「よろしく願いますね、ランタン」

お三方には座って待っていてもらい、雑炊とうどんを準備する。それはすぐに準備できて、ソードナイトさんとブレイドナイトさんは「これなら俺たちにもできそうだ」とやる気を出していた。

「鍋は簡単よ。食材を切って鍋に入れて、味を調えるだけ。それだけで案外おいしくなっちゃうんだから。味を調えることが難しいなら市販の鍋つゆを購入すればいいのよ」

「変わり種の具材には、ソーセージ、ギョーザがありますね。野菜は今日使った物をもう一度利用して、ラーメン鍋で食べるといいと思います。見た目が少し変わりますし、味も変化するのでおいしく食べられますよ」

雑炊は少し蒸らす方が好みなので、蓋をして少々おく。先にできあがったうどんを食べた。

「うむ。うまい」

「気に入っていただけただけで嬉しそうです。おかわりしたい方はぜひ仰ってくださいね」

うどん三人前を六人で食べ終わり、次に雑炊を食べる。卵は半熟でとろりとしており、おいしそうだ。六人は均等に食べられるように始めは少な目に盛って、まずは味をみてもらう。

「卵の濃厚さがうまいなあ」

「野菜の出汁とか、そういううまみが出ていてうまい。おかわり！」

「はい、いっぱい食べてください」

「う、うむ……」

アーニヤが微笑むとブレイドナイトさんが口ごもった。これは、もしかすると、もしかしてなのかしら。

友人に訪れるかもしれない幸せに、私は胸がドキドキする。ううん、待つて。先に私とメタナイト卿のことについて考えなくちゃいけない。友人たちの恋について考えるのはその後だ。

食事を食べ終えて、片付けを始める。

え？どのタイミングで発表するのかしら？もう終わっちゃうわ。

隣で、メタナイト卿の横顔をこっそり盗み見る。

「……私から言うので、待ってくれるか？」

「あ、はい。わかりました。その時にはお傍にいますね」

「頼む」

汚れた食器を洗い、流し、相手に渡して布巾で拭く。水気のある程度拭いたら、シンの隣の開けたスペースに食器を並べる。直に置かず、吸水性のいい大きめのタオルを一枚敷いておく。その上に、並べていくのだ。食器同しがくつつかず、重ならないよう慎重に。

さあ、後は別れの挨拶だけ。

その時になってやっと、メタナイト卿から合図が送られた。

じつとこちらに視線を送ってこられた。「(今でしょうか?)」と察して、彼の傍に寄る。

「遅くなった。心の準備は？」

「はい。できております」

「うむ。……ソードナイト、ブレイドナイト。それにアーニヤ、ランタン。聞いてほしい」

四人の視線がメタナイト卿に集まる。ごくり、と私の喉が大きく鳴った気がした。

「私とリーノは、交際している。今まで黙っていてすまなかった」

「おお！」

「やはり」

「まあ!!」

「そうだと思った！」

あら、驚かれると思いましたが、予想とちよつと違いました。メタナイト卿に視線を送ると、彼はゆるりと頭を振りました。

「どうやら、バレていたらしいな」

「なぜバレてしまったんでしょうか？」

「長年、親友をやっているもの。小さな変化だつて気づくわよ」

「実は以前、お二人の会話を聞いてしまって……。そこから推測していました」

「そうだったんですか。……他の方も気づいていると思いませんか？」

四人は顔を見合わせて、答えを出した。

「いや、まだじゃないかしら。村じゃ、二人が付き合っている噂を聞かないもの」

「城内でも聞きません。……秘密にしておいた方がいいでしょうか？」

「私は話してくれてかまわない。リーノはどう思う」

「正直に申し上げますと、まだ照れくさいですわ。でも、皆さんに伝えられたら嬉しいです。なので、話していただいてもいいですよ」

「ふふ、村中の男たちが驚くわよ」

「卿たちのファンもとつても驚くでしょうね」

「我々にファンがいるのか……？」

「いますよ。皆さん表立って行動されていませんが」

「そ、そうか！」

嬉しそうに頷くソードナイトさんとブレイドナイトさん。私はできたら、身近に目を向けて欲しいなと思った。私の勘違いかもしれないけど。

「(今度、きちんと二人から話を聞きたいですわ)」

その時は、私もたくさん質問されるでしょう。わくわくするような、びくびくするよ
うな。

「(楽しみですわね……)」

樽のあの二人

四人に、私とメタナイト卿の関係について話した日から数日。怖くて村に行けていない。

なぜ、怖いのかと言うと……昨日、村から帰ってきたメタナイト卿が疲れた様子だったからだ。彼のそんな姿を見かけることは珍しい。何かあつたに違いありません。加えて、何か言いたげに私を見つめ、それでも何も言わなかった。

なんでしょう。なぜ、黙るのですか？

疑問は不安に、不安は恐れに変わりました。

村のみんなに会いたいけれど、でも、でも……何が起こるのでしょうか。そればかりが気がかりです。

夜空の下で、真つ暗になった村を見つめてはため息を吐きました。隣にいるメタナイト卿がこちらを向きました。

「村が気になるのか」

「はい。みんなに会いたいのですが、今行くのは怖くて……」

「二人が怖いならば、私と行くか？」

「それは、素敵な案ですね。あなたとなら、恐れよりも楽しむ気持ちの方が勝りますもの」

「嬉しい事を言ってくれる」

そして、私たちは寄り添いました。

恐れも不安も、海の向こうに吹き飛んでしまいました。胸に、木漏れ日が差し込んでくるようでした。

「（この気持ち、喜びを、あなたも感じてくださっていたら、いいですね）」

そう願って、目を閉じました。

さすがに、そろそろ村へ生活用品を買い足しに行かなくてはなりません。メタナイト卿にお願いで時間を作っていただき、私たちは村へ向かいます。

城から村へつづく下り道を、重い足取りで歩きます。

「緊張しますわ」

「まあ……なるようになる」

「そうですね」

今は、はじめての村デートを楽しむとしましょう。

村に入りました。

あちらから、こちらから。村人たちが、私たちを窺っているように思えてなりません。そわそわと手を、まるでハンドクリームを塗るようにさすります。

「寒いのか？」

「いえ、気を紛らわしているんです」

「ふむ。手に触れて気が紛れるのなら、私の手を握るか？」

驚いてメタナイト卿を見つめます。

視線を感じました。多分、話し声が聞こえた村人たちが、こちらを見ています。

彼は手袋をはめた手を、こちらに差し出してきました。村人たちの視線を気にしていかないように。堂々と、自然に、私と手を繋ごうとしています。

嬉しい。

胸の真ん中辺りから、温かい気持ち湧き出ます。それは内側から身体中に広がり、私の手を動かしました。

「……エスコートをお願いできますか？」

冗談を言ってみました。

差し出された手の平に、私の手を重ねます。ゆっくりと優しく握られました。

「私でよければ」

笑っていらつしやるのか、それとも本気なのか。わからない調子で頷かれます。それがおかしくて、私は頬を緩めました。

「ねーちゃん……アレ……」

「あら、まあー！」

「ぼーよう?」

青く丸い戦士と、上品にメイド服を着こなす女性が並んでいる。その間には戦士の左手とメイドの右手が、仲睦まじく繋がれていた。

一歩先を歩く戦士が、まるでメイドをエスコートしているようだ。

その様子に気づいた村人たちは騒めく。

ある者は納得したように見守る。ある者は口をあんぐりと開けて繋がれた手を凝視した。

この場には誰かに報告しに行く者。目に涙を浮かべる者。

二人を中心に波紋は村中に広がっていく。

ブンはペロペロキャンディを持つている事を忘れて、口を開けたまま二人を見た。フォームは驚きと喜びと、少しの寂しさを感じつつ二人を心の中で祝福した。

そしてカービィは。

「ぼよー！ぼよー！」

お菓子を貰おうとリーノに走り寄った。

「カービィー！」

フォームの呆れを含んだ制止する声は届かず、赤ん坊の戦士はリーノの傍で止まった。そして片手を差し出す。

「こんにちは、カービィ。今日は飴でもいいですか？」

「ぼようー！」

「では、差し上げますね。どうぞ」

カービィは、今日もリーノからお菓子を貰えた。飛び跳ねて喜び、包み紙を解いて、飴を口に放り込む。

今日も甘くて美味しかったらしい。うっとりとして表情を緩めている。

「包み紙は貰いますね」

「ぼよー」

カービィは右手に広げていた包み紙を、リーノに渡す。リーノは慣れた様子で、包み紙をポケットにしまった。

カービィに視線を戻すと、子どもたちが増えていた。フォームとブンだ。

リーノはにこりと微笑む。

「こんにちは。フォーム様、ブン様」

「こ、こんにちは。リーノ。それに、メタナイト卿」

「よお……」

「ああ」

子どもたちいつもの勢いはない。デートを邪魔したかもしれない申し訳なさと、二人の仲について質問攻めしたい気持ちかせめぎ合っているからだ。

リーノはにこりと笑い、戦士の方は静かだ。そして、繋いだ手はそのまま。

フォームは根掘り葉掘り聞いたりせず、ごく自然な会話を心がけた。

「えーと、二人は、これからどこに行くの？」

「わたくしの生活用品を買い足しに行くところです。メタナイト卿には荷物を一緒に持ってくださいるよう、お願いしたんです」

「それってデート？」

「ブン!!」

「でーと!でーと!」

「カービイもやめなさい!」

フォームは、戦士とメイドをからかう二人を叱った。

リーノは穏やかに笑って、メタナイト卿は考えるように、お互いの顔を見る。

「デート、ですわね」

「そうだな」

「ええ!？」

「マジかよ……」

「ぼよ?」

言葉の意味がわかる二人は驚いた。まだ言葉を理解できないカービイは疑問符を浮かべる。

その言葉を聞き逃さなかった者たちが、素早くリーノたちの前に現れた。

「デートーデートーリーノとメタナイト卿がデート!!」

村の子供たちだ。まだまだいたずら好きの年頃で、村の恋人たちをからかったりしている。今日の狙いはリーノたちらしい。

フームは叱って止めさせようとしてくれている。その様子を見てリーノは胸中にぼんやりと浮かぶ気持ちに意識がいく。

リーノはからかわれているのに、怒る気持ちはまったく湧いてこなかった。むしろ、村人たちに自分とメタナイト卿の関係を広めているように感じて。

改めて恥ずかしさが、そして彼と堂々と村を歩いている喜びが顔を赤くした。

「顔が赤いな。大丈夫か?」

「はい。あなたと村を歩けることが嬉しいだけです」

正直に伝えた。

すると決して上手ではない「ひゅー、ひゅー!」という冷やかしの口笛が鳴った。

「ごらーっ!!」

とどめの一喝により、子どもたちは彼方へ逃げた。

フォームはリーノへ向き直る。

「怒っていいのよ?」

「はい、フォーム様。でも、怒る気持ちが湧かなかったので」

「リーノって、大人よね」

「それでもありませんよ。今日は、隣にいてくれたから……」

言葉を続けず、メタナイト卿を見つめる。

その眼差しの熱さにフォームは赤くなり、ブンは驚いた。

カービイだけは、わからない。けれど、いい雰囲気の二人を交互に見て、楽しそうに

跳ねた。

「なんじゃと?!リーノとメタナイト卿が?!」

「そうなんでゲスよ!」

玉座の間。

デデデ大王は玉座に座り、エスカルゴンはその近くに立っている。ワドルデイたちは離れたところで掃除をしていた。

「なーんか怪しいと思っていたら、あの二人、恋人同士だったんでゲスねえ。どうりで距離が近いと思ったたでゲスよ。ま、リーノにはこれまで浮いた話がなかったゲスからね。ちよつとは安心……」

「……さんゾイ」

「陛下?」

「許さんゾーイ!!!ひとん家のメイドをたぶらかすとは何事か!!」

「誑かすつて陛下……リーノもいい歳なんでゲスよ?別に恋人がいたっていいじゃないでゲスか……」

デデデ大王は、がっつとエスカルゴンの目の下部分を掴んだ。

「大体!なんであの二人には恋人がおつて、ワシには一人もおらんゾーイ!」

「あの二人はそれぞれモテるからでゲシヨ。それに恋人は一人だけつくるもんでゲスよ」

正論を言ったエスカルゴン。言い返せない大王は、エスカルゴンを床に投げた。

「あで!!!」

「かくなる上は、二人を別れさせればいいゾイ」

「まあリーノに怒られるでゲスよ」

「上手くいけば、問題ないゾイ!ぐっふっふっふっふ……」

『チャーンネル! DDD!!』

『今日はカップルの皆さんに嬉しいお知らせでゲス』

大臣家、リビング。

四人はテレビの言葉に釘付けになった。今日、村である恋人たちの噂が広まったばかりだ。

「リーノたちもこれ見てるかな!」

「そうかもしれないね」

「ブン、パパ! 静かに!」

『二日後、デデデ城にてカップルイベントを開催するでゲス! 恋人同士はもちろん、ご家族も、寂しい独り身も、楽しめるイベントを用意するでゲスよ! 仲がいい二人はさらに

距離が縮まり、独り身は恋人が見つかるチャンスかも……!?楽しみにするでゲス!!!」

「カップルイベント? おえー」

「ブーン!」

「合同お見合いでもするのかね?」

「さあ? でも家族も楽しめるんでしょ? 楽しみだわ」

「デデデが企むことよ! きつと何か裏があるわ!」

その頃、玉座の間。

メイドと青い戦士が二人、デデデ大王の前に跪いていた。

「二日後、カップルイベントを開催するゾイ」

「はい。……はい?」

リーノは驚いた。

カップルイベントなんて回、あっただろうか? 少なくとも記憶にはない。

そういえば夕方から外が騒がしい。イベントの為にワドルデイが総出で頑張っているようだ。後で何か差し入れしようと考えた。

「イベントにお前たちも出るゾイ。お前たちほど注目を集めるカップルが出れば、村の者共も参加するはずゾイ」

「わたくしたちの事、ご存知だったんですね」

「ワシには隠し事なんて出来んゾイ。ワハハハハ！当日は皆が楽しめるイベント盛り沢山だゾイ。人民共が楽しめるよう、尽力せよ。よいな」

「はっ、かしこまりました」

「……かしこまりました」

話は終わったと、二人は玉座の間から追い出された。

並んで帰り道を歩く。玉座からかなり遠のいた場所で、リーノは話し出した。

「陛下は何をお考えなのでしょうか？」

「わからない。気をつける他ないだろう」

「そうですわね」

「もう遅い。送ろう」

「いえ、今日はワドルディたちに差し入れを作りますので、厨房に向かいます」

「ならば、厨房まで」

「ありがとうございます。よろしくお願いします」

遠くから聞こえるトンカチを振る音が、鼓動を早めて不安にさせた。何が起ころのかわからない不安。

それでも、隣にいてくれる彼とならば乗り越えていける気がする。その努力をしよ

う。

リーノは顔を上げる。

嵐を呼ぶカップルイベント

カップルイベント当日。

快晴、気温も心地よく、イベント日和。

娯楽の少ないこの国で、催し物が始まった。そうなれば、村中の人たちが開催場所にやってくる。

つまり、このお城に、だ。

彼らを楽しませるのは、何もイベントだけではない。料理上手なメイドが監修しただろう、屋台飯にも注目している。朝、何も食べずにやって来た村人がいる。それほど、彼女の料理にはファンがいた。

城内、厨房にて。

「どんどん村人たちが集まってきたでガスよ！さつさと運ぶでガス!!……つて、リーノここで何をしているでガスか!？」

「料理の最終チェックをしております。これが終われば直ぐに準備いたしますので、少々お待ちください」

「仕事熱心なのはいいでガスが、さつさと準備してイベントに参加するでガスよ！」

「はい。必ず参加します」

恭しく頭を下げるメイドをじろりと見る。

彼女がこうして仕事熱心なおかげで、料理の質が下がらないで済む。それはいい。自分だつて後で食べるのだ。美味しい方がいいに決まっている。

けれど、今日は彼女が主役と言つていいイベントが開催されたのだ。

女性とは、支度に時間がかかるもの。自分の母がそうだった。今日ぐらい仕事を忘れて、その瞬間まで恋人とイベントを楽しめばいいのに。

ま、リーノは仕事ができる。私生活もだらけていない。上手くやるだろう。

エスカルゴンはリーノから目を外し、次の料理の味見に向かった。

リーノが「戦士たちの部屋」と思っている部屋は、三人の中では「メタナイト卿の部屋」だつたりする。あのテレビがある、よく三人の戦士たちが集まっている部屋だ。今日もそこで、メタナイト卿、ソードナイト、ブレイドナイトがテレビを見ていた。カッブルイベントが始まったことを告げている。

「始まりましたね」

「今回は何が起こるのでしょいか」

「わからん。私はイベントに出る。つまり全体を見て動く事ができない。お前たち、頼んだぞ」

「はい」

「お任せを」

力強く頷く二人の部下の返事を聞き、メタナイト卿もまた気を引きしめる。

ふと、扉の外から気配を感じた。数は数人、この部屋に近づいてきた。見回りの者かと思つたが、そうではない。それらは部屋の前で止まると、扉を遠慮がちにノックした。

今日はブレイドナイトが、扉を開けに行った。

扉を開けて、数瞬、間が生まれた。どうしたのか。

「……アーニャ」

「こんにちは、ブレイドナイトさん」

続いて挨拶する女性たちの声がある。その中に待っていた恋人の声もあった。彼女に会うべく、そして様子を確認するべく椅子から降りる。

「ブレイドナイト」

ブレイドナイトの近くに立つと、彼は主人に気づいた。そして主人の前から退く。

そうすると、メタナイト卿はリーノたちの姿がよく見えた。

――驚いた。

「……美しいな」

「ありがとうございます」

三人とも、それぞれめかしこんでいる。

アーニヤは可愛らしく、ランタンは艶っぽく、リーノは上品に。三人の個性が光っている。皆、よく似合っていた。

これでは、ブレイドナイトが言葉を失うのも無理はない。ソードナイトはランタンの姿を見て、一度目を覆った。フルフェイスの下は、さぞ赤いだろう。

「ランタン……上着ないのか?」

「ないわ。今日は恋人を見つける日だもの。攻撃力高くないかね」とね」

「攻撃力?」

「つまり、自分の武器を十分に振るえるよう、頑張つて着飾ってきた訳です」

「わたくしは、メイドのイメージを崩さないよう上品にまとめました。アーニヤは優しくて可愛いので、その良さが全面に出るようになりました。ランタンはとっても色っぽくなるよう頑張つたんですよ」

「そういうこと」

先程、メタナイト卿に褒められた事でさらに自信がついたのだろう。三人はそれぞれ服がよく見えるようにポーズをとった。

リーノはポーズを決めた後にお辞儀をして、メタナイト卿と目を合わせて美しく微笑んだ。

アーニヤは照れて、俯いた。よく出来たストールの刺繍を手でなぞっている。

ランタンは何度もポーズを取り、最後にソードナイトに向かってウインクした。

ソードナイトが「うぐ」と情けない声を出したが、聞かなかつた事にする。

「そういえば、アーニヤもカップルイベントに出るのか？」

「はい！ぜひ来てください、とお城から手紙が送られてきたんです」

「なんだって？」

「その中に食事無料券も付いてきたし、ご飯食べるついでに気合い入れてオシャレしようかって話になったのよ」

「つまり、食事がメインで恋人探しは二の次か……」

「いい出会いがあれば、とは思ってるわよ」

「なに!？」

「ランタンったら」

あんまりからかつちやダメよ。と言わんばかりに、リーノが彼女の二の腕をぼんぼんと軽く叩く。ランタンは、いたずらが成功したように笑った。その笑顔は普段の彼女のイメージと離れ、可愛らしい。横目で確認すると、案の定、ソードナイトが釘付けになっ

ている。それにブレイドナイトは、アーニヤに釘付けだ。

察ししやすい事は、戦士として致命的である。後で注意しておかなくてはならないだろう。

今は前日の約束通り、リーノと共にイベント会場に行こう。

「そろそろ行こう。お前たち、後は頼むぞ」

「はっ」

「お気をつけて」

背筋を伸ばす部下たちには、先程のような緩んだ気配はない。

私とリーノ、その前方にランタンとアーニヤが隣合つて歩き出す。

会場である城の庭についた。

恋人たちが主役なだけあって、あちこちにハートの風船が飾られている。遊園地のようなアトラクションが多数ある。その中には、二人席が多めに設置されているようだった。

メリーゴーランドなら、二人用のハートの馬車が設置されている。

ジェットコースターなら、恋人たち向けに装飾されたハートの席がある。

ハートの台座の写真スポット。

ハート型で虹色のわたがし。

どれもこれもハートだらけだ。

「急ぎで作る必要があったのはわかります。ですが、こうもハートの装飾多いのは如何なものでしょうか……ご家族の方や、まだ恋人と出会えていない方もいらつしやいますのに」

「リーノ、私たちは遊びに来たのよ。仕事のことは一旦忘れなさい」

「ですねえ。今日はゆっくり遊びましょう」

「そうですね……。はい、そうします」

「よし、じゃあ私はアーニヤと遊んでくるわ。またね、お二人さん」

「じゃあね、リーノ。失礼します。メタナイト卿」

「またね」

「ではな」

二人は屋台から行くか、先に乗り物を楽しむか相談しつつ去っていく。

アーニヤとランタンのオシヤレした姿を見た男性たちが、彼女たちに気づいてじっと見ている……気がする。

「やはり、あの二人は注目を集めているな」

「そうですね。とても素敵ですからね」

するとメタナイト卿は私の目を見た。

「そなたも、な」

「ありがとうございます。メタナイト卿も、本日も素敵です」

「そうか、ありがとう」

本心を伝えると、感謝を返してくれる。それは、たいへん居心地がいい。伝えてよかったと安心できるし、嬉しくなるのだ。

リーノは嬉しかった。こんなに優しくして気遣いができる人が恋人だなんて夢のようだ。大切にしてもらっている。だから、私ももっと大切にしたい。

「わたくしたちも乗り物を回りますか？それとも屋台に？」

「できれば会場を一周したいのだが、かまわないか？」

「はい。いいですよ。では、少し歩きましょう」

メタナイト卿と寄り添うように並んで歩き出す。

きつと、会場の地理を把握されたいんだわ。私はそう思った。

彼と共にイベント会場をぐるりと回る。視線が私たちに集中しているように感じた。気になるけれど、横を向くとメタナイト卿がいてくれる。傍にいてくれると実感する度に強ばる体から力を抜けていった。

『ぴーんぼーんぼーんぼーん！リーノ、メタナイト、オマケに村人共はイベント特設会場に来るゾイ！メインイベントを行うゾイ！デハハハハハ!!!』

「……呼ばれましたね」

「ふむ。このイベントのために、私たちは参加するよう言われたのかもな。何が起こるか分からない以上、気をつけるぞ」

「はい。充分注意します」

不安がふくらみ、息が苦しくなる。胸いっぱい深呼吸した。

大丈夫。最近筋力もついてきたし、いざという時にはポケットにしまっている果物ナイフで縄を切ろう。

それに、独りじゃない。メタナイト卿がいてくれる。カービイたちだって、この会場のどこかにいてくれる。私はみんなの邪魔にならないよう頑張ればいいだけ。大丈夫。大丈夫。

両手を合わせてギュツと握る。その様子に気づいたメタナイト卿が、手を差し伸べてくれた。私も手を伸ばして、互いに握り合う。互いの熱が、中央で混ざり合う。それは

勇気を、私に与えてくれる気がした。

人々の流れに乗り、特設会場とやらに来た。

「ステージに呼ばれるかもしれないから、最前列にしよう」

「わかりました」

「あー！ やつと見つけたでゲスよう！ リーノはさつきとこっちに来るでゲス!!」

「すぐに参ります!! 行つてきますね」

「気をつけて」

メタナイト卿と別れて、エスカルゴン閣下について行く。特設会場の裏側に回って、控え室に入った。

控え室には大きなハート型の箱があった。中央には人が一人座れるスペースが空いている。

「そこに入るでゲス」

「かしこまりました」

空いたスペースに入り、座る。

「これを持つとくでゲス」

「わかりました」

受け取った黒い水晶玉は、ただの玉に見えた。もしかしたらこれが魔獣かもしれない

い。そう思うと鼓動が早くなる。

「それにしても、ずいぶんおめかししたでゲスなあ」

「はい。今日は特別ですので……。いつものメイド服の方がよかったですか？」

「いや、そっちの方がいいでゲス。んじゃ、閉めるでゲスよ」

「はい」

箱の蓋が閉まった。鍵の音は聞こえてこない。蓋の隅に小さな穴がいくつも空いている。空気を通す穴だろう。そこから光が差し込む。全くの暗闇ではないことに安堵した。

だが、そこで渡された水晶玉が妖しく光り出す。

「な、なに!？」

……本音を言え。

……不満をぶちまけろ。

不気味な声が聞こえてきて、リーノの意識はそこで沈んだ。

特設会場、ステージ上。

エスカルゴンがマイクを握りしめた。

「あーあー、お集まりの皆さん！よくぞ集まってくれました！今からカップル、夫婦限定！告白大会を始めるのでゲス!!」

村人たちは何が始まるのかわからない、けれど面白そうだと言わんばかりに拍手喝采をおくる。

しかし、フームとブンはそうせず首を傾げた。

「カップル、夫婦限定？」

「なんで？告白なら独身の人向けでしょう?？」

「それでは、まずこの二人にやってもらいましょう！村長とハナ夫人！さあ、ステージに上がるでゲスよ」

言われるがまま、夫婦はステージ中央に上がる。注目されている事もあって、二人は少し恥ずかしそうだ。

「ワドルデイ!!持つてくるでゲス」

ワドルデイがガラガラとカートを押して村長夫婦の真ん中に置いた。カートの上には水晶玉が置かれている。

「二人には今から本音をぶつけ合ってもらおうでゲス。愛し合っているなら愛を、気に食わない事があるなら不満を。どちらかに転ぶかは二人次第でゲス」

「それは、一体どういう……?」

村長の言葉に耳を傾けず、エスカルゴンはぐふふと笑う。

「さあ、二人ともこの水晶玉を覗き込むでゲスよ!!!」

夫婦は怪しみつつも、好奇心が抑えられず水晶玉と一緒に覗き込んだ。

水晶玉が妖しく光る……!

夫婦の瞳から柔らかさが消えて、目がつり上がった。

エスカルゴンが二人にマイクを渡す。

「はい、スタート!!」

戦いのゴングが鳴った。

「あなたはいつも、人を頼りすぎですよ!アレがない。コレがない。そういえば私が持つて来ると思っている!あげくには『ハナ、お茶』ですって!私は家政婦ではありません!!」

「ワシはいつも家族のため、村人たちのために働いておるんじや!お前は仕事をしとらんのだから、少しくらいワシを労わってくれてもいいじやろう!」

「私は!私は、毎日休みなく家族のために家事をしています!子供たちの面倒だつて見て……仕事をしないのではなく、できないんです!あなたと違って時間がないんです!」

「ワシだつて時間がないわい!」

「おくと、これはこれは。お互いの鬱憤が爆発したようでゲスな」

フォームは愉快に笑うエスカルゴンに対して怒りを感じた。それよりも、今は村長夫婦の事が気がかりだ。

「あの二人、いつもはすつげー仲良しなのに。あんな口喧嘩しちやつて……」

「多分、あの水晶玉のせいよ！」

フォームは全力で駆け出した！

「ねーちゃん！」

「ぼよう！」

ブンとカービィもその後を追う。三人はステージに上がり、睨み合う村長夫婦に声をかける。わめくエスカルゴンは無視した。

「ねえ、村長さん！ハナ夫人！どうしちゃったの？いつもはあんなに仲良いじゃない！」

「この人が！」

「お前が！」

「しつかりして！いつもの二人に戻って!!」

フォームが村長の肩を強く掴み、ゆさぶる。すると村長の目から険しさが徐々に薄まり、そしていつもの優しい顔つきに戻る。

その様子を見届けたフォームは、次にハナ夫人を正気に戻した。彼女からも、険しさが

消えて元の優しい表情に戻った。

「私は一体何を……あなた、ごめんなさい。あんな事、言うつもりはなかったの」
「ワシの方こそすまんのう。お前はよくやってくれているのに、責めるような事を言っ
てしまった……許しておくれ」

夫婦は互いの手を取り合い、体を寄せ合う。どうやら仲直りできたみたいだ。

フームは胸を撫で下ろす。そしてキツとエスカルゴンを睨みつけた。

「どうして村長夫婦はあんなに激しく喧嘩したの!？」

「二人になんかしたら、リーノが黙ってないぞ」

ブンの言葉にエスカルゴンは身震いした。本気で怒ったリーノは恐ろしい。恐怖か
らか、視線がつついっつい水晶玉に向かってしまう。

その様子を見て、フームは水晶玉に近寄り、覗き込んだ。

……本音を言え。

……不満をぶちまけろ。

「やっぱり!この水晶玉のせいよ!」

「な、何をする気でガスか!やめるでガスよお」

フームはエスカルゴンの制止に耳を貸さない。水晶玉を両手でしっかりと掴もうと
した。

バチツ!!

だが、激しい静電気がおきて掴めなかった。

「きゃあー!」

伸ばした手を引つ込める。幸い、ケガはない。

水晶玉がきらりと光り、ゆつくりと空中に浮かぶ!

「予定より早いけど、陛下ー!!!」

「デーツへへへへ!いだよ、魔獣オマシー!」

突然現れたデデデ、その声に応えるかの如く水晶玉に恐ろしい目が浮かび上がった。透き通った体は、気味の悪いオレンジ色に変色する。

カービィがフームたちの前に出て、構えた。驚いた村長夫婦はステージから逃げ出す。エスカルゴンも安全地帯まで下がった。

「あれば魔獣オマシー!人の心を操る魔獣だ!」

「なんですって!」

「強敵じゃん!!」

メタナイト卿が音もなく現れた。悲観する姉弟に対して、戦士は落ち着いている。

「いや、恐ろしい力を持っているが、そこまで強敵ではない。相手を操るときにはただの水晶玉に、攻撃するときにはあの様に変化する。対処がしやすい魔獣なのだ」

「つまり、戦いながら操られる心配はしなくていいのね！カービィ、聞いていた通りよ！」

「ぼよ!!」

魔獣とカービィの戦いが始まった。

オマシーが輝く。ビームが照射された！カービィはそれを間髪避ける。姉弟も慌てて下がった。魔獣との戦闘が始まり、会場はパニックに陥る。みんな我先にと特設会場から逃げ出していく。

メタナイトはカービィからも、フォームたちからも少し離れた。いつでも飛び出せる距離でありながら、彼らの視界には入らない絶妙な位置だ。そこで戦闘を見守るつもりだった。

それをチャンスと思った者が二人いる。

「メタナイト！」

戦士が驚いて振り向くと、デデデ大王とエスカルゴンが悪どい笑みを浮かべている。その後ろには、人が一人入れそうな巨大なハート型の箱があった。

「ワシからのプレゼント、受け取るがいいゾイ!!開け、あ、ゴマ!!」

「よいしょ!!」

デデデ大王の掛け声に従い、エスカルゴンが箱の蓋を取る。

何が飛び出してくるのかと思ひ、メタナイト卿は身構えた。箱からリーノが現れた。

服装に変化はない。だが、顔から表情が抜け落ちている。いつもの彼女ではなかった。

「リーノ!!」

「気安くうちのメイドの名前を呼ぶなゾイ!!」

「こっちはそっちの関係を認めたくわけじゃないでゲスよ!!」

二人の言葉は無視する。それよりも、リーノの様子が気がかりだった。

リーノはゆらりと箱から出てくる。足取りはしっかりしている。ケガはしていないようだ。傍に駆け寄ろうと足を出して、止まった。

リーノの両手には、水晶玉と化したオマシーがいたのだ。

「陛下!これは一体……!」

「ぐふふふ……さあ、メタナイト。リーノの偽らざる本音を聞かがいいゾイ!」

水晶玉が妖しく光る!

「わたくしは……」

「リーノ」

「わたくしの事、迷惑に感じていませんか? 重荷ではありませんか?! だって私、寂しがり

屋ですもの。大好きな人と、いつも一緒にいたいんですもの！母も、父も、いなくなっちゃったから、いつも傍にいてほしいんですもの！村のみんなは遠いし、陛下たちは上司だし、メーム様やパーム様たちに頼るのは気が引けてしまう。あなただけなんです。あなただけが寄り添える相手なんです……」

メタナイトは動揺した。まさか、あんなに愛おしそうに笑う彼女が、こんな孤独を抱えているとは思わなかった。

同時にデデデ大王とエスカルゴンも、動揺していた。金槌で頭を殴られたようだ。メタナイトに追い討ちをかける言葉を忘れて、リーノを見ている。

「わたくしは、弱い。要領が悪くて、甘えん坊で、大人になれなくて、愛する人たちに恩も返せない。今、みんなが困っているのに、助けられない。私は私のことが、きら……」
「えーい!!!」

アーニヤがリーノから水晶玉をぶんどった！それを床に投げつけるが、叶わない。水晶玉は魔獣なのだ。浮かんで回避できる。

「アーニヤどいて！やー!!!」

今度はランタンが、バットを振り回して水晶玉を床に殴り落とした。水晶玉はゴンゴンと鈍い音を鳴らして転がっていった。

リーノは数回瞬きする。

「あら？わたくしは……」

「リーノは弱くない！ちゃんと仕事できるし、村のみんなから好かれて、子供たちから憧れられて、村のためにも頑張ってる!!」

「そうですよ！だから、もう自分自身のこといじめないでください」

「ランタン、アーニャ」

「寂しいなら、私たちが傍にいてあげる」

「お城のメイドにだってなってみせますよ」

「ふふ、三人でなら楽しそう」

親友二人が、リーノを抱きしめる。

リーノは徐々に意識がクリアになり、その瞳に涙を浮かばせた。

メタナイトが伸ばした手は空中を少し彷徨い、体の方に引っ込めた。いつものようにマントを体に巻き付ける。驚かさないように、ゆっくりリーノに近づいた。

「リーノ」

「はい。メタナイト卿」

「後でゆっくりと話そう。いいか？」

「はい。場所はわたくしの部屋でいいですか？」

「ああ、頼む。」

メタナイトはしばし恋人の瞳を見つめた後、カービイたちの方へと体を向けた。戦いはすでに終盤で、ビームをコピーしたカービイが二体の魔獣を倒していた。

その日の夜。

陛下と閣下には市販の素うどんをだした。私が昔からお世話になっている村長夫婦に、ハナさんに手を出したのだから、罰は受けていただく。

私の作ったご飯ではないとわかると、御二方ともたいへんがっかりされた。市販のうどんも美味しいですよ？

それ以上に私のご飯を求めて下さっているのかしら。メイド冥利につきますね。

私の本音を無遠慮に暴いた罪は、なかったことにしました。いつかは向き合わなくてはならない感情だったのです。そのいつかは、今日だと思うことにしました。

そう陛下たちに伝えると、「一週間有給扱いにするので休むように」と言われた。自責の念にかられているみたい。失礼だけど、しおらしい陛下たちは別人みたいだわ。はやく元気になっていただくと為にも、明日はおいしいご飯を用意しましょう。

すべての支度を整えて、私は自室に帰りました。すぐに風呂に入り、体の汚れを丁寧に洗い落とします。普段着の中でも落ち着いたワンピースを選びました。それから部屋を綺麗に片付けていると、ドアがノックされました。誰かはわかっています。

メタナイト卿が来ました。

彼を部屋に招き入れ、飲み物を用意します。その間私はあまり話せませんでした。いつもそうですが、今日は緊張していて、言葉に詰まったのです。

リビングのテーブルに紅茶とコーヒーを置いて、彼の向かい側に座ります。一口ほどコーヒーを飲んで、メタナイト卿は褒めてくれました。

「いつ飲んでも、君のいれてくれたコーヒーはうまいな」

「ありがとうございます。とても嬉しいです」

「単刀直入に聞く。私は君を寂しがらせていたか？」

「いいえ。メタナイト卿はいつだって、わたくしに喜びと幸せをくださいました。わたくしが抱える孤独は、両親が亡くなったことが原因です。時間をかけて、癒すしかないと思います」

「そうだな。リーノ。私は、そなたの力になりたいと思っている」

「それは……今後もわたくしと恋人でいてくださるのですか？」

「もちろんだ。君は違ったのか？」

「いいえ。わたくしも、メタナイト卿と恋人でありたいです。ただ、面倒ではありませんか?」

「面倒なものか。傍にいさせてくれ。君が好きだ」

「わ、わたくしも、メタナイト卿が好きです」

話し合いは、想像よりもずっと怖くなかった。むしろ話せてよかったと思えた。固まっていた心が柔らかくなり、今はふわふわとしていて温かい。

ふと、今ならと思った。

「メタナイト卿、この後時間がありますか?」

「あるが、長くは無理だな。どうした?」

「いえ、その。少しの間だけでも、一緒にいられたらと思ひまして」

「ああ、わかった。時間までここにしよう」

「えーと、では……その、あちらに行きませんか?」

リーノの視線の先にはベッドがある。その意味を理解したメタナイト卿は、数瞬間まった。その様子に、リーノは慌てた。

「無理には言いません!ただ、その、今日は近くに、あなたを感じたくて」

「リーノ、大丈夫だ。わかっている」

「はい」

メタナイト卿はコーヒーを飲み干すと、立ち上がった。そしてリーノの隣まで歩くと、手を差し出す。

「お手をどうぞで」

いつかエスコートしてくれたように。

リーノは微笑んで、手をそつと重ねた。

巨木の恋

「行つてきまーす！」

「じゃあな！リーノ」

「ぼよぼよ〜い」

「みなさん気をつけて」

フーム様たちがリュックを背負い、城から出て行く。今日はウイスピーウツズの森を訪ねるらしい。

星のカービィといえば、りんごの実をつけるウイスピーウツズだろう。ゲームではお馴染みのボスキャラだ。一度会ってみたい。

それよりも、森に入ったら迷つてしまうことが恐ろしくて、行きたくないけど。

リーノは掃除用具を抱えて、次の場所を目指した。

「今日は久々にいいお天気だから、お仕事頑張ろうっと」

陛下たちにも、おいしいご飯を作つて差し上げなくちゃ。

そう考えて掃除は隅々まで行い、お昼からたくさん動けるように洋食定食を作つた。「おいしい〜」と連呼する、デデデ陛下とエスカルゴン閣下は常に笑顔だった。私も嬉し

くなつて、お二人が食事する様子を食べ終わるまで見ていた。

そこまでは良かった。

「さうて、お散歩にでも行くかゾイ」

「わたくしもお供するでゲス。陛下」

あからさまな演技に口元がひくりとひきつる。もつと上手に隠していただければ、私だつて気づかないのに。正直な方たちだなあ。

「何を企んでいらつしやるのですか？」

「何も!?!」

「いつもいつも、私たちは悪い事企んでるわけじゃないでゲスよー!」

「いっーだ!!」

歯をむき出して私に見せる。まるで幼子のような行動に笑つてしまった。

「くすくす……かしこまりました。そう仰るなら信じます。夕飯までにはお戻りください」

あつさり引き下がった私に、お二人は驚いたようだ。目を大きく開いて、互いの顔を見合わせている。

私はそんなお二人を置いて、食堂から出て行つた。

午後三時頃に掃除を切り上げて、村へ行く。夕方の買い出しだ。いつもは村人に注文して、お城まで届けてもらう。けれど今日は、調味料が一つ空になっていて、私も同じものを購入したかった。なので、直接購入するために、私は村まで降りてきたのだ。

村でたつた一店舗しかないコンビニへ入る。

「こんにちは。お邪魔しますね」

「いらつしやい！ゆつくり見ていってくれ」

にこりと微笑めば、相手も笑顔で返してくれる。私はカゴを取り、店内を進んだ。

まず調味料の棚から、目的の商品を四つもカゴに入れる。二つはお城の厨房に置いて、もう半分は自宅に置くのだ。残り一つになったらまた買いに来ればいい。

次はお菓子コーナーで、ワドルデイたちに配るお菓子を選ぶ。自分も勤務中に舐めると、子供たちに配ることもあるので、みんなから好かれる商品を選ぶ。そのうち一つは高い値段の物を選ぶ。中々食べられない分、あげると喜ばれるからだ。

必要な分はカゴに入れた。他にも必要なものがなかったか、少し考える。

すると、誰かに後ろから肩をトントンと、軽くつつかれた。振り返る。

「は、いっ」

ぶに。

頬をつつかれた。

「きや」

「私よ」

「アーニヤもいますよ」

アーニヤとランタンだったみたい。驚いたわ。

「もう、びつくりしたわ」

「悪かったわね。買い物するところが目に入ったからさ、声をかけようと思ったのよ」

「ついでに買い物もしようと思ひまして」

二人もカゴを持っていた。だが、商品は入っていない。これから選ぶのだろう。

「この飴、おいしいんですか？」

アーニヤが私のカゴに入っている、落ち着いた色合いの飾り気のない飴をしげしげと見る。前世でいう黄金糖というお菓子によく似ている。

「おいしいわ。私、いつも買うの」

二人は「そうなの」と言うと、同じお菓子をカゴに入れた。

「リーノが言うなら間違いないわね」

「ですねえ。帰って食べるのが楽しみです」

二人にとつてもおいしければ嬉しいです。私は、必要なものは選び終わりましたので、

会計を済ませてきますね」

「わかりました。もう少しお話する時間がありますか？」

「ありますよ。では、外で待ってますね」

二人に手を振って、私は先に会計を済ませた。

店の中に居ては邪魔になるので、外でのんびりと待つ。夕日をぼんやり眺めていた。

「こんにちは」

「こんにちは」

反射的に笑顔で挨拶を返す。相手は名前を知らない、同年代ぐらいの男性だった。男性は隣にやって来た。近いと思っただので、一步離れる。男性は離れた分だけ近づいてきた。なぜでしょう。

「何か？」

「君と少し話がしたいんだけど、今ヒマ？」

「友人を待っていますので」

断ったつもりだった。けれど、相手はそう思わなかったみたい。にこっと笑いかけられた。

「良かった。あのさ、今度おれの家でパーティするんだ。よかつたら来ないか？」

「行きません」

「なんで？メタナイト卿に止められているの？」

「いえ、知らない人について行かないことにしているんです」

「そうなんだ！じゃあ、自己紹介するよ！おれは……」

「ちよつと、私のリーノに何か用なの？」

お店から出てきたランタンが、私と男性の間に割って入る。男性はランタンを眺めて、またにこつと笑った。

「ちよつと誘ってただけだよ。君もどう？」

「好きでもない奴の相手なんかしない」

「きついなあ」

はつきり断られても笑っている男性に、気味悪さを感じた。

私は無言でランタンの腕を掴むと、お店の入口に向かう。ちよつどアーニヤが出てきた。た。

「二人ともちよつとこつちに」

アーニヤの腕も掴む。ボルン署長のいる警察署へ足を向けた。進もうとする私の腕をランタンが引き止める。

「どうせならリーノの家に泊まるわ。アーニヤはどう？」

「私もそうします」

「仕事はいいんですか？」

「とにかく、行きましょう」

「あつ、待つてください。……私たちが帰りますので。さようなら」
「送るよ」

力強く別れの言葉を言ったのに、ついてこようとする。嫌だと思つて、ついに眉間にシワが寄つた。

「その必要は無い」

聞き慣れた声でした。男性の後ろにソードナイトとブレイドナイトが立っていた。

男性は驚いて振り返る。

「我々を送る。どこまで行くんだ？」

「お城です」

「では一緒だな。行こう」

歩き出す二人の戦士の後ろをついて行く。男性は何か言おうとして、結局やめた。

村から充分離れた、お城へと続く坂道でアーニヤがブレイドナイトの隣に並んだ。

「さつきは助けてくださつてありがとう」

「困っているように見えたから、当然のことをしたまでだ」

「それでも助かつたわ。ありがとね、二人とも」

「礼には及ぼん」

今度はランタンがソードナイトの隣に並ぶ。いいなあ、私もメタナイト卿の隣に並びたいわ。

思わずため息を吐いた。ランタンとアーニヤがすぐに私の隣に戻ってきた。

「ため息吐いちやって、どうしたの？アイツ、怖かったの？」

「私、事情をよく分かってないんですけど、声をかけられたんですよね？しつこいと困りますよね」

「違うの。さっきの人には困ったけれど、二人が……ううん。四人が羨ましかったの。私もメタナイト卿の隣を歩きたいなあと思って」

「相変わらず仲がいいわね。そういえば、メタナイト卿はどこにいるの？城？」

私が聞けなかったことを、たまたまだけど、さらりと聞いてくれるランタンに感謝した。

ソードナイトとブレイドナイトは少し硬い声で答えてくれた。

「卿は大事な用があつて」

「今は別の場所にいます」

アーニヤの腕が、私の片腕を抱き込んだ。

「そうなんですか。ちよつとの間だけ、リーノは寂しいですね」

「うん。でも、私よりメタナイト卿の方が大変だろうから。帰ってきたら癒してさしあげたい」

「大変さとか、そういうマイナスにどつちが上とかないわよ。両方大変。二人とも寂しかった。だから、お互いに癒されなくちゃね」

「ランタン、それ凄く素敵です！」

「さすが、ランタン！そうよね。メタナイト卿が帰ってこられたら、無理のない範囲で甘えさせてもらおうつと」

「わいわいと話し出す。時々、ソードナイトとブレイドナイトも参加して、帰り道はとも楽しかった。」

私は夕食を作らないといけないので厨房に向かい、アーニヤたちは私の部屋で待つらしい。ソードナイトとブレイドナイトは仕事に戻ると言い、廊下の奥へ消えていった。

その日の夜、激しい雨が降った。風も強くて、出かけられたフーム様たちのことが心配だ。無事だといいいのだけれど。

私はアーニヤとランタンと、三人一緒に眠る。自室のベッドには、二人しか入れない。なので、リビングからソファを持ってきてベッドの隣に配置した。

今回は私がソファで眠る。三人が布団に潜ったとき、アーニヤが話し出した。

「そう、言い忘れていたんですけれど」

「なあに？」

「私たち、本当にお城のメイドになりたいんです」

「どうして？今の仕事に何か問題でもあるの？」

「いえ、仕事にはなくて、周りがね。今日みたいにし、男たちが寄ってくるのよ。勤務先にも居座られるし、店長たちも困ってんの」

「家の前で待ち伏せされたこともあるんです。ポルン署長に相談もしたんです。けれど、何も起きていない今は、注意することしかできないと言われまして……」

「そうだったの……」

じっとしていられなくて、上体を起こす。

考えたくないけれど、最悪のケースが起きたとき、近くにいない私じゃ助けられない。ならばいつそ、傍に居てもらった方がいいのかも。

「うん、そういうことなら、私は二人に協力する。明日から、どうすれば陛下に雇ってもらえるか考えましょう」

「ありがとう！リーノ。相談してよかった」

「ありがとうございます。リーノ。上手くいくよう頑張りましょうね」

「ええ！」

三人はようやく、体から力を抜いて眠ることができた。

翌日。廊下の掃除中。

仕事が一段落したら、それともお昼に相談しようか。どのタイミングで話せばいいのか悩んでいた。

デデデ大王にそっくりな像を、優しく丁寧に拭き掃除する。そこにフォーム様たちが走ってやって来た。

掃除の手を止めて、身なりを整え、三人を迎える。

「よかった！リーノやつと見つけた！」

「探したぜ〜」

「ぼよぼよ」

「こんにちは、フォーム様。ブン様。カービィ。何かご用ですか？」

ご姉弟は急いでいる様子だけど、カービィは楽しそうだ。大事な用だとわかっているのか、お菓子はねだってこない。

「お願い！デデデからラブリーを取り返してほしいの！」

「らぶリー？ですか」

たいへん可愛らしい名前だ。

なんでも、ウイスピーウツズの森に咲いた花の名前らしい。その花を、陛下がお城に持ち帰ってしまったのだ。ウイスピーウツズが困っているので、元の場所に返したいとのこと。

「わかりました。そういう事情でしたら協力させていただきます。陛下から、お花を返していただければいいんですよね？」

「そうよ」

「では、参りましょう。この時間ならば、お部屋にいらつしやるはずですよ」

四人は、大王の私室に向かった。

大王の部屋は扉が開いていた。中を覗くと、誰もいない。おかしい。

「ラツキーじゃん！今のうちに……」

「いえ、おそらくこちらの方に」

リーノは己の勘を頼りに部屋の奥、バスルームの方へ歩いていく。

少々力強く、ドアをノックした。

「陛下！リーノです。開けますね」

「開けるでないゾイ！」

「えっちでゲスよう!!」

「バスルームを使っていないことは、バレていますよ！」

音が反響していないし、シャワー音も聞こえない。何より陛下がバスルームを使っ
たらっしやるのに、エスカルゴン閣下も中にいるなんておかしいです！

私は確信を持って扉を開けた。

そこには、朝お会いした姿のままのお二人がいらっしやった。

私は仁王立ち、目をつりあげて陛下の顔と閣下の顔を交互に見る。お二人は喉をこく
りと鳴らした。

「陛下、閣下。フーム様たちから事情は聞きました。お花を、ラブリーを返してくださ
い。でないど、今日のお昼は卵かけご飯にいたしますわ！」

「ええい、怒るでないゾイ！あんな花なんぞ、もう用はないゾイ」

「さっさと持っていつちやうでゲスよ！」

「……かしこまりました。許可をいただけただけなので、ウイスピーウツズの森に返却してお
きます。寛大なご判断に感謝申し上げます」

深く腰を折り、頭を下げる。まっすぐ頭を上げてから、バスルームを出ていく。

後ろで待っていた三人に、許可をもらったことを伝えた。

「取られた物を取り返すんだから、別に許可なんて要らねーんじゃねえの？」

「勝手に持っていったら、陛下たちがなさったことと同じですわ。それではいけないと
思います」

「たしかに」

ラブリーは部屋の窓際、よく日差しがあたる場所に置かれていた。フームはラブリーが入った鉢植えを持って、笑顔になる。

「ありがとう。リーノ！このお礼は必ずするわね」

「お待ちしておりますね」

ふざけてそんなことを言うと、フーム様は柔らかく笑い、ブン様とカービィを連れて部屋を出ていかれた。

さて、私も動かなくちゃいけない。

バスルームに戻り。ぐふぐふ笑っている陛下たちに声をかけた。

「デデデ陛下、エスカルゴン閣下、昼食に話があります。お時間、いただいてもよろしいですか？」

「あー、いいゾイ。後で聞いてやるゾイ」

「手短かに話すでゲスよ」

「はい、かしこまりました。ありがとうございます」

これでいい。

今度こそ、リーノはバスルームから、デデデ大王の私室から出ていく。さあ、掃除に戻ろうと足を進めた。

昼食、デザートを食べてご機嫌が良いときに、メイド募集を切り出した。

今は募集を考えていないらしい。しかし、有能であれば雇ってもいいとも仰った。

「かしこまりました。質問に答えていただき、ありがとうございます」

「ところでデザートのおかわりはあるかゾイ？」

「陛下と閣下、それぞれ五つずつご用意しております」

「ゼーンぶ持つてくるでゲスよ！」

「かしこまりました」

昼食は楽しく終わった。

夜は戻ってこないと突然言われたので、お弁当を急いで用意し、陛下たちに渡す。

「何時に戻られますか？」

「わからんゾイ」

「あまり遅くなるようでしたら、わたくしは先に休みます。ご用がある場合はワドル

デイたちを頼ってください」

「了解でゲス」

「それじゃ、出発ゾイ！デハハハハ!!!」

「いつてらっしゃいませ」

どたばたと駆け出すお二人を見送り、私も出かける準備をする。村に行くのだ。アーニヤとランタンにメイド雇用条件を伝えに行こう。

夕方、二人とも仕事なので多くは話せない。なので、手紙に話したい内容をしたためた。それを持って村に行く。

アーニヤは本屋に、ランタンは雑貨屋で働いている。それぞれに立ち寄り、二人に手紙を渡した。

昨日のような困ったイベントはおこらず、リーノはほつと胸に詰まった空気を吐いた。

夜、八時を過ぎても陛下たちは帰ってこない。

きっと悪いことをなさっているんだわ。こんなとき、メタナイト卿がいてくれたら相談できたのに。

そつとため息を吐いて、リーノは自室に帰った。

次の日の早朝。いつもより早い時間に目が覚めた。陛下たちはまだ戻られていないみたい。ならばと、今のうちに陛下と閣下の寝具を洗いたての物に変えておく。これで戻られたとき、気持ちよく眠れるはずだ。

陛下たちは朝十時頃、ボロボロの姿で帰ってきた。

疲れ果てたお二人を見て、怒りよりも心配が勝った。

「お風呂の準備はまだですので、先にご飯になさいますか？」

「そうするゾイ」

「お腹減ったでゲスよう」

「すぐに準備いたします。食堂まで歩けますか？」

お二人はゆっくり動き出した。

怒るときは、お二人が元気な日にしよう。そう思った。

産業革命

自然豊かなプブレツジ。

平和な村に工場が建てられた。この村には似合わない見た目をしている。その工場煙突から、黒々とした煙が二十四時間あがっている。

その煙は、城へたどり着くと壁や天井を黒く汚した。おかげで掃除が大変である。

「こういうとき、アーニヤたちの手があれば、楽できますわね」

ワドルデイたちはやることがあるので、みんな忙しそうだ。リーノと共に掃除するワドルデイたちも、どこかへ駆り出されている。

おそらく、新しくできた工場で働いているのだろう。あの工場には、嫌な予感がしていた。村人たちに怪我がなければいいのだが。

「リーノ！」

「フーム様？少々お待ちください」

高い所を脚立にのぼって掃除していた。下からフーム様に呼ばれたので、脚立を降りる。

身だしなみを整えようとしたら、何か言いたげなフーム様と目が合った。今日は先に

お話を聞いた方が良さそうね。

「このような格好で失礼します。何かご用ですか？」

「デデデの企みを止めて欲しいの！あなたの言葉なら耳を貸すでしょう？」

「それは、難しいかと。わたくしはただのメイドです。いくら陛下たちに長く仕えてい
るとしても、あの御方は耳を貸してくれませんわ」

「そんな……」

「ごめんなさい。フォーム様、今はお力になれずとも、騒動が落ち着いたときには必ず力に
ならさせていただきます」

「それじゃ遅すぎるとよー」

フォーム様は走り去ってしまった。

その背中を、私は直視できない。私がこうして、のんびり構えてられるのは、未来を
知っているからだ。工場は壊れて、村人たちは正気に戻る。壊れた自然は帰ってくる。

でも、フォーム様はそれを知らない。だから、今を一生懸命生きられる。行動される。

それが眩しくて目を伏せる。自分が少し情けなかった。

数日後、村が気になった。雨が降っていたからだ。そろそろ酸性雨によつて自然が壊
され始める頃だ。私はその様子を見ておかなくてはならないと思った。

城の廊下でメタナイト卿に出会い、一緒に村へ向かった。

会話はあまりない。私の重苦しい気持ちを察してくださっているのかも。

村へついたのに、誰にも会わなかった。おかしい。お昼前だとしても数人とすれ違うものなのに。

「みんな、工場で働いているのでしょうか？」

「だろうな。アーニヤとランタンは？」

「二人は工場には行っていないはずです。前に工場について説明したところ『それなら、自分たちで作品を作っていた方が良い』と話していましたから」

「ならば、無事だろう。雨だ。家にいるだろう」

「ええ、そうですよね」

メタナイト卿に花畑があつた村の外れに行かないかと誘つた。彼は了承してくれたので、そちらに足を向ける。

花畑には先客がいた。フォーム様だ。声をかけようとして、何も言えなかつた。フォーム様の先にあつたはずの自然がなくなつていたので。草木は枯れて、以前のような緑美しい景色はない。

「この、雨のせいですね」

「ああ、そうだ」

「メタナイト卿、それにリーノ……。気づいていたの!？」

「おおよそな」

「わたくしは、何となくという程度です。あの煙には、良くない物が含まれている気がしていました」

「二人とも、どうして止めてくれなかったの!？」

メタナイト卿はちらりと私の方を見てから、言った。

「愚か者たちは痛い思いをしなければ理解できない」

「……………」

手をぎゅつと握りしめる。フーム様が声を張り上げた。

「ひどいわ！リーノが村を、みんなを大切にしていることは知っていますよ！」

「いいんです。フーム様、メタナイト卿は間違っています。それに私だって、こうなることをわかっていたのに、何もしなかったんです。悪いのは私自身です」

「リーノ……………」

「フーム様、それにメタナイト卿。わたくし、不安なんです。あの工場は便利グッズを作るためだけなのでしょうか？」

「なんですって?」

「わたくしの勘が正しければ、もつと悪いことが起きるはずですよ。それが恐ろしいので

す」

「……調べてみる!!」

フーム様は走つてどこかへ向かわれた。きつと工場だろう。

「メタナイト卿、今日は工場の方に行ってみようと思いますの」

「何をするつもりだ」

「何もしません。外からただ、眺めるだけですわ。この自然を壊した原因を、ただ見たいんです」

「わかった。共に行こう」

「ただ近くで見るだけですよ?」

「念の為、というやつだ」

「わかりました。では、ご一緒に」

工場へ歩いていく。誰にもすれ違わない。それがとても寂しくて、こんなこと何度も起こりませんようにと祈った。

やがて雨は止む。

工場が近くなる。すると激しい物音と人々の悲鳴が聞こえてきた。私たちは走り、逃げてゆく村人の一人を捕まえる。

「何がありましたの!?!」

「デデデに騙されていたんだ！ここはロボット工場だった!!今は、カービイが戦っている！」

それだけ言うのと村人は走って行ってしまった。メタナイト卿の方へ振り向く。

「メタナイト卿！」

「落ち着け。フームたちの姿がない。まだ中にいるんだ」

「そんな……わたくしのせいで、フーム様は！」

「君がきっかけだったとしても、決めたのはフームだ。信じて待とう」

「わかり、ました」

「リーノ！メタナイト卿!!」

「逃げろく!!!」

「フーム様、ブン様、カービイ！」

「逃げるぞ!!」

「は、はい！」

後ろから走ってくる三人と合流し、工場から離れ続ける。

五分ほど走っただろうか。後ろで大爆発が起きた。

遠くで悲鳴も聞こえた。なんとなく、聞き覚えがあるのは陛下たちの声だからだろう。

きつと今回も、ワドルドウ隊長が兵士を率いて探しに行くんだわ。帰ったらご飯の用意だな。

村は自然を失った。

取り戻すべく、キュリオさんとフォーム様がリーダーとなり村人たちは動き出した。

私も参加する。お手伝い程度なのは、炊き出しを主に担当しているからだ。私が作るご飯をみなさん楽しみにしてくれているらしい。嬉しいことだ。

何より、以前より村人たちが自然を大切にしようと呼びかけていた。子供たちは花を見つけては水をやった。大人たちは、もつとよく考えて木を切ろうと話し合うようになった。

それが嬉しくて、メタナイト卿との会話でも話題に出す。

「良い方向に落ち着きそうです。良かったですわ」

「だが、また同じことが起こるかもしれない」

「そのときは、また頑張ればいいんです。今度は、わたくしもフォーム様のお手伝いをさせていただきます」

それが、私の出した結論だった。

工場のせいで自然が大変なことになった。そして、お城も大変なことになった。

天井と高い壁が煙で汚れた。私一人頑張っても、すぐには綺麗にならない。ワドル
デイたち総出で掃除しても数日かかってしまった。

あー、これは間違いない、掃除上手なメイドがもう二人いた方が助かるわね。

陛下に進言したところ、お試し三ヶ月で雇うこととなる。

「というわけで、陛下から許可をいただきました！二人とも、準備はいい？」

「いいわ！店長には言つてあるもの」

「私も、大丈夫ですよ！」

「では、今から引越し始めましょう！」

アーニヤとランタンは、これからメイドになる。

そして私は二人の上司、メイド長となった。これには驚いた。

激辛ブーム

アーニヤとランタンがメイドとして雇用された。

試用期間は三ヶ月。この三ヶ月でばっちり結果を出して、二人とも採用してもらおうんだ。なので、初日から飛ばしていく。

朝五時に起こして、身だしなみを整える。髪型に規則はないので、二人ともそのままにするみたい。メイド服に着替えたら、ポケットに小型のナイフを入れておくよう注意した。

「なぜですの……？」

「陛下たちに縛られることがありますので」

「なにそれ！酷いじゃない！」

「ここは、そういう職場です。さあ、折りたたみナイフでいいですから、ポケットに入れて置いてください」

二人とも、私が用意した折りたたみナイフをポケットにしまう。アーニヤが両手を胸の前で組んだ。

「これが使われないことを祈ります」

「お守りのようなものですから。多分、大丈夫です」

二人が不安そうに眉を下げるので、気分を変えるために朝食を食べる。服を先に着てしまったので、昨日のうちに、作っておいたおにぎりを朝食に選んだ。

二人の部屋は、お城の中でも私と同じ階層にある。廊下を曲がった先が、アーニヤ、ラントンの部屋だ。荷物は少量に分けて運んだ。といつても、三ヶ月後どうなっているかわからないので、全ての荷物は運んでいない。

朝食後は、厨房に向かう。陛下と閣下のご飯を作るためだ。厨房には既に使われた形跡がある。洗われたフライパンに、まだ水滴がついている。

「陛下たちが起きられる前に朝食の準備を進めます。使われた形跡がありますね。おそらくワドルディたちのご飯を作っていたんだと思います」

「こんな朝早くからですか?」

「はい。ワドルディたちの朝食はいつも早めなんですよ。日が登らないうちから朝食を作り、夕方になる前から夕食作りを始める。人数が多い分、調理にも時間がかかります」

「なるほどね」

「では、朝食を作りましょう。今日は和食にいたします」

「なぜ和食なんですか?」

「昨日が洋食だったからです。毎日飽きないための工夫のつもりです」

「リーノのご飯なら毎日食べても飽きないわよ」

「ありがとうございます。褒めても何も出ませんわ」

「あら、残念」

どつと、私たちは笑いあつた。

朝食を作っている途中、完成一步手前で作業を中断する。陛下を起こしに行くためだ。

「エスカルゴン……様は起こさないの？」

「はい。ご自身で起きるので、目覚ましはいらないようです。できれば、エスカルゴン閣下と呼びましょう。敬語は必ず使ってくださいね」

「はい。わかりました」

「大王様……陛下と閣下に敬語を使うのは当たり前前だとして、私たちはリーノに使わなくていいのかしら？」

「あつ、たしかにそうですね」

「わたくしに敬語を使うなら、試用期間が終わり採用されてからです。それまでは、わたくしは二人の上司ではありませんから」

「わかりました。そういうことなら」

「もしばらくはこのままね。了解」

「では、陛下を起こしに行きます」

陛下を起こすポイントとは、耳元で朝食のメニューを読み上げることだ。詳細に、食欲をそそるように説明しつつ読み上げる。そうすると陛下のお腹が鳴る。その音を聞いて陛下は起きるのだ。

陛下が支度なさってから食堂に向かい席につくまでの間に、私たちも準備を進める。

陛下の支度は後から来たワドルディたちに任せて、部屋を出る。

厨房に戻り料理を完成させる。カートに料理を乗せて、必要な物を揃えたら厨房を出発する。

食堂に到着すると、陛下と閣下はすでに席についていた。リーノはデデデ大王とエスカルゴンに近づくと、頭を下げた。

「たいへんお待たせいたしました。すぐにご用意させていただきます」

アーニヤとランタンは壁際に立つてもらって、配膳は私がする。フードカバーを取ると、陛下は目を輝かせた。

「今日もうまそうだゾイ!!!」

「ほほ、おいしそうでゲスな!」

「ありがとうございます。どうぞお召し上がりください」

「いただきますゾイ!」

「いただくでゲス〜」

うまいうまい！と連呼する陛下。お二人とも箸を休めずに食べてくださった。お二人が食べ終わるまで、私もアーニヤたちの隣に立って待つ。

二十分後、全てのお皿は空になった。陛下と閣下はお箸を置いて、席を立つ。

「食った食った！リーノ、食後にコーヒーを持つてくるゾイ」

「かしこまりました。どちらに運びましょうか？」

「玉座の間ゾイ」

「私もコーヒーを」

「かしこまりました。コーヒーを二つお持ち致します」

陛下たちが出て行った後に、食器を片付ける。またカートに乗せて、厨房に帰る。三人で食器を洗い、布巾で水気を取ればあつという間に終わった。すぐにコーヒーにとりかかる。

「二人にもコーヒーの淹れ方を教えておきますね」

「リーノから教えて貰えるなんて！」

「メイドになったかいます！」

「ふふ、大袈裟ですよ」

そんなに褒められると照れくさい。誤魔化すように笑った。

やり方を丁寧に教えたため、少々時間がおしてしまった。

急いで玉座の間に向かうと、ちょうど魔獣がデリバリーされた後だった。

「おう、リーノ！ コーヒーをはよう飲ませるゾイ！」

「たがいま」

「ねえ、リーノ。アレって……」

「二人は入口近くで待ってて。私だけ行ってくるわ」

二人をカスタマーサービスに会わせたくなかった。だから入口近くで待たせる。

ガラガラとカートを押す。手にじんわりと汗をかいた。そこで、ふと気づく。足音が

後ろから聞こえてきた。振り向かず声を抑えて話す。

「なぜついてきたの？」

「一人よりも二人、二人より三人いれば」

「なんだって乗り越えられる。大丈夫。リーノは私たちが守ってあげる」

「だからリーノは私たちに力を貸してくださいね」

「守るためだったのに、しようがないなあ」

眉を下げて笑う。もう嫌な汗はひいている。背筋を先程までより伸ばした。前を向

く。もう怖くない。私が二人を守るんだ。

陛下の近くで止まる。そして手早くコーヒーをいれて、渡した。陛下はそれを受け取る、一口飲む。

そしてほつと息を吐くのだ。

「はあく、たまらんゾイ」

「ありがとうございます。エスカルゴン閣下、どうぞ」

「ただでゲス」

「……………」

こちらをじつと見てくる男性が一人。サングラスにシエフ帽子を被っている。ダウンロード機器の上に乗っているということは、おそらく魔獣なのだろう。できればお帰りいただきたい。

私の気持ちは置いておいて、一応お客様に当たるのでコーヒーを出した。

「どうぞ」

「メルシー」

メルシー。久しぶりに聞いた。たしかにフランス語で「ありがとうございます」だったはず。

魔獣はコーヒーを一口飲むと、雰囲気ガラツと変わった。一気に飲み干し、カップを持って、私に詰め寄る。何か言っているが、まったくわからない。

「あ、あの、落ち着いてください」

『ふむ。どうやら、リーノを助手に迎えたいそうですね』

カスターマーサービスがそう言った。

『そんなにおいしいなら、わたくしもいただきたいものですね』

「リーノを助手に？それはいいアイディアゾイ!!」

「なんの話でしょうか？」

「村に出すレストランの話でゲス。リーノは新しいレストランに出張するでゲスよ」

「今は新しく入ったメイドの研修、日々の仕事で忙しいので、お断りしたく」

「それは免除ゾイ！レストランで働くゾイ！」

お、お断りしたい！魔獣の仕事に手を貸したくないのだけれど……。ううん、考えようによつてはいいのかもしれない。情報が仕入れやすいから、メタナイト卿のお役に立てるわ。

うんうん悩んでいると、アーニヤが右から、ランタンが左から私を挟んだ。

「デデデ……陛下、エスカルゴン閣下！リーノが行くなら」

「私たちも勉強のために行かせてください！」

「うーむ……」

「看板ウエイトレスがいたら、ますます繁盛するでゲスな！」

「ならば、決まりゾイ!!デハハハハ」

陛下が笑う。私は小声で二人と話した。

「よかつたんですか？何か起こりますよ？」

「それなら尚更行かなくちゃ。ねえ、アーニャ」

「です。一緒に乗り越えましょう」

「二人とも、ありがとう」

こうして私たちは陛下の悪巧みに参加することになった。

次の日、レストランはカワサキの店の前に建てられた。酷いと思う。これじゃ、カワサキの店が潰れてしまうわ。

「陛下、レストランを別の場所に移動は……」

「せんゾイ」

「ですよね……」

カワサキ、ごめんなさいね。レストランがなくなったら、お詫びの品を持っていくわ。新しくできたレストランの名前は、レストランゴーンという。シェフ、ムツシュ・ゴーンから名前をとったのだ。店の支配人はエスカルゴン、ホール担当にはアーニャとラントンが加わったワドルデイたち。私とムツシュ・ゴーンは厨房で調理担当だ。といって、私は食後のコーヒーを出すためだけにいるので、調理には関わらない。

村長夫婦が最初のお客様だった。ハナさんに、何か変な物を食べさせるわけにはいかない。私はムツシユ・ゴーンを監視した。しかし、意外にも問題はなかった。普通の食材で、普通に調理するだけ。怪しい点はない。

拍子抜けしていると、ゴーンさんに何か言われる。辛うじて聞き取れたのは「カフェ」という言葉だ。

フランス語でカフェ、といえばコーヒーだったはず。ピーンとくる！

「コーヒーですね！かしこまりました」

コーヒーの支度が整うと、エスカルゴン閣下に村長夫婦へ持っていくように言われた。カートを押して、村長夫婦のテーブルにつく。

「おや、リーノもここで働いとったんか」

「いつものメイド服と違うわね。三人とも可愛いわよ」

「ありがとうございます」

いつも着るメイド服よりも、フリルが少々多い。私には可愛すぎる気がしたが、似合っているみたい。良かった。

食後のコーヒーを村長夫婦が飲まれる。

「うーん、これも絶品だ」

「最初から最後までおいしいなんて、幸せです」

「それは良かった。淹れたかがあります」

「うん？これもシエフが用意したものでは？」

「それはリーノが淹れたコーヒーでゲスよ」

「まあ、リーノ。あなた、こんなにおいしいコーヒーを出せるようになったのね。凄いわ」

「いつも、楽しく料理を教えてくださいましたハナさんのおかげですわ」

「おおげさよ。私はただ、基本的なことを教えただけ。頑張ったのね、リーノ」

「はい、頑張りました」

自分の成長を見守ってくれた人から、努力を認められる。嬉しくて、胸が熱くなった。

村長夫婦は笑顔で帰られた。

その後、村人たちが殺到する。

コーヒーは、フルコースを注文されたお客様だけにサービスされる。フルコースはいへん安い。カワサキのランチより安い。なのでやって来る村人たち全員が注文した。私はコーヒー作りに忙しくなった。

村長夫婦の次は、大臣一家をもてなすためホールに出る。

「まあ、リーノ！あなたまで」

「お許しください。陛下に命令されては、わたくしたちは従うしかありません」

フォーム様は残念そうにため息を吐いた。

ブン様が身を乗り出して言う。

「ところでさ、本当にアーニヤとランタンもメイドになったんだな！」

「はい。先日から働いております」

「君と同じように、城から出張しているんだね」

「その通りです。パーム様」

「あら！このコーヒーおいしいわ！」

「ありがとうございます。メーム様、淹れたかがありますわ」

その言葉に、店中の人が驚きの声を上げる。

「コーヒーはリーノが淹れたの？ 凄いじゃない」

「飲ませて！ 飲ませて！」

「私にもちようだい！」

「私のを少しあげるから、落ち着きなさい」

「新しくご用意しますよ。フォーム様とブン様には、ミルクとお砂糖をご用意いたしますね」

子供たちにはジュースをサービスする予定だったが、変更してコーヒーをだす。

二人は何も混ぜず、まずは一口飲んだ。

「苦い！でも、うまいかも」

「本当、凄いわ！リーノ」

「ありがとうございます」

深くお辞儀する。

大臣一家の会話を聞いていた村人たちが、手を挙げてコーヒーを注文しだした。すぐに用意を始める。

夜、リーノの自室にて。

レストランの制服から部屋着に着替え、メタナイト卿とお茶を飲む。今日は緑茶だ。温かいお茶を心ゆくまで楽しみたい。けれど、話題が不穏だ。

「……というわけで、レストランゴーンを手伝うことになったんです。すぐに知らせることができず、すみません」

「それは構わないが、大丈夫か？シエフは魔獣なのだろう？」

「今のところ問題ありません。普通ですわ。使う食材も、道具も、調味料も普通です。おかしな点はありませんでした」

「ふむ。では、みならの信用を得た頃に、何か仕掛けてくるかもしれない」

「そうですね。油断せずに働きますわ」

これで話は一段落した。まだ少し、話したい。

「あの、まだ話せますか？」

「ああ、今日は時間がある。どうした？」

「嬉しかったことを報告したくて」

「聞こう」

たくさんの人たちに、コーヒートを褒めてもらえたことを話した。

「リーノのコーヒーはおいしいからな」

「ありがとうございます。すみません。今日はご用意できなくて」

「気にしないでくれ。このお茶もいい物だ」

メタナイト卿がお茶を一口飲む。

突然、雰囲気が変わった。

「思い出した。リーノ、聞きたいことがある」

「何でしょうか？」

「男に声をかけられたらしいな」

「……ああ、この間のことですね」

「君の口から詳しく聞きたい」

「わかりました。お話します」

私はその日のことをできるだけ詳細に話した。多分、ソードナイトさんとブレイドナイトさんから聞いたんだわ。

すべて話終えると、メタナイト卿は少し冷たくなったお茶を飲んだ。

「男の特徴は覚えているか？」

「あまり覚えていません。好きではない思い出は、すぐに忘れるようにしているので」

「そうか。残念だ」

なぜ残念なのでしょうか？

本当は覚えていたのですが、言わなくて良かったかもしれない。

レストランが開店してから数日。ブームは起きた。

激辛ブームだ。

カワサキの激辛ラーメンに勝つため、こちらは激辛ピザで勝負にでた。

店に来るお客様たち全員が、激辛ピザを注文する。

カラシたっぷり、凄まじい料理がどんどん厨房から運ばれていく。食べた人はみんな、辛さに苦しんでいた。私は見ていられなくて、エスカルゴン閣下にある提案を言った。

食後にアイスをサービスするのだ。

これはかなり好評だった。けれど、新しくカワサキの店でた激辛ギョーザの方に人は集まった。ただ、ギョーザを食べた後にレストランゴーンに寄る人もいる。アイスが目当てだ。

お客様は来る。それでも、カワサキの店に客を取られて悔しい陛下たちは、新しい激辛メニューを考えた。辛さ百倍、激辛ハンバーガーだ。

ムツシュ・ゴーンがハンバーガーを作る様子を見ていたのだが……驚いた。すべてにカラシを使っていた。あれは、辛い。私は食べたくないです……。

今回は、アイスではなくシャーベットがサービスされる。ピンク色のシャーベットだ。とてもおいしそう。でも、なんだか嫌な予感がする。

「リーノも食べるかゾイ？」

「いえ、わたくしの分までどうぞ」

「そうかそうか！食べてやるゾイ！」

陛下たちはおいしそうにシャーベットを食べる。何も無ければいいんだけど。

事件はすぐに起きた。

シャーベットはカービイそっくりに作られた。それを食べた村人たちが、カービイを食べようとした。そして、ムツシュ・ゴーンが真の姿を現した！

今はコックカービイと戦っている。

「なんてこと……!!」

「リーノ！こちらに！」

「メタナイト卿！」

フォーム様たちの傍に、メタナイト卿がいらつしやつた。急いで近くに駆け寄る。その時、ホールを見回したが、アーニヤとランタンがいない。

「メタナイト卿、アーニヤとランタンの姿が……」

「私が外に避難させた」

「そうなんですわね！よかった」

安心したのも束の間、カービィが敵に冷やされてしまった。そこにカワサキの激辛カレーが投げられて、カービィの口に入る。

そして、カービィは初めて口から火を吹いた。

魔獣は燃え、店にも引火する。

「逃げるぞ！リーノ、先に行け！」

「はい。メタナイト卿」

スカートを持ち上げて、出入口に駆け出す。

充分離れた場所まで走った。息を切らして振り向くと、メタナイト卿、フォーム様、ブーン様、カービィも一緒だった。

お店は燃えてなくなつた。

レストランゴーンの火が消えた後、陛下たちはカワサキの店の前で皆に囲まれた。アーニヤと、ランタン、私、メタナイト卿は、それを遠巻きに見ていた。

「陛下……閣下……」

村人たちを危険に晒したのだ。怒られて、罰を与えられて当然。村人たちは、残酷なことはしないだろう。わかっているけど、心配だった。

「自業自得だわ。行きましたよ。反省させるべきよ」

「ここで、ちゃんと罰を受けないといけないと思います。リーノ」

「わかっています。ただ、見届けたくて」

陛下たちはカワサキのホットスペシャルという、激辛カレーを食べて、転倒された。

「ワドルデイたちを呼んで、運んでもらおう」

「そうですね」

ワドルデイたちを呼ぶために城へ戻る。

帰ってきたら、胃に優しいご飯と、アイスを付けて差し上げよう。

タマゴ

「カービイのタマゴ、ですか？」

「そう！カービイと同じぐらいのサイズでさ、寝て起きたらカービイが持つてたんだ」

朝早い時間に雨が降り出した。きつとにわか雨だ。数時間で止むだろう。

ブン様は村の方へ遊びに行かれて、雲行きが怪しくなつたので一度帰つてきた。

そのとき、一階でワドルディたちと洗濯物を取り込んでいた私と、たまたま会つたのだ。

私は頬に手を添えた。

「カービイと同じぐらいのサイズのタマゴですか。カービイは赤ちゃんだから、タマゴは産めないと思うんですけど……」

「そうだけども、面白いじゃん！」

「まあ、ブン様だったら。からかいも、ほどほどになさつてくださいね。あなたは、カービイのお友達なのですから」

「へーい。んじゃ、またな。リーノ」

「はい。また、ブン様」

ブン様はお家に帰られた。屋根のある場所に洗濯物を干し直した後、メタナイト卿のお部屋に行く。

二度、ノックをした。ノックは三回以上するのがマナーと聞いたことがある。この国ではノック二回で通っている。それ以上すると、うるさいとか、多いとか言われるのでしない方がいい。

扉が開く。

出迎えてくれたのは、ソードナイトさんだ。

「おはようございます。中で、少しお話できますか？報告したいことがあります」
「どうぞ？」

中へ招いてくれた。奥に進むと、椅子に座ったメタナイト卿と、床に座ったままのブレイドナイトさんがいた。メタナイト卿の隣まで歩く。

三人の視線がこちらを向いた。

「おはようございます。メタナイト卿、ブレイドナイトさん」

「おはよう、リーノ」

「おはようございます」

「報告です。カービーがタマゴを産んだ、と村で噂になっているみたいです」

「おそらく、陛下が用意したタマゴのことだろう」

「ご存知でしたの？」

「昨夜、深夜に陛下たちがカービイと同じくらいのタマゴを持って、城の外に出かけられた。カービイに預けたということは、おそらくカービイに育てさせるためだ」

「カービイに育てさせて、襲わせるつもりでしょうか？ 酷いわ……」

「かもしれない。村へ行くなら気をつけるように」

「行くつもりでしたが、今日はやめておきます。二人に、予定が変更になったことを伝えるに行かなくちゃ」

今日は村へ行つてやることがあった。

先日のレストランゴーンでの騒ぎ。迷惑をかけたカワサキへ、お詫びのお菓子を持っていくこと。久しぶりにヤブイ先生の勉強会を開くため、先生に許可を貰いに行くこと。

どちらも明日にまわそう。命が大事だ。

メタナイト卿たちと別れて、私はアーニヤとランタンのいる階層へ急いだ。

二人を見つけて、予定を変更したことを伝えた。陛下がいないうちに、お部屋を大掃除したいと言ったのだ。

「この時期に大掃除ですか？」

「陛下の部屋はいつでも綺麗にします。大掃除は数ヶ月に一回、もしくは思い立ったら

やります」

「臨機応変つてヤツね。仕方ない。陛下の部屋、綺麗にしちやいましょう」

「ありがとうございます」

「カワサキへ贈るお菓子と、先生の件はどうしますか？」

「今日、陛下とお話します。明日の午後から半日休めるようにしますので」

「それなら、仕事を気にしないでいいので、余裕を持って取り組めますね！」

明日が楽しみだと、二人は笑う。私も笑った。

確実な情報ではないので、カービイのタマゴが魔獣かもしれないということは、黙っておいた。

次の日の午後、フーム様と厨房で出会った。なんでもここから、いい匂いがただよってきたらしい。

「今、カワサキに贈るお菓子を作っているんですよ」

「リーノたちの手作りね。おいしそう」

「味見していく？えーと、フーム様」

「なんか、ランタンにそう呼ばれるの変な感じ」

「ランタン、フォーム様にも敬語を使ってください」
「気をつけるわ」

お菓子を盛った皿をフォーム様の前に出す。フォーム様はお行儀よく、食べ始めた。
「おいしい！これならお店だつてできるわ」

「ありがとうございます」

「ありがとうございます。フォーム様」

「うん。二人とも、その調子です」

「ねえ、聞いてみたかったんだけど、リーノの指導つてどんな感じ？」

私の前でその質問をするのかと、驚いた。二人は気にせず答える。

「一言で言うなら優しいわね。何回同じ質問しても、笑顔で答えてくれるから助かるわ」

「丁寧に教えてもらえるので、わかりやすくもいいですね」

「リーノは教えるのも上手なのね！」

「アーニヤとランタンが相手だからですよ。もしまったく知らない方が相手だったら、きつと緊張してうまく話せません」

「リーノ、あがり症なところあるものね」

女性が四人もいれば、話も盛り上がる。

話題はカービィに変わった。

昨日、村の噂になったタマゴは、その日のうちにかえったようだ。

中から魔獣の子供が出てきた。その子はずいぶん食欲旺盛で、村中の食料を食べてしまったらしい。村人たちは怒り、カービィは魔獣の子供を庇った。そしてカービィは魔獣の子供を連れて、村の外れに新しい寝床を作った。

そこに魔獣の親がやって来た。親は子供に攻撃されて怒り、子供に攻撃した。それに怒ったカービィが戦い、親の魔獣は倒された。

魔獣の子供は、村から近い森で生活することになり、カービィが時々面倒をみるために通っている。

「魔獣は、やっぱり陛下のせいかしら」

「そうよ。リーノ、村に何かあってからじゃ遅いわ！なんとかデデデたちを止められな
い？」

「ごめんなさい。難しいと思います。私も考えました。でも、他の何かで興味を引きつけたとしても、ホーリーナイトメア社のサービスを思うんです。そうなれば、どこかに魔獣を仕掛けてくる。ホーリーナイトメア社がなくなれば問題は解決するんですが」

「その、魔獣をだうんろーどする機械を、壊すだけじゃダメなのですか？」
「機械は直してしまえば、また使える。だから、壊しても意味が無いのね」

「その通りです。すみません。フォーム様」

「謝らないで！リーノは悪くないわ!!それに、デデデが魔獣サービスを使わなくなる方法を、考えてくれたんでしよう?それだけでも、嬉しいわ」

お菓子の熱が引いたところで、フォーム様は用事を思い出し、厨房から出ていった。

私たちはお菓子をラッピングする。一番大きな包みはカワサキに、三つの小さい包みは戦士たちに贈る。

「今は仕事中的はず。城のどこかには、いるはずですよ」

「探すのに時間がかかりそうね」

「でしたら、夜に渡しませんか?夜なら、確実に会えますよね?」

「多分、会えると思います。メタナイト卿とよく会うのは、夜ですから」

「なら、夜にメタナイト卿の部屋にお邪魔しましょう」

「お菓子は厨房に隠しておきますか?メモを書いておけば大丈夫でしょうし」

ランタンがメモ用紙を一枚ちぎり、さらさらと書き込む。それを、三つの包み紙が入っているカゴの中に入れた。簡単に落ちてしまわないように、メモの位置を調整する。

「これでいいでしょ」

「あとはどこに隠すか、ですね」

「上の棚の奥にしませんか？取り出しにくいですけど、死角になって見つかりにくいと思うんです」

「アーニヤの言う通りですね。では、そこにしますか？」

「賛成」

無事にお菓子を隠したら、私たちはカワサキへのプレゼントを持って村へ行く。

村につくと、注目を集めた。

きつとアーニヤとランタンがメイド服を着ているから、珍しいんだわ。

ランタンがため息を吐きながら言う。

「メイド服、脱いできた方が良かったかしら」

「そうですね。今は仕事ではありませんし」

「メイド服を、脱ぐ？」

「リーノは慣れちゃっているから、その発想はなさそうね」

「みたいですね」

「……メイド服、いいですよ？丈夫で、汚れにくくて」

「まあね。はあ、村のみんなが慣れてくれたら、注目されなくなるわよね」

「人の噂も七十五日、飽きられるのを待つしかありませんね」

カワサキの店へ入る。

店主カワサキと、常連客のボルン署長と奥さんのサトさんがいた。ボルンさんとサトさんはテーブルに座っている。

「いらつしやい！今日はお客さんが多くていい日だよ」

「こんにちは。カワサキ。今日は客として来たんじゃないのよ」

「先日のレストランゴーンの件で謝罪に来たんです」

「なんだゝそんなことゝ。そんな昔のこと気にしなくていいからさ、食べていってよ。それか作って」

「ふふ、あなたの明るさには頭が上がりません。いいですよ、何か作ります。といつても用事がまだありますので、簡単な料理で一品だけにしてくださいね」

「んじや、カレーライス！大量に作ってくれよ！今日の晩飯にするからさ」

「ワシらにも貰えるか？」

「リーノのご飯はおいしいから、食べたいわ」

話を聞いていたらしい署長夫婦が、声をあげた。カワサキはにこつと笑う。
「いいよー！みんなで食べよう」

「カワサキがいいのでしたら、その分多めに作っておきますね」

三人分じゃなくて、おかわりも考慮して二倍の六人分作ればいいかしら。

「ごめんなさい。アーニヤ、ランタン。という訳だから、少し待ってくださいますか？」

「何言ってるのよ！手伝うに決まってるんじゃない！」

「先輩だけ働かせておくんなくてできません」

二人はすぐにキッチンへ入っていく。途中、署長夫婦に挨拶をして。私も二人の後に続き、署長夫婦に挨拶をした。

通り過ぎようとしたら、サトさんに腕を優しく掴まれた。

「あの、何か？」

「今度、ハナさんのお宅でお茶会をするの。メームさんも呼ぶから、話聞かせてね」

「それは、やっぱりメタナイト卿とのことですか？」

「もちろんよ。私、娘の恋バナを聞くのが夢だったの！」

サトさんの喜びようにも驚いたが、娘という言葉にも驚いた。すごく嬉しくて、顔がにっこにここと緩む。

「ぜひ、メタナイト卿も呼んできてね」

「すみません。あの人は忙しいので、参加は難しいと思います」

「なら、リーノ。アーニャとランタンも呼んでお茶会にしましょう！決まりね！都合がいい日に合わせるから、教えてね」

「はい。できるだけ早く、お知らせしますね」

そう言うのと、サトさんは手を離してくれた。私はお二人に一礼してから、キッチンに

入る。

カレーを三人で作れば、六人分でもあつという間にできあがる。煮込む時間はかかるけれど、その間にサラダを作った。

以前カワサキは、一人暮らしなので簡単な料理ばかり作ると、言っていた。今回はカレーライスにサラダがついてきて、健康にいいと、喜んでくれた。

署長夫婦は私たちの料理の腕を褒めて、おかわりをしてくれる。

おいしそうにカレーを食べてくれる姿を背に、私たちはヤブイ先生のいる医院に向かった。

ヤブイ先生の許可を得たので、あとは勉強会の日程を決めて、一週間前になったらチラシ配りだ。子供たちに手伝ってもらって、お礼にはお菓子を渡そう。そんな話をしながらお城へ帰る。

夕焼けこやけ。空はだんだんと赤く染まっかけていく。

お城の門で、佇むメタナイト卿を見つけた。近くまで歩くと、彼はこちらに気づいた。目が合うと、頬に熱が集まるようだ。

「メタナイト卿、ただいま戻りました」

「ああ、おかえり。今日は三人で出かけていたそうだな」

その言葉に、アーニヤとランタンが答える。

「カワサキにお詫びの品を渡してきました」

「ヤブイ先生の勉強会を開催する許可をもらってきたくところよ」

「そうか。また開催するのだな」

「はい。前回の復習と、今度は新しく止血の方法を教えてください」

「勉強熱心だな」

リーノはメタナイト卿と並んで歩き出す。ふらふらと、メタナイト卿について行くこととしていたので、慌てて親友二人が止めた。

「リーノ、お菓子を忘れてるわよ」

「はっ、そうでした。メタナイト卿、三人にお菓子を贈りたいので、一緒に来てもらえませんか？」

「わかった。行こう」

厨房に四人で向かった。

私たちの中で一番背が高いランタンに、隠したお菓子を取ってもらう。脚立にのぼり、上の棚を覗いた。

「えーと、あった。はい、アーニヤ」

「受け取りました。ありがとうございます」

「ありがとうございます。ランタン」

「どういたしまして」

ランタンはゆっくり降りてくる。

アーニヤは受け取ったお菓子のカゴからメモを取り、ポケットにしまう。カゴごとお菓子をメタナイト卿に渡した。

「ありがとう。いつもすまないな」

「いえ、お菓子が作れて私たちも楽しかったですから」

「そうですね。みなさんを想いながら作ることは、楽しかったです」

「感想、聞かせてよね」

「もちろんだ」

厨房でメタナイト卿と別れる。

私たちは残った。

「で、まだ厨房に用があつたかしら」

「あら、これから陛下と閣下のご飯作りですわ」

「わ、忘れてました」

二人は、がくりと肩を落とした。

デデベガス

陛下が叫ぶ。

「愛とボランテティア精神に目覚めたゾイ！」

「え？」

「は？」

昼間、玉座の間に呼び出されて聞かされた。

愛とボランテティア精神？ 本当に目覚めてくださったのなら嬉しいですけれど……。

エスカルゴン閣下にも、まだ知らされていない陛下のアイディアとは一体なんでしょうか。

「この城の一部を遊園地に改造して、人民どもを招待し、カービィを……」

「カービィを？」

「どうするのですか？」

「カービィも！ 招待してやるゾイ！」

エスカルゴン閣下は訳がわからない、という顔をする。私は陛下を怪しむが、それは心の底に隠しておく。ここで正直になっても、陛下に警戒心を抱かせるだけだ。なら

ば、情報を得るために相手の懐に入らなきゃ！

「それは、素晴らしいお考えですね。なにか、わたくしに手伝えることはございますか？」

「お前はいつも通り、村のヤツらを食事で歓迎するゾイ」

「かしこまりました。腕によりをかけてご馳走を作りますわ。では、すぐに行動いたします」

私は深く一礼して、玉座から出た。向かう先はメタナイト卿のお部屋だ。

メタナイト卿のお部屋に到着する。中にいらっしやったのは、メタナイト卿お一人だけだった。

部屋に入れてもらい、先程の陛下のご命令を伝える。メタナイト卿は私の話を聞いて、深く頷いた。

「紛れもなく、畏だろうな」

「やはり、そうですか。フォーム様に伝えた方がよろしいですか？カービイを一番近くで守れるのは、あの方だけです」

「今知らせるのはまずい。君という情報源に気づかれたら、次から警戒されるだろう。フォームには、陛下が村人たちに遊園地のことを発表した時に、忠告すればいいだろう」

「かしこまりました。では、そのようにいたします」

「ところで、リーノ。今度の休みは空いているか？」

「それが、次の休みはサトさんたちのお茶会に参加することになっておりまして……すみません」

「謝る必要はない。では、君を独り占めするのは、また今度にするか」

「そんな風に言われたら、照れちゃいますわ」

片手を、熱が上がった頬にそえる。そんな顔を見られたくなくて、彼に背を向けようとした。けれど、肩に手を置かれたので、体を背けることはできなかった。

「メタナイト卿？」

「少しだけ」

メタナイト卿は仮面をずらして、口元を顕にした。

私は、目を閉じて、少し屈んだ。

その数日後の火曜日。

早朝から陛下たちは出かけられた。といっても、村にとつては人々が動き出す時間である。多くの人が出歩く時間帯を狙って、陛下は村へ出かけたのだろう。

次の日の水曜日、午後。まだ太陽が真上にいる時間。

村の広場で開催するヤブイ先生の勉強会にて、陛下たちが何をしたのか理解した。陛下は村人たちに遊園地を宣伝したのだ。村中、遊園地の話題で持ち切りだ。

そのため、出会う人みんなに質問される。

「遊園地ってどんなものなの？」

「ご飯食べられるの？」

「楽しいものはあるのかい？」

どれも期待に満ちた眼差しだった。答えてあげたいけれど、私も詳細は教えていただけではない。ただ、食事があること、腕によりをかけて作るので楽しみに待つてほしいことを伝えた。みんな、一応は納得して、帰っていく。

そして私は勉強会に真剣に取り組んだ。いつか村が焼かれる、襲われる未来を知っている。なので、応急処置や止血の方法は覚えておくにかぎる。

ヤブイ先生から合格点をもらったので手分けしてまわった。今回はアーニャとラントンも、合格点をもらったので手分けしてまわった。

真剣に取り組む私たちを見て、参加者たちも意欲的になっていく。嬉しい変化だった。

そして日曜日がきた。

お城の門前にはたくさんの村人たちが橋がかかるのを待っている。それを、城の中でも上の階に位置するベランダ部分から見下ろす。

「ついに、この日が来ましたね」

アーニヤは、覚悟を決めたように言った。メイドになつてから、初めての大事なのだ。気合いが入っている。私は緊張をほぐすように言う。

「アーニヤ、心配しなくても大丈夫ですよ。練習もしましたし、みなさん喜んでくれますわ」

「そうそう。私たちの料理の腕前はサトさんに花丸をもらっているんだから、自信持ちましょう！」

「そうですね。このお仕事、成功させましょう」

私たちは声を揃えてアーニヤに同意した。

それから、厨房は大忙しだった。ほとんどの料理は完成している。大変なのは料理が冷めきる前に、絶妙な時間に立食会場まで運ぶことだ。

「(おそらく、今がいいかもしれません)」

自分の勘を頼りに料理を会場へ運び、並べていく。その途中でエスカルゴン閣下が様子を見に来た。閣下はジロリと会場の様子を確認する。

「準備はいいでゲスカ？」

「間もなく完了いたします」

「んじや、そろそろ人民どもを呼ぶでゲス」

「かしこまりました。急ぎます。みなさん、聞こえましたか！すぐにお客様がいらつしやいます！急いで！」

私も料理を配置するべく、急いだ。

その五分後、綺麗に並べられた料理を見て喜ぶ村人たちの姿があつた。彼らはすぐに食事を食べ始める。私はアーニヤ、ランタンを連れて、会場を歩いた。困っている村人がいたら助けるためだ。

クレインゲームの傍にフーム様とブン様、カービイと村の子供たちの姿が見えた。ご挨拶するために、そちらへ歩き出す。

「フーム様、ブン様、カービイ」

「リーノ、それにアーニヤとランタンも。あなたたちもデデデの策に参加しているのね」
拗ねたように言われてしまい、私は深くお辞儀した。

「すみません。陛下からのご命令には逆らえません」

「あなたが、謝る必要はないけど……ねえ、デデデから何か聞いていない？カービイを倒す作戦とか！」

アーニヤとランタン、それにフォーム様たちの視線が集まる。私は首を振った。

「いえ、何も聞いておりません」

「そう。いいわ、引き続き警戒する！ありがとうございます、リーノ」

「わたくしは何も……それでは失礼します。みな様」

フォーム様たちは手を振って、遊園地エリアの方へ走っていかれた。

しばらく時間が経って、エスカルゴン閣下が玉座の間にてカラオケ大会をすると仰られました。賞金は九百万デデンと、一年分のスイカ。間違いなく罠です。危ない、けれど九百万デデンに目が眩んだ村人たちの三分の一は、走って行きました。

「……私たちも参加できるのかしら？」

「ランタンったら、今は仕事中です」

「冗談よ。九百万デデンもあつたら、三人で山分けできるのについて思ったからさ」

ふざけて笑い合う二人の手を取って、私は真剣な声で止めた。

「行っちゃダメです……。なにか、凄く嫌な予感がしますので」

二人は目を丸くさせた。それから、手を握り返してくれる。

「行かないわよ。怪しいもの」

「ですねえ。いのちだいじに、です。怪しいものには近づきません」
「ありがとう、二人とも」

それから私たちは、立食会場で仕事をこなし続けた。料理がなくなれば運び出し、村人たちが居なくなれば、料理を片付ける。三時以降はお菓子を並べる予定なので、会場を綺麗に片付ける。テーブルクロスが汚れていたもので、こちらも取り替える。

お菓子の準備が整ったら、アーニヤとランタンを連れて遊園地エリアの方へ歩いていく。

そこで、カービィの歌声が聞こえてきた。

城が震える。

「?何かしら」

「歌声ですね、それに地震でしょうか?」

「じ、地震なら、みなさんを避難させた方がいいですよ!わたくしは厨房のワドルディたちを呼んで来ます!アーニヤとランタンは遊園地にいる村人たちを避難させてください」

急いで厨房へ向かい、ワドルディたちに声をかけた。城の外へ出る途中、まだ残っている村人たちに城の外へ出るよう促して、みんなで脱出する。

その間にも城は大きく揺れていた。

そして崩壊する。

城がレンガの山へと姿を変えた。

「陛下……閣下……メタナイト卿!!」

城の方へ走り出す。幸い、橋は無事だった。橋から中へ走り、レンガの山へと近づく。そしてできるだけ持ち、壁の方へ運んだ。それを繰り返す。

とんでもなく、時間がかかる作業だ。手間もかかるし、一人では無理だろう。助けたい人たちを助けられないかもしれない。ならばいつそ、出直して周りに助けを求めるべきだ。

それでも今、何かせずにはいられなかった。

そこにリーノ以外の物音が聞こえてきた。そちらの方へ目をやる。レンガの上を滑り、走る音は二人分。それはリーノから遠い場所で聞こえて、それから遠ざかった。微かに見えた赤いガウンと紫の体に大きな巻貝の背中。

陛下と閣下だ。

「ご無事だったのね、よかった……」

二人の無事を知って、不安が少しおさまった。あとは、他の人たちを探し出すだけ。大切な人たちの姿を見たことで、冷静になった頭で考える。

「二度でこのたくさんのレンガを動かす方法は……!?!」

「ぼよう」

「カービイ!!」

発見とひらめき。いつの間にか傍に来ていたカービイに、リーノはあの言葉を叫んだ。

「カービイ! レンガを吸い込んで!」

「ぼよ!」

カービイはレンガを吸い込む。強力な吸い込みは、瞬く間にレンガの山を消していった。

何回かに分けてレンガを吸い込んでもらうと、メタナイト卿、大臣一家、村人たち、城に残っていたワドルディたちの姿が見えた。彼らの上ののついていたレンガが無くなったことで、みんな助かったのだ。

リーノはすぐにメタナイト卿の傍へ駆け寄る。

「ご無事ですか? 痛いところはありますか?」

「無傷だ。問題ない」

「よかった……。では、他の方に会いに行ってきますわ」

「ああ、気をつけて」

次に、パーム大臣とメーム夫人、フォーム様とブン様の安否を確かめる。それから、カ

ラオケ大会に参加していた村人たち。全員軽傷だった。

「みなさん、本当に無事でよかったです！」

「無事だったけれど、えらい目にあつたわ」

サトさんが疲れた様子でため息をつく。

私は深々と謝った。

「陛下たちのせいですよ。本当に、なんと申して謝罪すればいいのか……」

悲痛な気持ちでいると、メーム様が私の肩を軽く優しく叩いた。

「いえ、城が崩壊したのはカービイの歌のせいなのよ」

「それは本当ですか？」

パーム様が身振り手振り加えて仰る。

「本当だよ。物凄い声量だった。聞こえただろうか？」

「はい、外にも聞こえていました。でしたら、どうかカービイを怒らないであげてください。彼がみなさんを助けてくれたんですよ」

私の言葉を聞いた村人たちが、複雑そうな顔をした。結局、誰もカービイを責めず、村人たちは帰って行つた。

城壁に置いてあつた備蓄食料、キャンプキットを運び出し、みんな夜を過ごす。

みんなというのは、城に住んでいるメンバーのことだ。さつきは見かけなかった、

ソードナイトとブレイドナイトも、アーニヤとランタンに合流している。

住む家が無くなつてしまった。それでも、あまり落ち込んでいない。なぜなら、ワドルデイたちに任せておけばあつという間に城を直してくれるからだ。

私もできる限り協力しよう。

虫歯

大変だったけれど、ワドルデイたちのおかげでお城が元通りになった。ちやつかり陛下たちも帰ってこられて、日常が戻ってきた頃。

閣下が頬に手を当てて、唸っていた。

「閣下、大丈夫ですか？」

「大丈夫じゃないでゲスよう」

朝食を配膳しているときだった。閣下の顔をよく見ると、手を当てている頬が腫れている気がする。

「あんまり痛いようでしたら、医院に行った方がよろしいかと」

「痛いのは嫌でゲス！」

「早く処置しませんと、もつと痛くなります。賢い閣下なら、おわかりいただけますよね？」

「ぐううう」

「なんの話ゾイ？」

配膳されてすぐに朝食を食べ始める陛下。すでに口周りが汚れている。

リーノはデデデ大王に向き直り、願いを口にする。

「陛下。今日は村に寄るとき、医院にも寄ってくださいませ」

「なぜゾイ？」

「閣下の調子が良くないからですわ」

「一人で行きたくない！リーノも一緒に来て欲しいでゲス……」

「わたくしもですか？いいですよ。丁度、歯の定期検診をお願いしようと思っていたところですよ」

「歯の定期検診？リーノはちゃんとしてるでゲスなあ」

「ただ虫歯になるのが怖いだけですわ」

アーニヤとランタンのことは、今日の掃除当番であるワドルディたちに任せた。

リーノは装甲車の、エスカルゴンとデデデ大王の真ん中に座る。

「狭いゾイ！」

「お許しください。陛下」

「ちよつとの我慢でゲス」

閣下は安全運転で、医院まで乗せてくださった。

医院に到着する。中は繁盛しており、待合室の席は埋まっていた。

「これは、しばらくかかりそうですね。閣下」

私がそういうと、順番を待っていた村人たちが我先にと立ち上がり、閣下に順番を譲る。みんな歯の治療が怖いからね。

「リーノも虫歯かな？」

「そうではありません。歯の検診に来ました」

「えらい！お先どうぞ！」

「あ、ありがとうございます」

譲る理由は何でも良いらしい。私と閣下と、なぜか一緒に入ってきた陛下と共にヤブイ先生がいる診察室に入った。

部屋の中では、ヤブイ先生が椅子に座り何かを書かっていた。それもすぐに終わり、立ち上がって私たち三人を見る。

「いらつしやい。今日は誰をみればええんかな？」

「わたくしと閣下です。わたくしには歯の検診を、閣下には歯の治療をお願いしますか」

「うん。任せなさい。まず、すぐに終わるリーノからにしようかの」

「なんですすぐ終わるってわかるでゲスか？」

「リーノはええ子だな。医者から言われたことはきちんと守るんじや。だから、歯の状態はいつも健康そのもの。今回も大丈夫じやろ」

「虫歯がないことを願うばかりですわ」

ヤブイ先生の合図で口を開けて、口内を診てもらおう。一分ほどで終わり、私は口を閉じた。

「うむ。よく歯を磨いておるな。これなら今日は簡単な汚れの除去だけで、ええじやろ。う。していくか？」

「はい。お願いします」

歯を綺麗に磨いて貰うだけでも、機械の高音が耳を刺激する。それでも我慢して耐えた。処置が済み、私は口をゆすいだ。今日の検診は終了だ。

「お疲れ様じやの。さて、次はエスカルゴン殿か」

「あひー!!!や、やっぱり歯はもう痛くな……」

「ドーンとやってくれゾイ!!」

「それじゃ、遠慮なく」

「あが!あが!」

陛下は閣下の口を大きくこじ開けた。閣下は抵抗するが、陛下の方が強く、口を閉じれない。そこにヤブイ先生が素早く処置を施していく。

処置は二十分ほどで終わった。すぐに済んでよかったと思う。閣下は疲れた顔で、しかも陛下を恨めしそうに睨んで装甲車に乗り込んだ。

「おやつを買いに行くゾー！」

「ハイハイ」

今日ぐらいいは、私が運転を代わってあげられたらいいのだけど、生憎この世では運転免許を持っていない。大人しく装甲車に揺られた。

村唯一のコンビニに到着する。店内は相変わらず綺麗に掃除されており、居心地がいい。

陛下はお店に入ると、すぐさまカゴいっぱいにお菓子を入れだした。

「そんなに買ったなら、虫歯になるでゲスよ！」

「ワシの歯は丈夫だから、心配ないゾー！」

「陛下。甘いものばかり食べると、栄養のバランスが……」

「お前がなんとかすればいいゾー」

「でしたら、食べ過ぎたおやつ分のデザートは出しません。いいですね」

「んぐー！」

言葉に詰まった陛下は、手に持ったお菓子と私を見比べた。そして、そつと手に持つ

た分のお菓子を棚に戻す。すでにカゴには山盛りのお菓子が積まれているけれど、それは見ないフリをする。

閣下は店主に歯ブラシのコーナーへ案内させた。そこで超音波電動歯ブラシに釘付けだ。それを陛下がからかう。

「陛下、閣下は真面目に選んでいらつしやるんです。そのように笑ってはなりません」
「うるさいゾイ。リーノもさっさと選ぶゾイ」

ぷいと、陛下は顔を背ける。そしてまた閣下の後ろについてまわる。その賑やかさのため息を吐きつつ、私は自分用に、普通の子供用歯ブラシを一本購入した。

「ん？リーノはそれでいいでゲスか？」

「はい。わたくしの様に奥歯もある人は、奥もよく磨けるように、小さくて薄い歯ブラシが良いそうなんです。なので、これでいいのです」

「ほほ〜」

「閣下は奥歯がありませんから、好きな歯ブラシを選べますね」

「あつ、なるほど」

閣下は、子供用の歯ブラシに伸ばしかけた手を引っ込めて、超音波電動歯ブラシをカゴに入れた。

昼頃には戻り、すぐに昼食を用意しようと厨房に走った。しかし、すでに厨房からいい香りが漂っていて……。扉を開けて香りの正体を追った。

「まあ、これは……!」

「おかえり、リーノ。ちょうどカツ丼定食ができたところよ」

「陛下の好物だと聞きましたので、作ってみました。味見していただけますか?」

アーニヤとランタンが先に昼食を作ってくれたらしい。しかも私たちの分まである。なんて有難いのだろうか。

「ありがとうございます。アーニヤ、ランタン。とつても助かりました。すぐに陛下にお出しできますわ」

「そろそろお城ぐらしにも慣れてきたし。この位はできるようにならないとつて思つてね」

「ですなあ。成長している姿をリーノに見せたくて頑張りました」

「本当に凄いです。二人とも花丸です」

味見させてもらった。カツ丼は、外はサクサクでふわとろ、中はジューシーでたいへんおいしい!

すでに食堂で席についていた陛下と閣下に、素早く配膳する。いつもより早く料理を出したため、二人は喜んで箸を持った。

夜は早めにあがって、メタナイト卿たちとの食事会を開く。

いつも通り、地下の厨房に六人が集まった。今日はワンプレートを作る。一つのお皿にサラダとお肉を盛り付けるのだ。

ワンプレートと、スープとパンに決まった。

サラダはポテトサラダに決めた。ポテトサラダは過程が多いので、みんなで作る。芋を潰す作業は、力に自信がある男性に任せて、私たちはポテトに入れる材料を切った。ついでにスープの材料も切る。

何度も作っていれば、戦士たちも作業に慣れてきて。包丁を持つ手も今は全然危なくない。

最後の盛り付けは、自分の手でおこなった。戦士たちの分は大盛りになっており、よっぽどお腹が減っていたんだな、と思った。

「アーニヤ、その量で足りるか？……いや、俺が取りすぎたのか？」

「私はこれで充分です。それよりも、残ってしまうのは悲しいので、良かったらたくさん食べてくださいね」

「そうか！わかった」

アーニヤとブレイドナイトさんの会話が聞こえた。二人の仲は良いみたい。

全員で「いただきます」と言って、食べ始める。

ソードナイトさんと、ブレイドナイトさんの食べっぷりはとてもよくて、人数の倍は用意したパンをペろりと食べた。余りが出なくて助かったので、私たちは喜んだ。

メタナイト卿は静かだった。嘔みしめるように、味わうように丁寧に食べてくださったようだ。最後に心を込めて「ご馳走様でした」と、手を合わせた。

今回も食事は上手くいった。

私たちのお腹と心はいっぱいになった。

地下の厨房の掃除を済ませて、さあ帰る時間。ソードナイトさんが私とアーニヤとラントンを部屋まで送ってくれることになった。

「悪いわね。ソード」

「いや。この位はなんてことないさ」

前をソードナイトさんとラントンが、後ろに私とアーニヤが並んで歩く。

アーニヤがこそりと囁いた。

「……良い雰囲気ですね」

「そうね。素敵だわ」

「そこ、なにコソコソ話しているの?」

「あら、えーと。食事が成功して良かったと話していました」

「そう、そうです」

「ふーん？」

怪しむランタン。後ろを向きながら歩くのは危ない。注意しようとした。その前にソードナイトさんがそつとランタンの背を支えて、顔を前に向かせた。

「ランタン。今日も美味かった。リーノ殿、アーニヤも、ありがとう」

「どういたしまして」

「お口に合ったのなら良かったです」

ほんの少し、されどその時間、ソードナイトさんはランタンの背中に触れていて。ゆっくり手を離れた。ランタンの横顔が、名残惜しそうに見えたのは勘違いだろうか。

部屋の位置的に、ソードナイトに最後に送ってもらうのはリーノだった。

リーノはここに来るまで精一杯考えた。もう少しだけ、ランタンとソードナイトが一緒にいられる時間は作れないか、と。

そして思い出した。ランタンが前に借りたと言った、刺繍の本の存在を。

帰り道へ一步踏み出す戦士の足を、言葉で止めて。急いで件の本を見つけ出し紙袋に入れて、戦士に持たせる。

「これ、良かったらランタンに渡していただけませんか？」

「はあ……？」

「でしゃばりかもしれませんが。でも、二人とももう少し話したいのではないかと、そう見え

たんです。ですから、これ、お話するきつかけに使ってください」

そういうと、ソードナイトさんの動きが止まった。

私はキリツと表情をつくつて言った。

「お話するだけですよ。それ以上は恋人同士になってからです」

翌日。朝一番、顔を合わせたランタンに抱きしめれた。

「ありがとう！私のキューピッドちゃん！」

私はたいへん驚いた。それから、私のお節介はうまくいったんだと理解して、喜びが体の底から湧き出た。

ランタンを抱き返す。

「うまくいったんですね！おめでとうございます！」

「そうよ！リーノのおかげ！ありがとう!!」

はしゃぐ私たちに混じりたそうなアーニヤも巻き込んで、三人で抱きしめあった。

厨房に行く道中で、アーニヤにランタンが説明する。

「私とソード、付き合うことになったの」

「まあ！おめでとうございます！まあ、まあ……こんな時、どんなお祝いをすればいいん

でしょうか。リーノの時も散々悩んで、何もできなくて……」

「祝つてくれるだけでいいわよ。ねえ、リーノ」

「です。アーニヤ、結婚が決まった時まで、その気持ちは大切に持つていてくれると嬉しいです」

「わかりました。その日が来たら、たくさんお祝いしますね」

「さあて、私とソードは落ち着いたし。あとはアーニヤとブレイドナイトね！」

「わ、私とあの人がですか？」

「あら、好きなんでしょ？バレバレよ」

アーニヤはもじもじと手をいじる。

「そうなんですけど……私、まだこの気持ちが恋なのか、ファンとしての好きなのかかわからなくて」

「そうなんですか？それは難しいですね」

言葉を弾ませて話すことは楽しかった。あつという間に厨房についてしまったので、アーニヤとブレイドナイトの話はまた今度。

「あつ、そういうえばサトさんからハナさん主催のお茶会に誘われているんです。一緒に行きませんか？」

二人とも快く了承してくれた。

陛下たちの朝食中。

突然、デデデ陛下が苦しみだした。悶える姿が痛々しくて、傍に駆け寄り背中をさすった。

閣下はニヤリと笑い、昨日歯を磨かず寝たせいだと仰る。

それは陛下の自業自得です……。

いざ、ヤブイ先生の所へ連れて行こうとすると、脱兎のごとく逃げられた。なぜあんなに俊敏になれるのか。

後を追うと、陛下の私室についた。布団に丸まっている。これではお連れできないので、ワドルドウ隊長を呼んだ。

陛下は装甲車に無理やり乗せられて、閣下が村まで運転された。

それが今朝の出来事。

その二時間後に陛下は、城に帰ってきた。

ちやうど洗濯物を干し終わった時だったので、私は一階にいた。つまり、帰ってきた陛下と顔を合わせたのだ。

「えっ?!お早いお帰りですね。歯はもうよろしいのですか?」

「治ったゾイ!デハハハハハ」

「それは良かったです。ところで、閣下はどちらに？なぜお一人なのですか？」
「え、エスカルゴンは急用ゾイ!!」

そう言つて陛下は素早く走つていきました。まるで逃げるように。これは、もしや……。

「あの様子じゃ、医院から逃げてきたようね……ですね」

陛下たちに対しては敬語を使おうと努力しているランタン。

私は振り向いて、困った顔をする。

「やっぱり。そのように見えますか？」

アーニヤが深く頷いた。

「間違いないと思いますよ」

三人はそれぞれため息を吐いた。

陛下は、それから何事もなく普通に過ごされた。

歯が痛いとも、しみるとも言わずに昼食を食べて、お菓子を食べる。

閣下を含めた私たち四人は、その姿をただ見守つた。

夜。夕食中。

デデデ陛下が苦しみだした。それは尋常ではなく、陸で魚が跳ねるように、体がばたばたと跳ねている。

閣下がなんて事ないように言った。

「そろそろ葉が切れる頃だと思っただでゲス」

「では、やはり陛下は治療を受けていないんですね」

「ああ、逃げ出したでゲス」

「まあ……陛下つたら」

「リーノ!!! なんとかするゾイ!!!」

「えーと、冷やせば少しは痛みが引くかと。今氷をお持ちします」

その後、氷でも痛みが引かなかった。なので閣下が頬を引っ張り、別の痛みで誤魔化そうとしたけれどダメだった。

「しょうがない! 奥の手でゲス!」

そう仰って、陛下のハンマーを振り上げたので、すかさず割って入る。

「お止めください! それはあんまりですわ」

「どくでゲス! 日頃の恨み、晴らすでゲスよ!!」

「それも治療じゃないゾイ!!!」

陛下は逃げ出した。なりふり構わず逃げた。

閣下はその後を追う。私も心配で、後を追った。

城の中庭まで陛下が逃げると、陛下が突然転倒した。誰かにぶつかったようだ。倒れた陛下に駆け寄る。

「陛下ご無事ですか？」

「痛くない……歯が痛くないゾイ!!!」

「本当だ！痛くない！」

声の先にはブン様と、その後ろにフォーム様とカービイがいた。

陛下とブン様は互いに手を取り合い、踊りだす。

よっぽど歯が痛かったんですね。

しかし、それも束の間。両者は再び苦しみ悶える。

「さつきより、痛い!!かくなる上は……!!」

「陛下、どちらに!？」

陛下は立ち上がり、どこかへと走り去ってしまわれた。

残ったのは、まだ苦しんでいるブン様、エスカルゴン閣下、フォーム様、カービイ、そして私でした。

「陛下下ったら、一体どちらに行かれたのでしょうか」

「さあ、知らなくてゲス。……そっちも、でゲスか？」

フォーム様に問いかけるエスカルゴン閣下。そちらも、ということとはフォーム様もブン様の痛みを紛らわそうと、何かなさっていたんだろう。

フォーム様は疲れたように頷く。

「そうよ。ブンが痛いつて言うから」

当の本人は、まだ地面にうずくまり「痛い、痛い」と呻いている。

私は、ブン様の背中をさすった。そしてできる限り、優しく言葉にする。

「明日、医院に行きましようね」

「……いや、だ」

「まあ」

「ブン、まだそんなこと言うの？」

「だって怖いんだもん」

「その痛みがなくなりますよ。我慢、できませんか？」

「うう」

痛みに悶える間、ブン様は悩ましそうにしていた。

その痛みが引いた頃。

「た、助けてくれゾーイ！」

「あの声は、陛下？」

陛下が再び、走ってきた。まるで誰かから逃げるように。

陛下が私たちの後ろに回ると、背後にいた誰かが見えた。

一つ目、機械的な体、肩辺りからドリルと歯を抜くためのペンチが生えた何か。

フォーム様が全員の問いを言葉にした。

「なに!?!」

「デントタル魔獣、ハーデーゾー!」

「デントタル魔獣!?!」

「チ、リヨー!」

「うわわ!!!」

「ブン様危ない!」

ブン様の前に回り込む。ハーデーから伸びた手は私を掴んだ。そしてハーデーの上

に寝かされる。

「チ、リヨー!」

「リーノ!」

「こいつ、離すでゲス!!」

私は怖くて身がすくんだ。耳鳴りがして、よく周りの声が聞こえない。

「ハ、ミセテ」

「は、はが……」

口を開ける。魔獣の一つ目が光を放つ。ドリルとペンチが口の中に入り、内側の頬肉に当たる。

冷たくて、怖かった。

体が震える。

ほんの五秒だったと思う。それらはなんの危害も加えずに、私の口内から出ていった。

「ムシバ、ナイ」

そう言って、私をゆっくり地面を下ろした。へたり、と座りこむ。

そこに閣下が来てくれた。

「大丈夫でゲスか？」

「はい。何も、されませんでした」

「うわあく!!」

「ブン！」

今度こそブン様が捕まった。けれど、さっきの恐怖はない。

ドリルの鋭い音が、鼓膜さえも削るようだ。それは十秒ほどで鳴り止んだ。

ブン様もゆっくりと地面に降ろされる。

「歯が、痛くない！ありがとう!!」

「チリヨー、ムリヨー」

魔獣は軽く手を振った。

……いい魔獣なのかしら??

「ツギ」

そして、魔獣は陛下を鋭い視線で射抜いた。

エスカルゴン閣下が先回りして、陛下の腕をとる。

「ささ、陛下も……」

「麻酔ナシは嫌ゾイ!!」

「あ、陛下!」

陛下はハーデーから逃げ回る。噴水を一周して、こちらに戻ってきた。そして、カー

ビイの後ろで唐突に止まる。

「カービイ、吸い込みよ!」

「ほよー」

そして私は察した。ハーデーが吹き飛ばす未来を。

次の日。

陛下は朝早くから、ワドルドゥ隊長に鎖でぐるぐる巻にされて、医院へ運び込まれることとなった。

治療は無事に済んだらしい。

不法投棄

深夜。

見張りの兵士が交代して、眠りにつく時間。

リーノは、部屋を出ていくメタナイト卿を見送ろうとしていた。いぎ、扉を開けようとする。

外で物音が聞こえてきた。

「今のは？」

「あちらだ」

メタナイト卿と共に廊下に出て、村がよく見えるバルコニーに出た。外を眺めると、村の上空に円盤型宇宙船が浮遊していた。船は数分上空で待機した後、空へ浮かび上がり彼方へと飛んで行った。

村に目を戻す。村の中心部、巨木がある場所に何か盛られている。

「……夜のせいかな、よく見えませんわ」

「おそろしくゴミだ」

「ゴミ？……もしかして、ゴミの不法投棄でしょうか？」

あそこは村のシンボリックな場所だ。

そんな所に、ゴミ捨ての許可が降りるとは思えない。ならば、誰かが無許可で捨てたのだろう。

「多分な。リーノ、よく知っていたな」

「昔、聞いたことがありますの」

転生前のことなので、詳しくは覚えていないけれど。

「そうか。ところで、私はあの宇宙船は誰の物で、どこから来たのか、調べるつもりだ」
「では、わたくしは村で情報集めてみます。ちようど明日は村長さん宅でお茶会です。噂が集まるでしょう」

「ああ、頼む」

別れは色気がない会話になってしまい、少し残念だった。

次の日、昼過ぎに村長さんの家にお邪魔する。

午前中は、広場に不法投棄されたゴミ問題で慌ただしかったようだが、今は片付いたようだ。

玄関の呼び鈴を鳴らすと、ハナさんが出迎えてくれた。持参したお菓子を渡すと、たいへん喜んでくれた。アーニヤとランタンを連れて、案内されたダイニングに入る。す

でにサトさんとメーム様が座っていて、お茶を飲んでいた。

「来たわ！」

「さあさあ、三人とも座って。座って」

興奮した調子で、席に座るよう促される。

「あ、リーノはこの席に座ってね」

「かしこまりました」

そこはいわゆるお誕生日席で。いつもは村長さんが座るだろう、主人の席だった。

普段なら絶対に座らない場所だ。席に着くと、お尻がムズムズして落ち着かない。

そうして気を取られていたら、メーム様とサトさんが三人分のお茶を用意してくれ

た。二人に頭を下げる。

「すみません。ありがとうございます」

「いいのよお、これぐらい」

「今日の主役はリーノなんだから、座っていいのよ！」

「はあ……」

「お待たせ。お茶菓子の用意ができました」

ハナさんは、お菓子を二つのお皿に綺麗に並べて持ってきた。用意されたお菓子は、

私たちが持参した物だった。

「今日はリーノたちが持ってきてくれた、クッキーです」

「あら、おいしそうね！」

「これはみんなの手作りかしら」

サトさんの疑問にアーニヤが答えた。

「はい。午前中に作ったドライフルーツ入りクッキーです」

それはおいしそうだと、メーム様、ハナさん、サトさんはクッキーに手を伸ばす。そして一口食べた。

「……おいしい。ドライフルーツがいいアクセントになっているわ」

「フルーツの味が、紅茶に合うわね」

「いくらでも食べられちゃうわ」

東の間、クッキーと紅茶を楽しんだ。一枚のクッキーを食べ終わり、みんなの体が私の方を向いた。

「さて、リーノ」

「メタナイト卿との馴れ初め、聞かせてくれる？」

「……お手柔らかにお願いします」

いつから付き合っているのか。昔から好きだったのか。告白はどちらからしたのか。キスはもうしたのか。

答えにくいところは、はつきりと「恥ずかしいので」と断る。だつて中々際どい質問もされるんですもの。照れちやいます。

この場にいるのは、昔からお世話になつていてる方だったり、親や姉代わりの人しかいない。だからこそ、できる会話だ。

親が生きていたら、こんな会話をしていただのさだろうか。前世では、どうだったか。もう思い出せないけれど、今のように笑いが絶えない日常があつたら嬉しい。

話題は私から、アーニヤ、ランタンへと移り変わる。

「二人は、良い人いないの？」

「まだ、ですねぇ」

「気長に探すわ」

どうやら、ランタンは恋人のことを秘密にするようだ。まだ付き合つてから時間が経つていないからだろう。落ち着いたら皆に話すと思う。

三人の奥様方は、アーニヤとランタンの答えに納得できないみたい。村でも人気の二人だもの。彼女たちの心を射止める存在は、とても気になるのだろう。

「……本当にいないの？」

メーム様に確認される。私は首を振つた。

「いないはずです」

「リーノが言うなら、間違いないでしょうね」

「ああ、早く二人の旦那さんに会いたいわ」

サトさんと、ハナさんの言葉にランタンが笑う。

「報告は結婚の時にいいんですか？」

「いいえ！もつと速く教えてちょうだい!!」

話題は移り変わり、村に不法投棄されたゴミの話になった。

紅茶を味わいつつ、情報を集める。

「どこから来たんでしようか？あのゴミは、村の物ではありませんよね？」

広場に家があるサトさんが、困ったように片手を顎に添えた。

「違うと思う。夫のボルンが調べただけけど、誰もが『自分のゴミじゃない』と言うの。みんな嘘をついている様子はなかったらしいわ」

「では、外部から持ち込まれたゴミ……という可能性が高いですね」

話を聞いていたハナさんが首を傾げる。

「外から広場までやって来て、あんな量を一晚で運び込むのは無理じゃないかしら？」

「人力では難しいかと。……たくさんの人がいれば、できるかもしれません。ですが、昨夜は誰もその姿を見ていません。犯行は素早く行われたものかと思われます」

「素早く……車を使ったのかしら？」

ハナさんの言葉にアーニヤとランタンがお互いを見る。

「車なら、人力より素早くゴミを捨てられます。でも、誰にも気づかれずできるものではないでしょうか？」

「音とかうるさいものね……宇宙船はどうかしら？空からぱつと現れて、ぱつと捨てて消えちゃうの。そうしたら、誰にも気づかれず捨てられるんじゃない？」

ランタンの言葉に、その場にいた全員が納得した。

「それなら犯行は可能ね！」

「でも、もしたら犯人は宇宙人ということ？怖いわ……」

「そうねえ。ゴミは持って帰って欲しいけれど、まず話せるのかどうか……」

リーノは紅茶に視線を落とす。

アニメではどうだったかだろうか。ゴミ問題はクリーンカービーによって片付いた回があったはずだ。でもそれは、今日だっただろうか。

もうずいぶんと、アニメカービーについて書いた日記を読み返していない。読み返せば何か、今回の出来事についてわかるだろうか？

リーノは目を閉じる。しばし記憶の海をさまよい、目を開けた。きつとわからない、それがリーノの出した答えだ。

日記にはたしかにアニメカービーの内容を書いてある。しかし、それは穴だらけの内

容だ。お話の順番が違うし、覚えていない話も多い。

とても役に立つとは思えなかった。

「(現状、できることを頑張る。やれることをやる。……ですわね)」

話したいことを話し終えても、おしゃべりは楽しく続いた。久しぶりにたくさん話したせいか、頬の筋肉が少々痛い。

夕方。城に帰ると、村のゴミが庭に山積みになっていた。警察署、村長さん宅、そしてここに流れ着いたらしい。

閣下、ワドルドウ隊長と相談する。ゴミをどうするか、どこに捨てるのか……いい案はでなかった。

そして、夜。夕食はアーニヤとランタンと一緒に食べた。夜の九時前には別れて、自室に入る。

さて、後はメタナイト卿に会うだけ。集めた情報をーといっても大きな成果はなかったけれどー報告しに行こう。

手土産は何がいいか？ 夜食か朝食用に、おにぎりを持っていこう。

しかし、時間がかかり過ぎるかしら。チャーハンならすぐに作れるけれど、朝から食べতেくださるかしら。

指先を唇に当てて、考える。その間にドアがノックされた。

「私だ」

「すぐに行きます」

訪ねて来たのは、メタナイト卿だった。

部屋の中に招いて、いつもの席に座っていただく。

「コーヒーでもいかががでしょうか？」

「いや、今日はあまり長く居られない」

私が用意するコーヒーは、時間と手間をかけています。忙しい日には向いていませ

ん。

「でしたら、お茶はいかががですか？すぐに用意できますよ」

「では、それを貰おう」

「かしこまりました。温めますか？」

「いや、常温でいい」

「わかりました」

やかんから、二つの湯のみにお茶を注ぐ。朝に作っておいたので、すっかり冷めてい

る。それをメタナイト卿に出して、席に座り、互いに情報を交換する。

「わたくしの方では、いい情報を得られませんでした。すみません」

「謝ることはない。……私の方は、どうも陛下たちが怪しいという情報を掴んだ」

「また、陛下たちが？」

「あのゴミについて、二人が何か知っていることは確実だろうな」

「もう……懲りない方たち」

一口お茶を飲む。呆れもため息も飲み込んで、陛下たちがあまり酷い目に合わなければいいと、そう思った。

今回はあまり時間がないということで、手土産はナシになった。

ちようど、湯のみ一杯分のお茶を飲んだところで、メタナイト卿は席を立つ。リーノはその後ろを追う。

城の廊下へ続くドアの前で、二人は歩みを止める。

メタナイト卿はリーノの方へ振り返った。

リーノは微笑む。

「また、おにぎりを作らせていただきますね」

「ああ、楽しみにしている。では、おやすみ」

「はい。おやすみなさい」

ドアが開いて夜の風が部屋に入り、愛しい人が廊下へと出て行って、バタリと閉めら

れた。

名残惜しい気持ちをぐつと引き締めて、リーノは眠る支度をする。

次の日。

ププランド中が、ゴミで埋まっていた。城はまだ無事だけれど、これでは村は生活ができないだろう。

「ああ、陛下。なんてことを……」

でも詰め寄ることはできない。証拠がないのだ。

それよりも、私は何か、できることがないのかと考える。

数日のうちに問題は解決するだろう。だからといって、行動しないわけにはいかない。

問題解決のために動くのなら、フォーム様と話す方がいいかもしれない。あの方はいつも物語の中心にいらっしやる方だ。私が今回の事件で知っていることを話そう。何か、力になれることを願って。

その日の夜。全ての仕事を終えて、夕食頃に大臣一家の家を訪ねた。

フォーム様が出迎えてくださる。

「まあ、リーノ。ちやうど夕食を食べるところよ。あなたもどう?」

「いえ、今日は遠慮しておきます。忙しい時間にすみません。フォーム様はどちらに?」

「どうしたの、リーノ」

フォーム様の隣からひよっこりと顔を出されるフォーム様。

「フォーム様、5分ほど話せませんか?」

「別にいいけど……?」

フォーム様は外に出て、フォーム様は家の中に戻られた。

フォーム様は首を傾げられる。

「それで、話って?」

「単刀直入に申し上げます。わたくし、ゴミを不法投棄した方を存じております」

「なんですって!?!」

「相手は空からやって来ました。宇宙船に乗っていたのです。昨日……いえ、すでに今日でした。深夜、それは村の上空に現れて、広場にゴミを捨てていったのです」

「なるほど。だからゴミを運ぶ姿を見た人がいないのね! ありがとう、リーノ。犯人の正体がわかっていれば、対処しやすいわ!」

「何かなさるのですか?」

「証拠写真を撮るの! 今日夜から始めるわ」

「わたくしもお供させてください。何か、村のためにしたいのです」

「いいわ。一緒に行きましょう！じゃあ、パパとママが寝た後に……」

「でしたら夜の十二時ちようどに、ここで、待ち合わせしましょう」

フォーム様とは、そこで一旦別れた。

部屋に帰る。夜食の準備をはじめ、風呂に入った後にメイクをやり直す。

ゴミ山を歩くので、数少ないズボンを履いた。鋭い物から肌を守るために、袖や裾が長いものを着る。

リュックに食料と飲み物を多めに入れて、レジャーシートや、ウエットティッシュなど、必要そうなものをギュツと詰め込んだ。

時間通り、待ち合わせした場所に到着する。

そこにはフォーム様だけじゃなくて、ブン様とカービイも一緒だった。

「こんばんは、フォーム様。それにブン様とカービイも」

「こんばんは、リーノ。準備はバッチリのようなね」

「おう、リーノ！それ似合ってるじゃん」

「ほよ、ほよ」

「ありがとうございます。普段の服よりも、動きやすさを重視しました。食事もご用意

させていただきましたので、夜食は任せてください」

「やった!」

「リーノのごはんは久しぶりね!楽しみだわ」

「ぼーよ!」

子供たちに喜ばれ、私は嬉しくて頬を緩ませた。

四人は城を出て、ゴミの山を進み、村に到着する手前で歩みを止める。

「あの、バスタブの中がいいわ」

私たちは白いバスタブの中に入る。四人だと少々狭い。しかし、肌寒い夜風の中で身を寄せ合うと、バスタブの大きさはちょうどよかった。

リーノはリュックから毛糸のカーディガンを二枚取り出す。

それは子供用の大ききで、それぞれフームとブンをイメージして作られたことが分かる。

「フーム様、ブン様、今夜は冷えます。どうぞこちらを」

「まあ!ありがとうございます。素敵だわ」

「やった!サンキュ!」

「リーノの手作りかしら?」

「はい。以前、ププブランドに冬が訪れたでしょう?その時、何か羽織る物が一枚でもあ

れば、良いと思ひまして。お二人のために編んだんです」

「ぼーよーぼーよー」

「ごめんなさい。カービイの分はありません。その代わり、夜食を多めに作りましたので、許してくださいね」

「ぼーよー」

本当はカービイの分も編もうか考えた。しかし、彼のサイズを知らなかったので、作れなかったのだ。

できるなら、青い彼の人のためにも編みたい。

二人はカーディガンをすぐに着てくれた。サイズはぴったりだ。

空からやって来る不届き者を見張り、三時間が過ぎた。

途中、夜食を食べたり、ここでもメタナイト卿との関係について質問された。

しばらくは興奮気味だったブン様とカービイは、見張りに進展がないとわかると、私に寄りかかって寝ている。やがてフーム様も、静かな寝息をたてていた。

私は夜空を眺める。

こんな風に、穏やかな夜は久しぶりだ。メタナイト卿との夜は、その、鼓動が賑やかになる。だから、穏やかとは、少しだけ違うと思う。

いつか、もしもいつか……彼と結婚して、子供を産んだら。こんな風に、夜を過ごす

のだろうか。

胸が熱くなる。

気が早い望みとはいえ、憧れだった家族を持つ夢がずっと近くある気がした。

——空からエンジン音がする。

車のエンジンではない、この音は……？

「皆、起きてください！宇宙船が！」

「はっ」

「なんだ!?!」

「ぼよ?!」

全員が、顔を勢いよくあげる。夜空を覆い隠すほど大きな円盤が、浮かんでいた。

中央の口が開き、数秒後、大量のゴミが吐き出される。新しいゴミは雪崩となり、古いゴミ山の上を滑る。そして、私たちが入ったバスタブを押し流した。

「きやああああ!!」

私か、フォーム様が悲鳴を上げる。ジェットコースターのように滑るバスタブは、あと少いで別のゴミ山に激突する、はずだった。

突然、バスタブが速度を落としたのだ。急ブレーキをかけたように動くバスタブの中で、私たちは必死に掴まり、投げ出されないように耐えた。

ゴミ山にぶつかる寸前で、バスタブは止まってくれた。中にいた私たちはよろけて、ひっくり返ってしまった。

「あいたたた……なんとか助かりました」

「でも、一体何が？」

「私だ」

その声は青い彼の人の声。

声ができる方を見上げると、メタナイト卿が立っていらした。

きつと助けてくださったのだろう。

「メタナイト卿、ありがとうございます。助けてくださったんですね」

「無事で何よりだ。見ろ」

空を見上げると、あの宇宙船はまだゴミを吐き出していた。

それは城にまで被害が及ぶ。

「ああ……城が……」

「……はっ、カメラ！」

フォーム様は慌てて、持参したりユツクからカメラを取り出し、シャッターをきる。

これで証拠は掴んだ。

次はどうなるのだろう。わからない。今日の証拠が役に立てばいいけれど。

宇宙船が空の彼方に消えてから、私たちは城に帰った。

城は異臭が凄まじく、みんなで鼻をつまんでそれぞれの部屋に帰宅する。

メタナイト卿は、私を部屋まで送ってくださいました。

自室の扉前で、別れの挨拶をする。

「今日は助けてくださってありがとうございます。それではまた明日……」

「リーノ」

「はい？」

「あまり、無茶をするな。心配で傍を離れられん」

「……ごめんなさい。無茶をしたくて、しているわけではないのです。ただ村のために

何かやりたかったんです」

「そなたの気持ちはわかるつもりだ。だが、行動した結果、今回のように危ない目にあっ

てしまうかもしれない」

「重々承知しております。でも、どうか故郷を守るために動くことをお許しください」

「私に許可を求める必要はない。……行動する前に、私に相談してくれるか？」

「出来る限り、必ず」

「絶対では、ないのだな」

「できない日が、あるかもしれませんが」

私たちは、お互いに一歩近づき、抱きしめ合った。

彼の体温が暖かくて、冷えた心身にしみ渡る。

彼に何と伝えようか迷い、整理できない感情をそのまま伝えることにした。

「……メタナイト卿。必ず、あなたの元に戻ります。五体満足で、無事に。だから、村を襲う異常に、立ち向かわせてください」

「……わかった。私は、私にできることをしよう」

「と、言いますと？」

「故郷を守る君を、守る」

「ありがとうございます」

十分に、互いの腕で温まった頃。私たちはゆっくりと離れ、それぞれの家に帰った。

翌日。

フォーム様と村に行こうと思ったけれど、陛下から「城内だけでも綺麗に掃除しろ」と命令されてしまった。命令は断れない。アーニャとランタンとワドルデイたちと共に、城内を綺麗に掃除していく。

内部から、ゴミ臭い外部へと掃除を行う。だんだんキツくなっていく匂いに、とうと

うアーニャはええずいた。マスクをしていても、苦しい。

「うう、早く解決すればいいのですが……」

「昨日、フーム様が犯人を突き止めてくださいました。きっと、進展するはずですよ」

「そうなの？ さすがフーム様ね！」

「ガウガウ!!」

「きゃああ?!」

「なんなの!!」

火の塊のような大きな獣が、目の前に現れた。それは大きくジャンプして、私たちに向かってきた。

私たちは一つに固まった。互いが互いを庇うように腕をまわす。

大きな獣は私たちを飛び越えたようだ。後ろの方でドスンと大きな音を立てて、遠ざかって行つた。

音が聞こえなくなった。私たちはようやく体から力を抜いて、その場に座り込んだ。

落ち着く間もなく、酷い臭いが辺りに充満する。目を開けて周りを見ると、ゴミが燃えていた。

「この臭い、臭ぎ続けてはいけません。城の内部へ避難しましょう」

三人は支え合って立ち上がり、震える足を動かして走った。角を曲がり直進した所で、ソードナイトとブレイドナイトに出会う。

「よかった、いた！」

「三人ともこちらに！」

「ええ！」

二人に誘導されて入った部屋は、メタナイト卿の部屋だった。

「騒ぎが落ち着くまで、ここにいてください」

「わかりました。お二人はどちらに？」

「あの魔獣を追います」

ランタンがソードナイトに駆け寄る。その表情は不安そうだ。

「無茶しないでよ」

「わかってる」

その時、ブレイドナイトはアーニャを見た。アーニャは体を震わせていた。けれど、相手の視線に気づいて、顔を上げて笑顔を見せた。

「行ってくる」

「はい！気をつけて」

戦士たちは力強く頷き合い、部屋を出ていった。

しばらくして、城が小さく揺れた。地震かと思ったけれど、それにしても揺れが不自然に感じた。壁に飾られた武器から離れて、部屋の中央で三人が集まった。

間もなくして揺れも収まり、それでも不安から私たちは手を繋いで彼らが帰ってくるのを待った。

それから、扉が開いて。

三人の戦士が顔を見せてくれた。

無事に帰ってきてくれたこと、会えたことに安堵して。私たちは床に再びへたりこんだ。

プププグランプリ

プププグランプリ。

ププブランド初めてのグランプリレースが始まる。

陛下の車が、装甲車から高級車に変わっていた。

ああ、もうすぐレースが開催されるわ。と、記憶の海から思い出が浮かび上がる。勝ったのは、たしか村長夫婦。レースにはカービィもフーム様とブン様も参加している、陛下の妨害行為によつて危険なレースになるはず。そして、あの人も参加する……。胸が痛む。

カービィのためとはいえ、幼子を追い込む彼を見たくなかった。かといって、私がカービィのために何かできるわけではない。

雑巾で拭いたピカピカの窓ガラスに、不安そうな自分の顔が反射している。自分でできることは何か、そう問いかけてくるようにも見えた。

自分にできること……うーん、カービィへの妨害行為を減らすために動くとか？ 諜報活動なんてやったことがない。うまく情報を得たとしても、それは誰に伝えるの？ メタナイト卿に言うの？ 彼の場合、陛下の案が生ぬるいと判断したら、さらに強化された妨

害案を提出しそうだ。これはなしかな。

手を出せば悪化してしまいそうで、恐ろしい。

やはり、いつものように陛下にやめてくださるようお願いするしかないのかな。

リーノはため息を吐く。

「レースの日は、質素なご飯で決まりですわね……」

カービィには特性のお弁当を差し入れしよう。

陛下に「たくさんホットケーキを作れ！」と命令された日から三日後、レース当日になった。ホットケーキを何に使ったのかは知らない。けれど、夕食のデザートにアイスが乗った小さめのホットケーキを出したら大層喜んでくれた。

「では、リーノ。アーニヤとランタンをつれてしっかり客を呼び込むゾイ」

レース前。陛下はそう仰った。

レース会場には、娯楽に飢えたほとんどの村人たちが押しかけている。これ以上の集客は見込めないだろう。ならば、他の方法でお金を稼ぐのみ。

「かしこまりました。しっかりと稼ぎます。なので、どうかお気をつけて。行つてらっしゃいませ」

深くお辞儀して申し上げますと、陛下はたいへん満足された様子で頷いた。

「閣下、どうか陛下をよろしくお願いいたしますわ」

「任せるでゲス。ほんじゃ陛下」

「行くゾイ」

お二人は新しい車に乗り込み、スタートラインに並ぶ。そこには他に車が並んでいない。

村長夫婦、フーム様とブン様、カービィとトッコリ、そして今メタナイト卿の車が位置につく。

これで合計五台の車が並んだ。

スタートは一斉に……とはならない。カービィが数分出遅れて走り出した。マシントラブルか？ そう思ったけれど、星型の車は順調に走り前方に追いつく。

同時に陛下の妨害行為も始まった。

主にカービィが狙われている。それは時々、他の参加者を巻き込みながら、レースを盛り上げた。

レースが二週目に入った頃、私たちメイドも動く。メタナイト卿への黄色い声援を、「私も応援したい」という気持ちを抑えて聞いた。

レース中、観客が飽きてしまわないように色々なアイディアが出た。クレーンゲー

ム、射的、その他屋台。そしてレースクイーンに扮したメイドたちとの交流会だ。

つまり、お祭りも一緒に開催したのである。

リーノたちはボディラインを強調するけれど、肌はあまり見せない。そんな服を着て、交流会場に現れる。近い、周りの村人たちの視線を釘付けにした。そのタイミングで実況中のロロロとラララが交流会の宣伝をする。

『ここでお知らせです。レース会場には様々な屋台が出店しており、大人から子供まで楽しめるわ!』

『特に!お城のメイドである、リーノ、ランタン、アーニヤたちと楽しく交流できるのは、モニターに映し出されている会場限定よ!』

『たくさんの人が来るところが予想されるから、行くなら早めにね。それじゃあ、レース実況に戻るよ!』

モニターが変わった直後、村人たちが交流会場に押し寄せる。九割男性、一割女性または子供だ。

ワドルディたちの力を借りて、列を整理し、並んだ村人たちに一枚のメニュー表を渡す。

このメニュー表は今日のために作られた特製のもので、表面にはワドルドウ隊長がデザインされたグランプリレースのシンボルワークがある。裏面にはメニューとその金

額が書かれていた。

村人の一人がメニューを読み上げる。

「なになに……指名料は千デデン、写真一枚は五百デデン、握手一回は二百デデン、笑顔一回目は無料？なんじゃこりゃ」

「エスカルゴン閣下がお決めになられたメニューです。巻では、こういうのが流行りだとか……」

そういうと列の三分の一がメニュー表を返して、去っていった。残った方たちは、隙間ができた列を詰めて財布を確認している。どうやら注文するようだ。

ヒソヒソとアーニャとランタンが顔を寄せる。

「本当にお金になるのね。こういうこと」

「驚きですね」

「二人とも今は仕事中です。私語は慎んでくださいね」

「はい」

「わかりました」

「では、準備はよろしいでしょうか？」

二人はにこっと笑ったので、一番目のお客さんに壇上に上がってもらう。

二十代後半と思われる男性だった。

「指名されますか？」

「いや、いいです。笑顔と写真を一枚お願いします」

「かしこまりました。ではこちらの椅子にお座りください」

男性は、バーに置いてありそうなオシャレな椅子に腰掛ける。

私たちは男性を中心にポーズをとった。そして笑顔を作る。

「カメラに向かって笑顔でお願いします。三、二……はい、チーズ！」

カシャリ。

「はい、お疲れ様でした。写真はあちらでお受け取りください」

壇上の下、一体のワドルデイが手を上げる。男性は案内されるままにそちらへ降りていった。

今回使われているカメラは、現代というチエキだ。すぐに現像されるので、こういう交流会に向いている。カメラは先日、新車と一緒に陛下が購入されたらしい。一通り使って遊んだ後、私の所に回ってきたのだ。陛下的には、気に入ったおもちゃを使わせてくれる感覚なのだろうと思う。

気軽に使う割には、カメラは高級だったのでお金を稼ぐことにした。

……最初の六枚はお試しで、自由に撮らせてもらったけどね。写真はそれぞれ私たち三人と、メタナイト卿たち三人が所持している。

カメラマンを担当するワドルデイから合図を受けたら、次のお客さんを壇上に上げる。

最終の周回目前まで、交流会は盛り上がった。

人がいなくなつたわけではない。村人によつては何度も足を運んでくれて、写真を撮つた。その中には私を指名して、ツーショット写真を求めてくる人もいた。もちろん、それがアーニヤやランタンの場合もある。

改めて、私たちは人気があるのだと驚いた。

急いで交流会場から控え室に戻る。そこに設置されたモニターで、カービィの快進撃を見た。周回遅れをどんどん縮めていく。

アーニヤとランタンが、カービィを応援した。私はそれを咎めたりしない。

陛下たちが応援されないのは、仕方ないことだもの。

じつとモニターを見つめる。

誰もメタナイト卿の話題を出していない。しかも、カービィがタイヤになつて走つていくという事は、メタナイト卿のレースカーは大破した後なのだろう。

カービィへの差し入れと、新しくメタナイト卿のお見舞いを心にメモした。

表彰式。

一位は村長夫婦。二位はカービィ。三位がフーム様とブン様。

それぞれに私と、アーニヤ、ランタンがトロファイを渡す。

「村長さん、ハナさん、おめでとうございます」

「ありがとうございます、リーノ、今日はまた一段と美しいな」

「素敵ね。いつも素敵だけど、村に来るときは、メイド服以外を着てみたらどうかしら？」

「ありがとうございます。考えておきます」

メイド服のバリエーションを増やしてみようかな？後で二人と相談しましょう。

誰が持ち出してきたのか、あちこちでシャンパンや子供用の炭酸ジュースが飲まれる。みんな楽しそうにグラスを開けていく。

これなら、みんな屋台に流れてご飯を食べそうね。全体的な売上も上がりそうだね。結果的には陛下にとって、このグランプリレースは良いものになった。

フーム様とブン様に冷やしたタオルを渡す。するとフーム様がグラスを差し出した。

「リーノも飲みましょう？」

「いえ、わたくしはまだ片付けが残っておりますので」

「子供用のジュースも飲めないの？」

「一応仕事ですから……そちらのグラスはカービィに差し上げててもよろしいですか？」

「ええ、いいわよ。私がついていこうかしら」

「わたくしがお持ちします。フォーム様はインタビューをお受けください」

「そう？ わかつたわ。じゃまたね、リーノ」

「それでは失礼いたします。フォーム様」

グラスを受け取り、カービィを探す。カービィは表彰台の近くで、メタナイト卿と何か話していた。

ゆつくり近寄り、メタナイト卿が無事である事を遠目で確認してから声をかけた。

「メタナイト卿、それにカービィ。お二人ともお疲れ様でした」

「リーノか。その衣装……よく似合っている」

「ありがとうございます。カービィ、これをどうぞ」

「ぼよぼよ！ んぐんぐ……」

カービィはグラスを受け取り、中の炭酸ジュースを飲み干す。

「フォーム様のところに行けば、もっと飲めますよ」

「じゅーす！ じゅーす！」

カービィはあつという間に走って行った。

たとえ宇宙船を操縦できるようになっても、彼が子供である事に変わりなくて。フーム様にジューズをねだっている姿は愛らしかった。

「カービイも、あなたも、ご無事でよかったです。あなたのマシンが大破したとき、とても心配しましたわ」

「すまなかつた。だが、アレもカービイの成長のためには必要だった」

「理解しているつもりです。……今日はお疲れでしょうから、ゆっくりお休みください」「ランタンたちと、ソードとブレイドを連れて帰るか?」

「わたくしたちは片付けがありますので、先に行ってください。後日改めて、お見舞いさせていただきますわ」

その夕食。

ボロボロになった陛下たちを先にお風呂に入れて、それから夕食だ。

出されたものを見て、陛下はたまげた。

「そうめんゾイ!?!?」

「嫌でゲス!今日は疲れたけれど腹減っているからガッツリ食べたいでゲスよう!!」

「あのような事をなさったのに、わたくしが怒らないと思つたのですか?今日はそうめんです。他に食べたければ、ご自身で料理なさってください」

「とほほ」

テーブルに突っ伏すお二人。

その様子を見て、私は明日は好物を作って差し上げようと、思うのだった。

ペンは剣よりも強し

今日、陛下と閣下は帰ってこないらしい。

つまりお泊まり。お二人がいないので、今日は八時間勤務したらすぐに帰宅した。

帰り道、城の廊下でアーニヤが弾んだ声をあげる。

「そうだ。今日は久しぶりに女子会しませんか？みんなと一緒にゆっくりしましょう」

仕事を終えたので、素の口調で話すリーノ。彼女の声も上ずっていて、楽しそうだ。

「それはいい考えだけど……ランタンはいいの？」

最近、恋人ができたばかりのランタン。夜は大体、お相手のソードナイトと過ごしている。だから今日も彼と過ごすのではないか。そう考えたのだ。

ランタンは頭を傾けた。

「どうかしら。相手次第ね」

「では、差し入れをするついでに、今日の予定を聞きに行きますか」

「アーニヤも行くでしょ？」

アーニヤは力を込めて言った。

「も、もちろんです……それで、何を差し入れますか？お菓子とか、でしょうか？」

「今回もおにぎりにしませんか？前に差し入れしたとき、喜ばれたんです」
「同じ物もいいけれど、変化をつけたいわね。うーん、お弁当はどうかしら？野菜も食べられるし、各自の好物を作って入れられる。それにポリユームも出せるわ」
私とアーニヤは目を輝かせた。

「いいアイデアです！ランタン！」

「さすがランタンですね！」

「よしてよ。照れちゃうわ」

ランタンの左にアーニヤが、右に私がくっついて廊下を歩く。

女性三人の楽しげな声が、廊下に響き渡った。

アーニヤは生姜焼き弁当、ランタンはハンバーグ弁当、リーノは唐揚げ弁当を作った。もちろん、野菜とかサラダもたっぷり入っている。

お弁当箱は、プラスチック製ではない。紙製の物を使い、食べ終わったら捨てられるようにしてある。

何度も食事を開催しているおかげで、三人の戦士たちの料理の腕前は上がっていた。洗い物だつてできる。けれど、忙しい彼らのために、その手間を省こうと話し合っただのだ。

それぞれの弁当を紙袋に入れる。

リーノはお気に入りのメモ帳とペンを取り出し、さらさらと言書いた。

「いつもお疲れ様です。無理なさらないでくださいね……と。アーニヤ、ランタンも何か書きませんか？」

「書きます。メモ帳とペン、使ってもいいですか？」

「どうぞ」

「ありがとうございます」

「ありがとう、リーノ」

アーニヤとランタンも、それぞれ何か書いて紙袋に入れた。

メタナイト卿の部屋に到着する。珍しく三人の戦士たちが揃ってテレビを見ていた。

リーノたちが来たことを知ると、全員で出迎えてくれる。メタナイト卿がリーノたちを見つめて言う。

「こうして集まるのは、食事会以来だな」

「そうですね。また近々開催しますので、楽しみにしてくださいね」

「わかった。楽しみにしている」

穏やかな声音に、リーノの頬が緩んだ。いい雰囲気になったところで、ランタンが部

屋を訪れた理由を話した。

「今日は、これを差し入れに来たのよ」

「お弁当です。夜食か、明日の朝食にどうぞ」

まずアーニヤがブレイドナイトに紙袋を手渡す。続いてリーノ、ランタンも相手に渡した。

中を覗こうとする手を止めてもらおう。

「できれば、食べる時まで中は見ないでください」

「その瞬間までお楽しみよ」

「……わかった。楽しみは取っておくでしょう。そなたたちはこれから、休むのか？」

「はい。それで、久しぶりに三人で女子会をします」

「これからリーノの部屋に帰って、編み物をするんですよ」

「それから眠くなるまでお喋りね」

「ランタン、楽しそうだな」

「そりゃあね。親友と遊べるもの」

今度はランタンとソードナイトがいい雰囲気になる。その時、テレビから夜のニュースが流れた。昼の再放送だ。普段なら気にしないけれど、今日は違う。

カービーがスイカ畑を荒らしてめちやくちやにしたこと、コンビニで盗み食いしたこ

と、カワサキのお店でタダ飯を食べたこと。

酷い内容だった。完全にカービィを貶めるためのニュースだ。

私は思わず口元を抑えた。

「ひどいわ。カービィは、あんな風に畑をめちゃくちゃにしないのに……」

「今のはフェイクニュースだと思うか？」

「はい。事実を編集して、印象操作をしていると思いました」

メタナイト卿と話していると、アーニヤが手を挙げた。

「カービィは悪いことはしていない……ということですか？でも前に、実家の傍のスイカ農家さんから、カービィがスイカを食べてしまつて困る……と、聞きましたが」

「カービィが、スイカを食べてしまうことは本当だと思います。私も前に聞いたことがあるから。でも、スイカ畑めちゃくちゃに荒らすことは、していないんじゃないかな？アーニヤ、ランタン、聞いたことはありませんか？」

二人はお互いの顔を見て、それから首を振った。

「それは……ないわね」

「ないですね……では、あのニュースを信じるのはやめた方がいいですね」

「少なくとも、すべてを信じることはやめた方がいいでしょうね」

「デデデ陛下下つたら、ろくなことしないんだから！」

ランタンはぷりぷりと怒りだし、アーニヤは困ったように眉を寄せる。

私は、納得していた。ここ二日ほど陛下と閣下を見かけなかったのは、こういうことか……と。

「明日は質素なご飯で決まりですわ……」

力なくそう言う。戦士たちは目配せをして、ソードナイトさんが奥へ向かった。そして柵からカゴを取り出し、ランタンのところへ戻ってくる。

「ランタン、リーノ、アーニヤ。いつも差し入れをありがとう。これは我らからの礼だ。受け取ってほしい」

ソードナイトからランタンへ。カゴが渡される。中には、色違いのハンドクリームが三つ入っていた。

私たち三人は、喜びが混じった驚きの声を上げる。

「嬉しい。使わせていただきますね」

「ちょうどハンドクリームが欲しかったんです。ありがとうございます」

「ありがとう。でも、なんか悪いわね。気を使わせちゃったかしら」

するとブレイドナイトさんが「感謝の気持ちだから」と、言ってくれた。

返礼を求めていたわけではないけれど。こうして感謝の気持ちを改めて伝えてもらえる、すごく嬉しかった。

次の日の陛下たちの朝食は、魚も肉もない野菜だけの食事を作った。野菜だけでも美味しく食べられるよう、工夫はしてある。それは、数種類のドレッシングを用意したりとか、大豆でお肉を模してみたりとか。

未来には大豆ミートと呼ばれる代替肉があった。この世界にも同じ商品を見つけて、取り寄せたのだ。ホーリーナイトメア社のダウンロードシステムは使っていない。コンビニで注文をして、取り寄せてもらったのだ。

野菜だけの食事に、陛下は気づかずいつもの調子で食べる。

「うまいでゲスなあー！」

「一仕事終えた後のご飯は格別ゾー！」

質素にしたつもりが、かなりの好評価を得てしまった。品目が多いせいだろうか……。

「今回のお食事では、反省していただけなかったようですね。次回からはおかゆや、素うどんに戻しますね」

「やめてほしいゾー！」

陛下は料理を守るように腕を広げて、首をイヤイヤと振った。

閣下も重たい空気を漂わせていた。けれど何かを思い出したかのように、リーノに声

をかける。

「リーノ、それからアーニヤにランタン。お昼に始まるテレビ番組までにクッキーをたくさん焼くでゲス」

驚いた。閣下が私だけではなく、アーニヤとランタンにも声をかけられたから。これって閣下が、アーニヤたちのことを認めてくださっているということかしら。

そんな気持ちは表情に出さないで、恭しく頭を下げた。

「たくさん、でございますか？目安となるものがあれば助かります」

「ワドルデイー！」

食堂の扉が開き、大型の木製リヤカーがワドルデイ数人に引かれて入ってきた。荷台部分は空っぽ。嫌な予感がした。

閣下の方を見る。彼は笑顔で命令した。

「それに山盛り、でゲス」

私は引きつる口角をきゅつと上げて、承諾した。

番組を生中継するスタジオ近くには、厨房がある。ちよつと離れているが、その上下の階にも簡易的な厨房があつた。

私とワドルドウ隊長は、早足で廊下を歩く。その後ろに、アーニヤとランタンと十人

ほどのワドルデイが続く。

「ワドルドウ隊長は他にもやることがありますよね？でしたら、クッキー作りはこちらに任せてください。できる限りのクッキーを作ります」

「うむ。何かあれば手伝おう。すぐに呼んでくれ」

「かしこまりました。それでは」

ワドルドウ隊長と別れて、スタジオから一番近い厨房へ入った。

「すでに他の厨房ではクッキー作りが始まっています。私たちも急ぎましょう!!」

「はい！」

「ええ！」

「わにゃー！」

それからは、目まぐるしく働いた。

メイド服の黒い部分や顔に、薄力粉がついてしまったり。何時間も甘い香りを嗅いでいたせいで、胸焼けしたり。慌てすぎたせいで、鉄板に触れてしまい軽い火傷を負ったり。

ノンストップで動き続けたおかげで、クッキー作りは成功した。あのリヤカーに、山盛り放り込めた。

遅れて参戦したため、私たちが作れたクッキーの量はそこそこだ。私たち以上にクッ

キーを作つて、ワドルデイのみんなは凄と思う。

運ばれていくリヤカーを見届けて、厨房の中に戻る。頬や手を白く汚したワドルデイたちがヘトヘトになつて、座り込んでいた。

そして部屋もお菓子作りの影響で少々汚れている。

「……十五分ほど休憩したら、掃除を始めましょうか」

「了解、ボス」

「かしこまりました……」

アーニヤとランタンは、互いに身を寄せあつてへなへなと床に座り込んだ。

陛下から、夕食作りまで休みをいただいた。

私たちはそれに喜び、お互いにハイタッチする。

三人は廊下をふらふらと歩いて、自室を目指した。

リーノは欠伸を噛み殺しながら、帰ったら横になろうと決心していた。夕飯まで少し寝れば、この疲れも取れるだろう。

廊下の角に近づいた所で、フォーム様とブン様とカービイの三人に出会った。

リーノは素早くお辞儀をする。

「こんにちは。フォーム様、ブン様、カービイ」

「こんにちは、リーノ。それにランタンとアーニヤも」

「ぼよう」

「こんにちは、皆様」

「こんにちは」

やや遅れてフォーム様も声を出す。

「……こんにちは」

普段の様子と違うフォーム様に疑問を抱き、彼女の顔を真っ直ぐ見てしまう。

フォーム様はそっぽを向きながら、唇をツンと尖らせていた。

「……なあに!?ジロジロ見ないで」

「す、すみません。いつものフォーム様と違うようでしたので、気になってしまって」

ブン様が頬をぼりぼりとかく。

「姉ちゃん、今は機嫌悪いんだ。さっきデデデにやられたから」

「陛下にやられた?」

「テレビでカービィを悪者にされたでしょう?だから、テレビでカービィの無実を証明しようと思ったの!でも、デデデとエスカルゴンに邪魔ばかりされちゃって……。結局上手いかなかったわ。カービィも悪いのよ!途中であんなにクツキーを食べちゃつて、もう!」

「クッキー……?」

私の背後でアーニヤとランタンが声を潜める。

「クッキーって……今朝、たくさん作ったわよね」

「ワドルデイたちと山盛り作りましたね」

「なんですって!!?」

フォーム様のお顔がリーノにずっと寄せられる。

「リーノ、本当?」

「はい、本当です。今朝から私たちは、陛下と閣下の命令でクッキーをたくさん作りました」

「それってどのくらい?」

「リヤカーに山盛りです」

正直にお話する。フォーム様は大きく目を見開いて、それから顔をぐしやりと歪ませた。

「……っ!」

そして突然、走り出された。

「フォーム様!?!」

「姉ちゃん!」

フーム様の足は速くて、あっという間に姿が見えなくなる。

後を追おうと足を踏み出すのが、体がよろけてしまう。幸い、腕をブン様が支えてくださって、転ばずに済んだ。

「ありがとうございます。ブン様、フーム様が……」

「話は俺が聞いておくからさ。リーノたちは休めよ。なんか、ヘロヘロじゃん？」

ブン様に言われた通り、今の私たちに元気はない。

素直に頷いて、フーム様のことはブン様に任せることにした。

走り出したブン様の背中を見送りつつ、リーノは言葉をこぼす。

「夜にでも、フーム様のお宅へ伺おうかしら……」

「時間を置くことも大切よ。今の私たち、疲れてヘトヘトなもの。普段は考えられるものも、今の状態だと難しいわ」

「となると、明日がいいかもしれません。お互いに落ち着いてから話し合いができるでしょうから」

二人の言葉に、リーノは同意する。

その日の夜。

仕事を全て片付けて、早く寝てしまおうとメイド服を脱ぎかけたとき。扉が優しく叩

かれた。

このノックの仕方はメタナイト卿だろう。

メイド服をもう一度着込んでから、扉を開ける。

「こんばんは、メタナイト卿」

「こんばんは。……疲れているな」

「今日は、朝からバタバタしてましたから」

「そうだったのか。……大した用事ではない。だから、また今度にするでしょう」

「残念です。あなた様とお茶がしたかったですわ」

ゆるりと、メタナイト卿の腕に手を添える。

彼は少し驚いたようだ。腕に触れる私の手と、私の顔を交互に見る。

不快に思わせてしまったかと、慌てて手を引っこめる。

「すみません。勝手に触ってしまって」

「いや、別にかまわない。その、積極的に驚いた」

「あなた様にお会いして、嬉しくて、もっと傍にいたくなつたからですわ」

「そうか」

短い返事。そして同じ気持ちだと伝えるように、彼の手が私の手を握る。

メタナイト卿に、部屋の中に入っていただく。そしてコーヒを入れて差し上げた。話題は、お昼に放送した討論番組「朝まで語ろう」だ。そこで起きたことを詳細に聞かせてもらった。

酷い話だった。

「フーム様、味方がいない中で頑張つて戦つたんですね。そして、上手くいかなつた……。怒つて、悲しんで、落ち込まれても仕方ありません」

「カービイが食べた、あの山盛りのクッキーはそなたたちが？」

「はい。大半はワドルデイたちが作りました。わたくし、アーニヤ、ランタンも一緒に作りました。命令されたときは何に使うのかと思いましたが、カービイに食べてもらう為だったんですね」

「フーム様、シヨックだっただろうな。クッキーの使い道を知らなかったとはいえ、私まで陛下がなさることに加担してしまったのだから。」

「どうすればよかつたのでしょうか？ 私は、命令ならば従います。番組が始まる前にフーム様に伝えていれば、何か変わっていたのでしょうか？」

「……難しいだろうな。陛下は村人たちの不満を利用した。それにテレビは陛下のものです。相手の有利な場で戦つて、勝つのは容易くない」

「ですよね……」

「ところで、リーノ。フォームは今何をしているか知っているか？」

「え？いえ、知りません」

「私も知らない」

がくりと、肩の力が抜ける。

メタナイト卿は気にせず、コーヒーを一口飲む。そして揺らめくコーヒーを見つめた。

「だが、動いている」

そして私を真っ直ぐ見つめた。

「そなたはどうする？」

「わたくしは……」

そんなの、決まっています。

「正しいことをしますわ」

次の日の早朝。村に手作りの新聞「プププタイムズ」が配られた。

それは村人たちの好評を得られた。簡潔にまとめられており、わかりやすい文章が読みやすく、大人にも子供にも好まれた。

それを作ったのは、フーム、ブン、リーノ、アーニヤ、ランタンだった。

村に配ったのは、フーム、ブン、カービイ、ホツヘ、イロー、ハニーの子供たちだ。

リーノはメタナイト卿が帰った後、アーニヤ、ランタンを誘って大臣家へ向かった。

フームに頭を下げて、何かやるなら手伝わせて欲しいと、頼み込んだ。フームは、昼間の自分の行動を謝罪し、笑顔でリーノたちを迎えてくれた。

フームたちの頑張りのおかげで、カービイの疑いは晴れた。

そしてプププタイムズに対抗して、デデデ大王は「デデデミラー」という新聞を配った。それも朝、昼、夕方に配ったのだ。

デデデミラーは分厚かった。しかし、その中身はほとんどが広告で、読んだ人たちをうんざりさせた。

そして事件は起きる。

早朝、陛下の部屋に村人たちが押しかけた。

デデデミラーを返す、と。

そして、カービイが村中に配られたデデデミラーを吐き出した。

吐き出した新聞は城を埋め尽くす。

陛下は困ったので、デリバリーシステムを使いホーリーナイトメア社に新聞を捨て……いいえ、送った。

リーノは、アーニャとランタン、村人たちと共に外にいた。新聞で埋まった城を眺める。

今日はもう城で仕事ができないだろう。ならば、村で一日アルバイトでもしようか。

アーニャとランタンは有給を取らせて、実家の方で休んでもらう。

久しぶりの実家に、二人は嬉しそうだった。

「カワサキ。よろしければ、今日一日だけ私をアルバイトとして雇っていただけませんか?」

「いいよ。リーノが居てくれたら料理は任せちゃおうかな」

「いいのですか?」

「うん。その方が儲かりそうだしね」

それを聞いたブン様が大声を上げた。

「えー!?リーノ、今日はカワサキの店で働くの??絶対行く!」

「ありがとうございます。腕によりをかけますわ」

ブン様の声をきっかけに、村人たちに一日アルバイトの件が伝わった。

その日のカワサキの店は、過去最高の売上を出したらしい。

魔法のミリオンセラ—

朝、陛下たちの朝食作りが終わってから村へ行く。

日用品を少し購入した帰り道、そろそろ新しい本が欲しかったことを思い出した。ふらりと本屋へ寄る。中に入ると、店主であるアーニャのおじいさんが微笑んで迎えてくれた。

「やあ、リーノちゃん。こんにちは。今日は買い物かい？」

「こんにちは。そうです。新しい本が欲しくて来ました。何か、おすすめの物はありますか？」

「あるよ。巷で大流行している本が。……本当は明日から発売するつもりだったけど、リーノちゃんには特別ね」

「よろしいのでしょうか？」

「いいのいいの。でも、特別に販売したことを内緒にしてくれると助かるよ」

「誰にも言わないでいることは難しいですわ……。あの、もしよろしければ、本の感想を書いてポップを作ります。そうすれば、一日早くその本を読んでも、誰も怒らないでしょう？」

「そりやあいい考えだ。じゃあ、頼むよ。本は奥で読むといい」

「ありがとうございます。では、十ページほど読ませていただきますね」

リーノは代金を払い、本を受け取った。そして店の奥の部屋へ入り、子供のころアニーとランタンと一緒に座ったソファへと座る。

本の題名は、パピーポッターと愚者の石。

「……ハリポタ？」

とつても懐かしい響きに、前世の記憶が蘇る。といつても、大流行した魔法世界の話ということと、略称しか思い出せないが。

リーノは頭を降って、改めて本に向き直る。表紙にはピンクの一頭身が描かれていた。カービィに似ていると思った。

読み出した本はたいへん面白かった。ページは大幅に過ぎてしまい、慌ててお店に飾る文章を考える。

……いい案が浮かばない。なので、本の冒頭を紙に書いた。本の主人公パピーに魔法学校から手紙が送られてくる場面まで書けた。

これ、案外いいんじゃないかしら？ここまでの文章を読むと続きを知りたくなるし、私が考える感想よりとっても面白いもの。

というわけで、アーニヤのおじいさんに紙を渡す。

「おお、できたかい。ありがとう、リーノちゃん。これは……本の冒頭部分かな？」

「素人が考えた感想よりも、こちらの方がいいと思えました。いけませんでしたか？」

「そんなことはないよ。物は試しだ。飾ってみよう」

「よろしくお願いします。では、さようなら」

「さようなら。アーニヤによろしくな」

「はい。伝えておきますわ」

リーノは店を出て、城へと帰る。

それから夜と早朝には、パピーポツティーを読む時間ができた。

ようやくその本を読み終えた六日後、村にブームがおこった。誰も彼もがパピーポツティーを読んでいる。

ということを、フーム様から聞いた。

「私もね、リーノが書いたポツプを読んだの。それで続きが知りたくて本を買ったのよ。他の人だつてそう」

「そうなんです。あのポツプが役に立って嬉しいですよ」

とても誇らしい気持ちになり、体が少しだけ熱くなる。そこに吹いた優しい風が気持ちよかった。

「ねえ、今から子供たちに本の読み聞かせをするの。リーノも一緒に来ない？」

「午後三時までなら空いております。なので、ぜひお邪魔させてください」

「全然邪魔なんかじゃないわ！来てくれて嬉しい！」

そしてリーノは、フームと共に村へ行く。

リーノは懐かしかった。昔、こうしてフームと並んで村へ遊びに行ったから。幼子の手を掴み、仲良く歩いた。もう手を繋がなくてもいい。それがちよつとだけ寂しかった。

村に到着して、子供たちと合流する。

ブン様、カービィ、ハニー、イロー、ホツヘだ。私はフーム様を含めた六名に、アイスを買ってあげた。お給料が入ったので、今回は特別なのだ。

アイスを食べ終えて、ゴミをきちんと片付ける。

本が読みやすそうな場所を探して、ベンチがある場所を見つけた。周りに誰もいない。朗読会をするにはうってつけだろう。

まずベンチの中央にリーノが座った。続いて男の子たちが我先にとリーノの隣に座る。左にブンが、右手側にホツヘが座った。他の子供たちは草が生い茂る地面に腰を下ろす。

そしてようやく、本を開いた。

読む役は私だ。フォーム様には皆と同じく聞いてもらった。

子供たちは、一文進む度に次の展開を予想した。それはおかしくて、賑やかで、楽しい時間だった。

一時間ほど過ぎたあたりで、喉が限界を迎えた。

リーノは本に葉を挟んで、息をつく。

「たくさん読みましたね。今日はこのへんで終わりに……」

「えー！読んでよ！」

「お話の続きが知りたいわ」

「お願い、読んで！」

ホツへ、ハニー、イローから続きをせがまれる。願いを聞いてあげたいが、喉が限界であることを伝える。

「すみません。わたくしは喉が痛くなったので、これ以上は朗読できません。代わりに、フォーム様にお願いできませんか？」

「ええ、いいわよ」

フォーム様に本を渡し、席を交代した。

立ち上がったときに、遠くにスイカを運ぶ農家さんの姿が見えた。

思い出した。

たしか、昨日の夕食に陛下が「もっとフルーツが食べたい」と仰っていたのだ。時計を確認する。今から果物を購入して城に帰れば、夕食にフルーツパフェが出せる。

リーノはそうしようと思った。

「あの、買い物をする用事を思い出したので、わたくし帰りますわ」

「えー!? 帰っちゃおうの?」

子供たちの中でも、私を特に慕ってくれているハニーは残念そうだ。私はハニーに視線を合わせて話した。

「時間が合えば、また一緒に遊びましょうね」

「……うん。約束よ?」

「はい。約束です」

小指同士を絡ませて、約束する。

私と子供たちは手を振って、その日は別れた。

買った果物たちを厨房に持っていく。大きな冷蔵庫にスイカ丸ごと、メロン丸ごと、他の果物丸ごと入れていく。扉を閉めて、冷蔵庫のわかりやすい場所にメモを貼った。

「中の果物は、陛下のデザートです。今日使います。リーノ……つと」
これでいいだろう。

気づけば午後二時を回っていた。自室に戻って汗を拭い、メイクを直そうか。

城でワドルディたちと仕事を行っていたアーニヤとランタンに合流して、夕食を作る。

今日の陛下たちの夕食はハンバーグ定食だ。デザートにはフルーツ盛り合わせのパフェを出した。

食堂、カチャカチャとパフェの容器とスプーンが当たる音がする。

「んぐ……、うまいゾイ！明日もこれを食べる。用意せい！」

「そのことですが、陛下。まったく同じものではお楽しみいただけませんので、プリン・ア・ラ・モードにははいけませんか？」

「プリンだと！許すゾイ！！デハハハハ！」

「ありがとうございます」

会話を聞いていた閣下が、羨ましそうに声を上げる。

「リーノ、私にもプリンを出すでゲスよ！」

「かしこまりました。陛下と同じものをお出しします」

今晚も、和やかに時間が過ぎると思っていた。けれど、陛下が仰天するニュースを

言った。

「今日は有害図書を燃やせまし、こんなうまいパフェを食われて、いい日だゾイ！」

「燃やした？……村人たちから本を取り上げて燃やしたのですか？」

「そうゾイ！」

「あの、陛下……」

エスカルゴン閣下が声をかけるが、もう遅い。

わたくしは感情を押し殺して、陛下に伝える。

「明日の夕飯は素うどんです。プリン・ア・ラ・モードはまた今度出しますね」

翌日。

陛下は何を考えられたのか、パピーポッティーの原作者であるローリンさんを招いた。一体どうやってお知り合いになったのでしょうか？

しかも、お城を魔法学校にするらしい。でしたら、村人たちがお城に来ますよね。昼食の準備は任せてください。

玉座の間でローリンさんを紹介されたとき、とても驚きました。

「リーノ、こちらのローリン先生を持って成すゾイ。ワドルドウ隊長は一階の大食堂を改

装し魔法学校を作るゾイ！」

「直ちに取り掛かるでゲス！」

「御意」

「御意」

玉座の間にて、正式な命令がくだされるのは久しぶりだ。

ワドルドウ隊長は陛下に一礼した後、走って出ていった。

私も、陛下に一礼してから動きだす。

「ローリン様、ですね。メイド長のリーノです。さっそく、おもてなしさせていただきます」

「あらそう？よろしく、リーノさん」

「こちらへどうぞ」

まず、ローリン様を陛下たちが使う食堂に案内する。そこで紅茶とお茶菓子を出した。用意してくれたのは、アーニヤとランタンだ。

紅茶は、ランタンが淹れてくれた。お菓子はアーニヤの手作りだ。

小さくて薄い楕円形のクッキーを花びらに見立てた、チューリップのお菓子。

特別なゲストのために考案したものである。

ローリン様はお菓子を見て笑った。

「チューリップのお菓子？素敵！」

「ありがとうございます。どうぞ、フォークとスプーンです。こちらをお使いください」
「どうも」

よし、彼女が寛いでいる間にお部屋を準備しよう。

食堂から近く外の景色がよく見える部屋を選ぶ。私、ランタン、数人のワドルデイがその部屋を掃除する。ローリン様の傍には、本をよく読むアーニヤに頼んだ。本を書く人、読む人ならば話を持つと思ったのだ。

十分ほど掃除を進めっていると、アーニヤが部屋に顔を出した。

「リーノ……じゃなかった、メイド長。今よろしいでしょうか？」

「なんででしょうか。アーニヤ」

掃除の手を止めて、アーニヤの方を振り返る。

「ローリン様が、どうしても自分の手で魔法学校の内装を完成させたいと、仰っています……」

「わかりました。では、一階の大食堂にいるワドルドゥ隊長のところへ連れて行ってさしあげてください。一階の厨房で落ち合いましょう」

「かしこまりました」

部屋の掃除を手早く終わらせて、厨房に向かう。

厨房では、割烹着と三角巾を身につけ、よく手を洗ってから料理を作り始めた。

一階の厨房は大きい。大勢いるワドルディたちのご飯を一度に作らなければならぬから。

料理担当のワドルディたちも合流してくれて、やって来るだろう村人たちの昼食を作り出す。

始めてから三十分ほどたった頃、アーニヤが厨房にやって来た。

「魔法学校の準備が終わりました。まもなく村の方々が入城されます」

「了解しました。アーニヤも参加してください。お昼前には作りあげちゃいますよ！」

「はい！」

お昼ご飯は、各自で量を決めやすい料理にした。

カレーライスだ。子供たちも大人も食べやすい甘めの味にして、野菜もお肉も一口サイズでたっぷり入っている。

隠し味はすりおろしたリンゴだ。これで味を甘めになっている。でもそのリンゴが足りなくなってしまう。あと二、三個あれば充分なのだれど……。

「ねえ、メイド長。昨日陛下のために買った、余りの果物を使えばいいんじゃないかしら？」

「その通りです！ランタン、すぐに持ってきていただけますか？」
「了解！」

ランタンは一階の厨房を出て……ソードナイトに出会った。ドキドキして顔に熱が集まる。それを紛らわすため、ランタンはちよつとふざけて声をかけた。

「はあい。ここで会えるなんて嬉しいわ」

「ああ、俺もだよ」

「なんか、浮かないわね。どうかしたの？」

「大丈夫だ。それよりも、どこかへ行くのか？」

「上の階の厨房に用があるの。果物を取りに行くのよ」

「そうか。なら、中庭の方は通らないようにな」

「どうして？」

「今、村人たちが集まっている。そちらへ行ったらバレるぞ。いい香りがするからさ。今日の昼食がカレーライスであることは内緒なんだろ？」

「なるほどね。じゃあ、あっちの方は通らないわ。教えてくれてありがとう。私のナイ卜様。なんちゃって」

「……ああ、俺は君だけの戦士だよ」

まっすぐに見つめられて、ランタンは顔から湯気が出るほど真っ赤になった。

ソードナイトから逃げるように、別の階層の厨房を目指す。

午前十一時。ようやくカレーライス百二十人前ができあがった。

大食堂に座れる人数が八十人だから、それより四十人分多く作ったのだ。これだけあれば、足りると思う……足りてほしい。

大食堂に移動しようと、厨房を出るとソードナイトとブレイドナイトに出会った。挨拶してから通り過ぎようとしたら、呼び止められた。

「ちよつと待ってくれ」

「ですが、早く行かないと料理が冷めちゃいますわ」

「すぐに来るはずだ」

「どなたが？」と尋ねる前に、その人は現れる。

先に気づいたのは私だった。

「メタナイト卿」

「ソード、ブレイド、リーノ。もうよいぞ」

「はっ」

「被害はこちらまで及びませんでしたね」

「カービーがすぐに魔獣を倒したからな」

どうやら魔獣が出たらしい。でも、カービーが倒してくれた。

体が一瞬だけ力み、すぐに弛緩される。息を吐いて、冷静になった。

「あの村人たちは無事ですか？」

「みな無事だ。魔獣に襲われたものの、全員怪我をしなかった」

「怪我がなくてよかったです。でも……さぞ、怖い思いをされたでしょう。このカレーライスを食べてくれたら、少しはその恐怖も和らぐでしょうか」

「最後は全員笑っていた。案外、元気に食べてくれるかもしれん」

「ふふ、そうだと嬉しいですね。メタナイト卿たちも一緒にいかがですか？」

彼は首を振った。

「せっかくだが、やらねばならぬことがある。……次の食事会では、カレーライスにしないか？」

「かしこまりました。アーニヤとランタンにも伝えておきます」

「うむ。ではな」

三人の戦士たちは去っていった。

私は、アーニヤとランタンに先程の件を話す前に、カレーライスを大食堂に運んでもらった。

一人、中庭に行く。そして、盛り上がりつつある村人たちに大声を上げる。

「みな様、たいへんお待ちいたしました。昼食ができましたので、どうぞ大食堂へ」
するとホツヘが叫んだ。

「リーノのご飯だ！」

「おお、リーノの」

「今日は災難じゃったが、これでとんとんじゃな」

「走らずゆっくり進んでください。昼食は無くなりませんから」

村人たちが歩きだした。私も大食堂へと行き、みんなの手伝いをしようと考えたところ、呼び止められた。

「リーノ！」

「フォーム様、それにローリン様」

「あら、私あなたに会ったことあったかしら？」

「え？」

今日、玉座の間で顔を合わせているし、少しだけおもてなしもさせていただきましたけど……？でも、お声が違うような……？

首を傾げていると、フォーム様が教えてくださった。

「デデデがよんだのは、魔獣でニセモノだったの！こつちが本物のローリン先生！」

「まあ！そうだったんですか。はじめまして、ローリン様。メイド長のリーノです」
「はじめまして、リーノさん。ローリンです」

自分が魔獣をもてなしていたことは、恐ろしいので一旦頭の隅において、ローリン様とフォーム様と一緒に大食堂の方へ向かった。

忘却と魔獣ハンター

「じゃあ、行ってくるわね」

「メイド長……じゃなかった。リーノ、夕方には戻りますね」

「はい、行つてらっしゃい」

朝、村のお店がすべて開く頃。

アーニヤとランタンは村へ出かけた。私はお城に残つて仕事だ。

前世で好きだった、うろ覚えの曲を口ずさんでメイドの仕事をごなす。

アーニヤとランタンがいらないメイドの仕事は久しぶりな気がする。言葉も心も通じている親友たちは、仕事に慣れると素早かった。大概の仕事はそつなくこなし、日を重ねることに頼もしくなっていく。

「今日の夜にでも、二人の気持ちを確かめよう」

村に帰るか、城で働き続けるか……。

ふと、考える。

私はどちらなのか。

アーニヤとランタンを見送ったとき。

草原の向こう、今日は村がよく見えた。この時間も賑わっているだろうか。城を見上げる。いつも忙しい日々。大好きな人たちがいる私の家。

ここか、あの人が。

メタナイト卿。はじめての愛する人。いつか、もしかしたら、どこか遠くへ行つてしまいかもしれない人。

今の私なら、故郷と愛のどちらを選ぶのだろうか。

リーノは晴天を見上げた。

あの青空なら、この悩みを吸い上げてくれる……そんな妄想をした。

一階の洗濯場で、シーツやカバー、服などをたっぷり干していく。

体の大きな陛下のためのシーツは、特に大きい。両手いっぱい抱えて、引きずらないように運ぶのだ。ワドルデイたちに手伝ってもらい、物干し竿に広げる。

ゆつくりしている時間はない。これが終われば次がある。今日も忙しかった。

そこに人影が現れる。

視界の端に現れたそれを確かめる。ランタンだった。

リーノは動きを止めて、普段通り背筋を伸ばした。

「おかえりなさい。もう村の方はいいんですか？」

「用事ならこの前終わらせたし、今日は顔見せだけよ。アーニヤは、おじいさんのお店手伝つてから城に帰るらしいわ。ところで、村に変なおじいさんが来てただけど、知ってる？」

困ったような調子になるランタンに、リーノは彼女を気づかう。

「いえ、知りません。何か、困ったことが起きたのですか？」

「困ったつていうか、そうかも。……なんか、前からの知り合いみたいな感じで話しかけられてさ。私は記憶にないから困つてね。おじいさん誰？つて聞いたら、泣き出しちゃつたのよ」

「あら、まあ」

「それで優しく声をかけたら、さすがリーノの友達だ。優しいつて褒められた」

「わたくしのことを知っていますのですか？」

「そうみたいよ。さつきフォーム様が、そのおじいさんを城に呼ぶとか言っていたから、会えるかもね」

「……会つてみたいですわ」

洗濯物が終わつたら、すぐに大臣家に向かおう。

何も持たず訪問することは気が引けたので、昨日作っておいたパウンドケーキを包んだ。

大臣家に到着する。扉の向こうから話し声が聞こえた。

扉をノックする。五秒ほどでフォーム様が開けてくださった。

「あら、リーノ。こんにちは」

「こんにちは、フォーム様。あの、わたくしのことを知っているのというおじいさんに会いに来たんです」

フォーム様はちよつとびっくりされて、それから扉を大きく開けた。

大臣家の中に入るとリビングルームが迎えてくれる。食卓を囲むテーブルには、ブン様、カービィ、メタナイト卿、そして……。

「……しらない」

カタツムリの体に髭を生やしたおじいさん。

——えすかるごんじやん。

わたしの声が、違う、誰かが言った。

「(知ってる? でも、わからない。知らないことはこの城にいて不自然なことなのに……)」

——不自然とは?

視界がぐにやりと曲がる。

リーノは床にへたりと力なく座り込んだ。両手で目をおおい、何も見ないようにする。

「——リーノ」

愛する人の声が、傍で聞こえた。近くに来てくれたのだ。ああ、それだけで元気が戻ってくる。

「……大丈夫です。強い目眩がおきて、立てなくなっただけです」

「心配だ。フォーム、ソファを借りるぞ」

「ええ……」

「さあ、リーノ立てるか？」

「悪いですわ……」

「今は甘えてちょうだい」

右をメタナイト卿、左をフォーム様に支えられてソファに横になった。

誰かの声がする。

「リーノ……どうしたでゲスか？ 一体何が？」

「わかりません。とにかく、調子が悪いようなので寝かせておきましょう」

大丈夫ですよ。

そう言いたいのに、酷い目眩がのせいで何も言えない。私はそのままソファを借りて、横になり続けた。

起きたら夕方だった。

そんな経験を、今している。

ソファから起き上がると、するりとタオルケットが床に落ちた。それに手を伸ばして、綺麗に畳む。

「あら、リーノ。起きたのね」

「メーム様……わたくし、寝てしまっていたんですね」

メームがキツチンの方から姿を現した。

そしてリーノの隣に座る。

「ええそうよ。フォームから話は聞いたわ。倒れたんですつてね。あんまり働きすぎちゃダメよ?」

「ええと、はい。気をつけます」

働きすぎが原因ではないはずだが、と思う。かといって、なんと説明すればいいのかわからない。

「……まだ力がなさそうに見えるわ。今日は夕飯を食べていきなさいな」

「えっ、そんな、悪いですわ」

「何言っているの。あなたが小さい頃はいつも一緒に食べていたじゃない。懐かしいわ。……こういうときぐらい、頼ってちょうだい」

メーム様の手が、リーノの手に重ねられる。優しい熱が伝わってきた。

リーノは、何度もこの手に助けられた日々を思い出した。

「では、料理を作るのを手伝わせてください。今はぼんやりしていますが、すぐに覚めると思いますので」

「休んでてもいいのよ?」

「久しぶりに、メーム様と料理が作りたいです」

「それなら、お願いちゃおうかしら」

年の離れた姉妹のように、二人は笑い合う。

陛下たちの夕食の前には帰ろうと思ったが、その前にフーム様たちが帰ってきた。

そして私への伝言を届けてくれたのだ。

「リーノ、エスカルゴンからよ。今日はもう休んでいいって。……寝てなくていいの?」

「もうすっかり元気になりましたわ。皆様には心配をおかけしました。明日にでも、閣下とメタナイト卿に元気になった姿を見せに行きますわ」

普段はしない、にかりと歯を見せて笑う。

フォーム様やブン様は目を丸くして、それから笑ってくれた。カービイはいつも笑っている。

「そんなあなたも素敵よ！」

今日の陛下は、朝が早かった。

朝食を作りに行く途中、閣下呼び止められた。

なんでも、今日の陛下は朝風呂に入る。だから朝食は遅くていい、とのことだ。

「でしたら、今日はランチにしましょうか」

「ランチでゲスか？」

「朝昼兼用のご飯のことです。朝食には遅くて、昼食には早すぎるんですよ」

「ほほー、そういうのがあるでゲスか！」

「と言つても、何も食べないでいるとお腹が空いちやうので、合間の時間にスムージーをお出しますね。閣下も飲まれますか？」

「飲みたいでゲス！」

「では決まりですね。アーニヤと、ランタンはスムージー作りを。私は陛下のお手伝いをしてきます」

「かしこまりました」

「かしこまりました」

「決まりですね。では、わたくしは閣下と陛下のお部屋に行つてきます。行きましよう、閣下」

「ランタン、アーニヤ、おいしいスムージーを作つてくれでゲス」

「腕によりをかけますわ」

「楽しみにしていてくださいね」

アーニヤたちと別れて、陛下のお部屋に行く。

部屋に入ると、陛下は既に起きていた。ベッドの上で、ホーリーナイトメア社のカタログを眺めている。

「陛下、おはようございます」

恭しく一礼する。すると、陛下はその大きな目をギョロリとこちらに向けた。

「リーノも来たのか。さっさと用意を始めるゾイ」

「はい。直ちに」

リーノは風呂場に行った。毎日掃除しているだけあって、汚れがない。

浴槽が綺麗なことを確認してからお湯をためる。陛下の大好きな泡風呂の素を選び、投入した。

次は脱衣所の棚からアロマキャンドルを出す。いつでも使えるように、この場所に置いてあるのだ。今日はラベンダーの香りにしよう。

陛下はお風呂に入ると、泡で遊ぶ。それが大体二十分ほどかかるので、スムージーを用意する時間は充分あった。

お風呂から上がった陛下の体を、拭く手伝いをするのは、閣下やワドルデイたちの仕事だ。私たちメイドは外で待機。呼ばれたらやつと脱衣所の中に入れる。

脱衣所の中では、閣下が大きな団扇で、陛下に風を送っていた。

ゆったりと壁に寄りかかっている陛下に、スムージーを渡す。

「陛下、こちらブランチ前のスムージーです」

「うむ。ごくごく……うまい！これはアーニヤとランタンが作ったのか？」

「はい。左様でございます」

「デハハハハ！ようやくた！褒めてつかわすゾイ！」

「ありがとうございます。陛下」

「ありがとうございます」

かさかさ。

びくり！

嫌な音がした。

まるで夏場に出てくるアレのようだ。

「ん？なんゾイ？」

陛下の右側、私たちから見れば左側にソレは現れた。

「マジュー！」

「きゃあああ!!」

「一体なんゾイ?!」

カービィサイズの魔獣だ！

脱衣所のあちこちにいる。陛下は慌てて服を着て、私たちは慌てて目を塞いで、ドタバタと脱衣所を出た。陛下の部屋の中にも、外の廊下にも小さな魔獣がいる！

「ぐぬぬ、カスタマーサービスのヤツめ一体何をしておる！行くぞ！」

「は、はいでガス！お前たちもついてくるでガスよ」

「はい！アーニヤ、ランタン、離れないでくださいね」

「ついていきます！」

「了解！」

私たち五人は走った。

廊下中小さな魔獣だらけで、恐ろしい。急いで玉座の間に入る。

「な、なんじゃこりゃ〜?!」

陛下の愛用のダウンロードシステムから、休みなく魔獣が送られてくる。

素早く、陛下は玉座のスイッチを押すが、どれも反応がない。

そのとき、天井近い壁が開いて、モニターが出てきた。画面に映し出されたのはカス

タマーサービスだ。

陛下とカスタマーサービスが言い合う内に、アーニヤとランタンの声少し後ろに下げた。

親友たちを少しでも、カスタマーサービスの目から遠ざけるためだ。

「ご紹介します。新入社員の……」

「ナツクルジョーだ。よろしく頼むぜ。おっさん」

陛下たちは口をあぐりと開ける。私は目を大きく開いて、口に手を当てる。

「ナツクルジョー、なぜあなたがホーリーナイトメア社に……?!」

いや、私は理由を知っている。最強魔獣を倒すためだ。でも、なんで……わたくしは知らなかったのだろうか。

また視界が歪む。

酷い目眩がして、床に座り込んだ。アーニヤとランタンの声が聞こえた。

それから先の出来事はぼんやりとしか記憶にない。

ナツクルジョーがこの城へやって来たこと。

メタナイト卿たちもやって来て、ナツクルジョーの狙い通り、カービイたちとは敵対できたこと。

村が襲われたこと。

最強魔獣がダウンロードされてしまったこと。

陛下たちも、最強魔獣とカービイが戦うところを見に行かれた。

その頃には、私は回復していた。

立ち上がり、頭を振る。

うん、問題ない。

後ろを振り返ってアーニヤとランタンに告げる。

「わたくし、行きます。二人はどうしますか？」

ランタンが怒ったように声を荒らげた。

「バカ言わないで！ さっきまで元気がなかったクセに、戦場に行くなんて言わないで!!」

私は頭を降った。

「もう大丈夫です。ランタン、ここでじっとしていられますか？ メタナイト卿が、ソードナイトがああ最強魔獣と戦うかもしれないですよ」

「わかってる!!! 私だって怖い! でも……だからって私たちが戦場に行ったら、あの人の足の足でまといじゃない!」

「戦場に、行く必要はありません」

「アーニャ?」

「私たちは、後方支援として、戦いが終わった後に救援に行けばいいんです。そうですよね? リーノ」

「うん。そう言いたかったの。ランタン、行ける所まで行こう? 救急箱を持って。それで、カービイたちが魔獣を倒したら、みんなを助けに行きましょう」

ランタンは、少し考えて「戦士たちの邪魔にならないなら、行く」と行った。

『ほほ! 皆さま頑張ってくださいませ』

カスターマーサービスが言った。

アーニャとランタンが睨む傍で。

私は美しくお辞儀をした。

戦いの余波はかなり遠くまで及んでいる。

城から離れているにも関わらず、大きな音がここまで聞こえてくる。

あの場所に、台風の目にいるメタナイト卿たちは何を見ているんだろう。どんなに恐

ろしい目にあっているんだろう。

ワドルドゥ隊長が眉をひそめた。

「ここまでだ。みな、あの岩の後ろに隠れるぞ！」

隊長の命令に従い、私たちとワドルディたちは大きな岩の影に隠れた。

全員が隠れたことを確認してから、隊長も身を隠す。

音はしばらく続いて、一際大きな爆発音がした。

そして、ものすごい突風が吹いた。

私たちは身をすくませて、嵐が一秒でも早く過ぎ去ってくれることを祈る。

突風はすぐに止んだ。

まずワドルドゥ隊長が岩陰から身を乗り出して様子を窺い、安全を確かめてからみんなで戦場に向かった。

しばらく進むと、崖の上と下に道が別れる。隊長は目を凝らして、それぞれの道の先を見る。

「！陛下ー！」

ワドルドゥ隊長が陛下たちを見つけた。

私には、陛下がよく乗ってらっしゃる高級車の影しか見えない。そちらにも行きかけた。陛下と閣下の無事を、この目で見たかった。

「だけど、私までそちらに行ってしまったら、誰があの人のお所へ行くんだらう。誰が傍に居てくれるの？」

「すべてを抱え込んで戦うあの人の力に、なりたい。」

「メタナイト卿……！」

戦場の中心地に近づくとつれて、辺りは激しさを増していく。

地面はめくれ上がって土が見えている。崖も所々崩れていて危ない。見たことがない大小の岩があちこちに現れている。木々は根元から折られて、重なり倒れていた。

比較的安全そうな崖の下に、みんながいた。

「メタナイト卿！ ソードナイトさん、ブレイドナイトさん、フォーム様、ブン様、カービィ！」

「ソードナイト！」

「ブレイドナイトさん！」

「が、そこに思わぬ人物がいた。」

「ナツクルジョーだ。」

「私たちは走る足を止めて、彼を凝視し睨んだ。」

「ナツクルジョーは困ったように眉を下げた。」

「——大丈夫よ。」

もう一人の私が言うが、そうは思えない。また目眩が起きる。今度は軽かったので、踏んばった。

そこにフォーム様が割って入った。

「待って違うの！ ナツクルジョーは味方だったの！」

「どういふこと？」

ランタンが疑問の声をあげる。

フォーム様は落ちついて聞いてほしいと、言わんばかりに話し始めた。

「ナツクルジョーは最強魔獣を倒すために、わざとホーリーナイトメア社に潜入したの。最強魔獣は彼とカービィの二人で倒したわ！」

それで、なんだと言うのだろう。

リーノはキツクナツクルジョーを見た。

「彼は村を襲撃しましたわ……」

「それだって、デデデが……」

ナツクルジョーがフォーム様の肩を掴んだ。

「フォーム。……すまねえ。でも、あそこで手を抜くことはできなかった。許してくれとは、言わない。だが、わかってほしい」

「リーノ。村人に軽傷者はでたけれど、死者は出ていないわ。彼は死者を出す気なんて、

これっぽっちもなかったのよ」

「……村の、復興を手伝うなら許しますわ」

それが譲歩する条件だ。

だけどナツクルジョーは首を振る。

「悪いが、その時間はない。俺はナイトメアに目をつけられたハズだ。長居すれば、アン

タらに迷惑がかかる」

「では、知りません！」

私は彼の横を通り過ぎて、メタナイト卿の傍に寄った。

メタナイト卿は、体がボロボロだが見た感じ大きな傷はない。

心からほつとして、視界が滲んだ。

「メタナイト卿……お怪我は？」

「打ち身が少しだけだ。後は問題ない」

「よかった。本当に、よくぞご無事で。救急箱を持ってきたんですが、あまり必要なさそ

うでよかったです」

「うむ。心配をかけたな」

私たちは互いに笑いあった。

怪我の治療のため、みんなで城に移動する。

緩やかな丘を歩いていく。

ソードナイトとブレイドナイトは無傷だったようで、メタナイト卿に肩を貸していた。

村の方角から黒い煙が上がっている。後ろ髪を引かれる思いだが、今は彼の治療に専念したかった。

「リーノ、村には後で行きましょう。お城の被害状況も確認しないとイケませんし」

「そうね……」

アーニヤに背を押されて、私は城に向かう。

アーニヤとランタンだって、村に行きたいだろう。ならば……。

私は前を歩くメタナイト卿に、後ろから声をかけた。

「メタナイト卿、少しいいですか？」

「なんだ、リーノ」

「あとで、ソードナイトさんとブレイドナイトさんの力を貸してほしいんです。お願いできませんか？」

それを隣で聞いていた二人の戦士が疑問を口にする。

「我々の力を？」

「一体なぜ？」

「アーニヤとランタンの護衛をお願いしたいんです。二人を村に送りたいので」

「察するに、村の被害状況の確認。そして、場合によっては城を村人たちに開放するためか」

「そうです。メタナイト卿の治療はわたくしにらせてください」

ソードナイトさんが首を振る。

「だが、まだ城内に魔獣がいるかもしれない」

「それは、ナツクルジョー様に任せてよろしいかと」

ジョーは聞いていたのだろう。ニヤリと笑った。

「ああ、任せてくれ。それで少しでも償いになるってんなら安いもんだ」

「だ、そうですわ。いかがでしょうか？」

ソードナイトとブレイドナイトは互に見合わせて、頷いた。そして、ブレイドナイトがメタナイト卿に声をかける。

「メタナイト卿」

「村に向かった魔獣の、残党を確認する必要もある。二人とも頼んだぞ」

「かしこまりました」

「御意」

リーノは振り返ってアーニヤたちを見る。

「話は聞いていましたね。村を助けるためには、現状を把握する必要があります。そのため、二人には村に行つていただきませう。少々危ないですが、よろしいですか？」

「心強い戦士が二人もいてくれるんだもの。怖くなんかないわ」

「です。むしろ安心して村の様子を見に行けますわ」

アーニヤが左手を、ランタンが右手をリーノの手に重ねる。

「ありがとう、リーノ。家族の顔を見に行けるわ」

「ありがとうございます。おじいちゃんたちのこと、心配だったんです」

「いいんです。落ちついたら、ちゃんと休みをもうけますので」

ひとまず、治療が終わった腹ごしらえをしよう。

生きているからお腹が減るのだと思うと、笑顔になれた。

リーノがいない日常

「リーノ、手紙じゃよ」

「ありがとうございます。珍しいですね」

郵便局長モソさんから受け取ったのは、品のいい上質な紙で作られた手紙だった。

親戚のいない私に手紙を送ってくれる人はいない。昔、幼いフーム様との遊びで手紙のやり取りをした以来だろう。

モソさんに頭を下げて、城へ帰宅する。

今日は、アーニヤとランタンと三人でもぎ取った有給を使っている。

丸一日休みだ。なので、朝に子供たちと遊び、買い物をして、最後に城に届ける郵便物を貰いに行つたのだ。

忙しいけれど、充実した一日だった。今日もぐっすり眠れるだろう。

城の自室に戻って、買った物をしまつていく。最後にお茶を用意して、椅子に座った。

目の前のテーブルに置いたカバンを引き寄せる。中から取り出したのは、モソさんから貰つた手紙である。

差出人は、書いていない。ただ、手紙の表には私の名前と住所だけがあつた。綺麗な

字だ。

携帯している小型のナイフで封を切り、中の紙を取り出す。中も綺麗な字で、非常に読みやすい文章だ。

「えーと、リーノちゃんへ。お父様とお母様の遺品が見つかりました。できれば、取りに来てください……。まだ形見があつたのね」

両親との思い出は、この部屋の片隅に大切に保管されている。大きな箱に入るだけの量で、見る度に少なく感じていた。

できるなら受け取りたい。

手紙を最後まで読み進めて、両親の故郷からの手紙だと判明する。

形見を入れた箱から手紙の束を取り出して、それらを確かめた。

……うん。間違いなく、今日貰ってきた手紙は本物だ。両親の故郷から送られてきたんだ。それならば、受け取りに行ってもいいだろう。

「そういえば、私が生まれた場所なのよね。楽しみだわ」

一人旅か、旅行は初めてだ。

旅行を決めて、必要な物を揃えていく。

他の町からプブレッジに引っ越してきた、パーム様にメーム様、星を転々としたメ

タナイト卿たちにアドバイスしてもらおう。

故郷はここから近い町だ。いざとなったら、そこで購入すればいいと思い、お金だけは気持ち多めに持つていくことにする。……スリには気をつけないといけないわ。

今月の食事会には参加できないことを、参加者に伝える。

アーニヤとランタンは、メタナイト卿のことは任せると、言ってもらえた。

二人が気遣ってくれるなら、私も安心だ。メタナイト卿も……元から不自由はしていないだろうけれど、困ることもなくなるはず。

旅行に行く前日。

メタナイト卿と二人、中庭の噴水で夕食をとる。

今日は親子丼だ。水筒にスープも入れて持ってきた。

少し冷めてしまったけれど、温かい食事に笑い合つて食べる。

こうして、二人きりでゆっくり過ごすことは久しぶりだ。私は嬉しくて、楽しくていつもより笑っていた。気分もすごく良かった。

夕食を食べ終えて、メタナイト卿が話を切り出した。

「リーノ、君に渡したいものがある」

「何でしょうか？」

前のように、ハンドクリームとかをお礼でくださるのか。もらつてばかりだから、少

し悪いわ。

そう予想していたが、まったく違うものをいただいた。

「これだ」

「これは、コンパクト?」

青いバラをモチーフとした、手のひら大のコンパクトがメタナイト卿の手の中にあつた。それは金具などは金色に輝いており、青色とあわせてメタナイト卿を連想させる。

差し出されたコンパクトを受け取る。じつくりと眺めて、触り、これが高い物だとわかる。

「開けてもよろしいですか?」

「君のものだ。好きにするといい」

とても優しい声色でそう仰るから、胸がときめいた。顔が赤くなるのを実感しつつ、コンパクトを開く。

中はシンプルだった。蓋の内側には鏡があり、底面の内側は葉など小さなものが入られるケースになっている。

メタナイト卿は私を見つめながら、その瞬間を思い出すように言った。

「これだと思った。そなたに贈る最初のプレゼントは、これしかないと思つたんだ」

「そんな、ああ、メタナイト卿。ありがとうございます」

リーノはさらに胸が高鳴るのを感じた。

「青バラの花言葉は奇跡、そんな素敵な花をモチーフにしたコンパクトを贈ってください、本当にありがとうございます」

満面の笑みでそう言うと、メタナイト卿が固まった。

……え、違ったの!?!

慌てて訂正する。

「すみません！違ったんですね、勘違いしちゃってごめんなさい！」

「そんなに謝らないでくれ。……その贈り物には、奇跡以外の意味を持たせて、そなたに贈ったのだ」

「それは、一体……?」

うむ、とメタナイト卿は私をまっすぐ見つめる。

「私を思い出してほしい。その鏡にうつる自身を、私の瞳にうつるそなた自身だと思つて……」

「め、めたないと卿……」

なんてロマンチックなことを仰るんですかー！

嬉しくて、嬉しくて、胸がぎゅんっ！としましたわ！あとすぐ照れちゃいます！

思わず顔を覆う。もうコンパクトを正面から見れない気がする。

どうか、この恥ずかしさを誤魔化したくて、話題を探す。

「そ、そういえば！青バラって、なんだかメタナイト卿みたいですよわ」

口がとんでもないことを言い出した。待って、私も相手をとんでもなく照れさせてしまふこと言ってる。ますます恥ずかしくなってきた！

メタナイト卿は穏やかに笑った。

「それを、そなたから言われるのは二回目だな」

「え？そうでしようか？初めて伝えた気がしますが……」

「大臣殿の結婚記念日を覚えているか？そなたが酔った日の夜だ。二人きりで廊下を歩いているときに言われた。まるで青バラのようだと……」

「わたくししたら……」

「照れくさかったが、嬉しかった。そなたの目に、私が美しいものとしてうつっているから。自信が持てた。ありがとう、リーノ」

「メタナイト卿……、いいえ、こちらこそ」

コンパクトを大切に両手で包んで、微笑む。

「わたくしのことを大切に思ってくださいって、ありがとうございます」

私は旅行に行く決めてから五日後、初めて村を出た。

今日は、さすがにメイド服ではなく、動きやすいワンピースを着ている。つばが広い帽子を被り、ワンピースに似合う大きめのリュックを背負っている。

見送りには、フォーム様とブン様とカービー、それにメタナイト卿が来てくださった。ランタンとアーニャは仕事を優先してもらって、陛下と閣下には「見送られると寂しくなるので」と断った。

城の橋前で、フォーム様たちと別れる。

「じゃあ、私たちはここまでね。あとは恋人同士でゆつくり!」

「だな!行つてらっしゃい、リーノ。お土産買ってきてくれよな」

「ぼよ!ぼよ!」

「お土産ですね。では、おいしそうなお菓子を探します。……忘れていたら、許してくださいませか?」

「そんなときは、リーノの手作りお菓子を、たらふく食べさせてくれよ」

「わかりました。そのときは、頑張りませぬ」

笑い合つて、手を振つて別れる。

そのあとは、メタナイト卿と二人で村の外れまで歩いた。今日は晴れてよかつたと

か、食事会に参加できなくて残念なこと、そんな世間話をする。

なんでもないことが、すごく楽しい。

話が終わったあとは、ただ黙々と歩いた。隣で聞こえる、金属同士が軽く当たる音が、心地いい。

村の外れの一本道は、まっすぐ町に続いている。数時間で到着するので、ただ歩けばいいだけだ。前に閣下の母君が通った道で、メタナイト卿たちもここを通過して来たはず。

ドキドキするし、ワクワクする。不安だけど、楽しい。

私はメタナイト卿と顔を見合わせた。

「では、行ってきますわ」

「行ってらっしゃい、リーノ。……怪我などしないように、気をつけて」

「はい、ありがとうございます」

メタナイト卿が広げられた腕の中に飛び込む。

彼の体温が、勇気を分けてくれる気がした。

木々に囲まれた道を、ひたすらに歩く。

カバンはリュックにして良かった。手さげカバンだったら腕が痛くなっていたわ。

ププブランドや、その周りは常夏の地域。無理は禁物なので、三十分ほど歩いたら木陰で休憩する。

二回目の休憩のとき、ぼんやりと青空を眺めていた。そろそろ、また歩きだそうと思っていた矢先に、後ろから声をかけられた。

「気が抜けているな」

「へ？」

振り返ると、忘れることができない顔があった。

ヤミカゲだ。

すぐに走り出そうとする。けれど、腕を掴まれて逃げられなかった。

「マヌケすぎる。魔獣に襲われている国のヤツとは思えんな」

「離してください！」

掴まれた腕を引っ張るがビクともしない。筋トレを頑張っている、まだ非力なので、落ち込んでしまう。

それがいけなかった。

一瞬の隙をつかれて、私はお腹に衝撃をくらう。視界が真っ暗になった。

「寝てろ」

最後に聞こえた声が呆れを含んでいて、悔しかった。

デデデ城、食堂にて。

ランタンは考える。

朝から陛下はカービィに怯えていた。なんでも悪夢を見たらしい。それに加えて赤いボール状のものも嫌がっている。

こういうとき、リーノがいてくれたら、上手く対処してくれるのだろう。

けれど、現在リーノは出かけている。

自分たちだけで頑張らないといけない。

予測不可能なワガママに付き合いつつ、仕事をこなしていく。

リーノがいない間、メイド長の役割は日替わりの交代制となった。

私もアーニヤも仕事に慣れてきた。あとは、人に指示を出すことに慣れれば一人前だと、言われたのだ。メイドは時と場合によつては、ワドルデイたちに仕事を頼む立場にあるから、らしい。

人に指示を出す……か。はじめての経験だ。アーニヤと二人、とても緊張した。

そして今日は私の……ランタンの日だった。

アーニヤにエールを貰いつつ、普段の仕事を行う。

朝食作り、洗濯、掃除。

昼食作り、洗濯二回目、お菓子作り。

お風呂の準備、夕飯作り、片付けて仕事終了。

文字に書いて見れば、そこまで大変そうに見えないかもしれない。

実際は重労働だ。

まず、お城は広いし移動には階段を使う。だから時間がかかるので、常に早歩きを求められる。ここで体力を使う。

洗濯だってそうだ。洗うときには洗濯機という機械を使うから楽だ。けれど、干すものも多く、シーツなど大きいものが多い。

ここでも体力を使う。

掃除も大変だ。

常に素早さと丁寧な仕事求められる、埃を逃さないようアンテナを張り巡らす必要がある。

それにお城に置かれた調度品は、どれも高価なものばかり。掃除とメンテナンスが必

要とはいえ、触るのに気をつかう。

ここで心身共に疲れる。

へ口へ口になったが、まだ終わらない。

昼食作りの前に、掃除で汚れた自身を洗ってから、陛下より先にお昼を食べる。新しいメイド服にも着替える。

キレイになってから、陛下たちの昼食作りだ。

ひどく大変なのはここまで。

昼からは少し楽になる。

二回目の洗濯時に、先程出た汚れものも一緒に洗ってもらう。

朝に干したものと入れ替える。そして、乾いた洗濯物を丁寧にたたみ、それぞれの棚にしまうのだ。

その次がお菓子作り。陛下と閣下の二人分を作ればいいので、ここが一番楽かもしれない。

作るものによっては、一息つけるので休憩時間も兼ねている。

夕食前にお風呂の準備だ。

毎日掃除するため、汚れやカビなどはまったくくない。

リーノの指示通りに、バスボムや泡風呂の素、入浴剤を脱衣所に並べて置く。

これで陛下が選んでくださるはず。

着替え一式も揃えておく。

夕食を作り、片付ければ、一日の仕事が終わる。

お風呂に入る陛下を手伝うのは、閣下かワドルデイの仕事なので、私たちはここまでだ。

次は自分たちの時間になる。

地下に降りて、いつもの厨房へ向かう。

厨房の前、廊下の眼前にはワドルデイたちの憩いの場である庭が見えた。遠くに季節の花らしい色が、美しく輝いている。

厨房では、先に来ていた戦士たちが出迎えてくれた。

ソードナイトが顔を上げて、笑いかけてくれた……気がする。ううん、仮面でよく分からない。

「遅かったな。陛下の命令が追加されたのかと思つたぞ」

「今日は疲れたから、ゆっくり歩いてきたの。心配かけたわね」

厨房の中をよく見ると、材料が刻まれている。準備していてくれたのか。

アーニヤも気づいて、嬉しそうに声を上げた。

「まあ！材料を切ってくれたんですね、ありがとうございます」

「このぐらいいなら、できるようになった。教えてくれたアーニヤたちのおかげさ」
照れくさそうにブレイドナイトが言った。

二人の間に流れる空気を感じ取ると、いつも思うのだ。
はやく、くつついちゃいなさいよ。つてね。

食事会が滞りなく終わって、片付けも済む。

今日はグラタンにサラダとスープだった。リーノの好物なので、彼女が一番楽しみにしていた。それなのに、運悪く本人がいない。

地下の厨房からの帰り道、ソードナイトと話す。

「また近いうちに、グラタンを作ってもいいと思うの。あの子に食べさせてあげたいっていうのもあるけれど、リーノのグラタンは絶品よ！私が食べたいわ」

「自分が食べたいのか」

声を上げて、おかしそうに笑う恋人が眩しい。

ランタンも笑う。

「そうよ。だって、私はリーノの料理のファンだもの」

「そういえば、メタナイト卿から聞いたことがある。リーノはランタンとアーニヤの

ファンだと。二人には自分にはない才能があつて素晴らしいんだと」

「あの子、そんな恥ずかしいこと言っているの？もう、やめてよね」

照れ隠しで怒つたような調子で話す。

恋人にはバレているらしく「まあまあ」と軽く言われた。

「そういえば、ランタンたち三人は幼なじみらしいな。昔から仲が良かったのか？」

「……はじめはね、私は一人だったの。生意気で見栄っ張りで上から目線などころがあつてさ、友達ができなかつた」

「うん」

「毎日寂しかったわ。でもね、あるとき二人の女の子を見つけたの。その子たちはとても可愛くて、優しかった。仲間に入れて欲しかった」

「昔からリーノとアーニヤは優しかったんだな」

「そうなの。でね、私つたらよりもよつて『遊んであげる！』つて声かけたの。普通なら遊んでくれないわ。でも、リーノたちは『よろしくお願いします』つて、言つてくれた」

「それから遊ぶようになったんだな」

「ええ。毎日が楽しくて、別れるのが名残惜しくて、明日が待ち遠しかった。ソードナイト、私ね、あの子たちのことが大好きよ。私のはじめての友達で、親友だもの」

「ああ。……俺にも大事な人たちがいるよ」

「ブレイドナイトとメタナイト卿よね？」

「そうだ。ブレイドナイトは唯一無二の仲間であり、ご主人は命の恩人だ。それに、ランタン。俺の、はじめての恋人だ」

「……そうだったの？それは、なんというか、気分が良いわ」

「引かないのか？」

「引かないわよ。私だって。はじめての恋人はあなただもん」

微笑むと、ソードナイトはぐつと距離を縮ませてきて……。

手を重ねた。

「ランタン、その、今日は……」

「まだダメ」

「そ、そうか……」

「もう少し待ってちょうだい。私、まだ心の準備ができてないの」

「わかった。待ってる」

ランタンの部屋の前で、ソードナイトは帰っていった。

深夜、城に爆発音が鳴り響く。

アーニヤは飛び起きた。

地震かと思った。だが、城は震えるだけで、揺れてはいない。では、一体何なのだろうか。

一人では恐ろしいので、ランタンの部屋に移動する。

パジャマの上にケープを羽織り、懐中電灯の灯りをつけて廊下に出た。一分ほど歩けば、ランタンの部屋である。

少し強めにノックをした。

「ランタン、ランタン。起きてください」

扉はすぐに開いた。

パジャマ姿のランタンだ。自分と同じく、さつき起きたらしい。

「ランタンも起きたんですね」

「あんなに大きな音だもの。目が覚めちゃったわ。……どうする？ 今日、もうアーニヤがメイド長の担当でしょう？」

もう日付が変わっていた。今度はアーニヤがメイド長をする番だ。

「私なら、そうですね。一応着替えて、逃げる備えをしておきましょう」

「着替える？ 脱ぐんじゃないくて？」

アーニヤはハツとする。

そうだ。私たちはキャピイ族。服を脱いでいることが普通だった。

しかし、アーニヤは考える。

「ランタン、服を脱いで行動するのもいいんですけど、どちらが動きやすいと感じますか？」

「それは、服を脱いだ方が……」

「本当にそうでしょうか？ 私たち、寝る時も服を着ているんですよ。」

今度はランタンが驚いた。

結局、メイド服に着替えた。そして、じつと音と振動が収まるのを待った。

音は二十分ぐらいで聞こえなくなった。

二人は顔を見合わせて、頷き合う。

「様子を見に行きましょう」

暗い廊下の先、懐中電灯で照らして。

玉座から近いベランダ、そこから下をのぞき込む。

「あら、大勢居るわね」

「珍しい。メーベルさんもいらっしやいますね」

陛下に閣下、カービィにフーム様とブン様、ロロロとラララ、それにメタナイト卿。最後に占いのメーベル。

水浸しになった地面と、少し壊れて崩れた出入口が、遠くに見える。

何が起こったのか、すぐにはわからない。しばし眺めていると、メタナイト卿と目が合った……気がする。

メタナイト卿はロロロとラララを呼んで、ちよつと話した素振りを見せた。それから、ロロロとラララがこちらに飛んできた。

二人は夜でも元気いっぱいだ。

「こんばんは！ランタン、アーニャ」

「メタナイト卿からの伝言よ。魔獣はカービィが倒した。安心して眠れ、だって」

「わかったわ。伝えてくれてありがとうね。おやすみなさい、二人とも」

「ありがとうございませす。おやすみなさい。ロロロ、ラララ」

「おやすみー！」

「またね！」

ロロロとラララは、フームたちの方へ飛んでいった。

私は安堵から息を大きく吐く。

「カービィが倒してくれて良かったです。戻って寝ましようか、ランタン」

「そうしましよ。明日も早いわ」

二人は緩やかな足取りで帰宅する。
この騒動は始まりに過ぎなかった。
今の二人は、そのことを知らない。

妖星ゲラス、そしてリーノ

遙か彼方から、妖星ゲラスがプププランドに落ちてくる。

メーベルさんがそう予言してから数日、本当になっちゃいましたね。

城の廊下の窓を、雑巾で磨くアーニヤ。

視線の先は窓ガラスではなく、空に輝く赤い星に向けられる。

心なしか、空も赤く染まっている気がする。

心が恐怖で強ばりそうになる。

けれど、アーニヤはその度に手を動かした。

自分はまだ死んでいない。

最後まで生き足掻くんだ！

今、フォーム様が懸命に計算をしている。ゲラスの軌道を逸らすためだ。その時が来たら、たくさん動かないといけない。

ふと、手を止める。

「掃除よりも食事を作った方がよかったかしら……？」

「食事は後で、生き残ったときに作ればいいわよ」

「ランタン」

「まったく、落ちつかないから掃除させてくれ……だなんて。すっかりお城のメイドになっちやっただわね」

「たった数ヶ月ですが、心身共にメイドとしての心得を叩き込まれましたからね」

「そうね……。リーノ、今何をしているのかしら？」

「……きつと、親族の方の家に行らっしゃいますよ。一人ではありません。大丈夫です」
リーノは、まだププビレッジに帰ってきていない。

両親の遺品整理に、時間がかかっているのか。それとも親族に引き止められているのか。

理由はわからないけれど、帰宅が遅い。

「ここに、リーノがいてくれたら、良かったですね」

「三人一緒なら、怖くないものね」

「ランタン、二人だけですけれど、頑張つてグラスから生き残りましょう」

「大丈夫よ、アーニヤ。私たちには頼もしい仲間がいてくれるもの。さ、図書館に行くわよ。そろそろフォーム様の計算が終わるわ」

「わかりました。向かいます」

アーニヤたちは、図書館へと向かった。

そして城壁へと上る。

フームの指揮の下、数十の大砲をガラスに向けて並べる。

「うまくいってください!!」

「発射!!」

一斉に砲弾がガラスに向かっていく。

途中、砲弾は失速した。けれど、空を飛んできたカービイをフーム様が見つけたことで事態は好転する。

ワープスターを呼び、カービイに砲弾を吸い込ませて、ガラスに向かって吐き出させた。

砲弾は大砲から発射されたときよりも速度を増して、ガラスに命中する。

そして、ガラスの軌道が逸れた。

ガラスが完全にプブレッジを過ぎ去るまで、私たちは空を見上げ続けた。

やがて赤い空は、いつもの青空へと戻る。

そこでようやく、私たちは喜びの声を上げた。

「やったー！イエー！」

「みんな最高！ 私たちは助かったんだわ！」

私もランタンと喜びを分かち合おうとして、近づくのをやめた。

だって、ソードナイトさんと寄り添っていたから。

少し寂しかったけれど、この気持ちも生きているから味わえるもの。そう納得した。

「アーニャ」

「ブレイドナイトさん」

「あちらで、少し話せるか？」

あちら、みんなから少し離れた物陰だ。

なにか言いたいことが、あるのだろう。

アーニャはブレイドナイトについて行った。

みんなと充分に離れ、姿を隠したところでブレイドナイトは片膝をつく。

アーニャはびっくりした。

「アーニャ、私と結婚してほしい」

「はえ」

変な声が出てしまった。

アーニャは恥ずかしくて、口を手で抑えた。それから混乱した。

慌てたのは戦士の方だ。

「違う！いや、違わないけれど、あの、その！わ、私と付き合っただけでほしいと、言いたかったんだ！」

アーニヤはさらに混乱した。そして、思ったことがするりと口から出てしまった。「結婚を前提に、でしょうか？」

ブレイドナイトは手をぎゅつと握りしめて、まっすぐアーニヤを見る。

「そうだ。けつ、結婚を前提に付き合ってくれ」

アーニヤの目はぱちぱちと瞬き、体は小さく震えた。そして芯から熱くなるように、心が暖かくなる。

それは涙という形で表面化した。

仰天したブレイドナイトは立ち上がり、アーニヤに近寄る。そしてハンカチを取り出した。

涙を優しく拭う。

「すまない。嫌なことを言ってしまったか？」

「いいえ、とつても嬉しかったんです」

ほろほろと零れる涙を、彼が拭ってくれる。それが心地よくて、身を任せてしまう。

アーニヤは昔を思い出す。ブレイドナイトや、他の二人のファンになった、あの頃を。

目の前の戦士とこんな関係になるとは、思ってもみなかった。

涙が収まった頃、彼女はブレイドナイトから一步下がりに、深くお辞儀した。

「ブレイドナイトさん。こんな私でよろしければ、結婚を前提にお付き合いですてくださ
い」

ブレイドナイトの声が大きく反響する。

「よ、喜んで!!!」

そのせいで、ブンははじめとした子供たちに見つかり、ランタンやソードナイト、メ
タナイト卿にもバレてしまった。

二人はたいへん恥ずかしい思いをするのだった。

——とある、巨大宇宙船にて。

「妖星ガラスの作戦は失敗したか」

「申し訳ありません。まさか、星の軌道を変えられるとは……」

「まあよい。本命はこちらだ」

影から、虚ろな瞳の女性が現れる。

その後ろには、ヤミカゲという忍者がいた。

「では、作戦を実行します。ヤミカゲ、彼女をプブレッジの近くまで送ってさしあげて
ください」

「わかった」

「……お待ちください」

三人は驚いた。女性の瞳に意思が宿っていたからだ。

普通はこうならない。みんな、操り人形のように命令されるまま動く。

女性は、主人に向かって膝をつく。

「ご主人様、お願いしたいことがあります」

「……なんだ？」

「わたくしがカービィを倒したら、願いを一つ叶えていただけませんか？」

「よかろう。望みを言え」

「メタナイト卿を魔獣に」

一瞬の間。

主人の部下は驚き。

忍者は口元を歪める。

そして、悪夢が笑う。

「気に入った！貴様が勝ったあかつきには必ず願いを叶えてやる！我が名にかけてな」

「ありがとうございます。ご主人様」

女性は美しく礼をした。

妖星ガラスから三日後。

朝から村は大騒ぎになった。

リーノがようやく帰ってきたのだ。

「リーノ、おかえり！遅かったじゃないの」

リーノを囲む村人たちを押しつけて、サトが前に出る。

笑顔のリーノが迎えてくれると思いきや、彼女は焦っていた。

「ただいま戻りました！あの、みなさんすみません！すぐに帰らなくちゃいけないくて

……その……！」

「リーノ？」

「サトさんごめんなさい。今は急いでいて……」

「そう？わかったわ。あなた！」

サトは夫のボルンに呼びかけた。ボルンはすぐに、村人たちに道を開けさせた。

「さあ行きなさい。土産話は後でね」

「終わったら必ずお話しますわ。ありがとうございます。それでは」

リーノは荷物を背負っているにも関わらず、素早く駆け抜けていく。サトは首を傾げた。

「あの子、やけに丁寧な言葉遣いだったわね。なにかあったのかしら」
いつもなら、もう少し砕けた話し方をするのに。

小さな違和感是小石程度の大きさで、サトの心には引つかからない。それよりも服装が気になった。

普段は着ない、黒いレースのワンピース。とても似合っていたけれど「喪服を思い出すから好みではない」と言っていたあの子が。

なぜ今日は着ていたんだろう。

メタナイト卿は、朝の見回りをする。

徹夜明けだが、意識はハッキリとしている。戦闘がおきても問題なく動けるだろう。城の廊下を歩き続けて、ある場所に辿り着いた。どうしても足が向いてしまう部屋の前の廊下だ。

「また、来てしまった……」

リーノの部屋はもう少し先にある。最近はそこを眺めては、ため息を吐いて帰るの

だ。

我ながら女々しい。

戦士は少々、情けない気持ちになった。

メタナイトは気持ち切り替えるように、目を閉じる。

はやく戻って二人を手伝おう。

いや、その前に朝食にするべきだな。

最近、切るだけでいいなら、サラダを作れるようになった。米も炊ける。

塩むすびとサラダでいいだろうか。肉か魚も欲しいところだが、今はまだうまく焼ける気がしない。

来た道に戻ろうとした。

ガタガタ！バタン！

廊下の先で大きな物音がした。

——ちょうど、リーノが扉を閉めた瞬間だった。

「リーノ」

「——あなた」

見たことがない笑みで、リーノが振り返った。

脳内で警鐘が鳴る。

——冷静に、普段と変わらない態度で話す。

「……おかえり。いつ帰ったのだ？」

「今朝に帰りました。でもこれからすぐに出かけなければいけません」

「どこへ行く？」

「今は言えませんわ。どうか、待っていてくださいね。では、失礼します」

「待て、リーノ！」

彼女は走り出した。以前よりも速く、俊敏に。

あつという間に見えなくなった背に、かつての戦友の姿を重ねる。

「まさか……」

嫌な予感は鳴り止まない。

メタナイト卿はある場所へ急いだ。

「カービー、カービー」

やさしい、やさしい、声が聞こえる。

大好きな声。

いつもお菓子をくれる、あの人の声。

カービィは目を覚ましました。

そして声が聞こえる方を見ました。

「カービィ、助けてください。あなただけが頼りなんです」

「ぼよー！」

カービィは寝ていた木から、軽やかに飛びおります。

そして、二人は手を繋ぎました。

カービィは導かれるまま、人気のない森へと入っていききました。

まだまだ奥へ。

もつともつと奥へ。

「ぼよよう?」

「もう少し、もう少し」

これ以上先は危険です。

それでも足は止まりません。

カービィはリーノを心配します。

リーノは言いました。

「もう少し、あと少し」

そうして辿り着いた森の先、恐ろしい輝きがたくさんありました。魔獣です。

カービィは、とつても驚きました。でも、すぐに勇気を出しました。

リーノの手を離して、彼女の前に立ちます。いつでも吸い込めるように構えます。

「カービィ、ごめんなさいね」

「ぼよっ？」

リーノは歩き始めました。

カービィを超えて、カービィの声を無視して、魔獣の前まで歩きます。

そして振り向いて、言いました。

「しんでください」

愛よ、永遠に

「しんでください」

「カービー！」

カービーの背後から、リーノたちが来た道から人影が飛び出す。

フーム、ブン、そしてメタナイト卿だ。

メタナイト卿の圧に魔獣たちが怯んでしまい、カービーに飛びかかれなかった。

リーノは忌々しそうに舌打ちする。

ブンが仰天した。

フームも口元を手でおおう。

「リーノが舌打ちした……」

「はじめて見たわ……」

「気を抜くな！」

メタナイト卿の活で、二人は緊張感を取り戻す。

メタナイト卿は剣を抜いて、臨戦態勢に入った。

リーノを、睨みつける。

リーノも、メタナイト卿を睨んだ。

リーノは背後で唸る魔獣を片手で制する。

そんな姿を見て、子供たちはひどく動揺した。

あれではまるで魔獣たちの指揮官だ。

フォームはこそりとメタナイト卿と話す。

「リーノはナイトメアに操られているの？」

「……おそらく」

「いいえ、違いますよ」

リーノは無表情で言い放った。

「わたくしは魔獣になったのです」

「!!？」

「そんな!？」

「嘘だ!!」

「ぼよう!」

フォームは信じたくなかった。

姉のような人物が、魔獣になる条件を満たしているとは思いたくなかったのだ。

だから頭を何度も横に振って、自分に言い聞かせるように叫んだ。

「嘘よ!!! リーノは憎しみの中で生きたりしていなかったはずよ! だから、魔獣になれるわけが……」

「なれたんですよ。魔獣に」

リーノは空中をぼんやりと見た。

いや、あれは過去に思いを馳せているのだ。

メイドは独り言のように話し始める。

「なぜ魔獣になれたのか? わたくしの中に憎しみがあつたせいのか……。あつたのかも
しれません」

キツと空を見上げる。

「わたくしから両親を取り上げた世界に対して、ずっと! 怒って、憎んで、許せなかった
!……まあ、推測ですけど」

ころころと感情を変えるリーノ。

見たことがない、想像さえしなかった表情、感情、そして心に、誰も何も言えない。

唯一、リーノと同じように大切な人を失っているメタナイト卿なら、何か言葉をかけ
れたかもしれない。

だが、彼は静かにメイドの言葉を聞いていた。

リーノは両手を口元に持っていき、優しく笑う。

「いいじゃありませんか、魔獣になった理由なんて。今は、この場をどうするかが大切ですよ」

リーノの言葉にメタナイト卿が強く頷く。

「その通りだ。……カービィ、これを吸い込め」

「ほよー」

取り出したのはソード。

カービィはソードをコピーした。

リーノは目を丸くする。

「近くで見たのは初めてです。本当に不思議な力ですね。ですが、剣一本でこの数の魔獣を相手にできますか？」

魔獣たちがそれぞれ叫び声をあげる。

フームは気を強く持つが、ブンは震え上がった。

「やべーよ、姉ちゃん……」

「フーム、ブン。隠れている」

「はい」

フームとブンは下がって、木の後ろに隠れる。

リーノはそれを見届けてから、魔獣たちに合図を出した。

「では、始めましょう」

魔獣たちが一斉に襲いかかる！

メタナイト卿とカービィは互いに背中を合わせて、戦った。

主にカービィが自由に攻めて、メタナイト卿がそれに合わせる感じだ。非常に息が合っている。それだけメタナイト卿のアシストが上手いのだろう。

一匹ずつ、魔獣は倒されていくが、長期戦に不慣れなカービィも息が上がる。そして着実にダメージが蓄積されていく。

リーノは、二人の息が乱れるその瞬間を待っていた。

最後の一匹が爆発する。

カービィはすぐに息を整えたが、メタナイト卿は若干遅い。年齢差が出たようだ。

——ニヤリとリーノが笑う。

「ヤミカゲ殿」

「おう」

彼女の背後、影から現れたのは忍者ヤミカゲ。

メタナイト卿は剣を握り直した。

「なぜ、お前がここにいる？」

「こいつのお守役さ。なんせ、こいつを誘拐したのは、俺だからな。ナイトメアから監視を命令されている」

「貴様……!!」

「そう怒るなよ」

「お喋りは結構です。では、メタナイト卿の足止めはお願いしましたよ」

「ああ……殺しちまっても文句言うなよ？」

「その時は、わたくしがあなたを亡きものにいたしましょう」

「いい表情で言うようになったじゃねえか。惚れるぜ」

「ご冗談を」

リーノはゆつくりとした足取りで、カービイに向かう。メタナイト卿もそちらに駆け寄ろうとして、ヤミカゲに阻まれた。

間もなく、メタナイト卿対ヤミカゲの戦闘が始まった。

剣と刀が激しく打ち合う音が聞こえる。

リーノはカービイから数メートル離れたところに立った。

そして構える。

「これが、新しいわたくしです！カービイ、参りますわ!!」

リーノから電撃がはじけて、一瞬の光とともにその姿が変わる。

顔の側面から犬のようなとんがった大きな耳が生えて、手には鋭い爪が、スカートからふさふさのしっぽが見えた。

白と青の犬のような魔獣。その名を。

「コールドツク!!はあ!!」

リーノは口から拳大の氷を吐き出した!それは鋭く一人くらいなら貫けそうだ。

カービイは剣で砕いた。

リーノは忌々しそうにその様子を見る。

次は、体から冷気を噴出させた。周囲に針のように細い氷を作り、それを操る。

「いけー!」

一弾目はカービイにまっすぐ向かう。すべて壊される。

二弾目は斜め下からカービイを狙う。かわされる。

三弾目は真上からカービイに降りそそいだ。当たる。

カービイは怯んだ。

リーノは一気に攻撃しようと走る。

「来て、ワープスター!」

フォームによって流れ星がカービイに落ちてくる。

間一髪のところまでカービイは、リーノの突撃を避けた!そして、今度はカービイが

リーノに突撃して吹っ飛ばす。

——ガン!!!

「あぐ!!!」

リーノは木に激突して、ずるりと地面に落ちた。

メイドは動かない。

その頃、不利を悟った忍者は煙幕で姿を消した。

メタナイト卿は空中に向かって叫ぶ。

「待て!!!」

「そいつを放置してもいいのか？ハハハハハ……」

忍者の気配が遠のいていく。

戦士はすぐにカービィの傍へ走った。

「カービィ、リーノは……?」

「ほよ」

カービィが指さす方向、木の下でメイドは倒れている。見る限り大きな怪我は無さそうだ。

敵が姿を消したため、フォームとブンが隠れた場所から出てきた。

「さつきから動かないの!」

「……確かめよう」

メタナイト卿を先頭に、カービィ、フーム、ブンがつづく。

リーノはどれだけ近づいてもピクリとも動かなかった。

子供たちは、リーノから二メートル離れた場所に止まらせる。戦士は一人、リーノに近づいた。

「リーノ、リーノ」

メイドの肩を掴んで、優しく揺さぶる。

メイドは苦しそうに呻き声を上げた。

「まだ、わたくしは、まだ……」

「その怪我ではもう戦えない。諦めるのだ」

「……できませんの。わたくしに注入された魔獣薬は、試作品で。不完全な魔獣を生み出すもの」

会話を聞いていたフームが疑問の声を上げる。

「つまり、どういうこと？」

「……ナツクルジョーのように、元に戻れないのだろう。そうだな？」

リーノは頷いた。

フームとブンが、リーノに抱きつく。

二人の頬は涙で濡れていた。

「嘘よ、嘘よ！リーノが魔獣になったまま戻れないなんて、そんなの嘘よ！」

「どうにかしてくれよ！助けてくれよ！なあ、メタナイト卿！！リーノは、俺たちの姉ちゃんなんだ！」

メタナイト卿は何も言えない。

この状況を打破する案が思い浮かばないから。

できるなら、叫びたかった。

神か、運命に激しく怒りをぶつけたかった。

なぜ、私から大切なものを奪う？

仲間も、友人も、恋人も……。みんな……。

いなくなる。

最後に残ったのは虚無だった。

「まだ……」

諦めちゃいけない。

リーノは最後の賭けに出た。

自分にできること、やれることを最後まで。

「カービィ、これを吸い込んで……」

懐のポケットから、青バラのコンパクトを取り出す。

それをカービィに差し出した。

カービィは何も言わず、吸い込んでくれた。

七色に反射してうまれるのは、ミラーカービィ。

「みらー」

カービィの声に反応して、杖が暖かな光を灯す。

そして、リーノの中から鏡が出てきた。

二枚の鏡だ。

一つ目は、透き通っていて、触れたら割れてしまいそうな飾りつけのないシンプルな鏡。

二つ目はメイドモチーフに飾られた可愛らしい鏡。

二つ目の方は黒く淀んでいた。

一つ目の鏡から声が発せられる。

『ねえ！お願い、リーノを助けて！』

女性の声だ。リーノとは似ていない。

一つ目の鏡にぼんやりと人の姿が浮かぶが、よく見えない。誰なのだろう。

『説明は後でね！今は一刻も早くリーノを助けないと、助からないから！飲み込んだじゃうね！』

すると、一つ目の鏡が掃除機のように、磁石のようにフーム、ブン、カービィ、メタナイト卿を吸い込む。

「ぎゃあああああ！」

「な、なんだこれ!?!」

「ぼよー!!」

「!?!」

鏡は四人を吸い込むと、大人しくなった。

「いってて……」

「なんなの一体」

「ぼよ？」

「みんな、見ろ」

メタナイト卿に言われて、辺りを見回す。

不気味な部屋だった。

黒い床、壁と天井は白い。明かりはついておらず、少々暗い。

テレビがついていて、その光だけが部屋を照らしている。

そのテレビの影から、人が出てきた。

フォームは、いつか夢見た星の戦士のようだと思った。

自分たちとは違う背の高い体。

手足は長く、まるで違う生き物のようだ。

例えるなら、それは木のようだった。

——どこかの星では、それを人間と呼ぶ。

人間は頭を下げた。

「あの、無理やり連れてきてごめんなさい。私の名前は、りか。信じてもらえるか、わか
らないけれど……リーノの前世よ」

「リーノの」

「前世？」

「信じられないことはわかってる。でも、どうか今だけは、リーノを助けるために力を貸して欲しいの。……さあ、こっちよ！」

りかはテレビの中に入った！

フームたちはどうするか、戸惑う。

「どうする？あのりかっていうやつという言葉を信じるのか？」

「メタナイト卿……」

「あの、りかという者から、リーノの気配を感じた。僅かだが、信じてもいいかもしれない」

メタナイト卿はテレビ画面に手を伸ばして、その体を飛び込ませた。

フーム、ブンも意を決して飛び込む。

カービィも、その身を弾ませた。

テレビの先は見知った風景が広がっていた。

ププランドのププビレッジである。

村からも、城からも離れた草原の丘に、五人は立っていた。

「ここはププランド? どうしてここに……?」

「俺たち、戻ってきたのか?」

「違うわ。ここはリーノの精神世界。記憶の中なの。だから、ほら後ろを見て」

りかの言う通り、振り向く。そこにはテレビがあつた。平原の中に、ぽつんと置かれている。変な感じだ。

「私たちが通つた道であるテレビがある。それに村を通つて城へ行けば、ここはププランドにそっくりな場所であつて、同じではないとわかるはずよ」

「そうなのね……つて、その姿はなに?」

りかはメイド服を着ている。リーノの物にそっくりだ。

「これ? 可愛いから真似してみたの。まあ、リーノは可愛いから何でも似合うんだけどね!」

にしし、とりかが笑う。まるでリーノのことを妹かなにかだと考えているようだった。

りかは歩き出す。

「行きましょう! 今リーノに起こっていることを、説明するわ」

「待つて! どこへ行くの?」

りかは悩んで答えた。

「どこ……どこだろう。リーノがいる場所なんだけど、私もわからないんだよね」

「つまり、説明しながらリーノを探すのか？」

「そう……です」

りかは顔を逸らす。その頬は赤かった。

今リーノに起きていること。

りこはできるだけだけ噛み砕いて説明する。

「半端な魔獣化で元の姿に戻れないこと。そのせいで苦しんでる。魔獣として人を害する気持ちと、リーノとして誰も悲しませたくない気持ちがぶつかり合っているの」

「どうしてそんなことがわかるの？」

「私がリーノと体を共有しているからよ。体の中で起きていることは大体わかるの。……あのね、心して聞いて。リーノは、魔獣になる前の姿には戻れないわ」

「そんな！」

「助けられないのかよ!?!」

「違う。元の姿には戻れないけれど、魔獣の悪い心だけなら取り除ける。そうすれば、魔獣の力を持ったまま、それでもリーノとして生きていけるわ」

フォームとブンは顔を見合わせる。

キレイさっぱり魔獣の力から、リーノを解放してやれると思っていた。しかし、それが叶わない。しかも、魔獣の力が残ってしまう。

それは、いい事だろうか。

メタナイト卿が言った。

「リーノが、生きて戻ってきてくれるなら、何でもいい」

その言葉に、フォームとブンも、カービイも頷く。

りかは、笑った。

「その言葉を聞けてよかった。これでリーノを任せられる」

「任せる？」

「私はリーノの前世、今じゃリーノとは双子みたいなものだからね。彼女の周りには、彼女を大切にしてくれる人がいてくれると、安心して……安心してできるのよ」

「……ねえ、さつきから不思議だったんだけど、あなたってどういう存在？リーノの前世で双子って？」

りかは遠くを見つめて話します。

「まず、自己紹介からしようかな。私は、ププランドじゃない、どこか遠い星で生まれた異星人ってことは理解してもらえるかな？」

「わかるわ。だって、体そのものが私たちとまったく違うもの」

「地球っていう青い星で生まれたの。そこで、まあ色々あつて死んでさ。なんの因果か、プブレッジに近い町で転生したの」

隣を歩いていたブンが疑問を口にする。

「てんせいってなんだよ？」

「輪廻転生……、生まれ変わることよ。りかはリーノに生まれ変わった」

「そう。はじめのうちは、まだ幼い頃はりかの意識が強く残っていたわ。子供の体に大人の心が入っていた。だから周りには大人びた子供だと言われたし、教えたらなんでもできたから、天才児だとか言われた」

「そういうえば、よくパパとママに言われたっけ。リーノを見習いなさいって」

「リーノがすつげー勉強も家事もできたのは、もう大人だったからか」

「いや、それは練習を頑張ったからよ。なんども反復練習して、上手になっていったの。勉強を嫌がらなかつたのは、大人になったとき必要になるってわかつていたからよ」

りかの説明を聞いて、二人は納得する。

フォームがブンをつついた。

「ブン、勉強を頑張ったら？大人になったら必要よ？」

「い、今はりかの説明が先だろ」

姉弟のじゃれ合いに、りかは顔をほころばせる。

「続けるね。歳を重ねる度に、りかはリーノへと変わっていったわ。まるでグラデーションみたいに。りかの意識はリーノの意識になっていった」

「不思議な話だわ。想像もできない」

「なんとなくわかってくれればいいよ。説明している私も上手く言えないし。……いつかりかの意識はなくなり、リーノになるうとしていたとき。事件は起こったわ」

「？」

「エスカルゴン忘却事件」

全員が思い出した。つい最近起きた事件だったからだ。

「リーノはエスカルゴンを忘れていたけれど、りかは覚えていた。それが決定打となつて、私たちは分離しちゃった。一つだった意識が、完全に二つに別れたせいで、体に悪影響がでた。最近、リーノはよく目眩を起こすよね？」

「なるほど。リーノの調子が悪いのは、この事が原因だったのね」

「そうだよ。上手いこと、カードの表と裏みたいに意識が入れ替われば、目眩とかおきないんだけどね。突然意識がぼつさり別れちゃったもんだから、上手にできなかつたの。二つの意識が同時に表にでるから、脳への負担が大きくなる。結果、不調に繋がる」

りかは「ごめんね」と続ける。

フームは頭を振った。

「あなたのせいじゃないでしょう？悪いのは……えーと、そう、魔獣を送ってきたナイトメアよ！」

「ありがとう、フーム。……さあ、村についたよ」

いつもと同じ村に見えた。

レン村長、ハナ婦人。ボルン署長、サトさん。ガス、ガング、ヤブイ先生。カワサキ。みんな村にいるようだった。

でも、どこか人形めいていて怖い。みんな同じ行動をしているのだ。

レン村長とハナ婦人は車に乗って、村を走り抜ける。

カワサキは表をとにかく掃除していた。

ボルン署長は村中を歩いている。

「ここが、リーノの中の村？」

「そうだよ。意識の中で思い出される村だから、みんなリーノの印象と想像と思い出でできているのよ。……うーん、ここにリーノはいないみたい」

フームとブンはリーノを見上げた。

「わかるのかよ」

メタナイト卿が推測する。

「そなたはリーノと繋がっている。だから、近くにいれば感じ取れるのではないか？」
「当たりです。でも、これ一方通行なんですよね。りかはリーノを感じ取れるけれど、リーノにはできない」

「どうして？」

「ぼよっ。」

「リーノが私の名前を、存在をきちんと認識できていないからよ」

子供たちは疑問符を浮かべる。

りかは頬をほりほりとかいた。

「そういうものなの」

村を走り抜けて、城へ入る。

中にはワドルデイたちがたくさんいて、掃除をしていた。

フームは辺りを見回して、本物の城を思い出す。

「私の印象より、ワドルデイの数が多いみたい」

「リーノは、よくワドルデイたちと仕事をしているからね。そのせいじゃないかな？」

りかも辺りをキョロキョロと見て、斜め上を見上げた。

「玉座の間かな……?」

全員がりかの視線の方向へ、目を向ける。

フームは睨むようにに見上げた。

「とにかく行つてみましょう」

「よし、階段だな」

「待て」

メタナイト卿が走る子供たちを止めた。

そして中庭を指さす。

「あちらから回つて、エレベーターに乗るぞ」

りかは頷いた。

「その方がはやいですね」

「エレベーター? そんなのあるのか?」

「中庭の隠し扉から入れるのだ。行くぞ」

今度はメタナイト卿に先導されて、中庭へ。

噴水やキレイに刈られた草など、本物の城と変わった様子はない。

中庭から近い隠し部屋に入った。奥にエレベーターの扉が見える。

メタナイト卿がボタンを押すと、問題なく動いた。

「うむ。異常ないな。これに乗っていくぞ」

「こんなの知らなかった！」

「今までこれ使つて、城を移動していたんだろ？メタナイト卿もリーノもずるい！」
「大王から内緒にするよう言われてたんだよ。ここから帰つたら、怒つてあげて」

エレベーターから玉座の間がある階層へ到着する。

隠し部屋から出ると、見慣れた城の壁や天井、床があつた。

敵の存在に気をつけながら、玉座の間へ入る。

中は黒いモヤでいっぱいだった。

「何これ!？」

「大丈夫。私に任せて」

みんなが動揺する中で、りかだけは堂々としていた。

玉座の間の扉を両方開け放つ。まるで淀んだ空気を入れ替えるように。

黒いモヤは、何かに吸い込まれるようにして玉座の間から出ていった。

それは、城のベランダ部分から飛び出し、村の上空を渡り、草原のある場所へ吸いこまれる。

あそこは――。

「ねえ、あそこつて、テレビがあつた場所じやない？」

りかとリーノを繋ぐテレビがあつた場所。

「そうだよ。あの黒いモヤは魔獣の悪い心……それを私の意識の中に閉じ込めたの。これで、リーノは解放される」

りかは玉座の間中へ進んだ。

部屋の中央にはリーノが倒れていた。

りかはリーノをそつと抱きしめる。

りかが輝き出した。

その輝きは暖かくて、思い出のように七色に光り、リーノへと移った。そして、リーノの体の中に吸い込まれる。

「これでいい」

みんながりかの後ろに立って、その現象を見守っていた。

メタナイト卿が一步前に出て問う。

「一体……何をした？」

「記憶を引き継いで貰つたの。りかの記憶は、リーノの役に立ってきたから。これからもきつと必要になるわ」

りかは立ち上がる。

そして、割れた。

鏡が割れるように、それは幻想的に、りかは消えようとしている。

フォームが叫んだ。

「りかー！」

「元からこういうつもりだったの。私のすべての記憶をリーノにあげること。魔獣の悪い心を私の意識の中へ移すこと、そして私の死をもつてそれを無くすこと」

「そんな……」

「最初から死ぬつもりだったのかよー！」

「ぼよう!!」

りかは振り返った。まるでリーノのように、にかりと笑った。

「あなたたちに頼みたいのは、これからのなの。私が急にいなくなったら、リーノは混乱する。自分の一部が突然無くなるもの。その衝撃は大きなものよ。だから、リーノを助けてあげてほしい」

「我々を呼んだのは、魔獣の悪しき心と戦わせるためではない。助かったあとのリーノを救いあげることが目的だったのだな」

「そういうことです。こうして事情を知っているのと、知らないのでは対処が違ってく

る。適切な対処をしてもらうために、ここへ来てもらいました」

りかはどんどん薄く、細やかな破片になっていく。

「私、みんなと遊んでみたかった。リーノの大事な人たちに会って見たかった。話したかった。今日はそれができて、嬉しかったよ。ありがとう」

りかはとうとう見えなくなつて、光の粒子のようになり、消えてしまった。

今度はリーノが光りだす。

リーノは形を変えて、メイドモチーフのあの鏡へと変化した。

——美しく輝いている。

鏡の先には、さっきまで戦っていた場所が見えた。

フームは少し寂しそうに言った。

「りかのおかげね」

「フーム、私たちはこれからリーノを助けなければならない。りかを失って、リーノにどのような症状が出るかわからん」

「俯いているヒマはないってことだろ」

「その通りだ」

「わかつてる。……さあ、戻りましょう!!カービー!」

「ぼよ!」

カービイが杖を掲げる。

鏡と杖は共鳴し、鏡がフームたちを吸い込んだ。

「どこ!?どこなの……あの子はどこ?」

「リーノ落ちつけ」

「メタナイト卿、あの子が、いなくなっちゃって……。私のせいなのに、あの子が身代わりに!」

フームは目を覚ます。

どうやら倒れていたらしい。

身体を起こし、顔を振って頭を覚まさせる。

少し先に、リーノとメタナイト卿がいた。リーノの姿は以前と同じだ。元に戻っている。魔獣ではなくなったのだろうか?

「おちつけません……おちつけないんです……あ、ああ、名前もわからないなんて」

「……彼女の名前はりか。君の前世だった女性だ。君を最後まで守っていた」
「……わかりません。ピンとこないんです。私はあの子を知らない。だから正解もわからない。どうして、どうして……」

「リーノ……」

混乱しているらしいリーノ。彼女を落ち着かせようと、リーノを抱きしめているメタナイト卿。

りかの言う通りになった。

りかを失くしたリーノの混乱は大きくて。

泣き疲れて眠ってしまいうまで、りかを探していた。

ケツイ

あの後、カービイがコンパクトを吸い込んで、何かが起きた。わたくしには何が起きたのかは、わからなかった。けれど魔獣の悪い心が自分の中からいなくなったこと、あの子を失ったことは感じられた。

取り乱し、混乱して、泣き疲れて眠ったわたくしを、メタナイト卿は介抱してくださった。

もちろん、子供たちもだ。

わたくしが起きて、城に帰るまでの夕方、ずっと傍に居てくれた。途中、お昼を調達するために、フォームたちは一旦城へ帰ったらしい。それでもほとんどの時間、付き添ってくれた。

みんなには頭が上がらない。

城へ帰るとき、わたくしはみんなに頭を下げました。

「ごめんなさい。たくさん迷惑をかけたこと、カービイとメタナイト卿を襲ったこと……謝罪させてください。本当にごめんなさい！」

フォーム様たちは、わたくしの傍に来て言いました。

「リーノが無事に帰ってきてくれた。それだけでいいのよ」

「そうそう！魔獣化はビビったけれど、結局誰も殺していないし」

「結果はそうでも、二人を襲ったことに変わりありませんわ……。罰は受けます。わたくしにできることなら、なんでも仰ってください」

沈黙が落ちる。

誰も彼女を責める気持ちはない。

しかし、それをリーノ自身が許さない。

メタナイト卿が赤く染まりつつある空を見上げて言う。

「リーノ、話は後でゆつくりしよう。今は子供たちを家に帰してやらないと」

「あ、はい。そうですね。自分のことばかり考えてしまつてごめんなさい。行きましょう」

カービイを先頭に、一行は森を抜けていく。

リーノは頭の中をぐるぐると回転させていた。

魔獣の力を持つてしまったことを、村人たちはなんて思うだろう。

拒絶されたら？迫害されたら？

生きていけない。大好きな人たちにそんな扱いを受けたら、自分は……。

「リーノ、今はただ、帰ることだけに集中するんだ」

「メタナイト卿……かしこまりました……」

わたくしはやっと、歩くことに集中しました。

夕日が沈んで、空が暗くなった頃。やっと城に着いた。

フーム様が夕食に誘ってくださったけれど、それを断って、わたくしはメタナイト卿と話すことを選ぶ。

彼もわたくしを選んでくれた。

二人で長い城の廊下を歩いた。

リーノの自室。

しばらく空けていたため、大したものはない。

それでも、なんとか夕食を用意して、二人で食べる。

メタナイト卿は夕食作りをかって出てくれたが、動かないと気分が沈んでしまう。だから、作らせてもらった。

メタナイト卿はラーメンを食べて、少し微笑んだ。

「君の料理の味がする。食べたかったものだ」

「ありがとうございます。作ったかがありますわ」

力なく微笑む。

あまり食欲はなかった。それでも何か口にしないと心身共に落ち込んでしまう。それは良くない。

リーノはラーメンをすすった。はじめは嘔むことさえ億劫だった。少しずつ食べ物がお腹に入ると、空腹が満たされていく。満たされれば、落ち着いて考えることができ

た。

食事は十五分ほど終わった。

その間、メタナイト卿はいつも通りに振舞ってくださった。わたくしがいなかった日々の出来事を、語ってくれたのだ。仕事がどうだったのか、簡単な料理を作るようになったとか。星がププランドに落ちてくる話もしてくれた。なんとか軌道を逸らして回避したらしい。わたくしは冷や冷やしながらその話を聞いた。

そしてアーニヤとブレイドナイトさんの婚約も聞いた。

わたくしは心から舞い上がりました。嬉しかった。アーニヤの恋が実ったのだから、たいへん喜びました。

「アーニヤ、良かった！よかった……」

「今日はもう遅い。後日、直接話をするといいだろう」

「はい。そうします」

それからほにこにこと笑いつつ、食事をした。

心なしか、メタナイト卿の笑みも増えたような気がしました。

食事が終わったあと、メタナイト卿が「話がある」と仰ったので、お茶を用意しました。

食器洗いはメタナイト卿が、お茶とコーヒーを用意したのはわたくしです。

コーヒーの香りを吸い込むと心地よくて、嫌な考えを吹き飛ばしてくれます。

お茶とコーヒーを席に運び、向かい合って飲みます。お茶の優しい苦味が体に染みましました。

「……リーノ、そなたのことで話がある」

怖い。けれど優しく語りかけてくださるから、わたくしのこれからに関わるから、聞こうと思いました。

メタナイト卿の瞳をじっと見つめ返す。

「あの時、カービィがそなたのコンパクトを吸い込んだ時のことだ。何が起こったかわかるか？」

「いいえ。ほとんどわかりませんわ。わたくしが知っていることは、わたくしの内側にいたはずの何かがいなくなったこと……それだけです。もし、他にも何か起きていますと

しても、わたくしは気づいていません」

「ふむ。では、かいつまんで事情を説明しよう」

メタナイト卿はゆっくり話し始めました。

コンパクトを吸い込んだカービイが、ミラーカービイになったこと。カービイはその力で、わたくしの中から鏡を出現させたこと。鏡の中にいた、わたくしの前世りかに導かれたこと。りかに案内され、意識の中でわたくしを探してくれたこと。

——りかが犠牲となり、わたくしの中から魔獣の心が消えたこと。

「今のそなたには、魔獣の力がある。だが、暴走しないでいられるのは、りかがそなたを守ったからだ」

「はい……」

「りかはそなたの身を案じていた。そして、同じようにそなたを心配する私たちを知って、安心していた。——リーノ、そなたが生きて戻ってきてくれて、本当に良かった」
メタナイト卿のここからの言葉に息がつかまる。

わたくしは、この人にどれだけ心配をかけたんだろう。どれだけ、悲しい気持ちにさせただろう。

胸が締め付けられて痛い。

きつと、メタナイト卿はもつと痛かったはずだから。

わたくしは椅子から立ち上がり、メタナイト卿の傍へ寄りました。そして彼の手を握り、言いました。

「……ただいま、戻りました」

「……!!おかえり」

彼は強く、わたくしを抱きしめました。

その強さが、彼が味わった恐怖や悲しみをわたくしに伝えるようでした。

——今後、彼を悲しませない。

それは罰ではなく、わたくしの心からの願いで、誓いでした。

次の日、わたくしは熱を出しました。

メタナイト卿いわく、魔獣の力が体に馴染もうとしているためかもしれない、とのことです。

「それか、私が無茶を……」

「無茶ではありませんでしたわ。とても、優しくしていただきました」

ベッドの中からそう言うと、メタナイト卿の手が頬を撫でました。

きつと微笑んでいるのだわ。そう思いました。

熱が出たので、今日の仕事はお休みしました。

また休んでしまったので、陛下と閣下、そしてアーニヤとランタンには申し訳ありません。

朝は食欲よりも、眠気が勝つたので寝ました。

昼から、アーニヤとランタンが見舞いに来てくれました。メタナイト卿から、熱を出したことを聞いたようです。

「何が食べられるかわからないから、一通り買ってきたわ。長旅お疲れ様」

「救急箱から風邪薬出しておきますね」

わたくしの家の中を知り尽くしている二人は、テキパキと動き回ります。

とても有難くて、助かりました。

「二人ともありがとう。回復したら、お礼させてね」

「いいのよ。これぐらい。リーノだって、私が風邪引いたら助けてくれるでしょ？ 助かってリーノを助けるわよ」

「そうですね。大事な人ですものね。さあ、リーノ。熱を計っておきましょう」

アーニヤに言われた通り熱を計る。

微熱だ。朝よりは下がっている。

わたくしは安心しました。タチの悪い風邪ではなさそうです。

「熱が下がっています。ちゃんと寝ていれば、大丈夫ね」

「少し元気になったようですね。うどんかお粥でも出しましょうか?」

「細かく具材を切ったシチューや、ポトフもいいわね」

「いえ、今も眠たいからゼリーを食べたら寝ちやいます」

「そう?なら、飲み物とゴミ箱、近くに置いておくわ」

「それとティッシュも置いておきますね」

また二人はテキパキと動く。

最後にわたくしの額の熱を冷ますシートを変えたら「おやすみなさい」と言っ、仕事に戻っていききました。

また二人に会えた喜び、普段通りに話せた嬉しさ、秘密を言えない申し訳なさが混ざり、頭が痛くなりました。

それも、十分ほどで終わりました。意識がゆっくりと沈んだからです。

次に起きたときは、夕方でした。

体が軽くなっていたので起き上がりました。立ったときにお腹が鳴ります。

しっかり食べて、これからの考えようと思いました。

夕飯はうどんを作ります。アーニヤとランタンが買ってきてくれた、火に数分かけるだけの簡単冷凍うどん鍋です。具材、うどん、汁すべて揃っているのです、食材を用意しないで済むところが楽ですね。

温かな食事が、喉を通り体を満たしていきます。

その度に元気がわいて、思うのです。

——ナイトメアを倒そう、と。

怒りに身を任せているわけではありません。

もちろん、わたくしを誘拐して魔獣にしたことは怒っています。

それ以上に非道を許してはならないと、誰かが止めないといけない、そう思いました。わたくし一人では何もできません。ナイトメアに届かないでしょう。

だから、味方が必要です。

「メタナイト卿は許してくださいさるかしら……」

わたくしがナイトメアに立ち向かうことを、その協力をすることを。

リーノはうどんを食べ終える。

手を止めて、鍋の底をぼんやりと見た。

今建設されているハルバードのことを、聞き出すつもりはありません。わたくしから

情報が漏れてしまっただけはいけませんからね。ですので、敵から宇宙船を奪うことを、メタナイト卿に提案します。

敵の宇宙船はアニメの終盤あたりで登場します。

わたくしの力で宇宙船を凍らせば、機能を停止させることができるかも、そして無力化できるかもしれません。

そのためには、宇宙船を凍らせるほど鍛える必要があります。

一つ、メタナイト卿とまた話すこと。

二つ、味方をつくること。

三つ、鍛錬すること。できれば人目を気にせず堂々としてほしいですね。

リーノは考える。

きつと、目的のためには嘘をつく必要があるだろうと。

夜八時頃、メタナイト卿が尋ねてきました。

就寝前に顔を見ておきたかったそうです。

「ランタンとアーニヤたちも来たが、譲ってもらった」

「……わたくしが、心配なのです」

「そうだ。……ナイトメアの手にかかり、生きて戻ったのはそなただけだ。心配でたま

らないんだ」

メタナイト卿はわたくしの頬を何度も撫でました。

「熱は下がったようだな。よかった」

心からの言葉に、胸が締め付けられます。

今日は、この人の言う通り大人しくしておこうかと思いました。けれど、わたくしは覚悟を決めています。守られるだけではなく攻めるのだと、決めました。

わたくしはメタナイト卿の手を取り、両手で包みます。

「メタナイト卿。今日考えたことを聞いてくれませんか」

メタナイト卿と二人、ソファに座ります。

わたくしは、考えとわたくしの気持ちとを、包み隠さず伝えました。

メタナイト卿は静かに聞いてくださいました。

すべてを聞き終えた後、彼は頷いてくれました。

「そなたの考えはわかった。共に戦つてくれるならば心強い。だが、前線には出ないと約束してくれ。そなたは訓練された戦士ではないのだから」

「はい。かしこまりました」

「ありがとう。……さて、ランタンとアーニヤにはいつ伝える？」

「今日にでも」

「わかった。呼んでこよう」

メタナイト卿は出ていきました。

わたくしは窓の外を眺めます。

二人に話してどんな結果になるうとも、わたくしはこの決意を貫こう。
そう思うのです。

訓練と羊

ランタンとアーニヤに、わたくしが魔獣になってしまったことを話しました。

二人は悲しみ、心配し、怒り、混乱しました。拒絶はありませんでした。

わたくしはそのことが有難くて緊張が解けました。自然と流れ落ちる涙に、親友たちは心配して声をかけてくれました。そして懐からハンカチを取り出し、涙を拭ってくれたのです。

わたくしは二人に感謝を述べました。

「わたくしのこと怖いでしょうに、心配してくれてありがとう」

「違うわ。リーノが怖いんじゃない。リーノが離れていってしまうかもしれない未来が怖い」

「リーノ、私たちの傍からいなくなつては嫌ですよ。どうか、抱え込まないで。今日みたいに話してくださいね」

「ええ、ええ………！」

わたくしは子供のよう到大粒の涙を流しました。

メタナイト卿は静かに、わたくしたちが落ち着くのを待つていてくれました。

アーニヤとランタンに、ナイトメアに立ち向かうことを伝えると反対されました。

目をつけられたら、今度こそ殺されてしまう。そう説得されました。

わたくしは頭を振りました。

「立ち向かわなくては、安寧を得られません。それに、怯えて暮らすなんてできません。あなたたちや、陛下たち、村のみんなを守るために戦います」

力強く決意を言葉にすると、二人はもう反対しませんでした。ただ、お願いされました。

「目の届くところにいて。どこにも行かないで」

「できうる限り、頑張ります」

「絶対って、言ってください」

苦笑には、呆れを含んでいた。

次の日。わたくしの自室にて。

メタナイト卿、フォーム様、ブン様、カービィ。

アーニヤ、ランタン。

ソードナイトさん、ブレイドナイトさん。

以上のメンバーを巻き込んで、今後について話し合いました。

わたくしの目標だった「メタナイト卿ともう一度話すこと」「味方をつくること」はクリアしました。

あと一つ「堂々と鍛錬すること」について、意見を交わします。

体調を気遣われてわたくしは椅子に座り、その隣りにメタナイト卿が座ります。向かい側にアーニャとランタンが腰をおろしました。

テーブルの近くに移動させたソファには、子供たちが座っています。ソードナイトさんとブレイドナイトさんは、別室から運んだ椅子に座ってもらいました。

わたくしは、全員にお茶―子供たちはジュース―が行き渡ったのを確認してから、話し始めます。

「陛下と閣下、それにパーム様とメーム様、村のみんなに力のことを隠しておくことは難しいと思います。なので、話しておこうと思います」

フーム様は難しい顔をしました。

「それはいいけれど、力が使える理由をどう説明するつもり？」

わたくしはにこりと笑いました。

「ある日突然使えるようになった、と言いますわ。旅の途中で、使えるようになった。だ

から故郷には帰らず、ププブランドに戻った……」

嘘はついていない。だから堂々と話すことができます。

ブン様とフォーム様、戦士のお二人は息を飲みます。わたくしのことをよく知る幼馴染は特に驚きませんでした。メタナイト卿は「いい案だ」と賛同していただきました。

ブン様は一つの懸念を問いかけます。

「もし、誰かに……村のみんなに魔獣だったことをバラされたらどうするんだ？」

「わたくしの身におきたことを、正直にすべてお話します。そして、拒絶されるならここを去りますわ」

「そんな」

子供たちはショックを受けたようです。わたくしは彼らに安心して欲しくて、微笑みしました。

「もし去ることになりましたら、引越しが終わり次第お手紙を書きますわ。だからあまり悲しまないでください。そのとき、差出人の名前は本名じゃない方がいいですよね」

わたくしは手を口元にやり、少し考えました。

「そうですね……青バラの恋、とでも名乗りましょうか」

「それは、いいな」

「ふふ、でしよう？」

メタナイト卿と見つめ合って頷き合う。

子供たちは疑問符を浮かべていた。大人たちは何かを察して、頬を染めたり目を逸らしたりしました。

惚気を交えつつ、話し合いは進みます。

どのように陛下たちに説明するか、鍛錬する理由はなにとするのか？みんなで案を出しました。

話し合いは、お昼前にまとまりました。

みんなで部屋を元通りに片付けているときに、ブン様に質問されました。

「で、今日出たアイディアはいつ決行すんの？」

「今日からですわ」

「え？」

「今日のお昼に、陛下と閣下にお会いして力を見せます」

わたくしはガラスコップを持ちます。

みんなに見えるように掲げ、コップの中に氷を作り出しました。

コップの中で氷がカランと踊ります。

全員が驚く雰囲気を感じました。

「話し合いの中で申し上げた通り、今見せたものを陛下たちにも見せてきます」

メタナイト卿は静かに話しはじめます。

「気に入れば村人たちに自慢するだろう。恐れれば……」

「ここを去るのみ、ですわね。こういうことは早い方がいいと思うんです。だから、これから参りますわ。……見届けていただけますか?」

否と、答える方はいませんでした。

陛下と閣下は、村がよく見える上層階のベランダにいらつしやいました。

お二人は仲良く日光浴しています。

わたくしはメタナイト卿と共に、姿を見せました。他のみんなは隠れています。ですが、声が届く距離にいてくれました。何かあれば駆けつけてくれると。わたくしには味方がいてくれるので勇気が湧いてくるのです。

意を決して陛下と閣下に話しかけます。

「——陛下、閣下」

「うおお!!びつくりしたゾイ!」

「いきなり現れるんじゃないでゲスよ!いつもみたい足音立てるでゲス!」

「すみません。緊張で普段通りに振る舞えないのです。お許してください」

深く腰を折る。

二人はわたくしの言葉に興味が引かれたのか、寝転んでいたチェアに座り直しました。

陛下は仕切り直すように、こほんと咳払いなされます。

「うむ。話してみるがよいゾイ」

「結婚の報告は受け付けないでゲスよ」

「そちらはまだですね」

「えーと、今回は違う用件です」

結婚という言葉に持つていかれそうになるけれど、意識を無理やり本題に戻します。

「今日は、相談と報告を兼ねて参りました。こちらをご覧ください」

わたくしは両手で水をすくうように、胸の前まで持ち上げます。

その両手の上に氷を作り出しました。小さな粒は瞬く間に、拳大の氷塊に変化します。

閣下が仰いました。

「すんげー手品」

「いえ、種も仕掛けもありません。このように、魔法みたいなことができるようになります」

「一体いつからできるようになったゾイ!?」

「故郷に帰る前ですわ」

嘘ではありません。実際に故郷に帰る前、ヤミカゲに捕まりこの能力が使えるようになったのですから。

陛下はわたくしが作り出した氷を掴み、口に入れました。

ガリボリと噛み砕きます。

「……本当に氷だゾイ！こりやすごい！だはははは！早速村の人民共に自慢するゾイ!!!」

わたくしはメタナイト卿とアイコンタクトをとりました。

よかった。拒絶されませんでしたね。

次は村人たちです。さて、どんな反応をされるでしょうか。

「メタナイト、お前は城で待て！着いてくるなゾイ！」

「……かしこまりました」

「メタナイト卿、行って参ります」

「気をつけてな」

「そこ！イチャつくくんじやないでゲス!!」

村の広場にて。

陛下は村人たちを集めてわたくしの力を披露させました。

陛下と閣下はそれは楽しそうに、わたくしの新しい力を村人たちに見せつけます。

誰も彼もが戸惑う中、特に仲良くしていただいているサトさん、ハナさん、メーム様の戸惑いと心配は大きなものでした。

メーム様が人々をかき分けて、わたくしの両手を包みます。

「リーノ、何度も氷を作って疲れない？大丈夫なの？」

「はい。今のところ問題ありませんわ。ただ、わたくし自身もこの力を完璧に制御しているわけではありません。しばらくは、メタナイト卿のお知恵を借りつつ、制御訓練に励みたいと思います」

「そう？無茶しちやダメよ。女の子なんだから」

「はい。ありがとうございます。メーム様」

メーム様の優しさが心に染みます。

わたくしが笑顔を向けると、サトさん、ハナさんも笑ってくれました。安心していたけると嬉しいですね。

その和やかな雰囲気壊す如く、陛下が言いました。

「メタナイトの奴を頼らんでも、ワシが何とかしてやるゾイ」

「は?」

「聞けえい!リーノに凍らせて欲しいものがあるなら持つてくるゾイ!一つ、十デテンで凍らせてやるゾイ!」

「へ、陛下?」

陛下のお言葉を聞いた村人たちは、騒めきました。誰もすぐには動きません。

そこにフォーム様、ブン様、カービー、ロロロ、ラララが到着しました。

彼らもまた、人の輪をかき分けて最前列に来ました。そして事情を知ると、ブン様がわたくしにペロペロキャンディを差し出します。

「なあ、リーノ!これ冷やしてくれよ」

「かしこまりました。冷やします」

左手でペロペロキャンディの棒を持ち、右手はキャンディの部分を触らず、包むように掲げます。

キャンディは瞬く間に冷気を発しました。

「これでよろしいでしょうか?」

ブン様はさつそくペロペロキャンディをぱくりと食べます。

「……うまあい!ヒンヤリしてて甘い!サンキューな」

「どういたしまして」

頭を軽く下げる。

はじめてだったけれど、うまく冷やせてよかった。

「リーノ！この水筒に氷をいれるでゲスよ」

「かしこまりました。いくつ程いれますか？」

「それでゲスね……五個いれてくれでゲス」

「承知いたしました」

閣下の水筒を受け取り、蓋部分を外します。そして手のひらに集中しました。製氷皿で作られる氷と同じくらいの大きさが一つ、わたくしの手のひらで作られます。

氷を水筒の中にいれました。

これを五回、繰り返しします。

蓋部分をしっかりと閉めて、閣下に返しました。

「お待たせしました」

「ありがとうございますよ。リーノ」

「さあさあ、他にも氷が欲しい奴はおらんか!!今ならたったの十デデンで、何でも凍らせるし、冷やすゾイ!!」

陛下の声が背中を押し、村人たちは我先にと一度家に帰ります。そしてお財布を持つ

て、氷を求めてやって来るのでした。

わたくしは、ひとまず村人たちに受け入れられたことに、一息つくのでした。

それから、わたくしの日常に力の制御訓練が追加されました。メタナイト卿には週二日ほど訓練の様子を見ていただき、アドバイスしてもらいます。

よくメイドの仕事中に、陛下と閣下に命令されて氷を作り出します。お二人の望む氷は、注文が細かいので訓練にうってつけです。

本日は、お昼のおやつにかき氷を出しました。

シヤリシヤリとした氷つぼいものではなく、ふわふわしている空気を含んだ特別なかき氷を、出しました。

作り方は簡単です。氷を作りだし、秘密の方法で削りだします。

陛下と閣下は大層喜び、しばらくの間おやつはふわふわかき氷に決まりました。

わたくしは、ふわふわかき氷を周りの人たちに作ってあげました。

親友たち、大臣一家とカービー、三人の戦士たちです。みんなから好評でよかった。メタナイト卿から、器用だと褒められました。

制御訓練の次は出力訓練に移ります。

宇宙船を凍らせて手に入れたいのなら、空まで届く大きな氷を作り出す必要がありません。

大きな氷は、週に一度だけ陛下に許可をいただき、城の庭の片隅に作り出します。

初めは海に作ろうかと思つたのですが、海の生態系を壊しかねないので止めました。

大きな氷を作り出す訓練は、ただ氷の山を作り出すものから変化していきます。大き

な氷の滑り台を作り、子供たちの遊び場を提供するようになりました。

冷たくて熱中症対策にいいと話題になりました。

そのため、村にも家の高さまである氷山を作りました。

氷山の周りでは、村人たちが集まり涼んでいるようです。

村の役に立てて嬉しいですね。

氷山を作るとたいへん疲れます。徐々に慣れて、連発できるように頑張つていきたい

と思いました。

「城の地下に新しくプールを造る。手を貸してほしい」

「いいですよ。お手伝いします」

ある日ワドルドゥ隊長に頼まれて、ワドルデイたちのプール造りを手伝いました。

学校などに置いてあるプールではなく、レジャー施設に置いてあるプールを、ワドル

ドウ隊長は考えたみたい。

一つ目は流れるプール、二つ目は引いては押す波のプール、三つ目は氷山の周りを泳げる冷たいプール。

わたくしが担当するのは三つ目のプールです。冷たいプールに体をつけてしまうと、お腹を壊してしまいます。なので底は浅く作ります。

足が完全に浸からない程の深さにしました。

これでお腹を壊す人はいないでしょう。

自分の担当した場所が完成したら、他の場所を手伝いにいきます。

ワドルドウ隊長に許可をいただき、その場の現場監督であるワドルデイさんに教えて貰いつつ作業しました。

朝から夕方まで、わたくしは地下にいました。

ですので夕方、地上に出たときアーニヤとランタンに捕まりました。

二人のメイド服は朝会ったときと比べると、よれよれになっていました。

「探しましたよー！」

「どこにも怪我してないわよね?！」

「は、はい。大丈夫です。……二人は疲れているみたいですね」
ランタンが困ったという風に眉を下げます。

「さつきまで羊が群れをなして、城に攻め込んできたのよ」

「大人しい羊がですか？」

「そうよ。羊に追いかけて回されて大変だったのよ」

アーニヤが村の方角を示す。

「今はもう村の方に帰ったので、騒動は収まりました。でも、羊たちが荒らした場所を掃除しなくちゃいけなくて」

「でも、今からは夕飯を準備しないと、陛下たちの食事の時間に間に合いません」

「はい。なので、夕飯作りが終わった後ですね。残業です……」

アーニヤの言葉を聞いたリーノは、くたくたな体でもうひと踏ん張り必要なことを理解した。

空を見上げる。

夕日が綺麗だった。

巨木の友人

朝食の席にて。

「ここ毎日には陛下のお飲み物に、氷を数個入れることが習慣となりました。

もう慣れてしまったのか、陛下は驚きも喜びもせず「うむ」と言って受け取ります。少々寂しいですね。村人たちは、能力を使ってみせるとまだ喜んでくれます。

「リーノ、どこかにいい森はないかゾイ？」

「どうして、そのようなことを聞かれるのですか？」

「そりゃあ我がカントリークラブを造るためゾイ……あつ」

「陛下!?!それ言っちゃダメ!!」

わたくしは頭に手を当てました。少し痛む気がします。

「陛下、ププブランドにゴルフクラブ場を造ることは諦めてください。森を破壊すれば、ウイスピーウツズが立ち上がります。また怪我をしますよ？」

「それでも諦めきれんゾイ!!!」

イヤイヤと顔を振る陛下。わたくしはたちメイドは、困ったと視線を合わせました。

「とにかく忠告はいたしました。どうか、お気をつけて」

その日の夜、すべての業務を終わらせてからフーム様の元に尋ねました。

夜の八時頃です。遅くになってしまいましたが、快くドアを開けてくださったメーム様には頭が上がりませんわ。

通されたリビングですぐに話を始めました。

「陛下がまたカントリークラブを造ろうとしています。どうか、森に住む方々に気をつけるようお伝えください」

「アデアの奴、またかよ」

フーム様もブン様も呆れたご様子です。わたくしは困ったように微笑みました。

そうそう、忘れるところでした。

「フーム様、ブン様。こちらのシフォンケーキをどうぞ。夜分遅くにお邪魔したお詫びですわ」

「わあい！ありがとうございます、リーノ！」

「さっそく食べようぜ！」

「ダメ。今から食べたら太るわ。これは明日の朝食に出します」

メーム様が音もなく現れて、シフォンケーキを抱えました。にっこり笑って、私の方

を見ます。

「お茶でも飲んでいかない？今から用意するところだったの」

「いえ、今日のところは帰ろうかと」

「あら、用事でもあるの？」

「そうではありませんが……」

「なら、遠慮しないで。たまには一緒に飲みたいわ」

「……ありがとうございます。では、お言葉に甘えて」

わたくしが氷を作れるようになって、初めてお茶によばれました。以前と同じように、接して下さって嬉しいです。

リビングに隣接した、ダイニングテーブルに座ります。温かい紅茶をいただきました。隣に座られたブン様が、紅茶の入ったカップをわたくしに差し出します。

「リーノ！氷ちょうだい！」

「はい。ただいま」

「こら！ブン！」

「このぐらい構いませんわ」

「へへ、だつてさ」

わたくしはブン様のカップの中に、三つの氷を作って入れて差し上げました。

それから数日後、夜に嵐が来ました。

嵐は一晩で去ってくれました。朝にはお日様が顔を出し、いつものププランドに戻りました。たいした被害はないように思えたのですが、東の森で何かあったようです。村の男性たちが確認しに東の森へ出かけました。

森。帰ってこない陛下と閣下。そして子供たち。

私の頭の中のピースが、さらに浮かびます。

カントリークラブ。

これらが線で繋がります。おそらく、わたくしの想像は正しいでしょう。嵐の中で戦闘があつたのならば、長い時間雨に打たれているはず。

わたくしは城へ帰り、お風呂を用意しました。

陛下たちは昼前に帰ってきました。

服も体もずいぶん濡れています。それに、どうやら愛用している車を壊してきたようです。東の森から城までは、かなり歩かなければなりません。

今すぐに眠ってしまいそうなお二方を引っ張り、大浴場に入っていたいただきます。付き添いには数人のワドルデイをお願いしました。これで安全でしょう。

お風呂からあがったら、昼食です。

食事はおにぎり二つです。もう寝てしまいそうなお二方のために、簡単に、すぐに食べられるものをご用意しました。

おにぎりの具は、お二方が好きな鮭と唐揚げを入れておきました。おいしそうに食べてくださって嬉しいですね。

食後、瞬く間に眠ってしまわれたので、ワドルデイたちにそれぞれの自室へ運んでもらいます。

おやすみなさい。陛下、閣下、良い夢を。

明日からまた、素うどんですわ。

仕事が全て終わり、わたくしたちはアーニヤの部屋に集まりました。彼女から詳しく話を聞かせてもらうためです。

アーニヤの部屋は、淡いオレンジ色を基調とした可愛らしい部屋ですわ。カーテンの裾にフリルを装飾したり、クッションカバーなど手作りの物を部屋中に置かれています。部屋は花のいい香りがしていて、大人の女性の部屋という感じですよ。

わたくしたちは、部屋の中央のテーブルを囲み紅茶を飲みます。今日はアーニヤが用意してくれました。とてもおいしいですよ。

ランタンが身を乗り出してアーニヤに質問しました。

「それで？ 婚約中の彼とはいい感じなの？」

「はい。リーノの件を知ったときははずっと傍にいてくれました。とても、優しい人です」
「アーニヤ！ 本当に、おめでどう！ わたくし、自分のことのように嬉しいです」

「ここには気を許した親友しかいません。歳を気にせずはしゃぎました。アーニヤは頬を染めて「ありがとうございます」と言います。

手の中のカップを弄りつつ、アーニヤは話し始めます。

「彼は、ブレイドさんは婚約後、すぐに私の家族に挨拶してくれました。それから、私を改めてメタナイト卿とソードナイトさんに紹介してくれたんです」

「ブレイドナイトさんのご家族の方は……？」

「大戦中に生き別れてしまったようで、今どうしているのかはわからないそうです。だから、今はメタナイト卿とソードナイトさんが家族だと説明してくれました」

「そう……」

戦士たちの思わぬ過去に触れ、わたくしとランタンは言葉を紡げませんでした。ふ、と考えます。

メタナイト卿のご家族は今どちらに在るのか。わたくしはまだ知りません。できるなら、後で教えてもらおうと思いました。

それから、アーニヤは微笑んで続きを話します。

「ブレイドさんね、私の家族の中にアーニヤが加わってくれたらすごく嬉しいって、言ってくれたんです。だから、私もブレイドさんと家族になれたらすごく嬉しいですって返しました。ブレイドさん、すごく喜んでくれて……嬉しかった」

「あら、もう結婚するって決めちゃったの?」

ふざけるようにランタンが言います。アーニヤはニコリと笑いました。

「それはまだですけれど、でも、そうなったらいいなとは思いますが」

「アーニヤ、見守っていますわ。いつでも相談に乗りますからね」

「ありがとうございます。リーノ、ランタン、二人がいてくれたら心強いです」

女子会の夜は更けていきます。

そろそろ寝ようか、時計の針が夜中をさしたとき、リーノはある事を思い出しました。

「最後に一つ、いいかしら?」

「何?どうかしたの?」

「アーニヤとランタンは、このままメイドの仕事を続けたい?」

二人はぱちぱちと数回瞬きをして、首を降りました。

わたくしはがくりと頭を下げます。

「ですよね……メイドって大変ですよものね……」

ここ数ヶ月の二人の働きぶりは、陛下と閣下も認めてくださるほど素晴らしいものです。しかし、勤務内容に問題があります。メイドの枠組みを超えた仕事の種類に、陛下と閣下の都合によつてコロコロと変わる勤務時間。これが会社だったら、まともではありません。

二人がメイドを辞めたくなくても仕方がないのです。

力のないわたくしの手を、ランタンが握ります。

「でもね、ここつてお給金がいいのよね」

反対の手はアーニヤが握りました。

「それに、ブレイドさんといつでも会えるんですよね」

顔を上げると、二人は悪戯が成功したような笑みを浮かべていました。

「仕事もアクシデントも魔獣もやばいところだけど、そんな場所にリーノを一人置いて

いくほど、私たち薄情じゃないわ」

「リーノは案外危なかつしいところがありますから、傍で力になれたら嬉しいですね」

「というわけで、陛下と閣下さえよろしければ……」

「今後とも、よろしくお願ひします」

「明日にでも、聞いてみますわ!!」

頭を下げる二人に、胸がいつぱいになった。二人の手を握り返す。

翌日、早朝。ようやく鶏が鳴き始めた頃、陛下の寝室に突撃した。

「陛下！起きてくださいまし！起きて、仕事を開始してください!!」

「なんゾイ……寝かせるゾイ……」

「アーニヤとランタンの、正社員への雇用のお話があります!!」

「はあ？なんのことゾイ……あやつらはもうとつくに正規のメイドだゾイ」

「まあ、知りませんでした。いつから正規雇用されたのでしょうか？」

「リーノが実家に帰つとる間に決めたゾイ。そういえば、まだ二人に連絡してなかった

ゾイ。後でするからワシの代わりに覚えておくゾイ」

「か、かしこまりました」

そして陛下はまたぐつすりとは眠り始めました。

わたくしはしばしその場から動けませんでした。あまりにも驚いていて陛下のお顔を見つめていたぐらいです。

その二時間後、陛下と閣下が朝食を食べる前。二人が正規雇用されていた話を、陛下からしていただきました。二人は少し目を見開いて、それから納得したように頷きます。深々と、陛下に向かって頭を下げました。

「陛下。城のメイドに恥じない働きをいたします」

「精一杯、勤めさせていただきます」

「うむ。励むが良いゾイ」

次は閣下に向かって、深々と頭を下げます。

「閣下、今後もよろしくお願いします」

「迷惑をかけないように、頑張ります」

「二人ともおめでとうでゲス。気張っていくでゲスよ」

後は大臣一家、ワドルドウ隊長、三戦士、ワドルデイたちに挨拶に行きましょう。皆さん、新しい仲間である二人を歓迎してくれたら嬉しいですね。

二人が正式にお城のメイドとなり、わたくしとは上司と部下の関係になりました。これまでメイド長（仮）でしたけれど、カツコカリカツコトジが取れてメイド長になったわけです。初めて、直属の部下を持ちます。たいへん緊張します。

昨日の内に城の中の挨拶回りが終わったので、今日はアーニヤとランタンの実家に挨拶と報告に行きます。

事前に、郵便局長であるモソさんにお手紙を配達してもらいました。早朝に手紙が届

いて、その日の昼に挨拶に向かうわけです。ご迷惑ではないかと心配しました。けれど二人が問題ないと言うので、その言葉を信じます。

手土産は、村では手に入りにくい高級菓子を取り寄せました。二人からアドバイスをもらって決めた物です。気に入っていただけると嬉しいですね。

わたくし、アーニヤ、ランタンの三人でメイド服を着て村の中を歩きます。とても目立ちます。こちらをチラチラと見られる方が多いですね。その中を慣れた足取りでわたくしたちは歩きます。

村の中央に到着したとき、村長さんとボルンさんがお話をされておりました。

遠くからでもご挨拶しておこう。そう思ったのですが、村長さんと目が合うなり手招きされました。わたくしたちは疑問に思いつつ、お二人に近づきます。

「あの、何か?」

「こつちじや、こつち」

「ほつほつほ、中で話そう」

「?」

わたくしたちは招かれるままに、警察署に入ります。

奥のデスクまで通されました。お二人は楽しそうににこにこし続けています。

「あの、これから用事があります。なので手短にお願いたしますわ」

「おお、それは悪いことをした。素早く終わらせよう。ボルン署長、あの紙を持ってきてくれ」

「これですな。どうぞ」

ボルンさんは一枚の紙を渡してくれました。一番近くにいたアーニヤがそれを受け取ります。

三人で紙を覗き込みました。

「何ですか?……きもだめし大会? 日付は、今度ですね」

「墓場に埋められた勇者の箱を君は発見できるか……」

「子供向けのお祭り、でしょうか?」

「今大至急でお化けを作つとるところじゃ。できれば手伝ってもらいたいんじやが、手は空いとるかの?」

「正直に申し上げますと、難しいですわ。もう少し早く知ることができれば、仕事の合間にお手伝いできました。けれど今からでは、ほんの少ししかお手伝いできません。お化け作りではなく、別の何かで参加できませんか?」

「そうじゃのう……じゃあ、参加賞を作ってもらおうかの」

村長さんがそう言うと、ボルンさんはそれだと言わんばかりに頷きました。

「それは名案ですな! 三人が作った物はどれも良いと評判です。子供たちにはお菓子を

配ってやれば、喜びます」

「では、大会が始まる前にお菓子を袋に詰めて持って来ますね」

「ああ、よろしく頼むよ。急な頼みを聞いてくれてありがとう。それと、きもだめし大会のことは内緒にしてくれ」

「わかりました。誰にも言いませんわ。では失礼します」

「呼び止めてすまんかったの。またの」

「じゃあな」

「失礼します。村長さん、ボルン署長」

「とびつきり美味しいお菓子を用意して持ってきますね」

わたくしたちは外に出ました。胸の中は、これから起こるイベントに緊張しています。同時にワクワクと胸が高鳴ります。

「楽しみですね」

「うまくいくといいわね」

「城に帰ったらさっそくお菓子の案を考えましょうね」

わたくしたちは、子供たちはどんなお菓子が食べたいか、話し合いながら歩き始めました。

きもだめし大会

村長さんとボルンさんから、きもだめし大会の参加賞として配るお菓子作りを依頼されました。

子供たちはどんなお菓子を食べたいかしら？わたくしとアーニヤとランタンは、話合っではお菓子を作ります。それらを試食して、また話し合います。毎日少量とはいえお菓子を食べ続けているので、体重が気になります。健康のため今の体重をキープしていたいですね……。

参加賞のお菓子の候補は、いくつかに絞られました。候補を絞っていく中でわたくしたちは、自分たち以外の人の意見も欲しい、と考えました。

そのため、三人の戦士たちに事情を説明して食事会を開きました。食事会の最後に、候補のお菓子をデザートとして出すためです。

食事会のメニューはグラタンとスープとパンです。前と同じ料理ですね。皆さんが、わたくしの好物であるグラタンを食べさせてあげたい、と考えてくれたようです。ありがたくて、嬉しかったです。

メインはデザートであるお菓子を食べていただき、意見を聞くことなのでグラタンはあまり多く作りませんでした。

グラタンはマカロニが入って、チーズをたっぷりかけたものが好きです。今日作るグラタンは亡き母に教えてもらったレシピを、わたくしなりにアレンジしたものになります。アレンジしたといっても、隠し味に味噌を加えただけですけれどね。

……そういえば、どこで隠し味に味噌を加えることを知ったのかしら。ずいぶん前から知っていたけれど、五歳になる前から知っているなんて変だわ。

しばし考えて、りかのおかげで知っていたんだと、考えつきました。そして、胸が切なさに締め付けられました。

「どうしたのだ？」

隣で器にグラタンをよそっていたメタナイト卿が、わたくしの変化に気づきました。正直に答えます。

「りかのことを思い出してしまって、胸が締め付けられるんです」

「少し、休むか？」

「いえ、それには及びません。少しづつ受け入れていきますから」

「わかった。無理はしないでくれ」

「はい。大丈夫ではないときは、助けを求めますわ」

互いの顔を見て強く頷きます。わたくしはどうも感情を溜め込んでしまみたいだから、感情が爆発する前に、誰かにつけ込まれる前に、心を整理する必要があります。……また日記でも書きましようか。今度は感情を素直に書き出しましょう。

食後のデザートは、大きめのお皿に数種類のお菓子を乗せたものになります。

グラニュー糖をまぶしたラスク、チュウリップに似せたクツキー、宇宙をイメージした透き通るような水羊羹、鉱石を模した美しい琥珀糖、一口サイズのマカロン。どれもわたくしたちの自信作です。

三人の戦士たちは、緑茶と共にゆつくりと食べ始めます。どれも美味しそうに召し上がってくれました。

最終的にメタナイト卿は琥珀糖、ソードナイトさんがラスク、ブレイドナイトさんがマカロンを選びました。

わたくしはチュウリップクツキー、アーニヤがラスク、ランタンがラスクでした。

票の獲得だけならばラスクで決まりです。ここからは、なぜ選んだお菓子がいいのか話し合います。

ラスクはよく作ります。村のみんなに配ったことも、食べてもらったこともありません。身近な美味しいお菓子と言えるでしょう。簡単には壊れないので、持ち運びにも向いています。

マカロンも、ラスクと同じことが言えます。最近だとお城に遊園地を造ったときですね。村人たちを招待し料理でもてなしたときに、マカロンを出しています。こうしたイベントでは、華やかで可愛らしいマカロンは必ず作ります。食べたことがある子もいるでしょう。

チューリップクッキーは大切なお客様向けのお菓子です。作るのは決して簡単ではありませんし、長く持ち運ぶと形が崩れてしまうかもしれません。見た目良し、味良し、珍しさ良しなのですが、今回のイベントには向いていないかもしれません。

琥珀糖は各家庭でも作っていただけのお菓子です。しかし、鉱石のように美しい物だと作るのは中々難しいです。なので、美しく作ることができれば、喜んで受け取ってもらえるでしょう。それに持ち運んでも崩れたりしません。

わたくしはラスクと琥珀糖を見比べました。

「ラスクと琥珀糖と一緒に配るのはどうでしょうか？」

「いいんじゃないかしら？子供たちは喜ぶわ」

「賛成です。子供たちは怖い思いを抑えて勇気を出すのですから、参加賞は少しでも豪華にしてもいいかと」

ランタンとアーニヤの言葉を受けて、三人の戦士も賛成します。

多くの賛成をもらったので、ラスクと琥珀糖を配ることにしました。

子供たちに喜ばれるといいですね。

きもだめし大会当日。夜の草原を、わたくし、アーニヤ、ランタンと三人固まって歩きます。

配る参加賞は大人にも渡されるらしいので、かなり多めに作って持ち寄りました。

会場となる森の入り口付近には、すでに三十人近い人々が集まっています。そのうち子供は十名ほどです。フォーム様、ブン様、カービイもいました。わたくしは彼女らに近づいて、挨拶をします。

「こんばんは。フォーム様、ブン様、カービイ。月がよく見えますね」

「あら、こんばんは。リーノたちもきもだめし大会に参加するの?」

「いいえ。しませんわ。わたくしたちは、参加賞を作ったのでそれを持って来たのです」
「参加賞? 見せて!」

「どうぞで」

持っていたエコバッグの口を開きました。ブン様は覗き込み、喜びと驚きの声を上げます。

「すっげー! ラスクと……この宝石みたいななんだ?」

「鉱石を模した琥珀糖です。甘くておいしいお菓子です」

フォーム様とカービィも、周りにいた子供たちもお菓子を覗き込みます。皆さん、綺麗だとおいしそうだと褒めてくれます。

「わあ、綺麗！どちらか貰えるのね」

「二つとも差し上げます。なので、頑張つて参加してくださいね」

子供たちから歓声が上がりました。どうやらやる気を出してくれたようです。作つてきた甲斐があります。

はしやぐ子供たちにレン村長さんが声をかけます。

「おーい、子供たちや。そろそろ初めるぞ」

「順番に並んでくれ」

ボルンさんの指示通りに子供たちは一列に並びました。一番はホツへです。

ホツへに松明が渡されます。

「では、真つ直ぐ歩いて森を抜けなさい。墓場の中に宝があるからな」

「はーいー！」

ホツへは元氣よく返事をして、森の方を向きました。そして一度ぶると体を震わせ、ゆっくり森の中へ歩き出します。

わたくしは関心しました。

「きもだめしでも、他のことでもそうですが、一番始めにやるといのは勇氣ある行動ですね」

「そうよねホツへくん凄いわ」

「参加賞のお菓子、渡すのが楽しみですね」

のほほん構えていると、子供の叫び声が森から聞こえました。わたくしたちは驚いて心臓が跳ね上がります。

大慌てでホツへが戻ってきました。泣いています。よほど怖い思いをしたんですね。

村長さんが次の方を決めている間に、ホツへの傍へ近づきました。

「ホツへくん、大丈夫ですか？怪我をしましたか？」

「リーノさん……怖かったよ」

「もう怖いものはありません。安心してください。さあ、参加賞のお菓子です。こちらを食べて一緒に皆さんの帰りを待ちましょうね」

「うん。ありがとう」

ホツへを連れて大人たちの輪の中に戻ります。ラスクと琥珀糖が入った袋をホツへに渡しました。

彼は包みを開けて、ラスクから食べ始めます。サクサクと音が鳴ります。

「おいしい。でも喉渇く……」

「すみません。お茶は持ってきていないので、ラスクを食べるのは一枚だけにしておきませんか？」

「我慢するよ……」

ホツへは泣き止み、お菓子の袋を大事そうに抱えます。

次はフォーム様、ブン様、カービィの組です。フォーム様が松明を持って先頭を歩き出しました。

ホツへが帰ってきた頃と同じ時刻、フォーム様とブン様の叫び声が聞こえてきました。少し待っても三人は帰ってきません。

村長さんを筆頭に大人たちは驚いているようです。

「いやはや、あの仕掛けに驚いても帰って来ないとは、さすがフォーム様じゃな」

「次は大人からも参加しましょうか。誰から行きますか？」

「ハナ、どうだい？」

「ええ、行くわ。あなた」

村長夫婦が身を寄せ合って歩き始めました。お化けなど、怖がっている様子はありません。仲睦まじい、その姿をわたくしはひっそり、羨ましく思いました。

村長夫婦はホツへと同じ時間に帰ってきました。レン村長は気絶したそうです。ハ

ナさんは呆れていましたが、横顔がどことなく楽しそうでした。

森へは、ボルンさん、イローとハニー、カワサキの順番で入っていきます。

カワサキが森に入った後、ボルンさんの悲鳴が聞こえてきました。それから、イローとハニーが悲鳴が聞こえてきました。三人は距離をおいて森に入りましたが、同じ時刻に帰ってきました。

ボルンさんが、本物の幽霊が出たとみんなに説明します。

とても信じられませんでした。困惑していると、遅れてカワサキも帰ってきました。彼も幽霊が出たと叫びました。

私たちと一緒に残っていたサトさんが言います。

「そういえば、聞いたことがあるわ。森には魔物が住んでいるって」

「でしたら、すぐに先頭を歩くフォーム様たちに知らせなくちゃ」

誰かが言います。

「カービーがついているから平気さ。それよりも早く逃げよう」

わたくしは納得できませんでした。アーニヤとランタンに向き直り、意見を求めます。

「二人はどう思いますか？」

「私は逃げてもいいと思います。助けを呼びに行きましょう」

「ここに残る方が危険よ。一旦出直すわよ」

「わかりました……」

フォーム様たちを見捨てるようで心苦しいですが、仕方ありません。メタナイト卿たちを呼んで来ましよう。

村人たちと一緒に走り出します。

夜、暗闇の中、男たちが掲げる松明の明かりを頼りに進みます。

あと半分の距離で村に到着する頃、遠くできらりと光る何かを見つけました。立ち止まって目を細めます。

——メタナイト卿です。どうやら、仮面が松明に反射して光ったようです。

わたくしはアーニャとランタンに「少し離れます」と声をかけてから返事を待たず、メタナイト卿の所へ走りしました。

「メタナイト卿！」

「リーノ……よくこちらに気づいたな」

「力がついたただけではなく、視力もよくなったみたいです。あの、頼みたいことがあります」

「聞こう」

「この先の森でお化けが出ました。しかし、森の中にはまだフォーム様、ブン様、カービィ

がいます。どうか見つけて、お城に連れ帰っていただけませんか」

「わかった。三人を探しに行くとしよう。そなたは先に城へ戻っている」

「わかりました。ありがとうございます。お気をつけて、メタナイト卿」

「そなたも、夜道には気をつけて……」

わたくしは深く頭を下げました。メタナイト卿が走り去る後ろ姿を見送り、急いでアーニヤとランタンのいる場所へ走りました。

村の入り口で、きもだめし大会に参加した村人たちに参加賞のお菓子を配ったあと、わたくしたちはお城へと帰ります。

お城についた所で、通り雨がきました。それは激しい雨で、外にいる子供たち、彼らを探してくれているメタナイト卿のことが心配になりました。陛下と閣下も戻ってきていないようです。

わたくしは不安でした。だから、寝ずに帰りを待つことにしました。

アーニヤとランタンには内緒です。メイド服から着替えて、私服のワンピースの上に薄手の夏用ポンチョを羽織ります。

何をなされているのか知らない陛下と閣下はともかく、メタナイト卿と子供たちはすぐに帰ってくると思っていました。

一時間たって雨が止んでも、帰ってきません。

心配です。長期戦を覚悟して、コーヒーを作り水筒の中に入れます。夜番のワドルデイたちの邪魔にならないように城壁に上りました。子供たちとメタナイト卿が入っていった森の方角を眺めます。

激しい雨の後とは思えないくらい、優しい風に頬を撫でられて。ずっと森の方を見ていました。

さらに一時間経ちましたが、まだ誰も帰ってきません。

わたくしの隣に、どなたかがやって来ました。

「リーノ」

「ワドルドウ隊長。夜分遅くまで、お疲れ様です」

「うむ。私のことはいいのだ。リーノ、この地が常夏とはいえ、昼間より夜の方が風が冷たい。部屋に戻って休みなさい」

わたくしは首を振ります。

「申し訳ありません。邪魔ならば別の場所に行きます。そうでないなら、どうか、ここで帰りを待たせてください。わたくしのせいで、メタナイト卿が危ない目にあっているかもしれないのです。ゆっくり眠ることはできません」

「別に邪魔ではないが……。むう、リーノは頑固なところがあるからな。仕方ない。風

邪に気をつけるのだぞ。何かあれば近くのワドルデイを頼りなさい」

「ありがとうございます。隊長」

正式に許可をいただき、わたくしは城壁に立ち続けました。

足が痛くなっても、月がどれだけ傾いても。わたくしは大切な人たちの帰りを待ちました。

心配でした。早く、一秒でも早く顔が見たかった。

メタナイト卿も、アーニヤやランタンも同じ気持ちだったのでしようか？

わたくしが出かけて、ナイトメアに捕まってしまい帰ってこなかった時間を、こんな風に首を長くして待っていてくれたでしょうか。

わたくしがいない間に星が落ちてきたと聞きました。その対処で手がいつぱいだったはず。わたくしのは一旦考えないようにしていたかもしれないですね。

今、わたくしは待つ以外にしなければならぬことはありません。ただひたすら、森の方角からメタナイト卿たちの姿が見えることを願います。

途中、持参したコーヒーときもだめし大会の参加賞のお菓子を食べつつ、また待ちます。

やっと、空の向こう側から太陽が顔を出しました。

大地が明るく照らされていきます。その中を歩く人影がありました。それらは真つ

直ぐこちらに向かつてきます。

わたくしは大声を上げました。

「誰か帰つてきました！橋を下ろしてください!!」

橋は大きな音をたてて下されます。わたくしは急いで、城壁を下りて、橋の上に立ちました。

城壁の上から見えた影は、よく見ると四人の影が一つになったものでした。

フォーム様と、カービィとブン様と、メタナイト卿です。

はつと息を吐き出しました。

わたくしは四人のもとに駆け寄ります。

「お、お帰りなさい。よくぞご無事で……」

「ただいま。リーノ、心配かけちゃったわね」

「色々あつてさ、もうくたびれたよ。帰つて寝る」

「はい、はい。おうちでメーム様、パーム様がお待ちですよ」

子供たちはリーノに笑顔を見せて、ゆっくりと歩いていきます。

わたくしとメタナイト卿が、その場に残りました。

「リーノ。陛下とエスカルゴン殿が、森を抜けた墓場の奥の焼けた建物で寝ている。ワドルドゥ隊長に頼んで回収してもらおうといい」

「わかりました。隊長には、そのように伝えておきます。メタナイト卿。遅れましたが、お帰りなさい」

「ただいま」

わたくしたちの視線は交わり、心を相手に届かせました。
手を繋ぐと、身体中から力が抜けるようでした。

ワドルディ

わたくしの自室。

朝からクツキーや、鉱石に似た美しい琥珀糖を作ります。部屋には、わたくしだけじゃなくてアーニヤとランタンもお菓子作りをしています。

手を動かしつつ、わたくしは二人に悩みを打ち明けました。

「メタナイト卿に先日のお礼がしたいのですが、何をお返しすればいいのか悩んでまして。いい案はありませんか？」

ランタンが赤裸々に、けれど真面目に言いました。

「体で払えば？」

「ランタン！」

わたくしが顔を赤くして声を荒げると、色つぼい彼女は余裕を含んだ声で笑います。

「何が恥ずかしいの？そういう関係なら、それも選択肢に入るでしょ？あとはそうね、やっぱり意味じゃなくてマッサージしてあげれば喜ぶんじゃない？」

「そう、ですね。いつも忙しそうだし、差し入れと肩叩きとかいいかもかもしれません。

アーニヤはどう思う?……アーニヤ?」

赤面して何か呟いています。心配になったので肩を軽く揺すりました。

気がついたアーニヤは、目を大きくさせて私を見ました。

「はい!何でしょう?」

「あの、さっきの話は聞いていましたか?」

「あ、いえ……別のことが気になって何も聞こえていませんでした」

「何が気になっているんですか?」

「……秘密です」

アーニヤは両手で顔を隠してしまいました。

そこにチンと、オーブンのタイマーが鳴ります。中にはシュークリーム生地が焼きあがっています。すぐには取り出さず、少々の間オーブンの中に入れて置きます。ランタンが電子タイマーを八分にセットしてくれます。

ランタンは、ごく自然に質問してきましました。

「ねえ、リーノ。関係を深くするときって、どう判断したの?」

「……え」

わたくしはすぐに答えられませんでした。だって、わたくしの場合告白と同時にしたから。ですが、気持ちは通じ合っていました。付き合うまで恋人同士ではありません

でしたが、約十年近く仕事仲間として過ごしたのです。何より、りかの……前世の記憶のおかげでメタナイト卿のことは一方的に知っていました。だから、あのとき身を任せられたのです。

ランタンには、わたくしの経験ではなく考えを話しました。

「……わたくしの場合、相手をよく知ってもっと好きになつてから、関係を深くします」

「それは、なぜですか？」

「本で知ったのですが、女性は相手を好きであればあるほど、痛くなくなるんです。なので、気持ちが進むまで待ちますわ。この情報を相手と共有するかどうかは、それぞれの関係次第でしょう。わたくしは恥ずかしくてできませんでした」

「気持ちは見えないんだから、量るなんてできないでしょ。どうやってもっと好きになつたことを自覚したの？」

「……抱いて欲しいと思つたら、でしょうか」

聞いていた二人の顔に熱が集まるのが見えます。わたくしの顔も熱かったです。

ちょうど電子タイマーが鳴りました。

空気を入れ替えるために、二人に質問します。

「お昼ご飯は、食べていきますよね？」

二人は黙って領きました。

お昼過ぎ、約束の時間ちやうどに到着するよう廊下を歩きます。

先頭を歩いていたらランタンが、大臣一家の家の扉を軽くノックしました。

「はあい」

この声はメーム様ですね。わたくしはメーム様が扉を開けてくださると思ひました。大臣家への扉が音を立てず開かれます。

美しいご婦人が顔を見せてくださいました。

「いらつしやい、三人とも。さあ中に入つて」

「お邪魔します」と、三人揃つて言いました。

メーム様の隣りを抜け、すぐ見えるリビングの方に誰もいなかったため、ダイニングテーブルの方に顔を向けます。フォーム様、ブン様、カービイが座っていました。

「ほよー」

挨拶を交わす間もなく、カービイがわたくしの所にやって来ました。飛び跳ね、期待に満ちた眼差しを向けてきます。

そんなカービイを見て、わたくしたちは笑みをこぼしました。

「カービーだったら、待ちきれないのね」

「オレも待てない！リーノ、早く作ろうぜ」

「かしこまりました。すぐに準備いたします。メーム様、ホイップなどの準備はできておりますでしょうか？」

「ええ、買ってきてあるわ！すぐに始められるわよ」

「では、ただちに準備します」

今から、わたくしたちはお菓子の家を作ります。きもだめし大会で優勝したフォーム様たちをお祝いするためですわ。

テーマは輝くお菓子の家。クッキーやシュークリームで作られたお菓子の家に、鉱石に見立てた琥珀糖を飾ります。きっと綺麗でおいしい家が作れるでしょう。

参加者はきもだめし大会優勝者のフォーム様、ブン様、カービー。ご家族のメーム様、パーム様。計五名で作ります。

主役は子供たちです。どんな家を作られるのか楽しみですね。

五人が座ってゆつたりと食事ができるダイニングテーブルは、あと三人も大人が増えても窮屈にはなりませんでした。

メーム様からお借りしたカートに、お菓子の家の材料を並べます。五人には着席していただき、わたくしたちメイドは補助に専念します。

「では、始めます。素敵なお家ができますように」

わたくしの言葉が合図となつて、五人は材料に手を伸ばしました。

「アーニヤ、土台とつて！」

「はい、ブン様。こちらのクツキーがしつとりとしていてオススメです」

「じゃあそれ、ちようだい」

「ブン！自分で取りなさい！」

「ふふ、今日は補助としてここにおりますから、何なりと申し付けください」

「でも、悪いわ。今日はお休みなんですよ？」

申し訳なきように遠慮するフォームに、ランタンが材料が乗つたお盆を持ってきた。

「そうですね。しかし、こんな日も悪くありません。どうぞ、フォーム様」

「そう？ありがとうございます、ランタン」

アーニヤとブン様、ランタンとフォーム様の組み合わせで頑張っているようです。

ならば、わたくしはカービィのお手伝いをしましょう。

材料をちよつとずつ並べるカービィに声をかけます。

「ほよ、ほーよう」

「まだ食べちゃダメですよ、カービィ。まずは家が崩れないように作りましょう。お菓子の中身は何がいいですか？」

「ぼよ?」

「うーん、ケーキは好きですか?」

「けーき!けーき!」

「では、ホールケーキの上に小さなお菓子の家を作りましょうね」

わたくしは、ケーキとお菓子の家の材料をまとめてお盆に乗せて、カービィの所に持ってきました。

小さな戦士に確認を取りつつ、お菓子の家の土台となるイチゴのホールケーキを完成させます。

「こちらの様子を見ていたブン様が「ずるい!」と言いました。

「自分で作らなきや意味ないじゃん!」

「ブン!カービィはまだ赤ちゃんなのよ!」

「あ、すみません。ホール部分は皆様で分けて食べると思いましたが、少々出しやばつてもいいかと思っただけです」

「それならいいぜ!」

「もう、現金ね」

「リーノのケーキ、おいしそうだね」

「早く食べたいね、メーム」

そんなやりとりをしつつ、カービィは自力でお菓子の家を完成させます。少し歪んだラインはご愛嬌。心がこもったお菓子の家ケーキができました。

ホールケーキの上に乗った、歪で小さな家。厚みがあるクツキーを三段重ねて、ずれないようにホワイトチョコでくつつけました。壁と屋根は薄いクツキーで覆い、これもホワイトチョコでくつつけて落ちないようにします。屋根の飾りにカラフルなコーティングがされたチョコを使い、クリームで付けました。薄いクツキーをドアに見立て飾りつけ、お菓子の家と合体させれば出来上がりです。

カービィは今すぐに吸い込もうとしましたが、わたくしとフォーム様で阻止しました。

お菓子の家作りはお終いとなり、まずはそれぞれ写真を撮ります。次に切り分けて試食です。

「ねえ、リーノ。メタナイト卿にお菓子の家を作ってあげたら？」

「それ賛成！リーノが作って、渡せばいいんだ！」

「……喜んでくださるでしょうか？」

わたくしは、この場でも「メタナイト卿への返礼は何がいいか？」と案を募りました。きもだめし大会のときにフォーム様たちを助けてくださったことは、すでに伝えてあります。

フーム様は、お菓子の家。メーム様とパーム様は、キッチンからワインを持ってきてくれました。

ワインは、渡せばきつと喜んでくれるでしょう。けれど、お菓子の家は……どうでしょうか。甘い物も好んで食べておられるようですが、こんなにくさんの甘い物を渡したら胸焼けになりませんか？

「ソードとブレイドの分も含めてあげればいいじゃん。そしたら、少ない量でも胸焼けしないだろ」

「確かに、そうですね」

「何より、恋人であるあなたの心がこもった贈り物よ。無下にはしないわ」

「それは心配していませんわ。わたくしは、いらぬ物を贈ってしまうことが怖いのです」

「いらなければ持つて帰ってくればいいよ。カービーが食べてくれる」

パーム様のお言葉にわたくしは微笑んだ。それならば、作った物は無駄にならなくて済む。

「それはいい案ですね。早速作りたいので、場所をお借りしてもいいですか？」

「いいわよ。とっておきの物を作っちゃいなさい」

「ありがとうございます。メーム様」

あまり大きな物を作っても迷惑かと考えて、一人用のケーキにお菓子の家に乗せたサイズを作りました。それを透明な箱にしまい、紙袋の中に入れます。ワインが入った紙袋と一緒に持ち上げます。

「では行つて参ります。お菓子は先に食べてください」

各々はそれぞれ「行つてらっしゃい」とわたくしに声をかけてくれました。

廊下に出た所で、フォーム様呼び止められます。

「リーノ、これ。今日、試してみたらカービイが吐き出したの」

差し出されたそれは、間違いなくあの青バラのコンパクトでした。

もう帰つて来ないと思つていた大切な物を見て、わたくしは目を滲ませました。丁重に受け取ります。

「ありがとうございます！よかった、諦めていたんです！カービイは吸い込んだ物をあまり吐き出さないから、このコンパクトも返つてこないかとばかり……」

「みんなの前だとコンパクトについて質問攻めにあつちやうでしょ？……すぐに返せなくてごめんなさいね」

「お気遣い感謝します。本当にありがとうございます。フォーム様」

「いいの。いつも良くしてくれているお礼よーこちらこそ、ありがとうーじゃあね」
フォーム様はすぐに大臣家の中へ戻られました。

わたくしは、コンパクトをしばし抱きしめて、落とさないようにポケットにしまいました。

長い廊下を歩いて、三人の戦士たちが集まるメタナイト卿のお部屋に到着します。
軽く身だしなみを整えていると、扉が開きました。ブレイドナイトさんが姿を見せま
す。

「こんにちは」

「こんにちは、メタナイト卿にお会いしたいのですが、今いらつしやいますか？」
「卿なら中にいらつしやいますよ。どうぞ」

「すみません。話したいことがありますので、外に呼んでいただけませんか？」
「わかりました」

ブレイドナイトさんが部屋の中に入って二分後、メタナイト卿が出て来られました。

「リーノ」

「メタナイト卿」

微笑んで名前を呼ぶと、微笑み返してもらえた気がしました。

「うむ。やはり、こちらの方がいいな」

「そうですか？では、できるだけお名前を呼ばせていただきますね」

「よろしく頼む」

メタナイト卿は「メタナイト卿」と呼ばれた方がしつくりくるようです。

わたくしは名前でも愛称でも、どちらで呼ばれても構いませんわ。

「それで、どうしたのだ？」

「一つはこれを贈りに来ました。きもだめし大会で、フォーム様たちを助けてくださったお礼です」

「気にしなくて良いのだぞ？子供たちを助けるのは当たり前のことだ」

「それでも、お礼がしなかったのです。喜んでいただけると良いのですが……」

メタナイト卿に紙袋を二つ渡します。青い戦士は紙袋を受け取ってくれました。

「中には何が入っている？」

「お菓子の家とワインです」

「ワインはわかるが、お菓子の家？」

「そうです。今日はアーニヤたちと大臣一家の皆様で、お菓子の家を作っていたんです。きもだめし大会のお礼に何がいかと皆様に相談したら、お菓子の家を提案されました。作りました。……あの、迷惑でしたら持ち帰ってカービィに食べてもらいます。な

ので、遠慮せずに言ってくださいね」

「ただいさ。お菓子の家は食べたことがない。初めて貰った」

「そうなのですね。今日作りましたお菓子の家は、甘いお菓子なので、コーヒーと一緒に召し上がってくださいね」

「わかった。今から楽しみだ。ありがとう」

食べていただけるみたいで安心しました。わたくしは力を抜いて顔を緩ませます。そんなわたくしを見てメタナイト卿は纏う雰囲気や和やかなものになりました。

最後に、ポケットからコンパクトを取り出します。

「最後に、こちらをご覧ください」

「これは……!!返ってきたのだな」

「はい。フォーム様が今朝試してくださいました。先ほど渡されました」

「リーノ、良かったな」

「はい!とつても、嬉しいですよ」

涙が滲む目元を、メタナイト卿が優しく拭ってくださいました。その手を取って、両手で握りかえます。

「ごめんなさい、メタナイト卿。もう二度と失くしません」

「これ一つであなたの命が救えるなら、何も問題はない。大切にしてくださいありがとうございます」

わたくしたちは、確かにお互いに微笑んでいました。

「夜になったら、そなたの部屋に行く」

メタナイト卿は、こつそりとそう耳打ちされました。耳から直に、その愛しい声を注がれて鼓動がすごく速くなりました。

わたくしはただ、頷くことしかできませんでしたわ。頬が熱くなり、頭がぼんやりします。

いつの間にか、メタナイト卿は二つの紙袋を部屋に置いてきました。

「ブレイドたちには伝えてきた。では、行こうか」

「どちらにでしようか？」

「そなたが今から行くところへ送ろう」

「よろしいのですか？お邪魔ではありませんか？」

「いいんだ。私がそうしたい」

「かしこまりました。ありがとうございます。では、大臣家に戻りたいです」

「わかった。行こう」

わたくしたちは並んで、城の廊下を歩きます。

隣りで鳴り響く金属音を、いつまでも聞いていたい。そんな気持ちになりました。

大臣家でどんな事をしていたのか、そんな話をしながら歩きます。わたくしが話し、メタナイト卿が主に聞き役にまわりました。時々投げられる質問に、興味を持つていただけののだと嬉しく思い、口がよく動きました。

やがて、村が良く見える方角に造られたベランダに、陛下がいらつしやるのが見えました。わたくしはご挨拶しようと立ち止まります。

「メタナイト卿、少しお時間をいただけますか？」

「——かまわない」

わたくしが「ありがとうございます」と言うと、戦士は「礼を言われるほどではない」と仰られました。

わたくしが先頭を歩き、メタナイト卿が後ろに続いて陛下の前に出ました。

「陛下、ご機嫌麗し……くないようですね」

「その通りだゾイ」

通気性の良い素材で作られた、プールサイドに置かれそうな椅子に陛下は座っておられます。陛下とわたくしたちの間には、魔獣デリバリーサービスのカタログが左右に半分ずつ山積みになされていました。

深くため息を吐かれる陛下の姿は、おいたわしくて。わたくしは心配になりました。

「どうしたのでしょうか？何かありましたか？」

「さつきからいくら待ってもお茶がこんのだゾイ！」

わたくしは一瞬、それだけと、思いました。けれど、この常夏のププランドで真昼の空の下、何も飲まないでいることはまずいでしょう。わたくしは陛下のことが改めて心配になりました。

「わたくしで良ければ冷たいスポーツドリンクをお持ちいたします」

「休みの日なのに、いいのかゾイ？デート中なのにな？」

「もう、陛下だったら。デートではありませんわ。とにかく、陛下のお体が心配なので、ご用意いたしますね。では、失礼いたします」

深く丁寧なお辞儀をしてから、わたくしたちは城の廊下に戻りました。

ベランダから充分に離れた場所で、メタナイト卿とお話しします。

「すみません。大臣家に戻る前に用事が一つできました。ここまで送っていただけただけら、充分ですわ」

「そなたを送りたい気持ちもあるが、コンパクトの件でフームに礼を伝えたいのだ」

「そうでしたか。では、寄り道しますけれどもよろしいでしょうか？」

「ああ、素早く終わらせよう」

「では、急ぎませうか」

わたくしたちは早足で、ベランダから最も近い厨房に向かいました。

陛下にスポーツドリンクを差し入れ大臣家に帰ってこられたのは、三十分ほど時間がたった後でした。

メタナイト卿はパーム大臣にワインのお礼を、フーム様にコンパクトのお礼を言って去りました。

「リーノ、顔赤いな。どうかしたの？」

「なんでもありませんわ。ブン様。体調に問題はありません」

「ならいいけど？」

「ところでリーノ、プレゼント受け取ってもらえて良かったわね」

「はい。皆様のおかげです。ありがとうございます」

お皿に集められたわたくしの分のお菓子をいただきつつ、欲しがるカービィにも分けあげました。

その日は大臣家で夕食をいただきました。

夜のことは……言うまでもありませんね。

大切な方たちと会い、時間を共有し、楽しめた日です。とても素敵な一日でしたわ。

翌日。朝から陛下に呼び出されました。閣下とわたくしは陛下のお側について、ワド

ルデイを数えます。

主に閣下が一人ずつワドルデイを数えます。しかし、それでは非効率なので進言いたしました。

「閣下、簡単にワドルデイたちを数える方法を思いつきましたの。聞いていただけますか？」

「なんでゲスか？」

閣下は数える手を止めて、陛下と共にこちらに注目されました。

わたくしはゆっくりと話し始めます。

「まず、一階から各部屋ごとに十人のワドルデイを待機させます」

「ふんふん」

「そして部屋の前に一人ずつワドルデイを待機させます。そのワドルデイに部屋には十人のワドルデイがいるのか、ワドルドウ隊長に確認させます。あとは正の字でも紙に書いてカウントすれば良いかと」

「あくなるほど、それなら動いているワドルデイを数えるより、楽でいいでゲスな！」

「早速するゾ……」

「お待ちください。今はもう昼前、ワドルデイたちには昼食を食べてもらってから行動してもらいましょう」

「別に待たせればいいゾイ」

「わたくしたちも、お昼ご飯を食べなければならぬと思うのです」

それならば、と陛下たちは納得してくださいました。

ワドルドウ隊長に話を通し、昼からワドルディたちを数えます。

順調に数えて行きましたが、兵士の詰所では本日休みであるワドルディたちが休憩していました。隊長がざつと数えて「たくさんです！」と報告されます。それでは数えられないので、わたくしがざつと数えます。

「閣下、中にはおよそ五十人以上いました。なので、五十を足しておきます」

「細かく数えんでいいでゲスか？」

「時間が迫っておりますので、多少は仕方ないかと。これ以上は夕飯に間に合わないかもしれないから」

「ほんじゃ、仕方ないでゲスな」

ワドルディの数は膨大でしたが、一応は数え終えました。ちよūdō夕飯時でしたので、集計はわたくしがしておくことになりました。閣下と陛下はお食事の時間です。

食事はちよūdō良く、アーニヤとランタンが準備してくれていました。二人には感謝しきれません。

「ありがとうございます。アーニヤ、ランタン。もう食事の準備はバツチリですね」

「これぐらいはどうつてことありません。どうぞ、お任せください」

言葉は丁寧ですが、ランタンはこつそりウインクを返してくれました。アーニヤもここにこしています。私たちはこつそり笑い合いました。

陛下たちが食べているテーブルの一部をお借りして、集計を始めます。正の字はわたくし書いたので、集計は簡単でした。

部屋の中にいたワドルデイが十人、外にいた一人を足して十一人。つまり、正の字は一つで五十五人のワドルデイを意味します。

電卓を打ちつつ計算すると、一枚の紙の両面で五百ほど数えられました。この紙は方眼紙で、一つのマス目に正の字を記入しています。それが二十枚……。

わたくしは途方にくれました。そんなに多くいたとは思わなかったのです。

陛下が食後のアイスに舌鼓を打ちつつ、手を止めたわたくしに声をかけました。

「終わったかゾイ？ならば、はよう結果を言うゾイ」

「かしこまりました。では、報告させていただきます。結果は一万人以上です」
「一万……!!？」

陛下は顎を外し、閣下は椅子から滑り落ちました。

聞いていたアーニヤとランタンも手を止めて聞き入っています。

「アーニヤ、ランタン。体を動かしましょう」

「失礼いたしました」

「失礼いたしました。メイド長」

二人は陛下と閣下の傍に、それぞれアイスを飾る材料が置かれます。カットされた果物や、カラフルなアザラン、小粒のチョコ、シュークリームなどです。

陛下たちはそれらに一瞬心を奪われて——頭を振ります！そんな場合ではない、と。「なんで、そんなに兵士がおるゾイ！と言うことはゾイ……食費も給料も維持費もめちやくちや掛かつてるゾイ!？」

「その通りでゲスな」

たしか、ワドルディたちに給金が支払われたことはないはずですが。しかし、食費を含めた生活費が諸々かかっているのは事実なので、何も言いませんでした。

陛下は立ち上がります。

「こうなれば、ワドルディたちをリストラゾイ!」

「はあー!? 掃除やら城の見張りとか、どうするでゲスか!？」

「お前たちがおるゾイ。デハハハハハ」

「それはいけませんわ。陛下」

わたくしは思わず、陛下を止めました。

「この広いお城を、わたくしただけでカバーするのは無理でございます。毎日働いて

も、今のよう——ワドルディたちが居て働いてくれるようにはいきませんわ」

「では、助っ人を呼ぶゾイ」

「助っ人、でございますか？」

「明日を楽しみにしているゾイ！」

そう言つて陛下は酷く楽しそうに笑われました。

夕食の後、厨房でわたくしたち三人はおしやべりします。そこに上司と部下の關係はなく、氣樂に友人と話す時間が流れていました。

「ねえ、リーノ。陛下が言つていた助っ人つて誰のことかしら」

「さあ……陛下の交友關係はほとんど把握していますが、一体誰のことか検討がつきません」

「リーノでもわからないなら、城や村の人ではないことになりませぬ」

わたくしたち三人は首を傾げて考えましたが、答えは出ませんでした。

次の日の早朝。朝食後に陛下に呼び出されて、玉座の間へとお供しました。

陛下はすぐに、デリバリーサービスを起動します。天井近い壁が開き、巨大なモニターが出てきました。そしてカスタマーサービスの姿が映し出されます。

わたくしはできるだけ、陛下の影に隠れました。

「カスタマーサーブिस！ワシの身の回りを世話する魔獣を寄越すゾイ」

『身の回り……フム……では、こちらなどいかがでしょう！』

バリバリと低い振動音が鳴って、機械が動きまわります。次の瞬間には、正方形の体に足がキヤタピラのロボが機械の上にはいました。

『ホームヘルパーロボです！』

「おお！」

「なんと！」

「あら、まあ」

なんていかにもロボっぽい見た目をしているのでしょうか。あえて無害に見える作りが、なんとも怪しく思えました。

ロボはすぐに動き出します。天井を向くの面からほうきを取り出し、あっという間に廊下へ走り出します。

わたくしたちは慌ててその後を追いますが、ロボの後ろ姿は遥か彼方へ。なので、ベランダに出て、外の様子を見てみます。

ロボはこの一瞬で一階に降りていました。そして庭で働くワドルディたちの仕事を、代わりにこなして行きます。

洗濯中ならば、洗濯物を持ち上げロボの体の中で洗います。

掃除中ならほうきを持って掃除します。

短時間で二つの仕事を同時にこなすロボは、まさしく優秀なのでしょう。ですが……。

ちらりと廊下の方を、わたくしは見ました。廊下の端、埃が少々残っています。ワドルデイなら綺麗に掃き取りますわ。陛下にそのことを言おうとしました。

「陛下、あの……」

「これならワドルデイはもういらん！全員、リストラするゾー！」

「そんな、お止めください！ワドルデイたちはよく働いております！現に——」

「黙らっしゃい！これは決定事項だゾー！」

「すぐにワドルドゥ隊長を呼ぶでゲス！」

そうしてワドルドゥ隊長と、ワドルデイたちはお城から出ていきました。

わたくしは悲しい気持ちになりながら、彼らの力になれなかったことを悔やみました。

最後に、ワドルドゥ隊長に声をかけます。

「なんとかして、皆様が城に戻るよう動いてみます。どうか、それまでお元気で」

「ありがとう。だが、無理はするな。……達者でな」

わたくしたちは握手をした後、別れました。

泣いている暇はありません。わたくしはすぐに行動に移ります。

まずはロボの行動観察です。ナイトメア社の製品ですもの。何か起きてても不思議ではありません。

今日の仕事を全てアーニヤとランタンに任せて——仕事は陛下の身の回りのお世話です——わたくしはロボを追いかけます。

ロボは午前中は真面目に仕事をしているようでした。しかし、閣下のお部屋の前にたどり着いたとき、違和感がありました。

周りを見てから中に入りました。まるで中に入る姿を見られなくなかったようですわ。

何事もなく、ロボは部屋から出てきました。しかし、出てくるには早すぎました。

わたくしたちとワドルディたちが一緒に掃除しても二十分から三十分はかかるのに、あのロボは五分程度で出てきたのです。

何もかもが怪しすぎました。

「——怪しいな」

「ひうー！」

驚きすぎて飛び上がりました。後ろにいたのはメタナイト卿です。わずかに、怒って

いるようでした。メタナイト卿はわたくしに静かにするよう、ジエスチャーします。

こうしている間にも、ロボは遠くへ行つてしまいました。わたくしは残念でしたが、今起きたことを相談するべきだと考えました。

「メタナイト卿、今のは……」

「うむ。おそらく、エスカルゴン殿のへそくりを盗つたのだらうな」

「悪いことをしていたのですね。それとなく、閣下に伝えましょうか」

「私が言いに行こう。そなたは、皆のところに戻れ」

「かしこまりました」

「もう、危ないことはしないように。するならば、声をかけてくれ」

「追跡も、危ないですか？」

「そうだ。どんなに知った場所でも、敵に勝てないようならば仲間と共に行動するべきだ。わかつてくれたか？」

「はい。以後、気をつけます。次はメタナイト卿か、カービイたちを誘います」

「それでいい」

わたくしはメタナイト卿と別れて、陛下の元に戻りました。

わたくしが陛下の下に辿り着くのと同時に、エスカルゴン閣下が息を切らせて陛下のお部屋に飛び込んで来ました。

「陛下あ……へそくりが！私のへそくりが無くなっているでゲスー！」

「何!？」

陛下はすぐに、ご自身のへそくりが置かれている部屋へ走り出します。

部屋にはへそくりがありませんでした。いつの間に持つて行かれたのでしょうか？

「ぐむむむ……かくなる上は!」

「ああ、ちよつと、陛下!」

陛下は飛び出して行きました。閣下がその後ろを追います。わたくしは、アーニヤとランタンを部屋の中にいるよう待機させて、二人の後を追いかけてました。

曲がり角で一度立ち止まります。こつそり顔を覗かせると、陛下と閣下がヘルパーロボを糾弾するところでした。言葉までは聞き取れませんが、陛下も閣下もかなり怒っている様子です。

その様子をハラハラと見守っていると、メタナイト卿が後ろからやって来ました。

「リーノ、間に合ったか」

「メタナイト卿?どうしてこちらに?」

「陛下たちがヘルパーロボの所へ向かうことは予想できた。そして君がついていくことも」

「……何か危ないことが起きるかもしれないですね」

「十中八九な……見ろ！」

顔を陛下たちの方に向けます。

なんと、ヘルパーロボが変形して戦えるようになっていました。

ヘルパーロボは片手からミサイルを撃ち始めました。

「きゃあー！」

「こちらに！伏せていろ！」

メタナイト卿に引つ張られて、彼の後ろに庇われます。メタナイト卿の背中を見て安心したからか、わたくしは両手を握りしめました。

「メタナイト卿。もしこちらにミサイルが来たら、特大の氷を放ってミサイルを凍結させますわ」

「できるのか？」

「やります。守りたいのは、わたくしも同じですわ」

メタナイト卿は雰囲気を柔らかくされて言いました。

「無理はするな」

「かしこまりました」

結局、ミサイルは飛んで来ませんでした。

ホームヘルパーロボは、駆けつけたカービイとワドルディたちによって倒されたのです。

陛下のへそくりも無事でした。ワドルディたちが守っていてくれたみたいですよ。

それを見た陛下は、大声で笑われていました。

「これで、一件落着となればいいのですが」

「それは、君の目で確かめるといい」

「はい、行つてきます。ご一緒にどうですか？」

「申し出は嬉しいが、これから用事がある」

「わかりました。では、行つてきます」

メタナイト卿と別れて、わたくしは陛下たちの下へ走り出しました。

観光ツア―

プブビレッジを観光地にしよう！

閣下から手渡された企画書には、そんな題名が書かれています。

人生初めての会議の議題が、こんなに悩ましいものとは考えていませんでした。

午前中。とある部屋で陛下と閣下、ワドルドウ隊長、そしてわたくしの四人がテーブルを囲みます。

わたくしは片手でこめかみを抑えつつ、手を挙げました。

「リーノ」

「はい。わたくしは村の、この国の観光地化に反対いたします」

「まだ会議は始まっていないのに、何を反対する理由があるでゲスか!？」

「観光客から自然や、重要な文化遺産を守る為ですわ。何より、ここは観光地に向いておりません。どうか、お考え直してください」

「もう決まったことにグダグダ言うでないゾイ!!」

陛下のお言葉に耳を疑いました。

「……つまり、ツアー客が来ることは決定しているんですね？」

「その通り！わかったら、お前も案を出していくゾイ!!」

わたくしは、今回ばかりは深いため息を隠しませんでした。

「お力になれるかわかりませんわ……」

「リーノに期待しているのは、料理についてでゲスよ」

「それと、お、も、て、な、し、ゾイ」

「かしこまりました。会議を中断させていただきます。続けてください」

「うむ」

会議は滞りなく進みました。そして終わった後、アーニヤとランタンを呼びました。会議に使った部屋をそのまま利用して、五日後に来るツアー客について知らせます。

二人ともたいへん驚いていました。村の観光化に不安を抱いている様子です。

二人がメモに必要事項を書いている間に、わたくしは観光ツアー回の内容を思い出そうとしました。

確か、結果的に観光地化は上手くいかなかったはずですが、料理が不味いという理由があったはずですよ。

今は、わたくしたちが料理を担当します。とてもおいしい料理を作る予定です。その点は評価されるかもしれません。

あと、カービイのことも。

どんな理由だったのか忘れてしまいましたけれど、カービイについても評価されたいはずですよ。

評価する点が二つもあつたら、星一つの観光地になつたりしませんよね……？

わたくしは頭を振ります。気をとり直して、アーニヤたちに意識を向けました。

「知らせる情報は以上ですわ。何か、質問はありますか？」

「はい。好き嫌いとか、アレルギーについてツアーのお客様からご要望はありますか？」

「ありません。ただ、一つ。おいしい物を食べさせてほしいそうです」

「それはそれで、難しい要望だわ」

ランタンがため息と共に言葉にします。

わたくしは苦笑しました。

「わたくしたちの担当は夕食と朝食ですので、ビュツフェ形式で食事をお出ししようかと思えます」

「ああ、好きな物を選んで食べていただくのですね。それはいい案かと」

ランタンの慣れない敬語がくすぐつたいです。けれど、今は真面目なメイドのための会議中なので、凄く真面目な顔でお話しします。

「ビュツフェにはカービイにも参加してもらいます。そうすれば、残り物は無くなりま

すから」

「カービィは夕ご飯をたくさん食べられて、私たちは洗い物が楽になる。win-winですね」

「一家に一人、カービィかしら？」

「それだと、毎月の食費がたいへんなことになりますね……」

冗談を挟みつつ、メイドだけの会議も問題なく終わりました。

それから、ツアーに向けて準備が始まりました。

ツアー客が宿泊する区画を大掃除したり、ビュツフエに出す料理の練習をしたりします。練習した料理は、陛下と閣下、ガイドのワドルドウ隊長にも味見していただきました。お三方から合格をいただき、とても嬉しかったですね。

一応、メタナイト卿を含めた戦士たちにはツアー客が来ることを伝えました。

おそらくこのツアーはナイトメア社が絡んでいると、メタナイト卿は言います。

「利益となる一般人に手を出すとは考えにくい。だが、念のため警戒はしておくように」
「かしこまりました。ツアーそのものには参加しませんので、わたくしたちに危険が及ばないと思いますが、注意します」

「ああ、それでいい」

ツアー客が来ること、フォーム様には話せませんでした。

なぜなら、陛下から直接「伝えるなゾイ！」とはつきり命令されているためです。これが「言うな！」だったなら、手紙でも書いて報告したのですが、それも叶いません。

きつと邪魔をされたくないのです。陛下の命令には逆らえません。

わたくしはフォーム様に質問されても何も言えません。ただ曖昧に、笑みで誤魔化すばかりです。

その度に、頬を膨らませるフォーム様のお可愛らしいこと！

わたくしがにこりと笑ってしまうので、フォーム様を余計に怒らせてしまうのでした。

ツアー客が来た日。

彼らは夕方に、お城に到着しました。お客様はキャピイ族に姿がそっくりです。ですが肌の色が違います。

彼らはメイドが珍しかったのか、何枚もわたくしたち三人の写真を撮ります。手を止めていては仕事になりませんので、体を動かしつつ対応します。

お客様の荷物はワドルデイたちに運んでもらい、わたくしたちメイドは陛下の手足となり動きます。

お客様を招いて開く夕食会は久しぶりです。賑やかな食堂の外、廊下ですれ違ったと

きにワドルドウ隊長が教えてくれました。

「リーノたちが作った料理の評判がとてもいい。みんな大満足している」

「まあ、嬉しいです。教えてくださってありがとうございます」

わたくしは隙間を見つけて、アーニヤとランタンにも教えてもらったことを伝えました。

二人とも嬉しそうに頬を緩めて、配膳に精を出しました。

夕食会は、大成功でした。

料理のほとんどを食べてもらえました。最後には「おいしかった。また食べたい」とワドルドウ隊長を通して、お話ししたほどです。

とても嬉しかったです。さらに料理の腕について自信ができました。

お客様たちをそれぞれの部屋にご案内をして、後はワドルデイたちに任せます。わたくしたちメイドの仕事は、今日はおしまいです。

一日の終わりに日記を書いていると、ノック音が聞こえてきました。

「はい、どなたでしょうか？」

「私だ。メタナイトだ」

「すぐ開けますわ」

ドアを開けると、メタナイト卿がするりとドアの隙間から入られました。

わたくしが問いかける前に、メタナイト卿はお話しされました。

「夜遅くにすまない。今晩は泊まってもいいか？」

「かまいませんわ。でも、明日も早朝から仕事なので……」

「わかっている。無理をさせる気はない。今日は、そなたの傍にいたいだけだ」

「ありがとうございます。では、今日はベッドとソファに別れて寝ましょうか」

部屋唯一のソファを動かして、ベッドにくつつけます。そして、わたくしたちは手を取り合って眠るのでした。

メイドの部屋に泊まったのはメタナイト卿だけではありませんでした。

翌日、早朝の厨房にて。

昨日のうちに作り置きしておいたサンドイッチを電子レンジで温めながら、アーニヤ、ランタンと話します。

「では、ソードナイトさんとブレイドナイトさんも、メタナイト卿と同じようにお泊まりされたんですね」

「みたいね。一緒に眠れたのは嬉しかったけれど、どうしたのかしら」

ランタンと首を傾げていると、アーニヤが答えてくれました。

「念のためだと、ブレイドナイトさんは言っていましたよ」

「念のため？」

「城の中で迷ったツアー客が、私たちの部屋を訪ねるかもしれないから、そのとき対応するのは男の方がいいだろう……と」

「つまり、私たちのことを気にかけてくれたのね。三人とも優しい！」

「ありがたいですね。大切にされていますと実感できます。改めてお礼が言いたいですわ」

わたくしはメタナイト卿を抱きしめたくまりました。それは後でさせてもらいましょう。

今は、ツアー客の朝食となるビュッフェ作りが優先です。

電子レンジが鳴りました。

「さあ、ご飯を食べたらすぐに朝食作りに励みましょう！」

アーニヤとランタンは元気よく返事をしてくれました。

朝食後、ツアー客を送り出しました。

火山に向かった彼らを待ち受けていたのは、花火と魔獣でした。

ツアー客やその場にいた人たちに怪我はなかったと聞いて、わたくしは安堵しました。

そして、ププビレッジが観光地になるかどうか、その結果を知らされる朝。

わたくしは仕事を抜けて子供たちと合流します。フォーム様、ブン様、カービイと一緒に、玉座の間の扉から中を覗きました。

カスタマーサービスの声が聞こえてきて、心臓が痛いほど速くなります。でも、村の未来がかかっているので、最後まで聞きました。

結果、食事は良かったけれど他はあんまり。観光地化には向いていません、とのことです。

わたくしは扉をそっと閉めました。

そして向かいのベランダに出て、子供たちと喜び合うのでした。

星のデデデ

「今週の悪巧みが決まったゾイ!!」

「はあ……」

陛下には申し訳ありませんが、気の抜けた返事しかできませんわ。だって、わたくしに悪巧みの話をしたら怒るに決まっているじゃありませんか。後ろでエスカルゴン閣下が慌てています。

わたくしは困った顔で陛下を見上げました。

「陛下、悪巧みをするなら怒りますわ。よろしいですか?」

「はっ! ダメゾイ! ワ、ワシはこれから村のために働く場所を増やすし外貨を得るから怒っちゃダメゾイ!」

「それだけ聞くといいことのように思えます。ですが、悪いこともするんですよね? 魔獣を呼ぶのですか?」

「その予定はないでゲス」

「うーん……」

魔獣をダウンロードしないのであれば、被害はきつと少ないでしょう。いつも怒ってばかりでは陛下たちのガス抜きになりません。わたくしはいくつかの条件を出して、それを約束してもらおうことにしました。

「陛下、閣下。特定の誰かをいじめないこと、みんなに迷惑をかけないこと。今回は魔獣をよばないこと。約束できますか？」

陛下と閣下はにかつと笑います。

「するする！するゾイ！」

「任せるでゲスよ、リーノ」

「でしたら、わたくしからは何も申し上げません。むしろ、村のためならば協力させていただきます」

「ホホーイ！リーノの協力があれば楽勝だゾイ！」

「すぐにアニメーター募集の看板を出すでゲス！」

アニメーター？

早鐘打つ鼓動を耳元で感じながら、わたくしは陛下に聞きました。

「どんな、アニメを作りますの？誰にも言いませんから、教えてくださいませ」

「星のデデデという陛下が正義のヒーローアニメでゲス！」

「リーノ！お前は食事を作れ！それで人民どもがじゃんじゃん来るゾイ！！」

「かしこまりました。わたくしどもは……いえ、今回はわたくしだけが協力させていただきます」

お二方が頭を傾げました。

「アーニャとランタンはどうするでゲスか？」

「久しぶりに長めの休暇をあげようかと思ひまして。張り詰めすぎのもよくありませんから」

星のデデデ。

あの伝説のアニメ回がやってくるのですから、見過ごせません。独り占めするようでも申し訳ありませんが、集中するために今回は一人で行動させていただきませう。

村でアニメーター募集の看板が出され、その日の昼にはアニメーターとなる村人たちが雇われました。

陛下と閣下ではなく、フォーム様主導で会議は進み、アニメ作りが始まります。

フォーム様のお仕事は多岐に渡りました。作画監督、閣下のアシスタント、ストーリーを明日までに考えて、編集もフォーム様がされるとか。

決してお一人で全てを行うわけではありません。村人たちが手伝ってくれますわ。しかし、責任ある立場というのはそれだけで疲れるものです。わたくしはみんなの食事

を作るとき以外は、フォーム様のお手伝いをさせていただきました。

絵は、その、あまり力になれませんでしたので、雑事を任せていただきました。

朝、昼、夜と三食をワドルデイたちと共に作ります。

たまに同じ歳くらいの男性に食事に誘われます。けれど、フォーム様と打ち合わせをしながら食べないと、次の仕事に間に合いません。なので、全てお断りさせていただきます。

その話をメタナイト卿にすると、「どんな顔か、覚えているか？」と質問されますので「わからない」と答えています。

実際に覚えていませんから、間違いではありません。

パタパタとあちこち早歩きで移動しているとき、キャラクターデザインをふと見ることができました。

そこに、なんと、嬉しいことにわたくしの絵と思わしきキャラクターがいたのです。思わず足を止めて見入りましたわ。

そうしていると、わたくしに気づいたフォーム様が和やかな雰囲気ですべてをかけてくださいます。

「ああ、それはリーノよ。よく描けているでしょ？」

「はい、はい……そっくりですわ。あの、後でこちらの絵を頂けませんか？部屋に飾りたいのです」

「え、どうかしら？アニメが終わったらいんじゃないかしら？」

照れているフォーム様を可愛らしいと思いつつ、その横顔を眺めます。

そして、さらに気付きました。

「お待ちください。もしかして、わたくしもアニメに……」

「出るわよ？決まっているじゃない！」

や、やっぱりなのですね!!!

人生初めてとなるアフレコを喜んだり、緊張したりと忙しく感情を巡らせます。

その日は頭の中がアフレコの件でいっぱい、小さなミスを何度もしてしまいましたわ。

その日の午後。

陛下がアニメスタジオで働く全員を会議室に呼びました。

進捗は遅れています。なのに、陛下は放送を二日後と通告されます。みんな抵抗いたしましたが、効果ありませんでした。

フォーム様と共に急いで作業に戻り、休みなく働きます。みんな寝不足で酷いクマができています。

そして、アニメ放送日を迎えました。

台本を手渡されて、アフレコする部屋に入ります。ああ、録音スタジオというのですね。

みなさんと放送開始時間を待っていると、陛下が部屋に飛び込まれます。

「間に合わん！ぶっつけ本番で声を入れるゾイ!!」

「ええ……」

アニメ回がはちやめちやだったことは覚えていますが、ここまでだったのでしょうか？

……アニメカービーなら、あり得ますわ。

緊張していると、誰かが肩に手を乗せました。

驚いて振り向きます。

「リーノ」

「メタナイト卿」

「深呼吸するのだ」

「はい。すー……はー……」

「体の強張りは楽になったか？」

「はい。ずいぶん、ほぐれたと思います」

「うむ。ここに居るのはみな、初めてのものばかりだ。そなただけではない。だから、あまり緊張するな」

「ありがとうございます。メタナイト卿。そうですわね、今は楽しむ気持ちとやり遂げる気持ちを抱いて、精一杯頑張りますわ」

「うむ。ではな」

「はい、また……」

「いちやつくでないゾーイ!!!」

「始まるから自分の立ち位置に行くでゲスよ!!!しっしっ!!!」

陛下と閣下の割り込みで強制的に離されたわたくしたちは、決められた立ち位置に向かいます。わたくしは陛下と閣下の隣で、メタナイト卿は一番奥の端に立ちます。

オープニング、CM、Aロール、Bロールが順番に運ばれてきます。……出来立てですわね!?

ハラハラ、ドキドキすることが楽しくて仕方ありません。手に汗握ります。アドレナリンが出ますわね!!!!

アニメが始まりました。

小さな星形の宇宙船に乗った、赤ん坊のような陛下が映し出されます。あまり可愛くは描かれておりませんわ。

「デハハハハハ！ワシ、ゾイ！」

「シー！声が放送されているでゲス！」

閣下は陛下に注意しました。それだけかと思いきや、アニメのクオリティについて話を始められました。

「それにしても、キャラの線がガタガタしているでゲスな」

「絵が下手なのはキャラデザのせいだゾイ」

「作画監督も酷かったからでゲスからな」

「お二方とも、おやめください。フォーム様は与えられた仕事を一生懸命に真つ当されていましたわ」

はつきりそう言うと、二人はそっぽを向かれました。そのように無視されるのであれば、こちらにも考えがありますわ。

わたくしは怒りを押し隠して微笑みました。

今話のタイトルは「ふとつた訪問者」です。今しがた知ったフォーム様が驚いておられます。

大臣ご家族が羊の声真似をされます。とてもお上手ですわ。

目の前の大きなスクリーンに映し出されていた羊たちが、みんな吸い込まれます。カービィの仕業です。本物よりも巨大に描かれたカービィが羊たちを吸い込んでいくようです。

カービィは自分の登場に喜び、ぴよんぴよんと跳ねながら声をあげます。

「酷いわ！魔獣がカービィになってる！」

「デデデの奴、全部作り直したんだ！」

「エへへへへ！正義の味方はあくまでも陛下でゲスよ」

「まてえ、ピンクの悪魔カービィめ」

「ぼーよう」

放送しているアニメのシーンと、今わたくしたちが話している内容が見事にマッチしています。違和感が仕事をしておりませんわ。奇跡的ですわ。

「カービィ、こんな仕事やめましょ。あなた悪人にされているのよー」

「アホなカービィにはわからんゾイ」

「陛下！カービィは赤ちゃんなのです。わからないのは当然ですわ」

つい声を荒げてしまいました。ちょうどわたくしがアフレコする場面でしたから、助かりましたわ。

いただいた台本には陛下を誉める言葉が書かれております。……なぜ、このシーンで

陛下を誉める言葉が？後で台本をしつかり読んだ方が良さそうですね。

そしてアニメは戦闘シーンに入ります。

なのに、なぜか会話シーンがふんだんに盛り込まれています。今戦っているんですよ???

パーム様とシナリオを考えたフォーム様が怒りました。

「何よ、こんなくんだりないセリフに書き替えて……リーノ、あなた知ってた？」

「まったく知りませんでした。焦りたいですわね……」

「戦いの最中にこんな話ダラダラして酷えシナリオだぜ」

アニメの中のカービィは城を破壊し、大臣一家を追い回し、村長さんとボルンさんを倒しちやいます。

そしてまた、陛下と閣下の会話シーンが始まりました。

大臣一家がまとまり、話し始めました。絵を動かさないアニメは安く作れるのと。と。

わたくしは恥ずかしいような、そんな気持ちになっただけでいたたまれなくなりました。目を覆い隠します。

「リーノ、次！出番でゲスよ」

「は、はい」

「ポーヨ!!」

「危ない、陛下! 吸い込んで……吸い込んで!」

わたくし、フォーム様の役をしていますわ!??

驚いて、フォーム様と顔を見合わせました。そしてフォーム様は陛下たちの方に鋭い視線を投げます。

アニメの中のカービィが炎を吐いて、陛下がそれを吸い込みました。

きますわ! ファンの方は備えて!!

「やった! あれぞファイヤーデデデ……締まらないな、これでは」

今日一番聞きたかった声を聞いて満足ですわ。小さくガッツポーズをいたしました。

アニメは色が無い、白黒の世界へと変化します。

陛下も閣下も困惑されましたが、すぐに立て直します。

アドリブは素人であるわたくしにはできませんわ。幸い、わたくしの出番は次を除けば最後まででない様子。

「来て、ワープスター!」

「ワープスター」

カワサキがとつても上手に声をあてました。わたくしは後ろに下がります。

陛下のセリフをカービィが言ったり、良い作画に見惚れて陛下がアドリブを忘れたりします。

そして、作画は完全な崩壊を迎えました。

カービィが描いた絵が映し出されたのです。もう何が描かれているのか全くわかりません。わたくしも驚いて、目がギョツと開いちやいました。

おそらく、カービィと思われる大小の丸が何枚も描かれています。

そんな一頭身の世界に、二頭身の誰かが現れました。フォーム様に似ているような気がします。髪型が違いますね。どなたでしょうか？

「ぼよ、リーノぼよー！」

「わ、わたくし？」

どうやらカービィはわたくしを描いてくださったみたいです。後ろで感激していると、カービィが私の手を引きました。

マイクの前に立って、何度も跳ねてはわたくしの名前を連呼します。

放送中ということも忘れて、わたくしはカービィを抱きしめました。

「ああ、カービィ。たくさんわたくしを描いてくださったんですね。どうもありがとう。お礼に今度お菓子を差し上げますからね」

「ぼよぼよ」

アニメはめちやくちや、酷い状態でおわりました。

仕事が終わった村人たちはその場で眠り始めました。わたくしも眠たかったので、一度自室に引き上げることにしました。

そのときメタナイト卿に送っていただきました。わたくしがベッドに潜る姿を見届けてから、メタナイト卿は部屋から出ていかれました。鍵は、合鍵を使っていたきました。今度返す、と言われましたがそのまま持つていってもらうことにしました。

夕方には起きることができました。

なので、厨房に向かいお菓子を作り始めます。明日からは、アーニヤとランタンが帰って来るので、ちよつとだけ忙しいのです。だから今のうちにカービィに贈るお菓子を作ります。

お菓子を作っていると、閣下が入って来ました。

「おや？もう夕食を作り終えたでゲスか？」

「は？いえ、カービィに贈るお菓子を作っていました」

「夕飯は？」

「今日は作りませんわ。カワサキの店へ行ってください」

「はあー!?!」

「ツアーアウトです。カービイをいじめたこと、村人に迷惑をかけたこと。怒ってますので今日の夕食は作りません」

「そ、そんなく……とほほ」

こんな風に怒りを見せていますが、台本をいただけたこと、この世界で星のデデデに出演できたこと、すごく嬉しかったんです。台本は、わたくしの宝物の一つになりました。

なので、明日のご飯は豪華にしようとしてっさり考えています。

貯金箱

ある日の朝。

陛下がアーニヤとランタンに人形をくださった。

その人形は陛下そっくりでした。目がキリリとしていて、抱き締めるにはちょうど良い大きさだったので、少し欲しかったですわ。

しかし、もう数がないらしいので、我慢します。

「それを枕元に置いておくと、いいことがあるゾー！デハハハハハ!!」

「かしこまりました」

「枕元に置きます」

わたくしたち三人は、早めの朝食を食べられる陛下と閣下に頭を下げます。

陛下たちはテレビスタジオへ向かわれ、食堂に残ったわたくしたちは空になった食器を片付けます。

かちやりと鳴る音に混じって、メイドたちはおしやべりを始めます。

「あの人形、枕元に置かなくちゃダメでしょうか？ なんとというか、あの人形の目つきが怖

いのです」

アーニヤが困った顔で、わたくしに問いかけました。

わたくしは落ち着かせるように、彼女の肩に手を置きます。

「夜、眠るときだけはクローゼットの中に入れたらどうでしょうか？ 部屋にいない日は枕元に置いておけば、陛下のご命令通りになります」

話を聞いていたランタンも含めて、二人は顔を輝かせました。

あの人形、あまり好きではないのでしょうか？ 可愛いと思うのですが。

その日の昼過ぎ。

アーニヤとランタンを連れて、お城の買い出しをします。手分けしてお店を周り、大量に注文しました。

費用のほとんどがワドルデイたちの食費です。こういうとき、改めて兵士の数の多さを実感しますわ。

お昼は、コックカワサキのお店に寄って自分達でご飯を作ります。自分達とカワサキの分よりも多く作ることは、疲れていてできませんでした。なので、わたくしたちがいる間だけ、お店を閉めてもらいました。

カワサキはおいしいご飯が食べられること、そしてちやうど人が来ない時間帯だった

ため、快くキツチンを貸してくれました。

今日のお昼は肉うどんです。余っていたお肉をいただいて、甘辛く仕上げます。カワサキはニコニコと笑顔で、うどんをすすります。

「この味、たまらないね！毎日食べたいくらいいさ。メタナイト卿が羨ましいよ」
「メタナイト卿も、毎日食べておりませんわ」

「そうなのかい？まあ、リーノも忙しいもんね。それにしてもおいしい！」

「ありがとうございます。プロであるカワサキさんに教えてもらったおかげです」
「そう褒めないでよ。照れちゃうよ」

「ご機嫌で食事をしていたカワサキが、ふと真面目な顔をして質問されました。

「そういえば、リーノたちに聞きたいことがあるんだ」
「なんででしょうか？」

三人分の視線を受けて、カワサキは話をします。

朝、配られたデデデ人形のこと。

とりあえず枕元に置いておくように言われたこと。人形が幸福を運んでくること。
「信じてもいいのかな？」

「まあ、朝のニュースでそんなことを言っていたんですね。真実かどうかは、試してみないとわかりません」

「そうだよね。とりあえず置いてみようかな」

残りのうどんもすすります。カワサキは余ったお肉でどんぶりを作っていました。残さず食べていただけで、とても嬉しかったですわ。

その日の夜。わたくしたちと三戦士たちだけの食事を開きました。

今回はミネストローネと、村特産の羊肉のステーキです。

食事会の話題は、村中に配られたデデ人形のことを持ちきりました。

じつと静かに、わたくしたちのお喋りを聞いている戦士たちは、何か考え込んでいるようです。

ランタンが隣に座るソードナイトさんを覗き込みます。

「どうかしたの？ソード。いつもより無口ね」

「考え事をしていたんだ。陛下が無償で人形を配る理由はなんだろう、と……」

ソードナイトさんの言葉を聞いて、ブレイドナイトさんがアーニヤに問いかけます。

「人形についてももう少し教えてくれないか？」

「はい、いいですよ。陛下そつくりのお人形で、このくらいの大きさで、あとは、そう！

貯金箱になっています」

「……村人にお金を貯めさせるのが目的か？」

その言葉にメタナイト卿が頷きました。

「おそらく。そして、銀行を立てて金を集めるつもりだろう」

アーニヤとランタンが「銀行？」と首を傾げます。村には銀行がありませんから、知らないのは無理ありません。

わたくしは知識として、なんとなく知っているだけです。

なので、銀行について簡単に説明してくださいさるメタナイト卿の言葉に耳を傾けました。

話は進み、わたくしだけが人形をいただいていないことを伝えます。

「わたくしも欲しかったです。残念です」

「リーノ。陛下たちは、数を用意できなかったのではなく、そなたには渡せなかったのではないか？」

「それは、なぜでしょうか？」

「何か、良くないことが起きる気がする」

それつきり、メタナイト卿は黙り込んでしまいました。

もし本当に、メタナイト卿が言った通りに良くないことが起きるなら、わたくしはまた陛下と閣下に対して怒ります。

悪いことは事前に止められればいいのでしょう。ですが証拠もなしに、陛下に「悪い

ことはお止めください」とは言いにくいです。

食事会の次の日。

洗濯物を干していると、フォーム様に出会いました。村から帰って来たところのようでした。

「手伝うわ」

「そんな、申し訳ないですわ」

「いいのよ。少し、リーノと話がしたかったし」

フォーム様はわたくしが持っているシーツを半分持ちました。そして息を合わせて、シーツを物干竿にかけます。

竿にかかったシーツの位置を調整して、洗濯バサミでとめます。

それを十回すると、二回目の洗濯物は全て干し終わりました。

ワドルデイたちが洗濯物を入れていた桶を持って、洗濯場に帰って行きます。その後を追いかけるように、フォーム様と並んで歩きます。

日々大人びていくフォーム様の横顔を、心のアルバムに記録しつつ、わたくしは問いかけました。

「お話とはなんででしょうか？」

「今朝ね、変なことがあったの」

「変なこと、ですか？」

「うん。家族みんなで、デデデはすごいって話をしたのよ」

「それは、珍しいというか……なんと言いますか……」

「こんなことありえないわ！村でも同じことが起きたらしいの。みんなで、デデデはえらいって話をしたって」

「まあ、それは……それは……」

わたくしは言葉を紡げませんでした。

陛下の部下として、その先の言葉を発してはいけないと思つたのです。

フォーム様はわたくしの目を覗き込みました。

「リーノ、この不可解なことについて何か、心当たりはない？例えば魔獣とか」

「ありませんわ。変わったことといえば、あのデデデ人形が配られたことしか知らないのです」

「そう……デデデ人形、今回の件と関係があるのかしら」

「……聞いてみましょうか」

わたくしは、陛下に質問しても誤魔化されると思いました。

ですが、嫌な予感がしたのです。大事が起きる前に確かめておきたいと思いました。

フーム様と別れてすぐ、わたくしは陛下を訪ねました。

陛下は部屋のお花に水やりをしていました。それも鼻歌を歌っています。

「陛下、ご機嫌麗しゅう」

「挨拶はいいゾイ。なんゾイ」

陛下はこちらを振り返らず、お花に注目しています。

「デデデ人形のごことで、相談に参りました」

わたくしがそう言うと、陛下は演技がかった調子で言いました。

「あれは良い物ゾイ！幸福を呼ぶ縁起物、だから配った。お前の分を用意できなかったからといって、文句言うなゾイ」

「いえ、そうではありません」

「じゃあなんの用ゾイ？」

「あれは安全ですか？陛下にとって」

「はあ。」

陛下はやつとこちらを向いてくださいました。

意味がわからない、そんな顔をされています。

わたくしは胸の前で両手を握り、考えたことを述べました。

「陛下の人形が配られてから、みんなが陛下を誉めるようになったそうです。つまり、それは陛下の望みを人形が叶えたのではないですか？」

「デハハハハハ！それは違うゾイ！ワシが……おっと」

陛下は何か言いかけて、止められました。

そのお顔は自信に満ちていますが、反対にわたくしは心配でした。

「そうなのです。陛下が何かなさつて、それが人形を通して村のみんなに伝わったんですね」

「どうやら言い当てたようで、陛下が挙動不審になりました。何か、言い訳を考えるように唸り、あたふたと部屋の中を見回します。」

「陛下。わたくしはこう考えています。陛下の望みを叶えるあの人形は、陛下に悪いことも一緒にもたらずのではないかと。そんな嫌な予感がしてならないのです。人形について、いかほど調べられましたか？」

「な、何も……」

「では、あの人形を作った会社はよほど信頼がおける会社なのですね？」

「……………」

「違うのでしたら、もう少しあの人形を調べてみませんか？もしかしたら、陛下とつて悪いものかもしれません」

「う、うるさいゾイ！調べたくても、人形が手元になんじや調べられんゾイ！」
「メイド長、言われたとおり持って来ました」

「ありがとう、アーニャ」

仕事なので、わたくしはアーニャたちからメイド長と呼ばれます。まだ慣れませんね。少しくすぐつたいです。

わたくしはアーニャからデデデ人形を受け取りました。

陛下は青ざめたお顔で、仰います。

「何をする気だゾイ」

「実験ですわ」

わたくしは人形を空中に放り投げました。

するとどうでしょう。

陛下も遅れて空中に浮かび上がり、床に激突しました。

ドスン！！

「ぎゃあ！！」

とても痛そうです。

わたくしは人形を無事受け止めたのですが、それは陛下に反映されなかったようです。

アーニヤは驚いて声も出ない様子でした。

わたくしも驚きましたが、それ以上に悪い予感が当たってしまったことが気になりました。

努めて冷静に、陛下に申し上げます。

「陛下、この人形はおかしいです。すぐに製造元に確認を……」

「いい、言われんでもー!」

陛下はわたくしたちの横を走り抜け、どこかへ向かわれました。

ところが、五メートル先まで行ったところで、こちらに戻ってきました。

「よこすゾイ」

そう言って、わたくしからデデデ人形を掴み取り、また走り出しました。

その背を見送り、陛下のお姿が見えなくなった頃に、わたくしはアーニヤに謝りました。

「ごめんなさい。やっぱりあの人形、陛下に持っていかれちゃいました」

「気にしないでください。あの人形、貰ってからずっとクローゼットに閉まってあったんです。置き場所に困っていたので、引き取ってくださって助かるぐらいです」

アーニヤが困っていないことが、今は救いでした。

その日のうちに、陛下と閣下はデデデ人形を全て回収されました。

人形は城の地下深くに保管されるそうです。

夕方、お二人はヘトヘトになって帰城されたので、わたくしはうんとおいしい夕食を用意させていただきました。

夜。わたくしの自室にて。

ベランダにソファを出して、メタナイト卿と二人で星空を眺めます。

わたくしは右側を、メタナイト卿は左側をお互にくつつけていました。腕から体温が伝わります。それがわたくしをたいへん幸せにしてくれました。

わたくしたちは、今日あったことを話し合っていました。話題は必然と、デデデ人形を回収した件になります。

「結局、あの人形は陛下とシンクロしていたのか」

「そのようです。人形は陛下の声を村人たちに届けたり、陛下の思い通りに動きます。そのかわり、人形が受けた衝撃や痛みは陛下に伝わる……。人形を空中に放り投げて、陛下が飛んだときはとても驚きました」

「であろうな」

「メタナイト卿」

「なんだ？」

優しい声色が、そつと続きを促してくれます。それが心地よくて、もつと聞きたくなるのです。

わたくしはうつとりとしたようで、それでも拭えない心配を口にしました。

「これでよかつたのでしょうか？」

「どういふことだ？」

「今回はたまたま問題を早期発見できて、被害が出ないうちに解決できました」

「うむ」

「ナイトメア社が関わっていたのに、怪我人が出ませんでした。そして、カービィは戦いませんでした」

言いたいことが伝わったのでしよう。メタナイト卿は静かに聞いてくれます。

「もし、悪い予感を無視していたら？陛下の部屋を訪ねないでいたら？きつと陛下は人形を通してカービィと戦っていたと思うんです。もしかしたら、わたくしはカービィの成長するチャンスを奪ってしまったのでは……」

「そつまでだ」

まるで花に声をかけるように、メタナイト卿は声を発しました。いつ間にか俯いてたわたくしの顔は、メタナイト卿の方を向きます。

彼も、メタナイト卿もわたくしを見ていました。

なんて綺麗な黄金の瞳でしょうか。

「リーノ。そなたは陛下が危ない目に合う瞬間を、黙って見ていられるのか？」

「できません」

「ならば、戦いを未然に防げたことを喜ぼうではないか。陛下とカービーが戦って、勝つのはカービーだからな」

「そうですね。陛下は痛い思いをしなくて済んだのだと、そう思います」

軽い調子で仰るのがなんだかおかしくて、笑みがこぼれました。

メタナイト卿の手がわたくしの頬に触れました。

「やっと、笑ってくれたな」

壊れ物を扱うように、愛おしく頬を撫ぜるその手に、わたくしの手を重ねます。

熱が集まる顔に夜風が当たって気持ちいいですね。

「?ずっと笑っていませんか？」

「ああ、心から笑えていないようすだった。だから、気になっていた」

「ご心配おかけしました」

「いいんだ。心配するのも、恋人の特権だろう？」

仮面がずらされたのを見て、わたくしは目を細めました。

「メタナイト卿」

「なんだ？」

「月が、綺麗ですわね」

「ああ、綺麗だ」

メタナイト卿は、わたくしの瞳を覗き込みながら言いました。

1周年

村に日用品を買い足しに行った日。

村のコンビニの前で、子供たちに呼び止められました。フーム様、ブン様、イロー、ハニー、ホッへの五人です。

子供たちはわくわくと興奮した様子で、わたくしに声をかけました。

「リーノ。一週間後になにかがあるか、わかる?」

ブン様は人差し指をピンと立てて、問題をだされました。

わたくしは首を傾げます。

「二週間後、でございますか? うーん……どなたかの誕生日でしょうか?」

「ブツブツ」

「違うわ」

イローとハニーが楽しそうに笑みをこぼします。ホッヘがヒントを出してくれました。

「記念日だよーさて、なんででしょう!」

「結婚ですか？恋人記念でしょうか？」

「ちーがーう！」

みなさんが答えを言いたくてウズウズする頃、フォーム様が教えてくれました。

「今度ね、カービイがこの村にやってきてから一周年になるのよ」

「それはそれは！おめでたいですね！」

「でしょう！だからね、村中のみんなを誘って、パーティーしようと思っているの」

続いてブン様が説明してくれます。

「当日はカービイへのプレゼントを持って来るか、みんなと一緒に用意するんだ。リーノはどうする？」

「わたくしは少し考えました。仕事を終わらせてから参加するのか、有給を消化して参加するのか、どちらにしましょうか。」

「パーティーは何時頃を予定していますか？」

「日没後だから、夜よ。パーティー会場を作って、ライトで照らして、華やかにするの！」

「それは素敵ですね。夜からでしたら、仕事を終えた後にパーティーに参加できると思っています。事前準備はするのでしょうか？」

「するわ。手伝えそう？」

「陛下と閣下に相談して、時間を作ることができれば……」

「それはダメよ！」

子供たちは首を横に振ります。

わたくしは、なぜいけないのか、わかりませんでした。

「どうしてですか？」

「デデデたちが知ったら、邪魔されるじゃん」

「そうでしょうか？ 知らせないまましていると、別のなにかに勘違いされてしまいませんか？」

「例えば？」

「……革命とかででしょうか？」

そういうと、みなさん大笑いされました。

「まさか、ねえ」と、フォーム様は仰います。

「陛下は思い込みが激しいところがありますから」

「とにかく、デデデたちには知らせないで。うまいこと言って、パーティーに参加してちょうだい」

「かしこまりました。準備はお手伝いできませんが、カービイと参加者のためにお菓子を持つてきますね」

「ええ、それでいいわ。お願いね、リーノ」

城に帰ってから、アーニヤとランタンを探します。

玉座の間を掃除していた二人を引き止めて、休憩がてら少しおしゃべりをします。

カービイの一周年パーティーのことを伝えました。二人も、パーティーに参加するようです。

それならば、と。わたくしは二人をお菓子作りに誘います。

「カービイ用にプレゼントする分と、パーティー会場を用意してください。みなさんのためにお菓子を作りたいと考えています。どうか一緒に作っていただけませんか？」

「今回はどんな物を作る予定ですか？」

「アイシングクッキーを作りたいんです。デコレーションすれば、いつものクッキーよりも華やかでエレガントになりますから」

「一周年の記念日にはピッタリね」

「そういうことです」

「賛成！お手伝いします」

「私も、今からクッキー作るのが楽しみだわ！」

「ありがとうございます。パーティーは一週間後なので、今日から準備を始めましょう」
準備はその日の夜から始まりました。

まずは、オープンなどお菓子作りに必要な家電が揃っているリーノの部屋に集まりま
す。三人が持っているクツキーの型を持ち寄り、どれを使うのか決めていきます。

型が決まれば、次は試作です。

毎日クツキーを焼いては、デコレーションしてデザインを決めていきます。

思ったよりも、デコレーションするのに時間がかかってしまいました。わたくしたち
は本番まで練習を繰り返します。

クツキーを見飽きて、食べ飽きた四日目。一度休みを挟みました。クツキーを作ら
ず、クツキーを入れる袋とリボンを選びます。

カービィに渡す袋を一番大きいものにして、あとは同じサイズにします。

リボンは袋の口を結ぶのに必要な長さを測り、それを量産します。

ちよきん。ハサミの切る音がして「あら」とランタンが言いました。

「ランタン、どうかしましたか？」

「リボン、無くなつたわ。買いに行かなきゃね」

「こちらも無くなりました」

「では、明日買い出しに行きましょうか」

五日目は村で買い物をしました。正午を少し過ぎた頃です。

リボンなどの雑貨類と、お菓子作りに必要な材料を購入します。

大量の荷物を三人で分けて、えつさほいさと運びます。リボン選びに時間をかけてしまいましたので、もう夕方に近いです。

それでも楽しかったので、わたくしたちの顔に疲れの色はあまりありません。

アーニヤがちらりとカワサキさんのお店を見て言いました。

「ちよつとだけ休んでいきませんか？ 喉が乾いてしまつて」

「いいですよ。わたくしもアイスコーヒーが飲みたいです」

「トイレ休憩も兼ねて入りましょうか」

カワサキさんのお店に入ります。中はいつも通り、空いていました。

テレビを見ていたカワサキさんが、立ち上がりこちらに来ます。

「いらつしやーい！ あ、リーノにランタンにアーニヤ！ 今日晩ごはんを作りに来てくれたのかい？」

わたくしたちは笑みを浮かべました。

「違いますわ。今日はお客としてきました。飲み物をいただけますか？」

「なんだそつか。いいよ。なにが飲みたい？」

「わたくしはアイスコーヒーで。アーニヤとランタンはどうしますか？」

「ホットコーヒーでお願いします」

「緑茶でお願い」

「はいよー！ちよつと待つててね」

カワサキさんはすぐに奥へ行かれました。

わたくしたちはカワサキさんが座っていた、奥のキッチンから近いテーブルに座りま
す。荷物は椅子の下に置かれたカゴの中に入れました。

三人で息をほつと吐き出します。

「今日は疲れましたけれど、楽しかったわ」

「リボン選びは久々だったので、ついはいじやいじやいました。みんなお気に入りのリボ
ンを買えてよかったですね」

「帰ってからまた作業をしなくちゃいけないけれど、新しいリボンを使うのはとっても
楽しみだわ」

「買い物帰りかい？」

「ぴたりとわたくしたちのときが止まりました。見知らぬキャピイ族の男性が声をか
けてきたからです。」

……いや、どこかで見たような気がします。

ランタンが怒気を孕んだ声で言います。

「またあんたなの？私たちになにか用？私たちには、あんたに用なんてないんだけど」

「今日は君を誘いに来たのさ。ねえ、デートしないかい？」

「はあ？」

ランタンは大きいため息を吐きました。

わたくしとアーニヤは顔を寄せます。互いにひそひそと話し合います。

「誰でしたっけ？」

「私も知りません。多分、前にコンビニで声をかけてきた見知らぬ男性ではないでしょうか？」

「……ああー！」

そこでわたくしはやっと思い出しました。

あのときのナンパさんです。しつこかった記憶があります。あと空気が読めない方。

ちらりと男性を見てみると、視線を感じたのか、こちらに笑いかけてきました。

悪い方ではないのでしょうか。ですが、こちらの話を聞いていませんね。

「はいよく。飲み物お待たせ！……なんだい、この状況？」

この場のピリピリとした空気にカワサキさんが不思議がる。

ランタンが怒ったように、実際そうなのでしょう……調子を荒げて言います。

「ナンパよ！こっちはゆつくりしたいのに、困るわ！」

「ああ、困らせる気はなかったんだ。返事をもらったら帰るよ」

「ノー」

「え？」

「答えはノーよ。さあ、帰って」

「どうしてノーなんだい？」

「私、ソードナイトと付き合っているもの」

「えーと、つまり……リーノちゃんが……」

「ちゃん付けはやめてください。嫌です」

「ごめんよ。リーノとアーニャはそれぞれメタナイト卿とブレイドナイトさんと付き合っているんだろう？それで、ランタンもソードナイトさんと付き合っているのかい？」

「呼び捨てにしないで。それをしてもいいのは……」

「私たちだけだな」

「メタナイト卿！」

「お前が、以前にもリーノたちに声をかけたのだな」

「……そうだよ」

「ふむ。少し話せるか？向こうで」

「ここじゃダメなのかい？」

「彼女たちは休んでいる。その近くで問答する気はない。さあ、こちらだ」

メタナイト卿は早足でお店から出ていきました。男性はそのあとを追って行きました。

二人がいなくなつて、カワサキさんが言いました。

「店の外に、塩、撒いところかな。店の中でナンパとか困るもん」

およそ十分後にメタナイト卿が帰つてきました。

多分、すつきりされた様子です。

「話をつけた。もう話しかけてこない。安心するといいい」

わたくしたちは喜びました。

なにがあつたのかは、誰も聞きませんでした。

メタナイト卿のことですもの、きつと穩便に済ませたはずですわ。

それから、メタナイト卿はわたくしたちと一緒に帰ることになりました。

お菓子の材料を、重い荷物を持つてくださつて助かりました。途中で、軽い荷物と交換しました。

「最近、筋トレの効果が出てきたのか、重い荷物でも楽に運べますの。ですから、持たせてください」

「わかつた。では、二人の荷物を持とう」

その言葉にアーニヤが声を上げます。

「そんな！悪いですわ」

「良いのだ。さあ、貸してくれ」

重い荷物を、メタナイト卿は軽々と持ち上げてしまいます。

そして、また歩き出します。わたくしたちはあとに続きました。

メタナイト卿はわたくしの部屋まで、重い荷物を運んでくださいました。

そのお礼にとお茶に誘いますが、遠慮されます。

理由は部下のお二人を待たせているからだとか。

アーニヤが「でしたら」と言います。

「後日みなさんに差し入れを持っていきます。何か、リクエストはありますか？」

「……私は」

メタナイト卿がわたくしに目を向けます。そして呟かれました。

「おにぎりが、食べたいな」

それは、以前メタナイト卿に差し入れたことがある物です。

また食べたいと思っただけで嬉しいですね。

わたくしは何度も領きました。

「作ります。必ず」

「他にはないかしら」

ランタンは三人にもっと作ってあげたいようです。

メタナイト卿は一瞬考えて「弁当のようにおかずがあるものが良いな」と話されました。

「前に作った弁当みたいな感じね。少し豪華にしましょうか？」

「今、忙しいのだろう？できる範囲でかまわない」

「好きな人たちに贈るお弁当を作るのに、手は抜けません」

わたくしたちは穏やかに笑みをこぼします。

メタナイト卿も、つられて笑いました。

「楽しみに待っている。弁当は、いつでも良い」

「でしたら、数日後のパーティーが終わるまでお待ちいただけますか？」

「パーティー？」

「カービイがこの村にやってきて一周年のパーティーがあるの。開催場所はカービイの家付近で、時間は夕方から夜よ」

「カービイと、あと陛下と閣下には内緒なのです」

「わかった。ソードとブレイドには知らせる。あとは内密にしよう」
「よろしく願います」

そうして、メタナイト卿は部屋から出て行きました。

パーティー当日。

日々の業務を終えて、ヘトヘトになった体を引きずって城から出ます。

みなさんに渡すお菓子も準備でき、カービーへのプレゼントも用意できました。喜んでもらえるといいですね。

想像してにこにこしていると、パーティー会場から花火の音が聞こえてきました。

夜空を見上げると、花火と共に打ち上がる陛下と閣下が見えました。

わたくしは荷物が落ちることも気にせず、陛下たちの元へ走りました。

「陛下！閣下！」

「危ない、近づくと危険だ！落ちてくるのを待つのだ」

メタナイト卿に止められました。

わたくしは首を振ります。

「地面に激突しないようにしてあげたいのです！」

「そなたの細腕では無理だ。氷を使え」

「……い・わかりました」

上から降ってくる人を受け止めるとはなんてやったことがあります。

ですが、滑り台の要領で受け止めれば、落下は避けられるはずですよ。

わたくしは巨大な滑り台を作り出し、落ちてくる陛下たちを痛くないように受け止めます。そして近くの池の中に滑り台の出口を作りました。

二人は激しい音をたてて、池の中に落ちました。

慌てて向かい、池の淵に立ちます。陛下と閣下はすぐに顔を出されました。

「リーノ、なんで池の中に落とすゾイ!!!」

「地面に落ちたら転んでしまうとと思ったからです。それなら濡れてしまいますが、池の中に放り込んだ方が怪我をしないと考えました」

「良いのではないか？ 事実、怪我はしていません」

メタナイト卿が賛同してくれます。

閣下が怒りました。

「でも、おかげでこっちはびしょ濡れでゲスよ!!!」

「それぐらいいいでしょ！ 怪我するよりずっとマシだわ」

「そーそー」

フォーム様とブン様が仰います。

陛下と閣下に味方をしてくれる人がいないので、お二方は次の言葉を紡げませんでした。

そこに村長さんたち村の方々も来ました。

「陛下、エスカルゴン殿、ご無事でしたか。いやはや、良かったですぞ。体をはった見事な見せ物でした」

「みな、大いに楽しませていただきました」

村長さんとボルンさんが陛下と閣下を褒めます。

陛下は嬉しそうに笑いました。

「デハハハハハ！当然ゾイ！ワシのプレゼントが一番に決まっておる！……へっくち」

「大変！陛下、閣下、早く池から上がってください。風邪を引いちゃいますわ」

「誰のせいでゲスか、つたく……おー冷えるでゲス」

「すみません……」

持っていたハンカチで陛下の顔についた水滴を取ります。

「リーノ」

「アーニヤ、ランタン。二人もハンカチを出してください」

「かしこまりました」

「わかりました」

二人のハンカチは閣下に渡されました。閣下はその二つで全身を拭かれます。

「ありがとうでゲス。あー、帰って風呂に入りたいでゲスよお」

「城に戻るゾイ。ワドルデイ共、撤収!!」

「陛下に続けー!!」

陛下の後を追うワドルドゥ隊長と、隊長が率いるワドルデイたち。

彼らならばお風呂の用意などしてくれることでしょう。

「ハンカチ、持つて行かれちゃいましたね」

「後で返してくださいますよ。陛下は律儀なところがありませんから」

「ところで私たちはどうするの? パーティーに参加するの?」

「ぜひ、そうしてちょうだい! みんな、リーノたちを待つてたんだからー!」

「お土産あるんだろ? なあ、くれよ!」

ブン様の「お土産」という言葉を聞いた村人たちが、ザワザワと囁き合いました。

みんな楽しみにしている様子です。

わたくしは嬉しくなって、すぐにお菓子を配ろうとしました。

けれど、荷物を持っていませんでした。落としていたことをすっかり忘れていたので

す。

「あ、荷物が……」

「ここよ。荷物を放り出して走っちゃったときは驚いたわ」
「ランタン、ありがとうございます！」

どうやらランタンが拾っていてくれたみたいです。

わたくしは荷物から、一番立派な袋を取り出してカービイに差し上げました。

「カービイ、一周年記念おめでとうございます」

「ほよほよー！」

幼き戦士は飛び上がった喜んでくれました。

チョコココパセル

「リーノ、これ知ってる?」

昼ごろ、城の廊下で掃除をしているときにブン様と会いました。

作業の手を止めて、手渡された何かを受け取ります。

手のひらサイズのフィギュアです。

「これは、兵士でしょうか?」

「そう! チョココパセルの銀河戦士団シリーズの兵士なんだ! 今、超流行っているんだぜ!!」

「それは楽しそうですね。お友達と集めるともつと楽しめそうです」

「そうなんだ! それ、リーノに一個やるよ」

「いいのですか? 大切なものでは?」

「いいんだ。俺なんかもう六十個近く持つてるからさ」

「そんなにたくさん……すごいですわ。では、ありがたく受け取らせていただきます。ありがとうございます。ブン様」

「にひひ、リーノも一緒に集めようぜ！じゃあな」

手を降り、去っていくブン様の背中を見ます。

わたくしは手のひらの兵士を大切にハンカチで包みます。それをポケットに入れて掃除に戻りました。

頭の中はチョコカプセルのことでいっぱいです。

ついに、チョコエッグならぬチョコカプセル回が来ましたわ!!

銀河戦士団箱推しのわたくし、お財布が火を噴きましてよ!!!

ついに！ついに来たのですわ!!

今日、コンビニに行っても売り切れてしまう可能性があります。

明日の朝、城への手紙がないか郵便局へ行くついでに、コンビニに寄りましょう。

その日の夜、アーニヤとランタンを自室に招きました。

お茶を飲みつつ、三戦士たちに渡すお弁当について話し合いました。

ランタンがボールペンをくるりと回しながら言います。ペン回し、わたくしできないんですよね。上手です。

「毎回お肉系じゃ面白くないわよね。今回は魚にする？」

「それもいいですね」

「では、和風にまとめますか？魚はフライにして、だし巻き卵をメインに置いて、煮物を添えて……」

「それなら野菜もたくさん食べてもらえそうです！」

「なら、決まりね。思ったより早く決まっちゃった。この後はコラージュ作りでもしましようか？」

「賛成です！」

「あの、コラージュを作りながらでいいから、二人に話したいことがあります」

「なあに？改まって」

「どうかしたのですか？」

「村で子供たちに流行りのチョコココカプセルを知っていますか？」

二人は「ああ」と言いました。

何か知っている様子です。

「コンビニの商品らしいですね。子供たちだけではなく、大人たちの……特に男性の間でも流行っているとか」

「すごい売上いらしいわよ。で、それがどうかしたの？」

「今日、ブン様からいただいた本物のフィギュアがあります」

ポケットからハンカチに包まれたものを取り出します。テーブルに置いて包みを開

きました。

中から手のひらサイズの兵士のフィギュアが出てきました。

アーニヤとランタンはじつくりとフィギュアを見ました。彼女たちが興味を持ってくれたらいいなと思いつつ、わたくしはフィギュアをうつとりと眺めます。

「すぐくかつこいいので収集しようと思っっています」

「本気？」

「はい。えーと、メタナイト卿のように、かつこよくて素敵ですから」

「なるほどね。確かに、恋人が関係していたら、集めたくなるわよね」

ランタンが頷きます。

恋人と関係なく銀河戦士団に憧れましたから、そのかつこよさの説明したかったのですが……上手くいきませんでしたわ。

でも、ランタンが言うことも間違いではありません。メタナイト卿の昔のお仕事なので。興味があります。

アーニヤがまるで妹を見守るように微笑みます。

「すべて集まるといいですね。リーノ」

「ええ、楽しみです」

「お金の管理、気をつけなさいよ。メタナイト卿のために貯蓄しているんでしょ？」

「ありがとう、ランタン。やりすぎないように気をつけますね」

実はそうなのです。

メタナイト卿から青バラのコンパクトをいただいたので、お返しのプレゼントの代金を貯めています。

何を贈るのか、まだ決めていません。けれど、メタナイト卿が喜んでくれるものを贈りたいです。それが高くても困らないように、今から貯蓄する必要がありますのです。

そういつたことも覚えていてくれる友人たちには、頭が下がります。

翌日、朝。

郵便局からの帰り道、コンビニに寄りました。

「いらっしゃいー！」

「おはようございます。お邪魔します」

コンビニの店主、タゴさんが迎えてくれました。

店内はお客さんがおらずがらんとしています。てつきりチョコカプセル目当ての子供たちがすでにいますと思っただけですが……？

「この時間は空いているんですね」

「そうだね。大人が来るには早いし、子供たちは家事手伝いをしてお金をもらってから来店するから、この時間は空いているよ。それで、今日は何を買うんだい？」

「えと、その、チョコカプセルを少しください」

「リーノもハマったの!？」

目をギョツとさせてタゴさんが驚きます。

そんなに驚くことでしょうか？

「ハマったというか、ブン様からいただいたフィギュアがカッコよかったので、集めたくありません……」

「フフフ！それをハマったって言うんだよ！嬉しいな！女性客にもウケて欲しかったんだ。リーノが注目しているってわかれば、村の女性陣も注目してくれるぞ！」

「そうでしょうか？」

「そうだよ！」

そんなに簡単にいくとは思えないのですが……。

とにかく、チョコカプセルを買って帰りましょう。

「とりあえず、チョコカプセル十個いただきますね」

「それだけでいいの？」

「たくさんありますよ、チョコを食べきれませんから」

それにお金を使いすぎてしまします。

チョコカプセルの棚の上の十個を抱えてレジに行きました。

用事を済ませたわたくしは帰城しました。

早くチョコカプセルを開封したかったので、厨房を借りることにしました。一階の厨房でガサガサとカプセル型のチョコを開けていきます。チョコはお皿の上に置いて中のフィギュアを並べます。

兵士が八体、ナツクルジョーのお父様とオーサー卿が当たりました。

初めてでこれは良い結果です。

わたくしは嬉しくて、にやにやとフィギュアを眺めます。

「なーに笑っているでゲスカ」

「閣下」

そこに閣下が入って来られました。

閣下はわたくしが机に置いたチョコとフィギュアを見比べます。

「ほーん。お菓子の中にフィギュアが入っていたでゲスカ。ちよつと見せてくれでゲス」

「ど、どうぞで」

「これは、中々、かつこいいでゲスな……」

「タゴさんのコンビニで販売しているチョコカプセルです。他にも、こんなに種類があるんですよ」

兵士のフィギュアをじっくりと見られている閣下には、チョコカプセルの箱を渡しました。

裏面には、どんなフィギュアが出てくるか紹介されています。

「なるほど。今そこにあるのがレアものでゲスか」

「あげませんよ」

「ケチ！育てた恩を忘れたでゲスか！」

「こんなことで、そのようなことを仰らないでくださいませ……。お店に行けばもっとたくさん買えますわ。今から行ってみてはどうでしょうか」

「それでゲスね。リーノ、ありがとうでゲスよ」

「どういたしまして。昼食には戻ってきてくださいね」

閣下は走り去りました。

その背を見送りつつ、わたくしは考えるのです。

デザートやお菓子に、しばらくチョコを使用するのをやめておこうと。

それから、閣下も本格的にチョコカプセルにハマったようでした。

ほぼ毎日のようにチョコカプセルを買いに出かけられているようです。

チョコカプセルの流行りは閣下から陛下へ伝わりました。

その日のうちにお店に陳列されていたチョコカプセルをすべて購入されたと、閣下から聞いたときは驚きました。

やはり陛下は行動力があります。素晴らしいことです。

チョコカプセルの銀河戦士団シリーズをコンプリートしたという方が出始めたころ。

新しいレアが登場しました。

閣下が仰るには、それはメタナイト卿だということです。

その話を聞いてから、一日中メタナイト卿のフィギュアのことばかり考えておりました。

正直に申し上げます。とても欲しいのです。

ですがお店中のチョコカプセルを買うことはできません。

フィギュアを手に入れられるのはいつになるのか、そう考えるとため息が出ました。

「どうかしたのか？」

「いいえ、その、大したことではないのですが……」

「なんでもいい。話してくれ」

夜。仕事が終わわり、本物のメタナイト卿と自宅でデート中です。

青い恋人はいつだって優しく、わたくしの背を押してくれます。

今回もそうです。わたくしは「もうご存知かもしれませんが」と前置きして話を始めます。

「村で流行っているチョコカプセルの新作のレアフィギュアが欲しいのです」

「私のフィギュアか」

「そうです。ご存知だったんですね」

「昼前にフォームが教えてくれた。いよいよ私もレアものだ」

「おめでとうございます。素敵なことですわ」

「ありがとう、リーノ。さて、人形のことだが」

「はい」

「作ろうか？」

その言葉に驚いて、言葉を失いました。

メタナイト卿をまじまじと見つめてしまいます。

メタナイト卿はわたくしを真っ直ぐ見つめました。

「木彫りで良ければ心得がある」

「良いの……ですか？忙しいでしょう？」

「休憩の合間に、息抜きでやろう。……もらってくれるか？」

わたくしはメタナイト卿の手を握り、何度も頷きます。

「ください。ご迷惑でなければ、作って欲しいです」

「迷惑ではない。どうやら私は、恋人には何かとプレゼントしたくなる質のようだからな。もらってくれると嬉しい」

穏やかに言葉にする彼の表情は、やっぱり見えませんけれど。微笑んでいる気がしました。

胸が高鳴ります。メタナイト卿への想いが言葉になって出てきました。

「わたくしも何かメタナイト卿にプレゼントしたいと思っています」

「無理はしなくていいぞ？」

「無理ではありません。無茶でもありません。わたくしもあなたに贈りたいのです。何

か、欲しいものはありませんか？」

メタナイト卿は少しの間、考えられました。

そしてゆっくりと言葉を紡がれます。

「では、揃いの懐中時計を二つ。君と、私に」

胸がまた、高鳴りました。

嬉しくて、喜びが体から溢れるようです。

潤む視界の中で、メタナイト卿は一際輝いているようでした。

「……喜んで、贈らせていただきますわ」

わたくしはゆつたりとメタナイト卿にもたれかかりました。

メタナイト卿はわたくしの肩を優しく抱きました。

チョコカプセルの人氣が落ち着いてきたころ。

新しいシリーズが発表されました。

その名もファイターシリーズだとか。

ファイターシリーズが発売された日も、やはりブン様に教えていただきました。

城の一階部分、洗濯物を干す場所で少しおしゃべりします。

「リーノもやっぱり買うだろ?」

「わたくしは、今回はやめておきます」

なんとなく嫌な予感がします。多分、ホーリーナイトメア社絡みだと思うのです。

「そっか。じゃあ、欲しくなったらいつでも言つてよ。被つたやつでいいならあげるか

らっ

「ありがとうございます。ブン様」

ブン様はお部屋へ帰られました。

わたくしは洗濯物が一段落したのち、メタナイト卿の元へ急ぎました。

なんの証拠も得られていないため「少し様子を見よう」とメタナイト卿に提案されました。

確かにその通りですわ。

焦りは禁物です。本当にホーリーナイトメア社のものか判明してからでも、遅くはないはずですよ。

それでも気になって仕方ありませんが……。今日は緊張しつつ仕事をこなすことになりました。

事件は夜中に起きました。

ガタガタと扉が叩かれる音で目が覚めました。

「メタナイト卿？」

いえ、違う気がします。この騒ぎは一体なんでしょうか？

ベッドから起き上がり、パジャマの上からセーターを羽織ります。

そつとドアを開けて廊下を窺いました。

何か、わたくしよりもずつと背の低いものが暴れていました。

それもたくさんです。

「ひっ」

魔獣でしょうか？いえ、そんなことよりも！

わたくしは勇気を振り絞り、廊下へと出ました。跳ねている魔獣を無視してアーニヤとランタンの部屋に急ぎます。

二人とも廊下に出ていたので、すぐに見つかりました。

わたくしは叫びました。

「二人とも伏せてください！」

二人が気づいて体を低くした瞬間を見計らい、わたくしは周囲に凍える吹雪の風を巻き起こしました。

風の中を飛ぶ氷のつぶては、魔獣たちをあつという間に消滅させます。

「弱すぎます……ということは、このザコたちに意味はない？」

ただ混乱を招くことが目的だったのかしら？ううん、そんなはずはないわ。

だってホーリーナイトメディア社が関わっているはずですよ。

それよりも今はアーニヤとランタンが気がかりです。

辺り一帯に魔獣の姿が消えたため、二人の親友はわたくしの傍に来ました。

「リーノ、ありがとう」

「お陰で助かりました」

「良いのです。さあ、安全な場所まで向かいましょう」

「三戦士のところに行くのね」

「先頭はリーノに任せてもいいですか？」

「もちろんです！頼ってくださいね」

わたくしたちは廊下を走り抜けました。

道中の魔獣はわたくしの広範囲攻撃で消滅させます。氷を出しつばなしにすることは大変です。なので、魔獣が寄ってこない限り氷は出さないようにしました。

メタナイト卿のお部屋近くの廊下で、三戦士に会いました。彼らもまた魔獣を倒していました。

休みなく戦っていたのか、辺りの魔獣はほとんどいません。

「メタナイト卿！」

「リーノ！みな無事だったか」

「はい。道中の魔獣もできる限りやつつけました。この辺りは安全かと思えます」

「そうか。よくやった」

メタナイト卿に褒められると思っておらず、嬉しくて頬が緩みました。ですが、すぐに気を引き締めます。

「この事件の原因はやはり……」

「十中八九、陛下だろうな」

「ああ、陛下下つたらなんてことを」

わたくしは村のみんなに申し訳ない気持ちでいっぱいになりました。

アーニヤが肩をさすつてくれます。

ランタンが呆れたようにため息を吐きました。

「城がこんな感じじゃ、村も大変なことになっているわね」

わたくしは、ハツとなりました。どうして村のことまで気がまわらなかったのでしょうか。

「すぐに行かなくちゃ……」

「待て、私も行こう。ソード、ブレイド。ランタンとアーニヤを守ってここに残るのだ」

「かしこまりました」

「必ず守り抜きます」

「ダメよ！リーノも残って!!」

「残りません。わたくしはもう、強いのですから」

その言葉に、ランタンは衝撃を受けた様子でした。ゆっくりと瞬きをして、それから口を開きました。

「わかった。怪我しちやダメだからね」

「気をつけてくださいね。リーノ」

「ありがとうございます。気をつけて行つてきます」

わたくしとメタナイト卿は走り出しました。

玉座の間に陛下たちはおらず、どこかに出かけているようです。

メタナイト卿がカービィの家が気になる、と仰つたのでそちらへ向かいました。

カービィの家の前にはフーム様たちや村人たちがいて、陛下たちもいらつしやいました。

ちようど陛下が高らかに宣言します。

「ルールに則つたスポーツで戦うゾー！」

陛下たち以外が、ポカンとして顔を見合わせます。

そんなわたくしたちを放つて、陛下と閣下は笑いながら車で去りました。

その後ろに、あのザコ魔獣たちがくつついていきます。村からやつて来ただろうたぐさんの魔獣が、です。

あの魔獣たちを一体どこに住まわせるのか、気になりました。まさか城でしようか？
「メタナイト卿、わたくしは陛下のあとを追います。そして何か情報を掴みますわ」
「わかった。私は少しここに残る。アーニヤたちには私から伝えるから、そなたは終わり次第そのまま帰るといい。夜道に気をつけてな」
「はい。では、これで」

城に戻り、玉座の間に急ぎます。

玉座の間に行くと、陛下がちょうどワドルドウ隊長に何かを命令しているところでした。

「では、行け！」

「はっ！」

ワドルドウ隊長はわたくしの横を通り、部屋から出ていきました。

わたくしは奥の玉座に座る陛下の前へ行きます。

「陛下、ご機嫌麗しゅう」

「挨拶はよい。そちに命ずる。コロシム建設を手伝うゾイ」

「お断りします」

「逆らうか!!!」

「今回の騒動のせいで、わたくしの大切な親友二人が魔獣に怪我をさせられるところだったんです！ご命令には従えませんが……！」

わたくしはぎろりと睨みました。

陛下も閣下もたじろいでいます。

「陛下、ここは引き下がった方が……！」

「うぬぬ……！今日のご飯は大盛りのスペシャルにするゾイ!!!」

「かしこまりました。陛下の好物でんご盛りな和食を作らせていただきますわ。夕飯時にお出しします」

「それで手を打ったゾイ！」

今日の仕事の一つ増えましたが、コロシウム建設を手伝うよりは良いはずです。

アーニヤもランタンも許してくれるでしょう。

その日の夕飯に、陛下たちには和食だけどハンバーグもスパゲッティもフライも入った御膳をお出ししました。

たいそう喜んでいただけただけなので、機嫌がなおって良かったです。

対戦当日。

カービィは快勝を重ね、全ての強い魔獣に勝ちました！

そして、村人たちが興奮して観客席からコロシアムの舞台に降り、ザコ魔獣を倒し始めたのです。

わたくしもそれに参加しました。

陛下たちのいらっしやったVIP席から氷の滑り台を造り、舞台に降ります。氷のつぶてを作り、村人に当たらないように魔獣を倒します。

村人たちの数以上にいた魔獣は、あっという間に倒されました。

あなたへ、プレゼント

朝の早い時間、村で郵便局長のモサさんにお会いしました。

モサさんはいろんな人に会うため、村の内外の情報に詳しい方です。いつものおしゃべりのついでに、懐中時計を売っているお店について聞いてみました。

「懐中時計が欲しいのかい？それなら、隣り町のパキサンドラという時計屋に行くとい
い。あそこの懐中時計は大切に売ってやれば五十年使っても壊れん」

「隣り町のパキサンドラというお店ですね。わかりました。モサさん、ありがとうございます
います」

わたくしは、良いことを教えていただいたお礼をしようと思いました。

モサさんは隣り町の芋羊羹が大好きだったはず。それをお土産にしましょう。

村でお城の食材を注文したら、すぐに帰城します。

そして陛下たちを探しました。陛下と閣下は、中庭でゴルフをされていました。

お二人に話しかけて、数日ほど有給を申請します。

陛下は、こちらを見向きもせずにあります。

「ランタンとアーニヤが仕事するなら、まあ良いゾイ」

「早く帰ってくるでゲスよ。それと知らない奴についてっちゃダメでゲスからね」

「……心得ております」

気をつけていても、攫われちゃうときがあるのですが。そういうときはどうすればいいのでしょうか？

声に出してしまうと、質問攻めにされますので口は結んでおきます。

陛下と閣下に話を通したあとは、アーニヤとランタンに伝えます。

二人は城の一階、洗濯場にて洗濯物を干していました。

話をする二人とも、以前の事件を思い出して顔色を悪くしました。

アーニヤが不安そうな声で言います。

「あの、メタナイト卿に同行をお願いできないのでしょうか」

「三戦士とも忙しいから難しいかと……」

「聞いてみたの？」

「いえ、まだです」

「なら、聞いてみましょう。もしかしたら町に行く用事があるかもしれないし」

「そう、ですね。聞いてみてから、考えましようか」

「……というわけで、一緒に隣り町へ行ってくださいませんか？」

「わかった。行こう」

メタナイト卿のお部屋にて、三人が集まっているところを訪ねました。

メタナイト卿は二つ返事で了承されるので、驚きます。

「仕事の方はよろしいのですか？」

「かまわない。ちょうど隣り町に用事があつたのだ」

「その用事とは？」

「秘密だ」

おそらくハルバード建設に必要な資材を購入したいのでしよう。

わたくしは深く詮索してはいけなと思います、質問は避けました。

「わかりました。では、その時間は別行動ですわね」

「詳細は夜にでも決めよう。何時ごろ空いている？」

「夜の八時半以降でしたら、いつでも大丈夫です」

「では九時に会いに行こう」

「かしこまりました。お待ちしておりますわ。それでは、お邪魔しました」

頭を軽く下げて部屋から出ました。

「リーノ」

「はい、メタナイト卿」

部屋を出て、扉を閉めた廊下で後ろを振り返りました。

「そなたなら、いつ来ても歓迎する」

「……嬉しいです。ありがとうございます」

そう言ってくれる、メタナイト卿の気持ちがいへん嬉しかったです。

隣り町への出発は、五日後でした。

出発までに親しい方に旅行すると知らせます。そこでハナさんとサトさんに言われて、気づいたのです。

「そういえば、まだ故郷に帰ったときの土産話を聞いてなかったわね。帰ってきたら、聞かせてちょうだい」

「リーノの故郷、どんなところかしらね」

「そうですね……帰って来たときにでも、お話しします」

故郷から届いたあの手紙、わたくしがヤミカゲに攫われるきつかけとなった本物と思われる手紙。

「確かめに行かなくてはなりませんね」

メタナイト卿にお願いでして、行き先をもう一つ増やしました。
故郷はどんなところか、楽しみですわ。

出発日は曇りときどき晴れ。歩いて旅行するには、ちょうど良い気温です。

太陽が上り出した早朝、メタナイト卿と並んで歩き、後ろにはフォーム様、ブン様、カービーがついてきます。

今日は静かに、緊張した様子で辺りの様子を窺っています。

魔獣がいなか警戒されているのでしよう。わたくしも周りをキョロキョロと見ますが、何もいらないように思えました。

「そこまで警戒しなくても、何もいらないぞ」

「あら、そうなのですか？では、問題ありませんね」

「そうは言ってもよー」

「心配なのよ……」

ブン様とフォーム様はわたくしを見つめます。

その瞳には心配の色が濃く、なんとか払って差し上げたいと思いました。
なので、近くにあった岩を凍らせませす。

「失礼」

一言言ってから、岩を巨大な氷で包みました。

一瞬の出来事にみんなが驚きます。

わたくしは微笑んで、言いました。

「敵はこのように凍らせちゃいますので、わたくしたちが怪我をすることはないかと」

「そうだな。……最近ますます技を練り出す速さに、磨きがかかったようだな」

「ありがとうございます。毎日練習しておりますから、そのお陰ですわね」

和やかなわたくしたちの違つて、子供たちは少し引き気味です。

「はは……これなら、魔獣も怖くないな」

「そうね」

「ぼよぼよ」

それでも、安心してもらえたのでしよう。顔に笑顔が戻っています。

子供たちは元気よく、わたくしたちを送り出してくれました。

歩いて最寄りの駅に到着します。

そこで三十分ほど待ちまして、汽車が来ました。それに乗り込み、隣り町に到着するまで揺られ続けました。

山を越え、野原を通り、田んぼの景色をぼんやりと見つめ、まったりと過ごします。

一時間後、隣り町に到着しました。

ププピレツジよりも大きな町は、人も建物も多く、流れていく人の数も多いです。

「はぐれてはいけません。手を繋ぐか？」

「はい。お願いします」

私たちはお互いの手を繋いで、人の流れに加わりました。

まず、荷物を預けましょうとわたくしは言いました。

ハナさんにおすすめされた、老舗の宿を訪ねます。事前に電話で宿泊予約していただいたのでスムーズに部屋に通してもらえました。

部屋は一つです。初めて恋人同士で宿泊します。とても緊張しますね。

部屋は洋室で、大きなベッドルームが一つにユニットバスがついています。

コンパクトな造りは、見たことがないけれど記憶の中にあるホテルや旅館の部屋を思い出させます。

「少し休んでいくか？それとも食べていくか？宿の中には食堂があるらしい」

「食堂に行きたいですわ。それから、懐中時計のお店に行きましょう」

「わかった」

必要最低限の荷物だけを持ち、宿の中の和風な食堂の中に入りました。

のれんをくぐり、受付で男性の方に会います。

「今の時間帯なら、すぐにご案内できます。どうぞ、奥へお進みください」

「ありがとうございます」

奥のホールは広くて綺麗でした。特に外側は一面ガラス張りで、風景がよく見え
ました。

昼食には早い時間帯のためか、お客さんはわたくしたちの他に数組だけです。

ここの食堂はビュッフェ形式のようです。

わたくしたちは料理が取りやすいように、近い席に座りました。

食事はたいへんおいしかったです。

レシピを教えてほしいと思うほどでした。叶うことなら、わたくしが作って村のみ
なに食べさせてあげたいですね。

食事の次は時計屋さんに向かいます。町の中心地にあるようなので、少し歩きまし
た。メタナイト卿とのんびり散歩できるのは楽しいですわ。

目的地の時計屋さんは、大きな看板を掲げていたのですぐに見つけられました。中に入るとベルが店内に響きます。

「いらっしやい」

「お邪魔します」

奥から店主さんらしきおじいさんが出て来ました。

その方は、カウンターの内側に座ると新聞を読み始めます。こちらは自由にしても良いということでしょう。

「では、探しましょうか」

「そうしよう」

メタナイト卿と一緒にゆっくりと店内を見てまわります。

落ち着いた雰囲気の内内は、時間さえもゆっくりと過ぎるようです。

懐中時計はお店の中央にありました。

ガラスのケースに入れられて、選ばれるのを待っているようです。

たくさん種類がある中で、わたくしが気に入ったのは星形の懐中時計です。

作り込みが細やかで、色合いもシックでとても良いですね。先は丸まってるのでポケットに入れても、破れることはなさそうです。

値段も、二つ合わせても予算内なのです。その点も良いですね。

星形の懐中時計を眺めていると、メタナイト卿が声をかけられました。

「それが良いのか？」

「はい。メタナイト卿はどれがいいですか？」

「君の選んだものが良い。君が選んでくれたものが欲しいから」

「わかりました。では、この星形にしましょう」

「決まったかい？」

店主さんが話しかけてきました。音もなく後ろにいらつしやつたので、わたくしは少し驚きました。

「え、ええ。こちらの星形の懐中時計を二つ、いただけますか？」

「あいよ。で、真ん中の宝石はどうする？何の石がいいんだ？」

「変えられるのですか？」

「ああ。揃いで買ってくれる客には、無料サービスでやっているんだ。で、どうする？」

「ぜひ、お願いします。よろしいですか？メタナイト卿」

「ああ、変えてもらおう」

店主さんはじつとわたくしたちの顔を見ました。

「ふむ。じゃあ、濃い紫と明るい金でいいかな？」

わたくしは瞳の色が濃い紫色で、メタナイト卿の現在の瞳の色が金色です。

メタナイト卿は待ったをかけました。

「いや、濃い青色と濃い紫色にしてください」

「?それでいいのかい?」

「はい、お願いします」

「わかった。昼前に来てくれたからな。今日の夕方にはできるよ」

「随分早いんですね」

「迅速に仕事をするのがうちのモットーだからな」

店主さんは、わたくしたちが選んだ懐中時計をケースから取り出して「あとは任せておけ」と言いました。

注文書に記入し、お金を払い、わたくしたちは再び町の中を歩きます。

次はメタナイト卿の用事を済ませます。

港へはさびぶん離れていましたので、馬車に乗って向かいます。

汽車に乗ることも、馬車に乗ることも、たいへん新鮮で楽しいですね。

十五分ほど揺られて到着した先は、繁華街でした。

広く、大きく、たくさんのお店があります。子供たちが遊ぶ、大きな公園もありました。

メタナイト卿が「こちらだ」と案内板に案内してくださいました。

「私はこれからドックのある方に行く。リーノはどうする？」

「そうですね、本でも読みつつ待ってはいかがでしょうか？」

「では、まず本屋に行くか？」

「はい。行き先はメモに書いておきますから、一人でも行けますわ。次に待ち合わせの場所ですけれど、本屋さんの隣にあるカフェでいいですか？」

「わかった。では、そこで集合しよう」

メタナイト卿の背中を見送ってから、わたくしは繁華街の中央にある本屋さんへと歩きました。

本屋さんの品揃えは、それはもう豊富でした。大きい店舗なので、迷子になってしまいうのではないかと思いました。

どの本を購入するのか、たいへん悩みました。刺繍、大好きな小説の続本、新しい本……。

決めました。村には置いていない、レース編みの本を一冊購入します。

この本を読みつつ、編み物をして待っていました。

隣りのカフェに行きます。

今日が平日で、混む時間を過ぎたためか、空いていました。飲み物と軽食を注文して、

外からよく見えるテラス席でメタナイト卿を待ちます。

今日のような空いた時間のために、わたくしはレース編みのセットを持ち歩いていました。軽くて持ち運びしやすいので、こういうとき便利ですね。

また、テレビに出演できるかもしれない。その時は、またアーニヤたちとのハンドメイド作品を身につけて登場しようと思うのです。

作品を気に入って、購入してくださる方がいるかもしれません。そのお金を貯めて、いつか三人のお店を出すのです。

ふと、想像しました。

そのとき、わたくしはお城でメイドをしてるのでしでしょうか？

そのときも、わたくしたち三人は一緒でしょうか？

未来を知りたくて空を見上げますが、青空が広がっていました。

レース糸を編んで、二時間が経過した頃。

さすがに肩がこりはじめてきました。

椅子の背もたれに体を預けて、力を抜きます。

作品はいい感じにできていました。今回はイヤリングにしましょう。そうすれば、子供でも身につけやすいはずですわ。

「待たせた」

突然、声をかけられました。

待ちに待った、あの優しい声。

わたくしは咄嗟に、首を振りました。

「——さほど、待っていませんわ。こうして、楽しく編んでいましたので」

作っている最中の作品を見せます。

メタナイト卿は「そうか」と、安心したようでした。

その後、観光しつつ早めの夕食をいただきました。

日が落ちる前に時計屋さんに赴き、時計を受け取りました。

受け取ったその場で、お互いの時計を交換します。

「これでいつでも、そなたと共にあれる」

そう、メタナイト卿が仰るものですから、わたくしはたいへん顔が赤くなりました。

日が沈んだ後、宿に戻り、一泊しました。

次はわたくしの生まれ故郷に向かいます。

生まれ故郷はのどかな町でした。

静かで自然が溢れていて、ププビレッジに似ています。

その町の中で、一番大きな屋敷が目的地でした。

石造りの大きな二階建てのお屋敷を見て、わたくしは驚きます。

想像よりずっと大きかったです。

「どうした？」

「大きなお屋敷で驚きました……。わたくし、変な格好ではありませんか？」

「今日も素敵だ」

「ありがとうございます。……。ふう、ベルを鳴らしますね」

門のところへ備え付けられたベルを鳴らします。

待った時間は長く感じました。きっとわたくしが緊張していたためですわね。

奥のお屋敷からではなく、右手側から顔を出したのは、おじいさんさんでした。

「こんにちは。なにか御用ですか？」

「こんにちは。リーノと申します。両親の遺品整理に来ました」

「……………」

「あの……………」

「君が、リーノか。大きく、なったなあ」

大粒の涙を流すおじいさんは、暖かく微笑みました。

わたくしたちはおじいさんに案内されて、お屋敷に入ります。

玄関は予想通り大きいです。吹き抜けになっていて、天井から明かりが差し込んで……玄関が明るくてとても綺麗ですわ。

そこに一人の執事さんがやつてきました。

「旦那様、お帰りなさいませ。おや、後ろの方々はお客様でしょうか？」

「グラント。孫のリーノと、その恋人のメタナイト殿だ。着替えてくるので、あとを頼む」

「かしこまりました。ではアリーとマナを呼びましょう」

「そうしてくれ」

執事さんが玄関でベルをチリリンと響かせると、今度はメイドさんが二人現れました。

一人はおばあさんで、もう一人はフォーム様ぐらいの子供です。

「はいはい。何か御用でしょうか？あら、お客様ですね」

「アリー、先日手紙をくださったリーノ様とメタナイト殿だ。応接室にご案内するよう」

「かしこまりました。リーノ様、メタナイト様。私、アリーと申します。こちらは見習いのマナ。私とグラントの孫ですわ」

「こんにちは。マナです」

「こんにちは。ご丁寧ありがとうございます。リーノです」

「メタナイトだ。本日はお邪魔します」

挨拶もそこそこに、わたくしたちは一階の日当たりの良い応接室に通されました。

応接室は広いお部屋で、一人用ソファが向かい合って四つと大きなテーブルがあります。奥には大きな窓があつて、様々な種類の花が咲き乱れる中庭が見えました。

アリーさんに従つて上座のソファに座り、出された紅茶をいただきます。

十分後に、館の主人と奥様は現れました。

わたくしのお祖父様と、お祖母様です。

お祖父様は先ほど会いました。服と髪を整えると印象がガラリと変わります。穏やかな雰囲気はそのままですが、さつきよりもずっと上品で優雅な雰囲気になりました。

初めて会うお祖母様は、例えるならハナさんのようです。優しく、上品で、優雅で、包容力がある雰囲気を感じます。濃いシックな紅のドレスが、その身につけている宝石とよく似合っていました。

お二人とも、わたくしを見て泣きそうに微笑みます。

「あなたのお母さんにそっくりだね」

「瞳の色はお父さんに、似ていますね」

その言葉を聞いて、わたくしも泣きそうになりました。

両親を知っている人に出会えたことが嬉しい。

親族がいてくれたことが嬉しい。

私を拒絶しなかったことが、ありがたくて。

わたくしは言葉を紡げませんでした。

深呼吸をして気持ちを落ち着けます。

ようやく、わたくしたちは話を始めました。

主にわたくしの近況を話しました。祖父母はときせつ、涙を浮かべて話を聞いてくれました。

祖母に「苦労したのね」と言われました。その言葉にわたくしは笑って答えます。

「みんながいてくれたから、毎日楽しかったですよ」

お茶が空になったころ。

祖父母は遺品を持って来ると言って、応接室を出ていかれました。

メイドさんたちは新しいお茶を淹れてくるためにキッチンに行きました。

わたくしたちはわずかな時間をゆったりと楽しむはずでした。

小さな訪問者が現れたのです。

その子は十歳くらいの男の子でした。

利発そうな目を釣り上げていました。

「あなたは……?」

「ここを奪いに来たのか?」

わたくしは、首を振りました。

「いいえ。わたくしの両親の持ち物を受け取りに来たのです。このお屋敷をいただくために訪問したわけではありません」

「でも、お祖母様もお祖父様も言ってたぞ! 正当な所有者はリーノっていう孫のものだって! 俺と、母さんじゃないって!」

「その、お話しは初耳ですね……」

この話を進めるためには、情報が足りていません。

まずは、男の子に落ち着いてもらうことにしました。

席を立ち上がり、一礼します。

「まずは挨拶を。初めまして、リーノです。あなたのお名前を聞かせてください」

「ナラルだ」

「ナラルくん、ですね。どうぞ一緒に席に座って、お祖父様とお祖母様を待ちませんか?

お話しはそれからでも、遅くないでしょうか？」

「わかった……」

どうやら素直な子のようです。まだまだわたくしたちを警戒していますが、部屋の壁際に置いてあった一人用の椅子を持ってきて、テーブルの近くに座りました。

ちやうどそこに、アリーさんとマナちゃんがお茶を運んできてくれました。

二人はナルルくんの登場に驚きました。そして、今はご主人様たちと四人でお話しさせてあげてほしいと、説得します。

わたくしは、ナルルくんにも同席してほしいと、伝えました。

「この屋敷の所有権のお話しは、彼にも関係ありますよね？同席してくれるとありがたいですね」

「かしこまりました。一応、旦那様と奥様にも確認させていただきます」

「もちろんです。それでいいかな？ナルルくん」

「うん」

その後、応接室に帰ってきた祖父父母の許可もいただきましたので、ナルルくんも同席しました。

祖父父母が持ってきた遺品は、ほとんどが宝飾品で、あとは屋敷の権利書を含めた書類

でした。

母の気に入っていた宝飾品ならば、すでに手元にあります。置いていったということ
は、あまり大事ではないのでしょうか。

館の権利書は……必要ないかな？ 両親のお墓があるのはププビレッジだし、わたく
しの家はあのお城だもの。今は出て行くつもりはありません。

わたくしはその二つを祖父母に管理してもらうことにしました。そして相応しい相
手に渡してもらおうようにお願いします。

お祖父様は言いました。

「いいのか？ どちらも、売れば大きな額になる」

「いいのです。それらは両親の持ち物であっても、私が受け継いだものではありません
から。これまで管理してくださった、お祖父様とお祖母様に任せたいのです。ナルク
ん、これでいいかな？」

「うん」

わたくしとナルクんのやりとりを見て、お祖母様が心配そうに声をかけてきまし
た。

「ナルルに何か言われたのかい？」

「いいえ。ただ、このお屋敷を出て行くことになるのではないかと、心配していたので」

「そうだったの。それは不安だったでしょう。おいで、ナラル」
「はい、お祖母様」

ナラルくんはお祖母様の隣りに行きました。

お祖母様はナラルくんの頭を抱きしめました。

その様子を見て、これで良かったのだと、メタナイト卿と顔を見合わせました。

これにて、わたくしの故郷訪問の旅は終わります。

騎士

旅を終えて、わたくしたちはププブランドに帰ってきました。朝食後から昼前の時間でした。

前と同じように、村に入ると知り合いが出迎えてくれました。わたくしは軽い挨拶を交わして、帰城します。

城に到着したら、メタナイト卿とは別れてそれぞれの部屋に帰ります。去り際にお礼を言いました。

「ありがとうございます。一緒に行けて楽しかったですわ」

「私もだ。次は、観光しないか？」

「ぜひ！お願いします」

次の約束も決まって、嬉しいですね。わたくしは上機嫌で自室に帰りました。

普段のメイド服に着替えて、コンパクトと星形の懐中時計を大切にポケットに入れます。

陛下と閣下のお土産を抱えて、厨房に向かいます。

思った通り、厨房にはアーニヤたちが昼食の準備をしていました。先に気づいてくれたのは、ランタンでした。

「あら！お帰り。帰ってきてたのね」

「お帰りなさい、リーノ」

二人とも、緊張が解けた顔をしています。

不安にさせてしまつて、申し訳ないですね。無事に帰つてこられたので、元気な姿を見せようと思います。

わたくしは普段よりも笑顔を意識して作りました。

「たぐいま！昼食作り手伝いますね」

「疲れてませんか？休んでいてもらつても、いいんですよ」

「そうよ。帰ってきたばかり……ですから」

ランタンの口調が丁寧なものに切り替わりました。その間がなんだかおかしくて、アーニヤと二人笑います。

つられてランタンも笑いました。

昼食作りは手伝いました。わたくしたちとワドルデイたちとで、いつものように食事を食堂に運びます。

わたくしを見たお二方は驚かれました。目をまん丸くさせて。

「リーノ!?いつ帰ったゾイ?」

「先ほど戻りました。今日のデザートは急遽変更しまして、旅のお土産にさせていただきます」

「ほほー!それは楽しみでゲスなあ」

「陛下、閣下」

一二つの視線がこちらを向きます。

わたくしはにこりと笑いました。

「ただいま戻りました」

「よく帰ったゾイ!デハハハハハ」

「おかえりでゲス」

ああ、ようやく帰ってきたと、一息ついた気持ちになりました。昼食はざるそばです。

つるりと食べていただいたあとは、デザートを出しました。

カステラです。それもお一人につき、一本丸々。

陛下はたいへん喜び、閣下も満更ではない様子でした。

「うーむ、うまい!苦さと甘さのハーモニーがたまらんゾイ!」

「こりや何個でもいけるでゲスなあ。コーヒーくれでゲス」
「ただいま」とランタンがコーヒーを注ぎます。

昼食後は大臣一家の部屋へ向かいました。

メーム様に通されて、中に入ります。カービイを含めたみな様がいました。

フーム様とブン様、カービイがわたくしの方に駆け寄ります。

「リーノ、お帰りなさい！」

「心配してたんだぜ」

「ぼーよいー！」

「ご心配おかけしました。こちら、お土産です」

一つの紙袋を、フーム様に渡しました。

ブン様が喜び、嬉しそうに飛び跳ねます。

「いいの？」

「いつもお世話になっておりますから」

「やったー！」

「ブン、騒ぎすぎよ！ごめんなさいね。ありがとう、リーノ」

「喜んでいただけで嬉しいですわ」

次は村に降りました。

モサさん、サトさん、ハナさんの三箇所を周りお土産を渡します。大臣一家と同じお菓子を渡しました。

サトさんと、ハナさんにはいつもお世話になつていたのでそのお礼に。

モサさんは、時計屋さんのことを教えてくださったお礼です。

みなさん、村にはないお菓子屋さんのお菓子が食べられると知つて、喜んでくれました。持つて帰つてくることは大変でした。ですが、こうして喜んでもらえると疲れが吹き

飛びますわ。

簡単に旅の土産話をして、帰城する頃には夕方でした。

それから仕事に参加して、全てが終わるころには夜の九時を迎えます。

九時、わたくしの部屋にアーニヤたちを招待しました。

そして、それぞれ飲み物を注いでから、カステラとクッキーを入れたトレイをテーブルの真ん中に置きました。

アーニヤとランタンは興奮気味に言います。

「これが陛下が食べてらっしゃったカステラね！」

「こちらはみなさんに配ったクッキーですね。カラフルでおいしそうです」

「どうぞ、食べてみてください」

「ありがとうございます。いただきます」

「いただきます」

まったりと三人で過ごす、本当に旅の疲れが癒やされますわ。

それからは旅の話をしました。編み物の本を購入した話になると、二人が見せてほしいと言うので、すぐに持ってきてきます。

ミルクティーを飲んだランタンが「それにしても」と、話を始めました。

「三戦士って秘密が多いわよね」

「そうですね。確かに」

「ですねえ」

「この前、城で働く前はどこにいたのか聞いたのよ。そしたら、まだ言えないって言われちゃってさ」

「ブレイドさんも同じです。いつか話すからって言われてしまつて……」

「大体、仕事でも中々会えないし。どこを見張っているのかしらね」

「そうなんですよ。リーノのところも同じですか？」

「……………質問したら秘密だと、言われることもありますね」

「リーノのところも同じ感じなのね。はあ。ソードのことは信じてるけれど、不安になるわ。今度、気分転換を兼ねてメーベルのところまで占いでしてもらおうかな」

二人がため息を吐き出しました。

わたくしは目を伏せます。

ソードナイトとブレイドナイトって、昔は盗賊やってたんですよね？それは確かに、恋人に伝えづらいでしょうね……。

時間は遡り、昼ごろ。

デェデェ城の地下どこかで。

「今帰った」

「お帰りなさい、卿」

「お帰りなさいませ」

三人の戦士は巨大な空間の隅に集まっていた。

そこには棚や電気ポッド、テーブルなどがあり簡易に食事ができる場所となっていた。

三人はそこに集まり、各々の定位置に座る。

メタナイト卿が持っていた紙袋をテーブルの上に置いた。

「旅行の土産だ。三人で食べよう」

「おお、ありがとうございます」

「今から休憩しようと思うので、いただいても？」

「ああ。私も食べよう」

三人はインスタントコーヒーを注いで、食べる準備をした。

紙皿に、土産のカステラを二つずつ乗せて、それを配る。

一口食べると、元気が湧いてくる。おいしいお菓子に、ソードナイトもブレイドナイ

トも喜んでフオークを進めた。

カステラをあつという間に食べ終えて。三人は談笑する。

ブレイドナイトが言った。

「今回はナイトメアは襲ってこなかったんですね。お二人がご無事で良かったです」

「ああ。何もなくて私としても安心していい」

「今頃、ランタンも安心していいだろうな」

ソードナイトが上の階にいるだろう、恋人のことを考えた。

メタナイト卿たちが出かけていた数日間、ランタンに元気がなかったのだ。食事はあ

まり食べないし、声にも覇気がなかった。何よりも心配していたのだろう。

彼女の力になれなかったことが、歯痒くて。悔しかった。

まだ自分たちを繋ぐ絆は、あまり強くはない。

これから、これから力になればいい。

ソードナイトはそう考えた。

ブレイドナイトは頷いた。

「アーニヤも安心して思う。ランタンと同じように、元気がなかったからな」

「今日から、また元気が戻るだろう。良かったな」

「はい………とここで、卿。折り入って相談があります」

「私からも」

「なんだ？」

空気は一変して、緊張したものに変わる。

メタナイトは、二人の忠実な部下の強ばった雰囲気、魔獣と対峙するかのような気持ちになる。

ソードナイトとブレイドナイトはお互いにアイコンタクトで、先に話すかどうか譲り合った。

ブレイドナイトが口を開く。

「実はアーニヤに、盗賊時代のことをいつ話すか悩んでいまして……」
続いて、ソードナイトも言った。

「それ、私もです！ランタンになんて話せばいいのかわからなくて……」
「ふむ」

メタナイトは体から力を抜いた。

そのことなら、考えてある。

「秘密ならば、私たちは共通のものを抱えている」

「戦艦ハルバードのことですね」

「そうだ。私も秘密をリーノに話せないでいる。つまり、私たちは同じ立場にいるわけだ。……私は、この秘密を打ち明けるときは、ナイトメアと戦う日だと思っている」

「つまり、話すのにもうしばらくかかるんですね」

「そなたたちはどうする？ナイトメアと戦う日に話すか？帰還してから話すか？」

ソードナイトとブレイドナイトは互いの顔を見合わせた。

そして主人の顔の方を向く。

「我等は帰還してから話そうかと」

「すべて終わってから、何もかも打ち明けます」

「わかった。二人の成功を祈る」

数日後。

ええ、あれは昼前のことでした。

晴天でしたわ。わたくしとアーニヤとランタンは、一階の洗濯場で仕事をしていました。

いきなり空が光ったのです。

空に目を向けると、一筋の流れ星が目に入りました。それは村のはずれに落ちました。

アーニヤが言います。

「なんででしょうか、あれ」

ランタンが閃いたと言わんばかりに指を鳴らします。

「宇宙船だったりして」

「そうかもしれませんが。後で村の方に降りるので、みんなに何があったのか聞いてみますね」

「気をつけて行ってきてくださいね」

「ええ、わかりました」

昼食後、村においてみると騎士の話題で持ち切りでした。

「自称騎士、ですか」

カワサキさんのお店にて。

カワサキさん、サモさん、ボルンさん、村長さんが集まっています。

自称騎士にやられたサモさんが話してくれます。

「俺たちのこと、難民とか呼んでいたな。それにメールをお姫様だつて言ってた」

「おかしいですね。メールは生まれも育ちも、このププピレツジなのに」

「そうだろう？メールが嫌がっていたから、止めに入ったんだけど、この通りさ」

「サモさん勇敢ですわ」

「ありがとうございます。リーノ」

村長さんが首を傾げます。

「それにしても、あの人は何者何じやろうな？デデデ陛下のことを魔獣呼ばわりしておったし」

「………え？」

「あーそれね。ブンが原因だよ。ブンが陛下のこと魔獣だつて教えたんだ」

「……まあ、そんなんですの。それは良いことを聞きました。帰ったらブン様に聞いてみますわ」

城の橋の上で待ち伏せをすれば、必ず会えるはず。

わたくしは冷気をまといました。

アーニヤとランタンに仕事を任せて、わたくしは城の橋の上で待ちます。

やがて空が赤くなっていくころ、大勢の人影が見えました。

三戦士たちとフォーム様、ブン様、カービイたちです。

わたくしはみなさんに声をかけました。

「お帰りなさいませ。みなさんお揃いなのですね」

フォーム様が笑顔を見せてくれます。そしてため息を吐きました。

「ただいま。今日は自称騎士が来ててね」

メタナイト卿が次の言葉を続けます。

「先ほど、宇宙に帰ってもらった次第だ」

「そうなのですね。お疲れ様でした。ところで、ブン様」

「ひっ」

抜き足差し足忍び足で横を抜けようとしたブン様を、目の前に陛下の等身大の氷像を

出すことで、止めました。

わたくしは振り返り、ゆつくりと少年に近づきます。

そして、手を握りました。

「挨拶もなく行かれるのは、寂しいですわ」

「ただいま！」

「それとお話がございますの。……陛下を魔獣と言った件について」

「ぐ……やっぱり耳に入ってたんだ」

「ぼよ」

「ブン、諦めて素直に謝りなさい」

「うん……。ごめん！リーノ」

わたくしは頭を振りました。

「謝罪は陛下にお願ひします。よろしいですか？」

「わかった……」

「フーム様、ブン様をお借りしますわ」

「私たちも行く！いいでしょう？」

「もちろん、構いませんわ」

三戦士たちは地下へと進み、私たちは陛下たちがいる食堂へ向かいました。

食事の前に、ブン様は陛下に謝りました。わたくしも一緒に頭を下げました。

陛下は怒りました。そしてブン様に罰を与えました。

「一週間、リーノたちの手伝いをするゾイ!!!遊びに行くのを禁止する!」

「えー!!!」

「魔獣でない方を、魔獣だと言いつらしたのです。この程度の罰は当然かと。ブン様、明日からよろしくお願いしますね」

「そんな〜」

がつくりと肩を下げるブン様でした。

愛のデデデ

「ねえ、リーノ！もつと魔法を見せて!!」

「わかりました。少しだけですよ」

ある日の午前中。晴天、ときどき曇り。

村の大樹がある広場にて。

わたくしは子どもたちに魔法をせがまれていました。

わたくしにとっては、この力は魔法ではなく、特技だと思っています。

けれど、小さい子から見れば同じに見えるのでしょうかね。

今日も「魔法を見せて！」とお願ひされるのです。

今は急いで城に戻る用事もないので、村の子供たちに願われるまま、簡単なアイスシヨールを見せます。

手のひらで拳大の氷の結晶を踊らせ、空高く打ち上げます。結晶は空中で弾けて、雪を降らせました。

透明度の高い雪は陽光に反射して、七色に輝きます。

傍で見えていたフーム様、ブン様、カービーが驚き、喜び、拍手してくれました。

「すごいわ！とつても綺麗よ、リーノ！」

「いつの間にこんなことできるようになったんだ？」

「ぼーよう？」

「内緒で練習しました。みなさんに喜んでもらえるように、頑張ったかがありますわ」

子供たちが七色の雪を捕まえようと走り出します。

楽しく遊ぶ様子を見て、わたくしはさらに嬉しく思うのでした。

「フームー!!!」

「この声は、閣下？」

閣下が高級車で大樹の周りを一周します。危険な運転でした。子供たちも大人も慌てて避けます。

わたくしは目の前に止まった、高級車に乗る閣下に注意しました。

「閣下！危険な運転はお止めください！」

「今は非常事態なんでガス！大目に見るでガスよ！」

車から降りてきた閣下は、フーム様を真っ直ぐ見ました。

そして助けてほしいと仰るのです。

「どうやら、今朝から陛下の様子がおかしかったみたいです。わたくしは、今日陛下にお会いしていませんでしたので、変化に気づきませんでした。」

「どのようなおかしいのですか？」

「何をしても、まーったく怒らないのでゲス！」

「まあ！それは大変ですわ！」

陛下は一日一回は怒られる方です。

そんな方が急に怒らなくなるなんて、何がおこったのでしょうか？

心配するわたくしたちを見て、フォーム様が首を傾げます。

「何が問題なの？」

「だって、いつも怒られている方が怒っていないんですよ？心配になりませんか？」

「……いいえ。怒らなければ、その方がいいじゃない」

わたくしは、頭をガンと殴られたような気持ちになりました。

「……たしかに、フォーム様の言う通りですわ……！」

ですが、何か嫌な予感がするのです。

人は急に変わるものではありませんわ。

陛下はどうしてしまったんでしょう？

陛下をじつと見つめると、見つめ返されました。
そして緩く微笑まれます。

「よいゾイ。許すゾイ」

「へ、陛下!?!」

こんな陛下は見たことはありません。

思わず体が固まります。

「ねえ、本当に何しても怒らないの?」

「試してみるでゲス」

その間にブン様が、車のタイヤを蹴りました。

陛下の大切な高級車です。それはさすがに怒られるはず。

「よいゾイ。許すゾイ」

「陛下!?!」

怒ってらっしゃらない!?

一体どうなっていますの……??

あれから、陛下は何をされても怒りませんでした。

ペンキを塗られても、ピコピコハンマーで殴られても、ブレーキを弄られたせいで車が川に落ちてても。

怒りませんでした。

わたくしは陛下のことが心配です。頭を強くぶつけられたのでしょうか？

それとも、わたくしのように魔獣にされて……？

頭を降って、悪い考えを追い出します。

とにかく、川から上がった陛下と閣下に、暖かいお風呂に入っていただきます。

入浴中に、わたくしはメタナイト卿の部屋へ訪れました。

ですが、生憎お留守だったのです。

誰にも相談できないまま、その日のニュース時間を迎えてしまいました。

そして、陛下は番組中に仰ったのです。

「愛の力ゾイ。良き隣人たちよ。ワシは教えたいですゾイ。やられる度にやり返しては、いつまでたつても憎しみは終わらないですゾイ。踏まれても、殴られても、殺されても、全てを許す。愛と寛容の精神が、世界を救うのですゾイ」

スタジオにいるみんなが、啞然としました。

「……一体、誰ですの」

もうこんなに人が変わってしまったては、別人と言われてしまったほうが、信じられ
す。

わたくしは、陛下が入れ替わった可能性も視野に入れました。

その日の夜、心を入れ替えた陛下を讃えるための祝賀会が、城で行われました。
わたくしたちメイドは、急遽お料理を振る舞うことになったのです。

陛下の傍にいられませんでした。悔しいですが、何かあればフォーム様たちが何とかし
てくれると信じています。

最後の料理をワドルディたちに運んでもらったら、わたくしたちは少しの間休憩で
す。

ランタンが緑茶をすすりながら、言いました。

「それにしても、陛下があんなに変わるなんてね。もう、驚いちゃったわ」

それを聞いたアーニヤが頬に手を当てて言いました。

「本当に驚きましたね。……今だから言えますが、陛下の怒鳴り声は苦手だったので、そ
れが少なくなることは嬉しいです」

「……でも、不自然だわ。なんだか、悪い予感がします」

そういうと、アーニヤとランタンは顔を見合わせました。

アーニヤが気遣うように言ってくれました。

「急に変わり過ぎですもの。心配になっちゃいますよね」

「ええ……。本当に、ただの心境の変化なら良いのですが……」

直後、激しい爆発音が外から聞こえてきました。

城が揺れるほどの大きな音です。わたくしたちは咄嗟に立ち上がりました。

「花火でしょうか？」

「それにしちゃ、大きすぎる音だわ」

「……外には陛下たちが」

「ダメよ！騒ぎが落ち着くまで、いっちゃダメ!!……もう危ない目にはあわないで」

「ランタン……」

「……机の下に潜っておきましょうか。手を繋いでいれば、怖くないですよ」

アーニヤの案を採用し、わたくしたちは騒ぎが落ち着くまで、厨房にいました。

ようやく、音が聞こえなくなったところで、厨房から祝賀会をしている中庭に行きま
す。

会場はあちこちめちやくちやに壊されています。

何より、エスカルゴン閣下が陛下にハンマーで殴られていました。

慌てて近寄り、陛下と閣下の間に体を差し込みます。

「陛下、一体何事ですか！お止めください！」

陛下が激高した様子で言いました。

「エスカルゴンから殴ってきたゾイ！ワシには殴り返す権利がある!!」

「……閣下、本当ですか？」

ボロボロの閣下は何度も頷きました。

その姿が痛ましくて、悲しかった。

わたくしは陛下に頭を下げました。

「陛下、閣下はもう充分反省しています。どうか、ハンマーを下げてください美味い料理をお食

べください」

「うん？……そういえば、口の中から変な味がするゾイ！リーノ、美味しい料理を持てい

！」

「かしこまりました。食堂にお持ちします。それでよろしいでしょうか？」

「良い。すぐに持つてくるゾイ」

「かしこまりました。すぐに準備します。アーニヤ、ランタン！もうひと働きしますよ

！」

二人は同時に了承の意を述べました。

厨房はアーニヤたちに任せて、わたくしは閣下を介抱します。背中を預けられる場所……ステージ近くに連れてきて、座らせませす。

ハンカチを取り出して、拳よりも小さい氷を作り出し、包みます。それを閣下のタンコブにそつと当てました。

「いだい！優しくしてくれでゲス……」

「精一杯、優しくしておりますわ」

「リーノ」

「メタナイト卿」

ステージ上には、子供たちと、メタナイト卿がいました。

彼らから事の顛末を聞きました。

「やっぱり、陛下がおかしかったのは、魔獣のせいだったんですね。それに、今の陛下は元通りなんですわ」

「そうだ。いつもの陛下に戻った」

「そうですか。良かった……」

嬉しそうにしていたのは、わたくしと閣下だけ。

みなさんは残念そうでしたわ。

スカーファイ

「明日、ペットを買うからエサの準備をしておくゾイ！」

陛下は突然発表されました。

夕食時でした。

わたくしは内心戸惑いながらも、笑顔を作りました。

「かしこまりました。手作りのエサをご用意いたします。新しく陛下の家族になるペトちゃん、食べてはいけないものはありますか？それか、苦手なものとか」

陛下は懐からカタログを取り出して、あるページを開きます。

しばし読まれて「ないゾイ」と仰られました。

「では、砂糖を使わないケーキをご用意します」

「うむ。明日は特別な日になるから、ケーキも特別大きなものを作るゾイ！」

「かしこまりました」

「リーノ。そういえば、明日の私たちのオヤツはなんでゲスか？」

「はい。カップケーキでございます」

「それは楽しみでゲス」

陛下と閣下は食事を終えて、食堂から出ていかれました。

わたくしたちメイドは、食堂に残り後片付けをします。

その間の話題は、陛下の新しいペットでした。

アーニヤが皿を下げつつ、楽しみだと言いました。

「いつか、旦那様とペットを飼うのが夢だったんです。陛下の飼い方を参考にさせていただけたいですね」

「一体、何を飼うのかしら？」

「それはわたくしもまだ知りません。小さくてモフモフしている動物だといいですね……」

アーニヤとランタンが賛同してくれました。

「抱っこできる大きさのうさぎとかいいですよね」

「猫も良いわよ」

わたくしは記憶の深い底から浮き上がる言葉をそのまま紡ぎました。

「犬も可愛いですよね」

翌日。

陛下たちの朝食はワドルデイたちに任せて、わたくしたちは大急ぎでケーキ作りに取りかかりました。

五十人分はありそうな大きなケーキです。厨房で完成させてしまうと、扉を潜れないので、厨房の外で完成させます。

ワドルドウ隊長がやって来たところで、なんとかケーキは完成しました。

ワドルデイたちをケーキを玉座の間へ運びます。

わたくしたちはへロへロになっていました。

それでも、これから掃除の仕事が待っています。

上半身を厨房のテーブルに突っ伏して、わたくしはアーニヤとランタンに声をかけます。

「あと十分休んだら、掃除に行きましょうか……」

「了解です……」

「わかりました……」

三人ともとつても疲れています。

今日は大変な一日ですわね……。

掃除をするため廊下に出ると、ちょうど陛下たちに出くわしました。

陛下と閣下、そして……あれはスカーファイでしょうか？それが四匹いました。

四匹は鎖で繋がれていました。

「陛下、そちらは……？」

「新しく家族になったスカーファイちゃんだゾイ！リーノ、アーニヤ、ランタン！良いケーキであった！褒めてつかわすゾイ」

「勿体なきお言葉ですわ」

アーニヤもランタンも深くお辞儀して、喜びの意を表します。

陛下は満足そうに頷かれました。

「ワシはこれからスカーファイちゃんたちを散歩に連れていくゾイ。昼は村で食べる。夕食は豪華にせい」

「かしこまりました。陛下と閣下、そしてスカーファイちゃんに豪華なお食事をご用意させていただきます」

「それと、玉座の間を掃除しておくでゲスよ」

「？かしこまりました」

昨日、掃除したばかりなのですが、何かあったのでしょうか？

返事をする、陛下と閣下はスカーフィたちを連れて、村へ行きました。

「……スカーフィちゃん、可愛かったですね」

陛下たちの姿が見えなくなったころ、アーニヤが少しだけ弾んだ声で言いました。

ランタンがふふつと笑います。

「アーニヤ、嬉しそうね。そうね。あの子たちを毎日見て、お世話ができるのは嬉しいわね」

「長生きできるように、しっかりとお世話していきましょうね」

わたくしたちは互いに頷き合いました。

そして掃除用具を持って、急いで玉座の間へ向かいます。

玉座の間は酷いありさまでした。床がケーキでベトベトに汚れていたのです。

「リーノ」

「ワドルドウ隊長。これは一体、何があったのですか？」

「ケーキが倒れたんだ」

「まあ！みな様ご無事でしたか？」

「幸い、だれもケガをしていない。だが、見ての通り床がめちやくちやになってしまったんだ」

「……ケーキが無くなっているところを見ると、スカーフィちゃんは全部食べたんです」

ね」

「そうだ。すべて平らげた」

ランタンが「すごい食欲ね」と呟きました。

わたくしも同意します。

食費が凄まじいことになりそうです。

「リーノ、メイド三人でここを掃除するのは時間がかかる。だから、兵士を十人置いていこう」

「助かります！ありがとうございます。ワドルドゥ隊長」

「うむ。良いのだ。それで相談なのだが……」

「はい。何でしょうか？」

「今度、兵士たちにご飯を作ってやってくれないか？みんなリーノのご飯の味が忘れられないのだ」

「それは、陛下に相談して時間を作らないとできませんわ。少し返事を待つただけですか？」

「わかった。待とう。ではな、リーノ。ランタン。アーニヤ」

ワドルドゥ隊長と別れの挨拶をすませて、わたくしたちは掃除にとりかかりました。

夕食時。

へ口へ口な体をもうひと踏ん張りさせて、陛下たちの夕食を作ります。もちろん、スカーフィちゃんたちのことも忘れません。

しかし、スカーフィちゃんたちは陛下の傍にいませんでした。

食堂中をキョロキョロと見回しますが、その姿は見つけられませんでした。

「あら、スカーフィちゃんたちはどちらに？」

「城内を散歩しておる。その間にワシらはご飯ゾイ」

「かしこまりました。すぐにご用意します」

陛下と閣下の食事が始まります。間もなく、わたくしはお二方に相談をしました。

「陛下、閣下。折り入って相談がございます」

「なんゾイ」

「ワドルドウ隊長から兵士たちに食事を作ってほしいと、頼まれたのです。アーニヤとランタンを連れて、行ってもよろしいですか？」

「うーむ……」

「陛下、ちよつと……」

閣下が席を離れて、ゴニヨゴニヨと陛下と内緒話を始めます。

微かにお声が聞こえます。

「……払ってない……たまには……食事ぐらい……」

「うむ。リーノ、許すゾイ！」

「ありがとうございます。陛下」

どんなお話をされたのかわかりませんが、許可をいただけました。良かったですね。明日にでも、ワドルドゥ隊長にお返事をしましょう。

食後は、陛下の自室に移動します。

夕食中にスカーファイちゃんたちが帰ってこなかったので、場所を変えるそうです。

陛下の自室に到着して十分ほどたったころ。

スカーファイちゃんたちが戻ってきました。

陛下は大層喜ばれて、さっそくスカーファイちゃんたちにエサをあげます。

食べ方について、しつけが必要ですわね……。

部屋の出入口でメイド三人が固まっていると、フォーム様、ブン様が廊下の奥から現れました。

「こんばんは。陛下にご用でしょうか？」

「用も何も！ デェデェのペットが私たちのご飯を食っちゃったのよ！」

「今しつげとかないと、手がつけられなくなるぞ」

「申し訳ありません！すぐに陛下に報告しますわ」

深々と頭を下げます。

しかし、フォーム様たちは「報告はしなくて良い」と仰られました。

「しかし……」

「リーノの気持ちだけ受け取っておくわ。これ以上、怒るのも疲れるもの」

「いいのよ。ペットが手をつけられなくなつて困るのは飼い主だもの」

「それじゃあね、
リーノ」

「またな」

「はい。また」

フォーム様たちは走つて戻つて行かれました。

……今度改めて、大臣一家に謝罪と菓子折りを持つていきましょう。

夜はメタナイト卿が時間を作ってくださいました。

夕飯はまだらしいので、私の自室に招いて軽食を作ります。

今日はサンドイッチにしました。玉子と、ハムと、フルーツサンドです。

わたくしはメタナイト卿が食べてくださる姿を、見守りました。

「……リーノ。そんなに見つめられると、恥ずかしいのだが」

「ごめんなさい。食べてくださるのが嬉しくて、つい見入ってしまうのです」

「そうか……」

そう言つて、改めて食べ始めます。

少々スピードが上がっていますね。もしかして、照れていらつしやるのかしら？

なんだか微笑ましくて、わたくしはニコニコと頬が緩みます。

「そういえば、今度ワドルデイたちにご飯を作つてあげることになったんですよ」

「ほお。彼らの量を作るとなると、大変だろう」

「ええ、物凄く大変ですわ。ですが、お祭りみたいに賑やかで楽しいですよ。参加しませ

んか？」

「なに？ 私たちが？」

「ええ。最近忙しくて食事会を開いていませんし、みなさんと食事がしたいですし……」

「……ふむ」

メタナイト卿は少し考えられます。

「参加ということは、ただ食べるだけではないのだろうか？」

「そうですね。できれば、作るところから参加してほしいですね」

「……時間がかかるな」

「なので、時間が空いている日にお願いたいと思います」

わたくしはそこまで言っただけ、量が少なくなつた自分の紅茶を見ました。

カービィがププランドに、村に来てからずいぶんたちました。ナイトメアとの決戦は近いでしょう。つまり、ハルバードも完成間近だということ。

「……お忙しいですか？」

断られても仕方がない。そう思っていると、メタナイト卿は「いや」と言葉を続けられます。

「ソードとブレイドの意見も聞きたい。返事は待つてくれるか？明日中に伝えよう」

「かしこまりました。お待ちしておりますわ」

明朝。

朝食作りのために厨房にいました。

みんな、まだ眠たそうです。けれど、食事を作っている間に眠気が飛んでいきました。

ドンドン。

厨房の扉を叩く音がします。

わたくしが一番近くにいたので、扉に向かいました。

「はい」

扉を開けると、ブレイドナイトさんが立っていました。

「卿からの伝言を、預かっています」

「かしこまりました。それじゃ、アーニヤに変わりますね」

「いえ、伝えるだけですから」

「そうは言っても……最近、アーニヤに会えていますか？」

ブレイドナイトさんは少し黙って、首を振りました。

ならばと、わたくしは思うのです。

「少しだけ、待っていてくださいね」

わたくしはアーニヤと交代しました。

「アーニヤ、十分後に戻ってきてください」

「ありがとうございます。リーノ」

アーニヤは花が咲くように、たいへん嬉しそうに笑って、ブレイドナイトさんに会いに行きました。

……良いことをすると、気持ちがいいですね。

スカーフィちゃんたちのエサと共にカートに乗せて、朝食を運びます。食堂に到着しました。

席に着く陛下と閣下、傍にいる兵士たち。

……？

「陛下、スカーフィちゃんたちはどちらに？」

「アレは……」

「陛下、しー！」

閣下がなにやら陛下に合図を送られます。

一体なんでしょうか？

陛下はわたくしから視線をそらします。

「うっ……なんでもない！スカーフィたちは散歩中ゾイ。帰ってきたらエサを作るように。それまでエサは作らんでよい」

「かしこまりました。では、今朝のエサはいかがいたしましたでしょうか」

「カービイにでも食わせておくゾイ」

「……承知しました」

わたくしたちは不思議に思いつつも、普段通りに働きました。

食後。

空のお皿と、スカーフイちゃんたち用のお皿をカートに乗せて厨房に戻ります。

汚れたお皿が洗えたら、スカーフイちゃんたちのために作られた、味のない料理を見つめます。

「陛下、カービィに食べさせろって仰ったわよね」

「どうしますか？そのまま出すわけにもいきませんし……」

「……ソースで味の変化を楽しんでもらいましょう。幸い高級食材を使っている分、素材の味はおいしいです。カービィも喜んでくれるでしょう」

「なんなら、お詫びのデザートも作りましょ」

「いいですね。ホールケーキにしましょうか」

方針が決まったので、作り始めます。

ソースを作り、カービィのために飾ります。

ホールケーキはフォーム様とブン様と食べられるように、大きめに作ります。

メレンゲクッキーでフォーム様、ブン様、カービィを作ります。材料があつて良かった

です。

ホールケーキを飾り付けているところで、外が騒がしくなりました。

嫌な予感に襲われて、ほとんど反射的に動きました。

外から中に入れないように、扉を氷漬けにしたのです。

すべてではなく、縁部分だけ凍らせました。

間もなく、ドンドンと扉になにかが当たります。

わたくしはいち早く、背中で扉を抑えました。

すぐにアーニヤとランタンも手伝ってくださいます。

「一体なんなの!?!」

「わかりませんけれど、とにかく扉を抑えましょう!」

「ええ!」

五分後ぐらいでしょうか。

やっと、外の騒ぎが収まりました。

念のため、しばらく厨房にいました。

二十分後、また扉を叩く音がしました。

「そこにいるのか!リーノ!」

「メタナイト卿！はい、わたくしとアーニヤとランタンがいます」
「扉を開けられるか？」

「いえ、できません……」

「では、私が扉を壊そう。下がっている！」

言われた通り、わたくしたちは扉から離れ、壁際に行きました。

「離れました！」

「では……はああああ!!」

扉は切られて、ガラガラと床に崩れ落ちました。

向こうには、剣をしまうメタナイト卿が立っていました。

メタナイト卿の傍に駆け寄り、お礼を言いました。

「ありがとうございます」

「良い。隠れていたのは正しい判断だった」

「……なにがあつたのでしょうか？」

「陛下のペットが魔獣化して、城中で暴れていた。それをカービイが解決したのだ」

「スカーフィちゃんたちが魔獣に!?!みなさん、無事でしょうか？」

「何人が襲われた。無事かどうかはそなたの目で判断するといいい」

「わかりました。あとで、行ってきます」

「うむ。ではな」

メタナイト卿は体にマントを巻き付けて、廊下の奥へ去っていきました。

「外は大変なことになっていたんですね」

アーニヤが言いました。

「リーノがいち早く扉を氷漬けにしてくれたおかげで、助かりました。ありがとうございます
います」

「ありがとうございます。リーノ」

「とつさに動いただけなのですが、良い方向に転んで良かったですわ」

「おーい！リーノ！！それにアーニヤとランタンも！」

「ブン様、フーム様、カービィ」

「良かった、無事……なのかしら？」

フーム様は縁は氷漬け、バラバラになった扉を見て考えます。

わたくしは笑顔を作りました。

「ええ。メタナイト卿のおかげでここを出られましたからね。みんな無事ですわ」

「それは良かったわ。ところで、いい匂いね……」

「良ければ中へどうぞ」

厨房に案内します。

そこにはフードカバーを被せられた、たくさんの料理がありました。

カービィは喜んで近寄ります。

「すつげー量じゃん」

「これどうしたの？」

「スカーフイちゃんたちのエサですよ。朝食の分を食べて貰えなかつたんです。余ってしまったので、代わりにカービィに食べさせると陛下が命令されて……」

「カービィなら、喜んで食べると思うわ。どう？カービィ」

「ぼよう！」

「わかりました。では、どうぞ」

フードカバーをすべて取り、カービィにフォークを持たせます。

カービィは吸い込まず、少しずつ食べ始めました。

「ねえ、リーノ。オレたちになんかないの？」

「食後のデザートがありますよ。そちらは、カービィと一緒に来るでしょうフーム様とブン様のために作らせていただきました」

「やった！あとでちようだい！」

「かしこまりました」

子供たちが厨房の椅子に座ります。

わたくしはアーニヤとランタンに向き直りました。

「ここはわたくし一人でも大丈夫ですから、アーニヤとランタンはお二人に会ってきてください」

「ソードとブレイドのこと？」

「そうです。無事な姿を見せた方が良いかと……」

「ありがとう。リーノ。私、ソードに会いたかったの」

「私もです。ブレイドさんの元気な姿を見たかったです」

わたくしは二人を送り出しました。

「リーノ！カービーが食事終えたぞ〜」

「かしこまりました。では、ケーキを切らせていただきますね」

大きなホールケーキを見た子供たちは、バンザイと喜んでくれました。

パイ

ワドルドウ隊長にメイド三名、戦士三名が参加する旨を伝えた二日後。

わたくしは、大臣一家にスカーフイちゃんたちが夕食を食べてしまったお詫びの品を届けてから、調理に参加しました。

時間は夕方でした。

一階、大食堂に隣接する大きな厨房に入ります。

部屋の中では、すでに慌ただしく調理する音が響いています。

アーニヤとランタン、メタナイト卿、ソードナイトさんとブレイドナイトさんが一箇所に集まっていたので、そちらに足を向けます。

「遅れました。手伝います」

「リーノ、待つてましたよ。私たちは隊長さんから味付けを任されています」

「では、味付けをするまで、ワドルデイたちの仕事を手伝いましょうか」

「そう言うと思ったわ。今玉ねぎの皮を剥いているところよ。そろそろ切り始めましようか」

今日の夕食の献立は、ご飯、わかめのお味噌汁、生姜焼き、デザートの果物です。ご飯と果物はすでに準備が終わっているはずなので、お味噌汁と生姜焼きを作ります。

今回の生姜焼きには、玉ねぎも一緒に使います。

お味噌汁の材料はワドルディたちに任せて、生姜焼きを作っていきます。

三戦士たちと、わたくしで玉ねぎとお肉を切ります。アーニヤとランタンは玉ねぎを剥き続けてもらいます。

玉ねぎをすべて剥き終わったら、わたくしたちと同じように、材料を切ってもらいます。

材料を切り終わったら、深めの鍋を火にかけます。

ここからは、三戦士たちが主軸となつて調理してもらいます。隣りには、それぞれサポートにわたくしたちがつきます。

お肉を先に入れて、さらに麴入りのお酒も入れます。お肉の色が変わるまで焼きます。焦げないように混ぜつつおこないます。

次は玉ねぎです。甘くなるのでたくさん入れます。

お肉に火がとおり、玉ねぎが透き通りしんなりしたら、生姜入り特製のタレを入れます。

よく馴染ませたら完成ですわ。

「メタナイト卿、お上手ですわ」

「ソード、とつてもおいしそうよ」

「今からいただくのが楽しみです。ブレイド」

褒められた三人は満更でもない様子でした。

三戦士たちの料理の腕は確実に上がっていました。

そのことを喜んでみると、ワドルデイに呼ばれました。

どうやら味噌汁の味を見てほしいそうです。

私は一言告げて、五人の傍から離れました。

「いただきます」

周りから同じ言葉が重なって聞こえます。

少し離れた席からは「わにやわにや」とワドルデイたちが話す声が聞こえました。

大食堂にいるすべての兵士たち、それにゲストのわたくしたちに配膳がいき渡つたので、夕食を食べ始めます。

どれもおいしくできています。

頬を緩ませて食べます。隣りを見れば、アーニヤとランタンも同じように「おいしい」と言葉にしながらか食べていました。

そんなわたくしたちの様子に、特に、ソードナイトさんとブレイドナイトさんが喜びをあらわにしました。

「今日は上手くできて良かったよ。ランタン」

「そうね、ソード。とつてもおいしいわ！調理する手際も良かったし、私の補助はもういいから」

「いやあ、まだまださ」

ソードナイトさんが謙虚に答え、ブレイドナイトさんが同意します。

「うむ。もうしばらく教えてくれたら助かる」

「わかりました。また一緒に作りましょう」

和気あいあいといった感じです。良い雰囲気の中で食べるご飯は、さらにおいしいですわ！

わたくしは常に笑顔で、食事を楽しみました。

ふと、視線に気づきます。

「メタナイト卿、なにか？」

「いや、おいしそうに食べてくれると思ってな……」

「ええ、とつてもおいしいですもの」
「そうか」

メタナイト卿が微笑まれた気がしたので、わたくしはさらに嬉しくなりました。

楽しかった夕食の次の日。

今日も良い日になればいいですね。そう思いつつ起きます。

昼過ぎからおこなわれる生番組、チャンネルD D Dの「1分クッキング」のサポートをしているときでした。

事件は起きたのです。

巨大なパイを作り、それを巨大な電子レンジで加熱したところ。

パイが電子レンジから吹っ飛び、陛下に当たったのです。

スタジオ中が笑いに包まれます。

わたくしは笑いよりも、陛下のためにタオルを用意することの方が大事でした。

「陛下、こちらを」

「うむ。エスカルゴン！いつまで笑つとるゾイ」

タオルを受け取った陛下が、顔や身体中のクリームを拭きます。

閣下は顔を引き締めますが、また笑ってしまうようでした。

陛下は拗ねられてしまいます。

「もうよい！番組はおしまいゾイ。ワシは風呂に入る」

「かしこまりました。すぐに準備します。アーニヤ、ランタン！行きますよ」

肩を震わせていた二人も、仕事と聞いて真面目な顔に戻りました。

わたくしたちは先行して、陛下の自室に向かいます。そして、すぐにお風呂の準備をしました。

さらに次の日。

朝のニュース番組で、陛下にパイが当たった事件を大々的にとりあげています。

そこに、陛下はわたくしたちメイドを連れて乱入しました。

陛下は閣下に怒り、パイを投げつけます。

閣下もお返しにパイを投げつけます。

その様子をテレビで見っていた村人たちは、大笑いしていました。

そんな他人事な村人たちに対して、陛下は悪い笑みを浮かべるのです。

そして、時間は流れて昼前。

ワドルドウ隊長とワドルデイ十人が大きな厨房に集められました。なにかあると思つたわたくしはこつそりその様子を見ていました。陛下はゆつたりとした足取りで、部屋に入つていきました。

「あー、コホン。これよりパイを作るゾイ」

「それもたくさんでゲスよ」

「どのくらいの数が必要なのですか？」

ワドルドウ隊長が質問すると、ガラガラという大きな音をたてて、荷車が彼らの前に置かれました。

「これに山盛りゾイ」

「かしこまりました。すぐに作り始めます！」

以前作つた大量のお菓子は、カービィのための罨でした。今回もそうかもしれせん。

わたくしは急いでフォーム様を探しました。

フォーム様は大臣一家のお部屋にいました。

わたくしは陛下がなにか動いていることを、伝えます。

「そんな大量のパイ、どうするつもりかしら」

わたくしは記憶の海からすくい上げた未来を、思いついた出来事のように話します。

「村人たちに投げる……とかでしようか？」

「デデデならありえるわ。ありがとう、リーノ！またなにかあれば教えてね！」

「かしこまりました。フォーム様、気をつけて行ってらっしゃいませ」

仕事を終えた夕方。

陛下と兵士たちが村から帰ってきました。

みな様、パイまみれでした。陛下は少しケガもしているようです。

「大変！すぐにお風呂をご用意しますわ！アーニヤ、ランタン！急ぎましょう」

「はいー！」

「かしこまりました！」

お風呂やタオルなどの用意は二人と他のワドルデイたちに任せ、わたくしは陛下のケガを治療します。

傷口を洗い、薬を塗って大きめのバンソウコウを貼ります。

「これでよし。お風呂に入ってもしみないと思います。ですが、バンソウコウを取ったりしないでくださいね」

「わかつとるゾイ」

「陛下。お風呂の準備ができました」

「すぐ入るゾイ。……礼を言うゾイ、リーノ。メイドたちはもう休んでいいゾイ」

「はっ、ありがとうございます。陛下」

わたくしたちは深く頭を下げました。

陛下を先頭に、閣下と陛下たちは城の中へ入りました。

陛下たちの姿が見えなくなつてから、ランタンが声を上げます。

「陛下たちパイまみれだったわね。なにかあつたのかしら？」

「機嫌が良くなかつたので、その件に触れるのは止めておいたほうがよさそうです」

アーニヤの言葉にわたくしは頷きました。

「同感です。話は村のみんなに聞いた方がよさそうですね。今から行つては遅くなつてしまうので、また明日以降にしましょう」

次の日の昼過ぎ。

洗濯場からの帰りでした。兵士たちを連れて歩く陛下と閣下に、すれ違いました。慌てて廊下の端に寄り、頭を下げます。

陛下はわたくしの前で止まりました。

「村に行つてくるゾイ。夕飯は、程よく働いた体の疲労を取る食事にするゾイ」

「それでは鍋にしましょう。野菜をたっぷりといれて甘くしますね」

「うむ」

「ところで陛下、後ろの荷車のパイは一体……？」

「なんでもないゾイ！」

陛下と閣下は慌ててパイの前に立ちました。

うーん、隠されると気になりますね。陛下は昨日もパイを山盛り作るよう、命令されてきました。それに陛下は軽いケガをされて帰ってきました。

「陛下……、なにも聞きません。ですから、どうかわたくしもお供に加えてください。陛下がケガをされるかもしれないのに、じっと待つて城にいることはできません」

「うむむ……」

「なーんにも手を出さないと、約束できるでゲスか？」

「ケガをされない限りは、お約束いたします」

「陛下」

「よし！連れて行ってやるゾイ」

「ありがとうございます！陛下、閣下。アーニヤ、ランタン、あとは頼みます」
「行ってらっしゃいませ、メイド長」

「お帰り、お待ちしておりますわ」

快くわたくしを見送ってくれた二人に感謝します。

わたくしは陛下と閣下が乗る高級車に揺られて、村へ向かいました。

村の広場に到着すると、壁のように高いバリケードが敷かれていました。

一体どうしたのでしょうか？

驚いている傍で、閣下が怒られます。

「あいつら！パイで処刑でシヨアの時間なのに！陛下どうするでゲスカ？」

「どうもこうもないゾイ！貸せ！」

陛下は閣下から拡声器を受け取ります。

そしてバリケード側に言います。

「今よりポヨと言ったやつは犯罪者ゾイ！」

カービイだけを狙った言葉に対して、わたくしは注意しました。

「陛下！」

「こちら！黙っておく約束でゲスよー！」

「うぐ……」

それもすぐに閣下に封じられます。

どうしたものかと考えている間もなく。

カービイがバリケードの前に登場しました。

「ぼよー」

「カービイー！」

慌ててフーム様も顔を出しました。バリケードの上にいらつしやいました。

ばかりと、フーム様と目が合います。けれど言葉は交わせませんでした。

「あつー！ポヨと一回言うたゾー！兵士ー！」

陛下の合図で、カービイに向けられてパイが一つ飛びます。

カービイは難なく食べてしまいました。

「ぼよ、ぼよ、ぼよ、ぼよー！」

まるで「もつとちようだい！」と言うかのように、跳ねて喜びます。

「今度は、四回！撃てい!!」

再び、陛下の合図でパイが飛びます。連続で四つもです。

すべて食べられてしまいました。

バリケード側から声が聞こえます。

「こりや処刑というより、大道芸ですな」

村人たちが一齐に笑いだします。

わたくしも誰もケガをしないだろう雰囲気、笑みをこぼしました。

陛下は、それは大層怒られました。

「こうなれば……いだよ!!」

一際大きな声を上げます。一体どうしたのかしら？

辺りは静まりかえっていましたが、やがて人々は空を指さします。

わたくしも空を見ました。葉っぱに遮られてよく見えませんでした。けれど、それは

陛下たちがいる上空に止まったので、その姿をよく見ることができました。

魔獣です。

大きなパイの形をした体で、空を浮いています。等間隔に腕が生えており、そのすべてがフライパンを握っていました。

これはやりすぎです。わたくしは陛下に抗議します。

「陛下、初めから魔獣でカービィをやっつけるおつもりだったのですか?!」

「たまたまゾイ！やれ！パワーストマック!!」

魔獣は回転しました。そして止まると、なんとフライパンの上にパイが出現しまし

た。

超高速回転してパイを投げます。

狙いはカービーです。

カービーは食べる事ができず、パイを頭からかぶりました。

十個以上のパイをかぶったカービーは、パイに埋もれてしまい姿が見えません。

そこにあるのは、まるでパイの山です。

動かなくなった星の戦士を心配して、フォーム様たちや村人たちがバリケードを超えて降りてきます。

わたくしも車から降りて、すぐ傍にいきました。

「掘り出しましょう！」

フォーム様に言うと、彼女はすぐに頷きます。

手を出したその時、パイの山が震えました。

ぴたりと手を止めて数瞬見つめると、突然辺りにパイが飛び散りました。

そして、中からカービーが現れたのです。

「カービー……」

「無事で良かったですわ……」

パイまみれになっちゃいました。

そのパイが、ふと、口の中に入りました。

「——おいしくない……」

「え？」

わたくしは、きつとそのとき苦々しい顔を浮かべていたでしょう。

そのパイはぐちやぐちやで苦くて、それ以上言葉にできませんでした。

わたくしが俯いてパイの味に耐えている間にも、魔獣はパイを投げ続けました。

パイを口に入れた村人たちが「まずい」と連呼しました。

フォーム様も、ブン様も、陛下も、閣下も、ワドルドウ隊長も、兵士たちも。

みんながまずいと言う中で、魔獣が静かになりました。

いつの間にか傍にいたメタナイト卿が説明してくれました。

「パイの専門家だから、自身のパイをまずいと言われて怒っているのだ」

「では、すぐに魔獣の猛攻がくるのでは……？」

わたくし言葉の聞いていたメタナイト卿、フォーム様がゆつくりと魔獣のほうを見ます。

魔獣は大きな声を発し、さらにパイを投げつけてきました。

「まずい……このままでは……」

「言っではいけませんわ！メタナイト卿！」

「！しまった……」

魔獣はこちらにパイを投げつけてきました。

「散れ！」

わたくしは必死に飛び退きました。

すると「のわ!!」と驚いた声でした。

振り返ると、メタナイト卿がたつぷりとパイをかぶっていました。

「メタナイト卿、ケガは……？」

「問題ない。それにしても、本当にまずい……」

それはそれは、小さな声で仰られました。

広場はどんどんパイまみれになります。

みかねたフーム様が、バリケードの中に隠れていたカービィに指示を出されました。

「カービィ、吸い込みよ！」

「んー！んー！」

「え？嫌なの？」

「ははっ！カービィも食べないほどのパイだ！」

「ブン様！」

ブン様の言葉に、魔獣はさらに怒ります。そしてパイをブン様とカービィに投げました。

「うわー！」

「ぼよー!!!」

ブン様には当たりましたが、カービィは辛うじて逃げます。しかし、そのせいで近くにいたフォーム様に当たりました。

カービィはあちこち逃げ回ります。魔獣はそれを追いかけます。

やがてカービィは陛下たちがいる車の運転席へ逃げ込みます。

魔獣は車に体当たりして、クリームが辺り一面に飛び散りました。

わたくしも、クリームをかぶりました。

クリームの海からもがいて、抜け出します。

広場にいたはずの陛下たちが、姿を消しています。見回してもいません。一体どちらにいらっしやるのでしょうか？

「上を見ろー！」

「え……あれは?」

巨大な胃袋が、広場上空を浮かんでいました。

胃袋の上から車が飲み込まれていきます。

「あれは。パワーストマックの本当の姿、イブクロンだ！」

「そんな……じゃあ、飲み込まれてしまったら……」

メタナイト卿はこくりと頷きます。

「胃液に溶かされてしまう」

「そんな………陛下ー！閣下ー！」

「カービィ!!!」

叫んでも、三人は返事をしませんでした。

きつと、車と一緒にイブクロンに飲み込まれたのです。

わたくしは魔獣を倒すべく、巨大な氷の作ろうとしました。しかしメタナイト卿に止められました。

「やめるんだ。陛下たちを巻き込んでしまうかもしれん」

「そうかもしれませんが……。では氷で貫くのではなく、殴って吐き出させるのはどうでしょうか？」

「それよりも、氷を中に入れてカービィに吸い込ませて、アイスカービィを狙う方が良いかもしれん」

「やってみます！」

わたくしは人の頭部ほどある氷を二十個ほど作りました。それを操ってイブクロンの上部から、イブクロンの中へ入れます。

——数分がとて長く感じました。

イブクロンが青く、より青くなつていきます。

そして内側から凍るように氷漬けになつて、空から落ちてきました。

地面とぶつかった衝撃で、クリームが飛び散りました。それを拭つて、イブクロンが落ちた場所をもう一度見ます。

イブクロンが割れて、中から陛下たちが飛び出しました。そこにはアイスカービーもいます。

わたくしとフーム様は叫びました。

「陛下、閣下！」

「カービー！」

陛下と閣下は魔獣の中から助かった安堵から、うつ伏せに倒れます。そのままクリムの中に埋もれました。

口にクリームが入ったのでしよう。

飛び起きて「まずい、まずい」と顔を歪ませていました。

とりあえず元氣そうです。

カービイも元気にフーム様たちのところへ走ります。

みんな無事で安心しました。良かった。

肩の力を抜いているわたくしに、メタナイト卿が寄り添ってくださいました。

「お疲れ様、リーノ」

「ありがとうございます。メタナイト卿」

「これからどうする?」

「村の片付けをお手伝いします。どこもかしこもクリームまみれですもの」

「わかった。私は先に城へ戻る」

「あの……なにかあれば……わたくしの部屋のものをお使いください」

「こしよこしよと話します。」

以前、城のお風呂が壊れたときのことを思い出して言いました。

メタナイト卿も小さな声で言いました。

「助かる。ありがとうございます。……ではな」

「はい。また」

メタナイト卿の背を見送ります。

次はフーム様が、傍に来ました。

「リーノ、ありがとうございます。カービイを助けてくれて」

「気になさらないでください。わたくしはカービィに陛下たちを助けていただいたので
すから」

「リーノ！」

「はい、陛下」

気づけば、陛下が後ろに立っておられました。

振り向いて頭を下げます。

「帰るゾイ！」

「帰って風呂に入りたいでゲス」

「わたくしは村の片付けを手伝ってから帰ります。どうぞ先にお戻りください」

「フン！終わったら、早く帰ってくるゾイ」

「かしこまりました」

「兵士ー!!!」

陛下と閣下は兵士たちを連れて城に帰られました。

その後ろ姿を見届けてから、村長さんが音頭をとります。

「それではみなさん、片付けを始めましょう」

各々が動き出したのを見て、わたくしもフォーム様たちと一緒に動き始めました。

学校

それは朝食のときに発表されました。

いつもより早い時間の朝食でした。

「今日から学校が始まるゾイ」

自慢するように陛下が仰いました。

わたくしは自分の耳が信じられませんでした。

「陛下、今………なんと?」

「だから、学校を創ったんでGesよ。今日から始まるというか………もぐもぐ………ごく。生徒を募集するでGes」

「そんな………陛下………!」

「な、なんゾイ!」

わたくしはよろよろと力なく座り込みます。

アーニヤとランタンが気づいて、わたくしの隣りにやってきて支えてくれました。

「リーノ!大丈夫ですか?」

「一体どうしちゃったの!? ……泣いてるの?」

「うう……嬉しくて……。陛下が村のみんなのために、こんなに素敵なことをしてくださるなんて……」

「デハハハハハ! お前にも手伝ってもらおうゾイ」

「! なんなりと、ご命令ください!」

「給食を作ってくれでゲス」

「全力で作らせていただきます!」

わたくしはとつても気合いをこめて言いました。

朝食後。

学校の名前はデデデ帝国大学付属小学校というらしいです。大学も行くことができると、素晴らしいです。大学も行くことができないなんて、素晴らしいですわ。

校内で教材を販売するお手伝いをします。わたくしからお手伝いを申し出ました。アーニヤとランタンは城でお仕事です。

長蛇の列の先頭、とある親子が目の前に来ました。

わたくしは何度もしたとおり、教材を後ろのダンボールから集めて親子に渡します。

「はい。こちらが学校で使う教材ですわ。千デデンです」

「はいよ。ありがとう、リーノ」

「ありがとう！」

親御さんからお金を受け取り、お釣りを手渡します。

あとは気をつけてほしいことを伝えるだけです。

「入学式の日に改めて持ってきてくださいね。それまでは大切に保管してください。

……次の方、どうぞ」

次の親子がやって来ます。

ハニーとハニーのお母さんです。

ハニーがわたくしに気づいて、笑顔になりました。

「こんにちは！リーノいたのね！」

「こんにちは、ハニー。それにハニーのお母さんも。今日はワドルデイたちのお手伝い

に来ました。教材は千デデンですわ」

ハニーのお母さんは優しく「はいはい」と言いました。

持っていたカゴからお財布を取り出し、開いて千デデンを渡してくれます。

その千デデンを両手で受け取ります。

「はい、確かに。ちよつとお待ちくださいね……こちらが教材ですわ。入学式の日に

持ってきてください。それまでは大切に保管してくださいね」

「ありがとう、リーノ。ママ、帰ったらちよつとだけ開けていい？」

「ちよつとだけよ？ありがとう。リーノ、またね」

「はい。また」

軽く手を振ってハニー親子とはお別れしました。

それから何時間たったでしょうか。

お昼休憩を挟みつつ、長蛇の列をさばきます。

とても大変で疲れましたが、みなさん笑顔で帰っていきます。それが嬉しくて、疲れがとれるようでした。

ほとんど作業と化した教材の受け渡しにも、終わりが見えてきたころでした。

大臣一家がお見えになりました。

「パーム様、メーム様、フォーム様にブン様も。みな様お揃いで」

「やあ、リーノ。教材はまだ残っているかな？」

パーム様がお財布を手にしつつ仰います。

わたくしは領きました。

「ごいいます。すぐにご用意しますね」

手早く教材を集めます。それを二つ、受付の机に並べました。

「二つ千デデンなので、二つで二千デデンですわ
はい」

パーム様は千デデン紙幣を二枚、わたくしに渡されました。二千デデンを、手元に置いてある小さな金庫の中に入れます。

教材を一つ取って、フォーム様に渡しました。二つ目はブン様に渡しました。

「どうぞ。フォーム様、ブン様。入学式の日まで大切に保管してくださいね」

「ほーい」

軽い返事をされたのはブン様です。

フォーム様は難しそうな顔でわたくしを見つめています。

「リーノ。あなたまで、デデデの気まぐれに付き合うの？」

「フォーム様……そうですね。今回も、陛下の気まぐれかもしれません。始まりは良いものではなくても、これから素晴らしいものに変えていけるはずですよ」

わたくしは自分の手をぎゅつと、信じたいと思う心を込めて握りました。

「わたくしは小学校をより良いものにしたいたいと考えています。だから、自分にできることを精一杯いたします」

そう言つてにこりと微笑みました。

パーム様、メーム様、ブン様は応援してくださいました。

フーム様は最後まで心配そうです。

その心配が晴れることを、わたくしは願うのでした。

入学式の日。

早朝。校庭に子供たちと大人が並びます。

学校の制服は、魔法学校のときに用意した制服を再利用するようです。

デデデ校長にエスカルゴン教頭と挨拶があり、次に校歌斉唱です。

どれも陛下を称えるものでした。敬う気持ちを強制することは望ましくないのですが……。これから変えていけばいいですね。

後で改善点をメモに書いて、まとめて陛下と閣下に報告しましょう！

わたくしは授業の様子を見ることはできません。

先生と呼ばれていないからです。

その代わり、子供たちや一緒に授業をうける大人たちのために給食を作ります。

みなさんのために、なにかできるのは嬉しいですね。

お昼。

給食を教室に持っていきました。

その教室はフーム様たちがいらつしやいました。

フーム様と目が合ったので軽く微笑むと、じつと見つめ返されました。

一体どうされたのでしょうか？

それだけではありません。教室中がわたくしの動きを注視しているようでした。

わたくしはとにかく、普段通りに振る舞いました。

まず子供たちに給食を配ります。

フーム様の番になったとき、少しだけお話ししました。

「……リーノは何も変わってないわね」

「?はい。わたくしは朝から元気ですよ?」

「なにも変化がないならいいの……」

心なしか疲れていらつしやるフーム様を、心配します。……よく観察すれば、陛下と

閣下以外の方はなんだか元気がありませんわ。

授業が厳しいのでしょうか？

学校が終わったら、フーム様に聞いてみましょう。

給食がみなさんにいきわたったので、両手を合わせて声を揃えます。

「いただきます」

わたくしの後に続いて、何十人もの声が重なります。

わたくしは「召し上がれ」と言いました。

子供も大人も一口食べると笑顔になります。

「おいしい！」

「うめーよ！リーノ！」

「ふふ、ありがとうございます。フォーム様、ブン様」

お二人をきっかけに、あちこちから料理を褒める言葉が聞こえてきます。わたくしは一人ずつ、お礼を言いました。

みなさんに元気が戻ったようです。よかった。

学校にいる間は、できるだけ笑顔でいてほしいですからね。

給食の片付けもすませて、帰城します。

その間に陛下と閣下にお会いしました。なんでも玉座の間を片付けてほしいそうです。

わたくしはそれを了承しました。まっすぐ次の仕事場に向かいます。

玉座の間を開けて中に入ると、メタナイト卿とフォーム様、それにカービーがいました。

玉座の間は資材や教材らしきもので散らかっていました。その中から、カタログらしきものをフォーム様がお持ちでした。

「こんにちは、みな様。お揃いで」

「こんにちは。よかった、リーノだったのね。デデデたちかと思っちゃった」「陛下と閣下だと、良くないのですか？」

メタナイト卿に質問すると、彼は頷きます。

「今は、な……」

「ぼよ」

「あら、まあ。では、わたくしはなにも見なかったことにいたしますね。そうだ。あの、フォーム様？」

「なにかしら？」

「一つ聞きたいことがあります……学校はどうでしたか？」

「うっ」

「うっ？」

フォーム様は複雑そうなお顔をされました。

しばし目を閉じられて、そして決意した表情で話し始めます。

「あまり、良くなかったわ……」

「それは、一体どういうことでしょうか？みなさん、緊張されて授業が上手く進みません
ですか？」

「ううん。もつと別よ……」

「？」

そのとき、メタナイト卿がわたくしの肩を優しく叩かれました。
振り向いて彼の方を見ます。

「リーノ。この学校はホーリーナイトメア社のものだ」

「……そんな、まさか」

頭が鈍器で殴られたかのようにでした。

教材を買いに来てくれたみなさんの笑顔が浮かんで、崩れます。

わたくしは顔を両手でおいしました。

「陛下……閣下……」

「リーノ……」

「学校が、ナイトメア社のものなら……どこかに魔獣が潜んでいるかもしれません。探
さないと……」

「それはこちらでしておこう。そなたは普段通り、陛下たちの傍にいてくれ。できれば
いい。情報収集を頼む」

「わかりました。そちらは任せてください……」

「リーノ、大丈夫？」

わたくしは微笑んでみせました。

たとえ虚勢でも、今は張りたかったのです。

次の日。

魔獣は、教師となる方がかぶる帽子に化けていたようです。カービィがファイターとなつて倒してくれました。

魔獣と共に、学校は爆発しました。

学校の中にいたみなさんは外に避難したので、誰もケガをしませんでした。

わたくしはとつても、怒りました。

それと同じくらい悲しくて、こつそり泣きました。

陛下と閣下のご飯は、しばらく作つて差し上げませんでした。

陛下はそれに大層怒りました。

「お前がそうなら、ワシにも考えがあるゾー！」

「陛下？ 一体何を……？」

「うるさいゾイ！ ふんだ!!」

それつきり、しばらくは口を聞いていただけませんでした。

学校の方はというと……。

建て直すと費用がかかるので、青空の下で授業が再開されました。

村のみんなが入れ替わり先生をします。子供たちは気まぐれにやって来ます。

生徒たちが全員揃う日は少ないです。なので、やはりみんなが通いたくなる学校は必要なのだと、そう思うのです。

たしか学校に関する事件は、あと二回ほどあったはずですが……。

少しずつ、より良いもの変わっていけばいいのですが……。

晩ご飯！

ある日のお昼。

ワドルデイたちと一緒に、大食堂で食事をしていました。もちろん、アーニヤとランタンも一緒です。

今日のお昼の献立はチャーハンとワンタンスープにサラダでした。とてもおいしかったです。

みんなで楽しく食事していると、遠くから声が聞こえてきます。

「ああ~~~~~！」

——バツシャーン!!!

水しぶきの音が、声が続いて聞こえてきました。その声には聞き覚えがあります。わたくしは気になって声が聞こえた方向を見ます。

「今のは……？」

アーニヤにも聞こえていたようです。

ランタンにも聞こえていたようで、「誰かが上の階から落ちたみたいね」と言いまし

た。

わたくしは声の主のことが、とても心配になりました。

「今の声、おそらくカワサキさんですわ」

「水しぶきの音が聞こえたということは、お城の堀に落ちたのでしょうか」

「なら、今ごろ全身ずぶ濡れだわ」

「大変！ タオルを持っていつてあげなくては……！先に食べちやいますね」

わたくしは残りのご飯を、素早く食べます。

アーニヤとランタンも、わたくしと同じくらい素早く食べます。

「私たちも一緒に行きます」

「カワサキには、世話になっっているからね」

「わかりました。三人で行きましょう」

わたくしたちは、ほぼ同時に食べ終わりました。席を立ち、食器を片付けます。

洗いたてのタオルを持って、堀へと走ります。橋を渡りすぐに左右を見渡すと、カワサキさんが地上で数人のワドルデイに囲まれていました。

どうやら、近くにいたワドルデイたちが助けてくれたみたいです。

全身濡れているカワサキさんは、わたくしたちからタオルを受け取ります。

「ありがとう。リーノ、ランタン、アーニヤ。それにワドルデイたちも、助かったよ」
カワサキさんがお礼を言うと、ワドルデイたちは満足したのか仕事に戻っていきま
した。

わたくしたちは視線をワドルデイたちからカワサキさんに向けます。

「ところでカワサキさん、何があつたのでしょうか？ もしや、陛下が関係していますか
？」

「あく……うん。リーノには言いにくいんだけどさ、デデデ陛下にテラスから放り出さ
れたんだよね」

「まあ！ それは申し訳ありませんでした。しかし、なぜそんなことになつたのでし
ょうか」

「多分、おれの料理がまずかつたからじゃないかなあ？」

「……食事が合わなかつただけで、それほどお怒りに？」

「うん。そうだよ」

「それは、珍しいですわ……」

わたくしが知る限り、陛下は数ヶ月に一度はカワサキさんの店で料理を食べる方だ。
そんな御方——カワサキさんの料理の味を知っている御方——が、カワサキさんをテラ

スから放り出すかしら。

わたくしが首を傾げていると、ランタンが言います。

「虫の居所が悪かったのかしらね？」

「そうかもしれない。デデデ陛下、最近はいまはメイド長の料理を食べていませんから」

「ありや、そうなの？」

みんなの注目が、わたくしに集まります。

わたくしは指をもじもじと触りました。

「実はそうなのです。そろそろ仲直りがしたいのですが、陛下はまだお怒りのようですね……」

「へそ曲げちゃっているんだね。デデデ陛下も大人気ないなあ」

「いえ、わたくしがやりすぎたところもあるので……。ところでカワサキさん、城の大浴場を使われますか？濡れたままでは風邪をひいてしまいます」

「いや、いいよ。長く城にいて陛下に見つかったら、また放り出されそうだし。厨房にフライパンを取りには行くけどさ」

「かしこまりました。では厨房までご案内いたします」

わたくしとカワサキは厨房に向かいます。アーニヤとランタンには、濡れたタオルの洗濯を頼みました。

陛下は意思の強い方です。余程のことがない限り、わたくしと仲直りして下さらないでしょう。

わたくしと陛下のケンカは、まだまだ続きそうでした。

翌日。

陛下の食事を作らなくなってから、朝はゆっくり過ごせるようになりました。そのため、朝のニュースを見ることができません。

今日はいつもと違いました。

テレビの向こうで閣下が「直撃晩ご飯！」を今日から始めると仰いました。

あの各家をまわって、晩ご飯をご馳走になるテレビ番組です。料理が良ければ高評価され、その分だけ賞金が出ます。

つまり、陛下と閣下とテレビクルーであるワドルデイたちが、晩ご飯中という大変忙しい時間帯に、他所様の家にお邪魔することになります。

「止めなくては……!!」

わたくしはすぐさま支度を済ませました。

玉座の間。

簡易ゴルフセットを敷いてゴルフを楽しむ陛下と、少し離れた場所にいる閣下と、お茶を用意する数人のワドルデイたちがいました。

わたくしは一人です。アーニャとランタンは、通常業務をお願いします。

陛下はわたくしに気づきましたが、つんと顔を背けられました。閣下はそれを見て呆れていらつしやいます。

わたくしはまず閣下に近づきました。

「おはようございます」

「おはようでゲス。……伝書鳩はしないでゲスよ」

伝書鳩とは、この場合わたくしと陛下の間を取り持つことでしょう。

わたくしは頷きます。

「はい。ちゃんと自分の口からお話します」

「ならいいでゲス。陛下！」

「なんゾイ」

「リーノが来たでゲスよ」

「……フーン！」

陛下はわたくしの方を向いてくださいません。それでも、わたくしは陛下の方へ近づき、数歩後ろで足を止めました。

そして頭を深く下げます。

「陛下。この度はすみませんでした。わたくしは意地を張りすぎました。今後は心を入れ替えます。もう食事を作らないなどと申しません。ですので、どうかわたくしと仲直りしていただけませんか？」

「……何が望みゾイ」

「また陛下とお話したいだけですわ」

数分、部屋に静寂が訪れました。

陛下ははつきりと仰られます。

「……許してやるゾイ」

「ありがとうございます。陛下」

仲直りできて嬉しいです。視界が少し滲むので、そつとハンカチで目元を拭いておきます。

そしてわたくしは、あることを陛下にあることを伝えます。

「陛下。明日、わたくしはグラタンを作ります」

「なにい!？」

「リーノのグラタンでゲスカー！」

陛下と閣下が、一斉にこちらを振り向きます。

わたくしはにこりと笑います。

「はい。グラタンを食べつつ、直撃晩ご飯を視聴いたしますね」

「そうか！ デエーツヘツヘツヘツ！ 楽しみにしとるゾイ！」

「リーノ、私の分も作っておくでゲスよ！」

「喜んでご用意させていただきます」

これでわたくしの部屋に、明日陛下たちはやって来るでしょう。

目的は村への被害軽減であつて賞金では必要ありません。ただ親しいものとの食事会にしましょう。

夕方。

メタナイト卿のお部屋にお邪魔します。

わたくしが作ったお弁当を持ち寄り、一緒に第一回目の直撃晩ご飯を見ます。

ソードナイトさんはランタンと、ブレイドナイトさんはアーニヤと、それぞれの部屋でこの番組を見ています。

番組内容は、陛下が大臣家に直接ご訪問されて、晩ご飯を召し上がるといったものです。

大臣家の晩ご飯は、それはそれは豪華でおいしそうでしたわ。特にメインのヒレ肉のステーキが食欲をそそりました。

お食事は陛下だけがなさいました。全て食べ終わると、晩ご飯を評価します。

今回は五つ星、つまり賞金五百万デデンが大臣家に贈られます。

あつという間に、番組は終わりました。

そして最後に、陛下と閣下は仰いました。

『明日はリーノの家でグラタンだゾー！楽しみゾー！』

『リーノのグラタンはめっちゃおいしいでゲス！はやく食べたいでゲスよ！』

そしてコマーシヤルへと切り替わります。

メタナイト卿が驚かれました。

ですが、わたくしの落ち着いた様子をご覧になって、落ち着きを取り戻されました。

『どういふことかと思つたが、もしや君が陛下を夕飯に誘つたのか？』

『そうです。陛下はおいしいものを食べられるとご機嫌が良くなります。その瞬間に、

今回の番組を止めていただくようお願いしようと思ひまして』

「なるほど。上手くいふことを祈っているぞ」

「ありがとうございます」

「ところで、弁当に入っているこの煮物、うまいな」

「ありがとうございます。自信作ですよ」

お弁当箱は洗って後日返す、とのこと。そのお言葉に甘えることにしました。

翌日。

今日、陛下と閣下はわたくしの部屋で晩ご飯を召し上がれます。なので準備が必要です。

朝食時。

陛下に許可をいただき、有給を取得します。今日、共に仕事をするはずだったワドルデイたちとアーニヤ、ランタンに、仕事を休むことを伝えます。

親友二人には、体調を心配されました。なので、事情を話しておきます。

「元気なら良かったわ。グラタン作り、頑張ってたね」

「お部屋の掃除、手伝いに行きましようか?」

「ありがとうございます。ランタン、アーニヤ。手伝いは大丈夫です。部屋はそんなに広くありま

せんから」

二人と別れて部屋に帰ります。

全ての窓を開けて、部屋を隅々まで綺麗にしていけます。

ついでに、部屋の内装も変更します。幼い頃に描いた絵などは片付けて、最近縫ったタペストリーを飾ります。

……うん、上品で落ち着いた雰囲気の部屋になりました。これで部屋はいいでしょう。

お風呂に入り、体から埃や汚れを落とします。

少し休んでから、調理を始めました。

グラタンとサラダを作ります。最後に手作りのアイスを準備して、陛下たちを待ちます。

陛下たちは午後五時、ぴったりにいらつしやいました。

テレビクルーも一緒です。……部屋をカメラで撮られることは恥ずかしいですね。

「直撃晩ご飯！今回はリーノの家でゲス」

「はようグラタンを食べさせるゾイ！」

「かしこまりました。すぐにご用意させていただきます」

陛下と閣下には先に座っていただきます。

グラタンができるまで時間がかかりますので、サラダをお出ししました。

「先どうぞ。グラタンは十分ほどお待ちください」

「ただのサラダかゾイ？」

「ドレッシングは、わたくしの手作りですわ」

「おお！そりゃあ楽しみでゲスな」

御二方は、傍に置いてあったドレッシングをかけて、食べ始めます。

グラタンは今生でのわたくしの好物です。

そのためか、わたくしは他の料理よりもグラタンにこだわりを持っております。

おいしくできる秘訣は、わたくしがおいしいグラタンを食べたいからかもしれない。
ん。

わたくしはキッチンに向かいました。

予め火を通しておいた具材とホワイトソースを混ぜたものを耐熱容器に入れて、チーズをかけます。オーブンで十分ほど焼いたら、完成です。

「お待たせいたしました。今日のメインのグラタンですわ」

「おおー!!きたかゾイ！」

「これこれ！これを待ってたんでゲスよ！」

陛下たちは運ばれてきたグラタンを食べ始めます。

おいしいと仰って食べられる姿は、わたくしの心を和ませてくれます。

グラタンをペろりと平らげたら、次はデザートのパニラアイスです。まだ開封していません。なかつたアラザンに乗せて、陛下と閣下にお出しします。

「熱くなつた体に冷えたアイスは最高だゾイ」

「んまい、んまいでGes」

「それはようございました。……あの、陛下?」

「なんゾイ」

「わたくし、賞金はいりません。その代わりにお願いを聞いていただけませんか?」

「何をお願いするでGesか?」

「直撃晩ご飯は、もうやめにしませんか? 食事ならわたくしが毎日作りますゆえ、どうか」

「いやゾイ。ワシは人民共の晩ご飯を食べたいゾイ」

「左様でございますか……」

うーん。作戦は成功しませんでした。

わたくしは肩を落とします。閣下が見かねて、陛下に晩ご飯の評価を良いものにしよ
うと、お話されてきました。

わたくしはそれをお断りします。

「賞金は本当によいのです。今回は仲直りの証として作らせていただきましたから」

「そういうことなら、賞金はナシゾイ。げっぶ。あくうまかつた！リーノ、明日の朝食と昼食も楽しみにしているゾイ」

「はい。腕によりをかけて作らせていただきます」

全てがうまくはいきませんでした。けれど、以前のように陛下との仲が戻ったことは嬉しいですね。

それから数日、陛下は様々な家にお邪魔しました。

イロー、ハニー、タゴさん、村長さん、ボルンさんの家と、晩ご飯を直撃します。

陛下は多くの賞金を村人たちに与えられました。

一番多くてイロー家の四百万デデンです。とんでもない額ですね。

そして、最後にデリバリーシステムでカニを所望されました。

その様子はテレビで中継されておりました。

わたくしは嫌な予感がして、画面から目が離せません。

デリバリーされたカニは魔獣でした！

陛下がカニの魔獣に捕まり、服を切られます。

「陛下！」

わたくしは自室から飛び出しました。

玉座の間とわたくしの自室は、決して離れていないのに。その日だけは特別、廊下が長く感じました。

いくつかの角を曲がると、陛下のお姿が見えました。

お元氣そうに見えます。

「陛下……無事で……」

「リーノ、しばらくはカニを見たくないゾイ。和食を作ってもカニは入れるなゾイ！」

「か、かしこまりました。氣をつけます」

伝えたいことを伝えられてから、陛下は一人歩いて行かれました。

わたくしは少々戸惑いました。ですが陛下がご無事で良かったと、ほっと息を吐くのでした。

宝剣

アーニャとランタン、そしてわたくしと三人で夕飯を食べているときでした。場所は、わたくしの自室でした。

突然、空が明るく光ます。

驚いたわたくしたちは、食事の手を止めて窓を見ます。

あれは……何でしょうか？光の玉が森に落ちました。

わたくしは食事を中断して、窓の傍へ立ちます。

「あれは、何でしょうか……」

「隕石……かしらね？」

「なんだか怖いです」

「わたくしも胸騒ぎがします……二人は今日は地下にいてください。そこなら地上よりも安全です」

「リーノは、どうするのですか？」

「陛下の傍で仕えます。先日危険な目に遭われたばかりですから、傍でお守りしたいの

です」

「あの巨大なカニのこと？あれは、自業自得って感じだけど……」

「それでも、心配ですから」

そう言いますと、ランタンとアーニヤはお互いの顔を見合わせました。そして心配そうにわたくしを見ます。

「リーノ、危険があれば逃げてくださいね」

「はい。ありがとう、アーニヤ」

夕食後。

アーニヤとランタンを見送り、まずメイクを直します。それから部屋の外に出て、陛下を探しました。

もう夕食は終えられているはずですが。食堂にはいらっしやらないでしょう。いつも居られる場所といえば、玉座の間ですね。そこへ行ってみましょう。

陛下とは、廊下でばったり会いました。

エスカルゴン閣下も一緒にすわ。

「陛下、閣下。夜遅くにどちらへ？」

「エスカルゴンが、さっきの光の玉が落ちた場所に行こうと、せがんでくるんだゾイ」
「だって、エイリアンだったらマズイでしょーが！」

「ええい、そう叫ぶな……。リーノ、調査が終わったら寝る。風呂には入らん。準備だけしておくゾイ」

「かしこまりました。ホットミルクををご用意しておきます」

「あく私にはホットチョコレートを……」

「恐れながら閣下、虫歯になってしまいますのでホットチョコレートは明日にいたしましよう」

「確かに……じゃあホットミルク、私にもくれでゲス」

「かしこまりました」

陛下たちは車で出発されました。

わたくしはそれをバルコニーから見届けます。

さて、陛下のお部屋と同じ階にある厨房へ向いましょう。そこにあるミルクの残量を確かめないと。

陛下たちは一時間もたたないうちに、帰ってこられました。車と一緒にボロボロになつて。目立つ怪我をされていないことは幸いですね。

そして緊急事態宣言をされます。戦いの準備をしろと、メタナイト卿たちにも働けと叫ばれました。

行かないでなんて言えません。彼らはお城の戦士ですから。

わたくしにできることは、遠くから祈ることでしょうか……。

陛下たちが、陛下のお部屋に戻られたころ。

わたくしは二人分のホットミルクをカートに乗せ、陛下のお部屋へ運びます。

「陛下、閣下。ホットミルクの準備が整いました」

「ちよつと待つゾイ」

「私は先にくれでゲス」

陛下は仕切りの向こうで着替えていらつしやいます。

閣下は体の汚れを落とされた後みたいです。

わたくしはまず閣下にホットミルクをお渡ししました。はちみつ入りの甘いものです。
す。

その匂いにつられてか、陛下もすぐに出てこられました。

陛下にも、閣下と同じホットミルクをお渡しします。

お二方は安心されたのか、森で何が起きたのか話されました。

陛下曰く、ご自身を狙う暗殺者だと。

閣下曰く、ホーリーナイトメア社が寄越した借金取り魔獣だと。

陛下は閣下のお話を信じたようでした。

「助かるにはどうしたらいいゾイ？」

「お金を払うでゲス」

「それは嫌ゾイ！」

「陛下、お金を少しでもお返しになられた方がよろしいかと……」

「嫌なものは嫌ゾイ！リーノ、おかわり!!」

「ご用意します」

陛下と閣下、それぞれホットミルクを二杯ずつ飲まれました。

その間に城の中では爆発音が何度か響きます。侵入者が来ているのですね。とても怖いのですわ。メタナイト卿は無事でしょうか？

窓を見ていると、遠くの影が一瞬で大きくなりました。

「陛下！閣下！」

氷で壁を作るのと、窓ガラスを割られるのは同時でした。

氷は陛下と閣下の前にしかありません。なので、窓ガラスを割った侵入者は、氷の壁を迂回して、わたくしたちの前に現れました。

——侵入者は女の子でした。

わたくしは驚きで硬直しました。ですが、彼女が武器を構えたので、わたくしも構えます。

放たれた小さなロケットを分厚い氷で止めます。小さなロケットはわたくしたちと女の子の間で爆発音しました。

わたくしは叫びます。

「陛下、閣下！お逃げください——」

がし！つと腕を掴まれました。

「逃げるゾー！」

「お前だけ置いていくわけないでゲシヨウが！」

わたくしは陛下に引つ張られて、部屋を脱出しました。

わたくしたちの後ろでは何度も爆発音が聞こえました。ですが、それも直ぐに止みました。

——陛下を狙ったわけではないのでしょうか？

玉座の間に入ります。

最後に入った閣下が扉をきつちり閉めて、わたくしたちは床にへたりと座りました。

「もう、追ってこないかゾイ？」

「大丈夫みたいでゲス」

「というか、あの子は陛下に興味がないようでしたが……？」

「どういう事ゾイ」

「ここまで追ってこなかったので、そう思っただけですわ」

そう言うと、陛下は少々考えられました。そして「それでも侵入者に違いないゾイ」と仰られて、立ち上がりまます。

玉座に向かわれたので、わたくしと閣下もついて行きました。

陛下は玉座に座られ、デリバリーシステムを起動されます。

わたくしは離れました。カスタマーサービスに会いたくなかったのです。

画面にカスタマーサービスがうつし出されました。

陛下と閣下が侵入者が出たことを話されると、カスタマーサービスの眼鏡がキラリと光った気がしました。

魔獣を送る話があつという間に決まりました。そして陛下三人分の身長がありそうな、大きく強そうな魔獣が送られてきました。

魔獣は咆哮すると、扉を壊して部屋から出ていきました。

あつという間でした。陛下と閣下はこれで大丈夫だと安心されましたが、わたくしはここで思いました。

あれはメタナイト卿と因縁がある魔獣、そして侵入者の女の子はシリカだったのだと……！

わたくしも、部屋から飛び出しました。

魔獣はすでにこの階から飛び降りて、地面を走っています。——その方向はカブーの谷を目指していました。

わたくしもひらりと飛び降ります。

そして巨大な氷の滑り台をつくり、地面との衝突を避けます。

滑る勢いをそのままに、わたくしはアイススケートの要領で魔獣を追います。地面を常に凍らせる必要があるのです、少々骨が折れます。ですが、それも時間とともに慣れてきました。

もうすぐでカブーの谷に到着します。

その時、天に昇る光の柱がカブーの谷付近で起こりました。あれは一体……？

それを見た魔獣がスピードアップします。わたくしは考えるのを止めて、急ぎました。

先を走る魔獣付近で、突然爆発がおきます。おそらくシリカのロケットランチャーですわ。

わたくしは速度を落とし、戦いの邪魔にならないよう離れたところに隠れました。

シリカが吹っ飛ばされ、ソードナイトさんとブレイドナイトさんも歯が立ちません。

今度はソードカービーが戦いますが、決定打に欠けます。

そのとき、シリカが動きメタナイト卿の剣を手にしました。電撃と光が辺りに溢れ、昼のように明るくなります。

「受け取ってー!!!」

シリカがカービーの方へ剣を投げました！しかし近くには魔獣がいます。——魔獣の方が速い！

「やっせません!!」

わたくしは魔獣の足を凍らせました。続いて魔獣の顔付近が爆発します。メタナイ

ト卿がロケットランチャーで攻撃したのです。

隙が生じました。カービィは剣を持ち替えて、渾身の力を振るいます。

——剣から凄まじいエネルギーのビームが発射されました。

それは魔獣を切り裂きました。

瞬きのあと、魔獣は爆発しました。

しばし魔獣が復活などしないことを見届けてから、わたくしはメタナイト卿のもとへ
走りました。

「メタナイト卿！ 皆さん!!」

「リーノ、やはりそなただったのか」

メタナイト卿や、皆さんはボロボロでした。

ですが、大きな怪我はないようです。良かったです。

「陛下が魔獣をデリバリーされて、嫌な予感がしたので追ってきました。魔獣を倒せて
よかったですわ」

「あの氷は、あなたが……?」

シリカが話しかけてきました。

わたくしはちよつとだけ怖かったので、メタナイト卿の後ろに隠れます。

「氷はわたくしの力ですわ。その、あなたは侵入者さん……ですわね？」

「シリカよ。あ、ああ……その、襲ってごめんなさい」

「リーノ、彼女は私の戦友の娘だ。誤解があつて襲撃してきたが、それも解けた。今は味方だ」

「そう、のですか？かしこまりました。シリカさん、わたくしはリーノと申します。よろしくお願ひします」

「(こちらこそ、よろしくね)」

にこりと笑うと、彼女も笑つてれた。笑うと年相応の無邪気さが垣間見えるようだった。

シリカさんは、すぐに帰ることになりました。

留まつても、陛下に何かされるかもしれない。それに、ナイトメアがメタナイト卿の剣を扱えるものとして狙ってくる可能性もあるとのことです。

わたくしとしては、留まっていたいただき城の修復を手伝っていただきたかったわ。

シリカさんの乗ってきた宇宙船は、激しく地面に着陸したものの、少し調整すれば直る程度でした。

メタナイト卿、ソードナイトさん、ブレイドナイトさん、シリカさんの四人で直せばあつという間に修復完了です。

シリカさんは宇宙に帰っていききました。

わたくしたちも、城に帰ります。

今日は長い夜でした。

スナックジャンキー

ある日から、玉座の間にチップスの袋が置かれるようになりました。

「陛下、こちらのお菓子を片付けても……」

「それはそこに置いておけ。うーん、それにしてもチップスが食べたいゾイ」

ちらちらとわたくしとお菓子を交互に見られます。

わたくしはクスリと微笑みました。

「わたくしでよければ、チップスを手作りいたしますわ」

「おお、そうか！では早う持つてくるゾイ」

「かしこまりました」

わたくしは玉座の間を出て、厨房に向かいました。

スライスしたじゃがいもでチップスを、そしてトルネードポテトを作ります。

一時間ほどで、できたそれらをカートに乗せて、玉座の間に持つて行きます。

陛下はすでにチップスを食べていらっしやいました。

わたくしは驚きましたが、すぐに落ち着きます。

きつと待てなかつたんですね。

わたくしから見て左側の大きなモニターでチャンネルDDDをご覧になる陛下に声をかけます。

「陛下、おやつの準備が整いました」

「うむ。持つてくるゾイ」

よかつた。食べてくださるみたいです。

カートを玉座の近くに寄せて、カバーを取ります。

ほんわかと湯気がのぼります。同時に食欲を刺激する香りが辺りに満ちます。

「うまそうゾイ！ いただきま〜す！」

陛下はチップスの袋をお腹に置いて、まずはトルネードポテトを手に取ります。

大きく口を開けて食べられました。

「うまい！ おやつはしばらくこれにするゾイ！」

「陛下、それではお体に障ります。週に一度お作りいたしますので、ご容赦を」

「ぬうう……。まあ、よい。これが食えん間はコツチを食べるゾイ！ ぬははは！」

そう仰られてチップスの袋を持ち上げました。

わたくしは困りました。揚げ物ばかりでは、体に良くありません。なので説得します。

「チップスではなく、フルーツはいかがですか？新鮮でおいしく……」

「いらんゾイ」

「陛下……」

「いらんゾイ」

説得はできませんでした。

それから二日、陛下はチップスを食べ続けました。

わたくしと閣下はとても心配でした。

なぜなら、陛下は玉座からまったく出歩こうとなさらず、食べ続けていらつしやるからです。

それでは不健康になります。

いくら栄養バランスを考えた食事を食べていても、運動しなければいけないのです。

三日目で、わたくしはメタナイト卿に助けを求めました。

ですが、その返事は――。

「……そなたの言葉が届かないのであれば、誰の言葉も届かないだろう」

「で、では、知恵を貸してくださいませんか？」

「すでに色々試したのではないか？」

「はい。玉座の部屋の中だけでも歩いていただこうとしたのですが、どれも上手くいかなくて……」

「リーノ。そなたには苦しいことだが、放っておくしかないと思う」

「……痛い目を見なければ、今の生活習慣が変わらないからでしょうか」

「そうだ」

わたくしは両手を握りしめました。

「わかり、ました」

メタナイト卿はただじっと、わたくしから目をそらさず見ていました。

陛下がチップスを食べてから一週間後。

陛下の朝食を準備しているときでした。

突如、城が揺れました。そして低い唸り声が廊下中に響きます。

わたくしは嫌な予感がして、厨房から飛び出しました。ランタンとアーニヤが後を追ってきます。

途中で合流したエスカルゴン閣下と共に、玉座の間へ入りました。

——大きな何かが、部屋の奥にいました。

それは大きく太ってしまった陛下でした。

「陛下……！おいたわしや……」

「うわあ……」

「これは一体……」

続いて大臣一家も部屋に入ってきました。

皆さん驚いて、困った表情を浮かべました。

閣下は笑っていました。なぜ笑うのでしょうか……？

陛下はまだチップスを食べていらつしやいます。

わたくしは様々な気持ちが入み上げて涙が溢れました。涙を拭くことも忘れて陛下のお顔の近くに行きます。そして傍で膝をつきました。

「陛下、もうやめてください。これ以上食べ続けたら、本当に死んでしまいます」

陛下は申し訳なさそうなお顔をしつつも、お菓子から手が離せない様でした。

なので、菓子に手を伸ばすその手を、緩く両手で握ります。

「……離すゾイ」

「いいえ」

こつそりと後ろで声が聞こえてきました。

「……リーノってデデデのこと大好きだよな」

「私たちよりも長い間一緒にいる家族だもの」

「しかし、あれじゃ可哀想だ。見ておれん」

「でしたら、陛下をヤブイ先生のところへ運びましょう。肥満が治れば、リーノも喜ぶわ」

「すぐに準備をするのでゲス。フーム、ブン、ワドルドウ隊長とワドルデイたちを連れてくるのでゲスよ」

「なんでオレたちが?」

「こつちはリーノを慰めておくのでゲス。ほら、早く」

「行きましよ、ブン、カービィ」

「はい」

「ぼよー!」

十分後、陛下は村のヤブイ先生のところへ運ばれました。

わたくしは泣いていたので、アーニヤとランタンと一緒に城に残りました。

厨房で陛下にお出しするはずだった朝食を食べます。

「うん。きょうのコーンスープもおいしい」

「このコーンスープ、今度の食事会で出したいです」

「アーニヤ、それすごくいい考えだと思う。リーノも、いいでしょ？」

「ぐずつ……はい、良いかと思えます」

ハンカチを片手に持ち、わたくしは朝食を食べていました。

アーニヤが心配そうに言います。

「リーノ、もしかして陛下がいなくなるかもと想像して、怖いのですか？」

「そうです……陛下はわたくしにとつて、家族のように大切な方ですから」

「……ああ。陛下も、もう少しリーノの願いを聞いてくれてもいいのに」

「いいのです。こちらのお願いをたくさん聞いてくださる陛下というのは、想像できませんから」

わたくしは呟きます。

「健康で、長生きしてくださったら、それで良いのです」

「……それ、本人に聞かせたら？」

「怒るより、効果的だと思います」

ランタンとアーニヤから、そのように言われたので、夕飯のときにも、お伝えしようかしら。

陛下が城に戻られました。

お会いすると、わたくしはどうしても泣いてしまいます。なので閣下より接近禁止命令ができました。

陛下の肥満が治るまでは近寄れません。困りました。

とにかく、今は村へ買い出しに行くように命令されました。

アーニャとランタンを連れて村へおります。

しばらく戻らない方が良いと判断したので、城の買い出して、それから三人でシヨツピングを楽しみました。

良い気分転換になりました。心から楽しめたわけではありませんが、調子が良くなりました。

二、三時間ほど村をまわります。

カワサキさんの店で休憩しているとき、軽い地震が起きました。すぐに店から外に出ます。

——お城が崩れていました。

わたくしは口を大きく開けて、びっくりしました。

そして声を大きくして、二人を呼びます。

「アーニヤ、ランタン！戻りますよ！」

「了解」

「わかりました」

多い荷物を持って、坂をのぼります。

たいへん疲れますが、お互いを励まし合って進みました。

その道中で、城から逃げる陛下と閣下にお会いしました。

陛下はすっかり元通りだったので、わたくしは飛び上がって喜びます。

「陛下！ご無事なのですね！それにそのお身体！元に戻って良かったです！」

「それより早う逃げるゾイ！」

「なぜですか？」

「マイクカービィでゲス！逃げなきゃ耳がやられるでゲスよ！」

耳をすませますが、城からは何も聞こえてきません。

「あの、何も聞こえておりません」

「なに？……本当だゾイ」

わたくしたち五人は城へ向かいます。

橋近くにカービィはいましたが、その状態はすっぴんでした。

カービィの向こう側で、城が崩壊しています。

……またカービィにお願いする必要があるみたいですね。
わたくしは皆さんより前に出て、言いました。

「カービィ、瓦礫の山を吸い込んで」

「ほよー」

凄まじい吸引の音と共に、瓦礫はカービィに吸われます。

瓦礫がなくなり、無事に城の住人たちを救い出すことができました。

その日は、城壁に備蓄していたキャンプセットで、夜を過ごしました。

ここ数日大変な思いを抱えていましたが、それを忘れさせてくれるほど、楽しいキャンプとなりました。

陛下が元に戻って良かったですわ！

占い

ある朝。

洗濯物を、アーニヤとランタンとわたくしの三人で干しているときです。ブン様が遊びに来られました。

村へ遊びに行く途中だそうです。

「リーノたちはさ、チャンネルDDDで始まったメールの占いはもう見た？」

「いいえ。まだですわ」

「私たち、日中は働き詰めだから、テレビ見られないのよね」

「ブン様、それはどのような番組でしたか？」

「メールが六枚のカードを表示するから、その中の一枚を選ぶんだ。一番運勢が悪いカードが発表されるってやつ。昨日パパが占い当たってたんだよね。それで二人とも占いの事すっげー気にしてさ。今日も見ると言ってた」

「やれやれ、という感じでブン様は呆れていらっしやいました。」

「わたくしはパーム様とメーム様の気持ちさが、少しわかる気がします。」

「占いといえば、わたくしたちの子供のころも流行りましたね」

「そうですね。懐かしいです」

「へえ、どんな感じのやつ？」

「女の子向けの雑誌に掲載されていた占いコーナーなんだけど。星座ごとに占われていたのよ。順位があつてさ、一番悪い運勢のときはショックだったわ」

「運勢が良いときは、ずっと嬉しかったです」

「あの雑誌、今も販売されているんですよ。まだ占いコーナーはあるのかしら？」

「……女の子向けなら、ハニーだよな。ハニーに聞いておこうか？」

ブン様がご自身を指さします。

わたくしは首を横に振りました。

「いえ、直接聞きたいので、わたくしがハニーに質問しますわ」

「なら、一緒に村に行こうよ！」

「……そうですね。砂糖とか、調味料を注文したいので村に行きましようか」

「うん！アーニャとランタンは？」

「私たちは残って仕事を進めておきます」

「リーノ……いえ、メイド長。お土産、お願ひしますね」

「ふふ、いいですよ。何かお茶菓子を買ってきますね」

村へおります。

ハニーを探すと、コンビニにいました。どうやらお母さんにお使いを頼まれたようです。

挨拶をすませて、早速質問します。

「ハニー、あなたは雑誌を買いますか？」

「……買わないわ。だってあんまりお小遣いもらえないし」

「そうでしたか」

わたくしは困ったように頬に手を当てていると、ハニーが首を傾げます。

「どうしてそんなことを聞くの？」

「実は、女の子たち向けの雑誌に今も占いコーナーがあるのか、知りたかったんです」

「なんだ、そうだったの。あるよ、占いコーナー」

「まだあるんですね！」

「うん。私は読んだ事ないけれど、他の女の子たちが話しているの聞いたことがあるの」
「ありがとうございます、ハニー。お礼にお菓子をプレゼントしますわ。どうぞ、選んで

ください」

「やったー!」

ハニーは、コンビニの中でもおいしいと評判のチョコを選びました。

その日の夜。

久しぶりに三戦士たちと食事会を開きます。メニューはグラタン、コーンスープ、サラダにパンです。

グラタンは最近食べましたが、メタナイト卿たちとはまだ食べていませんでした。なので、今日食べますわ。

グラタンは好評でした。

ソードナイトさんとブレイドナイトさんが言います。

「以前、食事会で食べたグラタンもおいしかったが、これはまた違うおいしさだな。……うまい」

「うむ。おいしい」

「ありがとうございます。あの、メタナイト卿はいかがですか?」

「……む? ああ、おいしいよ」

メタナイト卿は黙々とスプーンを動かします。グラタンに夢中のように。

わたくしはひとまず、喜びました。

「夢中になっていただけで、嬉しいですわ」

「ああ、おいしい」

おいしいと、何度も繰り返す様子がいつもと違っていて、珍しかったです。

「気に入ってもらえたみたいですね。良かったですね。リーノ」

「ありがとう、アーニャ。作ったかがありますわ」

メタナイト卿はその日、またまた珍しくグラタンをおかわりされました。

わたくしはとても嬉しくて、気持ち多めにさらに盛りつけました。

ここ最近、村や城ではメールの占いコーナーの話題で持ち切りです。

まずパーム様が占いに当たり、村長さん、キュリーさん、ボルン署長、カワサキさんと毎日誰かが当たっているようです。

そして、今日は閣下が占いに当たりました。

こうも当たり続けると、不思議で仕方ありません。

メールはどうやって占いを当てているのでしょうか？

そんなある日、メーベルはワドルドゥ隊長率いるワドルデイたちに運ばれて来ました。城の豪華な部屋に、閉じ込められます。

陛下は命令されます。

「よいか、リーノ。メーベル様を見張つて……いや、お世話をするゾイ。ワドルデイたち……この部屋を見張れい！」

「かしこまりました」

陛下が廊下の奥に消えてから、わたくしは中に入りメーベルと話します。

「メーベル、大丈夫ですか？怪我とか、されていませんか？」

「大丈夫よ。そんなヤワじゃないわ。それよりどうしましょ……こんなことになるなんて、みんな占いにのめり込み過ぎよ」

「それだけ、皆さん悩みを抱えているのでしょうね……。それでどうされますか？このままでは本当に、メーベルは城のお抱え占い師に……」

「よしてよ！私は村の占い師が気に入っているんだから……うーん、ちよつと考えるわ」「かしこまりました。ご用ができましたら、お呼びください」

「……ふふ、城に呼ばれてよかつたかも」

「なぜですか？」

「リーノにそんなに丁寧に扱われたら、気分はお城の女王様よ。いい経験になるわ。」

……ま、デデデの嫁さんは勘弁だけどね」

「まあ、メーベルつたら」

わたくしたちは和やかに笑い合いました。

メーベルはその日の夜、良い作戦が浮かんだようでした。

明朝、陛下たちがまだ寝ている間にカービイのところへ連れて行ってほしいと、わたくしに頼まりました。

わたくしはそれを了承しました。見張りのワドルディたちにお菓子を渡して、部屋から抜け出します。

そして城を出て、カービイの家に行きます。

メーベルはカービイになにやら頼みました。

カービイは「ぼよ！」と言ってメーベルから渡された竹とんぼを持って走っていきました。

「メーベル、カービイに何を頼んだんですか？」

「内緒よ。さあ、デデデたちに見つかる前に帰りましょう」

メーベルの横顔はどこか楽しそうです。まるでいたずらっ子みたいでした。

今日も朝から掃除と洗濯をします。

昼前の休憩をしようと三人で移動していると、陛下と閣下に捕まりました。お二人共、他所に行くような格好をしています。

陛下に手首を掴まれて引つ張られます。

「へ、陛下、閣下？ 一体どうされましたか？」

「メーベルが予言したゾイ！ ププブランドはもうすぐ海に沈む！ 逃げるゾイ！」

「は、はあ……」

「三人とも急ぐでゲスよ！」

わたくしとアーニヤとランタンは陛下たち、後から合流した大臣夫婦と共に、メーベルについて行きました。

ふと、振り返ると城壁の上から兵士たちと、メタナイト卿たちがこちらを見ていました。

無性に、メタナイト卿の傍へ行きたくなりました。けれど、陛下に引つ張られているため、それも叶いません。

すごく悲しい気持ちになりました。

メーベルについて行く人々は膨らんでいきます。

村中の人々がメーベルを追って、海岸まで着いてきました。

そしてメーベルは「海を渡る」と言うのです。

彼女は、巨大な竜巻を起こし、海を割りました。

誰もが、メーベルを崇めます。私はただ啞然としていました。するとメーベルが呆れ

たような、困った調子で言います。

「みんな、本当にバカね〜」

「メーベル……?」

メーベルはそこでネタばらしをしました。

竜巻の正体はトルネードカービイでした。今朝、カービイに頼み事をしていたのは、これだったんですね。

メーベルは言います。

「占いは当たらなくて結構。悩みや心配事を聞いて相談者の心を軽くする事が、私の仕事なのよ。サモが言ってたわ。私はカウンセラーだって」

それに村人たちは少々動揺しながらも聞きます。

しかし、素直に受け入れられない方が二人、いらつしやいました。

閣下がメーベルに質問します。

「それじゃ、ロイヤルカントリークラブは?」

「止めておいた方がいいわね」

「ぬうう! ワシを誑かしよつて!」

ハンマーをかまえる陛下の前にわたくしは飛び出しました。

「陛下お止めください!」

「どくゾイ!」

「嫌です!」

陛下はさらに怒りました。

その隙について、カービーがトルネードの帽子で陛下たちをすくい上げます。

ぐわんぐわん、ぎゆるぎゆると陛下たちを回します。

村人たちは笑いだしました。

わたくしはオロオロと、カービーの周りを行ったり来たりするのでした。

流行りの風邪、クイズショー、ナツクルジヨー

年の暮れ。

冬とまではいかないけれど、秋のように寒い空の下で。

風邪が流行りました。

村からも、城からも咳とくしゃみの声が聞こえてきます。

アーニヤとランタンも、そしてわたくしも風邪をひきました。

「ごほ、ごほ……。風邪が治るまで、有給扱いにしていたでしょうか」

「お願いします。メイド長……。ごほ、ごほ」

「頼んだわ。リーノ……」

一度、朝に集まりましたが解散しました。そしてメイド長であるわたくしが陛下を探して、城をさまよいます。

その途中でメタナイト卿に出会いました。

「メタナイト卿、ご機嫌よう……。ごほ、ごほ」

「ごほ、ごほ……そなたもか。寝ていなくていいのか？」

「今日はお休みしますと、陛下に伝えたくて探しているのです。けれど、どこにもいらつしやいませんわ」

「ふむ。……ああ、陛下ならそちらに」

廊下の向こうから、陛下とくらふらと歩く閣下がいらつしやいました。

「陛下、閣下……ごほ、ご機嫌麗しゅう」

「お前まで風邪かゾイ!? ええい、さつきと部屋に戻っておるゾイ！」

「あの、お伝えしておきたいことが……。風邪が治るまで、メイド一同に有給をいただけませんか？」

「許可する！」

「それでは、皆様。ご機嫌よう」

「送ろう。……ごほ」

「ですが……」

「すぐそこだ。行こう」

「ありがとうございます」

わたくしはメタナイト卿と共に、自室に戻りました。

そして、自室のお菓子箱の中から、まだ開けていないのど飴を引っ張り出してメタナ

イト卿に差し上げました。

「喉が治れば、まだ楽ですから……よろしければどうぞ」

「ありがとうございます。いたどころ」

風邪そのものは一日で治りました。

次の日にはスツキリと良くなっていたのです。

アーニャとランタンも、閣下も、大臣一家も、村の人たちも、そしてメタナイト卿たちも治っていました。

ですが、陛下だけは風邪をひいたままです。

どうやら、魔獣の力を借りて風邪をひいたようですね。それはきつと、強力なウイルスなのでしょう。

わたくしはつきつきりで看病いたしました。

「陛下。これからはどうか、風邪をひきたいなどと仰らないでくださいね」

「もうひかないゾイ……」

「何か、食べられそうなものはありますか？」

「アイス……それにリングゴ……リングゴは細かくすったやつ……」
「かしこまりました。準備させます」

それぞれをアーニヤとランタンに任せます。わたくしは陛下の汗を拭ったり、飲み物を飲む手伝いをいたしました。

新春、クイズショーを放送していたようです。

けれど、わたくしはメタ発言を聞くのが怖くて、番組は見ませんでした。

その日の夜に、陛下と閣下が空へ打ち上がる姿を見て、大変驚きました。

陛下たちが左右へ移動するたびに、わたくしもあちらへこちらへ足を動かしました。

それを見たフォーム様が仰いました。

「心配しなくても、デデデたちなら大丈夫よ」

「軽い怪我で済んだとしても、心配なのです……」

陛下たちが地上に降りられるまで、わたくしは右往左往いたしました。

新年も落ち着き、普段の生活に戻ってきました。

わたくしたちはお正月最後の休日に、食事を開きました。ちようど全員の休みが重なっていたためですわ。

三戦士たちはおせちを食べたことがないと、仰るのでおせちを作ります。わたくしと、アーニヤとランタンで朝から張りきって作りました。

急遽決定したため、それに村のお肉屋さんなどの店が閉まっているため、食材は決して豪華なものではありません。

しかし工夫を凝らして、普段は食べないものを作っています。

ちらし寿司とか、時間がなければ作れない料理を重箱につめていきます。それだからあげとか、皆さんに好かれているおかずも作ります。

メタナイト卿たちが地下の厨房にやって来ました。

先に調理中に出た汚れものを洗い終えてから、席につきます。手を揃えて「いただきます」と声を揃えました。

おせちは好評でした。

三戦士たちは、それぞれ恋人が作った料理を言い当てました。

自分たちの料理を恋人に理解してもらえているというのは、たいへん嬉しいものです。

ね。

仕事始めの日もすぎで、城にも村にも日常が戻ります。

その日は、朝から雷雲がプンプランド中を覆っていました。ときどき、雷が落ちてはわたくしたちを驚かせます。

玉座の間へ掃除に行くときでした。

前方から、ソードナイトさんとブレイドナイトさんが誰かを運んで、こちらに走ってきます。

その方はナツクルジョーさんでした。彼は傷だらけの姿で気を失っていました。

彼らはわたくしに気づくと、足を止めてくれました。

「ソードナイトさん、ブレイドナイトさん！どうしてナツクルジョーさんが……？」

「話は後で」

「今は治療が優先です」

「そうでしたわね。わたくしも治療のお手伝いをさせてください」

「それは心強い」

「ぜひお願いします。こちらへ」

「はい」

先に進むお二人の後を追いかけます。

魔獣化した事件から体力が大幅に上がったわたくしは、お二人の速さにもついていけました。

大臣一家のお部屋に到着します。

わたくしは不安になりました。ナックルジョーさんがケガをしているということは、何か事件に巻き込まれているはずで、それに大臣一家を巻き込むことは、躊躇しませんでした。

「こちらに運ぶのですか？」

「ここが、城の中では安全ですから」

「それは、そうですね……」

玉座からの近さ、安全さでは確かに良い場所かもしれませんが、それでも、と思うので、止める前に、お二人は大臣一家の玄関の扉をノックされました。

ナックルジョーさんはフォーム様の部屋に寝かされます。

わたくしとフォーム様の二人で、ナックルジョーさんをお世話します。汚れを拭い、傷を消毒し、包帯を巻くのです。

彼はいつこうに目を覚ましません。仕方ないので、一旦お茶でもいれようとなりました。

ソードナイトさんとブレイドナイトさんは、ブン様と一緒に玉座の間へ戻られました。

デリバリーシステムのアクセス歴を調べられるそうです。

キツチンにて、わたくしは沸騰した湯をコップにいれます。白湯のできあがりです。今日は白湯が飲みたい気持ちなのです。フォーム様は紅茶を、ナツクルジョーさんにはお水、カービィはジュースにします。

「今日は、何か起きそうな気がいたします」

「ふふ、リーノったら。カービィが来てから、いつだって何か起きてるでしょ?」

「それも、そうですね」

「ぼよー!」

初めてではないと気づいて、少しだけ体に張っていた力が抜けました。

フォーム様の部屋に戻ると、ナツクルジョーさんは起きていました。

「ジョーぼよー!」

カービィさんが嬉しそうにナツクルジョーさんに近寄ります。

フーム様が事情を尋ねられると「関係ない」と言われました。ベッドから出ていき、外へ行くこうとされます。

それでもカービイが、ナツクルジョーさんをベッドに再び寝かせました。

「……わあつたよ。大人しくしといてやるよ」

「ぼよぼよ」

「ふふ、素直じゃないんだから」

「そうですわね。ところで、お水いりますか?」

「おう。くれ」

「かしこまりました」

わたくしはナツクルジョーさんにお水をいれたコップを渡しました。

ナツクルジョーさんが無事に目覚めたので、わたくしは仕事に戻ります。

放り出してしまった玉座の間を掃除し、他の仕事をしていたアーニヤたちと合流いたしました。

……ナツクルジョーさんがププランドに来ただけで、今日は終わると思っていたの

です。テラスから陛下の車が走り去るのを見るまでは。

「陛下たちは、今城内にいらつしやいますよね……?」

「ええ、閣下のお部屋に入っていく様子を先程見ましたね」

「どうかしたの?メイド長」

「あの、見間違いでなければ、メタナイト卿が陛下の車を運転して城外へ……」

「行っちゃダメですよ」

「アーニャ……」

「今日は、私たちと一緒にいてください」

「わかりました……」

「まあ、メタナイト卿なら大丈夫よ!強いもの!」

「そうですよ。危なくなったら、ちゃんと逃げてくれます」

二人がわたくしに寄り添ってくれます。

わたくしは笑顔を返しました。……うまく笑えているといいですね。

次の日。

朝日がのぼるところと共に、仕事を始めます。

陛下の朝食が終わり、厨房へ帰る途中でフォーム様たちに会いました。

「ご機嫌麗しゆう……まあ!？」

「おはよう、リーノ」

「よう……」

「ほよ」

そこには、昨日と同じフォーム様と、比較的まだ汚れていないソードナイトさんとブレイドナイトさん。

ボロボロで汚れているメタナイト卿、ブン様、カービイ、ロロロとラララ、ナックルジョーさんがいました。

私の後ろにいたアーニヤとランタンも驚きます。

「ちよつと！ソード、大丈夫なの？」

「問題ない。かすり傷だ」

「ブレイドナイトさんは？ケガしていませんか？」

「大丈夫だよ、アーニヤ。誰も酷いケガはおっていない」

ブレイドナイトさんの言葉を聞いて、メタナイト卿と目を合わせます。メタナイト卿は頷かれました。良かった、大きなケガはなさっていないのですね。

ランタンがソードナイトさんの体を確かめながら質問します。

「一体何をしてきたの？」

「パワードマツシヤを倒してきたんだ」

「……マツシヤですって？あの最強魔獣の？」

思い出されるのはしばらく前の出来事です。

城中が魔獣でいっぱいにされた日、ナックルジョーさんは最強魔獣マツシヤをこの地によびました。

あの日の記憶がよみがえります。

アーニヤが大声を上げました。

「あのマツシヤと戦ったのですか!？」

「あのマツシヤよりもつと強い、パワードマツシヤと戦ったんだよ。最後はジョーが倒したけどね」

「もつと……強い……」

わたくしたち三人はへ口へ口と座り込みます。

「あれ？言つちやいけなかつたか？」

「ブン！」

考えるブン様に対して、フォーム様が怒られます。

「わたくしたち、何も知らないで……のんきに寝ていましたわ」

「それでいい。そなたたちが安全だからこそ、私たちは力をふるえるのだ」

メタナイト卿はそう仰い、ソードナイトさんとブレイドナイトさんが力強く頷きます。

「あなた様がそう仰るならば、そうなのでしょう。ですが、何も知らされないというのも、寂しいですわ」

「……すまなかつた。今回は時間がなかつたのだ」

「お察しします……このような事件、次は起こらないことを願いますわ」

わたくしはメタナイト卿とじつと視線を交わしました。

メタナイト卿はゆるりと、困った笑みを作られたようでしたわ。

ペンギン

常夏のプブレツジに、また冬がやって来ました。

たった一日で赤とんぼが飛び、森は紅く染まります。

肌寒くなってきましたので仕事を一時中断し、急いで秋冬用のメイド服に着替えま
す。

雪が降ってきましたので、すぐに洗濯物を室内に移動させます。

作業の合間に、アーニヤとランタンとお話しました。

「今回の冬って、また陛下のせいなのかしら？」

「何か聞いていますか？ リーノ」

「たしか、陛下が魔獣の代金を支払っていないのでデリバリーできないと、閣下から聞き
ましたわ」

「なら、この冬は魔獣のせいじゃないのかしら」

「どうなのでしょう……」

三人寄って考えますが答えが出ません。

洗濯物は案外早く、移動できました。

夜にはしんと雪が降り、冬特有の静けさがププランドを包みました。

こんな時ほどメタナイト卿のお傍にいたいと思うのです。

朝。

雪が積まりました。

手袋をはめ、マフラーを巻いて、ワドルデイたちと雪かきをします。外から入り込んだ雪は、廊下の半ばほど積もっています。上から雪を落としては危ないので、集めては秘密のエレベーターで地上に下ろします。

アーニヤとランタンは比較的暖かい中で作業をしてもらい、わたくしは地上で作業をしました。

城から門の橋まで雪かきをしていると、ブン様に声をかけられました。フーム様とカービイも一緒です。

手を止めて応えました。

「おっはよう！リーノ」

「おはようございます。ブン様、それにフーム様とカービイも」

「おはよう、リーノ。朝から精が出るわね」

「ぼよい！」

「お三方は、これから遊びに行かれるのでしょうか？」

「ええそうよ」

「スノーボードをするんだ！なあ、カービィ！」

「ぼよー！」

「まったく。気楽でいいわね……」

「だって楽しまなきゃ損じゃん？行こうぜ」

「ぼよー」

ブン様とカービィは自分の身長より長い板を持って、走り出しました。

お二人の楽しそうな表情とは対象的に、フォーム様のお顔は曇りがちです。そのお顔が、わたくしの方を向きました。

「リーノはどう思う？この異常気象について」

「そうですね。魔獣の線は薄いと考えています」

「それって、デデデが代金を支払っていないから？」

「ご存知だったんですね」

「昨日、問い詰めたら聞かされたの」

「左様でしたか……。実はわたくしも、アーニャとランタンと共にこの異常気象について

て考えたのですが、答えが出なくて……」

「まあ、そうだったの」

「とにかく情報が足りません。今は様子を見てはいかがでしょうか？」

「……そうね。そうする！ありがとう、リーノ」

「お役に立てたのなら幸いです」

手を振って走り去るフォーム様に、手を振り返します。

その背中が小さくなるころ、わたくしは再び手を動かしました。

夜になると、村を訪れたペンギー一族を持って成すために祭りが開催されました。

そして見つけたのです。村の中央広場、そこに飾られた氷像たちの一つ。

「メタナイト卿の氷像……！」

あの方のミステリアスな雰囲気が見事に出ていますわ！素晴らしい作品です。造られた方はどなたですか!?!ぜひとも、握手をいたしましょう。

キヨロキヨロと辺りを見ますが、それらしい人物が見えません。ですが、ふと視線を感じて振り向きました。

——メタナイト卿が人目を忍ぶように、物陰からこちらを見ていらつしやいました。わたくしと目が合うと、彼は奥へ消えていきます。なんだか、そちらに行かなくてはいけない気がしました。

わたくしは遠回りして、メタナイト卿がいらつしやるだろう家の裏へ向かいました。目的の場所に、彼はいました。

お傍に寄ります。

「メタナイト卿」

「リーノ、よく来てくれた」

「わたくしに、何かご用が？」

「城の地下へ身を隠せ。アーニヤとランタンも一緒に。……急げ」

「か、かしこまりました」

わたくしは来た道を戻り、アーニヤとランタンを見つけてます。

二人は一緒にいました。

「リーノ。探しました。一体どこにいたのですか？」

「えーと、メタナイト卿の氷像を見ていましたわ！それよりも……」

二人に耳を近づけて、ごによごによとメタナイト卿から伝えられた事を話します。

二人は「詳しい話は後で」と、まずは城に戻ることを優先してくれました。

急いで城に戻り、地下へ直行します。

いつも食事会を開いている地下厨房へ行くと、ブレイドナイトさんがいらつしやいました。

「ブレイドさん」

「アーニャ」

二人が手を取り合います。

話はアーニャが進めてくれました。

「メタナイト卿から城の地下へ行くと、そう言われて私たちはここまで来ました」

「その件で説明するよう、メタナイト卿から言われている。三人とも聞いてほしい。今村にいるペンギーたちが怪しい動きをしている」

「怪しい動き?..」

「そうだ。危険じゃないとわかるまで、ここにいてほしい……頼む、アーニャ」

「あなたを信じています。ここにいますわ」

お互いを見つめ合うアーニャとブレイドナイトさんにあてられて、わたくしとランタンは顔を赤くしました。

「あー……二人きりの世界の中悪いんだけど、私たちもここにいさせてもらうわ。ね、

リーノ」

「はい。一緒にいますね」

「もちろん。みんな一緒ですよ」

振り向いて微笑むアーニヤは、幸せそうに笑っていました。たいへん可愛かったです。

メタナイト卿とソードナイトさんはすぐに地下厨房へいらつしやいました。

「ペンギーが侵略を始めた」

「え!?!」

「逆らうものも、逃げるものも氷漬けにされた。……すぐに解かれていたが、みな警察署の牢屋に入れられている」

「そ、そんな……」

目の前が真っ暗になるようでした。体は震えて、村のみんなのことを思うと胸が痛みます。

手を胸の前でぎゅつと握りしめました。

ですが、メタナイト卿の次の一言で、目の前が再び明るくなりました。

「私はペンギーたちに紛れて機会を伺うつもりだ。……力を貸してくれ」

——わたくしにもできることがある。そう思うと力がわきます。

ソードナイトさんとブレイドナイトさんが前に出ました。

「卿、我々も」

「お供します」

「それでは、三人の傍が手薄になってしまう。リーノたちを頼む」

「……かしこまりました」

悔しそうな声が、ソードナイトさんから聞こえる。ランタンがそつと、彼の肩に手を乗せました。

「それで、わたくしたちは一体何をすれば良いのでしょうか？」

「ペンギーの衣装を作ってほしい。できる限り、本物に見えるように」

「かしこまりました。それなら……」

「ええ！ 私たち三人の出番ですね！」

「すぐに作ってきます！こちらでしばらくお待ちください」

わたくしたち三人は地下厨房を出ました。

地下厨房から離れて、少し入り組んだ廊下の先。

そこにわたくしたちの秘密基地があります。

大きく広い室内、部屋を明るく照らしてくれるいくつもの照明、左の壁には衣装が畳まれており、右の壁には布地がいくつも置かれていました。

中央、丸いテーブルは大きく十人が座つても余裕がありそうです。そこにはミシンなどが並んでいました。

よく目を凝らせば、奥にはアクセサリーが並んでいます。

ここにあるアイテムのほとんどはハンドメイドで作ったものです。

いつかお店を持ったときに、これらの作品を販売しようと、わたくしたちは話していました。

「さあ、急いでペンギーの衣装を作りましょう。まずは……」
わたくしたちは手分けして動き始めます。

ペンギーの衣装作りはうまくいきましたわ。

趣味だった服作りが、こんな形でメタナイト卿のお役に立てると思ひもありませんでした。

ペンギーに変装したメタナイト卿は地上へ向かいます。

わたくしたち五人は、長い夜を地下厨房で過ごしました。

夜が明けるところ、メタナイト卿が戻ってこられました。一目散に駆け寄ります。

「メタナイト卿、ご無事でなによりです」

「うむ。心配をかけたな。もう大丈夫だ。ペンギーたちは旅に戻った」

「旅にですか……」

「そうだ。我々は仕事に戻る。そなたたちはどうする」

「仮眠したので体調面に問題はないかと、仕事に戻るつもりですけれど……」

アーニヤとランタンの顔を見る。

うん。少し寝不足の顔をしているけれど、問題はなさそう。

二人は頷いた。

「私たちも仕事に戻ります」

「出した冬物、片付けなくちゃね！」

「では、一緒に行きましょうか。まずは陛下の朝食作りから……。メタナイト卿、ソードナイトさん、ブレイドナイトさん。助けてくださって、ありがとうございます」

わたくしに続いて、アーニヤとランタンもお礼を言いました。

メタナイト卿たちは、おそらくですけれど、微笑まれました。

魔獣生徒

プブビレッジには青空学校があります。

先生はフォーム様、生徒はブン様、ハニー、イロー、ホツへ、カービイの五人です。

なんとか屋根をつけてあげたいのです。……できれば、ちゃんとした学校で学んでもらいたいと思っています。

チャリティーを開いて資金を集めれば、学校を創れるでしょうか……？

うんうん唸っていると、青空学校に到着しました。

村外れ、草原に囲まれた一本の大きめの木の下で、授業は行われます。

まずハニーがわたくしに気づいて、手を振ってくれました。わたくしは大きく手を振り返します。

「みなさん！休憩しませんか？」

子供たちの喜ぶ声が聞こえます。

背中のリュックの中で、缶と缶がぶつかる音がしました。

木陰にレジャーシートを広げます。

パウンドケーキを一切れと缶ジュースを、それぞれ渡しました。

男の子たちとカービィはペロリと平らげて、すぐにボール遊びを始めました。わたくしとフォーム様とハニーはゆっくりとケーキを楽しみます。

「フォーム様、先生役お疲れ様です。ハニー、今日も勉強お疲れ様でした」

「ありがとう、リーノ」

「ありがとう。……あのね、勉強うまくいってないんだ」

「そうなのですか？」

ハニーは困っている様子でした。

「うん。みんなと一緒に途中で寝ちやうの」

「天气が良くて、ここは涼しいですからね。寝てしまうのは無理もないかと」

「リーノも、勉強するとき寝てたの？」

「わたくしのころは、寝ていませんでした」

「どうやったたら、寝ないで済むの？」

わたくしは昔を思い出しました。

閣下に勉強を教えてもらい、陛下に遊んでいただいた日々。今でこそ、優しく接してくださるお二方ですが、出会った当初は違いました。

そのことをハニーとフォーム様に説明します。

「勉強を教えていただいたのは、出会って数年間だけです。当初は今のようにならなかつたので、勉強を教えている途中で寝たらもう教えない……と、言われました」

「そうだったの？今じゃ想像できないわね」

「……私もフォームから寝たら教えないよって言われたら、目が覚めるかな？」

「どうでしょう……まずは環境を整えてから、様子を見ても良いと思います」

子供たちがのびのびと楽しく、またしつかりと学ぶためにも学校は必要ですね。

陛下が再び学校を創ってくださいました。

今度は入学無料、すべてはフォーム様が決めて良いとのことでした。

わたくしはそのことを聞いて心から喜びました。

今度こそ、子供たちのための学び舎が誕生したのだと。陛下は村のためにお金を使ってくださいったのだと、興奮しました。

ただ、残念なこともあります。

城の仕事が忙しくて、あまり学校を手伝えないことです。

給食を作る時間はあっても、教師となり子供たちに家庭科を教えることはできません。フーム様のお誘いを断ることは胸が痛みました。

学校が始まりました。

給食の配膳のため、教室に向かいます。一人では運べないので、先生に選ばれた村人たちに手伝っていただきました。

……フーム様が怒ってらっしゃいますわ。

「あの、フーム様？何かありましたか？」

「あつたわ！あつたけど……うう、私負けない！」

わたくしは頭の中に疑問符を思い浮かべました。村の子供たちの中にフーム様を手こずらせるような、そんな……なんというか……元気が有り余っている子供はいたでしょうか？

教室に到着します。

扉を開けて中に入ると、元気な声が聞こえてきました。

「——この匂い、カレーだ！」

「わー！リーノのカレーライスよー！」

「皆さんお静かに。順番に並んでください。一緒に食べましょうね」

教室の壇上に立つと、生徒たちの一番後ろの席を陣取る、いわゆる不良っぽい生徒たちを見つけた。村の子供たちではありません。

あの子たちがフーム様の悩みの種かしら？

壇上に机を横一列に並べて、さらに順番に給食を並べていきます。

今日の順番は、出入口側から飲み物、サラダ、ご飯、カレーです。

わたくしはカレーを、次々にやって来る生徒たちのお皿に乗せます。

——後ろで気配がしました。

ガキン！と、凍らせちゃいます。振り返って確認すると、そこには紫の髪色をした男子生徒が驚いた顔でいました。

凍った手には虫を掴んでいました。

「ぎ、ぎやあああー！」

「お、いー！」

「あら失礼。虫を向けられたので、驚いて凍らせちゃいましたわ」

男子生徒が給食から離れたところを確認してから、手を解凍してあげます。

虫は教室の外に出ていきました。

わたくしは腰を抜かした男子生徒に怒った顔で注意します。

「給食を配る途中に虫を持って近寄ってはいけませんよ。いいですね？」

「あ、ああ……」

「わかってくださって良かった。では、どうぞ。並んでください」

ハッピーングはありましたがその後は順調でした。

最後に、一番体の大きな男子生徒がカレーを受け取ります。

「お皿、預かりますね」

「おう」

「……はい。どうぞ」

「どーも。アンタ、名前は？」

「リーノと申します」

「リーノ。覚えておくれ」

「それはそれは、ありがとうございます」

わたくしはにこり笑います。

その男子生徒は不敵な笑みを浮かべ、去っていきました。

彼が離れるとフォーム様とブン様、カービイがやって来ました。

「リーノ、すごいわ！」

「さっすがだぜー！」

「ぼよぼーよー！」

「なんの事かわかりませんが、そう言っていただけのことには嬉しいですわ」

その後は何事もなく給食をいただきました。

みなさん笑顔で食べてくださったので、嬉しいですわ。

学校は順風満帆かと思われました。

ですが、フォーム様が暴力教師としてテレビで批判されたのです。フォーム様は学校を去ることになりましたわ。

フォーム様は体罰に反対していた。なのに、生徒たちに暴力を振るうなんて考えられませんでした。

これも、陛下と閣下のせいなのでしょうか？

今回もまた、学校はうまくいかないのでしょうか？

悲しい気持ちか胸の中に広がります。

フーム様が学校を辞められた日の昼。

フーム様になんてお声かけをすれば良いのか悩んでいました。声は向こうからかけられました。

廊下のホコリを払っているときに、フーム様とメタナイト卿がいらつしやいました。

「リーノ、お願い手伝って！私、強くなりたいの！」

「フーム様？それにメタナイト卿、一体なんの御用でしょうか？」

「フームが不良生徒に立ち向かうべく力を欲している。私はその特訓に付き合うつもりだ。……そなたの力も貸してほしい」

なんとということでしょうか。

わたくしが悲しみ悩んでいる間にも、フーム様は前を向いてご自身にできることを探していらつしやったのです。

わたくしは、何かお手伝いがしたいと思いました。

「喜んで参加させていただきますわ！」

早速、まとめて有給をもぎとります。陛下たちもわたくしに対して悪いと思っておられるのか、休暇の理由について質問されませんでした。

翌日。

早朝からフォーム様の訓練が始まります。わたくしは訓練の補助をお願いされました。雪玉をフォーム様に飛ばして回避訓練をしたり、氷のアスレチックを造ってはフォーム様の体力の底上げをおこない、ストレッチのお相手をしたり。あとは、より筋肉がつく身体をつくるための食事を考えたりいたしました。

フォーム様はメキメキと力をつけました。

そして二週間後、学校に戻る日が決まりました。

メタナイト卿のお墨付きをもらい、フォーム様は学校へ向かわれます。

わたくしは無事を祈り、城から学校を見守りました。

——学校が燃えましたわ。

きっと学校には魔獣がいて、カービィと戦いになったのでしよう。

再び消えゆく学校の姿に、わたくしは「二度あることは三度ある」という言葉を思い出していました。

そして生徒たちの無事を確認するために、急いで燃ゆる学校の方面へ走り出しました。

学校がなくなり、また青空学校が始まりました。

フォーム様が仰るには、やはり生徒たちは授業の途中で寝てしまうそうです。そう語られるフォーム様のお顔は優しく、穏やかでした。

一方ハニーは、授業の途中に眠ってしまう悩みは引き続きあるものの、学校に行くことは楽しいと教えてくれました。

「小学校に通っているときは、怖かったの。だから、今はすごく楽しいわ」
「それは良い変化ですね」

わたくしはハニーと手を繋ぎながら、村の中を歩きます。

「ねえ、ハニー？もし、先生が優しく、生徒たちも怖い人がいなかったら、学校に来てくれますか？」

「うーん、そうねえ……。リーノが給食を作ってくれるなら、行くわ」

「まあ、ハニーだったら。ありがとうございます。もしもまた学校が創られて、給食を作るように言われたら、わたくし頑張りますね」

「うん！」

——やっぱり子供たちには学校が必要です。

わたくしは、わたくしに何かできることはないのか、考えました。

デリバリー

それは昼すぎの出来事でした。

城の電話が鳴りました。ワドルデイが黒電話ならぬ金ピカ電話を、わたくしのところに持つてきます。

普段なら陛下に持つていきますが、今は閣下と共に昼食後のデザートを食べていらつしやいます。なので、わたくしのところに持つてきたのでしよう。

わたくしはワドルデイにお礼を言つてから、電話に出ました。

「ありがとうございます。——はい、こちらデデデ城」

『あ、リーノ？おれ、カワサキだけど〜』

「カワサキさん？珍しいですね。何か陛下に御用でしょうか？」

『あのね〜今日から出前を始めたんだ！これからジャンジャン注文してよね〜』

「出前サービスの開始、おめでと〜ございます。注文があれば、こちらから電話いたしますので、一度切りますね」

『あいよ〜。待つてるよ。それじゃあ』

「はい。それでは」

ガチャリと受話器を置きます。ワドルデイが金ピカ電話を元の位置へ戻しに行きました。

傍で会話を聞いていた陛下、アーニヤ、ランタンは出前に興味津々といった様子です。わたくしは陛下に報告します。

「陛下。カワサキの店が出前サービスを始めたようですわ」

「ほう、出前か……」

「店に行かなくても電話で注文すれば、熱々の食事が城に届くわけでゲスな」

デザートデザートの杏仁豆腐を上品にスプーンですくい上げつつ、閣下閣下が仰います。

わたくしは頷きました。

「その通りかと」

「でも、味はそのままだゾイ？誰が頼むのかゾイ？」

「リーノの食事を食べられない村の連中が頼むでゲス」

「デハハハハハ！」

その会話を聞いて、お二方を諫めようと思いました。けれど、肩を軽く叩かれます。振り返ると、アーニヤとランタンがワクワクしたように目を輝かせていました。

「その出前、試してみませんか？」

「オヤツの時間は楽しちゃいましょうよ」

「それは、良いアイディアですね」

カワサキさんの新しいサービスの応援になります。わたくしたちは出前を頼むことにしました。

陛下と閣下は村へ出かけられました。

わたくしたちは昼の三時、オヤツの時間に出前でプリンを頼みました。

プリンハニーが届けてくれました。

城の橋前でハニーを迎えて、一階の厨房でプリン三個を渡してもらいます。お金は多めに渡しました。いわゆるチップですわね。 お金は多

「?多いわ、リーノ」

「代金を引いて余るお金は、ハニーに贈るチップですわ。受け取ってくださいな」

「いいの?」

「ええ、どうぞ」

「えへへ!ありがとうございます!」

熱中症にならないようスポーツドリンクを、ハニーに飲んでもらいます。休んでもらっている間にプリンを食べ終えたので、持ってきてくれた皿をまた運んでもらうことにしました。

「ありがとう、ハニー。カワサキに美味しかったって伝えてちょうだい」

「わかったわ、ランタン。またね、みんな」

わたくしたちは手を振って別れました。

「さて、昼休憩もできましたし、また仕事頑張りましょうか」

アーニヤの言葉にわたくしたちは気合を入れます。

玉座の間を掃除しているときでした。

「バタン！と、荒々しく扉が開かれます。

「リーノ！リーノはおるか!？」

「ランタンか、アーニヤでもいいでゲスよ!」

陛下と、閣下です。戻られたのですね。わたくしたち三人は急いで、陛下の前に整列しました。

「陛下、ここにおります。何か問題でも……?」

「夕飯は出前をとるゾイ!」

「夕方の仕事が終わったら直帰してもいいでゲスよ」

「は、はい。かしこまりました」

急にどうされたのでしょうか？

早めに帰れることは嬉しいのですが、気になります。

「あの、一体どうして出前をとることになったのでしょうか？」

「村の連中に出前をとっていないことを、遅れている、って言われたでゲスよ」

「まあ……それで……」

「今思い出しても腹立つゾイ！ワドルデイ!!電話を持てい!!」

数秒で金ピカ電話を持ったワドルデイが現れます。

陛下はカワサキさんの店に電話しました。

「……チャージシューメン、大至急一丁!」

ガチャンと受話器を切られました。

……名乗らなくて良かったのでしょうか？

「あんの、陛下?私の分は……?」

「ないゾイ!」

「そんな!?!」

「今度は閣下が連絡してはいかがでしょうか？」

「なるほど！では……」

受話器をとり、ボタンを押します。

「……もしもし？ フームでゲスか？ エスカルゴンでゲス。陛下と同じように、城にチャージャーシューメンを一丁頼むでゲスよ」

ガチャリと受話器を置かれました。

お二人はワクワクした様子です。

「これで待てばチャージャーシューメンが届くでゲスな！」

「楽しみだゾイ！ ワハハハハハ！！」

「良かったですね。陛下、閣下」

楽しそうなお二方を見て、わたくしも楽しい気持ちになりました。

その日の夜。

早めに仕事を切り上げたわたくしたちは、メタナイト卿たちを夕食に誘いました。

メタナイト卿のお部屋で、三組の恋人たちが向かい合います。

「夕食はかまわないが……何を食べるのだ？」

少しだけ弾んだ調子で質問されるメタナイト卿。

わたくしはニコツと笑って提案しました。

「BBQにしようかと。皆さんいかがでしょうか？」

「BBQか、懐かしいな」

「昔を思い出す」

しみじみと過去を懐かしむソードナイトさんとブレイドナイトさん。盗賊時代のことを懐かしんでいるのでしょうか？

とにかく、全員の賛同を得たので各自動きまします。

三戦士たちは城の庭、BBQができる一角で火起こしなどの準備をしてもらいます。

メイド組は、部屋からBBQの食材や紙皿などを持ち寄ります。

調理器具は、庭から最も近い厨房から借りてきます。

二十分後、すべてが揃いました。

食材を切ろうと、メイド組が動いたときです。三戦士が「任せてほしい」と仰られました。

「切って焼くだけならば問題はない。我々にやらせてくれ」

「かしこまりました。では、よろしく願います」

調理は三戦士にお願いして、メイド組は調理スペースの後ろに広げたレジヤースーツに座りました。

離れたところから三戦士の様子をこっそり窺うと、彼らの手際は良く慣れた手つきでした。連携もしつかりと、とれていきます。ソードナイトさんとブレイドナイトさんは食材をカットします。メタナイト卿は火の番です。

メイド組はこそこそとお話します。

「お三方とも、上手ですわ」

「元から食材をカットすることは上手だったのよね。今じゃ他のこともうまくできてるわ」

「味付けも上手にできています。飲み込みが早くて凄いです」

幼なじみたちと「すごいね」と、言葉を交わしました。

そこに一人の影が近寄ります。

振り返ると、エスカルゴン閣下がいらっしやいました。目を閉じて、くんくんと辺りの香りを嗅いでいます。

「まあ、閣下。どうされたのですか？」

わたくしの言葉に他の五人が振り返りました。閣下に視線が集まります。

閣下は口の端からよだれを少し垂らして言います。

「実は頼んだチャーシューメンが来ないんでゲスよ……。だからお腹が減って仕方がないんでゲス……。リーノ、私も仲間に入れてほしいでゲスよ」

「それは大変でしたね。わたくしは良いですよ」

「やった!!」

「他のみなさんの許可も取ってくださいね」

閣下は直ぐにメタナイト卿の方へ走り出しました。

アーニヤとランタンが顔を寄せて小声で話します。

「良いのですか、リーノ。無理していませんか？」

「無理はしていません。このまま空腹の閣下を放置する方が、わたくしはできません」

「でしょうね……。あーあ、せつかくのトリプルデートなのに」

「……！これがダブルデートならぬ、トリプルデートだったのですね」

「他に何だと思っていたの？」

「てつきりいつもの食事会かと。アーニヤはどうでしょうか？」

「私も、食事会かと思っていました」

「とにかく、いい雰囲気の流れちゃったわ。どうするの？」

「参加なさるなら、閣下にも料理を作っていました」

アーニヤとランタンの目が大きく開かれました。その瞳は「できるの？」とわたくし

に問いかけているようです。

わたくしは微笑みます。

「おいしいですよ。閣下のポトフ」

「リーノ！三人から許可は貰ったでゲスよ！ランタン、アーニャ！一緒に食べようでゲス！」

「どうしますか？二人とも」

「みんなが許可したのなら、断る理由はありません。ランタン？」

「……あーもう！いいわよ！一緒に食べましょう！その代わり作るのは任せるわよ」
「任せるでゲス!!」

閣下はさっそく食材を切り始めました。

閣下のポトフはお母様譲りだと聞いたことがあります。それはとても優しい味で、とてもおいしいのです。

翌朝。

朝早くから買い出しに行こうと、城の橋に向かったときです。

橋の上で、陛下が村の方を凝視していました。

わたくしは陛下の背中に声をかけます。

「陛下、おはようございます」

ぬるりと、振り返られた陛下の瞳は真っ赤でした。

わたくしは驚きました。

「まあ！徹夜されたのですか？一体どうして」

「来ないゾイ……」

「来ない？」

「ワシが注文したチャーシューメンが来ないゾイ！！昨日のオヤツから何も食べとらん！

あー、腹立つっ！」

「それはそれは……おいたわしや、陛下。すぐに何か作りますわ」

「ワシは出前が食べたいゾイ！」

そう仰ってバタバタと手を動かされます。

どうしたものかと考えていますと、ブン様が村の方から現れました。出前用の箱――

おかもち――を持ってきます。

「おはよう、リーノ。……どうしたんだ？」

「おはようございます、ブン様。陛下が昨日、注文したチャーシューメンがまだ届いてな

いみたいです」

「えっ！カービー、やっぱりダメだったんだ……」

何か事情を知っておられる様子。詳しく話を聞かせていただけようと思いましたが、さすが、その前に陛下がおかもちに近づかれて声を上げました。

「くんくん……この中はチャーシューメンかゾイ？ワシの……」

「それは私のでゲスよ！」

今度は城の方から閣下が現れました。

手には小銭入れを持っていらつしやいます。

「ブン、ご苦労でゲスな」

「毎度あり〜」

会計を手早く済ませて、閣下はその場でチャーシューメンを一気に食べます。

わたくしは「そういえば」と昨夜の出来事を思い出しました。

「たしか昨夜、閣下の分のチャーシューメンも届かなかったんですね？」

「そうでゲスよ。だからこうして、朝に再注文したでゲス……ズズズ……イケるなこりゃ」

「なるほど。ブン様。もしかしてカービイが運んだ注文は、陛下と閣下の分ではありませんか？」

「そうだぜ」

「食べる事が大好きなカービイが、チャーシューメン二丁を食べずにカワサキの店から

「この城まで運べるでしょうか？」

「難しい……と思う」

あちやーと、ブン様は片手を顔に当てられました。

わたくしは陛下に向き直ります。

「陛下、もう一度注文しましょう？」

「……………」

「陛下？」

「コケにしおって!!!かくなる上は……ダウンロードゾイ!!!」

陛下は突然走り出しました。城の方へ向かっています。

「あーもうーホコリが立つでゲスー」

閣下はチャーシューメンの汁も飲んでいました。

陛下のことも気がかりですが、仕事も大事です。

閣下とブン様と別れて、わたくしは市場へ向かいました。仕事が終わる頃には、昼前になりましたので昼食を買いにコンビニへ寄ります。仕事が終わる頃には、昼前

副菜が多い、見ても楽しめるお弁当を選んで会計をします。

店主であるタゴさんは、なにやら怒っていらっしやるようでした。

「どうしたんですか？何か、喧嘩でもあったのでしょうか？」

「違うよ！カワサキの店が出前の注文を間違えたのさ！俺一人で四十人前も食べるわけないのに」

「まあ、そんなことが？困りましたね」

「そうなんだよ。俺だけじゃない、メーベル、モサじいさんや他の皆も同じ被害にあっただって」

「それは、事件ですわ……」

「本当だよ！だから出前はもうしないことにしたんだ。リーノも出前は取らない方がいいんだよ」

「ありがとうございます。気をつけます」

買い上げたお弁当を受け取り、わたくしはもう一度店主にお礼を言ってコンビニを出しました。

道に出ようとしたそのときです。

突然、バイク音が聞こえてきました。わたくしは足を止めます。目の前をバイクが爆走していききました。あつという間に姿が見えなくなりです。

あれは一体なんでしょうか？村で、初めて見るバイクです。運転している人も初めて

見ました。村人ではありません。

数秒後、バイクは再び前を通りました。やっぱり、あつという間に姿が見えなくなります。

「はやく帰りましょう」

その方が良い気がして、わたくしは帰路につきました。

城に帰りました。

陛下と閣下は、玉座前のベランダにいらつしやいました。わたくしは村で注文した品を、お二人に報告します。

するとそこに、カービィがやって来ました。

彼はジェットがついたヘルメットを被り、空を飛んで来ます。

ベランダに降り立つと、持っていたおかもちをおろしました。そして、おかもちの中から麵が伸びたラーメンを二丁出します。

「なんゾイ、これは？」

「知らないでゲス。さっぱりでゲス」

「ワケがわからんゾイ。カービィ、食べてよいゾイ」

「ぼよーぼよー！」

カービィは嬉しそうに、ラーメンを食べました。

……それって、もしかして昨日届かなかったチャシューメンでは？

そう思いましたが、陛下たちが怒る未来が見えました。わざわざ不快な気持ちになつていただく必要はないと思い、わたくしは口を固く閉ざしました。

エコツアー、トツコリ卿

——森が燃えています。

わたくしは、森には陛下や閣下、フーム様にブン様、それにハニーがいることを思い出しました。

ほうきを放り出して、城の廊下を走り出します。

ただ、ただ。陛下たちの身が心配でした。

城の橋の上で、メタナイト卿とアーニヤとランタンに出会いました。

珍しい組み合わせでした。それにも気づかず、わたくしはひたすらに森へ向かおうとしました。

「ちよつと、リーノー！どこに行くの？」

「離してください」

ランタンがわたくしの腕を掴みます。

異変を感じたアーニヤにも、ランタンが掴んだ反対側の腕を掴まれます。

がっちりと掴まれて、身動きがとれなくなりました。それでも抜け出そうと体をよじ

ります。

「森の方へ行くならダメです。危ない……」

「昨日から陛下たちが、フォーム様たちが森に行っています。助けに行かなくちゃ」

「あなたの身も危険になるでしょ！」

「では、どうすればいいんですか!?!このまま待っていると?できません!」

「落ち着け。先ほドワドルドウ隊長が様子を見に行つた。報告を待つんだ」

わたくしは首を振りました。

「わたくしは、自分の目でみんなの無事を、確かめたいのです……」

沈黙が流れました。

三人はわたくしを森に行かせたくなくて。わたくしは森に行きたくて。話し合いは平行線をたどります。

——そのとき、水気が頬をなでた気がしました。

顔を上げて、火事がおこっている方角を凝視します。雷雲が見えました。雨が降っているようです。

火はどんどんおさまっていきます。

「……アーニヤ、ランタン。それにメタナイト卿。火がおさまったなら、わたくし、森へ行ってもいいですよね?」

「……ええ」

両腕の拘束がなくなりました。

わたくしは三人に「すぐ戻ります」と言ってから、森に向かいました。

走っても遅い。なので、地面を凍らせてアイススケートのように滑ります。

ひたすらに前だけを向いて、雨と雷が落ちる森へ急ぎました。

森の外側で、陛下たちと合流しました。

みなさん煤だらけで、疲れている様子です。わたくしは、生きていてくれたことに安堵しました。スケートを止めて、ふらふらとみなさんに近寄りませす。

「リーノ！」

「フーム様……ああ、ご無事で良かったです。どこも痛くありませんか？お怪我は？」

「みんな無事よ。デデデたちのせいで酷い目にあっただけど」

ぐるりと頭を回して陛下と閣下の方を見ます。

「ひっ！リーノ、なんだか……」

「こ、怖いゾイ！」

「陛下……閣下……」

ゆらりと歩み寄り、そして――。

「ひいひいー！許してくれでゲス！」

「すまんかったゾイ!!!」

縮こまるお二人に抱きつきました。

ぎゅつと力を込めます。

「……へいがと、がっがが、ご無事で……よがっだ」

わたくしは大粒の涙を流しました。

陛下と閣下はポカンと驚き、それからわたくしをあやすように頭をなでたり、背中を

ぽんぽんと優しく叩きました。

「ご、ごめんだゾイ」

「本当にすまないでゲス」

「しばらくは……危ないごど、しないで〜」

敬語を忘れて、子供のように話します。

涙が落ち着くまで、お二方はわたくしの腕の中にいてくださいました。

エコツアーに参加して、火事に巻き込まれた村人たちにしっかりと頭を下げ謝罪し

てから、わたくしたちは帰城しました。フーム様、ブン様、カービィとは、城内に入つてから途中で別れます。

陛下たちにはまずお風呂に入っていたいただき、それから遅めの朝食を食堂に運びました。

サンドウィッチを静かに食べられる姿を、じつと見守ります。

陛下と閣下は居心地が悪そうにされていました。ですが、お二方の身を案じていたわたくしとしては、お腹いっぱい食べている姿を見ていたのです。

「失礼します」

「失礼します」

食堂に、アーニヤとランタンが入って来ました。

二人の目当てはわたくしだったらしく、真つ直ぐこちらに向かってきます。

ランタンが優しく、少し腫れた目元辺りを触れました。

「たぐさん泣いたのね。温かい濡れタオル持ってきてきましょうか?」

「それか、少し休みませんか?」

「どちらも後で願います。今はここで、陛下たちのお傍にいたいので」

アーニヤとランタンがちらりと陛下たちを見ました。

「ちゃんと怒りましたか?」

「いいえ。安心したら、怒りが飛んでいっちゃいました」

「あらダメよ。ガツンと言ってやらないと」

「それでゲス！怒ってくれでゲス!!」

「もう耐えられんゾイ！リーノ、怒れ！その方が楽ゾイ！」

「お二人がいてくださって嬉しいので、怒りません。……晩ご飯は何がよろしいですか？」

「優しくするなゾーイ!!!」

陛下の叫びが、城中にこだましました。

エコツアーで燃えた森を元に戻すべく、陛下と閣下は植林することになりました。

ウイスピーウツズの森が特別なのでしょうか？植えた苗木は見る見るうちに成長し、一週間ほどで元の森の姿に戻りました。

植林を頑張った陛下と閣下のために、より良い食材を求めて村に買い出しに来ました。

わたくしが村の中を歩いていると、何やら村人たちがスコップやらシャベルを持って

走っていききました。

どうしたのでしょうか？

「おお、リーノ」

「キュリオさん」

考古学者のキュリオさんです。何やら分厚く古い本を片手に持っています。

「みなさん、お忙しそうですね。何か発見されましたか？」

「大発見をしたよ。なんと、トッコリの先祖が隠した財宝が、このププビレッジにあるかもしれないんだ！」

「すごい！それでみなさん、財宝を探すために道具を持っていたんですね」

「リーノも来るか？」

「いえ、今日は都合が悪いので止めておきます」

財宝を見てみたい気持ちもありましたが、それ以上に陛下と閣下のためにおいしい食事を作ってあげたいのです。

城に戻り、陛下のお部屋へ向かいました。

ベッドの上で、陛下がトッコリをもてなしていました。

……立場が逆転していませんか？

「おう！リーノ、茶」

「トツコリ、わたくしはお茶ではありません。陛下、これは一体どういうことでしょうか？」

「いいから、茶を持ってくるゾー！」

「はあ……？」

わたくしは部屋を出て、一度厨房に向かいます。

厨房にはアーニヤとランタンがいました。椅子に座って休憩しているようです。

二人はわたくしに気づくと、笑いかけてくれました。

「ただいま戻りました。アーニヤ、ランタン」

「おかえりなさい」

「おかえり、リーノ。いいお肉は買えた？」

「ええ。……あの、話が変わりますが、陛下とトツコリ、どうしたんですか？」

「ああ、あれね」

ランタンはため息を吐き、アーニヤは困ったように言いました。

「トツコリの御先祖が、プブレツジに財宝を隠した噂は聞きましたか？」

「はい。村でキュリオさんに聞きました」

「陛下はその財宝を狙っているの。多分、トツコリから奪うつもりかもね」

「陛下だったら……その時は止めなくてはいいけませんね」

「話を聞いてくださるでしょうか？」

「わかりません。ですが、諦めてもいいけません」

わたくしは決意を秘めて、陛下とトッコリのために茶の準備を始めました。

お茶の準備には、アーニャとランタンも手伝ってくれました。

カートに緑茶、紅茶、ジュース、コーヒーを乗せて、陛下の部屋へ出発します。

……その途中の廊下で、走る陛下と閣下、そして陛下の手に捕まるトッコリに出会いました。

「まあ陛下、どちらに？」

「急用ゾイ！茶はいらん！」

「行つてくるでゲス！」

「行つてらつしやいませ」

あつという間に姿が見えなくなりました。わたくしたちは立ち尽くして、それからランタンが言いました。

「これ、どうする？」

「もつたいないですよね。せつかく用意したのに」

「あ……三戦士たちと一緒に飲むのはどうですか？」

「いいわね！この間のBBQのリベンジといきましょう！」

わたくしたちは領き合い、三戦士たちがいるだろう場所を目指して歩き出しました。

三戦士たちは玉座の間で、玉座を調べているようでした。休憩に誘うと、快く迎えてくれました。

玉座の間の向かい側、ペランダの端にレジャーシートを敷きます。そこに六人が座りました。

ちよつときゆうぎゆうですが、それも楽しいですわ。

「それで、玉座の間で何をしていたの？」

ランタンが聞くと、二人の従者は主人の解答を待ちました。

「……ダウンロードシステムの履歴を調べていた」

「——魔獣がダウンロードされていないか確認されていた……ということですか？」

「そうだ。通信の記録はあったが、魔獣はまだダウンロードされていなかった」

「……これから魔獣が来るんですか？」

アーニヤが不安そうにブレイドナイトさんを見つめます。戦士は大丈夫だと言うように、頷きました。

「隠れていれば、大丈夫だ。だから、午後からはみなで部屋の中に隠れていてくれ」

ソードナイトさんはランタンを見つめます。

「問題なければ、呼びに行く」

「だったら、リーノの部屋に集まりましょ。いいかしら？」

「かまいませんよ。わたくしの部屋が一番広いですからね」

お茶休憩は十分で終わりました。

戦士たちと離れて、歩きだします。もうすぐ魔獣が来るので、真っ直ぐわたくしの自室に向かいました。

——部屋に到着して、そわそわと落ち着かないわたくしたちでした。

ですが、一際大きな雄叫びが聞こえてきて、震え上がります。

わたくしたちはテーブルから移動して、ソファに座ります。お互いの腕を組んで、恐怖に負けないよう頑張りました。

数分ほどで、ソードナイトさんとブレイドナイトさんが訪ねてきました。

「魔獣は海の方角に行った」

「城内は安全になったから、普段通りの生活をおくっても問題ない」

その言葉を聞いて、やっと肩の力が抜けましたわ。

陛下と閣下たちは、夕方に帰ってきました。

海に落ちたらしく、服は乾いたけれど海水でベトベトです。すぐにお風呂に入っていたきました。

結局、財宝は手に入らなかったと嘆いていました。

それは残念でしたけれど、トツコリから奪わずにすんで良かったです。

ホエール・ウォッチング、販売機

朝に出かけて夕方には戻ると、陛下は仰いました。

わたくしたちメイドは夕飯を作り終えて、厨房で待機します。

今日は村人たちも船に乗せて、ホエール・ウォッチングをするようです。

アーニヤが言いました。

「行きたかったですね。くじらを見るに」

「そうですね。この目で見られたら楽しかったですでしょうね」

「たしか海にはフーム様、ブン様、カービイも行つてらっしゃるはずです。帰城された

ら、お話を聞きに行きましようか」

三人で顔を見合わせて、それが良いと言います。

わたくしたちは談笑しつつ待ちました。しかし、いくら待っても陛下たちが帰城した

報せは、入ってきませんでした。

わたくしは心配になり、海まで見に行こうと立ち上がります。

ランタンが言いました。

「ダメよ。夜の海は危ないんだから、行っちゃダメ」

「せめて、城の門で待ちませんか？」

二人の説得に、わたくしは頷きました。

カンテラに火をつけて、城の門へ向かいます。

夜風が気持ちよくて、わたくしの不安を飛ばしてくれるようでした。

そこにちょうど、フーム様とブン様、カービイが帰ってきました。

「フーム様、ブン様、カービイ。おかえりなさいませ」

「ただいま、リーノ。あなたたちどうしてここにいるの？」

フーム様の疑問にアーニヤとランタンが答えます。

「陛下たちを待つているんですよ」

「今日はホエール・ウォッチングに行ったんでしよう？どうだった？楽しめたのかしら」

「それがさあ……」

ブン様が教えてくださいました。

陛下たちの船は捕鯨船だったこと。くじらを兵器利用するため動いていたなど……。

そして最後に、くじらの親によって遠くに吹っ飛ばされたこと。

わたくしは目眩がしました。アーニヤが肩を支えてくれます。

「ありがとう、アーニヤ。……フーム様、ブン様、カービィ。ごめんなさい。謝罪させていただきますわ」

「あなたが謝ることじゃないわ」

「そうだ！悪いのはデデデだ」

「ぼーよ」

「そうだとしても、陛下は家族のように大切なお方ですから。謝るときは一緒に」

「デデデは謝ってくれないわ」

「そうなんですよね……」

あまり引き止めてもいけないので、フーム様たちとは城の門で別れました。

最後にフーム様は、ワドルドウ隊長が陛下と閣下を探していると、教えてくださいました。そして時期に見つかるだろうとも。

メイド三人はまた、顔を見合わせて話し合います。

「陛下と閣下が帰って来られるなら、わたくし待ちたいです。二人は城の中に入ってください」

「いいの？一人で」

「はい、大丈夫です」

「では、私とランタンはお風呂の準備でも……あら」

アーニヤが指を差します。そちらの方向をわたくしたちは見ました。

そこにはワドルドウ隊長、そして十数名のワドルデイ、陛下と閣下の姿が見えました。わたくしは小走りで近くに寄りました。

「お帰りなさいませ！陛下、閣下、そして隊長、兵士のみなさん」

「おお、リーノでゲスカ。もうくつたびれたでゲスよ」

「すぐに食事と風呂、そんで寝るゾイ」

「かしこまりました。準備いたします。アーニヤ、ランタン、急いで準備しましょう！」

「かしこまりました」

「すぐにご用意いたします」

わたくしたち三人は駆け足で城内に戻りました。

それから五日ほどは、静かな日々を過ごしました。

ある日の、メタナイト卿と過ごした夜。いつもはみんなが寝ている時間に帰られませんが、そのときは夜明け前までいてくださって。

すごく嬉しかったですわ。

そしてメタナイト卿のために朝食を作りました。三人分のおにぎりを握ります。今回はおかかや鮭など、スタンダードなおにぎりですわ。

朝食を渡して、別れの時間になりました。

それでももう少しだけお傍にいたくて、メタナイト卿のお部屋までおくと、わたしは言いました。

メタナイト卿は——たぶん——微笑まれて、それを了承しました。

彼の隣を歩くと、心が踊ります。

また顔が赤くなってしまいそうです。わたくしは鼓動をはやくしました。

中庭に近い、空が見える廊下を歩きます。

外は夜が明けて、太陽が顔を出すところでした。

——わたくしが好きな景色です。

思わず立ち止まりました。

「どうした？」

「あ……すみません。外の景色が美しかったので立ち止まってしまいました」

「……たしかに。綺麗だ」

そう仰るメタナイト卿の瞳は、わたくしをうつしている気がしました。わたくしは顔

を赤くします。

「——それに、何やら騒がしい」

「え？」

メタナイト卿は中庭が見える窓に近づき、手すりに飛び乗りました。手すりは幅がありますので、一人乗っても問題ありませんわ。

それでも、わたくしは心臓が飛び出るかと思いました。一歩間違えば、中庭に転落しています。

「メ、メタナイト卿……」

「見ろ」

彼の言うとおりに、中庭を見ました。

中庭には何台もの車と、それに乗り込むワドルデイたち、指揮をとるワドルドウ隊長、それに陛下と閣下の姿が見えました。

「あれは……何でしょうか？」

「わからない。だが、嫌な予感はある」

その予感は当たりました。

太陽が高くのぼったところに、理解しました。

陛下はワドルデイを売ったのだと、知ったのです。チャンネルDDDを見ていて、そのニュースが飛び込んできました。

わたくしは、ひどく……ひどく悲しい気持ちになりました。

陛下が人身売買なんて……そんな……。信じたくありませんでした。食堂にて。

陛下に昼食をお出ししたときに聞きました。

「陛下……」

「なんゾイ」

「陛下はわたくしも売りますか？」

陛下は吹き出しました。

「ぶっふう!!」

「おわ?!汚ねえ!」

閣下はご自身の食事を守ろうと腕を伸ばします。

そして陛下は、テーブルをバン!と叩きます。

「誰がそんなことをお前に言った!?! もしや、メタ……」

「あの方ではありません。わたくし自身が考えたことですわ」

「なににい？くだらんことを申しよつて！ワドルデイを売ったのは沢山おるからであつて……」

「わたくしが、たくさんいたら、売りますか……？」

堪えきれなくなつた涙が、ポロポロと頬を落ちていきます。陛下も閣下もギョツとされました。

傍にいた、アーニヤとランタンが寄り添つてくれました。

ランタンが言います。

「陛下、閣下。私たち、しばらく休暇をいただくわ。事のほとぼりが冷めるまで……ね。

いいでしょ？」

「あく……陛下、どうします？」

「勝手にするゾイ!!」

「ありがとうございます。失礼いたします」

私たちは食堂から出ていきました。

わたくしの自室に集まり、今後について話し合います。このころには、わたくしは落ち着いていて涙も止まっていました。

3人でソファにギュツと集まって座ります。飲み物は紅茶にしました。フルーティーな香りが気分を和らげてくれます。

「さて、これからどうしますか？城だと陛下と顔を合わせたとき、気まずいですよね。リーノはどうしたいですか？」

「……ワドルデイたちが城に戻る日まで、村にいたいです」

「いーんじやない？村にいる間はどつかでアルバイトさせてもらって、生活費を稼ぎましょう」

「では、ランタンは実家に泊まるとして……リーノは私の家に来ませんか？ちようど誰も使っていない部屋がありますし」

「アーニヤ、良いのですか？迷惑ではありませんか？」

「リーノなら、大歓迎ですよ。祖父母も喜びます」

「だってさ。甘えたら？」

「そうですね……。では、アーニヤ。お世話になります」

「はい。よろしくお願いします」

「決まったわね。じゃあ、紅茶を飲んだら支度しましょ。三戦士たちにも連絡しなくちやいけないし、忙しくなるわよ」

次の日の早朝。

わたくしは初めて、旅行以外で城を出ました。

大臣一家、そして三戦士たちには事情を話しています。みなさん、落ち込んだわたくしを心配してくださいました。心配をかけてしまい、申し訳ないですわ。

ですが、ワドルデイたちの問題が解決すれば、帰城します。それまで会えませんが、辛抱ですわ。

村に到着して、ランタンと別れました。アーニヤと二人で歩きます。

アーニヤの実家の本屋さんに到着すると、アーニヤの祖父母が温かく出迎えてくれました。

「お久しぶりです。リーノです。しばらく、よろしく願います」

「リーノちゃん、久しぶりだね。さあ、おあがり」

「朝食、できていますよ」

「いただきます。おじいちゃん、おばあちゃん。リーノ、まずは部屋に案内しますね」

「お願いします。アーニヤ」

こうして村での生活が始まりました。

昼間は本屋を手伝い、合間には食事を作ります。城で作る豪華なものではなくて、家庭的な食事を作ります。

村にいる間、会えない陛下と閣下のことが心配でした。けれど、フォーム様やメタナイト卿がときどきやって来ては、陛下たちの様子を教えてくれました。

どうやら、とうとうすべてのワドルデイたちを売ってしまったみたいです。

閣下は一人でも暮らしていけるでしょうけれど、陛下は難しいでしょう。

わたくしはさらに心配になりました。

予感的中しました。

陛下はお風呂にも入れず、着替えもできず、お腹を空かせて村をさまよっていたのです。

わたくしはすぐに駆け寄ろうしましたが、メタナイト卿に止められました。

「なぜ、止めるのですか！」

「陛下は心から謝罪をしていない。それで、いいのか？」

「それは……」

陛下が心から反省されて、ワドルデイたちに謝罪しなければいけないことは、わたく

しだってわかっています。でも、それでも、放っておけません。だって、家族のように大切な方だから。

メタナイト卿はなおも、わたくしを引き止めます。

「家族だからこそ、ときには厳しさも必要ではないのか？」

わたくしは何も言えませんでした。

メタナイト卿が仰ることは正しいからです。わたくしも、頭の中ではわかっています。す。

わたくしはもう一度、遠ざかる陛下を見ました。

「また、同じことを繰り返さないためにも……今は、耐える必要がありますね」

「そうだ。……リーノ、私が傍にいる」

わたくしは頷きました。

そしてメタナイト卿の手を強く握りました。彼も同じように握り返してくれました。

その日の夜。

夕食を食べ終わり、家の外のベンチに腰掛けて、夜空を眺めます。ぼんやりと眺めて

は、昼間の陛下を思い出しました。

目に、涙が浮かびます。流れるのを耐えました。だって、一番苦しいのは陛下のはずだから。自業自得だとしても、大変な思いをしていらつしやるから。

一日でも早く、ワドルデイが城に戻って来ることを願いました。

——そういえば、夕方にワドルデイたちが全員どこかに行つちやいましたが、どうしたのでしょうか？

村人たちも慌てていましたが、どうにも集中できずにいたので、噂話など耳に入つてきませんでした。

「……うおっほん」

「——陛下!？」

そのとき、陛下がいらつしやいました。わたくしは慌てて立ち上がり、頭を下げます。

「……面をあげい」

「はっ」

わたくしは顔をあげて、陛下をまじまじと見つめました。

——綺麗です。昼間見た様子とは異なり、石鹸の香りまでします。お風呂に入ったのでしょうか？

陛下の後ろには閣下と、数人のワドルデイがいました。

ワドルデイがいる。

わたくしは嬉しくて、今度こそ泣きそうになりました。

「陛下……」

「いちいち泣くなゾイ！話もできん！」

「はい！すみません！」

ハンカチで涙を拭い、陛下を真つ直ぐ見ます。

陛下はちよつと間を置いてから話されました。

「……ワドルデイたちは村人たちから返してもらった」

「はい」

「……今回の件は、スマンかったゾイ」

「はい。……陛下、ワドルデイたちには……？」

「ワドルデイたちには、明日謝るでゲスよ」

「そうなのですね。かしこまりました。では、わたくしからは何も言いません……。わたくしは明日帰りますね」

「うむ。ではな」

「はい。おやすみなさいませ。陛下、閣下」

「おやすみでゲス」

陛下と閣下は車に乗って城に帰りました。ワドルデイたちは、その後ろを走ってついていきます。

当たり前だと思っていた、いつもの光景です。

わたくしは喜びが身に染みていくのを、感じていました。

回転寿司

回転寿司が村にオープンしました。

昼間。

チャンネルDDDを、わたくしの部屋でメイド三人が集まって見ていました。そこで放送されているカワサキさんのお店には、長蛇の列が続いていました。

ランタンが言いました。

「回転寿司っておいしいのかしらね」

「寿司は、カワサキさんの店を出している物と変わらないように見えますが……」

「こうして見ていると、食べたくなっちゃいます」

「ねえ、今度の食事は寿司にしない？」

「寿司……とてもいい考えですが、わたくしたち作れませんよね。どうしましょう？」

「では、海鮮丼はいかがですか？あれなら、切って乗せるだけですわ」

「いいですね、リーノ。そうしませんか？ランタン」

「賛成よ！じゃあ私たちからの食事会の案は、海鮮丼で決まり！」

ランタンは手帳にさらさらとメモをとりました。

今回は、ランタンが三戦士たちに食事会で食べたい物を聞きに行ってくれます。なので、忘れないように書いたのです。

ランタンは立ち上がりました。

「さっそく聞きに行ってくるわ。あの人たち、いつ捕まえられるかわからないもの」

その日の夕方。

陛下は寿司を食べたいと仰られました。正直に寿司は作れないことを伝えます。

代わりに海鮮丼を作りました。食事会の予行練習になったので、作れて良かったです。

陛下がにこにここと笑って海鮮丼をかきこみます。

わたくしはそれを温かい気持ちで見えました。

次の日。

夕方に帰城された、フォーム様とブン様にお会いしました。

わたくしはにこつと微笑んで、お二人に声をかけます。

「おかえりなさいませ。フォーム様、ブン様」

「ただいま。リーノ」

「ただいま。くたびれたよ」

「まあ。何かあったのですか？」

ブン様の疲れた様子に、わたくしはお二人の様子を窺います。

フォーム様は手を振りました。

「たいしたことじゃないの。今日もカービーが魔獣を倒したんだけど……」

「すみません……」

「いいのよ。カービーが倒してくれたからへっちゃらよ！それでね、倒した魔獣がイカの魔獣だったの」

「倒した魔獣は空中で爆発したんだ！そしたらイカの切り身がたくさん落ちてきてさ」

「さつきまで、その切り身を集めていたのよ。カービーが食べられるように、洗ってあげたの」

「それはそれは……大変でしたね。ですが、お友達のために頑張られたんですね。すごいですわ」

「まあね」

「へへー！」

お二人は満更でもない様子で、照れていらつしゃいました。その姿は可愛らしくて心を打たれました。

その日の夜。

地下の厨房にいつもの六人が集まりました。先に集まったメイドチームがみそ汁や副菜を作ります。後から来た三戦士たちが魚を切りました。

切り方はわたくしたちがそれぞれ教えます。初めは切り身の線がガタガタとしていましたが、数をこなすうちに綺麗に切れるようになりました。

どれもおいしそうです！

けれど、三戦士たちは申し訳なさそうにしています。

ソードナイトさんが言いました。

「この端がガタガタしているというか、ボロボロなのは俺が食べるよ」

「あら気にしなくていいのに」

「君には上手く切れた所をあげたいんだ」

その言葉にブレイドナイトさんも頷きます。

「俺も。アーニャにあげたいな」

「ありがとうございます。ブレイドさん」

その微笑ましい光景に胸が温かくなります。

隣から視線を感じました。振り返るとメタナイト卿がこちらを見つめています。

「何か？」

「そなたが幸せそうに笑っていたから、見ていた」

「そ、そうですか」

恥ずかしくなって、わたくしは俯きました。

そしてお腹が鳴りました。

「ひう」

驚いて変な声も出しました。

アーニヤは微笑み、ランタンはやれやれと肩を竦めつつ笑顔で言います。

「あたしもお腹減っちゃった。盛り付けて食べましょ」

「賛成です。器を用意しましょうか。さ、リーノ」

「は、はい……」

「海鮮丼の盛り付けは任せた。ソード、ブレイド。こちらはスープや副菜を盛り付ける

ぞ」

「はっ」

「かしこまりました」

こうして楽しい食事は始まりました。

海鮮丼はおいしくできあがり、三戦士たちは満足してくれました。もちろん、わたくしたちも満足がいく丼を作れて嬉しかったですわ。

次の日。

早朝から大勢のワドルデイたちが、工具と木材などを持って村へ出かけていきました。

「一体どうしたのでしょうか？」

「ワドルドウ隊長なら、何か知っているかも知れませんね」

「あら、隊長ならさつき先頭でワドルデイたちの指揮をとっていたわよ」

「なら、何事か聞けないですね」

わたくしたちは洗濯物の手を止めてワドルデイの行列を見守りました。そこに、車に

乗った陛下と閣下が現れました。わたくしたちは整列して頭を下げます。

「おはようございます。陛下、閣下」

「おはようでゲス」

「うむ。今から村に行ってくる。そちは昼飯を用意して村まで持ってくるゾイ」
「かしこまりました。あの、村に行く目的は何なのですか？」

「昨日、回転寿司のレールで民家に穴開けたから、その修復に行くんでゲスよ」

「え……」

とんでもないことを聞いてしまいました。

わたくしは両手で顔を覆います。そして力なく声を出しました。

「陛下、なんてことを……」

「だから！すぐ直してくるゾイ！リーノ、弁当を忘れるな！ゆけい！」

「はい。じゃ、リーノ。弁当はハンバーグにしてくれでゲス」

「わしはステーキがいいゾイ！」

車は発進しました。

遠ざかる陛下たちの姿を見送ってから、わたくしは急いで洗濯に戻ります。

「あ、ちよつと！リーノどうしたのよ」

「急いで仕事を終わらせるのです。そして、お弁当の準備をして、被害にあった村のみんな

なに謝罪とお菓子の差し入れを……!」

「今からお菓子を作るのですか?」

「いいえ。それは間に合いません。なので、今日は一家庭何人分のお菓子が必要なのか、聞いて回ります」

「手伝うわ。アーニャはどうする?」

「もちろん、一緒に。いいですか、リーノ?」

「助かります! よろしくお願ひしますわ!」

わたくしたちは急いで洗濯や掃除の仕事を終わらせ、お弁当を作ります。

……そういえば、ワドルデイたちのお弁当は良いのでしょうか? わたくしたちは相談した結果、今からあの数のお弁当を用意できないと判断しました。

「せめて、ちよつとしたお菓子を差し入れしませんか? 飴を一つとか」

「無いよりはかはマシね……」

「そうしましょうか」

わたくしたちは自宅からお菓子を持ち寄り、残りはコンビニで購入することにしました。

昼頃にお弁当を持って村に行きました。

先にコンビニによってから、広場にいる陛下の元へ向かいます。

陛下と閣下はボルン署長さんの家にいらっしやいました。いつもはボルン署長が座っている椅子に、陛下は座っていらっしやいます。閣下はその隣で、うちわをあおいでいます。

民家の修繕は終わったらしく、ワドルデイたちは槍を片手に、広場の石畳の上に座っています。お疲れ様です。

「陛下！閣下！」

大声を上げると、こちらに気づかれました。

わたくしたちは陛下たちの近くに寄ります。

「おお！待っていたゾイ。……手に持っている物はなんゾイ？」

「これはワドルデイたちのお菓子です。お弁当までは用意できなかったので」

「ワシの分は？」

「お二人には、デザートにプリンがございますよ」

「許す！」

警察署の前を借りて、お弁当を食べました。

メイドの分は、お弁当の余った料理を詰め込んだ小さなお弁当です。

ワドルデイたちも、食事中は一旦休憩です。お菓子を配って、食べてもらいました。

食事を食べても、メイドたちの仕事は終わりません。

民家を一軒ずつ尋ねて歩き、必要な人数分のお菓子について聞き回ります。もちろん謝罪も忘れません。頭を下げて回ります。

その仕事は昼から夕方遅くまでかかりました。

帰り道は、アーニヤとランタンと三人で、どんなお菓子を作ろうか話し合います。

見た目も楽しんでもらえるなら、アイシングクッキーが一番だろうということで、アイシングクッキーに決まりました。

謝罪のためのお菓子作りではありますが、今から作るのがちよつとだけ楽しみですわ。

モスガバー、恐竜

花粉症の季節がやってきました。

城でも村でも、咳の音が聞こえてきます。

わたくしは花粉症ではありません。

なので花粉が多く飛んでいる日は、やたら目がゴロゴロするなあと、違和感があるぐらいです。

しかし、こんなに花粉が飛んでいる年は初めてです。

……まさか、陛下は関係していませんよね？

それから、とある日の夜中。

なにか、歌のようなものが聞こえました。それは玉座の方から聞こえてきた気がして。

わたくしは。パジャマ姿にカーデイガンを羽織り、夜の静まった廊下を歩きます。

歌は玉座の間へ近づくとつれて、大きくなっていきます。

その玉座の間の扉前に、誰かいました。あのシルエットは……。

「メタナイト卿、こんばんは」

「こんばんは、リーノ。こちらへ」

促されるままに玉座の間の向かい側、ベランダの方へ身を隠します。

静かにしていると、陛下と閣下が鳥かごらしき物を持って出てきました。

お二人はそのまま陛下の自室方面へ歩いて行かれます。

充分な距離があいてから、わたくしたちは身を隠すのをやめました。

「陛下がお持ちだった鳥かごはなんでしようか……？」

「あの中にはザ・ツインナッツという双子の妖精が入っている」

「双子の妖精……」

「リーノ。おそらく、そなたがあの子の妖精たちの世話をするように命令されるだろう。何

かわかれば、教えてくれ」

「かしこまりました」

「今日はもう遅い。送ろう」

「はい。お願いします」

愛する人と手を握り、一時を共にします。

そして、夜中に警報が鳴りました。

それから大砲の音が、城全体を揺らします。窓から外を見れば、巨大なイモムシが城に向かっていました。

イモムシは城に張り付き、糸をはいてサナギになりました。

あれは一体なんなのでしょうか……。

翌日の朝。

陛下たちの朝食後に、こっそりと命令されました。

「リーノ。お前はわしの部屋にある、あるものの世話をせい」

「内緒でゲスよ」

「かしこまりました。すぐに行動を開始します」

片付けはランタンとアーニャに任せて、わたくしだけ別行動をします。

陛下の自室に入ると、窓辺にその子たちいました。

鳥かごに窮屈そうにいれられている、双子の妖精です。朝日に照らされて暑そうでした。

「たいへん！すぐに移動させますからね」

わたくしはカゴを、日が当たらない端に移動させます。カーテンが日差しをさえぎり、二人は暑さから解放されました。

「ありがとうございます」

「あなたは……？」

「わたくしはリーノ。あなた方のお世話を任されたものです」

双子の警戒心を解いてもらいたくて、わたくしは微笑みました。

すると、双子は両手を胸の前で握り、頭を伏せます。

「お願いです！」

「私たちをここから出して」

「……ごめんなさい。このかごの鍵を持っていません。だから、あなた方を出すことはできません」

「そんな……」

「ああ……」

わたくしは申し訳ない気持ちでいっぱいになりました。

せめてもの償いに、彼女たちの世話を頑張ることにしました。
まずは食事です。

元気がなければ、いざというとき逃げ帰ることができません。彼女たちに何が食べた
いか聞くと、蜂蜜水と答えたので用意しました。

美味しそうに飲んでくれました。

どうやら、いつもは果実水を飲んでいるようです。

「蜂蜜水はなかなか飲めないから」

「すぐおいしいわ」

「それは良かったです。こちらに滞在される間は、どちらもご用意できますから、遠慮な
く言ってくださいね」

それから、生活環境を整えます。

鳥かこの床は硬いので、クッション性のある床材を小さく切って入れます。その上に
布を敷いてあげます。

これで、過ごしやすくなりました。

「ありがとうございます」

「とても過ごしやすくなりました」

「良かったです。他に何かあれば……」

「ふわあ」

双子の一人があくびをしました。

わたくしはにこりと笑います。

「お疲れのようですね。部屋を暗くしますので、どうぞお休みください。わたくしは傍で本でも読んでいますので、起きたら教えてくださいね」

「わかりました」

「おやすみなさい」

明かりを消します。

窓の外から入ってくる自然光だけが、部屋の中を照らしました。

昼ごろになると、部屋の外が騒がしくなりました。

強風が窓を何度も叩きます。そのため、双子が目覚めてしまいました。

わたくしはかごを窓からそつと移動させて、部屋の中央にあるテーブルへと移動させます。

「ここなら、うるさくありませんよ」

双子たちはほつとしたように笑います。

「ありがとう。リーノは本当に優しいわ」

「そのようなことは……。わたくしは、陛下のご命令がなければ、あなた方の世話すらできませんでしたから」

「かといって、その陛下にお礼は言えません。私たちがこうやって閉じ込めているんですもの」

「……陛下があなた方に飽きたり、手放そうと思えば良いのですが……」

すぐにはうまくいかないでしょう。そう思っていたら、突然ドアが開きました。

「リーノ！」

「フーム様、ブン様！」

「ここに妖精はいない？」

「お二人なら、こちらに」

わたくしはかごとがよく見えるように、その場からズレました。

フーム様は「いた！」と仰って、かごと近づきました。

「ねえ、お願い！カービィとモスガバーの戦いを止めて」

「モスガバーは平和を愛しています」

「私たちの歌で止めてみましょう」

フーム様は鍵を懐から取り出して、解錠なさいました。

そしてフーム様とブン様、それぞれ一人ずつ妖精を手に乗せます。

「ありがとう、リーノ。あなたのおかげで快適でした」

「このご恩は忘れません」

「ならば、できることなら陛下を許してあげてくれませんか？」

その言葉に双子は顔を見合せて、それから言いました。

「許しましょう」

「ありがとうございます。さようなら」

「さようなら」

「また、いつかどこかで」

別れを告げた双子は、フーム様たちと共に去って行きました。

やがて強風がおさまります。

後に会ったアーニヤとランタンによれば、大きな蛾と共に双子の妖精は帰ったそうです。故郷の南の島に無事に帰れて良かったと、そう思うのです。

そういうえば、メタナイト卿に妖精たちについて報告するよう頼まれていました。

案外早く事件が解決したので、報告する時間がありませんでしたね。

「今回ばかりはスピード解決だったということ、許していただきましょう」

今、村に恐竜ブームがきています。

村から離れた荒野の発掘現場にて、恐竜の骨の化石が見つかったからです。

そして陛下にも恐竜ブームがきました。

以前オススメしたときには、見向きもされませんでした……。タイミングというのは大事ですね。

陛下は城の図書室で、恐竜の本をたくさん読まれました。字は読めなかったはずなのに、多くの絵をご覧になりました。

絵本から図鑑など、とにかく恐竜が載っている本はすべて読まれます。すべてを読んだ、次の日の朝。

陛下は「恐竜を探しに行く」と仰られました。

城の廊下で、わたくしと閣下は困り果てました。

「――陛下、たいへん言い難いのですが」

「なら、言わんでいいゾイ」

「いえ、言わせてください。恐竜はずっと昔に滅んでしまったんですよ」

「嘘だゾイ！信じられんゾイ！」

「リーノの言う通りでゲスよ……だから、探しに行ったって無駄でゲス」

「二人してわしを騙しているゾイ！」

そして陛下は走り出しました。

あちらは大臣一家のお部屋です。……フォーム様に聞きに行かれたのでしょうか？

「陛下……きつとお心が痛むでしょうね」

「そんな暇もなく、こっちは振り回されるでゲスよ………ほら」

陛下が走って帰ってきました。

肩で息をしています。

「エスカルゴン！すぐにキュリオの所に行くゾイ！」

「はーい。そんじゃ、リーノ」

「はい。行つてらっしゃいませ」

陛下は閣下を引っ張って行きました。

わたくしは、仕事に戻ります。アーニヤとランタンが待っていますからね。

それから数日後、陛下は悲しみゆえに「恐竜はまだ生きています！」と触れ回りました。本屋に自分で書いた恐竜に関する本を置いていたり、村の道に恐竜の足型を残したり。

わたくしは急いで村のみんなに謝りに行きましたわ。

みなさん、陛下の困り事には慣れっことで、中には面白いものもあるからと、笑って許してくれます。

村人たちの心の広さに感謝しつつ、わたくしは陛下に怒りました。

「陛下……これ以上、村人たちを困らせてはいけませんわ」

「うるさーい！かくなる上は……！」

そう仰って玉座の間に籠られます。

数十分後に、出てこられたのは陛下と閣下と、知らない方でした。

閣下と同じくらい的身長で、豊かな白髪とお髭とメガネが特徴的でしたわ。白衣を着

ていらっしやいます。医者か研究者でしょうか？

陛下は上機嫌で、知らない方を紹介してくださいます。

「リーノ。こちらはDNAの権威ドクターモロだゾイ。恐竜の骨が出た発掘現場に案内してやれい」

「かしこまりました。モロ様、ご案内させていただきます」

「うむ。よろしく頼むよ」

紳士的に見える態度ですが、玉座の間から突然現れたのは怪しいですわ……。わたくしは警戒を気づかれないうように、モロ様に接します。

発掘現場に到着しました。

モロ様はさつそく、発掘作業をしているフーム様たちに声をかけられます。わたくしは誰にも挨拶せず、城に戻りました。

はやくメタナイト卿に知らせるべきだと判断したためです。

メタナイト卿は彼の自室におられました。

部屋の中に入り、手早くドクターモロについて報告します。

メタナイト卿は少し考えられてから言葉を発しました。

「ドクターモロは魔獣かもしれない」

「やはり……ああ……陛下」

「辛いだろが、何かわかればまた報告してくれ」

「もちろんです。では、失礼いたします」

わたくしはメタナイト卿の部屋を出て、とりあえず仕事に戻りました。

数日たつと、プププランドに恐竜パークがオープンしました。

最近、城からワドルデイたちが減っていたのは、パークを造りに出ていたためなんです。ね。

メイド三人は、パーク内の売店を手伝う事になりました。ですが、わたくしだけは陛下に連れられてボートに乗ったのです。

「面白いものを見せてやるゾー！」

「はあ……」

嫌な予感がしますわ。

陛下とわたくしの他に閣下、フォーム様、ブン様、カービィ、そして十人ほど村人たちが乗ります。

村人たちの中には、サトさんとハナさんがいらつしやつたので手を振りました。あちらも気づいてくれて、手を振り返してくれました。

「出発進行ゾー！」

陛下がボートを発進させます。

数分ほど川を下ると、両扉が閉じられた門が見えてきました。

近づくとも扉はボートの大ききさだけ開きます。その門をくぐりました。

門の先は、ずっと川が流れており、左右の陸地には森が続いています。

また数分ほど川を下ると、陛下はわざとボートを停止させます。そしてボート内のポタンを押しました。

右手側の陸地に、檻に入った羊たちが現れます。

——そして、陛下そっくりの青い恐竜が森の奥から出てきて、羊たちを食べちゃいました。

青い恐竜はこちらに気づきます。

「マズイー！」

「うわあああ出すゾイー！」

フーム様と陛下の声と同時に再び、ボートが急発進しました。

それに続いて青い恐竜が追ってきます。

わたくしは狙いを定めて、特大の氷を青い恐竜に放ちました。

——ガゴン!!

鈍い音がして、氷と青い恐竜は川の中に落っこちました。

「やったー！」

「——いえ、まだですね」

恐竜にとつて川は浅かったようです。身を起こして直ぐに追いかけてきました。たいへん怒っているように見えました。

「リーノ！怒らせちやつたじゃない!!」

「すみません。ですが、もう何発か当てれば気絶するかと」

「やるゾイ!!」

「かしこまりました」

わたくしは大きさの違う氷を何個も作り出し、タイミングをズラして放ちます。

——当たり、外れ、外れ、本命が当たります。

青い恐竜はようやく目を回して、大地に沈みました。

「やったゾイ!!」

「陛下、このまま進んでください！逃げましょう」

そしてわたくしたちは洞窟に入ります。

陛下と恐竜が混ざったアレは何だったのか？答えは出ないまま、今度は大きな蚊に襲われます。

逃げるように洞窟を進み、また空の下に出て。

次は閣下と恐竜が混じったような、恐竜が出てきました。

それは青い恐竜と合流して、わたくしたちを追いかけてきます。

氷で何とか応戦しますが、こちらの足場が安定しないため、上手く狙えず当たりません。

やがて追いつかれてしまいました。

ボートが陸に乗り上げて、みんなが森の中に放り出されます。

散り散りに逃げていく背中を見ながら、わたくしも一人で逃げ出しました。

できたらフーム様たちと逃げたかったですね。そうしたら守ることができたのに……。

夜の森の中、息をひそめてドクターモロの研究所を目指します。

その途中でメタナイト卿に出会いました。

メタナイト卿は、わたくしにそっくりな恐竜に跨っていましたわ。

わたくしはメタナイト卿によく懐いている恐竜に、目をぱちくりとさせました。

「メタナイト卿、その子は一体……？」

「うむ。恐竜に襲われかけたところを助けられたのだ。それから行動を共にしている」

「そうでしたか。……わたくしに似たのでしょうか？」

「かもな」

もし、メタナイト卿そっくりな恐竜がいたら、わたくしに懐いてくれるでしょうか？
そんなことを考えつつ、二人と一匹で森の中を進みます。

しばらく歩くと、ドクターモロの研究所らしき建物が見えてきて。建物の前では、村人たちにそっくりな恐竜たちに囲まれるみんなの姿がありました。

「いけない！」

「……」

メタナイト卿はわたくしたちを置いて、フーム様たちを助けに行きました。

カービィそっくりなピンクの恐竜が、ファイヤーをコピーします。恐竜になってもカービィはカービィなのです。驚きましたわ！

カービィ本人はワープスターで空を飛びまわり、ピンクの恐竜から逃げます。

そして、陛下が取り出した特別な爆弾を吸い込みました。

派手で底知れぬ力を秘めた冠を、カービィは頭にかぶります。

それで――。

カービィを中心に爆発が起きました。

建物は崩れ、恐竜たちは骨と化しました。

メタナイト卿とわたくしを助けてくれた、あの子も骨になりました。

ショックでしたが、仕方がないことだと思いました。

それよりも、メタナイト卿たちと合流します。

みんな大きなケガもなくて、安心しました。

ですが、みんなを危ない目にあわせた陛下と閣下には、きっちり怒りました。少しでも反省してもらえたらいいのですが……。

美術館

「ねえ、リーノ。いつも開いている集会では、ヤブイ先生に教わっているじゃない？今回は別のことをしてみたらどうかしら？」

「と、言いますと……何をいたしましょうか？」

とある日の午後、おやつ時。

城の厨房で、わたくしたちはおやつを食べていました。今日はロールケーキです。生クリームたっぷりでおいしいですわ。

厨房にいるメンバーは、わたくしとフォーム様、それにアーニヤとランタンです。ブン様とカービィは村に遊びに行っているそうです。

フォーム様は質問を待っていたと、言わんばかりに笑顔で仰られました。

「芸術の秋だもの！絵を描くのよ！そして展覧会を開くの！」

「それは素敵ですね。わたくしも何か、お手伝いできれば良いのですが」

「絵を描いてくれないの？」

「絵を描くことよりも、参加者を増やすお手伝いできればと思っています」

それを聞いたアーニヤが言いました。

「でしたら、フーム様主催の展覧会に参加された人にはお菓子を安く売る、というとはどうでしょうか？」

「……それじゃ、お菓子のためにみんな絵を描くわ」

「そうよね。リーノのお菓子って、人気だもの」

「ですね」

フーム様、アーニヤ、ランタンが頷きます。

わたくしは照れました。

「うふふ、ありがとうございます。お菓子のことは、何か差し入れをしたいと思って考えたことなんですけれども、やめておきましょう」

「そうしてくれると嬉しいわ。みんなには損得勘定なく芸術と向き合ってほしいの」

フーム様の真剣な表情がまぶしいです。

わたくしは目を細めました。そして提案します。

「では、さっそくパーム大臣と村長さんに連絡して、開催日を決めましょうか。それに、陛下にもお知らせして……」

「デデデはいいわ……」

「ですが、ちゃんと伝えておかないと以前のように反政府活動と間違われますよ？」

「うう……リーノから伝えてくれる？」

「かしこまりました」

フォーム様は疲れたようにため息をこぼされました。

その日の夕食。

食堂にて、陛下と閣下に展覧会のことをお伝えしました。

「展覧会々？それはどんな反政府活動ゾイ？」

「違いますわ、陛下。展覧会とは、美術品などを並べてみんなに公開することですわ。今回は村のみんなで絵を持ち寄って、開催するようです」

「ふーむ？」

陛下も閣下もピンときていない様子でした。

念を押すように、わたくしは提案いたしました。

「陛下、閣下も展覧会に参加してみませんか？審査員側として、みなさんの絵を審査するのです。陛下と閣下に選ばれるなんて荣誉なことですわ」

そういうと、陛下と閣下は満更でもないようです、ニコニコと笑いました。

「わしに審査させるなら、それ相応の場所が必要だゾイ」

「ならば、美術館を建ててはいかがですか？都市部には必ずあるものだと聞いておりま

す」

「それは名案だゾイ!!」

陛下の笑い声が、高らかに響き渡りました。

――
展覧会は、できたての美術館にて行われる予定でした。

ですが、絵を預かる当日になって問題がおきます。陛下が「村人たちの下手な作品は
いらぬい！」と仰ったのです。

一体どうして、心変わりされたのでしょうか。

陛下は気まぐれなので、心変わりする何かがあつたのだと思います。

それが何かは、見当がつきません。

村のみんなの作品は返却されました。

代わりに美術館に飾られることになった作品は、どれも素晴らしいものでしたわ。

「陛下、これらの作品は一体どこから持ってきたのですか？」

「秘密ゾイ！」

「そうですか……」

いつか、これらを常設する美術館に行きたいと思いました。できるなら、メタナイト卿と一緒にいきたいです。ですが、どこから持ってきたのかわからなくては、出かけることも叶いませんわね。

展示物のガイドはフォーム様に任せられることになりました。

わたくしは美術館に人を呼び込むため、美術館の外でカフェを開くことになりました。

「フォーム様のガイド、楽しみですわ。わたくしはカフェの仕事で行けませんけれど……残念です」

「なら、仕事が終わったらちよつとだけガイドしましょうか？多くの時間はとれないけれど、それでも良ければどうぞー！」

「まあ、よろしいのですか？ありがとうございます。ぜひ聞かせてくださいませ。あの、アーニヤとランタンも誘ってもよろしいですか？」

「いいわよ」

「ありがとうございます。フォーム様」

普段の仕事に加えて、カフェの仕事……メニューを考えることになりました。

その日の夜。

夕食の後片付けを終わらせたなら、その足で図書室に向かいます。体はすでにへろへろですが、残業代が出るようなので頑張ります。

図書室にて、カフェのメニューを決めます。

わたくしたちの得意なものを作ることになりました。

わたくしはコーヒー、ランタンはお菓子、アーニャは最近ハマっているらしいアイス作りを担当します。

「カフェをするにあたって、ワドルデイたちを貸してくれるそうなので、人手は足りると思います」

「それを聞いて安心したわ」

「ホールとキッチンの両方を担当することは大変ですから、ワドルデイたちがいてくれて助かります」

わたくしたちは頷きあいました。

メニューが決まれば、実際に食材を用意して作ります。

図書室にあった料理本の情報を頼りつつ、おいしい料理に仕上げます。

一番楽しく作ったのはアイスですね。どんな飾り付けにするのか、考えるだけでも楽しいです。できあがったアイスを食べるときも、仕事というのを忘れて盛り上がりましたわ。

結果的に、お菓子は前日に作れるだけの分量を人数制限をもうけて、販売することに決まりました。

アイスは常設を三種類、日替わりを一種類用意します。

コーヒーは多めに確保したので、みなさんに行き渡ると思いますが。

フォーム様がガイドをなされる当日。

ガイドが始まってから、カフェを開店させます。

カフェ目当てに来てくださった村人たちの対応をしていると、陛下と閣下がバタバタと慌ただしく美術館から出てこられました。

そのまま車に乗って城に向かわれます。

「何でしょうか……?」

その答えはすぐに現れました。

それは魔獣には見えない可愛らしい見た目で、ペンキとハケを持った方でした。

城から美術館へまっすぐ滑るように突撃し、美術館の中に入ります。彼が中に入った途端、フォーム様や村人たちの悲鳴が響き渡りました。

「今の方は、魔獣でしょうか……」

「かもね。どうする?メイド長?」

「カフェ、閉じた方が良いかもしれません」

「二人の言う通りです。今日はここまでにしませう」

村人たちに閉店を告げて、片付けを始めます。

アイスもお菓子も、コーヒーに必要な機材も今日だけは城へ移動します。

その途中、メタナイト卿と出会いました。

慌てている様子でしたわ。

「リーノ！火をおこせる物を持っていないか?！」

「ま、マツチならございます」

「貸してくれ、後で返す」

「すべて使っていたらだいて結構ですよ。お気をつけて」

「ありがとう。ではな」

ひらりとマントをひるがえし、メタナイト卿は走って美術館へ向かわれました。

メタナイト卿のことが心配でしたが、まだ危険があるとは決まったわけではありません

ん。とにかく、アーニヤとランタンの二人を安全な場所に送ってから、考えることにいたしました。

わたくしたちは再び、城の方へ歩き始めます。

城に到着したところで、遠くで爆発音が聞こえました。

振り返ると、美術館が吹っ飛んでいましたわ。

わたくしは、とうかわたくしたち三人は言葉を失いました。

「……アーニヤ、ランタン。後は任せてもよろしいでしょうか？ わたくしは村に向かいます。メタナイト卿が美術館にいたのなら、みんな無事でしょうから」

「こちらは任せてください」

「後でね。リーノ」

「ええ。では、頼みます」

わたくしはアイススケートの要領で、地面を滑ります。走るよりも速く、村へ向かいました。

村では、みんながいました。

メタナイト卿も、陛下も閣下も、フォーム様たちも、村人たちもみんな無事です。

わたくしは心から安堵しました。

メタナイト卿とフォーム様たちがいる方へ近寄ります。

「メタナイト卿、フォーム様、ブン様、カービー……みなさん無事で良かったです」

「リーノ！急いできてくれたのね、ありがとう」

わたくしが作った氷の道を見てフォーム様が言いました。わたくしはにっこり笑いかけます。

「すぐにもみなさんの無事を確かめたかったので……陛下たちもご無事のように良かったです」

「エスカルゴンが賠償金のことでも頭痛めてるけどな」

と、ブン様がからかうように仰います。

「そうですか……ちよつと行つてきますね」

メタナイト卿と目が合います。

言葉にせずとも、気持ちを通じあつた気がしました。

「リーノ、先程は助かった。ありがとう」

「役に立てたのなら嬉しい限りですわ。……では、わたくしは陛下のところに行つてきますね」

「ああ……またな」

「はい。後ほど」

陛下のところに行くとき、閣下が陛下に対して怒っていました。

わたくしはおずおずと声をかけます。

「あの、陛下……閣下……」

「ん？ おお、リーノでゲスか。なんの用でゲスか？」

「賠償金のことでお話があります。今すぐお金が必要なのですよね？ でしたら……」

わたくしは村で、期間限定のカフェを開店することを提案しました。

アイスやお菓子などは揃っています。カフェに必要なアイスとテール、パラソルも。

「いかがでしょうか？ 少しは足しになると思ったのですが」

「うむ。よかろう。カフェの開店を許すゾイ」

「ありがとうございます。陛下。では、明日から始めますね」

「よかったでゲスね！ これでちよつとは楽になるでゲスよ」

「デハハハハ！ リーノ、褒めてつかわすゾイ！」

陛下のご機嫌がなおってよかったです。

カフェはワドルデイたちにも手伝ってもらって、開店しました。

村の広場で開店したためか、美術館のときよりも大勢の村人たちが来てくれました。

カフェが成功してくれて、嬉しいですわ。

閣下のロボ

今日も陛下の部屋を掃除します。

ですが……。

「お前たち、もうよいゾイ」

部屋に戻られた陛下が、わたくしたちに声をかけました。

「陛下。ご機嫌麗しゆうございます。あの、もうよいとは……う？」

「あとはエスカルゴンにやらせる。下がるゾイ」

「？かしこまりました」

わたくしと、アーニヤと、ランタン。そしてワドルデイたちは顔を見合わせます。

その表情には疑問が浮かんでいました。ですが、陛下に質問はせず、部屋から移動しました。

次の仕事場に向かいます。

次は客室を掃除します。大きい部屋が多いので、気合いが入りますわ。

次の日。

早朝、朝食前から声が城に響きます。

あれは陛下の声です。すでに朝食を作っていたわたくしは、手を止めました。

そして一緒に朝食作りをしていたアーニヤとランタンに言います。

「陛下のご様子を見てきます。後をお願いします」

「はい、行ってらっしゃい」

「任せました。リーノ」

「二人とも、ありがとうございます」

わたくしは厨房を出て、陛下の部屋へと歩き出しました。

陛下の部屋まで行くと、外から中を覗く人たちがいました。

閣下と、大臣一家と、カービーです。

わたくしは彼らに近づきました。

「閣下、みなさま、お揃いで」

「ほーよう」

「しー」

閣下は静かにするようジェスチャーされました。そして「中を見る」というように、部屋奥を指さします。

わたくしは部屋の奥、ベランダへと目を向けました。

——そこには、陛下と閣下がいらっしやいました。

「……こちらにも閣下。あちらにも閣下がいらっしやいますわ」

「ふふ。デデデという方はロボットなのよ。リーノ」

「まあ、そうでしたか」

フォーム様の言葉をうけて、改めて陛下と向き合う閣下そっくりなロボットを見ます。

……顔や関節部分にネジが見えました。

「確かに、あちらはロボットのようですね。ご自身そっくりなロボットを作れるなんて、すごいですわ」

「まあ、大したことないでゲスよ」

和やかな空気が流れました。

しかし、その雰囲気壊す一言が聞こえてきます。

「カービィを倒すゾイ！」

「カシコマリマシタ」

「カービー逃げて！」

「ぼーよ!？」

いち早く気がついたフーム様が、カービーを逃がします。

閣下のロボが、逃げたカービーを追います。

わたくしはロボの足を凍らせました。

「えい」

「アワワ」

ロボは動けなくなり、やがて足が壊れて動かなくなりました。

ロボから煙が立ち上ります。

「ああ……ロボやーい」

閣下が心配そうにロボに駆け寄りました。

そして、陛下がこちらにやって来ました。ロボを見てから、わたくしを見て怒ります。

「なぜロボを止めたゾー！」

「カービーに意地悪をしてはいけなからです。彼は何もしていませんわ」

「ぐぬぬ……ふんだ! さつさと朝食にするゾー！」

「かしこまりました」

陛下はずんずんと廊下を進みます。おそらく食堂へ向かわれたのでしよう。

わたくしは大臣一家とカービィに向き直りました。

「それでは、わたくしはこれで。朝食の準備がありますので」

「リーノ、ロボを止めてくれてありがとう」

「どういたしまして。では、失礼いたします」

ペこりと頭を下げます。

次に閣下の傍へ近づきました。

「閣下」

「……なんでゲスカ」

「ロボの様子はいかがですか？」

おそるおそる質問します。

閣下はこちらを振り向きました。少しだけ、目が潤んでおられました。

「キヤタピラがちよつと壊れただけでゲスカから、これならすぐに直せるでゲスよ」

「それは良かったです。……すみません。カービィのためとはいえ、閣下のロボを壊してしまいました」

「いいでゲス。私もこのエスカルゴンロボには、悪いことをして欲しくなかつたでゲスカから……」

「そう言つてくださると助かります。……では、わたくしは朝食の準備を急ぎますので、

閣下もいらしてくださいね」

「すぐ行くでゲス」

再び頭を下げてから、わたくしは早足で廊下を進みました。

閣下のロボは修理されました。そして陛下のために働きます。

その度に壊れて、閣下の下に戻ってきました。

閣下は睡眠時間を削ってロボを直されます。今では、フーム様も参加しているとか……。

お二人とも、目の下に濃いクマを作っています。

あれでは体に良くありません。なんとか、休んでいただきたいですね。

原因である陛下は、閣下のロボを大切に扱ってくださいるわけではないようです。困りましたわ……。

以上のことをメタナイト卿に相談しました。

わたくしたちは中庭にいます。わたくしとメタナイト卿の視線の先では、ブン様と

カービィがボール遊びをしていました。

噴水の縁に座ってお話しているので、水しぶきがちよつとだけ肌にかかります。冷たくて気持ち良いぐらいです。

「メタナイト卿、どうしたら良いと思いますか？」

「そうだな……」

メタナイト卿は静かに考え始めました。わたくしはじつと、答えを待ちます。

——ヒュー……ドカン!!

空気を切り裂くような音と、爆発音がします。

ブン様の後ろで爆発が起きました。

「一体何が……!?!」

ブン様とカービィは何か気づいているのか、視線をカービィの奥へ向けています。

わたくしもそちらを見ました。

あれは……閣下のロボ!?! ロケットランチャーを構えています。

「——いえ、ロボに変装した閣下ですわ!」

よく見れば、ロボの足元がキャタピラではありませんでした。閣下の足です。

わたくしは急いで分厚い氷の壁を作り出しました。

狙いは閣下とカービィの間です。

——ガキイン!!

凍えるような冷気が、辺りに落ちてきます。狙い通り、閣下とカービイの間に壁を作れました。

わたくしは急いで閣下の傍に走ります。

「閣下! どうされたのですか? 急にカービイを狙うなんて……」

「リーノ……陛下にカービイを倒すよう命じられたでゲスよ」

閣下の目のクマは、昨日よりも酷くなっている気がしました。

わたくしは悲しい気持ちになりました。

「閣下、どうかお止めください。寝てないのではありませんか? ここはわたくしに任せ、今日のところはゆっくりと休んでいただけませんか?」

両手を閣下の手に添えて、お願いします。

閣下は言葉を力なくこぼされました。

「……………すまんでゲス」

「謝るなら、カービイとブン様をお願いしますわ」

「……………今度謝るでゲス」

「かしこまりました」

閣下はよろよろと、元気がないご様子で中庭から去っていきました。

わたくしはそつと息を吐きます。

分厚い氷の壁を迂回して、ブン様とカービィ、それにメタナイト卿と合流します。「みなさん、ご無事ですか？」

「なんとかね。エスカルゴンの奴、ひでえよ」

「寝不足で正常な判断ができていないのです。どうか、お許してください」

「うーん……。とにかく、今日は中庭で遊ぶ気分じゃないや。カービィ、村行くぞ」「ほよほよ」

「またね。リーノ、メタナイト卿」

「はい、また」

「ではな」

ブン様はカービィを連れて行きました。

その後ろ姿を見送ってから。わたくしはとある部屋を見つめます。そこは陛下の部屋でした。

「——陛下の部屋が、どうした？」

「きちんと、お話しなくてはいけないと思いました」

わたくしの心はメラメラと燃えていました。

陛下の部屋。

扉を激しく開け放ちます。大きな音に驚いた陛下は、びつくりした顔をこちらに向けました。

「な、なんゾイ」

「陛下。閣下と、閣下のロボについてお話がございます」

凜とした……というよりも、静かだけど激しさを持った口調でお話します。

後ろには、なぜかメタナイト卿がついてきており、わたくしの姿を観察されておりま
した。

陛下はわたくしの様子に気がつかれたのか、視線をわざとそらします。

わたくしは陛下の前に行き、じつとお顔を見ました。

「どんな用件か……おわかりですか？」

「し、知らんゾイ」

「閣下に意地悪しないでください。陛下に振り回されて、閣下はひどい寝不足なのです。

このままでは命に関わります」

「大袈裟だゾイ……」

「いいえ。大袈裟ではありません」

息を整えて、努めて冷静に説得します。

「陛下、賠償金を払うために節約していること。そのため、派手に遊べないことは、わたくしも理解しております。だからといって閣下をからかってはいいけません。——わたくしで良ければ、暇つぶしのお手伝いをさせていただきます。なので、どうか、閣下に一日お休みを……」

頭を下げようとした、そのときでした。

突然、ベルの音が鳴り響きます。

「これは一体？」

「誰かが、ダウンロードシステムを動かしておる！リーノ、説教はナシだゾイ！」

「いけません！陛下!!」

陛下はあつという間に部屋から出ていきました。

「リーノ、追うぞ」

「はい！」

わたくしはメタナイト卿と共に後を追います。

廊下から、玉座の間を覗きました。

陛下と閣下、新品のようにボディがピカピカと輝くエスカルゴンロボが部屋の中央にいます。

彼らだけではありません。カスタマーサービスが画面にうつっています。

エスカルゴンロボはどこから食材を取り出したのか、あつという間に満漢全席を作りました。陛下はおいしそうにご飯を食べていらつしやいます。

カスタマーサービスが、新しいエスカルゴンロボについて注意事項を話しました。

青のボタンを押してはいけません。陛下は押ししてしまいました。そしてエスカルゴンロボが変形しました。

戦闘に特化したその姿は、閣下の望む姿とはかけ離れています。

わたくしはまた悲しい気持ちになりました。

陛下は更に赤いボタンを押します。

エスカルゴンロボに飛行機のような翼が生えて、空中を飛びました。

——そして壁を壊し、外に飛び出します！

「——いけない！ロボは村に向かっていきますわ！」

「リーノは村へ。私はカービィのところに行こう」

「かしこまりました。お気をつけて、メタナイト卿」

「そなたもな」

わたくしたちは走り出しました。

——村はミサイルによって、いくつかの家屋が破壊されていました。

わたくしは吹雪を作りだし、消火に専念しました。

消火が早かったためか、被害は少なかったです。

ケガ人もころんで擦りむいた人しかいませんでした。

村人たちに謝罪してまわりました。

そして、すぐにワドルデイたちを連れて家屋を建て直すことを約束しました。

城へ、とんぼ返りします。

アイススケートのように地面に氷を張り、その上を滑ります。

その道中で陛下にお会いしました。お一人で、歩いておられました。

「陛下、どうしてここに？」

「お前こそ、なんでおるゾイ」

「わたくしは村の消火活動を手伝っておりました。エスカルゴンロボによって家屋が破壊されてしまったんです。……あの、家屋を修復するためにワドルデイをお借りしても

よろしいでしょうか？」

「フーン！わしに言わずともやっておったんだらう？」

「その通りでございます」

陛下は興味がないと言わんばかりに、顔を背けられました。

「勝手にせい」

「かしこまりました。兵士をお借りします」

「あと、エスカルゴンも回収しておくゾイ」

「閣下、ですか？そういうえば今どちらにいらっしやるのですか？」

「カービィの家前で寝ておる」

「寝ている……」

寝不足で限界が来たのでしょうか？

心配です。村のことはワドルドゥ隊長に任せて、閣下のところにはわたくしが行きましよう。

わたくし一人では閣下を運べませんので、ワドルデイ数人に手伝っていただきます。

「わしは帰っておやつにでもするゾイ。ランタンとアーニャに伝えよ」

「はい。すぐに行動いたします」

わたくしは陛下に対して深々と頭を下げながら、また滑り出しました。

ボンカース

それは、ある日の食事会で言われたことでした。

その日は二人一組、それぞれのパートナーと鍋を食べていました。今日は戦士たちが作ってくれたものです。とてもおいしいですわ。

たいへん楽しい時間でした。

笑い声が聞こえて、わたくしも笑って。そんなわたくしをメタナイト卿がじつと見つめられて。小さな違和感がありました。

でも、この楽しさが続いてほしくて知らないフリをしました。

鍋のシメは雑炊でいただき、完食します。

後片付けは、メイド組がしようとしたのですが、三戦士たちも手伝ってくれました。全てが終わると「話がある」と、わたくしたちは呼び止められました。

三戦士たちの雰囲気は、先程と変わって静かでした。

メタナイト卿が話し始めます。

「……食事会は、しばらく中止にしたい」

「なぜですか？」

「——成すべきことが、大詰めを迎えようとしている。そちらに集中したい」

「……かしこまりました。食事はしばらくの間、中止にいたしましたよう」

きつとハルバードができあがりそうなのですね。

勝利のためには戦艦が必要です。わたくしは素直に、食事会の中止を受け入れました。

ですが、理由を知らないアーニヤとランタンは不安そうです。

アーニヤがブレイドナイトさんに近づき、その手を取ります。

「……信じて、待っています」

「ああ。大丈夫だ。すぐに会えるようになるよ」

ブレイドナイトさんがアーニヤの手を包み込みました。

そこで、ランタンが声を張ります。

「会える頻度が減つても、差し入れくらいできるんでしょう？なら、あんまり落ち込む必要もないわよ」

ランタンの隣にいたソードナイトさんが言いました。

「差し入れは助かるが、いいのか？以前のようにすぐ返礼できないが」

「お礼が欲しいわけじゃないわ」

「……長い時間は取れないし、必ず会えるわけでもないしぞ？」

「それでもいいのよ……。だつて何かしなくちや落ちつかないの。私たちの間にある糸が切れてしまいそうで怖いのよ」

「ランタン……」

ランタンは寂しそうに、ソードナイトさんの手を握りました。

メタナイト卿がみんなに聞こえるように、声をかけます。

「リーノ、ランタン、アーニヤ。すまない」

「謝らないでください！会えるだけでも嬉しいのですから」

本当は、もつと傍にいたいのです。ですが、宇宙の平和のため、少しの辛抱ですわ……。

今日は休みの日。

アーニヤとランタンと一緒に村へおりました。

公園の近くに置かれたベンチで、わたくしは空を見上げていました。

考え事をしていました。

ナイトメアとの決戦は近いです。わたくしはどうするべきでしょうか？

村に残るべきでしょうか？それとも兵士に志願しましょうか？
首を振ります。

氷を操る能力があつたとしても、わたくしは城で働く村人です。とても兵士として戦えないでしょう。

わたくしは自分が槍を振り回したり、剣を掲げる姿を思い浮かべます。どうにも、しつくりきませんね。

ため息を吐きます。

やはり、メタナイト卿の足でまといにならないためにも、村に残るべきでしょうか？
それだとハルバードに乗船する人たち……メタナイト卿を含めたわたくしの大切な人たちの安全を、私の手で守れなくなりません。

わたくしの力は、決して大きくはありません。
けれども、小さくもないはずです。

「非戦闘員として、雇っていただくのも良いかもしれませぬ……」

「どこに雇ってもらうの？」

「きやつ」

突然サトさんのお顔が、目の前に現れました。

わたくしはびつくりしてしまいました。

「サ、サトさんでしたか。こんにちは」

「はい、こんにちは。……それで、どこに雇ってもらうの？カワサキの店？」

「いえ……その……」

「カワサキの店なら助かるわ！今より高い値段になっても、毎日食べに行くわよ！」

「あ、ありがとうございます……。でも城を辞めることになるのは、しばらく先の話になりますわ」

「あら、そう？残念ね」

「あ、あはは……」

サトさんが本気で残念がります。

料理上手のサトさんに、こんな風にわたくしの料理の腕を褒めてもらうのは嬉しいです。すね。

そして彼女は隣に座りました。

何か、話したいことがあるのでしょうか？

そんなことを考えている内に、サトさんのトークが始まりました。

「ねえ、知ってる？今、村に大男の旅人が来ているらしいわ」

「大男の旅人さん……ですか。どうしてこの村に？」

「それがね、カービイを探しているらしいわよ」

「カービィを？」

彼を訪ねてくる人……そして体が大きく旅人であること……。うーん、思い当たる人がいませんね。

「なぜカービィを訪ねて来たのでしょうか？」

「詳しくはわからないけれど……。そう！ちようどあんな感じよ！」

「え？」

突然サトさんが前方を指しました。その方向へ視線を向けると、紫の体毛に黒のズボンを履いた大男がゆっくり歩いていきます。背中には大きなハンマーを背負っています。

……あの方ってボンカースではありませんか？

きよろきよろと辺りを見回しています。

誰かを探しているのでしょうか？もしかして、彼がカービィを探しているのでしょうか？

わたくしは確かめるべく、サトさんの静止をふりきってボンカースに近づきました。

「こんにちは」

ボンカースはゆっくりとこちらを見ました。

大きな体、鋭い目付き、ちよつとだけ怖く感じます。

ですが、怖さよりも彼と話したいと思いました。

「わたくしはリーノ。何か、困っていることはありませんか？」

「……人を、探して……いる」

「そうなのですね。わたくしで良ければ一緒に探しますわ」

「この……人……」

ボンカースはポケットから一枚の写真を取り出しました。

写真にはカービィが写っていました。やはり、ボンカースはカービィを探していたのですね。

わたくしは頷き、微笑みました。

「その方の家まで案内いたします」

「知って……る!？」

「ええ、カービィは有名ですから……。ところで、あなたのお名前は？」

「おれは、ボンカース……」

「ボンカースさん、こちらです。行きましょう」

「どうも……あり、がとう……」

「うふふ、お礼はまだ早いですわ」

わたくしたちは並んで歩きます。

川に沿って歩いているときでした。

向かいの岸にカービイが釣りをしていました。しかし寝ているようです。わたくしたちに気づいていません。

「少しお待ちくださいね」

ボンカースさんから離れ、わたくしは川を凍らせました。向こう岸に渡りカービイを起こして、ボンカースさんに会わせようとしたのです。

凍った川の上に乗る——ボンカースさんもついてきました。

氷が割れなかったため、わたくしはほっとしましたわ。

「一緒に行きますか？」

「たの……む」

「かしこまりました」

二人一緒に向こう岸に渡ります。

川を凍らせても、わたくしたちが近くにやってきても、カービイはすやすや寝ていま

した。

わたくしはカービイの肩辺りをそつとトントンとします。

「カービイ、カービイ。お客様ですよ」

「んう……ぼよっ？」

「カービイ様……起きた……」

「もう少しお待ちくださいね」

カービイはわたくしの顔を見て喜び、それからボンカースさんを見て不思議そうな顔を浮かべていました。

わたくしはカービイにボンカースさんを紹介します。

「カービイ、こちらはボンカースさん。あなたを探していらつしやっただですよ」

わたくしはボンカースさんがよく見えるように、ボンカースさんの前から横に下がりました。

ボンカースさんは一歩カービイに近づくと、両手両膝をつきます。

「カービイ様……おれを、弟子……にして、ください」

「ぼよ」

カービイは驚いている様子です。

ボンカースさんはカービイの返事を、イエスカノーなのか判断しかねていました。

そこに大きな声が届きます。

「リーノ!!」

「は、はい!……あら、フォーム様にブン様。こんにちは」

「今すぐそいつから離れて!」

「え?」

驚いている間もなく、今度は車のエンジン音が聞こえてきました。

「あー!!悪徳借金取りにリーノが捕まっているのでゲスよ!」

「兵士、かかれえい!リーノを助けるゾイ!」

陛下と閣下、それにワドルドゥ隊長とワドルデイ兵士たちです。兵士たちはすぐさま

ボンカースさんを取り囲みました。

わたくしは声を張ります。

「お止めください!この方は借金取りではありません!!」

ジャキン!と槍を向けられます。話は聞いていただけそうにありません。

こうなれば、冷気を放ち足元を凍らせてしまい、動けなくしましょう。

そう思ったのですが、ボンカースさんが先に動かれました。

「うおおおおお!!」

凄まじい雄叫びを上げると、彼は軽やかにハンマーを操り、兵士たちをふっ飛ばしま

す。

そして逃げ出す陛下の車に向かってジャンプしました。車体に重い一撃を与えます。車は煙を上げてよろよろとしばらく動いたあと、爆発しました。

「陛下！閣下！」

慌てて車の方によると、陛下と閣下が真っ黒になつて空から落ちてきました。

服が少しだけ火がついていたので、冷気の風を送ります。

「大丈夫ですか？すぐに城へ帰りましょう」

「仕切り直しだゾー！」

「兵士！退却！！」

陛下はわたくしの腕を掴むと、走り出しました。

ワドルドウ隊長と兵士たちも、それに続きます。わたくしは去り際に、カービイとボンカースさんを見つけてました。そこにフォーム様たちが加わって何か話し込んでいます。うです。

ボンカースさんは借金取りではないと、わかってもらえると良いですね。

あとで陛下たちにも説明しておきましょう。

お城に撤退したわたくしたちは、やっと走るのをやめました。
わたくしは息を切らしながらも、陛下に伝えます。

「ボンカース、さんは、借金取りでは、ありません。……はあ、はあ。カービイの弟子になりたくて、ここまで旅をしてきたのですよ」

「なんと！」

「カービイの弟子に!？」

陛下と閣下はお互いに驚いた顔を見せたあと、にんまりと笑います。

そして、離れた場所にサツと移動して、こしよこしよと内緒話を始めました。

「陛下? 閣下?」

「おほん! リーノ、お前はもう行ってもよいゾイ」

「いいことを教えてくれたでゲスな」

「? は、はい」

陛下と閣下は、予備の車を兵士に運ばせて乗り込みます。

そしてまた城から出て行きました。

わたくしはメタナイト卿に、ボンカースさんのことを伝えるべく、城の中へ歩き出しました。

メタナイト卿のお部屋には、メタナイト卿がいらつしやいました。

彼はわたくしを部屋の中に招き入れてくれます。

メタナイト卿の優しい声が聞こえました。

「——それで、今日はどうしたのだ？」

「今日はご報告があつて、参りました。村に來た旅人について、ご存知ですか？」
「陛下の借金取りだと聞いている。——違うのだろうか？」

「はい。彼はボンカース。カービイの弟子になり來た男性です」

「カービイの弟子に？」

メタナイト卿は少し静かになられて、それから嬉しそうに言いました。

「カービイも有名になつたな」

「そうですね……。今ボンカースさんはカービイと、そしてフォーム様たちと一緒にいますわ」

「そうか……。もしかしたらここへも來るかもしれないな」

「村に宿がありませんので、城に泊まる可能性もありますね……。今のうちに客室を用意

しておきましょうか」

わたくしは改めてメタナイト卿と目を合わせます。

そしてにこりと笑いました。

「では、メタナイト卿。報告は以上ですわ。わたくしは用事ができましたので、これで「ああ、情報提供に感謝する。またな、リーノ」

「はい、また。メタナイト卿」

メタナイト卿の部屋を出て、歩き出します。

わたくしは、大臣一家の部屋から一番近い客室を、掃除しようと思いました。

部屋の掃除ができました。

これでボンカースさんを招くことができる。そう考えていると、お城が揺れました。

「何事でしょうか?」

わたくしは慌てて、窓の外を見ました。

驚くべきことに、隣の部屋……大臣一家の部屋から魔獣が出てきたのです！
そのゴリラのような魔獣の手にはフォーム様が捕まっていました。

「フォーム様!？」

わたくしは客室を飛び出して、大臣一家の部屋へ突撃します。

ブン様とカービィとボンカーズさんがテラスで何かを見上げていました。

「ブン様!カービィ!」

「リーノ……あそこ!」

それだけで何を言いたいのか伝わりました。

ブン様のさした先、見上げれば魔獣がゆっくりと城の壁を登っていきます。

そして頂上でドラミングをしました!

振り回されるフォーム様が必死に叫びます。

「来て!ワープスター!!きゃああ〜!!!」

まもなくワープスターが飛んで来ました。

カービィはワープスターに飛び乗り、魔獣の周りを飛びます。

ですが、すつぴんの状態では攻撃がやりにくくて、相手にダメージを与えられません。

そこで目に入ったのは、ボンカーズさんのハンマーでした。

あれならば、わたくしのアイスよりも大きなダメージを与えられるでしょう。

「ボンカースさん。カービィの本気、見たくありませんか？」

「どう……いう……？」

「合図したら、ハンマーをカービィに投げてください。そうすれば、彼は強くなりますから」

わたくしはボンカースさんの返事を待たず、叫びます。

「カービィ!!」

気づいてもらえました。

「吸い込みよー!!!——ボンカースさん今です！」

「フン!!!」

投げられたハンマーは、まっすぐカービィの所へ飛んでいきます。

カービィはハンマーを吸い込み、ハンマーカービィとなりました。

それからはカービィの独壇場です。

魔獣のあらゆる箇所をハンマーで攻撃して、フォーム様を掴んでいた手を離させます。

カービィは落ちたフォーム様を見事キャッチします。そして一旦フォーム様を、わたくしたちがいるテラスに送りました。フォーム様にケガはなく、ご無事でしたわ。

カービィは再び魔獣に向かっていきます。

そしてハンマーの最強の技を魔獣にぶつけ、空高く飛ばしました。魔獣は爆発します。

わたくしたちは勝利したのです。

手を叩き、笑顔で喜び、声を上げました。

それから思うのです。

あとで陛下たちに怒りに行こうと。

だって、陛下が魔獣をダウンロードしたから、フォーム様が危険な目にあっただもの。それだけは許せませんでしたわ。

ドリンク

星のカービィで「ドリンク」と言われたら、何を思い浮かべますか？

わたくしはカービィの体力を回復させてくれる、あのドリンクを思い浮かべますわ。

「ドリンクを飲んで元気百倍……いや、千倍ゾーイ!!!」

「ひえくくくっ!!!お助けを……ぐえっ!」

それは昼頃を過ぎた時間帯でした。

玉座の間で、陛下と閣下がお話しているようです。

ドダダダダと走る音が聞こえて、バンツ!と扉が開きます。

「リーノ!トライアスロンに行ってくるゾーイ!」

「かしこまりました。お気をつけて」

「リーノ、助けるでゲスよ!!ぎゃー!!!」

「すみません、閣下。行つてらっしゃいます」

閣下には申し訳ないのですが、元気千倍の陛下を止められるとは思えません。

なので見送らせていただきますわ。

その間に、わたくしはメタナイト卿のところへ行ききました。いつものことです。陛下に関する報告ですわ。

一時間後に、閣下は帰城しました。

よろよろと歩いていらつしやいます。そのお姿は海水でベトベト、加えて砂埃で汚れています。すぐく疲れていて、不機嫌そうです。

わたくしは玉座の間で閣下を迎えました。

「閣下、お帰りなさいませ。……すぐに体を拭くための湯を、お持ちしますね」

「あと、ココアも持つてくるでガスよ！あつたかいやつ！」

「かしこまりました」

わたくしは早足で、玉座の間から出ていきます。

二十分ほどで、玉座の間に戻ります。

ちようど、閣下はカスターマーサービスと話し終えた直後のようです。出ていた画面は引っ込み、閣下はわたくしに気づきました。

「湯と、温かいココアをお持ちしました」

「待っていたでゲスよ」

先ほどとは変わって、機嫌が良いように見えました。

ニコニコと笑って体中をキレイにすると、ココアを口に運ばれます。ずらず、と一口飲まれました。

「は、温まるでゲス。おいしいでゲスな」

「あの……ところで閣下、なにか良いことでもございましたか？」

「うん？ああ、これからあるでゲスよ」

「？」

ニコニコといたずらっ子のように笑う閣下に対して、嫌な予感を覚えました。

わたくしはなにかないかと、室内を見渡します。

ある物が、目につきました。玉座の間、真ん中で存在感を放つ大きなドリンクです。

底には蛇口が取り付けられ、そこから原液が出てきます。

それが、変わっていました。

赤色のラベルから青色のラベルに変化しているのです。

「あの、もしかや……」

「リーノ、しっ！」

閣下に口止めされました。やはりドリンクが変わっていたようです。

たしか前のドリンクは、村に販売されていたはず。

「あの……」

「陛下には内緒でゲス！」

「かしこまりました。……ところで、新しくなったこちらのドリンクは、村で販売していただけますか？」

「ワドルデイたちがちゃんとして働いているなら、もう並んでいるところでゲスよ」

「そうなのですね。教えてくださってありがとうございます」

「いいでゲスよ」

「それから閣下、わたくし用事を思い出したのでしばらく出かけてきますね」

「了解でゲス。——くれぐれも陛下には……」

「内緒ですよ。心得ておりますわ」

陛下と閣下の仲に挟まる気はございません。

陛下たちと子供たちの間にお邪魔しますわ。

村に到着すると、あちこちで横になってゐる村人たちを見つけました。

みなさん、お疲れなのようです。やはり、あのドリンクが原因のようですね。

子供たちは無事だといひのですが……。

村の広場に到着すると、普段は置かれていない自販機が視界に入りました。

傍にはフーム様、ブン様、カービーがいます。自販機に手を伸ばされていました。

わたくしは呼び止めました。

「お待ちください！フーム様！」

「わーびつくりした……リーノ、一体どうしたの？」

声が届き、フーム様たちはわたくしに体を向けます。

わたくしは走って、三人の傍に寄りました。

用件を簡潔に伝えます。

「それは、そのドリンクは前に売られていた物と違うドリンクです」

「なんですつて!？」

「どういうことだ？」

「閣下がドリンクを取り替えられたんです。その……陛下に振り回されたせいで……」

そこまで言うと、フーム様は手を顎に当てて考え始めました。

「——はじめは異常に元気になるドリンクが自販機で販売された」

「それをデデデが飲んで、エスカルゴンを振り回した。エスカルゴン、懲りただろうな」
「その通りです。なので、お返しに別のドリンクをダウンロードされました。効能までは聞けませんでしたが……」

「まあ、まず元気が出るものじゃねーよな。だってそれで痛い目見たんだし」

「——私なら、反対のものを用意するわ」

「元気がなくなるドリンク、ということですか？」

フーム様は自販機を見上げます。

「そうよ。そうすれば、あのデデデもしばらくは大人しくなるでしょ？」

「エスカルゴンはそれを狙ったんだ」

「だとしたら、このドリンクをカービィに飲ませちゃダメね。でもどうしよう！カービィに元気がないままだと、魔獣に襲われたとき抵抗できない！」

そこで初めて、わたくしはカービィを見ました。

カービィは疲れた顔で、ぐったりと仰向けになっています。元気がない、というよりも元氣を使い果たしたような感じでした。

ブン様は仰られました。

「だれか、まだ元気が出るドリンクを持っているやついねーのかな？」

「探してみましよう！リーノも探してくれろ？」

「もちろんですわー！」

フーム様、ブン様、カービィの三人とは別行動します。

わたくしは考えました。流行りに敏感で、取り入れる人。または行動に移す人。

「——コックカワサキ！」

すぐに村のレストランへ走りました。

「カワサキさん！」

お店の引き戸をガラツと開けて、中へ入ります。

カワサキさんは店中のテーブルにカレーライスを並べていました。

スパイシーな香りがしました。

「リーノ！いいところに来たねえ！今、期間限定の特別なカレーライスがあるんだよ。お一ついかが？？」

「特別なカレーライスですか？それはどんなものでしょう？」

「ふふーん！巷で話題のドリンクを入れたんだ！どう？一口で元気百倍だよ？」

「！見つかって良かったです！お一ついただきますわ」

「まいどあり〜！リーノも、あのドリンク知ってたんだね！」

「はい！探しておりました。カービィに必要なのです」
「そっか〜」

代金を渡し、お皿ごと受け取ります。店を出て、わたくしはフーム様たちを探しました。

カワサキさんの店から近い場所で、ドゴン！と、物が壊れる音がしました。

そちらへ走ると、蛇に似た魔獣がカービィを攻撃していました！

村の中で魔獣が暴れるなんて！！

「リーノー！」

魔獣の動きを止めようと冷気をまとったところで、フーム様たちと合流しました。

「フーム様、ブン様！見つけました！」

「ありがとう！よし、来て！ワープスター！」

ワープスターは瞬く間に現れました。

わたくしはカービィを助けるべく、氷を操って魔獣にぶつけます。

——魔獣の意識がカービィではなく、こちらに向きました。

とても怖かったですけど、フーム様たちを、村を守りたい一心で前に出ます。

「村を破壊されて……わたくし……怒っていますわ！」

わたくしの身長と同じくらいの氷をいくつも作り出し、魔獣にぶつけます。魔獣は怯

みました。

その隙に、カービイはワープスターに乗ります。

そして、あのカレーライスを飲み込みました！

元氣を取り戻したカービイは、魔獣をブンブンと振り回し、投げ飛ばしました。

……魔獣が飛んでいった先で、陛下たちの声が聞こえた気がしました。気のせいでしょうか？

カービイはさらに魔獣を追いかけて、捕まえます。そして空高く飛んでいき——姿が見えなくなつて——遠くで影が見えた気がしました。

それから数分後、カービイは無事に戻ってきました。

無事に魔獣を倒せたことに、わたくしたちは手を取り合つて喜びました。

片付け

思い立ったが吉日。

アーニヤやランタンのように、自室に統一感を持たせたいと思いました。

思い出の品をランダムに飾ることも楽しいです。けれど自室に訪れた方が落ち着ける空間を作ることが、重要な気がするのです。

仕事が終わりに自室に帰ったら、まず紙にどんな部屋にしたいか書き出しましょう。

「リーノ！リーノはおるでゲスか!？」

「はい。ハ()ちらに」

城内。

廊下の角から、閣下が現れました。

閣下が呼ばれるので、掃除していた手を止めて傍に寄ります。

「何かご用でしょうか？」

「陛下が散らかして、玉座の間が汚いんでゲス。掃除しに来てくれでゲス」

「かしこまりました。すぐにワドルディたちと共に向かいます」

わたくしは来た道に戻りました。

一緒に廊下掃除をしていたワドルデイたちを連れて、玉座の間へ向かいます。

玉座の間はたいへん汚れていました。

ゴミがあちこちに散乱し、微かに異臭がします。

その中で陛下はオヤツを食べて、ドラマを見ていました。

わたくしは部屋の扉を開けっ放しにしたまま、陛下のいる玉座まで進みます。

陛下は玉座に座り、大きなモニターでホーリーナイトメア社のドラマを視聴しています。

「陛下、ご機嫌麗しゅう」

「なんゾイ」

「部屋の掃除をさせていただきますわ」

「後にせい。今いいところゾイ」

「申し訳ございません。今させていただきます。ワドルデイの皆さん、お願いします！」
ワドルデイたちはただちに掃除を始めました。

わたくしはゴミを分別するため、袋をいくつか用意します。そして、袋の近くのゴミを集めて分別します。

「だあああ！騒がしくて集中できんゾイ！」

「すぐに終わりますわ。どうかご容赦を」

ワドルデイたちのおかげで、掃除は十分ほどで完了しました。

空気の入れ替えも完了しました。清々しい気持ちでいると、陛下と閣下がゴミ袋の前で何やら話し合っていました。

そしてお二方とも、ニヤリと片方の口角を上げると、命令をしました。

「者共！城にあるゴミ袋をここへ持ってこーい！！」

「急ぐでゲスよー！」

「……え？」

ワドルデイたちは走っていきました。

わたくしはポカンと口を抑えました。そして、陛下と閣下のところへ歩み寄ります。

「あの、一体どうされるのですか？」

「ホーリーナイトメア社に送るゾイ」

「……断られるのでは？」

「その時は取引停止ゾイ！デハハハハハ！！」

「左様ですか……。では、わたくしは夕食を作りにいつてきます」

「うむ。今日はハンバーグにするがよいゾイ」

「チーズインハンバーグでゲスよ！」

「かしこまりました。チーズインハンバーグを作ります。それでは、失礼いたします」
わたくしは玉座の間を出ました。

料理をするので、汚れた服を着替えるべく、まずは自室に向かいました。

その次の日、朝のニュースでサトさんとボルンさんが取り上げられていました。

信じられない言葉が聞こえてきました。

「……サトさんが片付けられない女性？」

いいえ。サトさんは綺麗好きです。家にお呼ばれした当時、とても良く片付けられていた事を覚えています。

一体、なにがあつたのでしょうか？

わたくしは朝食をできるだけ急いで食べました。

村へおりて、サトさんの家に向かいます。

家にはすでに村人が集まっていました。まるで観光地のようです。写真を撮ったり、

家の中を見学される方がいます。

家の近くに、サトさんとボルンさんを見つけました。

わたくしは素早く動き、人と人の間を抜けて二人に近づきます。

「サトさん、ボルンさん……」

「やあ、リーノ」

「あら、リーノも来たのね」

お二人の声に元気がありませんでした。

というか、サトさんの目元が赤いような……？

優しいサトさんを泣かせるなんて許せない、と思いました。

自分の周りが凍えていくのがわかります。ですが、止まりません。

ふ、と視線を感じて振り返ります。

離れたところに陛下と閣下がいました。

「ちよつと失礼」

サトさんとボルンさんから離れて、陛下たちに近づきます。

「——陛下、閣下」

「ひえ！寒いゾイ!!」

「リーノ！吹雪は止めるでゲス！」

「質問に答えていただけたら、やみます。——なぜ、サトさんは泣かれたのですか？」

「し、知らんゾイ……」

「同じく……」

わたくしの足元が凍る——バキンツッ!という音を合図に、お二人は走り出しました。

「陛下!閣下!」

「うるさいゾイ!次は村長宅に行くゾーイ!!」

「どんな家か楽しみでゲスな!」

「ええー!!」

「ハナさんまで困らせる行動は慎んでくださいませ!!」

タイヤを凍らせようとして冷気をまといました。

ですが、車はいくら待っても発進しません。

陛下たちの視線の先には、異変が起きた城がありました。

「あれは一体なんゾイ?」

「陛下!あれはゴミでゲスよ!!」

「なに?!すぐ発進するゾーイ!」

「アイアーイ!」

閣下は車を風のように発進させました。

城に帰るのであれば、わたくしは止めません。陛下たちを見送って、それからサトさんのところへ戻ります。

サトさんとボルンさんも城を見ていましたが、わたくしに気づいて顔を向けました。

「サトさん、ボルンさん。わたくし、良い事を考えましたの」

「あら、なにかしら？」

「家の中にあるいろいろな物を、いる物にしちやいませう。つまり売るのです！」

その言葉にボルンさんが待ったをかけます。

「だが、これらはすべて落し物なんだよ。それを売るといのはなあ……」

「あら、いい考えだと思おうわ」

フーム様がやって来ました。彼女も話に加わりません。

「販売するかどうかは、これから話し合って決めればいいと思う。けれどどこかのタイ

ミングで、このたくさんの落し物を手放さないと、また家がゴミ屋敷になっちゃうわ」

「家がゴミ屋敷なのはもうイヤよ！あなた！」

「うーむ。とりあえず村人と相談してみようか」

「では、みなさんと相談される前に、いくつか決めておきましょう。持ち主が見つかったとき、販売するものの選別方法、販売方法など……」

ゴミ問題について、話し合っていました。

話を進めていくうちに、家を片付けられるかもしれない、とサトさんの表情がほころびました。

案を忘れないようにと、メモを書き込みます。

常にメモを携帯しておいて良かったですね。

——そこに魔物が来ました。

「ゴメンナサードー！ゴメンナサードー！！」

謝るように大声を上げるその魔獣は、見た目が円柱のゴミ箱に手足がニョキつと生えているのです。

魔獣は村のあちこちを巡り、ゴミを吐き出します。

さすがのカービィもゴミは吸い込めません。

ならば、とわたくしはほうきを買いに走りました。

近くにいたコンビニ店長のタゴさんと、コンビニへ走ります。

そしてほうきを購入して、急いでカービィたちのところへ向かいます。

ゴミ箱の魔獣は広い道の真ん中で、ゴミを吐き出していました。

離れた距離に人が集まっています。最前列に陛下たちを見つけました。きつとあそ

ここにはカービイもいることでしょう。

急がなければならぬのに、人が密集して行けません。

焦っていると、聞き慣れた声が聞こえてきました。

「——リーノ」

「あ、メタナイト卿！」

「それは、私が持っていていこう」

メタナイト卿はほうきを指しました。

わたくしは頷き、ほうきを差し出します。

「お願いしますわ」

「任された」

青い戦士は軽やかに屋根に上がり、また違うお宅の屋根へと飛び移ります。

カービイはほうきを吸い込み、クリーンカービイに変身しました。

そして魔獣の攻撃をすべてさばき、ゴミを浄化します。ゴミを吐き出せなくなった魔獣は瞬く間にクリーンカービイに倒されました。

クリーンカービイは村中のゴミを浄化し、サトさんの家のゴミも浄化しました。

ゴミがなくなった家の中はとっても綺麗でした。サトさんとボルンさんはカービイ

にお礼を言っていましたわ。

——村はクリーンカービィのおかげで、その美しさを取り戻しました。しかし、城は魔獣が吐いたゴミだらけです。

陛下も閣下も、みんなで力を合わせて掃除に取り掛かりました。

異臭が取れるまで数日かかりましたわ……。

フードプロセッサー

夕食の時間。

空が群青色へと変わりゆく中、わたくしたち六人は城の中庭が見えるベランダに集まっています。メイド三人が持ち寄ったお弁当を、食べるためです。

ブレイドナイトさんが言います。

「……うん？なんだかい匂いがするな」

「たしかに、香りますね」

アーニヤも同意します。

みんながどこから香るのか、そう考えました。

わたくしはレジャーシートから立ち上がり、中庭を見ました。

「ああ、パーム様がフーム様たちのために料理をされていますわ」

「パーム殿が？」

「料理ができるのだな」

それは純粋な驚きを含んだ声でした。

続けてランタンが言います。

「ププビレッジじゃ珍しいわね」

「そうですわね。城だと、料理ができる男性は閣下だけだと思っていましたわ」

「ほお。エスカルゴン殿は料理が作れるのか」

今度はメタナイト卿が驚かれました。

わたくしはメタナイト卿の隣に戻り、座ります。

「子供のころ、風邪をひいたときにおかゆを作っていたいただきましたわ。優しい味付けで、たいへんおいしかったです」

「……改めて思うんだけど、閣下ってリーノに甘いわよね」

「家族のようなものですからね。仲が良いんですよ」

お喋りもほどほどに、わたくしたちはお弁当を広げます。

今日は三戦士たちのリクエストだからあげ弁当です。

ほんのり温かいお弁当を、三人はペロリと平らげてくれました。

数日後。

城の会議室にて。陛下、閣下、ワドルドウ隊長、メイド三人が集まっています。わたくしたちは、ワドルデイが配った資料に目を通します。

「――男の料理大会、ですか？」

「その通りゾイ！」

「今、村の男連中に空前の料理ブームがきてるでゲス！これを利用して……」

「利用して？」

「――ひ、一儲けするでゲスよ!!」

「いつものように、観客席は有料ということでしょうか？……それだけですと、一般的な料理大会と変わりません。今回は何が目玉なのでしょう？」

「うむ。今回の目玉でもある参加資格があるものは……先日チャンネルDDDで紹介したフードプロセッサーを購入したものに限るゾイ！」

その番組を見ていなかったわたくしはピンときていませんでしたが、アーニヤとランタンは「ああ」と声をこぼしました。

「あの高い機械ですね」

「しかも置き場所に困るやつ」

それを聞いた陛下が声を荒らげました。

「黙らっしゃい！男のロマンがわからんか！」

「あれは良いもんでゲス！」

「あの、ところでわたくしたちは、いつものようにワドルデイたちの手伝いをすればいいのですかね？」

陛下は深く、背もたれに体を預けます。

「違う。お前たちも審査員となって、参加者の料理を食すゾイ！」

「まあ……初めての試みですね」

「特にリーノは料理上手で有名でゲスからな。審査員としては申し分ないでゲス」

「ありがとうございます」

「アーニャとランタンも、近頃はわしの好みを良く理解しておる。しかもうまい。審査員には持ってこいだゾイ」

「ありがとうございます。陛下」

「お褒めの言葉を賜り、光栄ですわ」

「では、それぞれ資料を確認しておけい。料理大会は二日後だゾイ」

「発表はこれからチャンネルDDDでしてくるでゲス。大会出場者から電話がかかってくるから、その対応を頼むでゲスよ」

「かしこまりました。どこで電話受付をいたしましょう？」

「それなら、発表するスタジオの中に作ったでゲス」

閣下は「さっさと行くでゲスよ」と陛下と共に歩き出します。

わたくしは閣下の腕をがしりと掴みました。

「お待ちください！もしかして、わたくしたちもテレビに出るのですか!？」

「はあ？そう言っているでゲシヨ？」

「しよ、少々お待ちください！メイクを直してきますので！」

「うるさいゾイ！すべてはスタジオに揃っておる。さっさとついてくるゾイ！」

閣下の腕を掴む手を外されて、今度は陛下と手を繋ぎます。

そしてスタジオにつれて行かれました。アーニヤとランタンは大人しく、わたくしたちの後ろからついてきていましたわ。

スタジオに到着後、すぐにメイクを直しました。

今回は、三人で作ったアクセサリーを身につける時間がありませんでした。良い宣伝になりますのに残念ですわ。

スタジオ中央に、陛下と閣下が座る舞台が作られています。

わたくしたちメイドは、左側の舞台に向かいました。天井近くには電話番号が書かれた大きな看板があり、その下に三人分の電話受付をする場所が作られています。

わたくし、ランタン、アーニヤの順番で座ります。

ニュース番組が始まり、男の料理大会が発表されます。参加資格について説明があり、閣下が「今から電話を受け付けるのでゲスよ！」と仰った途端に電話が鳴りました。

受話器を手に取ります。

緊張して声が少し上ずってしまい、少し恥ずかしいですわ。

「はい。こちらデデデ城、男の料理大会、受付です。参加者の方ですか？」

『こちら、ソードナイトだ。ブレイドナイトと参加する』

「——!?お二人もフードプロセッサを購入されたのですか？」

『そうだ。優勝して、ランタンに……—ああ、そうだな。アーニヤにも喜んでもらいた

い』

「か、かしこまりました。——はい、参加を受付ました。当日は、早めに会場へお越しく

ださい」

『わかった。では、失礼する』

「はい。お電話ありがとうございました」

ガチャリ、と受話器を置きます。驚いている暇もなく、次のコールが鳴りました。

男の料理大会当日。

料理の腕を競うステージ場では、食材を山のごとく積み上げていました。

それ、下の食材が上に乗っている食材の重みで痛みませんか？と、思うのです。

大会参加者がステージ場に集まります。

そして奥様方、メイド三人、審査員長としてパーム大臣が、審査員の席に着きます。陛下はわたくしたちの中央に座られています。そして閣下は司会をされますわ。

わたくし、アーニヤ、ランタンの順番で端に集まり座っていました。

眼下のステージ場で、フードプロセッサーの調子を確認する戦士二人を見つめます。

「ブレイドさん、楽しそうです」

「ソードもね。あの二人が、フードプロセッサーを買うぐらい料理が好きだとは思わなかったわ」

「お二人が、料理好きかはわかりませんが、ソードナイトさんは、アーニヤとランタンに喜んでもらいたい」と、電話で言っておられましたよ」

それを聞いた二人は、頬を赤くさせながら言いました。

「嬉しいです。たくさん、応援しないといけませんね」

「そうね。二人が優勝するぐらい、ね」

わたくしはその言葉聞いて頬が緩みました。

眼下には、フーム様たちと一緒にメタナイト卿がいらつしやいます。

一緒に応援できたら良かったのに。そう思いました。

大会が始まりました。

参加者たちは食材を取り、フードプロセッサーを使って調理していきます。なんだから、フードプロセッサーが主役なのではないかと思ってしまうぐらい、参加者たちはお互いのフードプロセッサーを自慢しています。

フードプロセッサーのせいで、料理にかかる手間がさらに増えているように見えました。

奥様方、大臣夫婦、メイド三人を含めた審査員が困惑していました。

そこにフーム様が声を張り上げます。閣下のマイクを借りたのです。

「みなさん！何か勘違いしていませんか？」

フーム様いわく、料理で肝心なのは心を込めて作ること。

そして、パーム様が料理を一つしか作れないことを正直に話されました。

それを聞いたパーム様が、審査員長を降りることを発表されます。

審査員席から降りていくパーム様の姿を見たフーム様は、さらに言葉を続けました。「でも！私はパパを立派だと思う！——だって料理を面倒がらなかつたから……ママの自由時間のために！」

それを聞いたメーム様が、審査員席を降りてパーム様のところへ走ります。

そして、お互いに手を取りました。

「ありがとう、あなた」

「お前……」

会場全体から拍手がおこりました。

わたくしも、もちろん精一杯拍手させていただきましたわ。

そこで大会は終わりませんでした。

遅れて到着したカービィとトッコリが、最後のフードプロセッサーを持って来たのです。

フードプロセッサーは陛下の号令のもと、一つのロボットに合体しました。その名をリヨウリガーZと言います。

ソードナイトさんとブレイドナイトさんが突撃しました。

ですが、あつという間にやられてしまつて、突き飛ばされました。

「ソード!」

「ブレイドさん!」

「動かないで!ここなら陛下たちの攻撃は届きません!」

「でも……!」

「今だけですわ。わたくしが陛下たちの動きを止めますので、待っていてください!」

わたくしは陛下たちに安定して氷が届く、大臣夫婦とフォーム様がいらつしやる階段まで降りました。

「リーノ、行つちやダメ!今、カービイが戦っているわ」

いつものカービイならば勝ちます。

ですが、今回は違いました!

リヨウリガーZは食材を取り込み、瞬く間に料理として吐き出します。それを囷にしてカービイをおびき寄せ、攻撃します。

攻撃はすべて当たりました。

わたくしは頭を振ります。

「わたくしが陛下たちを足止めします。フォーム様はメタナイト卿のところに行ってください。どうか、あのロボを倒す方法を探してください!」

「わかったわ!」

わたくしはフォーム様の走る背を見送ってから、ロボの関節を狙って凍らせました。

ロボの動きが鈍くなります。

陛下たちの声が響きました。

「こりゃあ! リーノ、邪魔するでないゾイ!!」

「給料減らされたいでゲスカ!」

「お給金よりも大切なことがあります! 例えば——親友の恋人に危害を加えられたとき、怒るとか、です!!」

ロボご無理やり動く度に氷が割れて、また凍らせます。

そこに剣を抜いたメタナイト卿が現れました。ロボの下部の関節部分に剣を突き立てて、素早く飛び退きます。

火花が散りました。

カービィは火花を吸い込み、スパークカービィに変身しました!

カービィはロボの中に入り、スパークします。

ロボは赤くなります。やがてチンと音が鳴り、陛下たちと取り込んでいた食材を一緒に吐き出しました。

まるでサラダのように調理された食材に囲まれた陛下は、たいへんホカホカでした。

「へ、陛下！閣下！」

話す元気もないお二人を慌てて、氷で冷やします。氷はあっという間にジュワツと溶けてしまいました。

わたくしはさらに慌ててワドルデイたちを呼び、お二人を氷で冷やすべく、お風呂へ運びました。

教師

最近、天気が崩れやすいですわ。

じつ、と一階の洗濯場から窓の外を眺めます。

「あらメイド長、どうかしましたか？」

「ランタン……少し、フーム様たちのことが気になりました」

「フーム様ですか？ たしか、今日は学校でしたよね？」

「そうなのです、アーニヤ。屋根のない場所で子供たちに教えているので、この雨で濡れていないか心配なのです」

二人は少し考えてから、それぞれ口にしました。

「さすがに、この雨の中で勉強はしていませんと思うわ」

「はい。風邪をひいてしまうかもしれませんから」

「そう、ですね」

さすがに、わたくしの考えすぎのようです。

わたくしは洗濯を止めていた手を、またキビキビと動かし始めました。

やがて雨は止みます。

はつきりと太陽が見えて、雲が流れていきます。わたくしたちは今のうちに、と洗濯物を干していききました。

「リーノ！リーノはおるでゲスか！」

「はい！こちらに！！」

干したシーツの海の中、どこからか閣下のお声が聞こえました。

わたくしにとつて、後方の方角から「どつちゾイ！」「あつちでゲスよ！」と言ひ合う声が聞こえます。

わたくしはちようど空っぽになった桶を持って、アーニヤとランタンと一緒に声が聞こえる方へ向かいます。

「陛下、閣下。ご機嫌麗しゆう」

「おお！ようやく見つけたゾイ！」

「今から学校に行くから、ついてくるでゲスよ」

「また、学校をつくられたのですか？」

一度目は教師を凶暴にさせる帽子のせい、二度目は生徒が魔獣のため、陛下がつくられた学校は上手くいきませんでした。

陛下はフフン！と鼻を鳴らします。

「今度は一味違う。わしらは生徒になるゾイ！」

「生徒に、でございますか？」

「校長も教頭も先生も全部、フームと村の奴らに任せるでゲスよ」

「それは、革新的ですわ！」

「そこでリーノには、また給食を作ってもらおうゾイ」

「わたくしで良ければ、ぜひ作らせていただきますわ！」

わたくしの言葉に、陛下たちは満足気に頷きます。

「んじゃ、早速学校へ行くでゲスよ」

「——へ？」

「もう準備はできておる。アーニヤ、ランタンは片付けをしておくゾイ」

「かしこまりました」

「行つてらっしゃいませ」

わたくしは陛下と閣下に運ばれて、車に乗りました。

車に乗つて十分ほど。

以前、校舎を建てた場所と同じ平原に、新しい校舎がありました。校舎ができた合図なのでしょうか？ 鐘が鳴り響きます。

鐘の音に気づいた村人たちも集まっていました。その中にはフーム様を含めた子供たちがいいます。……フーム様の隣にいる男性は誰でしょうか？

「村人たちがすでに集まっていますでゲスな」

「ちようど良い。わし自ら説明してやるゾイ」

陛下たちは村人の前に車を止めて、降りました。わたくしも降ります。

そして説明を始めました。

今回学校をつくったけれど、自分たちは校長と教頭ではないこと。校長はキュリオさん、教頭はレン村長がするよう命じられます。

「教師はフームがやればよいゾイ」

そのフーム様は、自分よりも適任者がいると仰られました。

「ご紹介します。チップ先生です！」

そして隣にいらつしやった男性を、みんなに紹介されました。

「本職の先生なの！……ただ、問題はあなたたちよ」

「それならば問題はない。わしらは良い生徒になるゾイ」

「今さら学んでどうする!？」

「ブン様、学ぶ時期に歳は関係ありませんわ」

思わず口が出てしまいました。

慌てて口を抑えます。

「すみません……」

「あの……あなたは？」

チップ先生が声をかけられます。

わたくしはにこりと笑みを作りました。

「リーノと申します。城でメイドをしておりますわ」

「おお、そうだった。給食はリーノが作るので楽しみにしているでゲス」

それを聞いた子供たちが歓声を上げました。

ハニーが私のもとに走ってきます。

「リーノ！私、絶対に学校へ行くわ！リーノのご飯とっても楽しみだもの」

「ありがとうございます、ハニー。給食だけではなくて、きっと学校そのものが楽しくな

りますよ」

「うん。私もそんな気がするの。チップ先生は本当に優しいのよ」

「素敵そうな先生ですものね」

「うん！」

数日後。

学校が始まりました。大人も混じった学校の生徒たちは、その年齢差も性別も関係なく、学友として楽しんでいるようです。

わたくしはというと……一人では約三十人分の給料を作るのは難しいです。なので陛下にお願いをして、アーニヤとランタンも学校に出張してもらいました。

学校の厨房にて、メイド三人がカレーライスを作ります。

「今度はうまくいくといいわね、学校」

「そうですね、ランタン。ねえ、リーノ。陛下たちは新しい先生と、仲良くやっついていらっしやるのでしょうか」

「まだ始まったばかりですから、なんとも。ですが、子供たちに人気の先生ですもの。きっと、陛下とも仲良くしてくれますわ」

そう願ったのですが、陛下がチップ先生を怪我させたと聞いてたいへん驚きました。わたくしは厨房をアーニヤとランタンに任せて、医院に急ぎます。

医院には、先にフォーム様、レン村長、キュリオさん、チップ先生が到着しております

た。ヤブイ先生がチップ先生の頭に包帯を巻いています。

「失礼します。リーノですわ」

「リーノ！」

「フーム様。何かお手伝いできないかと思つて来ましたが、大丈夫みたいですね」

チップ先生の手当はすでに終わっていましたわ。

フーム様がこちらに駆け寄ります。

「今ね、チップ先生が……！」

「はい？」

「デデデもいつか、礼儀正しい生徒になってくれるつて言つてくれたの！」

「左様ですか」

「……？あんまり期待していないの？」

「いえ、そうではなくて……大きく変えなくても、その方の個性を伸ばしつつ、良い方向に向かえば良いと思うのです」

「つまり？」

「陛下は元気なままで、良い事をしてくれたらいいなあと思うのです」

「それつて難し過ぎない？」

「欲張りな願いだとは思つております」

魔獣をダウンロードする陛下は好きではありませんが、元気な陛下は好きなんですよね。

それからチップ先生には、しっかり謝罪しておきました。うちの陛下がすみません!!

学校が始まってから、一週間がたちました。

チップ先生とは、顔を合わせたら雑談をするようになりました。子供たちに人気の先生と仲良くなれたようで嬉しいです。

学校が始まってから、メタナイト卿への報告は毎日しております。

合わせてご飯の差し入れもおこなっています。差し入れた次の日には食べた感想を教えてくださいるので、ありがたいですね。

夕方。

今日もメタナイト卿に報告します。メタナイト卿は主に、チップ先生のこと気がなるようでした。

学校ができあがると共に現れた、旅の教師……たしかに気になりますね。

「チップ先生ですが……やっぱりカービィを虐めるなど、不審な様子は見られません」
「ふむ……」

ハニーや他の子供たちにも、チップ先生の様子を聞きました。本当に良い先生で、生徒たちに優しく平等に接しています。

わたくしはたしかめるように、質問しました。

「チップ先生は魔獣ではありませんよね……？」

「——あるいは……」

メタナイト卿は、質問には沈黙で答えました。

朝。

二回目の洗濯が終わらせてから、学校に向かいます。

三人で談笑しながら、歩いて行くと……。

学校から離れた場所に生徒たちが集まっていました。

今日は体育でもするのでしょうか？

そして――。

ドッカーン!!!!

学校が爆発しました。

わたくしたちはたいへん驚いて、とにかく生徒たちが集まっている場所へ走ります。

「フーム様! ブン様! ハニー! チップ先生! みなさん、ご無事ですか!」

「リーノ……ええ、大丈夫よ! カービイが魔獣をやっつけてくれたの!」

「魔獣が出たのですか?」

「デデデがチップ先生の代わりにって、ダウンロードしたのよ」

「陛下つたら……。あら? 陛下と閣下はどちらに??」

「知らないわ」

みなさん知らないようです。

あとでワドルドウ隊長にお願いして、探すしかありませんね。

そう考えていると、チップ先生が重々しく口を開きました。

「……みんな、僕は出ていくよ」

「え!?!」

「? 村が嫌になりましたか?」

わたくしこの質問に、チップ先生は首を振ります。

「いや、みんなのことは大好きだ。でも、ナイトメアは裏切り者の僕を放っておかないだろう」

「裏切り者？」

「チップ先生は、契約魔獣だったの」

「契約魔獣……ナイトメア社の方だったんですね」

「そうだ……。みんな、黙っていてごめん」

チップ先生は深く頭を下げて謝罪されます。

フォーム様は「頭を上げて！」と言いました。

「チップ先生には感謝してる！ 私たちにたくさんのことを教えてくれて、ありがとう」

「魔獣から、身をしていして守ろうとしてくれたしな！」

「チップ先生のおかげで学校が楽しかったわ！ありがとう、先生」

子供たちはそれぞれの言葉で、チップ先生に感謝を述べます。

チップ先生は涙を浮かべました。

「……もう行くよ。このままだと、ここに残ってしまいそうだ」

「学校跡地から、荷物を探し出すお手伝いをさせていただきますわ」

「ありがとう。リーノさん」

「私たちも手伝うわ！」

生徒たちと、メイド三人、チップ先生本人で学校跡地から荷物を探し出します。服は埃で汚れてしまいましたが、洗っている暇はありません。急いでカバンにまとめました。

爆発を聞きつけて村人たちが学校跡地に集まります。

チップ先生が出ていくとこを知って、別れを言いに来てくれました。

たくさんの人たちに見送られて、チップ先生は村を出ていきました。

秘宝、紫外線

初夏が近づいてきた今日この頃。

夜明けと共に、陛下たちの朝ごはんを準備していました。たいへん眠たいですが、今日も頑張りますわ。

ところが、なぜか陛下と閣下は城におりません。ワドルドウ隊長に確認すると、夜明け前に車で出て行ったそうです。

厨房で、アーニヤとランタンと顔を見合えました。

お互い「しようがない」と肩を落とします。

「今回は何かしらね？」

「カービー絡みでしょうか？それともこれから起きるのでしょうか？」

「それを確かめるためにも、城の門で陛下たちのお帰りを待った方が良くもしませ
ん」

今回は、厨房にアーニヤが残ります。わたくしとランタンは門へ向かいました。

ゆっくり歩いて門に向かうと、ちょうど陛下の車が走ってきました。

わたくしたちは門の端に避けます。頭を下げて、車を迎え入れました。すると車はわたくしたちの前で止まります。

わたくしたちはお声がかかるまで待ちました。

「リーノ、ランタン。出迎えご苦労でゲス」

「今日の朝メシは何ゾイ」

「おかえりなさいませ。陛下、閣下。今日はサラダ、コーンスープ、ウインナー、オムレツ、パンをご用意しております」

「ウインナーとオムレツは、食堂にて陛下たちの御前で作らせていただきます」

「つまりできたてを食べられるでゲスな！」

「あーん、それを聞いたら余計に腹が減ったゾイ！今日は散々な目にあつた。はよう用意するゾイ!!」

そして陛下たちを乗せた車は、城の奥へ走りました。

車か去つてから、わたくしたちは頭を上げます。

「散々な目にあつたということは、カービイと何かあつたのでしょうか」

「多分ね……。じゃあ、私は厨房に戻るわ。メイド長はあとから？」

「はい。おそらくフーム様たちが帰つてこられるでしょうから、待とうかと」

「そう。じゃあ、朝食は私とアーニャに任せてね。それじゃ」

「はい。よろしくお願ひします」

ランタンは早足で厨房へ戻っていききました。

メタナイト卿にもプレゼントしたあの懐中時計を懐から取り出して、時間を確認します。

あと十分したら、わたくしも自分の仕事に戻ろう……。そう思った矢先、遠くに複数の人影が見えました。

フーム様、ブン様、メタナイト卿、……。フーム様とブン様に運ばれるカービィです。

わたくしは門で、四人を迎えました。

「お帰りなさいませ。それから、おはようございます」

「おはよう！リーノ」

「おはよー」

「おはよう」

「くう……くう……」

「カービィは……戦闘疲れですか？」

「あら？リーノ、何があったのか知っているの？」

「先程、陛下たちも帰ってこられたんです。その時、散々な目にあつたと仰つていらしたので、魔獣絡みかと思ひまして……」

「その通りよ。今回はキュリオさんが巻き込まれちゃつて……」

「まあ！キュリオさんまで……」

「詳しくは歩きながら話すわ。カービィを部屋で寝かせてあげたいの」

「私はここで別れよう。……またな、リーノ」

「はい。メタナイト卿、お会いできてよかったです」

「うむ。私もだ」

メタナイト卿はマントをひるがえし、城の中へ入られました。

その姿にときめいていると、ブン様もフォーム様もニコニコと口元を緩められます。

「なにか?」

「別に」

「なんでもないわ」

「なんだか恥ずかしくて、わたくしはこっそり、ポケットに入れてある青いコンパクトを撫でました。」

それから大臣一家のお部屋に戻る間、フォーム様が事件について教えてくださいました。

陛下が作った二セの古文書のせいで、キュリオさんが魔獣を目覚めさせてしまったこと。

カービーが夜だけ襲われるようになったこと。

魔獣を吸い込んだけれど、能力をコピーできないスカだったこと。

陛下の投げた爆弾で、ボムカービーとなったこと。

最後は朝日で魔獣をやっつけたこと。

わたくしは息を吐きだします。

「……大変な一日でしたわね」

「まあ、いつもの事よ」

「だなー。あー腹減ったし眠い。朝ごはん食べたなら寝よう」

「そうね。私も、ふわあ……眠たいわ」

「お疲れ様でした。ごゆっくりお休みください」

「ありがとう。それじゃあね、リーノ」

「またなー」

わたくしたちは大臣一家のお部屋の前で別れます。

わたくしは歩きながら考えました。

キュリオさんにお詫びに行った方がよいでしょう。ついでに村の様子も見ておきま

しよう。

もしかしたら、魔獣との戦闘のせいで、村のどこかが壊れてしまったかも。修繕が必要かもしれません。

差し入れは多めに作っておきましょう。

今日は昼から村に行こうと、決めたのでした。

それからまた一週間ほどたちまして。

プブレツジでは紫外線が話題になり、怖がるようになりました。エアコン、紫外線対策の化粧品が飛ぶように売れたと聞きました。

「たしかに、ここ最近では日差しがおかしいような……」

不安になり、青空を眺めます。

アーニャとランタンも不安そうでした。ですが、仕事は休めません。

「とりあえず、急いでシートを城の中に入れちゃいましょう！」

「そうしてくれると助かる」

「あら、メタナイト卿」

シーツを干している庭に、メタナイト卿と……加えてソードナイトさんとブレイドナイトさんが現れました。

「三戦士お揃いで、一体どうされたのでしょうか？」

「ここで熱気球をつくりたいのだ」

「気球を？ どうして……？」

「空の異変を、確かめに行く」

わたくしたちは空を見上げました。

いつもの空がありました。

とにかく、急いでシーツと干すための道具すべてを、片付けます。

選択場に集まっていたワドルデイたちにお菓子を与え、気球作りを手伝ってもらいます。

設計図はフーム様とキュリオさんが考えられました。

ロロロとラララに、朝から出かけたブン様とカービイを探しに行ってもらいます。材料は城にあったもので足りませんでした。

ワドルデイたちのおかげで、スムーズに作業が進みます。

やがて完成した気球には、メタナイト卿、フォーム様、ブン様、カービイが乗り込みました。

ブレイドナイトさんの合図で、気球に繋がれた縄は切られます。

気球は空高く飛んでいきました。

「メタナイト卿、フォーム様、ブン様、カービイも。ご無事で……」

「それじゃ、私は行くよ。メタナイト卿から頼まれているからな」

「何を、でしょうか？」

「空での調査結果を、後で報せると言われてな。村で待つことにするよ」

「そうなのですね。かしこまりました。それではキュリオさん」

「ああ、またな」

それから気球はどんどん上がり、やがてある地点で止まりました。

何か、様子がおかしいです。気球の周りで何度もチカチカと光が見えます。

「戦闘でしょうか？」

「おそらく……」

わたくしと、アーニヤ、ランタン、ソードナイトさん、ブレイドナイトさんは空を見

上げています。

そこにバタバタと慌ただしい音が聞こえてきました。

「どけどけどけーい!!!」

「宣戦布告でゲスよ!」

「陛下? 閣下?」

陛下と閣下、パーム大臣、ワドルドウ隊長、ワドルデイたちが、駆け込んできました!
!そして大きな大砲をセツトし始めます。

——それは真上を向いていました。

「まさか……!?!陛下、お止めくださいませ!メタナイト卿たちに当たります!」

「黙らっしやい!」

あつという間に砲台は完成して、砲弾は真上に向かって発射されました。

——気球は爆発はしませんでした。

しかし、その周りで爆発する音が何度も聞こえてきます。それは数分で止みました。
戦闘が終わったのでしょうか?

気球がどんどん降りてくるので、わたくしたちは急いで気球の降下地点に向かいました。

気球は草原に降下しました。

カービィはワープスターに乗って降りてきます。みんな無事です。わたくしたちは手を叩いて、その勝利を祝いました！

ナゴヤ

「リーノ！今日のおやつはチップスだゾイ！」

「すでにジューズはご用意しております」

「気がきくゾイ！デハハハハ！！」

昼前のこと。

小腹がすいた時間でした。陛下は玉座に座り、チップスを食べています。わたくしは陛下専用のコップに、陛下が特に気に入っているジューズを注ぎ、渡します。

陛下は喉を鳴らして飲みました。

「これこれ、これゾイ！おかわり」

「ただいま」

平和な時間でした。

そこに閣下がやって来ました。「ニュースでゲスよ！」と慌てています。

陛下はちよつと面倒そうに答えられました。

「なんゾイ……騒がしい」

「村にコックカワサキの兄弟弟子、コックナゴヤ来たらしいでゲスよ！」

「カワサキの兄弟弟子?……デハハハ!ならばそやつも大した腕ではなさそうゾイ！」

「それが村人が言うには、ナゴヤが作る料理はうんみやくらしいでゲスよ!それはもう
!」

「なに!うんみやく!?!」

おいしいと聞いて、陛下は目の色を変えました。

空になったコップをわたくしに渡して、「食べたいゾイ!」と立ち上がりました。

「早速、村へ行くゾイ!」

「リーノ、昼は作らなくて良いでゲスよ」

「か、かしこまりました」

陛下と閣下は、玉座の間を走って出ていかれました。

……準備している昼食は、わたくしたちメイドがいただきますでしょうか。

コックナゴヤが陛下たちに連れられて、城に来ました。

メイド三人でお出迎えします。

コックナゴヤは、和服を着ていらつしやいました。茶色のお召し物がよく似合っていますわ。

挨拶もそこそこに、陛下はコックナゴヤにお願いをしました。

「コックナゴヤ。村に宿はないから、泊めるかわりに……」

「私たちに料理をふるまってくれでゲス！」

「おやすい御用だぎや。それで、厨房はどこだぎや？」

「リーノたちが案内するでゲス。私らは……」

「ナゴヤの料理を、食堂で待つてるゾイ！」

名前を呼ばれたので、わたくしは一步前に出ました。

「ナゴヤ様、メイド長のリーノと申します。厨房にご案内させていただきますわ」

「様付けはよしてちよーよ！どうぞ、よろしく」

「かしこまりました。こちらこそ、よろしくお願ひします。では、参りましょう」

コックナゴヤを厨房に案内します。

厨房に到着すると、コックナゴヤは鼻をすんすんと鳴らしました。

「うん？これは、ハンバーグの匂いだぎや？」

「はい。わたくしたちが食べた、ランチの匂いですわ。ナゴヤさんはもうお昼は食べられましたか？」

「食事は済ませたけれど、こんなにうみやそうな料理を放ってはおけんだがや。よかつたら、分けてちよーよ」

「かしこまりました。ご用意します。その間にナゴヤさんは……」

「わかちよる！陛下に食べさせるご飯、ちやちやつと作るでよ！」

コックナゴヤがすばやく、テキパキと作られたのは味噌煮込みうどんでした。

それは熱々のうちに食堂に運ばれ、陛下と閣下のもとに届きました。

お二人は待つてました、と言わんばかりに食べ始めます。うどんをすすする音が部屋に響きました。

「——うんみやー!!!これは！うんみや〜ゾイ！」

「本当、うんまいでゲスな!!」

はふはふ、と熱いうどんをどんどん食べ進めます。

その様子を見たワドルディたちも、わたくしたちも、食べてみたいと思いました。

「とつてもおいしそうね」

「そうですね」

「私も食べてみたいです」

メイド三人、こつそりお喋りします。

さて、それは横に置いて、コックナゴヤに料理を出します。

「うん？それはなんゾイ？」

「ナゴヤさんが所望された、わたくしたちのお昼ですわ」

「今日は大人向けお子様ランチです。ナゴヤさん、どうぞ」

長いテーブル、陛下と閣下の上にコックナゴヤの席を用意します。

コックナゴヤが座ってから、料理を並べました。

お子様ランチは、おかずは子供向けと同じです。大人向け用に、少し味付けを変えて、量を多くしております。

「じゃ、いただきます」

一口、そして細い目をカツと開いて「うみやーぜよ!!」と言いました。

プロの料理人に褒められて、わたくしたちは拳をぐつと握り、喜びを表します。

「このミニオムライス！ミニハンバーグ！それにパスタ！どれも個性が光つとる！だ、誰が作ったんだがや？シエフか？」

「デハハハ！料理担当はそこにいるメイド三人ゾイ」

「今日は誰が作ったんでゲスか？」

「三人がそれぞれ作りました。わたくしがミニオムライスを、ランタンがハンバーグを、アーニヤがパスタを担当しております」

「三人にお願いがあるですよ！」

コックナゴヤは席を立ち上がり、わたくしたちの方へ向きました。

そして両手を広げて、お願いします。

「俺の、嫁さんになってほしいだぎゃ！俺は料理上手な嫁さんをもらって、一緒に店を盛り上げるのが夢の一つだがや！今は店を持ってないんだけど、必ず幸せに……」

「ごめんなさい」

「!?」

「私たち、もう恋人がいるのよ……」

「!!お、遅かっただがや………」

コックナゴヤは床と同化してしまいそうなほど、落ち込みました。

それも残りのお子様ランチを食べていただいたことで、持ち直してくださいました。

コックナゴヤとカワサキさんの料理対決は、次の日に行われました。

三本勝負で、お題に合った料理を作ります。

わたくしたちメイドは、料理対決が行われるスタジオの隅で、勝負を見守りました。カワサキさんの動きが、ぎこちないです。まるで慣れない手順で料理をしているみたい。

「ちよつと、行つてきます」

「?どこに行くのよ、リーノ」

「少し、あちらまで。三人で行くと勘づかれますので、一人で行つてきます」

わたくしはそろり、とカワサキさんの背面が見える場所へ移動しました。

スタジオのセットに身を隠し、こつそりカワサキさんが奮闘するキッチンを覗き込みます。

——フォーム様が、流し台の下に隠れていらつしやいました。

わたくしは、またこつそりアーニヤとランタンがいる場所へ戻ります。

二人はすぐにわたくしの様子に気がつきました。

「リーノ、何か見たの?」

「ええ……。カワサキさんはフォーム様の指示で料理しています」

「それって……」

「単純な腕の競い合いではないわね」

わたくしは俯きました。

カワサキさんには、子供の頃からお世話になっています。勝ってほしいです。ですが、兄弟弟子との対決で正面から戦わないのは、間違っていると思います。

勝負の行方によっては、わたくしの口から皆さんに言わなければなりません。

——重く、苦しいです。

「とにかく、勝負を見守りましょう」

アーニヤの言葉に、わたくしとランタンは頷きました。

勝負は三本とも、おかしな結果でした。

カワサキさんの料理が、すべてたいへん辛かったのです。何度も城の消防が出勤し、審査員たちに水をかけます。

一度のミスならばたまたまでしょう。しかしそれが三度も起きるとは……。

「陛下と閣下、何かしているんじゃない？」

「そんな……」

「たしかに、先ほどからおかしなことが起きています。カワサキの料理、三回も同じタイピングで停電、どれも変です」

「そういう細工ができるのは、主催者側よね」

「もう、めちやくちやですわ……!」

カワサキさんの問題すらも受け止めきれしていないのに、その上に陛下たちの問題まで……!」

心がくしゃくしゃですわ!

料理対決の勝者はコックナゴヤに決まりました。

カワサキは潔く村を去ろうとします。そこにコックナゴヤが待ったをかけました。

村を出ていくのは、高級食材を使った料理を陛下に食べてもらってから、だと。

あつという間に、コックナゴヤはエビフライを作りました。それはおいしそうな香り、スタジオ中に充満させます。

陛下はエビフライを一口食べました。

すると、陛下は燃えました。

「おわー!!熱いゾーイ!!!」

「へ、陛下!?!」

ここまで激しく燃えるのは初めてです。

わたくしは慌てて前に出て、吹雪を陛下にあてました。

陛下は首から下が雪に埋もれます。鎮火できました。

「陛下、ご無事ですか!？」

「うう、辛かったゾイ……」

「ああ、意識ははつきりされていますね。よかった」

「ええい!これは一体どうしたことゾイ!コックナゴヤ!!」

「すべてはこのタバスコのせいだがや!」

コックナゴヤはネタバラシをしました。

閣下がカワサキさんの料理にタバスコをふりかけていたのだ、と。

そして、その悪事は映像に残っていました。

暴かれた悪事は、陛下も絡んでいたようです。

わたくしは頭が痛くなりました。

「陛下、閣下、真つ向勝負に水をさしてはいけませんわ!」

「黙らっしやい!かくなるうえは、魔獣ゾイ!!」

その合図と共に、調理されたはずのエビフライがどんどん大きくなりました。

スタジオの天井に届くほど大きくなったその魔獣は、エビフレアというらしいです。

いつの間にか、ザリガニのようなハサミが生えています。挟まれたら真つ二つになり

そうです。

フォーム様がお玉を投げて、カービイは変身します。

コックカービーです！

エビフレアは火の光線を吐き、コックカービーはそれをフライパンで跳ね返します。何度も魔獣と戦ってきたカービーの敵ではありません。

跳ね返した光線をエビフレアに当てます！

魔獣は熱に耐えられず爆発しました。

そして、ハサミがこちらに飛んできました。

「危ない！」

青い影が視界をさえぎります。

腹部をぐつと押されて、変な声が出ました。

「ぐわ」

「すまない」

改めて青い影を見ると、その方はメタナイト卿でした。

先ほどいた場所から離れています。どうやら、助けていただいたみたいです。

「メタナイト卿、ありがとうございます」

「無事ならそれでいい。それと……」

メタナイト卿の視線の先を、追いました。

陛下と閣下がハサミに挟まっていました。

陛下たちを助けるために、わたくしは慌ててワドルドウ隊長を呼びました。

カラス

それはある日の夜でした。

夕食を作り終わり、さあ休もうとしたときです。フーム様に呼ばれて、大臣一家にお邪魔することになりました。アーニヤとランタンも一緒です。

フーム様の部屋に通されました。

部屋の中には、フーム様、ブン様、カービイ、そしてわたくしたちメイドが三人……計六人います。

部屋の扉が閉まると、フーム様は目をつり上げて言いました。

「リーノたちは、ゴミの不法投棄について知ってる？」

「いえ、わたくしは何も知りません」

「私は聞いたことがあります」

「私もよ。たしか、最近村で問題になっているのよね」

フーム様が頷きます。

「誰かが森の川にゴミを捨てているの。それも一度にたくさん！」

「俺たちその犯人の目星はついているんだ」

「ぼよ」

「一体、どこのどなたですか？」

じつと、フォーム様とブン様とカービイはこちらを見ってきます。

嫌な予感がしました。

「もしかして、陛下たちですか……？」

「——森に入っていくデデデたちを深夜に見たつて言う村人がいるの」

「でも、ゴミを捨てている場面を見たわけじゃない」

ランタンがそう言うと、フォーム様は肩を落とします。

「残念だけどそうなの。だから、あなたたちにも犯人探しに協力してほしい」

「……リーノ、どうしますか？」

「陛下たちが怪しいと言うならば、陛下たちの潔白を証明するために、協力したいです」

それを聞いたフォーム様たちは喜びました。

「ありがとう！リーノ!!」

「これでデデデの行動は筒抜けだ……ランタンとアーニヤはどうする？」

「リーノが手伝うなら、するわ」

「そうですね。ここまで聞いたのです。協力させてください」

「やったわ！」

「これでデデデも終わりだな！」

「ぼよぼよ！」

今度は大きな喜びとなって、部屋に響きました。

わたくしは人差し指をピンと上に向かせます。

「まだ、陛下が悪いとは決まっていますわ」

それから二日後の夜。

いつもの夕食の風景でした。陛下と閣下は、今日も食事に満足されてニコニコと笑っています。

「おお、そうだった。忘れるところだったゾイ」

「はい。何でしょうか？」

「今日の夜、出かけてくる。軽食を作っておくゾイ」

「あゝ陛下……？」

おずおずと声をかける閣下に気づかないフリをして、わたくしは笑顔で応えます。

「かしこまりました。閣下もご一緒ですか？」

「え!? あ!? そ、それでゲスね！」

「でしたら、二人分のサンドイッチを作っておきますね」

「助かるでゲスよ……えへへ」

「デハハハハハ！褒めてつかわすゾイ！」

笑うお二人に気づかれぬように、わたくしとアーニヤとランタンは、こつそりアイコンタクトをとりました。

食器を下げて、厨房で洗い物をしているうちに、ランタンがフーム様に報告に行きました。

フーム様たちは村におりて村人たちと共に、いつもゴミが捨てられる川に向かったようです。

アーニヤとランタンは先に寝てもらって、わたくしは陛下たちが帰ってくるのを待ちました。

陛下と閣下とワドルドウ隊長、兵士たちは濡れたゴミ袋を持って帰ってきました。

それを迎え入れます。

「陛下、閣下、皆様、お帰りなさいませ。暖かいココアをご用意しております。よろしけ

れば、一階の食堂へどうぞ」

「気がきくゾイ！」

「あつたかい飲み物、寝る前に欲しかったんでゲスよ！」

「リーノ殿、助かります!!」

「わにゃ」

「わたくしにできることを、したまでですわ」

陛下たちが犯人だったことをちよつとだけ悲しく思いながら、わたくしたちは一階の兵士たちが使う食堂に移動しました。

それから数日。

陛下にも閣下にも、おかしなところはなくて、平和な日々が過ぎました。

そう思っていたのは、わたくしだけかもしれませぬ。

陛下と閣下は、中庭をゴミ処理場にすると言い出したのです。

中庭にどんだんゴミを捨てていく兵士たちの姿を見て、わたくしは陛下にお願いしま

す。

「陛下、お止めください。中庭の臭いが洗濯場まで届いています。これでは、洗濯物に臭いがうつりますわ」

「部屋干しすれば良いゾイ！」

「そんな……」

今の陛下には、何を言っても届きそうにありません。

そこに、大臣一家とカービーが現れました。この異臭を辿ってここまで来られたようです。

フーム様が陛下に怒ります。

それも聞く耳を持っていただけません。

途方に暮れていたとき、空から黒い影の大群が降りてきました。

——カラスです。

たくさんのカラスが中庭に降りてきて、ゴミの袋を破ります。そして漁り始めました。

どうやら陛下のアイディアのようです。

ゴミをカラスに処理させるなんて……。わたくしは頭を抱えました。

異臭がさらに酷くなります。とても中庭に居られません。

「へ、陛下……」

「あとはカラス共に任せるゾイ！」

「私らは退却でゲス！」

陛下たちは城の奥へ走っていかれました。

それから大臣一家も、カービイも、わたくしも中庭を離れます。

「カラスと手を組んで、大丈夫とは思えません」

「私もそう思うわ」

「俺もー」

「ぼよ」

わたくしの言葉に、フーム様とブン様とカービイが応えてくれます。

そうですね……。嫌な予感、しちやいますよね。

あれから数日、カラスは毎日ご飯を求めてやって来ます。

カラスは食事が少ない、と訴えました。

カラスって話せるんですね……。そういえば、トツコリもクーも話せましたね。

「エサの穴場はここだけでは無いゾイ」

「なに？」

「ここによこによと内緒話が、目の前で行われます。」

話が終わると、陛下もカラスも笑っていて。カラスたちは村の方へ飛んでいきました。

「もしや……。」

「陛下、まさか……」

「村の残飯処理にはちょうど良いゾイ！」

「生ゴミが出なくなつて、問題解決でゲス！」

「さあて、お昼の邪魔者はいなくなつた！お昼の準備でもするゾイ」

「今日は何にするでゲスか？」

「BBQゾイ！リーノ、用意せい！」

「……また、カラスたちが来るのではありませんか？そうしたら、BBQの食材が取られます」

「問題ない。対処する方法はあるから、そちは安心してとりかかると良いゾイ」

「かしこまりました……」

カラスたちを帰す方法、穏便に済めばいいなと思います。——心配ですわ。

わたくしは陛下のご命令通り、昼食の準備を進めました。わたくしは食材を切り、兵士のみなさんには網や炭などを用意してもらいます。

BBQを始めてまもなく、カラスたちが帰ってきました。

陛下はそれを空砲で退けます。

カラスたちは森へ帰っていききました。

わたくしは思わず、眩いてしまいます。

「これでは、カラスが可哀想ですわ……」

「たまにでも、確実にエサにありつける。お礼を言われたいくらいだゾー！」

「でゲスな！」

高らかに笑う陛下たち。

わたくしは、カラスたちが飛び去ったあとの空をずっと見ていました。

次の日。

人が、鳥たちに襲われるようになりました。

わたくしも何度頭をつつかれてしまい、通りがかったメタナイト卿に助けていただき

ました。

二人で廊下を走り、秘密のエレベーターに乗って地下に降ります。

メタナイト卿はいつもの地下の厨房に、わたくしを連れてきました。

「そなたは、ここで待て。すぐにソードとブレイドがランタンとアーニヤを連れてくる」

「かしこまりました。あの、村へは行かれますか？」

「ああ」

「お願いです。手が空いていれば、陛下と閣下を……」

「……探しておこう。助かるかは、二人次第だ」

「はい！ありがとうございます!!メタナイト卿、どうか気をつけて……」

「行ってくる」

立ち去る青い戦士の後ろ姿を見つめて、わたくしは無事を祈りました。

それから厨房の中に入ります。

一人で待つっていると不安でした。

だから、不安を和らげるために動こうと思ったのです。厨房の中でできること。

「軽食でも作りましょうか……」

幸いここには、食材もできた料理を持たせるためのバスケットもあります。

お願いを聞いてくださったお礼に、メタナイト卿に渡せたらいいですね。

アーニャとランタンは三十分ほどたった頃に、地下の厨房にきました。

てつきりソードナイトさんとブレイドナイトさんに連れられて来ると思ったのに、違いました。二人だけです。

「二人とも、無事でよかったです。でも、二人だけなのですか？」

「私たち城の中にいて、鳥には襲われていないのよ」

「ブレイドさんたちには、地下の入口までは送っていただいたんです。地下に入ってしまえば、あとは大丈夫ですから」

「ソードたちに、私たちはいいから行ってきてって言ったのよ。事件解決には、きっとあの人たちの力が必要だわ」

その言葉にわたくしは強く頷きました。

「ところで、リーノは何をしているの？」

「カッツを揚げていますわ」

「なぜ、今なのですか？」

「カッツサンドや玉子サンドを作って、三戦士たちに渡そうと思ひまして」

「それはいい考えだわ」

「手伝います」

「お願いしますわ」

わたくしたちはサンドイツチを作ります。

自分たちの分も合わせて作ったため、サンドイツチにしてはたくさん量ができました。

まずは三戦士の分を取り分けようと、地下の厨房にあったバスケットに入れていきます。

そこにソードナイトさんとブレイドナイトさんがやって来ました。

アーニャとランタンは喜んで、駆け寄ります。

「ブレイドさん、無事で良かったです」

「ソードもよ！お疲れ様！」

二人の戦士は劳いの言葉を受けつつ、大したことはしていないと言います。

「我々は卿に言われて……」

「カラスの巣から魔獣になるアンプルを回収してきただけだ」

「それでも、相手の本拠地に行ってきた訳でしょ？」

「大きな怪我もなく、良かったです」

わたくしはおずおずと声をかけます。

「あの、メタナイト卿は……？」

「卿はワドルドゥ隊長のところに」

「陛下とエスカルゴン殿を回収するため、呼びに行かれました」

「そうですか……無事ならいいのです」

わたくしたちメイド三人は、ほっとしました。

……サンドイツチをじっと見つめる目がありました。

二人の戦士です。

「なあ……」

「あのサンドイツチは、すべて食べてもいいのか……？」

「え？」

「食べたいですか？」

コクンと、頷かれる姿が愛らしくて。

わたくしたちは思わず、笑顔になりました。

閣下

今日は、昼にサザエのつぼ焼きをご用意しました。

天気の良い日です。中庭で食事にしました。

陛下はたくさん食べてくださいました。閣下は食べたくなかったようで、手をつけられませんでした。

「閣下、代わりに何か作ってきます。何か、食べたいものはありますか？」

「んじゃ、豚汁を！」

「かしこまりました。豚汁をご用意します」

「リーノ！わしにも持つてくるゾイ」

「承知いたしました」

頭を下げます。

そして、アーニヤとランタンには残ってもらい、わたくしは厨房に向かいました。

まずは、陛下専用の食材を保存してある厨房に向かいます。いつも陛下が使っている食堂と、同じ階にある厨房ですわ。

そこで食材を確認しました。

……うん、食材は揃っていますね。早速作りましょう。

食材を食べやすい大きさに切って、手順通りに鍋に入れます。

コトコトと煮込んでいると、厨房の扉が荒々しく開けられました。

びつくりして振り返ると、アーニヤがいました。肩で息をしています。

「アーニヤ？どうしたのですか？」

「陛下が、閣下を追い回して……」

それだけ聞くと、いつものケンカのように思えました。

アーニヤはわたくしの傍に来ます。わたくしはコップに水を注ぎ、アーニヤに手渡ししました。

「いつものケンカとは、違うのですか？」

「ありがとうございます。……そうなんです。今日は、閣下の殻の中身が見たいから、という理由で追いかけてこして……その、閣下の殻を割ろうとハンマーを振り回しているのです」

「まあ・危ないですわ」

閣下の身も危ないですが、間違つてフォーム様やブン様たちに当たってしまったら、恐ろしいです。

「アーニヤ、豚汁を頼めますか？わたくしは陛下と閣下を探して、ケンカを止めてきます」

「はい。任せてください」

「ありがとうございます！では、行ってきます!!」

あとは任せて、わたくしは廊下を走り出しました。

今だけは、走ることをお許しください。

とりあえず玉座の間に向かいます。陛下は閣下の殻を割ることに失敗したら、ナイトメア社を頼ると思うのです。

玉座の間に突撃します。

叫び声が聞こえました。

「うげー!!!」

「閣下!」

「ワハハ！敵に隙を見せる方が悪いゾイ！」

ちょうど陛下のハンマーが、背中側から閣下の殻をドーンと打ったところでした。

閣下の殻には、見事にヒビが入っていました。

「大丈夫ですか!?!」

「おお！ヒビが入ったゾー！」

「ええ!?どこ?!どこでゲスか!!」

慌てる閣下は元気そうです。

わたくしはちよつとだけ、安心して言いました。

「背中です。……閣下から見えませぬね」

「どどどどしたら……、ふ、フーム!!」

「閣下、お待ちください!!」

ものすごいスピードで、フーム様がいるだろう大臣一家の部屋へ向かわれました。わたくしは陛下を置いて、閣下を追いかけました。

大臣一家の部屋に到着します。

フーム様にもどうにもできない、ということ。

ヤバイ先生を頼って、村へおりました。

ヤバイ先生は、閣下の殻を診て仰いました。

「見事にヒビが入つとる。これからもっと割れるじやろう」

「オー！ノー!!!」

「閣下、おいたわしや……」

「医院はてんやわんやの大騒ぎです。……いえ、騒いでいるのはわたくしと閣下だけなのですが。」

診てくださったヤブイ先生と、付き添ってくださったフーム様、ブン様、カービイは落ち着いています。

「どうやって殻を直す……治す?」のか、みんな考えていると、陛下がお見舞いに来てくださいました。

閣下は全力で拒否します。扉に柵をくつつけて、陛下が入られないようにしました。

陛下はハンマーで扉を壊そうとします。

わたくしは怒りました。

「陛下! 閣下は嫌がっています。すぐにお止めください! あと、ヤブイ先生が困るので、扉は壊さないでください!」

「嫌ゾイ!!」

「もう、陛下! いけません!」

「わしはどうしても、エスカルゴンの殻の中身が知りたいゾイ!」

閣下が叫ばれます。

「もう! そんなの誰も興味ないでゲスよ! ねえ!!」

う……そう言われると……。

「実は、ちよつと興味あります」

「同じく」

「そうね。どうなっているのか知りたいわ」

「軟体動物は気持ち悪いが、興味はある」

「ほよー」

「ああゝゝ!!!誰も信じらんねえ!!!」

「で、ですが!興味があることと、殻の中身を暴くことはイコールではありませんわ。わたくしはそのようなことはいたしません!陛下も、お止めください!」

「わしの知的好奇心は誰にも止められんゾー!デハハハハ!!」

扉はとうとう壊されました。

再び診察室で、陛下と閣下の追いかっこが始まります。ドタバタと大騒ぎです。

——二人とも、氷漬けにしてしまえば、ケンカもしませんよね?

そんな危うい考えが頭をよぎったそのとき、ハンマーが再び殻に当たりました。

殻が、ゆっくり割れて、左右に開かれようとして——カービィが背中に乗っかりました。

「ほよつー」

「カービィ!そのまま!」

フォーム様は叫びます。

カービィのおかげで、殻の中身は守られました。

「デハハハ！殻は割れた！中を見せるゾイ！お前とわしの仲ゾイ！」

「嫌ー!!!」

「カービィ、ジャンプして！」

「ぼよいー！」

わたくしは閣下の殻を凍らせました。

氷漬けになった殻は、見るからに重そうです。しかし、誰かが支えていなくても、左右に落ちることはありません。

閣下は気に入られたようでした。

「おー！これはいいでガスな！でも冷たいでガス……」

「そうですね……。この気温ではすぐに溶けます。すぐに、代わりとなる殻を見つけたか、殻を直さない……」

「あく……リーノ！余計なことをするでないゾイ！」

「すみません。ですが、今日のわたくしは閣下の味方ですわ」

そこに、フォーム様がありました。

「とにかく、デデデ！エスカルゴンの殻を弁償しなさい！」

「べん、しよー？」

「被害のお返しをすることよ！」

「お返し？デハハハ！そらなら任せろゾイ！！」

そう言つて、陛下は車に乗つて帰城されました。

まるで嵐のようでしたわ……。

「わたくしたちも一度、戻りましょうか」

「フーム、ブン、カービィ。殻の代わりになるものを探してくるでゲス」

「なんで俺たちが！」

「みなさま、ご協力お願いします。お礼はケーキですわ」

「やる！」

「ぼよ！！」

「イロー、ハニー、ホツへも呼んであげてください。みんなで食べましょうね」

「うん！楽しみだなあ」

「もう、ブンつたら。単純なんだから」

「姉ちゃんも楽しみだろ？」

「それは、まあね……」

わたくしはその言葉を聞いて、ニコリと笑いました。

楽しみにしていただけて、嬉しいです。

閣下の着替え……殻替え？は、大臣一家の部屋ですることになりました。

リビングの一角をカーテンで仕切ります。円柱のように仕切られたカーテンの中には、閣下の身長より少し高い姿鏡が用意されていました。

「さあ、閣下。中にお入りください」

「うむ。あゝ寒かった……」

「すみません……」

「いいでゲスよ。リーノのおかげで、村からここまで殻のことを気にしないですんだでゲス。ありがとうでゲスよ」

「いえ、大したことはしておりませんわ」

ニコツと笑います。

実際、疲れは感じておりません。

自分でも、氷の制御がかなり上手くなったと思っっています。それでも、訓練は続けます。す。

——続けた方が良く、そう思うから頑張りますわ。

やがて、閣下の殻の代わりとなるものが、部屋に持ち込まれました。

フォーム様が壺。ブン様が業務用の大きな鍋。イロー、ハニー、ホツヘが羊の毛。……カービイがまだですね。

「カービイがまだだけど、始めましょう。さあ、みんな！鍵をかけて、カーテンを閉めて、誰も入られないようにして！」

フォーム様の言葉に、みんなが動き出します。

部屋の中はイロー、ハニー、ホツヘが担当して鍵をかけます。カーテンも閉めました。大臣夫婦は閣下の周りにいて、フォーム様とブン様が廊下に誰もいないことを確認します。

フォーム様とブン様が部屋の中に戻ってきました。

みんなの動きを眺めていたメーム様が仰いました。

「こんなストーリーカーみたいなこと、陛下はなさるかしら？」

フォーム様は断言します。

「するわ。知りたいことは、どこまででも追いかけるタイプなもの」

「……今だけは、陛下の思い通りにいかないことを願いますわ」

閣下の殻替えが始まります。

閣下がカーテンの中に入ってすぐのことです。中でガシヤンガシヤン、と何度もタラ

イを打つ音が聞こえてきました。

慌てたフォーム様とブン様が、カーテンを開けてしまいます。

——わたくしは素早く目をおおいました。

「見ちゃいやん!!!」

「あつー……ごめんなさい……」

カーテンはすぐに閉じられたようです。

興味はありましたけれど、見なくてすんだことにホッとしましたわ。

カーテンの中では閣下が「これじゃない！こつちでもない！」と大騒ぎです。

「……今つて、どんな感じなのかしら」

「ナメクジみたいなものじゃないかな」

大臣夫婦の会話に、思わず言葉がこぼれます。

「それでは、なんだか強くなさそうで、心もとないですわ……」

「たしかに！弱そう！」

「ブン！ごめんね、リーノ」

「わたくしは気にしておりませんわ」

「私は気にするでゲス!!!」

そうして、満を持してカービイが部屋に入ってきました。

カービイは、大きな空の巻貝を背負っています。閣下の背中にちょうど良さそうですね。

「おおー！いい感じでゲスな！さあ、こっちに持つてくるでゲスよ」

「かしこまりました。カービイ、お願いします」

「ほうよー！」

大きな巻貝はカーテンの中へ入れられました。

二分後、大きな巻貝を背負った閣下が、カーテンの中から出てきました。

拍手がおこります。

「よかった！やつと見つかった！」

「素敵ですわ！閣下」

「ぼよよーい！」

「にへへ。それでゲスか？アハーン？」

閣下は上機嫌です。

無事に代わりの殻が見つかって、本当に良かったですわ。

「ありがとうでゲス。それじゃ、殻は直しておくでゲスよ」

「え？」

「閣下？」

「よろしく〜」

そうやって閣下は、部屋を優雅に出ていきました。

そ、そんな……。

「すみません。閣下が……」

「あなたが謝ることじゃないわ……」

「そうそう……」

みんなの声には疲労感がありました。

ですが、もうひと仕事ありますわ。閣下の元の殻を直さないといけません。

わたくしは、まだ氷漬けにされている殻に向かいます。それをパーム様に止められま
した。

「ところでなんだが……リーノはパズルは得意だったかな？」

「得意では……ありませんね……」

パーム様は優しく微笑まれました。

「リーノはケーキを頼むよ。こちらは我々に任せてくれ」

「そういたしますわ」

わたくしは得意なことを頑張りましょう。

厨房でケーキを作ります。

今日作るのは二段のホールケーキです。苺に生クリームでシンプルに作りつつ、砂糖菓子で華やかに飾ります。

途中、玉座の間の方で大きな音が聞こえてきました。

「魔獣でしょうか……?」

頭の中をよぎるのは、大切な人たちの安否です。

わたくしは、ホールケーキが食べられないように、メモを書き残します。そして厨房を出ました。

そろりそろり。

音は、わたくしが移動している間に止まりました。

玉座の間に到着すると、そこには陛下とフォーム様、ブン様にカービイがいました。

戦闘をしたのでしょうか。あちこちが崩れ、場所によつては柱がバラバラになっています。

「まあ！みな様、ご無事ですか?」

「リーノ！私たちは大丈夫よ」

「大変だったんだぜ？」

「何があったのでしようか？」

詳しく聞いてみました。

どうやら閣下が、魔獣になってしまったようです。

震え上がるほど、恐ろしい出来事がおきたみたいですね。その場にいらなくて、よかったですと思いました。

そして、カービーが正気に戻してくれたらしいです。

わたくしはカービーに心からお礼を言いました。

「ありがとう。カービー！あなたのおかげですわ！」

「ぼよよい！」

「ところで、閣下はどこに……？」

「ホーリーナイトメディア社が用意した殻が壊れたとたんに、どつかへ行っちゃったよ」
「そうでしたか……」

このときは、わたくしは閣下を酷く心配しました。

ですが閣下の元の殻が直る頃には、閣下は大臣一家の部屋に戻って来られました。

そして無事に直った元の殻を着て、また優雅に大臣一家の部屋を出ていかれたのでした。

残されたわたくしと大臣一家、子供たちにカービイは、一緒にホールケーキを食べました。

ひと仕事を終えたあとのケーキは、たいへんおいしかったです！

フームたん

昼食の後。

玉座の間に向かわれた陛下と閣下のために、お茶を準備してカートに乗せます。

茶菓子はアーニヤとランタンが用意しました。今日のお菓子はフルーツ飴ですわ。

……昨日の夜、急に食べたくなかったので作らせていただきました。

苺、みかん、ぶどうを飴にして、見目が良くないものはメイドたちが頂戴しました。

おいしかったですわ！

厨房からカートを押して、玉座の間に到着します。

部屋の中からは音が聞こえました。

わたくしはこっそり中を覗きました。

陛下と閣下は、部屋の奥にいらつしやいます。その手前側、部屋の中央に男性が三人
いました。

体格の良い方、高身長の方、丸いメガネが特徴的な方。プブリレッジでは見たことが

ない方々ですわ。

音の正体は星のデデデでした。

なぜ、あのアニメを見せているのでしょうか。

とにかく。相手はカスタマーサービスではなく、多分一般の方なのですから。

おもてなしが必要ですわ。

幸い、カートに乗せたカップは五人分あります。アーニヤ、ランタンとお客様の情報を共有して、玉座の間に入ります。

「陛下、閣下。入ります」

「おおー来たか」

「待つてたでゲスよ〜」

疲労感かじむ声を聞いて、わたくしは不思議に思いました。

一体何があつたのでしょうか、と。

お客様からの視線をビシバシ感じますが、平常心を保ちます。

部屋の中央、お客様とすれ違う時、わたくしはニコリと笑って横を通り過ぎました。

陛下のすぐ傍で立ち止まります。

アーニヤとランタンも止まりました。

「お茶をお持ちしました。何にいたしましたでしょうか？」

「今日はコーヒーにする。ミルクと砂糖をたっぷり入れるゾイ」

「私は紅茶を……。あつちの三人にも何か出してやるでゲスよ」

「かしこまりました。お客様にもお出しします」

陛下と閣下にも、それぞれ飲み物を出します。

次はお客様の方へ向かいました。

「初めまして、リーノと申します。後ろにいるのはアーニヤと、ランタンです。——飲み物をご用意します。コーヒー、紅茶、オレンジジュース。どれがよろしいでしょうか？」

三人の男性は輪を作り、ひそひそと話し始めます。

そして、こちらを向きました。

「あの、オレンジジュースを……」

「ぼくも」

「くだちやい」

「かしこまりました。オレンジジュースを三つですね。少々お待ちください」

わたくしはカートへ向かいました。

……背中に視線がビシバシと感じます。メイドが珍しいのでしょうか？

飲み物を飲んだあと、三人組の男性は玉座の間を出て行かれました。

何かの取材に向かったようですね。

「何を取材しに行ったのでしょうか？」

「わからんゾイ……」

「とにかく、こっちは待つしかないでゲスよ。あく疲れた」

「もぐもぐ……フルーツ飴は、苺にかぎるゾイ！デハハハハ!!」

「陛下！私にもおくれでゲスよ！」

フルーツ飴に夢中な陛下と閣下の視界から外れた場所で、アーニヤとランタンにこっ

そり言います。

「——メタナイト卿に報告してきます。ここを頼めますか？」

「はい、大丈夫ですよ。何かあれば……」

「私たちのどちらかが、報せに行くわ」

「お願いします」

わたくしは、そろりそろりと玉座の間から出ていきました。

メタナイト卿は、ご自身の部屋にいらっしやいました。

最近会える回数が多くて、嬉しいですね。

部屋の中で、先ほど玉座の間でおこった詳細を報告します。

「——というわけでした、今、城には男性三人組が招かれていますわ」

「ふむ。その者たちは、どのような人物に見えた？」

「……荒事が得意そうには見えませんでした。むしろ事務仕事などが得意に見えましたね。一般の方だと思います」

「そなたも、荒事は得意ではないだろう。だが、当別な力がある」

「——そうですね。人は見かけによらないもの。気を引き締めますわ」

「そうしてくれ。——数日は、常にこの部屋に誰かがいるよう、気をつけておく」

「はい。報告は毎日いたしますね」

「頼んだ」

わたくしは言うか迷いましたが、伝えることにしました。

「……少しだけでも、お話できて嬉しいですわ」

「——すまない」

「いえ、誰も悪くありません。心は、いつも寄り添っています」

「私もだ。そなたと共にある」

わたくしたちは、それぞれ懐から揃いの懐中時計を取り出しました。

いつも一緒に。

そのことが、たいへん嬉しくて、笑顔になりました。

次の日。

「フーム様がストーカー被害を受けている……ですか？」

「そうらしいわ」

「今、村中の噂よ」

昼ごろ、村から帰ってきたアーニヤとランタンに教えてもらいました。

わたくしは考えます。

村の人たちが、尊敬するフーム様に対して、突然こんなアプローチをするとは考えにくいです。

怪しいのは、最近村に来た三人組の男性でした。

ストーカー行為は取材だと、思うのです。

「——理由は何であれ、フーム様のご迷惑になっておることは事実。帰ったらやめていただくよう、お話ししましょう」

「犯人、わかったんですか？」

「おそらく、昨日から城に泊まっていらつしやる三人組のお客様です」

「リーノ、話すときは一人じゃダメよ。私たちも同席するからね」

「穏便に、お話するつもりですよ……？」

二人は「念には念を」と言いました。

わたくしは、それもそうだと、頷きました。

三人組の男性は、昼過ぎに帰城されました。

城の廊下を歩く三人組を、見つけます。

まずは話を聞こうと思っていましたのに、彼らのケガを見て気持ちが悪くなりました。

それは一緒にいたアーニヤとランタンも同じでしょう。

「まあ、どうされたのですか？」

「取材をしたら……」

「こうなっただけで」

「……取材時間を、考えて行いましたか？」

みなさん静かになりました。

ランタンとアーニヤが言います。

「考えて」

「いなかっただんですね」

わたくしと、アーニヤにランタンも、ため息を吐きました。
眉をキリリと上げます。

「みな様にお話したいことが……」

「見つけたでゲスよ!!!」

閣下と、陛下もご一緒です。

ワドルドゥ隊長と兵士のみなさんを引き連れていきます。

「取材は終わったでゲスか!」

「僕ら的には」

「オツケーかなって」

「ならばすぐに始めるゾイ!!」

「地下牢へ強制労働でゲス!!!」

三人は兵士に捕まり、引つ張られて行きました。

「陛下、何事でしょうか?」

「ヤツらにアニメを描かせる! リーノたちは、アイツらのご飯の用意をせい!」

「か、かしこまりました」

陛下たちはそれだけ仰ると、再びどこかへ走っていかれました。わたくしたちは驚いて、すぐには動けませんでした。

「……陛下が、連れて行っちゃいましたわ」

「話を聞くとこも、怒ることもできないわね」

「とにかく、掃除を済ませたら夕食にとりかかりますか?」

「そうしましょうか」

なんとも納得ができない結末です。

ところで、陛下はアニメと仰いましたか?

「次のアニメってたしか……」

「リーノ?」

「あ、いえ!なんでもありません」

今は掃除に集中しましょう。

地下牢で働くお客様には、朝昼夕と夜食を運ぶことになりました。

夜食は深夜に運ばれるので、ワドルデイたちの担当です。体に良いものを食べている

と良いですね……。

それは、朝に気づきました。

お客様がケガをしていたのです。——まるで、ムチで打たれたようなケガでした。そしてムチを持っていたのは、ワドルドウ隊長でした。

わたくしは、イヤな予感がしました。

心を奮い立たせて、ワドルドウ隊長に言います。

「ワドルドウ隊長……もしかして、そのムチで……」

「打った。陛下のご命令だ」

「それでも！ やつていい訳ではありませんわ」

「……逆らうならば、出ていってもらう」

「……」

わたくしが考える前に、お客様が間に挟まります。

「ちよ、ちよい待ち！」

「メイドさんは心の癒しだし！」

「来てくれないとやる気なくなるし！」

「むう……」

今度はワドルドゥ隊長が考える番でした。

話を聞いていたアーニヤが言います。

「あの……ご飯を食べている間と、ケガの治療をしている間は、少し休憩をしませんか？」

描き続けて腱鞘炎になったら、大変ですし」

「たしかに。その方が効率が落ちるわ」

「……一理、あるか。しかし、あと六日でアニメを完成させなければならない」

「できそうですか？」

お客様のうち、丸メガネをかけた男性が頷きます。

「なんとか」

「凄いですわ」

心から賞賛を贈ると、彼は照れたように頬をかきます。

他の二人はそれを見て「我こそは！」と、手を挙げます。

「じ、自分は背景が得意で……！」

「自分は色をぬれるっす！」

「みなさん、得意なことがあるのですね。素晴らしいですわ」

ニコニコと笑ってそういうと、三人組もニコニコと笑顔になりました。

それから五日間。

三回の食事の間だけ、ほんの少しお話しました。

地下牢は肌寒いので、食事はなるべく温かいものを用意します。お客様は必ず完食してくれるので、わたくしはその度に嬉しく思うのです。

五日目。

食事が終わり、作業に戻られるお客様の姿を見届けてから、地下牢を出ます。

そのとき、陛下と閣下に会いました。

どうやら、アニメの進捗を確認しに来たようですわ。

陛下と閣下が、アニメを作っている机から紙を取ります。

「見せるでゲス！」

「ああ！勝手に見ないで！」

「……こ、これは！フォームでゲス！」

「星のデデデじゃないゾイ！これじゃ明日の放送に間に合わないゾイ！」

そう仰ると紙を放り投げ、お二人ともどこかへ走っていきました。

わたくしは紙を拾い上げて、お客様にお返しします。

「災難でしたわね」

「いつも、あんな感じっすか？」

「はい……パワフルですわ」

こんな事件があつたりしつつ。

翌日の早朝には、アニメが完成しました。

巻かれたフィルムを持って、スタジオの方へみなさんが移動します。

わたくしは、その後ろ姿を見つめながら親友二人に言います。

「……アーニヤとランタンも行きませんか？」

「ちよつと気になります」

「まあ、あんなに頑張っていたんだし。見届けましょうか」

「はい！」

わたくしたちも、スタジオに向かいました。

スタジオに飛び込みます。

あと数秒でアニメが始まるところでした！

「楽しみです……！」

——飛び込んできたのは、セクシーなフーム様でした。

わたくしも、アーニヤも、ランタンも。

口をポカんと開けて、アニメに釘付けになります。

お互いに何も言えませんでした。

フォーム様は、その、たいへん怒られて。

お客様たちをハンマーで追いかけて回してましたわ。

アニメはずっとフォーム様をうつしてました。

ですが、最後だけ。わたくしたちが描かれていました。

キラキラのぱっちりとしたアニメらしい瞳。

しかし、誇張はしていない体つき。

アニメの中の私たちは言いました。

頑張ってくださいね。

体につけてよね。

それでは、また。次回もお楽しみに。

いつも、食事のあとに交わした言葉です。

フォーム様はさらにヒートアップしました。

「アンタたち！私だけじゃなくて、リーノたちまでもく!!!」

「フォーム様、お止めください」

「リーノ、でも！」

フーム様からそつと、ハンマーを預かります。

「勝手に録音されたことは、良いことではありません。ですが、アニメに出演できたことは、嬉しいです」

「そうね。星のデデデのときは、出番がなかったから」

「今、凄く嬉しいです」

わたくしたちは、お客様たちの方に向き直りました。

「わたくしたちを」

「アニメに出させてくれて」

「ありがとうございます！」

お客様たちはめちやくちや照れていました。

バイクレース

それは夜でした。

蛭を見に行くという大臣一家を見送って。

自室でのんびりと読書を楽しんでいた時間でした。

コンコン。

「私だ。リーノ、いるか？」

「すぐに開けますわ！」

メタナイト卿が、久しぶりに尋ねて来てくれました。

まずは、部屋に招き入れます。

「どうしたのですか？用事は？今日はお休みなのでしょうか？」

嬉しさと興奮するわたくしをなだめつつ、メタナイト卿は答えてくださいます。

「そうだ。今日の夜から、明日の昼まで休みにした。ソードもブレイドも、それぞれランタンとアーニャに会いに行っている」

「二人も会えているのですね。良かった」

親友たちも、恋人たちに会えていることが嬉しいです。

メタナイト卿の手が頬に触れます。わたくしは手を重ねました。

「……今、とても幸せですわ」

「それは、良かった」

仮面がずらされます。

口元が見えたので、わたくしは目を閉じました。

メタナイト卿がお風呂に入っている間に、部屋中のカーテンを閉めておきます。わくわくする気持ちですが、期待が高まります。

彼がお風呂から出たら、二人でベッドに潜り込んで、抱きしめ合います。

このまま寝落ちしてしまいそうなほど、幸せで温かくなつて、それから……。

バイク音が聞こえてきました。

「なんですの……」

「廊下から聞こえてくるな」

思わずトゲトゲしい声色になっちゃいます。

先ほどまでの甘い空気とやらは、どこかへ行ってしまった。

メタナイト卿が、ベッドから出て支度を始められたので、そのお手伝いをします。

「すまない」

「メタナイト卿のせいではありませんわ」

「行ってくる」

そう仰って、両手を広げられたので、腕の中に飛び込みました。

「また来る」

「いつでも、お待ちしております」

ぎゅっと力を込めてから、離れます。

彼はひらりとマントをひるがえし、部屋から出ていきました。

彼が残っていた香りと冷めていく体温が、わたくしを孤独にしました。

そして、怒るのです。

「バイク、許しませんわ……」

せめて、今日でなければよかったのに！

次の日の早朝。

ワドルドゥ隊長に聞いた話では、昨日の夜から大変だったようです。

三台の暴走バイクが、城に侵入したり。

陛下も暴走行為に手を染めたり。

暴走バイクのせいで村がめちゃくちゃになったり。

わたくしとアーニャとランタンは、暴走バイクに対して、さらに怒りました。

「——凍らせて、地下牢に閉じ込めておきませんか？」

「バイクを取り上げるべきね」

「それより、村から追放しましょう。——素敵な夜を、邪魔されたくないです」

「確かに」

「そうですわね」

ワドルドゥ隊長が引いていました。

「一体何をそんなに怒っているのだ？——まさか、何かされたのか!？」

「いえ、直接的には何もされていませんわ」

「昨日の夜、城内でおこした暴走行為のせいで、ちよつとありまして」

「何があつたのだ？」

「それは秘密です。でも、私たち怒っています」

三人同時に頷きます。

いつになく、わたくしたちの心は一つでした。

打倒！暴走バイクですわ!!

それから二時間ほどたつと、陛下と閣下が起きました。

朝食のサンドイッチを食べて、また車に乗って出かけます。

そして、帰城されたときには、暴走バイクを連れていました。

名前をビートさんというらしいです。

ビートさんは、数日後に村でレースをするみたいです。ビートさんが勝った場合は、ここに永住するとか。

わたくしたちはストライキしました。

「なんでゾイ!?!」

「言うこときかないと、減給でゲスよ!!」

「そちらの方には、わたくしたちも、村人たちも迷惑しております。お世話はできません。ワドルデイを頼ってください」

「嫌ゾイ！ワドルデイの飯はマズイから食べたくないゾイ!!!」

「我慢なさってください。それでは」

わたくしたちはさきつと早足で立ち去りました。
減給なんて、どんどこいですわ！

レース当日。快晴。

貴賓席にて。わたくしたちメイドは、給仕をしていました。陛下と閣下のお世話の横で、レースを見ます。

……ガスさんが出場すると聞いていたのに、代わりに GANG さんがレースに出場しています。

陛下と閣下が悪い顔をして言いました。

「ガスは出場できない」

「よつて、ガス欠……デハハハハハ!!」

「陛下、一体何をされたのですか?」

「お前には教えてやらんゾイ!」

「ストライキのお返しでゲスよ！」

うーん。このままでと話し合いは平行線ですね。

とりあえず得た情報だけでも、メタナイト卿にお渡ししましょう……。

「すみません。ちよつとお花をつみに行つてきますわ」

「させんゾイ」

わたくしの前を兵士のみなさんが塞ぎます。

槍がぶつかり合い「ギャリン！」と耳障りな音がしました。

アーニヤとランタンが怯えます。

「きゃー！」

「リーノ、下がって」

「二人とも、落ち着いてください。——陛下、これは一体何事でしょうか？」

「いつもいつもメタナイトに会いに行きよつて！ 仕事中にイチャつくなゾイ！」

「陛下……多分違うでゲスよ……」

「なに？」

「——恋人に少し会うだけですわ。健全だと思つたのですが」

そう言うと、陛下はブンブンと頭を横に振りました。

「とにかくならんゾイ！」

「そういう訳だから、ここにいてゲスよー」

ビシツと言われては逆らえませんが。

それに、兵士のみなさんを凍らせることもできません。

わたくしたちは貴賓席に閉じ込められたのです。

わたくしはレース場を見ました。

ガスさんのことは、きつとフォーム様たちがなんとかしてくださるでしょう。

こちらは、陛下たちを見張るとしましょう。レースを妨害するようでしたら、止めないといけませんね。

そして、レースが始まります。

ビート……の、運転技術は素晴らしいものでした。

わざわざ相手を攻撃するような反則行為をしなくても、レースに勝てるでしょう。

しかし、ビートは反則行為をやめません。

まずボルンさんが、ビートのせいでクラッシュします。次いでサモさんが、レン村長もクラッシュします。

すぐにワドルドウ隊長率いる兵士たちが、クラッシュしたメンバーを助けてください

ました。

わたくしは体から力を抜きます。

ワドルデイたちに任せておけば、すぐにヤブイ先生のところまで運んでくれるでしょう。

「いいゾイ！」

「どんどんやるでゲスよ！」

「陛下、閣下……」

空気をパキリと凍らせます。

お二人は震えました。

「それやめっちゆうねん!!」

「寒いでゲスよ!!!」

「ビートへの応援、お止めください」

「断るゾイ！」

「では、首から下を凍らせて……」

「それはやりすぎでゲシヨ！」

双方が傷つかない良い案だと思ったのですが……。

レースは始まったばかり。これから何が起こるかわかりません。手足は動けた方が

いいですよ。

なので、凍らせるのは止めておきます。

やがてガングさんもビートにやられます。

バイクはクラッシュしていませんので、すぐに復帰すると思うのですが……？
わああああ!!

歓声が上がりました!

ガスさんです! ガングさんの代わりにバイクに乗っています!

わたくしたちも歓声を上げました。

「ガスさん、ファイトです!」

「ビートなんてやつつけちゃえ!!」

「村に平和を取り戻してください!」

陛下は怒りました。

「お前たちも静かにするゾイ!!!」

そんなやりとりをしている間にも、ビートは反則行為をします。

ガスさんに向かって鎖を振り下ろしました。このままでは、ボルンさんたちと同じ結末になります。

そこに一台のバイクが現れました。

初めて見るバイクです。あれは……誰かに似ているような？
誰かが言いました。

「ステツペンウルフだ！」

あの、伝説のライダーがどうしてここに？

ステツペンウルフはすぐに、ガスさんとビートに追いつきます。

そしてガスさんの腕を縛る鎖を、バイクのタイヤで引きちぎりました。

ビートは次にステツペンウルフに向かって鎖を放ちます。その鎖をステツペンウルフは握り返し、ビートに反撃しました。

ビートのバイクのタイヤは鎖と絡まります。そしてクラッシュしました。

これでガスさんの勝ちが決まりました！

わたくしたちは喜びを分かち合いました。

「これで！」

「素敵な夜が！」

「戻ってきますね！」

閣下が声を荒らげます。

「お前たち！陛下の前ではしたないでゲスよ！」

「なんゾイ？」

「いやー！その〜……あの〜……」

「ええい！とにかくく！ビート！！」

「で、出番でゲスよ！！」

陛下たちの合図で、ビートが雄叫びを上げます。

巨大な魔獣に変身しました！

「あれは……!?!」

「魔獣ウイリー、カービィを倒すゾー！」

カービィも負けていません。

クラッシュしたマシンのタイヤを吸い込みます！

ホイールカービィに変身しました。

「ぐふふー！これでもくらうゾー！」

「いけないー！」

レースを邪魔する陛下を止めようと、ランタンとアーニヤが動きます。

それを、わたくしは止めました。

「リーノ!?!」

「どうして……?..?」

「よく見てください」

レース場にまかれた油と、まきびしは、どれもホイールカービィとガスさんには当たりません。

ウイリーだけが、困っています。

「なんでゾー！」

「あちゃー」

アーニャとランタンは顔を綻ばせました。

「リーノは気づいていたのですね」

「やるじゃない」

「カービィとガスさんなら、大丈夫だと思ったんです！」

ウイリーはガツン！と壁にぶつかり、山のように大きなデデデ像の上に乗ってしまいました。

そしてホイールカービィとガスさんが同時にゴールします！

わたくしたちは身を寄せあつて、喜びを分かち合いましたわ。

ですが、それも束の間。

すぐにレース場が崩壊し始めます。わたくしは氷の階段を作り、レース場の外へみんなを誘導しました。

氷の階段は、レース場と共に砕けました。

ですが、陛下も閣下も、アーニヤとランタンも無事です。

元気に「お〜いおい!!」と泣く陛下と閣下を置いて、わたくしたちメイドは恋人たちの安否を確かめに行くのでした。

食事革命

ある日の夕方。

陛下が使われる食堂では、ジーンギスカンの用意をしておりました。

陛下は席についておられます。あとは閣下を待っただけ……どこにいらっしやるのでしようか？

「陛下！陛下！」

「なんゾイ……」

「あら、閣下」

閣下が血相を変えて、食堂に飛び込んできました。

わたくしに目もくれず、陛下の方へ飛び込みます。

「ワドルデイたちの食事がどんなものか！知っているでゲスか!？」

「わしは自分のご飯にしか興味ないゾイ……」

「やつらのご飯は精進料理と言って……ごによごによ！」

「……それでは、食事代がかかっておるのかゾイ？」

「へ？まあ、そうでゲスな」

「やつらを雇ったのは、食事代がかからんと思ったからゾイ！あとで調査せい！」

「は？わたくしがですか？」

「他に誰がおる？」

「リーノとか……」

呼ばれたので、口を開きました。

「どちらにせよ、閣下に手伝っていただくことになりますわ」

「ああ、面倒でゲスな」

「とりあえず、今はジンギスカンをどうぞ。そろそろ焼けますわ」

「待っていたゾイ！」

「楽しみでゲスな！」

閣下と陛下は温めたおしぼりで手を拭きました。

そして、肉が焼ける香りを楽しみます。

夕食のデザートもしつかり食べていただきます。

本来ならばお茶を飲んで一服するところです。しかし、閣下とわたくしは用事がある

ので、食堂を退出します。

アーニヤとランタンは、先に帰ってもらいました。

待つてもらおうと遅くなっちゃいますからね。

食事を終えているワドルドゥ隊長を訪ねて、理由を話し、ワドルデイたちの食費を調べました。

ワドルドゥ隊長の執務室にて。

書類をとじたバインダーをいくつか引つ張り出し、閣下に渡します。そして金額をメモしていただくのです。

「……まあ、こんなもんでゲシヨ。リーノ、行くでゲスよ」

「もうよろしいのですか?」

「大体わかればいいんでゲス。ワドルドゥ、片付けておくでゲスよ」

「あの、わたくしも片付けをしてから、閣下のあとを追いますね」

「ふん。まあ、いいでゲシヨ」

閣下はメモを持って、部屋から出られました。

わたくしはワドルドゥ隊長と共に、バインダーを片付けます。高い所はわたくしが、低い位置はワドルドゥ隊長にお願いました。

二人でやれば、あっという間に片付けは終わります。

ワドルドウ隊長と、お礼と就寝の挨拶を交わして、わたくしは厨房に向かいました。もう深夜です。

なにか温かい飲み物を持っていきましよう。

「なんじゃこの金額は〜?!」

玉座の間に入ると、陛下の驚いた声が響きました。

カートをカラカラと押して、陛下たちに近づきます。

「陛下、閣下。何ごとでしょうか?」

「どうしたもこうしたもないでガス! 画面見るでガスよ」

「はい」

わたくしから見て、左側のモニターに金額がうつつています。

……え? 九千万……えと?

「とりあえずホットミルクを飲みませんか?」

「現実逃避するなでガス!」

「うう、すみません。ですが、想像以上にお金がかかっているんですね」

「かくなる上は、安い弁当屋を募集するゾイ!」

「自分たちで作った方が安上がりだと思えます……。村から城までの道を畑にしちやい
ませんか？」

「景観が損なわれる！却下ゾイ!!」

「良い考えだと思っただんですがね……」

コップにホットミルクを注ぎ、ハチミツを溶かします。

それを二つ作りました。

「どうぞ。陛下」

「うむ。エスカルゴン、明日の朝一番のニュースで弁当屋を募集するゾイ！」

「どうぞ。閣下」

「こりやどうも……つて、ええー!?徹夜になっちゃうでゲスよ」

「やれい」

「とほほ……わかりましたん……。ずずつ……はあ、おいし」

「ずずつ……うんまい！」

「喜んでいただけ嬉しいですわ。閣下、残り物で良ければクッキーを差し入れますわ」

閣下はさらに喜ばれました。ニコツと笑顔になります。

「わしにはっ」

「明日のおやつは、クッキーにしますね」

陛下もニコツと笑われたのでした。

次の日。

朝一番のニュースで弁当屋を募集したところ、三組の応募がありました。

コンビニを営むタゴさん。

レストランのオーナーカワサキさん。

そして毎日の食事を担う、数名の主婦の皆さんです。

昼すぎ。

三組の応募者には、お弁当を実際に作り、持って来ていただきます。

陛下と閣下、そしてメイド代表としてわたくしが厨房に入ります。

先に厨房に来ていたタゴさん、カワサキさん、主婦の皆さんが、いつせいにわたくしたちを見ました。

陛下が咳払いをします。

「ごほん！ さっさと始めるゾイ」

「え〜では、皆さんお弁当を準備するでゲス。……リーノ」

「はい。主婦の皆さん、タゴさん、カワサキさんの順で始めましょう。では、一言ずつアピールタイム開始ですわ！」

パフパフ！

持つて来たパフパフラツパを鳴らします。

まずは栄養満点、おかずの種類も豊富な弁当が三百デデン。

「高いゾイ！」

「安くするでゲスよ！」

「へ？」

値段はどんどん下げられます。

二百デデンから、カワサキさんの天然が發揮されて五百デデンに上がり、再び下がって百九十デデン。

百五十、百、六十、五十デデン……。

「これ以上はムリだ……」

「味も栄養も見た目もガタ落ちしちゃう……」

「そうですわよね……陛下、これ以上はできませんわ」

「いかんゾイ！もつともつと下げるがよいゾイ！」

「……！汚れた油で野菜クズを揚げた弁当、十デデンね！」

「カ、カワサキさん!？」

カワサキさんの言葉に喜んだのは、陛下と閣下でした。

そしてタゴさんが、声を上げます。

「う、う……梅干しだけ弁当！九デデン！」

「六デデン！」

「五デデン！」

「もう一声!!」

「うっ……もう無理だよ……」

タゴさんが諦めた、そのとき。

「——じゃあ、おれは一デデンでいい」

みんながびっくりしました。

陛下と閣下が「決定だ！」と喜ばれます。

そこにフォーム様とブン様とカービーが登場して「待った」をかけました。

「カワサキ、一デデンでどんな料理を作るつもり？」

「サンドイッチだよ」

「バカ言え！一デデンのサンドイッチなんかあるもんか！」

「今やってみせるね！リーノ、パンとハムちようだい」

「は、はい」

食。パンと立派なハムをカワサキさんに渡します。

カワサキさんはそれらを、薄く——とんでもなく薄く切りました。

みんながまたもや、驚きました。

「向こう側が透けて見えますわ……」

「芸術的ゾイ！弁当はコックカワサキに……」

「決まりでゲスな!!」

「やったー!!」

「ちよつとお待ちください！あれではご飯になりません。お考え直しを……」

「断る！」

「さ、お前たち帰ってもいいでゲスよ」

主婦の皆さん、タゴさんは怒って厨房から出られました。フーム様たちも呆れています。

カワサキさんは正気にかえったのか、頭を悩ませていました。

わたくしも頭を悩ませました。

……とりあえず、ワドルドゥ隊長に相談しましょう。

「……本当に、薄いな」

「はい……」

夕方。

ワドルデイたちの夕食時。

カワサキさんの手によって作られた透けるサンドイッチは、今日からワドルデイたちに配られます。

あらかじめ、わたくしから話を聞いていたワドルドゥ隊長は、実物を見るまで半信半疑でした。

ワドルドゥ隊長の顔をこっそり覗きます。

困っているような、怒っているような複雑な顔でしたわ。

「陛下に抗議してくる」

「ならば、わたくしも」

「なぜ、ついてくる」

ワドルドゥ隊長の背中が「ついてくるな」そう語っているように見えました。わたくしはハッキリと申し上げました。

「家族の誰かが、家族をしいたげているのを、黙って見ているのはイヤですから」

「——そうか」

「それに、陛下を止めきれませんでした。今回の件、わたくしにも責任がございます」
ワドルドゥ隊長はわたくしの方を見ます。

「——覚悟はあるか」

わたくしは、言いました。

「——ワドルディたちに健康な食事を。陛下に考え直していただきます」

結局。ワドルドゥ隊長の忠告は、陛下に聞き入れていただけませんでした。

わたくしの話も、ダメでしたわ。

兵士たちの食堂へ帰る途中、ワドルドゥ隊長は言いました。

「明日の朝、またあの薄いサンドイッチがご飯だったら、行動をおこす」

「かしこまりました」

「……陛下を裏切れるのか？」

「わたくしは、ワドルドゥ隊長やワドルディたちのために……家族のために、家族である

「陛下と交渉するだけですわ……」

「——陛下との交渉は、私がやる。リーノはメタナイト卿を抑えてもらいたい。かの御仁には、中立でいてもらいたいのだ」

「……わかりました」

メタナイト卿は、どうされるのでしょうか。

考えてもわかりません。わたくしはみんなが戦わなくて済むように、頑張ろうと思いましたが。

そうだ！アーニヤとランタンには、事情を説明しましょう。

翌日、朝。

アーニヤとランタンは地下に隠れていただきます。

わたくしは、クツキーとコーヒーをのせたカートを押して、メタナイト卿の部屋にお邪魔しました。

メタナイト卿は快く中に入れてくださいました。部屋の中にはソードナイトさんも

ブレイドナイトさんもいます。

「それで、今日はどうしたのだ？」

メタナイト卿の優しい声心地よくて、わたくしはニコニコと笑います。

「これからワドルドゥ隊長が、ワドルデイたちを率いて革命をおこすかもしれません。なので、ここにいてください」

「は？」

「なんと……」

「——そうか。そなたは、ワドルドゥ隊長側についたのだな」

「どちらか一方に、味方している訳ではありません。陛下が考え直してくだされば、わたくしはワドルドゥ隊長を止めますわ」

「……詳しく、話してくれるか？」

わたくしはコーヒーマシを三人分いれました。

「ええ、喜んで」

ドタバタ。ドタバタ。

ワドルデイたちがあちらこちらと走る音が、離れたところで聞こえます。

そんな中でフォーム様とブン様、それにカービーが部屋の中に飛び込んできました。

「メタナイト卿、匿ってちょうだい！」

「かまわない」

フォーム様たちは、ほっと息を落ち着かせます。

それから、わたくしに気づかれました。

「リーノも無事だったのね！良かった！」

「フォーム様、ブン様、それにカービーもご無事で良かったです。……ワドルドゥ隊長に、

大臣一家は襲わないようお願いしておけばよかったですわ」

「どういうこと？」

フォーム様たちは困惑されました。

わたくしは答えます。

「こたびの革命、わたくしは知っております」

「なんですって!？」

「知ってたのか!？」

「ぼよー！」

わたくしはこれまでのことをフォーム様にお話します。

フォーム様はどんどん顔を険しくされて、とうとう怒ります。

「——全部、デデデのせいじゃない！」

「陛下が考え直してくだされば、この革命も止まりますわ」

「そんな簡単にうまくいくかな？」

ブン様の疑問はもつともです。

それでもわたくしは、これ以上の争いがおきないことを願うのでした。

そのとき！

ガンガンガン!!!

扉が酷く叩かれました。

三戦士が臨戦態勢にうつります。

「ワドルディの総攻撃だ！」

「そなたたちは逃げろ」

「ええ！」

フォーム様たちは、部屋の暖炉の中へ飛び込みます。

そこには仕掛けがあつて、下の階へ逃げられるようになっていました。

「リーノ！」

「わたくしは残ります」

驚いたメタナイト卿が、わたくしを見ました。

わたくしの目には、きつと決意が浮かんでいたでしょう。

「家族であるワドルディたちを、傷つけることはできません。ですが、メタナイト卿たちを守ることはできません」

「どうするのだ？」

「氷の壁を造りますわ」

「……わかった。そなたの合図に合わせる」

「はい」

わたくしは両足を肩幅まで広げて、リラックスします。

両手も体の横に、力を抜いて。手のひらに力を溜めます。

「——今です！」

「ソード、ブレイド！引け!!」

「はっ！」

「ふっ！」

「いっけえええ!!!!」

ソードナイトさんとブレイドナイトさんが飛び退いた瞬間、わたくしは両手に溜めた力を一気に解放しました。

——わたくしたちと、兵士たちの間にちよつとした壁を造る予定でした。

でも、現実は……。

バキバキバキイ!!!

巨大な氷の山を、築きました。

わたくしはとつてもびっくりして、思わず声を上げます。

「きゃー！」

「大丈夫か!？」

「へ、平気ですわ。ちよつと驚いてしまっただけで……」

「——なにか、体に異常はないか？」

「異常ですか?！」

体のあちこちを見て、さすつてたしかめず。

「異常はありません」

「……ペナルティなし、か」

「メタナイト卿?！」

ドン引きされている気がしますわ。

たしかに、ちよつと……すみません。かなり大きな氷の山を築きましたが、ソードナイトさんにブレイドナイトさん、加えて兵士のみなさんに危害がありませんでした。

なので、引かれる理由に心当たりがありませんわ……。どうしてでしょうか。

改めて、氷漬けになった扉の方を見ます。

ワドルデイたちは誰もいませんでした。きつと逃げたのでしょう。
わたくしはほっとします。

「兵士たちは逃げたみたいですね。戦わなくて良かったです」

「そう……」

「ですね……」

部下のお二人にも引かれている気がしました。

気づかなかったことにします。

メタナイト卿が少々疲れた調子で仰いました。

「この氷を切るのは、骨が折れそうだな」

「それならば、問題ありませんわ。また魔力を込めれば、粉々に砕けますので」

「——そうなのか？」

「はい。以前、小さな氷でやってみたところ、できましたの。ですから部屋を出るとき

は、お任せください」

「わかった。そなたに任せる。……おそらく、我々がもう襲われることはないだろうか

ら、氷を砕いてくれ」

「かしこまりました」

わたくしは氷に手をつけて、力を流します。

氷は簡単に砕けました。できるだけ、細かく砕いておきます。

拳大の氷がゴロゴロと床に転がりました。

扉はもう氷におおわれていません。

「フームたちを探す。リーノ、行けるか？」

「もちろんです！」

「では、行くぞ」

「はいー」

メタナイト卿とわたくし、ソードナイトさんとブレイドナイトさんの二手に別れて、フーム様たちを探しに行きました。

その道中で、兵士たちの食堂から良い香りがしたのです。

念のため覗きました。

たくさんのワドルデイたちが、おいしそうな精進料理を食べています。

そんな部屋の中で陛下と閣下、それにフーム様たちを見つけました。

駆け寄って話を聞くと、どうやら魔獣と一戦交えたあとのようです。

わたくしは陛下を見ました。

「みなさまがご無事で良かったです。あの、ワドルデイたちの食事の件は……?」

「もうケチらんゾイ」

「革命はこりごりでゲスよ……」

「よかったですわ!」

わたくしは心から喜びました。

だって、家族同士が仲直りしてくださったのですから。

感謝の日

よく晴れた昼間。

玉座の間にて、陛下とお話します。

「感謝の日……で、ございますか？」

「そうゾイ！わしもプレゼント欲しいゾイ！」

なんでも、村では村長感謝の日を行っていたとか。

綺麗なリボンに鮮やかな包装紙、心のこもった贈り物。

陛下はそれが欲しいと仰られます。

「……プレゼントしましょうか？わたくしで良ければ」

陛下が喜ばれるなら……そう思つての発言でした。

ですが、陛下は浮かない顔のままです。

「リーノからではなくて、他のものから贈らきたいゾイ！」

「そうですか？」

「そういうものゾイ」

そこで、部屋の扉が開きました。

閣下とワドルドゥ隊長、それにワドルデイが二人も入ってきました。

「デイヒヒ！陛下にプレゼントする奴なんていないでゲスよ」

「まあ！閣下、いじわるを仰らないでください！」

「そうゾー！」

「じゃあ、聞いてみるでゲス。おう、ワドルドゥ。陛下に贈り物をしたいでゲスか？」

「ご勘弁を……たとえ命令でも……その、できません」

ワドルドゥ隊長とワドルデイたちは、困った顔になりました。

本当に嫌そうですわ。

陛下と、ワドルドゥ隊長率いる兵士たちは、この前いざこざがあつたばかり。

仲良くはできませんね……。と、納得しました。

しかし、陛下は納得できないようです。

すごく悔しそうな顔をされるのです。

「ぐぬぬ……そういうお前も！プレゼントをもらえんゾーイ！！」

「はあ?! もらえるでゲスよ！」

「陛下！いじわるを返してはいけません！」

「うるさいゾー！ふーんだ！」

そこに、陛下と閣下の争いに終止符を打つ出来事が起こります。部屋の扉が開きました。

「閣下にプレゼントですじゃ」

「モサさん」

郵便局長のモサじいさんです。

綺麗に包装されたプレゼント箱を持っています。それを閣下に渡されました。閣下は受け取り、すぐに中を開けられます。

わたくしはモサさんにお礼を言つて、頭を下げます。

「いつも遠いのに、ありがとうございます」

「ほっほっ、ええんじやよ。その分、料金は上乘せしとるからな」

モサさんはゆるりと帰られました。

「ううう……りーノ！」

「はい。陛下」

直後、陛下からお声がかかります。

振り返ると、やっぱり悔しそうに口元をゆがませる陛下のお顔がありました。

閣下は、プレゼントの中身であるお菓子を、おいしそうに食べています。

「わしは決めたゾイ！本日よりデデデ感謝の日を始める！」

「——始める、でございますか？」

「そう！期限は永遠、毎日午後1時まで受け付けるゾー！」

「それは……プレゼントを贈るチャンスが、たくさんありますね」

「その通りゾー！わしは感謝をいつでも受け取るゾー！デハハハハ!!」

そういうわけで、陛下感謝の日が今日より始まりました。

チャンネルDDDにて、陛下感謝の日を告知。そして周知します。

加えて城を華やかに飾ります。

それだけではありません。村から城への道も、赤い絨毯で飾ります。

ワドルデイ総出で掃除が行われ、城はかつてないほどピカピカですわ。

陛下はずっと待っていらつしやいました。

ずっと、ずっと、飾られた村へ続く道を、眺めていらつしやいました。

ですが、何時間たつても誰も来てくれません。

わたくしはどうとう動き出しました。

場所は変わって大臣一家の部屋。

ダイニングに通されて、フォーム様、ブン様、カービーとお話します。

「フォーム様、知恵をお貸しください。どうか、陛下にプレゼントを……」

「まって。リーノはデデデにプレゼントしていないの？」

「はい。陛下に断られてしまって」

「なんでデデデのやつ、プレゼントを断ったんだ？」

「わかりません。おそらく、わたくし以外の人からプレゼントが欲しかったんだと思います」

「ほよ……」

わたくしの言葉を聞くと、フォーム様は指をパッチンと鳴らしました。

「それなら！カービィに任せましょう！」

夕方、カービィはプレゼントを持って、城にやって来ました。

綺麗なリボンに鮮やかな包装紙に包まれたそれは、とってもステキな贈り物です。

陛下は、カービィを玉座の間で迎えました。

たくさんのカメラと、ワドルデイたちの音楽もついてきます。それは豪華なお祝いで

した。

陛下はたいへん喜ばれています。わたくしも嬉しくなつて、なりゆきを見守りました。

陛下とカービィとプレゼントを、カメラが囲います。

陛下は優しく包装紙を開けて、中を確認しました。

——スイカです。

箱の中身はスイカでした。

陛下はスイカを持ち上げます。

「スイカゾー！ やったゾーイゾー！」

「陛下、やりましたね……半分、でゲスな？」

「なんか軽いゾー？」

持ち上げられたスイカは、半分しかありません。

よくよく確認してみると、スイカはかじられており、中身がありませんでした。

「カービィ？」

「ぼよ〜！」

わたくしがカービィを呼ぶと、カービィは口の周りをペロリとなめました。

つまり、中身を食べてしまったようです……。

わたくしと、隠れてなりゆきを見守るフーム様とブン様が「あちゃー」と頭に手を当てます。

カービィからのプレゼントは食べられたスイカでしたので、陛下はたいそう怒られました。

「カービィ！許すまじ!!」

ハンマーを振り上げる陛下を、フーム様たちが止めます。

「待つて！デェデ、カービィの気持ちだけでも受け取れない？」

「悪気はなかったんだ！」

「うるさいー！」

ハンマーはどしんと、音を立てて床に当たります。

フーム様とブン様はカービィを連れて、一目散に回避されました。

肩で息をする陛下は、カメラに向かって言い放ちます。

これから感謝の日は、憎悪の日が変わると。

今度はわたくしが止めに入りました。

「お待ちくださいー！いくらなんでも、あんまりでございます！」

「うるさいうるさい！憎悪の日は必ず決行ゾイ！エスカルゴン、明日は誰ゾイ?!」

「たしか、カワサキでゲス……」

「ならば、カワサキ憎悪の日ゾイ！愚かなる人民共、明日はいくらカワサキを憎んでもかまわんゾイ!!」

陛下は、そうカメラに向かって叫びました。

わたくしは、陛下は怒っているというよりも、悲しんでおられる気がして、とても辛いです。

翌日。早朝。

ワドルドウ隊長から、カワサキさんのレストランに憎悪の旗を立ててきた、と聞きま

した。
急いで大臣一家へ向かいます。そしてフーム様に報せました。

「デデデのやつ、本当にするなんて!」

「姉ちゃん、どうする?」

「様子を見に行きましょう。リーノ、ありがとう!」

「いいえ。わたくしは、これぐらいしかできませんから」

そういうと、大臣一家は顔を見合せました。

メーム様が言います。

「最近のあなたは、氷の制御も一段と良くなっているんですよ？もう、ただのメイドだなんて、言えないわ」

「そう、ですか？」

「ええ……。これからは、素敵なメイドさんじゃなくて、素敵でかつこいいいメイドさんね」

メーム様が優しく微笑み、パーム様が「そうだね」と仰いました。

「でも、力があると言っても、君は兵士や戦士ではないのだから、戦いの場に出てはいけないよ？」

「はい。気をつけます」

「うん。自分を大事にするように」

わたくしはメーム様とパーム様のお気持ちに応えるように、深く頭を下げました。

昼頃。アーニヤとランタンとわたくしで、玉座の間を掃除していたときです。

陛下と閣下が大笑いして帰ってきました。とても上機嫌です。

「おう、リーノ！すぐにアーニヤとランタンを連れてオヤツを作るゾー！」

「この記念すべき瞬間に、ピッタリなヤツでゲスぞ！」

勢いに押されたわたくしは、とにかく頷いてアーニヤ立ちを連れて厨房へ走りました。

「一体、何を作りましょうか？」

「パフエでいいんじゃない？」

「そうですね。フルーツがたくさんのカラフルなパフエにしませんか？」

わたくしはパアツと笑いました。

「良いですね！決まりです！」

パタパタと走る途中で、モサさんに会いました。

わたくしたちは立ち止まり、モサさんに挨拶をします。

「あら、こんにちは。モサじいさん、どうしたの？手紙かしら？」

「そうじゃ。陛下と閣下に手紙じゃ」

「まあ、一体何のお手紙でしょうか？」

「カービイが陛下のイタズラで死んだらしい。お葬式の案内状じやの」

ぐにやあと、頭の中がゆがみます。

——それからのことは、よく覚えておりません。

——次に気がついたときは、自室の天井を見ていました。どうやら、ベッドに寝かされていたみたいです。

何度か瞬きをしてから、起き上がりました。

「——起きたか」

ベッドから少し離れたソファに、メタナイト卿は座っていらつしやいました。青い戦士はソファから立ち上がり、わたくしの傍に来てくれました。

「メタナイト卿……わたくし……」

「気を失ったのだ。覚えているか？」

目を真っ直ぐ見つめられます。

わたくしは、少し考えてから言いました。

「いえ、まったく……」

「そうか」

「ただ、カービイが、その……」

「それならば、タチの悪い嘘だ」

わたくしは、パチクリと目を瞬かせます。

「——へ？」

「陛下にお灸をすえるため、フームと村人たちが考えたものらしい。……陛下とエスカルゴン殿は、すでに涙を流すほど後悔されたあとだ」

「……………よ、」

「？」

「よかった……………」

カービイが生きていてくれて、よかった。

すべて嘘でよかった。

わたくしはボロボロと涙を流しました。

「陛下と、閣下が……………取り返しのないことをしてしまったら、どうすれば良いのかと……………わたくし……………」

「——今日は休め。ランタンとアーニヤが帰ってくるまで、私がそなたの傍にいる」
そう仰って、メタナイト卿はわたくしの背中をさすってくださいました。

涙は止まらず、あふれるばかりでした。

——恐ろしいことがおきなくて、本当に良かった。

心から、そう思うのです。

ファンファン

夜。

陛下も閣下もお休みにいられているでしょう。そんな深夜のことでした。

わたくしはまだ起きていました。フーム様からお借りした本が、たいへん面白かったのです。

ベッドにもぐりこみつつ、夢中になって本を読んでいた。

ところが、遠くで大きな音がしました。

それからドスンドスンと、小さくなっていく足音も聞こえます。

「何かしら……」

わたくしは本にしおりをはさみ、閉じます。

ベッドから出て、カーデイガンをはおりました。

できるだけ音を立てずカギを回し、部屋の扉を開きます。

カチャリ。

廊下を覗き込みました。

——誰もいません。

わたくしはまた扉を閉じて、カギを回しました。
それから、ほっと息を吐き出します。

「こんなとき、メタナイト卿がいてくださったら、心強いのに……」
隣にいてくださるだけで、勇気がわいてきます。

どんな困難にも、立ち向かえる気さえするのです。
今はもう、お休みになられているかしら。

わたくしの方から………。

そこまで考えて、頭を横に振りました。

顔が熱いです。

「ね、熱だったらいけません！早く寝ましよう！」

そう自分に言い聞かせて、わたくしはあたふたと、ベッドにもぐりこみました。

次の日。

昼に近くなり、わたくしとアーニヤとランタンは厨房で昼食を作ります。

今日はハンバーガーセットです。たまにしか作らないメニューなので、種類は多く豪華です。

チーズバーガー、ポテト、ジュース、ナゲット、サラダ、デザートがついてきます。いくつか味見しましたが、おいしくできています。よかった、これなら陛下と閣下に喜んでいただけますね。

そこに、ある人がやって来ました。

ブレイドナイトさんです。

アーニヤに会いに来たのでしょうか？

「ブレイドさん」

「アーニヤ」

恋人たちは手を取り合います。

アーニヤはたいへん嬉しそうに笑い、ブレイドさんはどこか緊張感がありました。

「どうしたのですか？ 私に会いに来てくれたのですか？」

「三人を探していたんだ。——魔獣がダウンロードされた。しばらくここにいてくれ」

「魔獣ですか……」

不安そうなアーニヤの声に、ブレイドナイトさんの力強い声が発せられます。

「大丈夫だ。みんなを守るために、ご主人様もソードも動いている。魔獣が城を出るま

での辛抱だ」

「——魔獣は村に向かったのですか？」

「……順をおって説明する。先に、魔獣が村に逃げてきていたんだ。その魔獣を追って、さらに別の魔獣がダウンロードされたんだ」

「そんな……！」

わたくしたちは顔を見合せます。

お互いに心配と不安を感じているようでした。

メタナイト卿のことが、そして村も心配でした。

厨房で待っている間。

お腹が減っては動けないので、軽く昼食を食べます。

ブレイドナイトさんにもすすめました。トイレに行きたくなると困るから、と遠慮されました。

たしかにそうだと思います、わたくしたちも少量の食事にしておきました。

ブレイドナイトさんが来てから三十分後。

厨房のドアが叩かれました。そして、聞き覚えのある声が、聞こえてきます。

ソードナイトさんです。今度はランタンが笑みを見せました。

ブレイドナイトさんが扉を開き、ソードナイトさんが部屋の中に入ります。

お二人は手短かに、それでいて密やかに言葉を交わしたあと、互いに頷かれました。そしてわたくしたちに言います。

「魔獣は城を去った」

「もう大丈夫だ」

「じゃあ動いても大丈夫ね」

ランタンの言葉に、わたくしとアーニヤは頷きました。

ソードナイトさんは付け加えるように言います。

「一応、護衛は続ける」

「あら、どうしてなの？」

二人の戦士は一瞬、静かになります。

それから「念の為だ」と仰られました。

できるならば、村に行きたいと思いました。

ですが、わたくしが村に行くことによつて、ご迷惑をかけるかもしれません。

だから、大人しく城で仕事をしていました。

夕方。

空が暗がり始めた頃、城にメタナイト卿が帰られました。フーム様、ブン様、カービイも一緒です。

わたくしたち三人と二人の戦士は、橋の上で四人を迎えました。

「みなさま、おかえりなさいませ！ご無事でよかったです」

「ただいま。リーノ」

「ただいま。お腹ペコペコだよ」

「ほよい」

「ご飯でしたら、メーム様がすでに作り始めてますよ」

「もうすぐご飯なのね！」

「やったー！」

元気になった子供たちのように、わたくしはニコニコと笑います。

メタナイト卿も、ケガがなく元気なようなので、嬉しさに拍車がかかります。

「リーノ。陛下たちは村の外れで、気絶している。ワドルドゥ隊長に伝えてくれ」

「かしこまりました。陛下と閣下を回収していただけるよう、隊長に伝えます」

メタナイト卿は、その金色の瞳を輝かせて、さらに言いました。

「今すぐ、頼む」

「?かしこまりました。では、行ってきます。みなさま、ごきげんよう」

「またね。リーノ」

「またな〜」

「ぼーよ!」

わたくしは手を振って、その場から離れました。

メタナイト卿が、なぜ陛下と閣下の回収を急がせたのか不思議でした。

その答えは出ないまま、わたくしは廊下を早歩きします。

兵士たちが使う厨房に向かうと、ワドルドウ隊長を見つけます。夕ご飯の準備中でした。

陛下たちのことを話すと、ワドルドウ隊長はすぐに出発されます。

わたくしは、そのお礼に夕ご飯の準備を手伝いました。

デビル、ワーブスター

よく晴れた午後のことでした。

わたくしたちメイドは、昼から休みをいただきました。

それを知ったフォーム様とブン様に誘われて、わたくしは村へおります。途中カービイを探しました。

一緒に村へ行くためです。

野原の中、三人で「カービイ！」と声を張ります。

そして、カービイを見つけました。

わたくしは池の前でカエルと見つめ合うカービイに、声をかけます。

「カービイ、そのカエルは……？」

「ほよ？」

「ゲロ!!」

カエルはカービイに飛びかかりました。

わたくしは思わず、カエルの体を凍らせました。

ドスン！

氷の塊が地面に落ちました。

カエルは首から下が凍っています。身動きがとれず、首から上だけをブンブンと動かしていました。

「ぼよ!？」

「ごめんなさいね、カービィ。……このカエルは普通じゃありませんね」

「ゲロー！ゲロー！」

「近くにフーム様たちがおります。カービィ、呼んできてください。——わたくしはカエルを見ておきますわ」

「ぼよ!？」

カービィは野原をかけていきました。

それから、フーム様とブン様に合流します。

お二人にも、カエルのことをお話すると、怪しいという結果になりました。すぐさまメタナイト卿の部屋に行きます。

青い戦士は、部屋にいらっしやいました。

件のカエルを見せると、メタナイト卿は「デビルフロッグ！」と声を上げられます。

「なぜここに？いや、それよりも全員無事だな」

「どういうことですか？」

「デビルフロッグは相手にとりつき、操る。そして悪事を働くのだ」

「まあ！」

「じゃあ、リーノがこのカエルを凍らせてなかったら……」

「カービイは今ごろ、いたずら三昧ってことか……？」

「いたずらでは、すまされん。陛下がおこす以上の事件が、おきていたはずだ」

「恐ろしいですわ……」

わたくしと背筋が寒くなるようでした。

想像すると不安で、両手を握ります。その握る手に、メタナイト卿の手が重なりました。

「カービイもだが、そなたが無事でよかった。操られていれば、村にも被害が出ていただろう」

「わたくしが村を襲ったかもしれないのですね……」

「そうだ。……だがデビルフロッグを捕まえたことで、村は守られた。そなたのおかげだな」

「そうですね……そのように考えれば良いのですね！」

メタナイト卿は頷かれる。

村の平和を守ることができたと、村に貢献できたと考えれば、心が軽くなりました。わたくしは微笑んで、メタナイト卿に「ありがとうございます」と言いました。

デビルフロッグは、城の中庭で倒しました。

わたくしの氷を吸い込み、アイスカービイに変身してもらったのです。

そして、吹雪をデビルフロッグにおまいます。デビルフロッグはカチンコチンになった後、爆発しました。

爆発音を聞きつけて、陛下と閣下が走ってきました。

「なんの騒ぎゾイ！」

「城を壊す気でゲスか!？」

「違うよ、カービイが……」

「魔獣を倒したのよ」

ブン様とフォーム様の言葉に、陛下と閣下は不思議そうな顔を浮かべます。

「陛下、魔獣なんて……」

「ダウンロードしたかゾイ？」

「デビルフロッグという魔獣でしたわ。見た目は普通のカエルで、ゲロゲロと鳴いておりました」

「ゲロ……ゲロ……— あ！思い出したゾイ！わしの可愛いカエルちゃんに、何してくれとるゾイ！」

怒る陛下に対して、わたくしは目をつりあげて言いました。

「放置していれば、村に被害が出ていました。見過ごせませんわ！」

「うぐぐ……！」

はつきり言い返せば、陛下はたじろぎます。

今回ばかりは、村に多大な被害が出ていたかもしれないのです。譲れません。

わたくしが譲らないとわかっていただけなのか、閣下は陛下をチョンとつつきました。

「陛下……今日はちよつと形勢不利かんも……」

「ぐぬぬ……覚えているがよいゾイ!!それと、今日は豪華な料理にせい！」

「和食のフルコースにいたしますわ」

「それでよいゾイ！フンだ!!」

「あ！陛下、待って〜!!」

陛下はお怒りを隠さず、ズンズンと歩いていきました。離れる陛下の背を、閣下は急いで追いかけます。

お二人の背中が見えなくなったところ、ブン様が言いました。

「……いいなあ、デデデのやつ。リーノの和食のフルコースが食べれてさ」

「まあ、たしかにそれは羨ましいかもね」

「まったくだ……」

「あれ？メタナイト卿はいつもリーノのご飯食べているんじゃないの？」

「時間が合えば、一緒に食べていますよ」

「——そうだな」

「ふーん？恋人って毎日会うわけじゃないのね」

「どちらにも、仕事がありますから……それでは、わたくしはこれで失礼しますわ」

今日は和食のフルコースに決まりました。今から食材の確認と、買い物、下準備をしなければいけません。

一人より、アーニヤとランタンがいてくれたら、助かります。

たしか城にいたはずです。探しましよう。

「ああ。リーノ、今日は助かった。ありがとう」

「お役に立って良かったです」

わたくしとメタナイト卿はしばしの間、見つめ合いました。

気づかなかったのですが、その隣でフーム様とブン様が顔を赤くし、カービィは不思議そうにしておりますわ。

それから数日後。

城も村も平穏でした。

今日の天気は晴れです。

昼からピクニックに出かけた大臣一家を見送り、わたくしたちメイドは仕事に戻ります。

本日は、一階から地下に向かって全ての部屋と廊下を掃除します。

地下牢に続く廊下を、掃除しているときでした。

廊下の奥から声が聞こえてきます。

「——やめてよー！離してっばー!!」

「……フームさま？」

その声の主はフーム様でした。

陛下と閣下が先頭を歩き、フーム様らしき人影がワドルデイたちに運ばれています。そして地下牢へ降りていきました。

わたくしの周囲がひんやりと、温度が下がります。

「すみません。わたくし、行つてきます」

「一緒に行くわ」

「でも……」

「今日は何だか様子が変です。三人で行きましょう？」

「——そうですね。アーニヤとランタンがいてくれたら、心強いです」

「じゃ、決まりね！」

わたくしたちは掃除道具を端にまとめて、地下へ突入しました。

地下牢をこつそり覗きます。

ワドルデイたちが五人ほど、見張りをしています。

牢屋の中は灯りがもれていて、なんだか甘くて良い香りがしました。

陛下と閣下の声が聞こえます。

「言えー！ワープスターをどこに隠したー！」

「言わないと……内臓脂肪ぶくぶくの刑でゲスよ！」

わたくしは胸をなで下ろしました。

どうやら酷いことはおきていないようです。

アーニヤとランタンと顔を合わせます。それから小声で話しました。

「ひとまず、安心しました……」

「それでも、捕まっていることに変わりないですよね……」

「助けに行くんでしょ？」

わたくしは頷きます。

「どうするの？」

「？凍らせちゃいます。わたくしには、それしかできませんから」

「充分すごいことだと思えます……。リーノ、一緒にいきますからね」

わたくしは驚いてアーニヤの顔をまじまじと見ました。

「危ないですよ」

「あら、そんな危険なことをするつもりですか？」

「いえ、パパツと終わらせちゃいますけれど……」

「なら、大丈夫じゃない？相手は陛下たちだし……。リーノが兵士たちを抑えている間に、私とアーニヤが……」

「おれたちも参加するよ」

わたくしたちは、飛び上がってしまふほど驚きます。

声ができる方へ振り返ると、ブン様、カービー、ロロロとラララがいました。

「どうしてこちらに？」

「ピクニック中に、デデデが姉ちゃんをさらったんだ。やるならおれたちも、参加する」

「うーん……、まあ危ないことは、すべて凍らせてしまえばいいですよね」

「そうそう。ほら、やつちやおうぜ」

「では、参ります。みな様、続いてください」

わたくしを先頭に、牢屋へ走り出します。

見張りのワドルディたちが気づきました。槍を向けてくるので、尖っている先を凍らせませす。先が重くなったため、槍を持ってなくなったワドルディは慌てます。

そんなワドルディにロロロとラララ、しかもブン様まで体当たりされて。あ、鍵をゲットされました。

「姉ちゃん！」

「ブン！」

ブン様は牢屋の鍵を開けて、中に入ります。

牢屋の中は明るいです。テーブルの上には様々なお菓子やデザートが置かれています。

す。わたくしたちは作っていませんから、ワドルデイたちに作らせたのでしよう。

ブン様はフーム様の縄をほどきました。

フーム様は解放されて、ホツと息を吐きます。

ブン様に驚き、兵士たちを無力化したわたくしたちにも驚いた陛下と閣下。

あちらにこちらと顔を向けて、怒ります。

「もう！邪魔するでないゾイ！！」

「滅給もんでゲスよ！」

「フーム様にいじわるする方が問題ですわ！大体、一体なにごとなのでしょう？」

「フームに、ワープスターの場所を聞いていたんでゲスよ」

閣下の言葉を聞いたブン様が、ごく自然に言いました。

「え？ワープスターなら、カブーの中じゃん」

「！！」

「！？」

「ブン！！」

「——あ！」

ブン様は慌てて口を塞ぎます。

ですが、もう遅いです。

陛下と閣下は顔を見合わせて笑いました。

「デーヘツヘツヘツ！」

「いいこと聞いちやったもんね！」

お二人は瞬く間に、牢屋から出ていきます。

あつという間に姿が見えなくなりました。わたくしが止める隙もありませんでしたわ。

ブン様がフォーム様に謝ります。

「姉ちゃん、ごめん」

「口が軽いのね」

「うっ……すぐに行こう！」

「大丈夫よ。カブーは、あなたよりずっと口が固いから」

「はい……」

そこにわたくしは疑問を口にしました。

「ですが、ワープスターを取られたりしませんか？うう、自分で言っていて悲しい気持ちになりますわ」

「無理しないで、リーノ。……それも大丈夫。ワープスターは私の命令に従うの。——
それを知っているのは、私だけじゃないの」

それから明かされる秘密は、初めて耳にするものでした。

ワープスターとフォームさまの繋がり。それを知るカブーとメタナイト卿。

とても、不思議な話でした。

わたくしは、その話に思いをはせるのではなく、次に行動を移しました。

「とにかく、カブーの谷へ行きませんか？ 陛下と閣下を止めないと、カブーに迷惑をかけると思いますわ」

「それもそうね……デデデたちを追いかけましょう。カービィ、オヤツは吸い込んでいわよ」

「ぼよーいー」

カービィはあつという間に、オヤツを吸い込みました。

お皿とスプーン、フォークは出してくれます。あとで、洗いましょうね……。

とにかく、カブーの谷を目指すべく地上へ上がりました。

その途中で、大臣夫婦に出会います。どうやら、さらわれたフォーム様を追って来たようです。

大臣一家が喜び合っている、そのとき。

空が暗くなりました。

「?雲が出始めたのかしら?」

「いえ、あれは……!?!」

「宇宙船!」

とんでもなく大きな円が、お城の空をおおいました。

その円は、ピカピカ光っていて、まさしく宇宙船と呼ぶのに相応しい姿をしています。宇宙船の内側に、小さな円がもう一つあります。そこがカツと光りました。

——攻撃が始まりました。

光弾が放たれ、それは曲線を描きつつカービィを狙います。

「カービィ!」

フォーム様の声もあつてか、カービィは直撃をまぬがれました。

ですが、爆発に巻き込まれ、空中に飛ばされます。

地面を転がり、慌てて立ち上がると、また光弾が降ってきました。

避けて、再び飛ばされます。

フォーム様がカービィを助けに行こうとなさるので、パーム様と一緒に止めます。

カービィは、どんだんわたくしたちから遠ざかります。パルクールでかけまわるように、城の中を移動していきます。

わたくしはフォーム様に言いました。

「遠回りしましょう！そこでカービィと落ち合うのです！」

「ええー！」

パーム様とメーム様、それからアーニヤにランタンにも反対される前に、わたくしとフーム様は走り出します。

城が攻撃されて揺れ動く中、どんなに歩きにくくても、わたくしたちは足を止めませんでした。

広い廊下の反対側から中へ入ると、奥にカービィの姿が見えました。

体中、汚れています。ケガは、見えませんでした。

カービィにかけよったフーム様は言います。

「カービィ！ここは危険よ。カブーの谷に、逃げましょう」

「ぼよ……」

そこにあの方の声が聞こえました。

「ワープスターを呼べ！」

「メタナイト卿！」

メタナイト卿が走ってきました。

決断を迫るような、そんな気配がありました。

「――敵の狙いは、ワープスターだ」

「……敵の狙いに乗れってことね」

「ときによつてはな……」

——考える間もなく、次の攻撃が始まります。

光弾で、またカービーが空中を飛びました。

たまたらず、フォーム様がワープスターを呼びます。

「来て！ワープスターー！」

カービーは中庭に逃げ出しました。

瞬く間に、ワープスターはカービーの前にその姿を見せます。

ですが、中々乗ることができません。

光弾が、絶妙なタイミングで邪魔をしてくるのです。

メタナイト卿が飛び出しました。

続いて、ソードナイトさんとブレイドナイトさんも飛び出します。

三戦士が、三つの光弾をはじいて隙を作りました。

「今よ、カービー!!」

「ほよー」

フォーム様のかけ声に、カービーはようやくワープスターに乗ります。

カービーは光弾をもともせず、ぐんぐん空へ舞い上がります！

勝利を確信した、そのときでした。

光弾がこつちに――！

「フーム様！危ない！――きやつ！！」

「きゃあああ！！」

わたくしは光弾を凍らせました。

そうしたら爆発してしまって、わたくしたちは爆風に巻き込まれました。

そして空中に飛ばされます。

わたくしは背中から壁にぶつかって、全身を強打しました。

ですが、意識はなんとか保ちました。

「リーノ！！」

「うう、フーム様は……！！」

「行くな！下がれ！」

「いやです！フーム様が！」

メタナイト卿が片腕を掴み、わたくしを行かせてくれません。

やがてはつきりしてくる視線の先で、フーム様はカービイの乗るワープスターに乗り

込みました。

二人は空を逃げ回っていました。

ですが、逃げきれなくて。

ワープスターは被弾しました。

落ちゆくワープスターと共に、フォーム様はカブーの谷の方へ飛んでいきました。

わたくしは、メタナイト卿の方へ振り向きます。

「メタナイト卿、フォーム様を頼みます」

「そなたはどうする？」

「必要なものをそろえて、カブーの谷へ行きますわ」

わたくしは、空高く居座る宇宙船をにらみつけました。

妹のように大切なフォーム様を傷つけられたのです。

絶対に負けない、そんな気持ちになりました。

アーニヤとランタンに会えば、止められてしまうでしょう。だから、わざと二人に会わないように、城の中を進みます。自室は無事でした。

写真立てが倒れています、それだけです。

大きめのリュックを取り出し、まず救急箱を入れました。それから飲み物と食料も詰め込んでいきます。

準備ができたので、部屋から出て、カブーの谷を目指しました。体がズキンズキンと痛みました。

それでも、足を動かします。

カブーの谷は森に囲まれています。

ですが道は整備されているので、月明かりさえあれば大丈夫です。すつかり夜になりました。月明かりが足元を照らしてくれます。

あの巨大な宇宙船は、カブーの谷までおえないようですね。

そのことにちよつとだけ気分を良くしながら、カブーの元へたどり着きました。少し緊張しつつ、カブーに話しかけます。

「こんばんは。カブー」

「待っていた。リーノ」

カブーは根元の火を消して言いました。

「中へ入れ」

「ありがとうございます」

わたくしはカブーの中へ足を踏み入れました。

中は空洞になっていて、入るとすぐ下へ続く階段があります。

下にはメタナイト卿、ブン様、ロロロ、ラララがいて……。

「フーム様、カービィ……」

そしてフーム様とカービィが倒れていました。

声が届いたのか、メタナイト卿がこちらを向いたので、手を振ります。

わたくしは一番下に降りました。子供たちが気づきます。

「リーノ」

「ブン様、お二人の様子は……?」

「寝てる。カブーが起こしちゃダメだって」

「そうなのですか?」

わたくしはメタナイト卿と目を合わせました。

彼は言いません。

「今は、な」

「……かしこまりました」

ならばケガの手当は、自然と目が覚めるのを待ちましょう。

見る限る、小さなケガだけのようです。フーム様には、少し我慢していただきましよ

う。

わたくしはリユックをおろして、子供たちに食料を配りました。

「ありがとう、リーノ」

「お腹減ってたんだ」

「すごく助かるわ」

三人とも喜んでくれます。

メタナイト卿にも進めますが、断られました。

「それよりも、そなたはよいのか？」

「わたくしは食欲がなくて……いえ、どこも痛くはないのですよ？」

「……わかった」

本当は全身、少し痛みます。

メタナイト卿には、それがお見通しなのでしょう。

……事件が解決したら、正直に申し上げた方がよさそうですね。

それから長い夜が始まりました。

子供たちは寝かせて、大人たちは見張りをします。途中、メタナイト卿から休むよう言われましたが、わたくしは正直に申し上げました。

「緊張して眠れないのです。……起きていてもよろしいですか？」
「ならば、仕方あるまい」

優しく、そう仰っていただけだったので、わたくしは安心して夜明けを迎えました。

先にブン様、ロロロ、ラララを起こします。

ブン様はフーム様を見て言いました。

「姉ちゃん、まだ起きてないんだ」

「——すぐに起きる」

カブーの言う通りになりました。

フーム様とカービィは目を覚ましたのです。

「フーム様！」

「姉ちゃん、よかつた！」

「ブン……ここは………？」

「カブーの中だよ」

フーム様とカービィはゆっくり起き上がります。

そしてわたくしたちの顔を見回したあと、言いました。

「敵のワープスターは？」

「敵のワープスターですか？」

「そうよ。襲ってきたでしょ……」

「いえ、敵の襲撃はありませんでした。——フーム様とカービイはずっと眠っていたんですよ」

「——じゃあ、あれはなんだったの？」

「ぼよ？」

「あれは、カブーが見せた夢だ」

カブーか言うには、どうやらナイトメア社は、星の戦士からワープスターを奪いとつたようです。

奪われたワープスターは、敵が利用してきます。カービイはそれに対する力を身につける必要がある、と。

だからカブーは、そのワープスターの情報を、夢の中でカービイに見せました。

フーム様はパチン！と、ウインクしました。

「それならカービイが、あつという間に乗りこなしたわ！」

「ぼよー！」

「やるじゃん！カービイ」

「これで、敵がワープスターに乗ってきてても、戦えますね」

場が、明るくなったそのとき——。

あの嫌な音が、また聞こえてきました。

——光弾が降ってくる音です。

カブーが攻撃されました。

パラパラと土埃が落ちてきます。地面が揺れて、まともに立てません。わたくしは倒れかけました。それをメタナイト卿が支えてくださって。

「ありがとうございます」

「いい。気にするな」

彼の優しさにふれたのに、ときめく暇もありません。

「カブー！」

「なんとかしてくれ！」

フォーム様とブン様の言葉に、カブーは言いました。

「無理だ。カービィに戦ってもらうしかない」

「でも……」

「やってもらうしかねえよ！」

「ほよい！」

ワープスターが光を放ち、浮かびました。そしてカービィの前で大きくなりました。

カービィは乗り込みます。それからフォーム様と目を合わせました。

力強く、頷きました。

「——お願い」

「ぼよー！」

そしてカブーの「ワープスター！」という声とともに、カービィは外へ飛んで行きま
した。

揺れがおさまりました。……光弾がカブーを攻撃していません。

「今なら外に出れますよね？」

「出るぞ」

「はいー！」

わたくしたちはカブーから出て、空を見上げました。

カービィはすでに宇宙船の中に入ったみたいです。姿が見えません。

——そして。

宇宙船が爆発しました。

わたくしたちはすごく驚きましたが、次にカービィの姿が見えたので、喜びました。
誰よりも、フォーム様が喜ばれました。

「カービィー！やったわー！」

カービィはゆっくり降りて来ました。

そしてワープスターは、地面にカービィをおろすと、パツと小さくなり、地面に転がりました。

「どうしたのでしょうか？」

「わからん」

メタナイト卿もわからないこと。

それがとても不安で、わたくしはワープスターをじつと見つめました。

ハルバード

今日も快晴でしたわ。

その日の夕食後。

わたくしは自室の中で、ウーンと悩んでおりました。

あちらにこちらにと、うろろう歩きます。

メタナイト卿の部屋を尋ねても良いものか。否か。

たいへん悩ましいです。

尋ねる理由は、その、メタナイト卿と恋人らしくすごすためですわ。

手を繋ぎ、キスをして、身を寄せ合う。

その先まで、できればしたいです。しかし……。

「もしもメタナイト卿がいなくて、他の方がいたら、気まずいですわ！」

頭を抱えてうなります。

そうこうしているうちに、時間ばかりがすぎていきました。夜の十時を回ったので、

わたくしはがくりと肩を落とします。

今日はやめておきましょう。

深夜におしかけては、ご迷惑になりますもの。

ベッドに入ろうとしたら、扉がノックされました。

誰でしょうか？こんな夜更けに。

「はい。どなたですか？」

「私だ。メタナイトだ」

「す、すぐに開けます！」

扉を開けました。

そして、メタナイト卿を部屋の中にまねきます。彼はするりと扉の隙間から中に入りました。それから扉を閉めます。

「メタナイト卿……」

「そなたに会いたくて来た……。同じ気持ちだったらいいが」

「同じ気持ちです！」

思わず大きな声が出てしまいました。

メタナイト卿は少し驚きつつも、両手を広げます。

わたくしは、その中に飛び込みました。

メタナイト卿の手が、背中にまわされます。

ほのかにせっけんの香りがしますわ。

「……この後予定がなければ、ここで一晩すごしたいのだが、いいだろうか」

「はい。その、一緒にいてほしいです……」

「わかった」

ぬくもりが離れました。

どうしたのだろうと思っていると、メタナイト卿は扉のカギを回しました。それに灯りも消します。

室内は薄暗くなりました。ベッド隣の丸いルームランプだけが光り、足元を照らしています。

「これでいい」

「はい」

わたくしたちは手をつなぎ、ベッドへ向かいました。

ことが終わり、部屋で眠っているときでした。

あの、光弾がふつてくる音がして。

わたくしとメタナイト卿は飛び起きました。

また、城が攻撃されています。

「着替えろ！窓の近くには行くな！」

「はい！」

寝間着の上にカーデイガンをはおり、窓から離れます。

メタナイト卿はすでに準備を終えていました。

「私は出る。敵はすぐにカービーが倒すだろう。リーノはここに……」

「いえ、大臣一家の部屋に向かいます。フーム様たちが心配なので」

「わかった。目的地は同じだ。共に行こう」

わたくしたちは揺れる城の中を、走り出します。

親友たちのことも心配でした。

会いたいと思っていた途中で、廊下に出ていたアーニヤとランタンに会います。

二人は、わたくしの部屋に向かう途中だったようです。

すれ違いにならなくてよかったです。

「一緒に大臣一家の部屋へ行きませんか？みな様の安全を確認したいですし」

「そうですね。行きましょう」

「では、先導する。行くぞ」

今度は四人で走り出します。

城の揺れは、すぐにおさまりました。

同時にわたくしたちは、大臣一家の部屋に到着します。

遠慮なく室内に入られるメタナイト卿を追いかけます。彼はベランダに向かいました。

そのベランダには、大臣一家が集まっていました。

「フーム」

「メタナイト卿！それにリーノ！」

「ランタンにアーニヤもいるじゃん！」

「こんな夜分に……」

「一体どうしたんですの？」

パーム様やメーム様の言葉に、わたくしはにこりと微笑み、手を振るだけにとどめておきます。

今はまだ、メタナイト卿のお話の途中です。

「——決戦のときは近い。その気さえあれば、反撃も可能だ。……村人を噴水まで集めてくれ」

「決戦ですって?!——すぐにみんなを呼んでくる!ブン行くわよ。カービィ、こっちにいらつしやい!」

ワープスターに乗って、カービィがおりてきます。

三人は慌ただしく、部屋を出ていきました。

メタナイト卿がわたくしに目を向けます。

「リーノ。それにランタンとアーニャ。……気をしっかり持つように」

「?かしこまりました」

「私は準備をしてくる。のちほど噴水で落ち合おう」

「はい」

メタナイト卿も出ていかれました。

わたくしたちメイドは、メタナイト卿の言葉を考えます。一体、何のことを話しておられたのか……。

「リーノ……ランタン、アーニャ」

「パーム様?どうかされたのですか?」

「いざれわかることだから、今言うよ。——今回は村にも被害が出た」

何を言われたのか、わかりませんでした。

パーム様が指さす方向へ……ペランダへ足を進ませ、村を見ました。

——赤い。

「——村が、燃えてる?」

「お父さん、お母さん、おじいちゃん!」

「アーニヤ、ランタン待つて!」

アーニヤとランタンは走り出しました。

わたくしは二人を追いかけます。

村が心配でした。けれど、今は気が動転している二人のことが心配です。

わたくしの方が足が速かったので、二人に追いつきます。

そして回りこみ、二人の前に立ちふさがりました。

「リーノどいて!」

「フーム様がみんなを連れて来ます。入れ違いになつてはいけません。城で待ちましょ

う?」

「そんな悠長なこと、言つてられません!」

「ならば、せめて救急箱を持つていきましよう。ケガ人を治療できるように、ね?」

アーニヤとランタンは頷いてくれました。

わたくしたちは、一度自室に戻ります。そこでカバンに救急箱をつめこみ、もう一度合流してから、城の橋へと向かいました。

城の橋を渡って、ほんの少したったところ。

フーム様たちと村のみんなに、出くわしました。

みんな無事です。

アーニヤとランタンは、それぞれの家族のもとへ走り出します。みなさん元気そうでした。

サトさんやハナさんも無事です。少し、泣いておられますが、生きていて良かったです。

わたくしはサトさんとハナさんに近づきました。

「サトさん、ハナさん……」

「リーノ……家が……」

「私たち、どこにも行くところがないの」

わたくしは力強く頷きました。

「大丈夫です。しばらく城に住めるよう、陛下の許可をもぎ取ってきます。その間、みなさん噴水へ。——メタナイト卿が待っていますわ」

みなさんを噴水に案内したあとは、わたくしは城内を走り回りました。

陛下と閣下は、玉座の間にいらつしやいました。なにやら、カスタマーサービスと話しています。

デリバリーシステムが作動したあとのようです。

よく聞こうと、耳をすませます。ですが、会話はすぐに終わってしまつて、何も情報を得られませんでした。

陛下と閣下が、こちらにやってきました。

わたくしは慌てて、その場から逃げ出しました。

村人たちを城に泊める件は、あとで許可を貰いましょう。

逃げ出したあとは、噴水へ向かいます。

ですが、道中でまたデスタライヤーの攻撃にあいました。

今度は四機も、プビレッジを襲います。

また村が焼かれます。

悔しくて、唇を噛み締めました。

——悲しくて、怒って、やつつけてやりたいと思いました。

とにかくメタナイト卿と合流しよう、足を動かします。

噴水までくると、今度は村人たちとすれ違いました。

彼らは噴水の中に隠れていた階段から現れ、一目散に逃げ出しています。どうやら村へ向かっているようです。

最後尾には、アーニヤとランタンがいました。

「待つてください！みんな！」

「今、村に戻っても危ないだけよ！」

「アーニヤ、ランタン！どうしたのですか？」

「メタナイト卿が村のみんなに、志願してくれって……」

「ええ!？」

その間にも、光弾の攻撃はふり続けます。

「とにかく中へ！リーノも見てください！」

アーニヤが先導し、わたくしは噴水の中に隠された階段をおりました。

階段をおり、大きなエレベーターに乗って、下へおり続けます。

深い階層へ到着しました。エレベーターを出ると、巨大な塊が目に入りました。

ぐるりと頭を動かして、やっと巨大な塊の正体がわかります。

戦艦です。初めて見ました。

「これは……これが、メタナイト卿たちの秘密ですか？」

「そうよ。私もアーニヤもびっくりしたわ」

「たった三人でこんな凄いものを造れるなんて、素晴らしいですよね」
「そうですね」

途方もない、そう思いました。

そして三戦士の中では戦争が終わっていないことを、改めて知らされたようで、胸が締めつけられます。

戦艦のエレベーターに乗り、ブリッジに上がります。

そこにはメタナイト卿をはじめ、ソードナイトさん、ブレイドナイトさん。そしてフォーム様、ブン様、カービー、ロロロ、ラララがいました。

「リーノ：ねえ、あなたも戦ってくれる？」

フォーム様の言葉を聞いて、わたくしは力強く頷きます。

それから、メタナイト卿をまっすぐ見つめました。

「——お傍に」

「……こちらへ」

メタナイト卿の近くへ寄りました。

彼は手を広げて、さらに近くへ来るよう促します。

少し恥ずかしかったですけど、わたくしは進みました。

連れて行ってくれるのか、その答えを聞くためです。

ぎゅっとハグをしてくれました。

優しく背中にも手を回されます。緊張がほぐれていくようでした。

「すまない」

聞き返すよりも前に、意識が暗転しました。

「リーノ、起きましたか？」

「……ええ」

「お水、飲める？」

「いただきます」

目を覚ますと、わたくしは自室にいました。

体をおこし、辺りを見回します。

すでに夜で、わたくしはいつの間にか自室にいて、アーニヤとランタンは傍にいてくれて。

でも、あの人はいなくて……。

わたくしはすぐく、悲しくなりました。

両手で顔をおおいます。

「……置いて、いかれたのですね」

ランタンがわたくしの隣に座り、背中をさすってくれました。

「連れて行かないでくれたのよ」

「私たちも断られたのですよ。……連れては行けないと。信じて待っていて欲しいと

……」

「私たちが安全な場所にいてくれるから、死力を尽くして戦えるって言われたわ」

「……理由は、それだけでしょうか？」

「どういうこと？」

わたくしは顔から両手を離します。

「メタナイト卿は、三戦士のみなさんは冷静に物事を考えられる方々です。負けられない戦いなのに、力のあるわたくしを連れて行かないのは、なぜでしょうか？」

村人たちは連れて行けて、わたくしにはできない理由。

「——帰ってきたら、聞き出してみせます」

祈るように、胸の前で手を組み合わせて。

無事に帰還される日を待ちました。

あなたと共に

夜までぐっすり寝ましたので、体は元気です。

わたくしは、作業をしているらしい玉座の間に急ぎました。

アーニヤとランタンは、わたくしの部屋で寝ていますわ。

……寝ずにわたくしの面倒を見つつ、恋人の安否を心配していたんですもの。疲れていて当然ですわ。

玉座の間の大きな扉を開けて、中へ入ります。

キュリオさんと、パーム様が壊れたデリバリーシステムを直していました。

お二人は、音に気がついてこちらを振り返ります。それから手を振ってくださいました。

わたくしは頭を深く下げます。

邪魔にならないよう気をつけて、デリバリーシステムに近づきました。

「こんばんは。パーム様、キュリオさん」

「こんばんは、リーノ。その……」

「こんばんは。リーノ、大丈夫かい？」

ああ、メタナイト卿がわたくしを眠らせたことを知っておられるのだと、わかりました。

わたくしはニコツと笑います。

「はい。よく寝たので、元氣満タンですわ」

「そうかい？それを聞いて安心したよ」

「私はてつきり落ち込んでいるものだと思つたが、その様子だと大丈夫じゃな」

「いいえ、キュリオさん。わたくしは落ち込んでいるし、怒っていますわ。ただ……今は感情を爆発させている場合ではありませんので、我慢していますの」

「そ、そうなのか？」

「ええ」

キュリオさんはびつくりしたようです。目を丸くされていますから。

パーム様は仰いました。

「まあ、とにかく。元氣がないよりかはいいだろう。——怒るのは、メタナイト卿が帰ってきてからでも遅くはない」

「はい。わたくしもそう思います。……ところで、なぜデリバリーシステムを直してい

るのですか?」

「念のためだよ。最終決戦に向かったのなら、ハルバードが壊れる可能性もあるだろう」
キュリオさんが頷きます。

「敵の本拠地には魔獣がたくさんいるだろうしな。帰ってくる手段は多い方がいい」

「そうですわね。そう思います。……わたくし、お二人にデリバリーシステムを直していただけないか、お願いしようと思っただけですよ」

「そうか。それでは、ちようど良かった訳だな」

三人で静かに笑い合います。

そのとき、誰かが眠そうな声を上げました。パーム様とキュリオさんを見ます。お二人は「自分ではない」と、首を振りました。

「あら……リーノも来ていたのね」

「メーム様」

デリバリーシステムの左側。柱に背中を預けて毛布を被っていたのは、メーム様でした。

近くにロロロとラララも寝ています。

わたくしは二人を起こさないよう近づき、メーム様の前で膝をおります。

「こんばんは。起こしてすみません」

「いいのよ。そろそろみんなの夜食を作らなくちゃいけないから……一緒に来てくれる？」

「ご一緒します」

「ありがとう。あなた、行ってくるわね」

「ああ。頼んだよ、お前」

メーム様とわたくしは、パーム様とキュリオさんに見送られて、玉座の間から出ました。

夜風にあたりながら、廊下を歩きます。

メーム様はだんだん目が覚めてきたようです。眠たげだった目が、すっかりとしてきました。

「私ね、メタナイト卿に感謝しているの」

唐突にメーム様が仰られました。

その横顔を見れば、メーム様の視線は遠くを見ていました。「こんなこと言ったら、あなたは怒るかもしれないけれど」と続けます。

「子供たちはメタナイト卿について行ってしまった。あなたまで、遠いところに行ってしまったらどうしようって、不安だったの。でも、あの戦士はあなたを置いていった。」

妹のように可愛いあなたまでは、取らないでくれた。だから、感謝してる」

「メーム様……」

「リーノ。あなただけでも、安全な場所にいてね」

そうして、メーム様はわたくしの片手を握られます。

「……大きく、なったわね」

慈愛に満ちたその声が、わたくしの中で大きく響きました。

わたくしがフーム様やブン様に向ける親愛のように、メーム様もわたくしに親愛を向けてくださっている。

わかっています。知っていました。けれど、改めて実感しました。

わたくしは、メーム様の手を握り返しました。

感謝と、愛おしさと、申し訳なきでいっぱいでした。

「わたくしは……メーム様やパーム様、村のみんなに育てられて大きくなりました」

「そうね。私の家に泊まりに来たことも、一緒にご飯を作って食べたことも、何回もあるわね」

「今もお世話になっています。——ありがとうございます。心から感謝しています」

「いいのよ。あなたも、私たちに力を貸してくれるでしょ。姉孝行と言えばいいのかし

ら？……してもらったわ。ありがとうね」

メーム様ののにこにここと微笑まれる表情には、混じりつけなく喜びが浮かんでいました。

「……わたくしはここに残るのではなく、メタナイト卿と共に行く道を選びました」
「そうね」

「怒りませんか？嫌になりませんか？」

「ならないわね。ああ、とうとう姉離れのときがきたんだと、そう思ったわ」

わたくしは目を大きく開けて、メーム様を見ました。

メーム様はふふつと笑います。

「リーノ。私ね、もう妹離れの準備はできているの。あなたの幸せを願ってる」

手を強く握られました。

「あなたの選んだ道だから、応援するわ。できたら、近くにおいてほしいけれど、ね」

「メーム様……」

わたくしはくしやりと顔をゆがめました。

「わたくしも、メーム様のお傍にいたいです。でも、メタナイト卿が遠くに行かれるのなら、ついていきたい」

「人を愛するって、きつとそういうことよ」

厨房に到着しました。

メーム様は、空いている片手でわたくしの頬に流れる水を拭き取ります。

「泣かないの。これから頑張つて、おいしい夜食を作るんだから」

「はい。はい」

ハンカチをとりだし、涙を拭きます。

わたくしは数度、深呼吸しました。

もう大丈夫。

厨房の扉を、開けました。

デリバリーシステムは二日目の明け方に、完成しました。

最後はキュリオさんを筆頭に、パーム様、ワドルドウ隊長、ワドルデイたちの中でも機器類の扱いが上手な人たちを集め、直しました。

デリバリーシステムは完成後、すぐに動き出します。

あつという間に、みんなが帰ってきました。

その中に、メタナイト卿の姿もあって。

喜びが胸中にあふれます。

ですが、アーニヤとランタンが、それぞれの恋人と喜びを分かち合うとき、わたくしとメタナイト卿は静かでした。

「リーノ……」

「メタナイト卿……無事に帰ってきてくださってよかった」

「ああ……すまなかつた」

「理由が、あるんですよね？」

周りのみんなが、玉座の間から出て行きます。

メタナイト卿が仰いました。

「私たちも行くこう」

「はい……」

お互いに、微妙な距離を開けつつ。

わたくしたちも朝日を見るべく、城から出ました。

城の外。

村がよく見える丘の上で。

海の向こうから朝日が顔を出します。

決戦に行ったみんなは、生きていることを実感しているようでした。

わたくしは後ろの方で、メタナイト卿と朝日を見していました。

「——そなたを置いていったのは、安全な場所にいられたからだ」

「それだけ、ですか？」

「……」

メタナイト卿は、しばし迷うように空中を見つめて、それからわたくしの方に向き直りました。

「リーノ。私が戦友を失ったことは、知っているな」

「はい。以前、お聞きしました」

ナツクルジョーのお父さんのこと、シリカのお母さんのこと。

あまり多くは話されなかつたけれど、メタナイト卿から聞かされた話。戦争での出来事を語ってくれました。

「——私は、友も、仲間も、部下たちも失った。魔獣にされて戦ったものもいる。裏切つたので、倒したものもいる。魔獣との戦いで命を失ったものもいる」

メタナイト卿は一度強く目をつぶったあと、また目を開けられました。

「リーノ。そなたは強い。自分を守り、仲間を守る力がある。だから狙われる。そし

て——魔獣にされるだろう。そうなれば……」

「私は、あなたに倒される」

村人では勝てず、ソードナイトさんとブレイドナイトさんでも勝てず。

きつと私を殺せるのは、カービイかメタナイト卿だけ。

メタナイト卿は頷かれた。

「だから、連れて行けなかった。私は恋人を、手にかけてなくなかったのだ。……一瞬の迷いが、何倍にも被害を出してしまう。私は魔獣になったそなたと、みなを命を天秤にかけるだろう。……多くの被害は、出せない」

「わかり、ます……」

わたくしは声を絞り出しました。

そこまで考えられず、ついに行こうとした自分が、嫌でした。

あまりにも、楽観的でした。

メタナイト卿たちが勝つ。それを知っていて、だからなんなのでしょうか。

「ごめんなさい」

「そなたが謝る必要は、ない」

メタナイト卿が両手を広げ、そつと、ゆっくりわたくしを包み込んでくださいました。

「リーノ、愛している。そなたが無事で、この未来を生きていてくれて、よかった」

「メタナイト卿……！わたくしも、あなたを愛しています」

ぎゅつと、離すことがないように、メタナイト卿を抱きしめました。

今は、共に未来を生きれることを、祝いましょう。

——周りで拍手がおきました。

びつくりして顔をあげます。

いつの間にか、村人たちが、大臣一家、陛下に閣下までこちらを見ていて。

わたくしたちを祝福していました。

メーベルが言いました。

「リーノ、おめでとう！」

わたくしはぎよつとしました。

「な、何がでしょう?!」

「何って……ねえ？」

メーベルは隣にいたサモさんと頷き合います。

今度はメーム様が、メタナイト卿に言いました。

「もう「まだ」なんて、言いませんね？」

「ええ」

メタナイト卿は再び、わたくしの方を向きます。

両手を繋いで、まっすぐ顔を見て。

「リーノ」

とびつきりの優しい声で呼ばれるものですから。

わたくしは顔が真っ赤になりました。

そのとき陛下が言います。

「あー!!!ちゅーはいかんゾイ!!!」

「陛下!めっ!今は言いんでゲスよ!!!」

「しませんよ?!」

わたくしが声を荒らげると、フォーム様が大声を上げました。

「デデデ、黙りなさい!せっかく良いところなんだから!」

「そうだぞ!」

「?なんのことだゾイ?」

「あちやー……この人わかってないよコリヤ」

みんなが頭を抱えました。

その中で、レン村長とハナさん、ボルンさんとサトさんの夫婦がメタナイト卿に近づいて、言いました。

「メタナイト卿。日を改めた方が良さそうですね」

「こういうのは邪魔者がいないほうがいいですからな」

「お互いにとつて一生の思い出になるもの。二人きりの日をオススメするわ！」

「リーノをよろしくね！」

メタナイト卿は力強く頷きました。

「必ず、幸せにします」

女性陣から「きやー！」と声が上がりました。

陛下は、メタナイト卿を指して言います。

「当たり前ゾー！」

「うちの子泣かせたら、許さないでゲスよ！」

「承知しています」

さっきの甘い空気はどこかに流れてしまったので、わたくしとメタナイト卿は離れま
した。

みんなの前で、ずっとハグしているのも、恥ずかしいですわ。

フーム様とブン様、カービーがこちらに来ました。

「なんだかごめんなさいね。リーノ」

「いい雰囲気だったのにな」

「ぼよぼよ……」

わたくしは笑顔で言いました。

「いいのです。それよりも、みなさんお疲れでしょう？朝食にして、それから休まれてはいかがですか？」

「そうするわ！リーノが作ったオムレツが食べたい！」

「俺も！」

「ぼーよー！」

「かしこまりました。メタナイト卿、いってきます」

「ああ。いってらっしゃい」

「ああー！リーノ！ワシの分も作るゾイ！」

「私の分も作ってくれでゲス！」

「かしこまりました。腕によりをかけますわ」

アーニヤとランタンを呼んできます。

どうせなら、兵士たちも、村人たちも、みんなが食べられるようしましょう。

パーティーの始まりですね。